始

詳註

和譯碧巖録

解題

碧巖集は又碧巖錄とも云ひ、古來宗門第一の書と稱して禪宗に於て最も珍重する所の宗典にして玄妙なる禪の奧旨は悉く此の書の中に收められ、活殺自在なる高德の言行は皆な此の中に網羅せられ、其の事の妙にして其の文の奇なる此の書に過ぎたるはなし。此の書は今を距る九百五十餘年の昔、宋の雪竇從顯禪師が歷代高僧の逸話中より禪の妙旨を現はせるもの一百則

を集めて、一々詩を以て其の行實を評して門人に示されたる「雪竇頌古」に基く、此の雪竇禪師は禪の始祖達磨大師十六代の法孫にして頗る禪機に熟し且つ文筆の才に出でて當時の儒者をして雪竇に翰林の才ありと賛せしめたるほどなれば、此の雪竇頌古は盛んに世に行はれたりしを其の後二百年を經て佛果圜悟禪師なるものあり、達磨大師二十一代の法孫にして亦禪機と文才とを兼ね、政和年間、陰無盡居士、之れを濃州夾山の靈泉院に請ず、禪師、院の一室楣間に碧巖の二大字を書せる額の下にあつて雪竇が一百則の頌古を取て毎句の初めに小序を付して之れを門人に垂示し、次ぎに一百の本則を擧げて句毎に短評を下し、之れを着語といふ、且つ總ぶるに評唱とて批評的註釋を以てし、梁の武帝、達磨に問ふの則に始り、巴陵の吹毛劍に終る、始終一體、門弟編纂して十卷とし、其の碧巖室に於て成りしを以て碧巖集といふ。蓋し此の碧巖の二字は靈泉院の開山善會禪師、僧の如何かこれ夾山の境と問ふに對して、猿子を抱て青嶂の後に歸り、鳥花を啣んで碧巖の前に

落つと云へるに由る。即ち碧巖集は垂示、本則、着語、頌、評唱の五より成り、其の中、本則と頌とは雪竇禪師の撰ぶ所によりたれど、之れに一々着語を下し且つ垂示評唱を施せるは圜悟禪師にして、此の三あつて此の書初めて雪巖頌古と異り、擧ぐる所一百の本則もと理路を超越し、常軌を以て判すべからざる古德の逸話、其の一挨一拶、禪の妙を示し、一句一言、禪の玄を究む、之れに對する雪竇の頌は殺活自在、逆順縱横、評の又評たる圜悟の着語も亦與奪自由、或は罵倒し、或は贊嘆し、兩々相待つて文華燦然、奇趣横逸、眞に宗門第一の書たるの名に恥ぢず。

圜悟禪師、諱は克勤、字は無着、彭州、崇寧縣の駱氏、儒家の子なり、幼にして穎悟、骨相亦凡ならず、一日、禪刹に遊びて佛書を見、之れを讀むこと三たび、悵然として舊物を得たるが如く、予は殆んど過去の沙門なりと、家を出でて髮を剃り、成都の名僧文照の講席に侍して晝は誦し夜は思ひて其の學に通じ、其後、深く經論を究む、偶ま病あり、死に瀕せんとす、師嘆じて曰く「朝に道を聞て夕に

死すとも可なり、諸佛涅槃の正路は句文の中にあらず吾、聲に求め色に見て死することなからんと欲せんや」と、禪を眞覺の勝公に學ぶ、勝公、臂を刺し、血を出して師に示して曰く、こはこれ曹谿の一滴なりと、師瞿然として良、久うして曰く道、固に是の如きかと、爾來風雲を犯し荊棘を踐みて諸方の智識を訪ひ、研鑽怠らず後、龍舒の演禪師に參じて人の佛法の大意を問ふを聽て大悟し、演禪師に告げていふ、今日胸中の物を去却して目前の機を喪すと、演曰く如是如是と、建炎の初、師、鎮江府の金山に住す、南宋の高宗、其の德を重んじて特に圜悟の號を賜ふ、師の一世に欽仰せられたる之れを以て知るべし。かくて師は紹興八年を以て遷化したまひしが、其の遺志たる碧巖集は大に世に行はる、師の門に大慧宗杲禪師あり、此の書大に行はれて參學の衲子これに專らにして却て不立文字敎外別傳の本旨に悖る、大慧これ師の志にあらずとして庭上に集本し薪を積んで一火に附して再覽を禁ず。これ禪の禪たる別趣にして抑も此の宗門第一の書を撰述したる圜悟禪師の婆心を

多とすべきか、之れを火中に投じたる大慧の親切を喜ぶべきか、此の書の他の書に異る歴史を有する此の點にあり。爾後二百年、僅に燼餘の稿を集めて其寫せるもののありしも叢林之れを見ること罕なりし、幸に我が日本に於ては曹洞宗の高祖道元禪師、圜悟寂後九十年の頃に入宋して偶ま道友の之れを所持するを見て書寫し歸られしありと雖も、支那に於ても此の書の世に出でたるは元の大德中に張煒明達、其の書を多方に求め終に蜀の成都の大聖慈寺の白馬院の趙大師房の眞本を得、之れを諸方の禪刹に藏する所の本と參照して刊行したる後にあり、其の序にいふ「碧巖集は宗門の標的たり、眞に霧海の南針、夜途の北斗なり」と、霧海の南針、夜途の北斗、見得て分明なるを得ば禪の眞面目も亦明かなるを得んか、本書重刊の序言に寒山の

無邊風月眼中眼　　不盡乾坤燈外燈
柳暗花明十萬戶　　被門處々右人譬

の詩を載す、一部の碧巖集、眞にこれ無邊の風月、不盡の乾坤、讀者若し門を敲かば處々に人の譬ふるあらん。禪

は親參にあり、實究にあり、諸人、眼を刮して見よ。

癸丑二月

咄堂識

凡例

一碧巖集は讀過すべきの書にあらずして考量すべきの書なり、趣味は其の文字にあつて本領は語句以外に存す。本書は垂示、本則、頌、著語等に和訓を付し、且つ難解の文字には簡單なる註釋を施して初學に便せんと企てたるものなり。評唱は特殊の手段と眼識とを以てこれらを解說せられたるものなれば、唯だ和譯を載せて漢文を省き、欄外に略註を加へたり。

一傍訓は勉めて宗門特殊の讀方に從ひたれば、普通漢文と

異るものあるは免れざる所、殊に其の音を寫すことを專らとして必ずしも假名遣ひの桎梏を蒙らず、讀者請ふ諒せよ。

一句々悉くこれ珠、字々皆な金、一句甚深く理を藏し、一字無限の趣を寓す、一讀二讀又三讀、更に師家の提唱に接せんか、向上の一路、炳として明かに、本來の面目、終に活躍するに至らむ、眼に讀まずして心に讀む、これ本書の讀法なり。

一本書の略註は主として種電鈔により、傍ら諸書を參考し

且つ大内青巒居士の講話に得る所頗る多し、此に之れを明にす。

一本書の訓讀並に註解校訂の勞は多く笛岡巖、荒井諦禪二氏の勞に頼る、刊行に際して感謝の意を表す。

癸丑三伏の日、熱時熱殺の中に

咄堂識

[illegible]

佛果圜悟禪師碧巖錄＝目次

第一卷

第二卷

第三卷

第四卷

第五卷

第六卷

第七卷

第八卷

第九卷

第十卷

＊　＊　＊　＊　＊

附錄

目次終

（無邊風月云々）此の一絶を以て一部の碧巖を讚美し頌出す。種電鈔に云、凡そ百則の公案或は現成を以て本分を示し、或は本分を以て現成を賓す、放把時に臨み、與奪機に應

標題

宗門第一書。圜悟碧巖集

無邊風月眼中眼。　不盡乾坤燈外燈。
柳暗花明十萬戶。　敲レ門處々有二人譍一。

碧巖集。標二的宗門一。眞霧海之南針。夜途之北斗也。一炬之後。善刻不レ存。今多方尋訪得二成都大聖慈寺白馬院趙大師房眞本一。與二江浙諸禪刹所レ藏本一參攷無レ譌。敬繡梓以壽二其傳一。得二於希有一發二久祕一。圜悟心法。了二然目前一。向上機關。頭頭是道。具眼幸鑑。

讀方 宗門第一の書、圜悟碧巖集。
無邊の風月眼中の眼。不盡の乾坤燈外の燈。柳暗花明十萬戶。門を敲けば處々人の譍ふるあり。

碧巖集、宗門に標的たり。眞に霧海の南針、夜途の北斗なり。一炬の後、善刻存せず。今多方に尋訪して、成都大聖慈寺白馬院の趙大師房の眞本を得たり。江浙の諸禪刹に藏する所の本と參へ攷ふるに譌無し。敬んで繡梓して以て其の傳を壽す。希有を得て久祕を發す。圜悟の心法、目前に了然たり。向上の機關、頭頭是れ道。具眼幸に鑑せよ。

ず、此の一頌を以て一部の大綱を總括し了る

〔標的〕此の書が宗門の標準的要たるを云ふ。〔一炬の後〕此の書成つて學者徒に和解を爲し言外の眞意を失ふ。大慧禪師此の弊を救はんが爲に一炬の下に之れを灼きたり。〔向上の機關云々〕向上第一義諦は淺識妄慮の能く測度する所にあらずと雖も、若し文字言句の外、直に祖師の靈機活章に參到する底の具眼者にありては、頭々物々觸處皆眞ならざる莫し。此の集の文字言句を逐條分別して以て道の端的を得たりと爲す勿れ、而も百則の閑葛藤、悉く是れ列祖の大機現前たるを了すべし。

普照序

至聖命脈。列祖大機。換骨靈方。頤神妙術。其惟雪竇禪師。具㆓超㆑宗越㆑格正眼㆒。提㆓掇正令㆒不㆑露㆓風規㆒。秉㆓烹㆑佛煅㆑祖鉗鎚㆒。頌㆓出衲僧向上巴鼻㆒。銀山鐵壁。孰敢鑽研。蚊咬㆓鐵牛㆒難㆓爲下㆑口。不㆑逢㆓大匠㆒。焉悉㆓玄微㆒。粤有㆓佛果老人㆒。住㆓碧巖㆒日。學者迷而請益。老人愍以垂㆑慈。剔㆓抉淵源㆒。剖㆓析底裡㆒。當陽直指。豈立㆓見知㆒。百則公案。從㆑頭一串穿來。一隊老漢。次第總得按過。須㆑知趙璧本無㆓瑕類㆒。相如謾誑㆓秦王㆒。至道實乎無㆑言。宗師垂㆑慈救㆑弊。儻如㆑是見方知㆓徹底老婆㆒。其或泥㆑句沈㆑言。未㆑免滅㆓佛種族㆒。普照幸親㆓師席㆒。得㆑聞㆓未聞㆒。道友集成㆓簡編㆒。鄙拙叙㆓其本末㆒。時建炎戊申暮春晦日。

參學嗣祖比丘普照謹序。

ることを、普照幸に師の席に親んで未聞を聞くことを得たり。道友集めて簡編を成す、鄙拙其の本末を敍す。時に建炎戊申暮春晦日。參學嗣祖比丘普照謹んで序す。

くの鉗鎚〕佛祖と雖も出頭を許さざる大見識を以て恰も鐵冶工の鉗鎚を以て器を磨礱する如く學人を接し開示悟入せしむること。
〔巴鼻〕猶ほ來由と云ふが如し。
〔當陽の直指〕當陽は分明の義、分明直接の指示、見知を立つるを須ひず。
〔按過〕按は驗也過は罪也百則の公案一々古人の行履を點檢するを云ふ。
〔趙璧云々〕戰國時代趙の惠文王の時、卞和の璧を得。秦の昭王聞いて十五城を以て易へんと請ふ。趙の舍人藺相如璧を持して秦に使す。秦王璧を取つて遂に城を與ふる意なし、相如乃ち欺いて曰ふ、璧に瑕あり之れを指示せむと、之れを取り柱に倚つて立ち、怒目叱咤して曰ふ、大王趙に城を與ふるの意なし、故に臣欺いて亦之れを取る云々の故事。云ふは諸人徒に言端語端に拘泥して、雪竇、圜悟の作略に誑かさるゝ勿れとの意。
〔建炎〕南宋高宗の年號、戊申は二年にして吾が崇德天皇の大治三年に當る。
〔普照〕圜悟禪師の法嗣、泗州普照祖佛心勝禪師。

讀方 至聖の命脈、列祖の大機。換骨の靈方、頤神の妙術。其れ惟れば雪竇禪師は、宗を超え格を越ゆるの正眼を具へ、正令を提撥して風規を露はさず。佛を烹り祖を爨くの鉗鎚を秉つて、衲僧向上の巴鼻を頌出す。銀山鐵壁、孰か敢て鑽研せむ。蚊、鐵牛を咬む、口を下すに難爲なり。大匠に逢はずんば、焉ぞ玄微を悉さむ、粤に佛果老人あり、碧巖に住する日、學者迷うて請益す。老人愍んで以て慈を垂れ、淵源を別抉し、底裡を部析す。當陽の直指なり、豈見知を立てむや。百則の公案、頭より一串に穿來し、一隊の老漢、次第に總べ得つて按過す。須く知るべし趙璧本瑕類無し、相如謾に秦王を誑すことを、至道實に言無し、宗師慈を垂れて弊を救ふ、儻し是くの如く見ば、方に徹底老婆なることを知らむ。其れ或は句に泥み言に沈まば、未だ免れず佛種族を滅す

〔換骨の靈方〕此の碧巖集は、凡を轉じて聖と爲すの靈妙なる方劑なり
〔頤神〕頤は養なり即ち精神を安養すること。
〔風規を露はさず〕臨機應變風度規則に拘はれざる活作略を云ふ。
〔佛を烹り祖を爨

詳註和譯 佛果圜悟禪師碧巖錄

師住澧州夾山靈泉禪院評唱
雪竇顯和尚頌古要語
加藤咄堂和譯校註

〔第一卷〕

第一則　達磨廓然

垂示曰。隔山見煙、早知是火、隔牆見角、便知是牛。擧一明三、目機銖兩、是衲僧家、尋常茶飯。至於截斷衆流、東湧西沒、逆順縱橫、與奪自在。正當恁麼時、且道、是什麼

〔目機〕目分量と云ふが如し〔茶飯〕作用と云ふに同じ、平凡なこと。〔恁麼〕此の如きと云ふ俗語。什麼如何に同じ。〔行履〕動作のこと

人行履處。看取雪竇葛藤。

讀方 垂示に曰く。山を隔てゝ煙を見て、早く是れ火なることを知り、牆を隔てゝ角を見て、便ち是れ牛なることを知る。擧一明三、目機銖兩、是れ衲僧家、尋常の茶飯なり。衆流を截斷するに至りて、東湧西沒、逆順縱橫、與奪自在なり。正當恁麼の時、且らく道へ、是れ什麼人の行履の處ぞ。雪竇の葛藤を看取せよ。

擧。梁武帝、問達磨大師、說這不唧𠺕漢。如何是聖諦第一義。是甚繫驢橛。磨曰、廓然無聖。將謂多少奇特。箭過新羅。可煞明白。帝曰、對朕者誰。滿面慚惶強惺々。果然摸索不着。磨曰不識。咄、再來不直半文錢。帝不契。可惜許。却較些子。達磨、遂渡江至魏。這野狐精。不免一場懡㦬。從西過東、從東過西。帝後擧、問志公。貧兒思舊債。傍人有眼。志公曰、陛下還識此人否。和志公趕出國始得。好與三十棒。達磨來也。帝曰、不識。却是武帝承當得達磨公案。志公曰、此是觀音大士、傳佛心印。胡亂指注。臂膊不向外曲。帝悔、遂遣使去請。果然把不住。向道不唧𠺕。志公曰、莫道陛下、發使去取。東家人死西家人助哀。也好一時趕出國。闔國人去、他亦不回。志公也好與三十棒。不知脚跟下放大光明。

〔第一義〕無上根元の道理。〔繫驢橛〕ツマラヌ

讀方 擧す。梁の武帝、達磨大師に問ふ、（這の不唧𠺕を說くの漢。）如何なるか是れ聖諦第一義。（是れ甚の繫驢橛ぞ。）磨曰く、廓然無聖。（將さに謂へり多少の奇特と。箭新羅を過ぐ。可煞だ明白。）帝曰く、朕に對する者は誰そ、（滿面の慚惶強いて惺々。果然として摸索不

着。）磨曰く、識らず。（咄。再來半文錢に直せず。）帝契はず。（可惜許、些子に較れり。）達磨、遂に江を渡りて魏に至る。（這の野狐精。一場の懡儸を免れず。西より東に過ぎ、東より西に過ぐ。）帝後ちに擧して、志公に問ふ。（貧兒、舊債を思ふ。傍人に眼有り。）志公曰く、陛下還つて此の人を識るや否や。（志公に和して、國を趕出して始めて得てん。好し三十棒を與ふるに。達磨來るや。）帝曰く、識らず。（却つて是れ武帝、達磨の公案を承當得す。）志公曰く、此れは是れ觀音大士、佛心印を傳ふ。（胡亂に指注す。臂膊、外に向つて曲らず。）帝悔いて、遂に使を遣はし、去つて請せんとす。（果然として把不住、向きに道ふ不喞𠺕と。）志公曰く、道ふこと莫れ陛下、使を發し去つて取らしめんと。（東家の人死すれば、西家の人哀しみを助く。好し一時に國を趕出するに。）闔國人去るとも、佗亦囘らず。（志公も也た好し、三十棒を與ふるに。知らず脚跟下に、大光明を放つことを。）

こと。

〔懡儸〕愧ぢのこと

〔不喞𠺕〕不伶俐、不洒脫のこと、宋時代の俗語。

〔脚跟下〕脚下のこと跟に意味なし。

【評】達磨遙かに此の土に、大乘の根器あるを觀て、遂に海に浮べて、得々として來る。心印を單傳して、迷塗を開示す。不立文字、直指人心、見性成佛、若し恁麼に見得せば、便ち自由の分あり。一切の言語に隨つて轉ぜず。脫體現成、便ち能く後頭に於て、武帝との對譚、並に二祖安心の處、自然に見得して、計較情塵なし。一刀に截斷して、洒々落々たらん、何ぞ必らずしも、更らに是を分ち、非を分ち、得を辨じ、失を辨ぜん、然も恁麼なりと雖も、能く幾人か有る。武帝嘗て袈裟を披して、自ら放光般若經を講ず、天花亂墜して、地、黃金と變ぜしことを感得す。道を辨へ佛を奉じ、天下に誥詔して、寺を起し僧を度し、教に依つて修行す、人之れを佛心天子と云ふ。達磨初めて武帝に見ゆ。帝問ふ、朕、寺を起し僧を度

〔婁約法師〕梁の惠約、姓は婁氏、字は德素、〔傅大士〕姓は傅、名は翕、善慧と號す。〔昭明太子〕高祖の長子、名は統、字は德施〔拈〕取る

す、何の功德かある。磨曰く、無功德。早く是れ惡水、驀頭に澆ぐ、若し這箇の無功德の話を透得せば、汝に許す、親しく達磨を見ることを。且らく道へ、寺を起し僧を度す、什麼としてか都て功德なきや、此の意什麼の處にか在る。帝、婁約法師傅大士昭明太子と、眞俗二諦を持論す。教中の說に據れば、眞諦は以て非有を明し、俗諦は以て非無を明す、眞俗不二、即ち是れ聖諦第一義。此れは是れ教家の、極妙窮玄の處、帝便ち此の極則の處を拈じて、達磨に問ふ、如何なるか是れ聖諦第一義と。天下の衲僧跳不出、達磨他の爲めに、一刀に截斷す。如今の人、多少か錯つて會す。却つて去つて精魂を弄し、眼睛を瞠して曰く、廓然無聖と。且喜すらくは沒交涉。五祖先師嘗て說く、只だ這の廓然無聖、若し人透得せば、歸家して穩坐せよと、一等に是れ葛藤を打す。如かず他の爲めに、漆桶を打破す

に同じ。〔五祖〕法演禪師、雲守端に嗣法す、圜悟の師なり。〔漆桶〕暗黑のこと、即ち、不了解のこと。〔古人〕永嘉眞覺大師也。〔遍逗〕慈悲の爲めに醜を忘るゝ貌。〔這裏〕此の内に同じ。〔端和尚〕

ることを、達磨中に就いて奇特なり。所以に道ふ、一句に參得して透れば、千句萬句、一時に透ると。自然に坐得斷し、把得定す。古人道く、粉骨碎身、未だ酬ゆるに足らず、一句了然として、百億を越ゆと。達磨劈頭に、他に一搜を與ふ、多少遍逗し了れり。帝、省せず、却つて人我の見を以ての故に、再び問ふ、朕に對する者は誰そと。達磨慈悲煞だしく、又向つて道ふ、識らずと。直に得たり、武帝眼目定動して、落處を知らざることを。是れ何の言說ぞ。這裏に到つて、有事無事、拈じ來るに即ち堪へず。端和尚頌有り、曰く、一箭尋常に、一鵰を落す、更らに一箭を加へて、已に相饒す、直に少室峰前に、歸つて坐す、梁主、言ふことを休めよ、更らに去つて招かんと。復た曰く、誰れか招かんと欲す、帝契はず、遂に潛かに國を出づ、這の老漢、只だ懡㦬を得て、江を渡り魏に至る。時に魏

白雲守端和尚のこと。

〔志公〕寶誌禪師、金陵の人、姓は朱氏、幼にして出家し、道林寺に在して禪定を修す。

〔揉糊〕糊塗なり、汚塗也、物のメチヤクチヤのこと。

の孝明帝位に當る、乃ち北人の種族にして、姓は拓拔氏、後來方さに中國と名く。達磨彼に至り、亦出て見えす、直に少林を過ぎて、面壁九年、二祖を接し得たり、彼方に號して、壁觀婆羅門と爲す。梁の武帝、後ちに志公に問ふ。公曰く、陛下、還つて此の人を識るや否や。帝曰く、識らず。且らく道へ、達磨の道ふ底と、是れ同か是れ別か。似たることは則ち似たり、是なることは則ち是ならず。人多くは、錯つて會して道ふ、前來の達磨は、是れ他の禪に答へ、後來の武帝は、是れ他の志公に對ふ。乃ち相識の識なりと。且得すらくは沒交涉。當時志公恁麼に問ふ、且らく道へ、作麼先か祇對せん、何ぞ一棒に打殺して、揉糊せられんことを免れざる。武帝却つて欵を供して、識らずと云ふ、志公機を見て作す、便ち曰く、此れは是れ觀音大士、佛心印を傳ふと。帝悔いて、遂に使を遣はし、去

〔天鑑普通〕梁武帝代の年號。

〔端的〕宗門の專門語、物の直當直面を直言ひ顯はす義。

つて取らしめんとす、好し不唧𠺕。當時、他の、此れは是れ觀音大士、佛心印を傳ふと道はんを俟つて、亦好し他を擯して、國を出さば、猶ほ些子に較る。人傳ふ志公は、天鑒十三年に化し去る、達磨は普通元年に方さに來る、自ら七年を隔つ、何か故に、却つて道ふや同時に相見すと、此れ必らず是れ謬つて傳へしならんと。傳の中に載する處に據らば、如今這の事を論ぜず、只だ他の大綱を知らしめんことを要す。且らく道へ、達磨も是れ觀音、志公是れ觀音阿那箇か是れ端的底の觀音既に是れ觀音什麼としてか、却つて兩箇有りや。何ぞ止だ兩箇のみならんや、群を成し隊を作す。時に後魏の光統律師、菩提流子三藏、師と論議す、師、相を斥け心を指す、而も偏局の量、自ら堪任せず、競うて害心を起し、數たび毒藥を加ふ。第六度に至りて、化緣已に畢る、傳法、人を得たり、遂に復た救は

〔妙覺〕佛果位なり

〔蹉過〕間違ひのこと。

ず、端居して逝す。熊耳山の、定林寺に葬る。後魏の宗雲、使を奉じて葱嶺に、師の雙履を携へて往くに遇ふ。武帝追憶して、自ら碑の文を撰して曰く、嗟夫、之れを見て見えず、之れに逢うて逢はず、之れに遇うて遇はず、今も古も、之れを怨み、之れを恨む。復た讃して曰く、心、有なれば曠劫に凡夫に滯り、心、無なれば、刹那に妙覺に登る。且らく道へ、達磨即今、什麼の處にか在る、蹉過も也た知らず。

頌。聖諦廓然。箭過新羅。咦。何當辨的。過也。有什麼難辨。對朕者誰。再來不直半文錢。又恁麼去也。還曰不識。三箇四箇中也。咄。因茲暗渡江。穿人鼻孔不得。却被別人穿。蒼天々々。好不大丈夫。豈免生荊棘。脚跟下已深數丈。闔國人追不再來。兩重公案。用追作麼。在什麼處。大丈夫志氣何在。千古萬古空相憶。換手搥胸。望空啓告。休相憶。道什麼。向鬼窟裏作活計。清風匝地有何極。果然。大小雪竇向草裏輥。師顧視左右曰、這裏還有祖師麼。汝待番款那。猶作這去就。自曰、有。塌薩阿勞。喚來與老僧洗脚。更與三十棒趕出也未爲分外。作這去就。猶較些子。

〔箭新羅を過ぐ〕落處の知れざること。

〔咄〕咄破なり、叱と大同小異。

讀方　聖諦廓然。（箭、新羅を過ぐ。咦。）何ぞ的を辨ずべき。（過てり。什麼の辨じ難きことか有る。）朕に對する者は誰そ。（再來半文錢に直せず。又恁麼にし去れり。）還つて曰く識らずと。（三箇四箇中れり。咄。）茲に因つて暗に江を渡る。（人の鼻孔を穿つことを得す、却つて別人に穿たる。蒼天々々。好し大丈夫ならず。）豈に荊棘を生ずることを免れんや。（脚跟下已に深きこと數丈。）闔國人追ふとも、再

〔蒼天々々〕嘆息の貌。

〔番欵〕番は讞に同じ、欵は罪人の白狀書、故に既にせし白狀をくりかへすこと。

〔榻薩阿勞〕日本の御苦勞千萬と云

び來らず。(兩重の公案。追ふことを用ひて麼とか作さん。什麼の處にか在る。大丈夫の志氣、何れにか在る。)千古萬古、空しく相憶ふ。(手を携へて胸を槌つ。空を望んで啓告す。)相憶ふことを休めよ。(什麼と道ふぞ、鬼窟裏に向つて活計を作す。)清風匝地、何の極りか有らん。(果然。大小の雪竇、草裏に向つて輥す。)師、左右を顧視して曰く、這裏還つて、祖師有りや。(汝 番 欵を待つや。猶ほ這の去就を作す。)自ら曰く、有り。(榻薩阿勞。)喚び來せ、老僧が爲に洗脚せしめん。(更らに三十棒を與へて、趕ひ出すとも、未だ分外と爲さず。這の去就を作す、猶ほ些子に較れり。)

【評】 且らく雪竇の、此の公案を頌するに據らば、一へに善く、太阿の劍を舞するに似て、相似たり。虚空中に向つて盤礴して、自然に鋒鋩を犯さず。若し是れ、這箇の手段無くんば、纔かに拈着せば、

ふ如く感謝に輕蔑を含む語

〔這箇〕此に同じ、箇は助字なり。

〔摸索不着〕痒い處へ手の屆かぬ貌

〔衲僧〕禪僧のこと

即ち鋒を傷り、手を犯すことを見ん。若し是れ、具眼の者は、看よ他の一拈一掇、一褒一貶、只だ四句を用ひて、一則の公案を楷定することを。大凡そ頌古は、只だ是れ繞路に禪を說き、拈古は、大綱欵に據て、案に結するのみ。雪竇、他に一拶を與へて、壁頭に便ち道ふ、聖諦廓然、何ぞ的を辨ずべきと。雪竇、他の初句下に於て、這の一句を着く、妨げず奇特なることを。且らく道へ、畢竟作麼生か的を辨ぜん。直饒ひ鐵眼銅睛も、也た摸索不着、這裏に到つて、情識を卜度し得てんや。所以に雲門曰く、撃石火の如く、閃電光に似たりと。這箇の些子、心機意識情想に落ちず、汝が開くを等たは、什麼を作すにか堪へん。計較生ずる時、鷂子新羅を過ぐ。雪竇道く、汝、天下の衲僧、何ぞ的を辨ずべき。朕に對する者は誰そ、箇の還つて不識と云ふを着く。此れは是れ雪竇、忒煞だ老婆、重々爲人の

〔關捩子〕肝要な處のこと、索引を見よ。

處。且らく道へ、廓然と不識と、是れ一般か兩般か。若し是れ了底の人の分上ならば、言はずして諭さん、若し是れ未了底の人ならば、決定して打して、兩橛と作さん。諸方尋常に皆道ふ、雪竇重ねて拈ずること一偏すと。殊に知らず、四句に公案を頌し盡し了つて、後ち慈悲の爲めの故に、事跡を頌出す、茲に因つて、暗に江を渡る、豈に荆棘を生ずることを免れんや。止だ當時のみに非らず、諸人即今脚跟下、已に深きこと數丈。闔國人追ふとも、再び來らず、千古萬古、空しく相憶ふ、可煞だ丈夫ならず、且らく道へ、達磨什麼の處にか在る。若し達磨を見んとせば、便ち雪竇末後の、爲人の處を見よ。雪竇、人の情見を逐はんことを恐怕す、所以に關捩子を撥轉して、自己の見解を出して曰く、相憶ふことを休めよ、清風匝地、何の極りか有らんと。既に相憶ふことを休む、儞が脚跟下の事、又作麽生。雪竇道く、即今箇の匝地の清風、天上天下、何の極まる所か有らんと。雪竇、千古萬古の事を拈じて、面前に抛向す。止だ雪竇、當時何の極まりか有らんと云ふのみに非らず、汝諸人の分上も、亦た何の極りか有らん。他又人の這裏に執在せんことを怕れ、再び方便を着けて、高聲に曰く、這裏還つて祖師有りや、自ら曰く、有り。雪竇、這裏に到つて、妨げず人の爲めに、赤心片々たることを。又自ら曰く、喚び來せ、老僧が爲めに洗脚せしめんと、太煞だ人の威光を滅ず。當時也た好し、本分の手脚を與ふるに。且らく道へ、雪竇が意、什麼の處にか在る。這裏に到つて、喚んで驢と作すが則ち是か、喚んで馬と作すが則ち是か、喚んで祖師と作すか則ち是が、如何か名邈せん。往々喚んで、雪竇祖師をして去ると作す、且喜すらくは沒交涉。且らく道へ、畢竟作麽生、只だ老胡の知を許して、

〔作麽生〕如何に同じ。

〔太煞〕甚だに同じ

〔名邈〕名を付し形を摸する

こと。
〔沒交渉〕關係のなきこと。
〔喝〕叱咤の意、言語思慮の

老胡の會を許さず。

第二則　趙州至道

垂示曰。乾坤窄、日月星辰一時黑。直饒棒如雨點、喝似雷奔、也未當得向上宗乘中事。設使三世諸物、只可自知、歷代祖師、全提不起、一大藏敎、詮注不及、明眼衲僧、自救不了。到這裏、作麼生請益。道箇佛字、拖泥帶水、道箇禪字、滿面慚惶。久參上士、不待言之、後學初機、直須究取。

讀方 垂示に曰く。乾坤窄く、日月星辰、一時に黑く。直饒、棒、雨點の如く、喝、雷奔に似たるも、也た未だ向上宗乘の事に、當り得ず。設使、三世の諸佛も、只だ自知すべし、歷代の祖師も、全提不起、一大藏敎も、詮注し及ばず、明眼の衲僧も、自救不了。這裏に到つて、作麼生か請益せん、箇の佛の字を道ふも、拖泥帶水。箇の禪の字を道ふも、滿面の慚惶。久參の上士は、之れを言ふことを待たず、後學の初機は、直に須らく究取すべし。

及ばぬ處を言に顯はすに用ゆ。
〔宗乘〕宗旨に同じ、乘は運載の義、衆生を載せて迷の此岸より悟りの彼岸に到らしむるより斯く云ふ。

擧。趙州示衆曰、這老漢作什麼。莫打這葛藤。至道無難、非難非易。唯嫌揀擇、眼前是什麼。三祖猶在。纔有語言、是揀擇、是明白、兩頭三面。少賣弄。魚行水濁、鳥飛毛落。老僧不在明白裏、賊身已露。這老漢向什麼處去。是汝還護惜也無。敗也。也有一箇半箇。時有僧問、既不在明白裏、護惜箇什麼。也好與一拶。舌拄上齶。州曰、我亦不知。拶殺這老漢。倒退三千。僧曰、和尚既不知、爲什

麼却道、不レ在二明白裏一。看。走向二什麼處一去。逐殺二上レ樹去。州曰、問事即得、禮拜了退。賴有二這一着。箇老賊。

【讀方】擧す。趙州衆に示して曰く、(這の老漢、什麼をか作す。這の葛藤を打すること莫れ。)至道無難、(難に非ず易に非ず。)唯嫌揀擇、(眼前是れ什麼ぞ。三祖猶ほ在り。)纔かに語言有れば、是れ揀擇、是れ明白、(兩頭三面。少賣弄。魚行けば水濁り、鳥飛べば毛落つ。)老僧明白裏に在らず、(賊身已に露はる。這の老漢、什麼の處にか向ひ去る。)是れ汝還て護惜すや也た無しや。(敗也。也た一箇半箇有り。)時に僧有り問ふ、既に明白裏に在らず、箇の什麼をか護惜せん。(也た好し一拶を與ふるに。舌、上の齶に拄く。)州曰く、我も亦知らず。(這の老漢を拶殺す。倒退三千。)僧曰く、和尚既に知らず、什麼としてか却て道ふ、明白裏に在らずと。(看よ。走て什麼の處に向ひ去る。逐うて樹に上て去らしむ。)州曰く、事を問ふことは即ち得たり、禮拜し了て退け。(賴に這の一着有り。這の老賊。)

【評】趙州和尚、尋常此の話頭を擧す。只だ是れ唯嫌揀擇。此れは是れ三祖の、信心銘に曰く、至道無難、唯嫌揀擇、但だ憎愛莫れば、洞然明白と、纔かに是非有れば、是れ揀擇、是れ明白、纔かに恁麼に會せば、蹉過了なり、鉸訂膠粘せば、何ぞ用ひん。州曰く、是れ揀擇、是れ明白、如今の參禪問道、揀擇の中に在らざれば、便ち明白裏に坐在す、老僧は明白裏に在らず、汝等還て護惜すや、也た無しやと。汝諸人、既に明白裏に在らず、且く道へ、趙州什麼の處にか在る、什麼としてか、却て人をして護惜せしむ。五祖先師、常に說いて道く、垂手し來て汝に似過す、汝作麼生か會すと。且く道へ、

〔葛藤〕文字言句のこと、纏綿たること葛藤の如しとの意。〔三祖〕鑑智僧璨禪師、信心銘の著者

〔一著〕一語と云ふが如し。〔趙州〕南泉に嗣法す、從諗禪師のこと、趙州觀音院に住す、故に人呼んで趙州和尚と云ふ。〔似過〕示

して與ふとの意。

〔定盤星〕斤兩の起點。

〔禪和子〕禪僧のこと。

〔分疏不下〕條理を分つことを得ず

作麼生か是れ垂手の處、鈎頭の意を識取せよ、定盤星を認むること莫れ。這の僧、出で來るも也妨げず奇特なることを。趙州の空處を捉へて便ち去て佗に拶す、既に明白裏に在らず、箇の什麼をか護惜せんと。趙州更に棒を行じ、喝を行ぜず、只だ道ふ、我も亦知らずと。若し是れ這の老漢にあらずんば、佗に拶着せられて、往々に忘前失後せん。賴に是れ這の老漢、轉身自在の處有り、所以に此の如く他に答ふ。如今の禪和子、問着すれは也た道ふ、我も亦知らず會せずと、爭何せん途を同じうして、轍を同じうせず。這の僧奇特の處有て、方さに始めて問ふことを會す。和尚既に知らずんば、什麼としてか却て道ふ、明白裏に在らずと。更に好し一拶、若し是れ別人ならば、往々分疏不下ならん。趙州は是れ作家、只だ他に向て道ふ、事を問ふことは即ち得たり、禮拜し了て退けと。這の僧舊に依て、這の老漢を奈何ともすること無し、只だ氣を飮み、聲を呑むことを得たり。此れは是れ大手の宗師、汝が與に玄を論じ、妙を論じ、機を論じ、境を論ぜず、一向本分の事を以て人を接す。所以に道ふ、相罵ることは汝に饒す觜を接せよ、相唾することは儞に饒す水を潑けと、殊に知らず、這の老漢、平生棒喝を以て人に接せず、只だ平常の言語を以てするに。只だ是れ天下の人、奈何ともせず。蓋し他の平生、許多の計較無きが爲めに、所以に橫拈倒用、逆行順行、大自在を得。如今の人、理會し得ず、只管に道ふ、趙州答話せず、人の爲めに說かずと。殊に知らず、當面に蹉過することを。

頌。至道無難、〔三重公案。滿口含レ霜。道二什麼一。〕言端語端。〔魚行水濁。七花八裂。搽胡也。〕一有多種、〔分開好。只一般。有二什麼了期一。〕二無兩般。〔何堪四五六七。打二葛藤一作二

什麼

天際日上月下。（覰面相呈。頭上漫々脚下漫々。切忌昂頭低頭。）檻前山深水寒。（一死更不再活。還覺寒毛卓竪麼。）髑髏識盡、喜何立。（棺木裏瞠眼。盧行者是佗同參。）枯木龍吟、銷未乾。（咄。枯木再生花。達磨遊東出。）難々。（邪法難扶。倒一説。這裏是什麼所在、説難説易。）揀擇明白、君自看。（瞎。將謂由別人。賴値自看。不干山僧事。）

【讀方】至道無難、（三重の公案。滿口に霜を含む。什麼と道ふぞ。）言端語端。（魚行けば水濁る。七花八裂。搽胡也。）一に多種有り、（分開せば好し。只だ一般、什麼の了期か有る。）二に兩般無し。（何ぞ堪へん、四五六七。葛藤を打して什麼と作す。）天際、日上り月落つ、（覰面に相呈す。頭上漫々、脚下漫々。切に忌む、頭を昂げ頭を低うすることを。）檻前山深く水寒し。（一死更に再活せず。還て寒毛卓竪することを覺ゆるや。）髑髏識盡きて、喜び何ぞ立せん、（棺木裏に瞠眼す。盧行者は是れ佗の同參。）枯木龍吟、銷して未だ乾かず。（咄。枯木再び花を生ず。達磨東土に遊ぶ。）難々。（邪法扶け難し。倒一説。這裏是れ什麼の所在ぞ、難と説き、易と説く。）揀擇明白、君自ら看よ。（瞎。將に謂へり、別人に由ると。賴に自ら看るに値ふ。山僧が事に干からず。）

【評】雪竇、他の落處を知る、所以に此の如く頌す。至道無難、便ち後に隨つて道ふ、言端語端、一隅を擧げて、三隅を以て反せず。雪竇道く、一に多種有り、二に兩般無しと、三隅一に反するに似たり。儞且く道へ、什麼の處か、是れ言端語端の處、什麼としてか一却て多種あり、二却て兩般なき。若し眼を具せずんば、什麼の處に

〔盧行者〕六祖大鑑慧能禪師のこと。
〔瞎〕盲目のこと。

〔分開結裏〕異説あり、分開結裏しと讀むべし、即ち分開は前の四句、結裏は結びにて下の二句なり、分開とは讀んで字の如く、結裏とは物を結び付けること。〔頭上〕最初の義。〔醍醐〕食物の精撰したるもの。

向てか模索せん。若し這の兩句を透得せば、所以に古人道く、一片に打成して、舊に依て見れば山は是れ山、水は是れ水、長は是れ長、短は是れ短、天は是れ天、地は是れ地。有時は天を喚で地と作し、有時は地を喚んで天と作す、有時は山を喚んで是れ山にあらずとし、水を喚んで是れ水にあらずとす、畢竟怎生が平穩なることを得去らん。風來れば樹動き、浪起れば船高し。春は生じ夏は長じ、秋は收め冬は藏す。一種平懷なれば、泯然として自ら盡く、則ち此の四句の頌に、頓絶し了れり。雪竇餘才有り、所以に結裏を分開し、筭し來れり。只だ是れ頭上に頭を安じて道く、至道無難、言端語端、一に多種有り、二に兩般無しと。許多の事無しと雖も、天際日上る時、月便ち下り、檻前山深き時、水便ち寒し。這裏に到て、言も也た端、語も也た端、頭々是れ道、物々全眞、豈に是れ心境俱に忘じて、打成一片の處にあらざらんや。雪竇の頭上は太孤峻生、末後は也た漏逗少なからず。若し參得透し見得徹せば、自然に醍醐上味の如く相似たり。若し是れ情解未だ忘ぜずんば、便ち見よ、七花八裂し、決定して此の如くの說話を會する能はざることを。髑髏識盡きて喜び何ぞ立せん、枯木龍吟、銷して未だ乾かずと。只だ這れ便ち是れ交加の處、這の僧恁麼に問ひ、趙州恁麼に答ふ。州曰く、至道無難、唯嫌揀擇、纔かに語言有れば、是れ揀擇、是れ明白、老僧明白裏に在らず、是れ汝還て護惜すや也た無しや。僧有り便ち問ふ、既に明白裏に在らず、又箇の什麼をか護惜せん。州曰く、我も亦知らず。僧曰く、和尚既に知らずんば、什麼としてか却て道ふ、明白裏に在らずと。州曰く、事を問ふことは即ち得たり、禮拜し了て退けと。此れは是れ古人道を問ふ底の公案、雪竇曳き來りて、一串に穿却し

（血脈）釋迦牟尼佛より的々相承の系譜を云ふ

て、用ひて至道無難、唯嫌揀擇を頌す。如今の人、古人の意を會せず、只管に言を咬み、句を嚼む、甚の了期か有らん。若し是れ通方の作者ならば、始めて能く這般の說話を辨得せん。見ずや僧香嚴に問ふ、如何なるか是れ道。嚴曰く、枯木裏の龍吟。僧曰く、如何なるか是れ道中の人。嚴曰く、髑髏裏の眼睛。僧後に石霜に問ふ、如何なるか是れ枯木裏の龍吟。霜曰く、猶ほ喜びを帶ぶること在り。如何なるか是れ髑髏裏の眼睛。霜曰く、猶ほ識を帶ぶること在り。僧又曹山に問ふ、如何なるか是れ枯木裏の龍吟。山云く、血脈不斷。如何なるか是れ髑髏裏の眼睛。山曰く、乾不盡。什麼人か聞くことを得るや。山曰く、盡大地未だ一箇も聞かざるもの有らず。僧曰く、未審し龍吟、是れ何の章句ぞ。山曰く、是れ何の章句と云ふことを知らざれども、聞く者皆喪す。復た頌有り、曰く、枯木龍吟、眞の見道、髑髏識無く、眼初めて明らかなり、喜識盡くる時、消息盡く、當人那ぞ辨ぜん濁中の淸と。雪竇謂つべし、大に手脚有りと、一時に汝が爲めに交加して頌出す。然も是の如くなりと雖も、都て兩般なし、雪竇末後に爲人の處あり、更に道ふ難々と。只だ這の難々、也た須く透過して、始めて得べし。何が故ぞ。百丈道く、一切の語言、山河大地、一々轉じて自己に歸すと。雪竇、凡そ是れ一拈一掇、末後に到て、須く自己に歸すべし。且く道へ、什麼の處か是れ雪竇爲人の處、揀擇明白、君自ら看よと。既に是れ葛藤を打して、頌し了る。何に因てか却て道ふ、君自ら看よと。好彩汝をして自ら看せしむ、且く道へ、意什麼の處にか落在する。道ふこと莫れ、諸人理會し得ずと。設使山僧這裏に到ても、也た只だ是れ理會し得ず。

第三則　馬大師不安

垂示曰。一機一境、一言一句、且圖有箇入處。好肉上剜瘡、成窠成窟。大用現前、不存軌則。且圖知有向上事。蓋天蓋地、又摸索不着。恁麼也得、不恁麼也得、太廉纖生。恁麼也不得、不恁麼也不得、太孤危生。不渉二塗、如何即是。請試擧看。

〔不恁麼〕不如是と云ふ程の意。

讀方 垂示に曰く。一機一境、一言一句、且く箇の入處あることを圖る。好肉上に瘡を剜り、窠を成し窟を成す。大用現前、軌則を存せず、且く向上の事有ることを知るを圖る。蓋天蓋地、又模索不着。恁麼も也た得たり、不恁麼も也た得たり、太廉纖生。恁麼も也た得ず、不恁麼も也た得ず、太孤危生。二塗に渉らず、如何してか即ち是ならん。請ふ試に擧す看よ。

擧。馬大師不安。這漢遍逗不少。帶累別人去也。**院主問。和尚近日、尊候如何。**四百四病、一時發。三日後不送亡僧、是好手。仁義道中。**大師曰、日面佛、月面佛。**可煞新鮮。養子之緣。

〔馬大師〕達磨大師八代の孫、江西馬祖山に在りし道一禪師のこと、臨濟大師四世の祖。

讀方 擧す。馬大師不安。(這の漢、遍逗少からず。別人を帶累し去れり。)院主問ふ、和尚近日、尊候如何。(四百四病、一時に發す。三日の後、亡僧を送らずんば是れ好手。仁義道中。)大師曰く、日面佛、月面佛。(可煞だ新鮮。養子の緣。)

【評】馬大師不安。院主問ふ、和尚近日、尊候如何。大師曰く、日面佛、月面佛。祖師若し本分の事を以て、相見せずんば、如何か此道光輝を得ん。此れ箇の公案、若し落處を知らば、便ち丹霄に獨歩

〔巴鼻〕巴は把へるなり、即ち把へ處なきを、什麼の巴鼻か有らんと云ふ。

〔三皇五帝〕禪月大師貫休

せん、若し落處を知らずんば、往々に枯木巖前に、差路し去ること有らん。若し是れ本分の人ならば、這裏に到て、須く是れ耕夫の牛を驅り、飢人の食を奪ふ底の手脚有て、方に馬大師、爲人の處を見るべし。如今多く人有て道ふ、馬大師院主を接すと。且喜すらくは沒交涉。如今衆中、多く錯會して、瞠眼して曰く、這裏に在り、左眼は是れ日面、右眼は是れ月面と。什麼の交涉か有らん、驢年にも未だ夢にだも見ず、只管に古人の事を蹉過す。只だ馬大師、此の如く道ふが如きは、意、什麼の處にか在る。有底は曰く、平胃散一盞を點じ來ると、什麼の巴鼻か有らん。這裏に到て、作麼生か平穩なることを得去らん。所以に道ふ、向上の一路、千聖不傳、學者形を勞すること、猿の影を捉ふるが如しと。只だ這の日面佛、月面佛、極めて是れ見難し。雪竇此に到て、亦是れ頌し難し、却て他の見得透するが爲めに、盡く平生の工夫を用ひて、他を指注す。諸人、雪竇を見んと要すや、下文を看取せよ。

頌。日面佛、月面佛。開口見膽。如兩面鏡相照。於中無影像。五帝三皇是何物。太高生。莫謾他好。可貴可賤。二十年來曾苦辛、自是汝落草。不干山僧事。啞子喫苦瓜。爲君幾下蒼龍窟。何消恁麼。莫錯用心好。也莫道無奇特。屈。愁殺人。愁人莫向愁人說。堪述。向阿誰說。說與愁人愁殺人。明眼衲僧、莫輕忽。更須子細。咄。倒退三千。

讀方　日面佛、月面佛。（口を開いて膽を見はす。兩面の鏡相照して、中に於て影像無きが如し。）五帝三皇、是れ何物ぞ。（太高生。他を謾ずること莫くんば好し。貴むべし、賤しむべし。）二十年來、曾て苦

が公子行の詩の一句、評唱に全句あり。

〔神宗〕宋の大宗より第六世の孫。

〔適來〕前來に同じ

辛す、(自ら是れ儞草に落つ。山僧が事に干からず。啞子苦瓜を喫す。)君が爲めに幾度か、蒼龍窟に下る。(何ぞ恁麼なることを消せん。錯て用心すること莫くんは好し。也た道ふこと莫れ、奇特無しと。)屈。(人を愁殺す。愁人に向て說くこと莫れ。)述ぶるに堪へたり。(阿誰に向てか說かん。愁人に說與すれば。人を愁殺す。)明眼の納僧、輕忽にすること莫れ。(更に子細にすべし。咄。倒退三千。)

【評】神宗在位の時、自ら此の頌國を諷すと謂へり、所以に背て藏に入らず。雪竇先づ拈じて曰く、日面佛、月面佛と、一拈し了て却て曰く、五帝三皇是れ何物ぞと。且く道へ、他の意作麼生。適來已に說き了れり、直下に他を注す。所以に道ふ、鈎を四海に垂れて、只だ獰龍を釣る、只だ此の一句已に了す。後面に、雪竇、自ら他の平生心を用ひて、參尋する所以を頌す、二十年來、曾て苦辛す、君が爲めに、幾度か蒼龍窟に下る、箇の什麼にか似たる。人の蒼龍窟裏に入つて、珠を取るに似て、相似たり。後來漆桶を打破して、將に謂へり、多少の奇特と。元來、只だ箇の五帝三皇、是れ何物ぞと云ふことを消得す。且く道へ、雪竇の語、什麼の處にか落在す、須く是れ自家退步して看て、方に始めて他の落處を見得すべし。豈に見ずや、興陽の剖侍者、遠錄公の問に答ふることを。娑竭海を出でて、乾坤震ひ、覿面に相呈す事若何。剖曰く、金翅鳥王宇宙に當る、箇の中誰れか是れ出頭の人。遠曰く、忽ち出頭に遇はゞ作麼生。剖曰く、鶻の鳩を捉ふるに似たり、君信ぜずんば、髑髏前に驗して、始めて眞を知らん。遠曰く、恁麼ならば、則ち節を屈して胸に當て、退身三步せん。剖曰く、須彌座下の烏龜子、重ねて點額に遭うて回ることを待つ莫れ。所以に三皇五帝、亦是れ何物ぞ。人多くは雪竇

〔遠錄公〕浮山の法遠圓鑑禪師のこと

〔屈節〕會元には、叉手とあり。

の意を見ず、只管に國を諷すと道ふ。若し恁麼に會せば、只だ是れ情見、此れ乃ち禪月、公子行に題するに曰く、錦衣鮮華手に鶻を擎ぐ、閑行せる氣貌輕忽多し。稼穡の艱難、總て知らず、五帝三皇、是れ何物ぞと。雪竇道ふ、屈、述ぶるに堪へたり、明眼の衲僧輕忽するを莫れ。多少の人か、蒼龍窟裏に向て、活計を作す。直饒是れ、頂門に眼を具し、肘後に符有る、明眼の衲僧、四天下を照破するも、這裏に到て、輕忽にする莫れ、須く是れ子細にして始めて得べし。

第四則 德山複子

垂示曰。青天白日、不可更指東劃西、時節因緣、亦須應病與藥。且道、放行好、把定好。試擧看。

讀方 垂示に曰く。青天白日、更に東を指し、西を劃すべからず、時節因緣、亦須く病に應じ藥を與ふべし。且く道へ、放行するが好きか、把定するが好きか。試に擧す看よ。

擧。德山到潙山。擔板漢。野狐精。挾複子、於法堂上、不妨令人疑著。納敗缺。從東過西、從西過東、可煞有禪、作什麼。顧視曰、無々、便出。好與三十棒。可煞氣衝天。眞獅子兒善獅子吼。雪竇着語曰、勘破了也。錯。果然。點。德山至門首却曰、也不得草々。放去收來。頭上太高生。末後太低生。知過必改、能有幾人。便具威儀、再入相見。依然作這去就。已是第二重敗缺。嶮。潙山坐次、冷眼看這老漢。將虎鬚也須是這般人始得。德山提起坐具云、和尚。改頭換面。無風起浪。潙山擬取拂子。須是那漢始得。運籌帷幄之中。不妨坐斷天下人舌頭。德山便喝、拂袖而出。野狐

〔禪月〕蜀主貫休に賜ひたる大師號。

〔放行〕放つて自由に任せること。〔把定〕把つて東收すること

精見解。這一喝、也有權也有實、也有照世有用。一等是拏雲攫霧者、就中奇特。雪竇着語曰、勘破了也、錯。果然。點。德山背却法堂、着草鞋便行。風光可愛。公案未圓。贏得項上笠、失却脚下鞋。已是喪身失命了也。潙山至晚、問首座、適來新到、在什麼處。東邊落節西邊拔本。眼視東南、意在西北。首曰、當時背却法堂、着草鞋出去也。靈龜曳尾。好與三十棒。這般漢腦後合喫多少。潙山曰、此子已後向孤峰頂上、盤結草庵、呵佛罵祖去在。賊過後張弓。天下衲僧跳不出。雪竇着語曰、雪上加霜。錯。果然。點。

〔德山〕三

讀方

擧す。德山、潙山に到る、（擔板漢　野狐精。）複子を挾んで、法堂上に於て、（妨げず人をして疑着せしむることを。敗缺を納る。）東より西に過ぎ、西より東に過ぎ、（可煞だ禪有て什麼か作さん。）顧視して無々と云うて、便ち出づ。（好し三十棒を與ふるに。可煞だ氣天を衝く。眞の獅子兒、善く獅子吼す。）雪竇着語して曰く、勘破了也。（錯。果然。點。）德山門首に到り、却て曰く、也た草々なることを得ずと。（放去收來、頭上は太高生、末後は太低生。過を知て必らず改む、能く幾人か有る。）便ち威儀を具して、再び入て相見す。（依然として這の去就を作す。是れ第二重の敗缺。嶮。）潙山座する次で、（冷眼にして這の老僧を看る。虎鬚を撫づることは。也た須く是れ這般の人にして、始めて得べし。）德山坐具を提起して曰く、和尚と。（頭を改め面を換ゆ。風無きに浪を起す。）潙山拂子を取らんと擬す。（須く是れ那漢にして、始めて得べし。籌を帷幄の中に運す。）

論法、相を學び、後禪に入りし人、姓は周氏、劔南の人、機鋒嶒峻を以て名あり〔潙山〕靈祐禪師、福州長谿の人、姓は趙氏、百丈の大智に參じて、機緣合し、後仰山を得て法を授く、即ち父子唱和して潙仰

宗の一派起る。

〔落節拔本〕商賣の掛引きに損をするを落節と云ひ、拔本とは資本を無くするこ

妨げず天下人の、舌頭を坐斷することを。）德山便ち喝して、拂袖して出づ。（野狐精の見解。這の一喝、也た權有り、也た實有り、也た照有り、也た用有り。一等に是れ雲を拏ひ霧を攫む者の中に就て奇特なり。）雪竇着語して曰く、勘破了也。（錯。果然。點。）德山、法堂を背却して、草鞋を着けて便ち行く。（風光愛すべし。公案未だ圓かならず、頂上の笠を贏け得て、脚下の鞋を失却す。已に是れ喪身失命し了れり。）溈山晚に至り、首座に問ふ、適來の新到、什麼の處にか在る。（東邊に落節し、西邊に拔本す。眼東南を視て、意西北に在り。）首座曰く、當時法堂を背却して、草鞋を着けて出で去れり。（靈龜尾を曳く。好し三十棒を與ふるに。這般の漢、腦後に多少を喫すべし。）溈山曰く、此の子已後、孤峯頂上に向て、草庵を盤結して、佛を呵し祖を罵り去ること在らん。（賊過ぎて後弓を張る。天下

と。

〔夾山〕圜悟の自稱、曾て夾山に住せしが故に云ふ。

〔油糍〕其の實質に付て數說あるも、團子、餅

の納僧跳不出。）雪竇着語して曰く、雪上に霜を加ふ。（錯。果然。點。）

【評】　夾山三箇の點の字を下す、諸人還て會すや麼。有時は一莖草を將て、丈六の金身と作して用ひ、有時は丈六の金身を將て、一莖草と作して用ゆ。德山は本是れ講僧なり、西蜀に在て金剛經を講ず。敎中に道ふに因れば、金剛喩定後得智の中に、千劫に佛の威儀を學び、萬劫に佛の細行を學び、然る後に成佛す。他の南方の魔子、便ち即身是佛と說く。遂に發憤して、疏鈔を擔うて行脚す、直に南方に往て、這の魔子の輩を破らんと。看よ他恁麼の發憤、也た是れ箇の猛利底の漢なることを。初め澧州に到り、路上に一婆子の、油糍を賣るを見る。遂に疏鈔を放下して、且く買うて點心に喫せんとす。婆曰く、我載する所の者は是れ什麼ぞ。德山曰く、金剛經の疏鈔。婆曰く、

の類を油揚げにしたもの。

〔龍潭〕崇信禪師のこと。

〔子〕汝と云ふに同じ。

に一問あり、汝若し答得ば、油糍を布施して點心と作さん、若し答へ得ざれば、別處に買ひ去れと。德山曰く、但だ問へ。婆曰く、金剛經に曰く、過去心も不可得、現在心も不可得、未來心も不可得と、上座那箇の心をか點ぜんと欲す。山無語。婆遂に指して、去て龍潭に參せしむ。纔かに門に跨りて便ち問ふ、久しく龍潭と響く、到來するに及んで、潭も亦見ず、龍も又現ぜずと。龍潭和尙、屛風の後に身を引いて曰く、子親しく龍潭に到れり。師乃ち禮を設けて退き、夜間に至て入室、侍立更深。潭曰く、何ぞ下り去らざる。山遂に珍重して簾を掲げて出づ。外面の黑きことを見て、却回して曰く、門外黑し。潭、遂に紙燭を點じて、山に度與す。山、接するに方りて、潭、便ち吹滅す。山豁然として大悟し、便ち禮拜す。潭云く、子、箇の什麼を見てか即ち禮拜する。山曰く、某甲自今後、更に天下の

〔上堂〕二種あり、法堂に上るは演法の爲め、僧堂に上るは喫粥飯の爲め。今は前者也。

老和尙の舌頭を疑着せず。來日潭上堂に曰く、可の中箇の漢有り、牙劍樹の如く、口血盆に似たり、一棒に打てども頭を回さず、他時異日、孤峯頂上に向て、吾が道を立て去ること在らん。山遂に疏鈔を取て、法堂前に於て、火炬を將て擧起して曰く、諸の玄辨を窮るも、一毫を大虛に置くが如く、世の樞機を竭すも、一滴を巨壑に投ずるに佀しと、遂に之を燒く。後ち潙山化を盛にすと聞き、直に潙山に造る。便ち作家の相見、包みも亦解かず、直に法堂に上りて、東より西に過ぎ、西より東に過ぎ、顧示して曰く、無々と、便ち出づ。且く道へ、意作麼生、是れ顚すること莫しや。人多くは錯て會して、用ひて建立と作す、直に是れ交涉無し、看よ他の恁麼、妨げず奇特なることを。所以に道ふ、群を出づることは、須く是れ英靈の漢なるべしと。勝に敵することは、他の師子兒に還す、選佛若し

〔作者〕作家に同じ、詩文より出でし語、人の尊稱なり。

是の如きの眼無ければ、假饒千載又麼爲ぞと。這裏に到て、須く是れ通方の作者にして、方さに始めて見得すべし。何が故ぞ、佛法許多の事なし、那裏か情見を着得し來れ。是れ他の心機、那裏も如許多の阿勞有らん。所以に玄沙道く、直に秋潭の月影、靜夜の鐘聲、扣擊に隨て、以て虧くること無く、波瀾に觸れて散ぜざるに似たるも、猶ほ是れ生死岸頭の事。這裏に到て、亦得失是非無し、亦奇特玄妙無し、作麼生か會すや。他東より西に過ぎ、西より東に過る、且く道へ、意作麼生。潙山老漢、也た他に管せず、若し是れ潙山にあらずんば、也た他に折挫一上せられん。看よ他の潙山老作家との相見、只管に坐がら成敗を觀ることを。若し深く來風を辨ぜば、爭でか能く此の如くならん。雲竇着語して曰く、勘破了也、一へに鐵橛に似て相似たり。衆中之れを着語と謂ふ、然も兩邊に在りと雖も、却て兩邊に住在せず、作麼生か他の勘破了也と道ふことを會する、什麼の處か是の勘破の處。且く道へ、德山を勘破するか、潙山を勘破するか。德山遂に門首に到て、却て拔本することを要す。自ら曰く、也た草々なることを得ずと。潙山と五臟心肝を掀出して、法戰一場せんことを要して、再び威儀を具して、却回して相見す。潙山坐する次で、德山坐具を提起して曰く、和尙と。潙山拂子を取らんと擬す。德山便ち拂袖して出づ。可煞だ奇特なり、衆中多く道ふ、潙山他を怕ると。甚の交涉かあらん、潙山亦忙しからず。所以に道ふ、智、禽に過ぎて、禽を獲得し、智、獸に過ぎて、獸を獲得し、智、人に過ぎて、人を獲得すと。這般の禪に參得せば、盡大地森羅萬象、天堂地獄、草芥人畜、一時に一喝を作し來るも、他亦管せず。禪床を掀倒し、大衆を喝散するも、他亦顧みず。天の高き

〔着語〕評語と云ふに同じ。〔聱訛〕義理の見分け難きこと。

が如く、地の厚きに似たり。潙山若し天下人の舌頭を坐斷する底の手脚無くんば、時に他を驗すること、也た大に難からん。是れ他、一千五百人の善知識にあらずんば、這裏に到て分疎不下。潙山は是れ籌を帷幄に運らし、勝を千里に決す。德山は法堂を背却して、草鞋を着けて便ち出で去る、且く道へ、他の意作麼生。汝道へ、德山是れ勝か、是れ負くるか、潙山恁麼に是れ勝か、是れ負くるか。雪竇着語して曰く、勘破了也、是れ他、工夫を下して、古人の聱訛極則の處を見得して、方さに能く恁麼なり、妨げず奇特なることを。雪竇、兩箇の勘破を着け、三段の判を作して、方さに此の公案を顯はす、傍人の二人を斷わるに似て相似たり。後來此の老漢、緩々地に、晚に至て方さに首座に問ふ、適來の新到、什麼の處にか在ると。首座曰く、當時法堂を背却して、草鞋を着けて出で去

〔理能く豹を伏す〕或は理を狸に書くは誤なり、博物志の說取り難し、博物志に曰く、魏武帝伐冐頓、經白

れり。潙山曰く、此の子、已後孤峯頂上に向て、草庵を盤結して、佛を呵し、祖を罵り去ること在らん。且く道へ、他の意旨如何。潙山老漢、是れ好心にあらず、德山後來佛を呵し、祖を罵り、風を打し、雨を打し、舊に依て他の窠窟を出でず、這の老漢に、平生の伎倆を見透せらる。這裏に到て、喚で潙山他に受記を與ふると作し得てん麼、澤廣うして山を藏し、理能く豹を伏すと作し得てん麼。若し恁麼ならば、且喜すらくは沒交涉。雪竇此公案の落處を知て、敢て他の與に斷わりて、更に道ふ、雪上に霜を加ふと、又重ねて拈起し來て、人をして見せしむ。若し見得し去らば、汝に許す、潙山、德山、雪竇と同參なることを、若し也た見ずんば、切に忌む、妄に情解を生ずることを。

第四則　德山複子

猨山逢獅子、使格之、見一物從林出、如狸、上帝車軌上、獅子將至、便跳上獅子頭、獅子伏不敢起、遂殺之、と獅と豹と共に猛獸なり、故に豹と云ふべしと。〔勘破〕勘檢のこと〔嶮〕アッと危いと思はず發す

頌。一勘破。言猶在レ耳。過。二勘破。兩重公案。雪上加レ霜、曾嶮墮。三段不レ同。在二什麽處一。飛騎將軍、入二虜庭一。嶮。敗軍之將無レ勞二再斬一。喪身失命。再得二完全一、能幾箇。死中得レ活。急走過。傍若無人。三十六策盡。儞神通堪レ作二何用一。不レ放過。理能伏レ豹。穿二却鼻孔一。孤峰頂上、草裏坐。果然。穿二過鼻孔一也未レ爲二奇特一。爲二什麽一卻在二草裏一坐。咄。會麽。兩刃相傷。兩々三三舊路行。唱拍相隨。便打。

【讀方】一勘破、(言猶ほ耳に在り。過。)二勘破、(兩重の公案)雪上に霜を加ふ、曾て嶮墮す。(三段同じからず。什麽の處にか在る。)飛騎將軍、虜庭に入る、(嶮。敗軍の將、再斬を勞することなし。喪身失命。)再び完全を得る、能く幾箇ぞ。(死中に活を得。)急に走過す、(傍若無人。三十六策盡く。儞が神通も、何の用をか作すに堪へんや。)

ろ語。

〔會〕會得了解のこと。

〔節角聱訛〕節はフシクレ、角はツノ、共に俗に齒にもたゝぬと云ふこと、聱訛

放過せず。(理能く豹を伏す。鼻孔を穿却す。)孤峯頂上、草裏に坐す。(果然。鼻孔を穿過するも、也た未だ奇特と爲さず。什麽としてか、却て草裏に在て坐す。)咄。(會すや。兩刃相傷る。兩々三三、舊路に行く。唱拍相隨ふ。便ち打つ。)

【評】雪竇、一百則の公案を頌す、一則則に香を焚いて拈出す、所以に世に行はる。他更に文章を會し、公案を透得し、盤礴して熟することを得て、方さに筆を下すべきなり、何故ぞ此の如くなる。龍蛇は辨じ易く、衲子は瞞し難し。雪竇、這の公案を參透して、節角聱訛の處に於て、三句の語を着て、撮し來て頌出す。雪上に霜を加ふ、幾乎嶮墮す、只だ德山の如きは、什麽にか似たる、一へに李廣が、天性射を善するに似たり。天子封じて飛騎將軍と爲す、深く虜庭に入て、單于に生獲せらる。廣、時に傷病す、廣を兩馬の間に置て、

の解前にあり。〔天子〕漢の武帝のこと。

絡いて盛り臥せしむ、廣、遂に詐て死す。其傍らを睨るに、一りの胡兒の善馬に騎る有り、廣、身を騰て馬に上り、胡兒を推し墮して、其弓矢を奪ひ、馬に鞭ち、南に馳せて、弓を彎いて、追騎を射退く、故を以て脫することを得たり。雪竇引いて、頌中に在て、用ひて、死中に活を得たり。這漢這般の手段有て、德山、再び入て相見して、舊に依て他の跳得出し去らるゝに比す。看よ他の古人、見到、說到、行到、用到、妨げず、英靈なることを。人を殺すに、眼を眨さざる底の手脚有て、方に立地に成佛す可く、立地に成佛する底の人有て、自然に人を殺すに、眼を眨さずして、方さに自由自在の分有らん。如今の人、有る底は問着すれば、頭上は一へに、衲僧の氣槪に似たり。輕々に拶着すれば、便ち腰を段と做し、股を截と做して、七支八離して、渾て些子相續の處無し。所以に古人道く、

〔滅々挈々〕長短齊はず、蹶き倒るの義なり。〔首座〕衆中の上座なり。

相續や也た大に難しと。看よ、他の德山潙山此の如くなることを。豈に是れ滅々挈々底の見解ならば、再び完全を得る、能く幾箇ぞ、急に走過すと。德山喝して便ち出で去る、一へに李廣が捉はれて、後ち計を設けて、一箭に一箇の番將を射殺して、虜庭を出づることを得るに似て相似たり。雪竇頌して、此に到て大に工夫有り、德山法堂を背却して、草鞋を着けて出で去る、便宜を得たりと道ふ、殊に知らず、這の老漢、舊に依て、他の出頭を放さゞること在ることを。雪竇道く、放過せずと。潙山晩間に至て、首座に問ふ、適來の新到、什麼の處にか在る。首座曰く、當時法堂を背却して、草鞋を着けて出で去れり。潙山曰く、此の子他日孤峯頂上に向て、草庵を盤結して、佛を呵し、祖を罵り去ること在らん、幾たびか曾て是れ放過し來らん、妨げず奇特なることを。這裏に到て、雪竇什麼とし

てか道ふ、孤峯頂上草裏に坐すと、又一喝を下す。且らく道へ、什麼の處にか落在する、更に參ぜよ三十年。

〔英靈〕英は千人に勝るゝを云ひ、靈は靈妙不

第五則　雪峰粟米

垂示曰。大凡扶豎宗教、須是英靈底漢。有殺人不眨眼底手脚、方可立地成佛。所以照用同時、卷舒齊唱、理事不二、權實並行、放過一著、建立第二義門。直下截斷葛藤、後學初機、難爲湊泊。昨日恁麼、事不獲已、今日又恁麼、罪過彌天。若是明眼漢、一點謾他不得、其或未然、虎口裏橫身、不免喪身失命。試擧看。

讀方　垂示に曰く。大凡そ宗教を扶豎せんには、須く是れ英靈底の漢なるべし。人を殺すに、眼を眨さざる底の手脚有て、方さに立地に成佛すべし。所以に照用同時、卷舒齊しく唱へ、理事不二、權實並べ行ふ、一著を放過して、第二義門を建立す。直下に葛藤を截斷すれば、後學初機、湊泊するに難爲ならん。昨日も恁麼、事已むことを獲ず、今日も又恁麼、罪過彌天。若し是れ明眼の漢ならば、一點も他を謾ずることを得ず、其れ或は未だ然らずんば、虎口裏に身を橫へて、喪身失命を免れず、試に擧す看よ。

可思議なり、即ち拔群絶倫のこと。

〔雪峰〕德山の弟子、雲門の師、義存禪師の

擧。雪峯示衆曰、（一盲引衆盲。不爲分外。）盡大地撮來、如粟米粒大、（是什麼手段。山僧從來、不弄鬼眼睛。）抛向面前、（只恐抛不下。有什麼伎倆。）漆桶不會、（倚勢欺人。自領出去。莫謾大衆好。）打鼓普請看。（瞎。打鼓爲三軍。）

讀方　擧す。雪峰衆に示して曰く、（一盲衆盲を引く。分外と爲さず。）盡大地撮し來るに、粟米粒の大いさの如し。（是れ什麼の手段ぞ。山僧從來、鬼眼睛を弄せず。）面前に抛向す、（只だ恐くは、抛不下な

こと。〔撮〕指の先でツマムこと。〔長慶〕慧稜禪師。〔雲門〕文偃禪師。

らんことを。什麼の伎倆か有らん。〕漆桶不會、〔勢に倚て人を欺く。自領出去。大衆を謾ずること莫んば好し。〕鼓を打ち普請して看よ。瞎。鼓を打つことは。三軍の爲めなり。〕

【評】長慶雲門に問ふ、雪峯與麼に道ふ、還て出頭不得の處有りや。門曰く、有り。慶曰く、作麼生。門曰く、總て野狐精の見解を作すべからず。雪峰曰く、匹上は足らず、匹下は餘り有り。我更に汝が與に、葛藤を打せん、柱杖を拈じて曰く、還て雪峰を見るや、咄。王令稍々嚴にして、行市を攙奪することを許さず。大潙喆曰く、汝諸人の與に、土上に泥を加へん、柱杖を拈じて曰く、看よ々々、雪峰諸人の面前に向て、放屙することを。咄、什麼としてか、屎臭も也た知らざる。雪峰衆に示して曰く、盡大地撮し來れば、粟米粒の大さの如しと。古人の接物利生、奇特の處あり、只だ是れ辛懃なる

〔洞山〕曹山の師、良介禪師のこと。

ことを妨げず。三たび投子に上り、九たび洞山に到る、漆桶木杓を置て、到處に飯頭となる、只だ此の事を透得せんが爲めなり。洞山に至るに及んで、飯頭となる。一日洞山、雪峰に問ふ、什麼をか作す。峰曰く、米を淘る。山曰く、沙を淘つて米を去るか。米を淘つて沙を去るか。峰曰く、沙米一齊に去る。山曰く、大衆、箇の什麼を喫せん。峰便ち盆を覆す。山曰く、子が緣、德山に在りと、指して之れに見えしむ。纔かに到つて便ち問ふ、從上の宗乘中の事、學人還て分有りや、也た無しや。德山打つこと一棒して曰く、什麼と道ふぞ。此に因て省有り、後ち鰲山に在て、雪に阻てらる。岩頭に謂て曰く、我當時德山の棒下に在りて、桶底の脫するが如くに相似たり。岩頭喝して曰く、汝道ふことを見ずや、門より入るものは、是れ家珍にあらずと、須く是れ自己の胸中より流出して、蓋天蓋地

にして、方さに少分の相應あるべし。雪峰忽然として大悟し、禮拜して曰く、師兄今日始めて是れ鰲山成道。如今の人、只管に道ふ、古人特地に做作して、後人をして規矩に依らしむと。若し恁麼ならば、正に是れ他の古人を謗するなり、之れを出佛身血と道ふ。古人、如今の人の苟且なるに似ず、豈に一言半句を以て、以て平生に當てんや。若くば宗教を扶竪し、佛壽命を續けんとす、所以に一言半句を吐くに、自然に天下人の舌頭を坐斷す。意路に着き、情解を作し、道理に渉る處無し。看よ他此箇の示衆、蓋し他曾て作家に見え來るが爲めに、所以に作家の鉗鎚有り。凡そ一言半句を出すも、是れ心機意識、思量鬼窟裏に、活計を作さず、直に是れ群を超え、萃を拔き、古今を坐斷して、擬議を容れず、他家の用處、盡く是れ此の如し。一日衆に示して曰く、南山に一條の鼈鼻蛇有り、汝等諸人、切に須く看取すべし。時に稜道者衆を出で、曰く、恁麼ならば則ち今日堂中、大に人有り喪身失命し去ること在らん。又曰く、盡大地是れ沙門の一隻眼、汝等諸人、什麼の處に向てか屙せん。又曰く、望州亭に汝と相見し了れり、烏石嶺に汝と相見し了れり、僧堂前に汝と相見し了れり。時に保福鵝湖に問ふ、僧堂前は即ち且く置く、如何なるか是れ望州亭、烏石嶺相見の處。鵝湖驟歩して方丈に歸る。他常に這般の語を擧して衆に示す、只だ盡大地、撮し來るに、粟米粒の大さの如しと云ふが如きんば、這箇の時節、且く道へ、情識を以て、卜度し得てんや。是れ羅籠を打破し、得失是非一時だ放下して、洒々落々たらば、自然に他の圏繢を透得して、他の用處を見るべし。且く道へ、雪峰の意、什麼の處にか在る。人多く情解を作して道ふ、心は是れ萬法の王、盡大地一時に我が手裏に在りと、且喜

〔稜道者〕長慶のこと。〔望州亭〕雪峯山二十三景の一、師曾て雪峯に住するの日、福州の鼓山を望見して遂に亭の名とす。〔烏石嶺〕福州にあり烏石山のこと。〔鵝湖〕雪峯の嗣。〔圏繢〕獸類を捕ふ

るワナ、師家が學人を接する術を云ふ。

すらくは沒交涉。這裏に到て、須く是れ箇の眞實の漢にして、聊か擧着を聞いて、徹骨徹髓、見得透して、且つ情思意想に落ちざるべし。若し是れ箇の本色行脚の衲子ならば、他什麼に旣に是れ郎當して、人の爲めにし了るを見ん、看よ他の雪竇の頌に曰く。

頌。牛頭沒、閃電相似。蹉過了也。馬頭回。如擊石火。曹溪鏡裏、絕塵埃。打破鏡來與汝相見。須是打破始得。打鼓看來、君不見。刺破汝眼睛。莫輕易好。漆桶有什麼難見處。百花春至、爲誰開。法不相饒。一場狼藉。葛藤窟裏出頭來。

讀方　牛頭沒し、（閃電相似たり。蹉過し了れり。）馬頭回へる。（擊石火の如し。）曹溪鏡裏、塵埃を絕す。（鏡を打破し來れ、汝と相見せん。須く是れ打破して、始めて得べし。）鼓を打して見來れども、君見

〔相饒さず〕餘計なものはないこと。

〔當頭〕最初の義。

〔落草〕慈

ず。（汝が眼睛を刺破す。輕易すること莫くんば好し。漆桶什麼の見難き處か有らん。）百花春至て、誰が爲めにか開く。（法相饒さず。一場の狼藉。葛藤窟裏より出頭し來れ。）

評　雪竇自然に、他の古人を見、只だ他の命脈の上に去つて、一割して、他の爲めに頌出することを消す。牛頭沒し、馬頭回ると、且く道へ、箇の什麼をか說かん。見得透する底は、早朝に粥を喫し、齋時に飯を喫するが如くに相似たり、只だ是れ尋常なり。雪竇慈悲、當頭一鎚に擊碎し、一句に截斷す、只だ是れ妨げず孤峻なることを。擊石火の如く、閃電光に似たり、鋒鋩を露はさず、汝が湊泊の處なし。且く道へ、意根下に向て、模索し得てん麼、此の兩句、一時に道ひ盡し了れり。雪竇第三の句に、却て一線道を通じて、略些の風規を露はす、早く是れ落草。第四の句、直下に更に是れ落草。若し

悲のこと

言上に向て言を生じ、句上に句を生じ、意上に意を生じ、解を作し會を作さば、唯だ老僧を帶累するのみならず、亦乃ち雪竇に辜負せん。古人の句は此の如しと雖も、意は此の如くならず、終に道理を作して、人を繫縛せず、曹溪鏡裏、塵埃を絕す。多少の人道ふ、靜心便ち是れ鏡と、且喜すらくは沒交涉、只管に計較道理を作さば、什麼の了期か有らん。這箇は是れ本分の說話、山僧敢て本分に依らざるにあらず、牛頭沒し、馬頭回る、雪竇分明に說き了れり。自ら是れ人見ず、所以に雪竇此の如し。郎當し頌して道ふ、皷を打して、看せ來るに君見ず、痴人還て見るや。更に汝に向て道はん、百花春至つて、誰が爲めにか開く、謂つべし戸牖を瞎開して、汝が爲めに、一時に八字に打開し了れりと。春の來るに及んで、幽谷野間、乃至人無き處、百花競ひ開く、汝且く道へ、更に誰が爲にか開く。

〔雲門〕雪峯義存の嗣、雲門宗の高祖なり文偃禪師のこと。

〔鰕跳れ

第六則　雲門好日

擧。雲門垂語曰、十五日已前不レ問レ汝（半河南、半河北、這裏不レ取二舊暦日一）十五日已後道二將一句一來（不レ免下從レ朝至上レ暮。切忌道著、來日是十六。日月如レ流。）自代曰、日々是好日。（收。鰕跳不レ出レ斗、誰家無二明月清風一。還知麼。海神知レ貴不レ知レ價。）

讀方　擧す。雲門垂語して曰く、十五日已前は、汝に問はず、（半河南、半河北。這裏舊暦日を取らず）十五日已後、一句を道ひ將ち來れ。（免れず、朝より暮に至ることを。切に忌む道着することを、來日是れ十六。日月流るゝが如し。）自ら代つて曰く、日々是れ好日。（收。鰕跳れども斗を出でず。誰が家にか明月清風無けん。還て知るや麼。

ども…〕外へ出ることの出來ぬを云ふ。

〔睦州〕道蹤禪師のこと、黃蘗に嗣法す。

〔𨍏轢鑽〕始皇帝阿房宮を建てる時、用ひた道具、今は役に立たぬと云ふこと。

海神の貴きことを知て、價を知らず。〕

【評】雲門、初め睦州に參ず、州、旋機轉電して、直に見れ湊泊し難し、尋常人を接するに、纔かに門に跨れば、便ち搊住して曰く、道へ道へ、擬議して不來なれば、便ち推し出して曰く、秦時の𨍏轢鑽と。雲門凡そ去て見ゆ、第三回に至て、纔かに門を敲く、州曰く、誰ぞ、門曰く、文偃。纔かに門を開く、便ち跳り入る、州、搊住して曰く。道へ道へ、門擬議す、便ち推し出だされ、門、一足門閫内に在り、州に急に門を合せられて、雲門の脚を拶折す、門、忍痛の聲を作し忽然として大悟す、後來語脈人を接するに、一模に睦州を脫出す、後ち陳操尙書か宅に於て住すること三年、睦州指して、雪峰の處に往き去らしむ、彼れに至つて、衆を出でゝ便ち問ふ、如何なるか是れ佛。峰曰く、寐寤すること莫れ。雲門便ち禮拜す。一住三年、雪峰一日問ふ、子が見處如何。門曰く、某甲が見處、從上の諸聖より、一絲毫許りも移易せず。靈樹三十年、首座を請せず、常に曰く、我が首座生ぜり、又曰く、我が首座牧牛せり、復た曰く、我が首座行脚せりと。忽ち一日鐘を撞かしめて、三門前に首座を接す。衆皆之れを訝かる。雲門果して至る、便ち請して、首座寮に入つて包を解かしむ。靈樹を人號して、知聖禪師と云ふ。過去未來の事皆預知す。一日廣主劉王、將さに兵を興さんとす、躬ら隱に入つて、師を請して臧否を決す。靈樹已に先きに知つて、怡然として坐化す。廣主怒つて曰く、和尙何の時か疾を得たる。侍者對へて曰く、師曾て疾有らず、適に一合子を封じて、王の來るを俟つて之れを呈せしむ。廣主合を開くに、一帖子を得たり、曰く、人天の眼目、堂中の首座と。廣主旨を悟り、遂に兵を寢む。雲門を請して、出世し

〔靈樹〕如敏禪師のこと大安に嗣す。

〔廣主〕廣州王劉隱

〔合子〕奩子なり香を入るゝもの。

て靈樹に住せしむ、後來方さに雲門に住す、師の開堂說法に、鞠常侍と云ふものあり、問を致す、靈樹果子熟すや、也た未だしや。門曰く、什麼年中にか、生と道ふことを信ずるを得たる。復た劉王の昔、賣香の客となる等の因緣を引く、劉王後ちに、岸樹に諡して、知聖禪師と爲す。靈樹は生々通を失はず、雲門凡そ三生王と爲る、所以に通を失す。一日劉王師に詔して、內に入つて夏を過さしむ、數人の尊宿と共に、皆內人の問迅を受けて說法す、只だ師一人言はず、亦人の親近する無し。一直殿使あり、一偈を書して、碧玉殿上に貼在して曰く、大智の修行、始めて是れ禪、禪門は默に宜しうして、喧に宜しからず、萬般の巧說、爭でか實に如かん、雲門、總て言はざるに輪却す。雲門尋常愛して三字の禪を說く、顧、鑒、咦。又一字の禪を說く。僧問ふ、父を殺し母を殺すは、佛前懺悔、佛を

〔洞山〕守初宗慧禪師。〔智門〕師寬禪師。〔德山〕緣密圓明禪師。〔香林青城〕澄遠禪師。

殺し祖を殺して、什麼の處に向つてか懺悔せん。門曰く、露。又問ふ、如何なるか是れ正法眼藏。門曰く、普。直に是れ擬議を容れず、平鋪の處に到つて、又却つて人を罵る、若し一句語を下さば、鐵橛子の如くに相似たり。後ち四哲を出す、乃ち洞山の初、智門の寬、德山の密、香林の遠、皆大宗師たり。香林十八年侍者と爲る、凡そ他を接するに、只だ遠侍者と叫ぶ。遠云く、諾。門曰く、是れ什麼ぞ。是の如きこと十八年。一日方さに悟る。門曰く、我今より後ち、更らに汝を叫ばずと。雲門、尋常人を接するに、多く睦州の手段を用ふ、只だ見れ湊泊するに難爲なり、釘を抽き、楔を拔く底の鉗鎚有り。雪竇道く、我は愛す、韶陽新定の機、一生人の與めに釘を抽き、楔を拔く。箇の問頭を垂れて、衆に示して曰く、十五日已前は汝に問はず、十五日已後、一句を道ひ將ち來れと。千差を坐斷し、

凡聖を通ぜず、自ら代て曰く、日々是れ好日と。十五日已前、箇の語已に千差を坐斷じ、十五日已後、箇の語也た千差を坐斷す。是れ他、明日は是れ十六と道はず、後人只管に語に隨つて、解を生ず、什麼の交渉か有る、他の雲門是の宗風を立つ、須らく是れ箇の爲人の處あるべし。垂語し了て、却て自ら代つて曰く、日々是れ好日と、此語古今に通貫して、從前至後、一時に坐斷す。山僧此の如く說話する、也た是れ語に隨つて解を生ず、他殺せんよりは自殺に如かず。纔かに道理を作さば、坑に墮し塹に落つ。雲門一句の中に、三句俱に備はる、蓋し是れ他家の宗旨、此の如し。一句語を垂れて、須らく、宗に歸せんことを要すべし。若し此の如くならずんば、只だ是れ杜撰、此の事許多の論說なし、而も未透の者は、此の如くならんことを要す。若し透得せば、便ち古人の意旨を見、雪竇の葛藤を打するを看取せよ。

〔一著を放過す〕碁を打つ

頌。去却一。(七穿八穴。向什麼處去。放過一着。)拈得七。(拈不出。却不放過。)上下四維無等匹。(何似生。上是天下是地、東西南北、四維、有什麼等匹。爭何柱杖在我手裏。)徐行踏斷流水聲、(莫問脚跟下。難爲體究。打入葛藤窟裏去了也。)縱觀寫出飛禽跡。(眼裏亦無此消息。野狐精見解。依前只在舊窠窟裏。)草茸々、(腦後拔箭、是什麼消息、墮在平實處。)煙冪々。(未出這窠窟。足下雲生。)空生巖畔花狼藉、(在什麼處。不唧嚁漢。堪破了也。)彈指堪悲舜若多。(四方八面盡法界。向舜若多鼻孔裏道將一句來。在什麼處。)莫動着、(前言何在。動着時如何。)動着三十捧。(自領出去。便打。)

讀方　一を去却し、(七穿八穴。什麼の處に向てか去る。一着を放過す。)七を拈得す、(拈不出。却て放過せず)上下四維等匹なし。(何似

手、ヒヨイと一手ゆるめること。

〔空生〕釋尊十六弟子の一人解空第一の須善提尊者のこと。

〔舜若多〕天竺の古俗に云ふ虛空神のこと。

〔自領出去〕自分の物は自分で持つて自手に行けと云ふ程の意

生。上は是れ天、下は是れ地。東西南北四維を典る。什麼の等匹か有らん。拄杖我が手裏に在ることを爭何せん。）徐に行いて踏斷す、流水の聲、（脚跟下を問ふこと莫れ。體究するに難爲なり。葛藤窟裏に打入し去り了れり。）縱に觀て寫し出す、飛禽の跡、（眼裏亦這の消息なし。野狐精の見解。依前として只だ舊窠窟裏に在り。）草茸々、（腦後に箭を拔く。是れ什麼の消息ぞ。平實の處に墮在す。）煙羃々。（未だ這の窠窟を出でず。足下雲生ず。）空生巖畔花狼藉、（什麼の處にか在る。不唧𠺕の漢。勘破了也。）彈指して悲しむに堪へたり、舜若多。（四方八面盡法界。舜若多の鼻孔裏に向つて、一句を道ひ將ち來れ。什麼の處にか在る。）動着すること莫れ、（前言何にか在る。動着する時如何。）動着すれば三十棒。（自領出去。便ち打つ。）

【評】雪竇の頌古、偏へに能く此の如し。當頭に金剛王寶劍を以て、揮ふこと一下し了つて、然る後ち略些の風規を露す。然も此の如くなりと雖も、畢竟二解あること無し。一を去却し、七を拈得す。人多くは算數の會を作すと道ふ、一を去却するは、是れ十五日已前の事と。雪竇、驀頭に兩句の言語を下して、印破し了て、却て露出して、人をして見せしむ。一を去却し、七を拈得すと。切に忌む、言句の中に向つて活計を作すことを。何故ぞ、胡餅什麼の汁か有らん。人多くは意識の中に落在す、須く是れ語句未生已前に向つて、會取して始めて得べし。大用現前、自然に見得せん。所以に釋迦老子、成道の後、摩竭提國に於て、三七日の中、是の如きのことを思惟し玉ふ。諸法寂滅の相、言を以て宣ぶべからず、我寧ろ說法せず、疾くに涅槃に入らんと。這裏に到つて、箇の開口の處を覓むるに得ず、方便力を以ての故に、五比丘の爲めに說き已る。三百六十會に

〔珍御服〕天子の御衣。

〔一箇半箇〕一人半人と云ふが如し

至つて、一代時教を說く、只だ是れ方便、所以に珍御服を脫し、弊垢衣を着て、已むことを得ずして、第二義門の中、淺近の處に向つて、諸子を誘引す。若し他をして、向上に全提せしめば、盡大地、一箇半箇なし。且く道へ、作麼生か是れ第一句、這裏に到つて、雪竇此の意を露はして、人をして得せしむ。汝但だ上、諸佛あることを見ず、下、衆生あることを見ず、山河大地あることを見ず、內、見聞覺知あることを見ず、大死底の人の、却つて活するが如くに相似て、長短好惡、打成一片、一々拈じ來るに、更らに異見無し、然る後ち應用其の宜しきを失はず。方さに他の一を去却し、七を拈得し、上下四維等匹なしと道ふことを見ん、若し此の句に於て透得せば、直に得たり、等匹あること無きことを。森羅萬象、草芥人畜、着々全く自己の家風を彰はす、所以に道ふ、萬象之中、獨露身と。惟れ人自ら肯て乃ち方さに親し、、昔年謬つて、途中に向つて覓む、今日看來れば、火裏の氷と。天上天下唯我獨尊、人多くは末を逐うて、其の本を求めず、先づ本正しきことを得れば自然に、風行けば草偃し、水到れば渠成る。徐ろに行いて踏斷す、流水の聲、徐々と行動する時、浩々たる流水の聲も、也た應さに踏斷すべし。縱に觀て寫し出す、飛禽の跡、目を縱にして一觀するに、直饒ひ是れ飛禽の跡も、亦寫し出すが如くに相似たり。這裏に到つて、鑊湯爐炭も、吹いて滅せしめ、劍樹刀山も、喝して便ち摧く、難事と爲さず。雪竇此に到つて、慈悲の故に、人の無事界中に坐在せんことを恐れて、復た道ふ、草茸々、煙冪々と、蓋覆却する所以なり、直に得たり、草茸々、煙冪々なることを。且らく道へ、是れ什麼人の境界ぞ、喚んで日々是れ好日と作し得てんや、且喜すらくは沒交涉。

〔那邊〕那は彼に同じこゝではドノ邊と云ふ程の意。〔般若：：〕梵語、般若は慧、波羅密多は度と譯す。

直に得たり、徐ろに行いて踏斷す流水の聲も、也た不是。縱に觀て寫し出す飛禽の跡も、也た不是。草茸々も、煙冪々も、也た不是。直饒ひ總に不恁麼なるも、正に是れ空生巖畔花狼籍、也た須らく是れ那邊に轉廻して始めて得べし。見ずや須菩提、巖中に宴坐す、諸天花を雨らして讃嘆す。尊者曰く、空中に花を雨らして讃嘆するは、復た是れ何人ぞ。天曰く、我は是れ天帝釋。尊者曰く、汝何をか讃嘆する。天曰く、我、尊者の善く般若波羅密多を説くことを重んず。尊者曰く、我、般若に於て、未だ嘗て一字をも説かず、汝云何か讃嘆する。天曰く、尊者無説、我乃ち無聞、無説無聞、是れ眞の般若なりと云うて、又復た地を動かして、花を雨らす。雪竇亦嘗て頌有り、曰く、雨過ぎて雲凝り、曉半ば開く、數峰畫くが如し、碧崔嵬、空生解せず、巖中に坐することを、天花を惹き得、地を動かし、花を雨らす、這裏に到つて、更に那裏にか藏し去らん。雪竇又道ふ、我恐らくは之れを逃るゝとも、逃るゝことを得ず、大方の外、皆充塞す、忙々擾々、知んぬ何ぞ窮らん、八面の清風、衣裓を惹く、直に淨躶々、赤洒々として、都て纖毫の過患無きことを。也た未だ極則と爲さず、且らく畢竟して、如何か即ち是ならん。下文を看取せよ、曰く、彈指して悲しむに堪へたり、舜若多と。梵語には舜若多、此には虛空神と云ふ、虛空を以て體と爲し、身無きに觸を覺ゆ、佛光の照すを得て、方さに身を現得す。汝若し舜若多神に似ることを得る時、雪竇、正に好し、彈指して悲嘆するに。又曰く、動着すること莫れ、動着する時如何、白日青天、眼を開いて瞌睡す。

〔彈指〕不淨彈指と警覺彈指との二あり、今は汚らはしいとの意にて、不淨彈指なり。

〔親覲〕覲は諸侯が天子に朝拜すること、今は相見の意。

〔性燥〕性質の鋭敏なること、即ち怜悧のこと。

〔從前の汗馬〕佛祖の修證に骨を折つたことを、武將の軍功に譬ふ。

第七則　慧超問佛

垂示曰。聲前一句、千聖不傳。未曾親覲、如隔大千。設使向聲前辨得、截斷天下人舌頭。亦未是性懆漢。所以道、天不能蓋、地不能載、虛空不能容、日月不能照、無佛處獨稱尊、始較些子。其或未然。於一毫頭上透得、放大光明、七縱八橫、於法自在自由、信手拈來、無不是。且道、得箇什麼、如此奇特。復曰、大衆會麼、從前汗馬無人識、只要重論蓋代功。即今事且致、雪竇公案、又作麼生、看取下文。

讀方　垂示に曰く。聲前の一句、千聖不傳。未だ曾て親覲せざれば、大千を隔つるが如し。設使ひ聲前に向つて辨得して、天下人の舌頭を截斷するも、亦未だ是れ性燥の漢にあらず。所以に道ふ、天も蓋ふこと能はず、地も載すること能はず、虛空も容るゝこと能はず、日月も照すこと能はず、無佛の處獨り尊と稱して、始めて些子に較れり。其れ或は未だ然らず、一毫頭上に於て、透得して、大光明を放つて、七縱八橫、法に於て自在自由にして、手に信せて拈じ來るに、不是あること無し。且らく道へ、箇の什麼を得てか、此の如く奇特なる。復た曰く、大衆會すや、從前の汗馬、人の識るなし、只だ重ねて蓋代の功を論ぜんことを要す。即今の事は且らく致く、雪竇の公案、又作麼生、下文を看取せよ。

擧。僧問法眼、（道什麼。檐枷過狀。）慧超咨和尙、如何是佛。（道什麼。眼晴突出。）法眼曰、汝是慧超。（依模脫出。鐵餕餡。就身打劫。）

〔擔枷過狀〕枷は手カセ、足カセのこと、過狀は罪を白狀すること。

〔鐵餕餡〕鐵のアンコロで齒がたゝぬこと。

〔法眼〕文益禪師、地藏院桂琛禪師に嗣法す禪五家の中法眼宗の祖なり、五百人の善知識と

【讀方】 舉す。僧、法眼に問ふ、(什麼と道ふぞ。擔枷過狀。)慧超、和尚に咨ふ、如何なるか是れ佛。(什麼と道ふぞ。眼睛突出す。)法眼曰く、汝は是れ慧超。(模に依て脫出す。鐵餕餡。就身打劫。)

【評】 法眼禪師、啐啄同時底の機あり。啐啄同時底の用を具して、方さに能く此の如く答話す。所謂聲を超え、色を越えて、大自在を得たり、縱奪時に臨んで、殺活我に在り、妨げず奇特なることを。然れども此れ箇の公案、諸方に商量する者多く、情解の會を作す者少なからず。知らず古人凡そ一言半句を垂示すること、擊石火の如く、閃電光に似て、直下に一條の正路を撥開することを。後人只管に言句上に去つて、解會を作して道く、慧超は是れ佛、所以に法眼、什麼に答ふと。有者道く、大に牛に騎つて、牛を覓むるに似たりと。有者は道く、問處便ち是れ什麼の交涉か有らんと。若し什麼に會し

稱す。

〔商量〕禪家にて問答往來すること。

〔丙丁童子〕火を司る神な

去らば、惟れ自己に辜負するのみならず、亦乃ち深く古人を屈せん。若し他の全機を見んと要せば、是れ一棒に打てども頭を回らさゞる底の漢、牙は劍樹の如く、口は血盆に似て、言外に向つて歸を知り、少分の相應有るをば除非す。若し一々に情解を作すは、盡大地是れ胡種族を滅する底の漢、只だ超禪客、此に於て悟り去るが如きは、也た是れ他、尋常に管帶參究す。所以に一言の下、桶底の脫するが如くに相似たり。只だ則監院の如きは、法眼の會中に在て、也た曾て參請入室せず、一日法眼問うて曰く、則監院何ぞ來つて入室せざる。則云く、和尚豈に知らずや、某甲青林の處に於て、箇の入頭あることを。法眼曰く、汝試に我が爲めに擧せよ見ん。則曰く、某甲問ふ、如何なるか是佛。林曰く、丙丁童子來求火。法眼曰く、好語、恐らくは儞錯つて會せんことを。更らに說くべし看ん。則曰く、

り。

丙丁は火に屬す、火を以て火を求む、某甲が如きは是れ佛、更らに去つて佛を覔む。法眼曰く、監院果然として錯會し了れり。則、不憤して便ち起單して、江を渡り去る。法眼曰く、此人若し回らば救ふべし、若し回らざれば救ふことを得ずと。則、中路に到つて、自ら忖りて曰く、他は是れ五百人の善知識、豈に我を賺すべけんやと、遂に回つて再參す。法眼曰く、汝但だ問へ、我汝が爲めに答へん。則便ち問ふ、如何なるか是れ佛。法眼曰く、丙丁童子來求火。則、言下に於て大悟す。如今有者は、只管に瞠眼して、解會を作す、所謂彼既に瘡無し、之を傷くること勿れと。這般の公案、久參の者は、一擧すれば便ち落處を知る。法眼下に、之れを箭鋒相拄ふと謂ふ。五位君臣、四料簡を用ひず、直に箭鋒相拄ふことを論ず。是れ他の家風此の如く、一句下に便ち見、當陽に便ち透る。若し句下に向つて尋思せば、卒に模索不着、法眼出世五百の衆有りて、是の時佛法大に興る。時に韶國師、久しく疎山に依り、自ら謂へり、旨を得たりと。乃ち疎山平生の、文字頂相を集めて、衆を領して行脚す。法眼の會下に至り、他亦去つて入室せず、只だ參徒をして、衆に隨つて入室せしむ。一日法眼陞座す、僧有り問ふ、如何なるか是れ曹源の一滴水。法眼曰く、是れ曹源の一滴水。其僧惘然として退く。韶、衆に在つて之れを聞き、忽然として大悟し、後ち出世して、法眼に嗣法す。頌あり、呈して曰く、通玄峰頂、是れ人間にあらず、心外無法、滿目青山と。法眼印して曰く、只だ此の一頌、我が宗を繼ぐべし、子後ちに王侯の敬する有らん、吾、汝に如かずと。看よ他の古人、什麼に悟り去ることを。是れ什麼の道理ぞ、只だ山僧をして說かしむ可らず、須らく是れ自己、二六時中、精神を打辨すべし。

（惘然）自失の貌。

（通玄峯）天台山にありとか

〔江國〕楊子江の南の方即ち江南と稱して景色のよい所なり。

〔扶籬摸壁〕暗夜に物を探り尋ねること。

恁麼に他と承當するに似たらば、他日十字街頭に向つて、垂手爲人も、也た難事と爲さず。所以に僧、法眼に問ふ、如何なるか是れ佛。法眼曰く、汝は是れ慧超と。甚の相辜負する處か有らん、見ずや雲門曰く、擧するに顧ざれば、即ち差互す、思量せんと擬せば、何の劫にか悟らんと。雪竇後面に頌し得て、妨げず顯赫なることを、試に擧す看よ。

頌。江國春風、吹不レ起。盡大地那裏得二這消息一。文彩已彰。鷓鴣啼、在二深花裏一。喃々何用。又被二風吹一別調中。豈有二恁麼事一。三級浪高、魚化レ龍。通二這一路一。莫レ謾二大衆一好。踏二着龍頭一。痴人猶戽、夜塘水扶籬摸壁。挨レ門傍レ戸。衲僧有二什麼用處一。守レ株待レ兔。

讀方　江國の春風、吹き起らず、（盡天地、那裏にか這の消息を得ん。文彩已に彰はる。）鷓鴣啼いて、深花裏に在り。（喃々何ぞ用ひん。又風に別調の中に吹かる。豈に什麼の事有らんや。）三級浪高うして、魚、龍と化す。（這の一路を通ず、大衆を謾ずること莫くんば好し。龍頭に踏着す。）痴人猶ほ戽む、夜塘の水。（扶籬模壁。門を挨し戸に傍ふ。衲僧什麼の用處が有らん。株を守つて兎を待つ。）

【評】　雪竇は是れ作家なり、古人の咬み難く、嚼み難く、透り難く、見難く、節用誵訛の處に於て、頌出して、人をして見せしむ、妨げず奇特なることを。雪竇、法眼の關捩子を識得し、又慧超の落處を知る。更らに後人、法眼の言句下に向つて、錯つて解會を作すことを恐る、所以に頌出す。這の僧此の如く問ひ、法眼此の如く答ふ、便ち是れ江國の春風、吹き起らず、鷓鴣啼いて、深花裏に在り、此の兩句、只だ是れ一句。且らく道へ、雪竇の意、什麼の處にかある。

〔忒煞〕甚だに同じ

江西江南、多く兩般の解會を作して道く、江國の春風、吹き起らず、用ひて汝は是れ慧超を頌す、只だ這箇の消息、直饒ひ江國の春風も、也た吹き起らず、鷓鴣啼いて、深花裏に在りとは、用ひて諸方這の話を商量し、浩々地なること、鷓鴣の啼いて、深花裏に在るに似て、相似たるを頌すと。什麼の交渉か有らん、殊に知らず、雪竇の這の兩句、只だ是れ一句なることを。縫無く罅無きことを得んと要せば、明々に汝に向つて道はん、言も也た端、語も也た端、蓋天蓋地。他問ふ、如何なるか是れ佛、法眼曰く、汝は是れ慧超、雪竇道く、江國の春風吹き起らず、鷓鴣啼いて、深花裏に在りと。這裏に向つて、薦得し去らば、以て丹霄に獨歩すべし。汝若し情解を作さば、三生六十劫、雪竇の第三、第四の句、忒煞だ傷慈、人の爲めに一時に說破す。超禪師當下に大悟の處、三級浪高うして魚龍と化するが如し。痴人猶ほ戽む夜塘の水、禹門三級の浪は孟津即ち是れ龍門なり、禹帝鑿て三級と爲す。今三月三、桃花開くの時。天地感ずる所にして、魚有り龍門を透得すれは、頭上に角を生じ、鬃鬣尾を昂て、雲を拏うて去り、跳び得ざる者は、點額して回る。痴人言下に向つて咬嚼す、夜塘の水を戽で、魚を求むるに似て相似たり。殊に知らず、魚已に化して龍と爲ることを。端師翁頌有り、曰く、一文の大光錢、箇の油糍を買ひ得たり、肚裏に喫向し了つて、當下に飢を聞かず。此の頌極めて好し、只だ是れ太だ拙、雪竇、頌し得て極めて巧みなり、鋒を傷け手を犯さず。舊時慶藏主、愛して人に問ふ、如何なるか是れ三級浪高うして、魚、龍と化すと。我は也た必とせざる在り、我且らく汝に問はん、化して龍と作り去る、即今什麼の處にか在る。

〔大光錢〕大光は年號なり、此年間に製した錢のこと。〔慶藏主〕圜悟と同參。

〔世諦流布〕世間にありふ

第八則 翠巖眉毛

垂示曰。會則途中受用、如龍得水、似虎靠山。不會則世諦流布、羝羊觸藩、守株待兎。有時一句、如踞地獅子、有時一句、如金剛王寶劍、有時一句、坐斷天下人舌頭、有時一句、隨波逐浪。若也途中受用、遇知音、別機宜、識休咎、相共證明。若也世諦流布、具一隻眼、可以坐斷十方、壁立千仞、所以道、大用現前、不存軌則。有時將一莖草、作丈六金身用、有時將丈六金身、作一莖草用。且道、憑箇什麼道理、還委悉麼、試擧看。

讀方 垂示に曰く、會する時は則ち途中受用、龍の水を得るが如く、虎の山に靠るに似たり。會せざる時は則ち世諦流布、羝羊藩に觸れ、

れたこと：〔羝羊〕：不自由の形容、進退谷まること。

株を守つて兎を待つ。有時の一句は、踞地獅子の如く、有時の一句は、金剛王寶劍の如く、有時の一句は、天下人の舌頭を坐斷す、有時の一句は、隨波逐浪。若し也た途中受用ならば、知音に遇うて、機宜を別ち、休咎を識つて、相共に證明せん、若し也た世諦流布ならば、一隻眼を具して、以て十方を坐斷して、壁立千仞なるべし、所以に道ふ、大用現前、軌則を存せずと。有時は一莖草を將つて、丈六の金身と作して用ひ、有時は丈六の金身を將つて、一莖草と作して用ふ。且らく道へ、箇の什麼の道理にか憑る、還つて委悉すや、試に擧す看よ。

擧。翠巖夏末、示衆曰、一夏以來、爲兄弟說話開口焉知恁麼。看翠巖眉毛在麼。只贏得眼睛也落地。和鼻孔也失了。入地獄如

箭射一。保福曰、作レ賊人心虛。（灼然。是賊識レ賊。）長慶曰、生也。（舌頭落レ地。將レ錯就レ錯。果然。）雲門曰、關。（走ニ在什麼處一去。天下衲僧跳不出。敗也。）

【讀方】擧す。翠巖夏末に、衆に示して曰く、一夏何來、兄弟の爲めに說話す。（口を開けば焉んで恁麼を知らん。）看よ翠巖が眉毛在りや。（只だ眼睛也た地に落つることを贏ち得たり。鼻孔に和して、也た失し了れり。地獄に入る、箭を射るが如し。）保福曰く、賊と作つて人心虛し〻。（灼然是れ賊賊を識る。）長慶曰く、生ぜり。（舌頭地に落つ。錯を將つて錯に就く。果然。）雲門曰く、關。（什麼の處にか走在し去らん、天下の衲僧跳不出、敗れたり。）

【評】古人晨參暮請有り、翠巖夏末に至つて、却つて恁麼に衆に示す、然れども妨げず、孤峻なることを、妨げず天を驚かし、地

〔一夏〕九十日の禁足の事、これを安居又は夏期と云ふ

〔虛〕虛僞虛無の意にあらず、虛情の義なり、即ち臆病のこと、賊は平日惡事を働く、

を動かすことを。且らく道へ、一大藏教、五千四十八卷、免れず心と說き、性と說き、頓と說き、漸と說くことを。還つて這の消息有りや。一等に見れ恁麼の時節、翠巖中に就いて奇特なり、看よ、他の恁麼に道ふことを。且らく道へ、他の意、什麼の處にか落在す。古人一鉤を垂る〻に、終に虛說せず、須らく是れ箇の道理、人の爲めにする有るべし。人多くは錯つて會して道く、白日青天、無向當の話を說いて、無事に事を生じ、夏末に先づ自ら過を說き、先づ自ら點檢し、別人の他を點檢することを免れ得たり、且喜すらくは沒交涉。這般の見解、之れを胡種族を滅すと謂ふ。歷代の宗師出世し、若し人に垂示せざれば、都て利益なし、箇の什麼をか圖らん。這裏に到つて、見得透せば、方さに古人、耕夫の牛を驅り、飢人の食を奪ふ手段有ることを知らん。如今の人問着すれば、言句下

故に萬事に付け自ら臆する所あり。

〔翠巖〕明州翠巖の令參禪師なり、雪峰の弟子

〔消息〕進退の義、樣子有樣などの意なり。

〔胡種族〕達磨門下の族か、蓋し達磨のことを碧眼の胡僧と云ふ

〔啞々地〕吧々地の誤りならんかとの天桂老師の說、吧々地とは多言饒舌のこと。

に向つて咬嚼し、眉毛上に話計を作す。看よ他屋裏の人、自然に他の行履の處を知ることを。千變萬化、節角聱訛、着々出身の路ありて、便ち能く此の如く、他の與めに酬唱することを。此語若し奇特なければ、雲門、保福、長慶の三人、啞々地に他と酬唱して、什麼をか作さん。保福曰く、賊と作つて、人心虛しゝ、只だ此の語に因つて、適來の許多の情解を說くことを、惹き得たり。且らく道へ、保福の意、作麼生、切に忌む句下に向つて、他の古人を覓むることを汝若し情を生じ、念を起さば、汝が眼睛を換へん。殊に知らず、保福一轉語を下して、翠巖の脚跟を截斷することを。長慶曰く、生ぜりと。人多くは道ふ、長慶、翠巖の脚跟に隨つて轉ず、所以に生ぜりと道ふ、且得すらくば沒交涉。長慶自ら他の見解を出して、生ぜりと道ふことを知らず、各出身の處有り。我且らく儞に問ふ、是れ什麼の處か是れ生の處、一に作家面前に、金剛王寶劍、直下に使用するに似たり。若し能く常流の見解を打破し、得失是非を截斷せば、方さに見ん、長慶、他と酬唱する處を。雲門曰く、關、妨げず奇特なることを、只だ是れ參じ難し。雲門大師、多く一字の禪を以て人に示す、一字の中と雖も、須らく三句を具すべし。看よ他の古人、機に臨んで酬唱すること、自然に今時人と適かに別なることを、此れ乃ち句を下す底の樣子なり。他此の如く道ふと雖も、意決して那裏に在らず、既に那裏に在らず、且らく道へ、什麼の處にか在る、也た須らく子細に自參して始めて得べし。若し是れ明眼の人ならば、天を照し、地を照す底の手脚有つて、直下に八面玲瓏たらん。雪竇、他の一箇の關の字の爲めに、他の三箇を和して、穿つて一串と作して頌出す。

第八則 翠巖眉毛

頌。翠巖示徒、（這老賊。敎壞人家男女。）千古無對。（千箇萬箇。也有一箇半箇分節。）一關字相酬、（不信道。不妨奇特。若是恁麼人方解恁麼道。）失錢遭罪。（飲氣呑聲。雪竇也不少。和聲便打。）潦倒保福、（同行隨伴。猶作這去就。兩個三箇。）抑揚難得（放行把住。誰是同生同死。莫謗他好。且喜沒交涉。）潑々翠巖、（這野狐精。合取口好。）分明是賊。（道着也不妨。捉敗了也。）白圭無玷、（還辨得麼。天下人不知價。）誰辨眞假。（多只是假。山僧從來無眼。碧眼胡僧。）長慶相諳、（是精識精。須是他始得。未得一半在。）眉毛生也。（在什麼處。從頂門上至脚跟下一莖草也無。）

讀方　翠巖徒に示す、（這の老賊。人家の男女を敎壞す。）千古對無し。（千箇萬箇。也た一箇半箇有り。分一節。）關字相酬ゆ、（道ふことを信ぜず。妨げず奇特なることを。若し是れ恁麼の人ならば、方さに恁麼に道ふを解せん。）失錢遭罪。（氣を飲み、聲を呑む。雪竇も也た少なからず。聲に和して便ち打つ。）潦倒たる保福、（同行道伴。猶ほ這の去就を作す。兩箇三箇。）抑揚得難し。（放行把住。誰れか是れ同生同死。他を謗すること莫くんば好し。且喜すらくは沒交涉。）潑々たる翠巖、（這の野狐精。口を合取せば好し。）分明に是れ賊。（道着するも也た妨げず。捉敗し了れり。）白圭玷無し、（還つて辨得すや。天下の人價を知らず。）誰れか眞假を辨ぜん。（多くは只だ是れ假。山僧從來眼無し。碧眼の胡僧。）長慶相諳んず。（是れ精、精を識る。須らく是れ他にして始めて得べし。未だ一半を得ざること在り。）眉毛生ぜり。（什麼の處にか在る。頂門上より脚跟下に至つて、一莖草も也た無し。）

評　雪竇若し恁麼に慈悲にして、頌出して人をして見せしめずん

〔失錢遭罪〕唐時代の法律にて、錢を失うたものは罪を得たりと、即ち馬鹿々々しいこと

〔潦倒〕老者の態度、溫藉の貌、又老羸の義もありと

〔潑々〕多言の貌。

〔田地〕心田なり、精神を田地に譬ふ

〔踞地の獅子〕今將さに飛びかゝらんとする、氣力十分なること。

ば、爭でか善知識と名くることを得ん。古人此の如し、一々皆是れ事已むことを獲ず。蓋し後學、他の言句に著して、轉た情解を生ずるが爲めに、所以に古人の意旨を見ず、如今忽ち出で來つて、禪床を掀倒し、大衆を喝散する有らば、他を怪しむことを得ず。然も此の如くなりと雖も、也た須く實に這の田地に到つて、始めて得べし。雪竇道く、千古對無しと。他只だ道ふ、看よ翠巖が眉毛在りやと、什麼の奇特の處有てか、便ち千古對無き。須らく知るべし、古人一言半句を吐き出し來るも、是れ造次ならず、須らく是れ乾坤を定むる底の眼有つて、始めて得べし。金剛王寶劒の如く、踞地の獅子の如く、擊石火の如く、閃電光に似たり。若し是れ頂門に眼を具せずんば、爭でか能く他の古人の落處を見ん。這箇の示衆、直に得たり千古對無きことを、德山の棒、臨濟の喝に過ぎたり。且く道

道へ、雪竇爲人の意什麼の處にか在る、汝且らく作麼生か會せん。他の千古對無しと道ふことを。關の字相酬ふ、失錢遭罪、這箇の意如何。直饒ひ是れ透關底の眼を具するも、這裏に到つて、也た須らく子細にして始めて得べし。且らく道へ、是れ翠巖の失錢遭罪か、是れ雪竇の失錢遭罪か、是れ雲門の失錢遭罪か。汝若し透得せば、汝に許す具眼なることを。潦倒たる保福、抑揚得難しと、自己を抑するか、古人を揚するか。且らく道へ、保福什麼の處か是れ抑、什麼の處か是れ揚に在る。澇々たる翠巖、分明に是れ賊、且らく道へ、他什麼をか偸み來る。雪竇却つて道ふ、是れ賊と、切に忌む、他の語脉に隨つて轉却することを。這裏に到つて、須らく是れ自ら操持有つて始めて得べし。白圭玷無し、翠巖の大に白圭に似て相似たり、更らに些の瑕翳無きことを頌す。誰れか眞假を辨ず、謂つべし人の

辨得する有ること罕なりと。雪竇大才あり、以所に頭より尾に至つて、一串に穿却す。末後却つて方さに道はん、長慶相暗んず、眉毛生ぜりと。且らく道へ、生じて也た什麼の處にか在る、急に眼を著けて看よ。

第九則　趙州四門

垂示曰。明鏡當臺、姸醜自辨、鏌鎁有手、殺活臨時。漢去胡來、胡來漢去、死中得活、活中得死。且道、到這裏、又作麼生。若無透關底眼轉身處、到這裏、灼然不奈何。且道、如何是透關底眼、轉身處。試擧看。

讀方　垂示に曰く。明鏡臺に當り、姸醜自ら辨ず。鏌鎁手に在り、殺活時に臨む。漢去り胡來り、胡來り漢去る、死中に活を得、活中に死を得。且らく道へ、這裏に到つて、又作麼生。若し透關底の眼、轉身の處無くんば、這裏に到つて灼然として奈何ともせず。且らく道へ、如何が是れ透關底の眼、轉身の處ぞ。試みに擧す看よ。

擧。僧問趙州、如何是趙州。河北河南、總不著。爛泥裏有刺。不在河南、正在河北。州曰、東門西門南門北門。開也。相罵饒汝接觜、相唾饒汝潑水。見成公案。還見麼。便打。

讀方　擧す。僧、趙州に問ふ、如何なるか是れ趙州。（河北河南、總に說不着。爛泥裏に刺有り。河南に在らずんば、正に河北に在らん。）趙州曰く、東門西門南門北門。（開也。相罵ることは汝に饒し、觜を接す、相唾することは汝に饒し、水を潑ぐ。見成公案。還つて見るや。便ち打つ。）

〔鏌鎁〕寶劍の名。〔死中：：〕自由自在の境界を云ふ
〔河南河北〕一向に解らぬこと。

〔喃々地〕饒舌すること。

【評】大凡そ參禪問道は、自己を究明す。切に忌む、言句を揀擇することを。何が故ぞ、見ずや趙州擧して道く、至道無難、唯嫌揀擇と。又見ずや雲門道く、如今の禪和子、三箇五箇頭を聚めて、口、喃々地にして、便ち道く、這箇は是れ上才の語句、那箇は是れ身處に就いて打出する語と。知らず古人方便門の中、初機後學の未だ心地を明めず、未だ本性を見ざるが爲めに、已むことを得ずして、箇の方便の語句を立つることを。祖師西來、單傳心印、直指人心、見性成佛の如きは、那裏にか此の如く葛藤せん。須らく是れ語言を斬斷して、格外に見諦して、透脫得し去るべし。謂つべし、龍の水を得るが如く、虎の山に靠るに似たりと。久參の先德、見て未だ透らず、透つて未だ明めざる有り、之れを請益と謂ふ。若し是れ見得透して請益せば、却つて語句上に周旋して、凝滯あること無きことを。

〔汾陽〕太原の人、諱は善昭、姓は兪氏、首山に法を嗣ぐ、七十餘員の善知識なり。

久參の請益、賊の與めに梯を過す、其の實は此の事言句上に在らず。所以に雲門曰く、此の事若し言句上に在らば、三乘十二分教、豈に是れ言句無けんや、何ぞ達磨の西來を須んと。汾陽の十八問の中に、此の問之れを驗主問と謂ひ、亦之れを探拔問と謂ふ。這の僧箇の問頭を致す、也た妨げず奇特なることを。若し是れ趙州にあらずんば、也た他に秪對し難し。這の僧問ふ、如何なるか是れ趙州と。趙州は是れ本分の作家、便ち向つて道く、東門西門南門北門と。僧曰く、某甲這箇の趙州を問はず。州曰く、汝那箇の趙州をか問ふ。後人喚んで、無事禪、人を賺すこと少なからずと作す。何故ぞ、他、趙州に問ひ、州答へて云く、東門西門南門北門と。所以に只だ他の趙州を答ふと、汝恁麼に會せは、三家村裏の漢も、更らに是れ佛法を會し去らん。只だ這れ便ち是れ佛法を破滅す、魚目を持つて、明珠に

〔指南〕教導すること、指南車の故事より出づ。

比況するが如し、似ることは則ち似るも、是なることは則ち是ならず。山僧道く、河南に在らずんば、正に河北に在らんと。且らく道へ、是れ有事か、是れ無事か、也た須らく是れ子細にして始めて得べし。遠錄公曰く、末後の一句、始めて牢關に到る、指南の旨、言詮に在らす、十日一風五日一雨、邦を安んじ業を樂しみ、腹を皷して謳歌す、之れを太平の時節と謂ひ、之れを無事と謂ふ。是れ拍盲にして便ち無事と道ふにあらず、須らく是れ關捩子を透過し、荊棘林を出得して、淨躶々、赤灑々たるべし。依然として平常の人に似ば、汝に由つて有事も也た得たり、無事も也た得たり、但只茶に遇うては茶を喫し、飯に遇うては飯を喫すと。此れは是れ大妄語、之れを未得謂得、未證謂證と謂ふ。元來曾て參得透せず、人の心と說き、性と說き、玄と說き、妙と說くを見る時は、便ち道く、只だ

〔古人〕永嘉の眞覺大師のこと。

是れ狂言なり、本來無事と。謂つべし一盲衆盲を引くと。殊に知らず、祖師未だ來らざる時、那裏にか天を喚んで地と作し、山を喚んで水と作し來る。什麼の爲めにか、祖師更らに西來するや、諸方の陞堂入室、箇の什麼をか說く。盡く是れ情識計較、若し是れ情識計較の情盡れば、方さに見得透せん。若し見得透せば、舊に依つて天は是れ天、地は是れ地、山は是れ山、水は是れ水。古人道く、心は是れ根、法は是れ塵、兩種は猶ほ鏡上の痕の如しと。這箇の田地に到ては、自然に淨躶々、赤灑々なり、若し極則理論せば、未だ是れ安穩の處にあらざること在らん。這裏に到つて、人多くは錯會して、無事界裏に打在して、佛も也た禮せず、香も也た燒かず、似ることは則ち也た似たり、爭何せん脫體に不是なることを。纔かに問著すれば、却つて是れ極則に相似たり、纔かに搊著すれば七花八裂、空

〔大王〕趙王のこと

〔南禪師〕黄龍の慧南禪師のこと。

腹高心の處に坐在す。臈月三十日に到るに及んで、手を換へて胸を槌つとも、已に是れ遲れ了れり。這の僧恁麼に問ひ、趙州恁麼に答ふ、且らく道へ、作麼生か模索せん。恁麼も也た得ず、不恁麼も也た得ず、畢竟如何。這の些子是れ難處、所以に雪竇拈出し來つて、當面に人に示す。趙州一日坐する次で、侍者報じて曰く、大王來也。趙州矍然として云く、大王萬福。侍者曰く、未到和尙。州曰く、又來也と道ふと。南禪師拈じて曰く、侍者は只だ客を報ずるを知つて、身の帝鄕に在ることを知らず、趙州草に入つて人を求む、覺えず渾身泥水なることを、這の些子の實處、還つて知るや。雪竇の頌を看取せよ。

頌。句裏呈レ機、劈面來。響。魚行水濁。莫レ謗二趙州一好。爍迦羅眼、絕二

〔爍迦羅眼〕堅固眼のこと

纎埃。撒レ沙撒レ土。莫レ帶二累趙州一。撈レ天模レ地作二什麼一。東西南北、門相對。開也。那裏有二許多門一。背二却趙州城一。向二什麼處一去。無レ限輪鎚、擊不レ開。自是汝輪鎚不レ到。開也。

讀方 句裏に機を呈して、劈面に來る。（響。魚行けば水濁る。趙州を謗すること莫くんば好し。）爍迦羅眼、纎埃を絕す。（沙を撒き土を撒く。趙州を帶累すること莫れ。天に撈し地に模して什麼とか作さん。）東西南北門相對す。（開也、那裏にか許多の門有らん。趙州城を背却して、什麼の處に向つてか去る。）限り無き輪鎚、擊てども開けず。（自ら是れ汝が輪鎚到らず。開也。）

【評】趙州機に臨んで、一々金剛王寶劍に似たり。擬議せば即ち汝が頭を截却せん、往々に更らに當面に、汝が眼睛を換却す。這の僧も也た敢て虎鬚を捋で、箇の問頭を致す、大に無事に事を生ずるに似

〔特地〕殊更にと云ふこと。〔安排〕安置排列なり、具合よくすること。

〔一絲毫〕毫とは毛端のこと、即ち微細なること。

たり、爭奈せん句中に機有ることを。他既に機を呈して來る、趙州也た他の問頭に辜負せず、所以に亦機を呈して答ふ。是れ他特地に此の如くならず、蓋し透底の人なるが爲めに、自然に轍に合す、一に安排し來るに相似たり。見ずや一外道あり、手に雀兒を握つて、來つて世尊に問うて曰く、且らく道へ、某甲が手中の雀兒、是れ死か、是れ活か。世尊遂に門閫に騎りて曰く、汝道へ、我出るか入るか。(一本には、世尊拳頭を竪起して曰く、開くか合するか。)外道無語、遂に禮拜す。此話便ち這公案に似たり、古人自ら是れ血脈不斷、所以に道ふ、問は答處に在り、答は問處に在りと。雪竇此の如く見得透して便ち道ふ、句裏に機を呈し、劈面に來ると。句裏に機有るは、兩意を帶するが如く、又人を問ふに似、又境を問ふに似て相似たり。趙州、一絲毫を移易せず、便ち他に向つて道ふ、東門西門南門北門と、爍迦羅眼、纎埃を絶す。此れは趙州の人境倶に奪ふて、句裏に向つて、機を呈して他の與に答ふるを頌す、此れ之れを機有り境有りと云ふ。纔かに轉ずれば、便ち他の膽を照破す、若し此の如くならずんば、他の問頭を塞ぎ難し。爍迦羅眼とは是れ梵語、此には堅固眼と云ひ、亦は金剛眼と云ふ、照見無碍、千里明らかに、秋毫を察するのみにあらず、亦乃ち邪を定め正を決し、得失を辨じ、機宜を別ち、休咎を識る。雪竇曰く、東西南北門相對す、限り無き輪鎚撃てども開けずと。既に是れ限り無き輪鎚、何故ぞ撃てども開けざる、自ら是れ雪竇の見處此の如し。汝諸人又作麼生か、此門の開くことを得去らん。請ふ參詳して看よ。

第十則　睦州掠虛

垂示曰、恁麽々々、不恁麽々々、若論戰也、箇々立在轉處。所以道、若向上轉去、直得釋迦彌勒、文殊普賢、千聖萬聖、天下宗師、普皆飮氣吞聲。若向下轉去、醯雞蠛蠓、蠢動含靈、一々放大光明、一々壁立萬仞。儻或不上不下、又作麽生商量。有條攀條、無條攀例。試擧看。

讀方　垂示に曰く。什麽々々、不什麽々々、若し戰を論せば、箇々轉處に立在す。所以に道ふ、若し向上に轉じ去らば、直に得たり釋迦彌勒、文殊普賢、千聖萬聖、天下の宗師、普く皆氣を飮み聲を吞むことを。若し向下に轉じ去れば、醯雞蠛蠓、蠢動含靈、一々大光明を放ち、一々壁立萬仞ならん。儻し或は不上不下ならば、又作麽か商量せん。條有れば條を攀ぢ、條無ければ例を攀づ。試みに擧す看よ。

（箇々）一つ〳〵のこと。
（醯雞）鹽辛や醬油樽などにワイて居る虫。
（蠛蠓）細かな虫のこと。
（儻）若しに同じ。

擧。睦州問僧、近離甚處。探竿影草。僧便喝。作家禪客。且莫詐明頭。也解恁麽去。州曰、老僧被汝一喝。陷虎之機。猱人作麽。僧又喝。看取頭角。似則似。是則未是。只恐龍頭蛇尾。州曰、三喝四喝後作麽生。逆水之波未曾有一人出得頭。入那裏去。僧無語。果然摸索不着。州便打曰、若使睦州盡令而行、盡大地草木、悉斬爲三段。這掠虛頭漢。放過一著。落在第二。

讀方　擧す。睦州、僧に問ふ、近離甚の處ぞ。（探竿影草。）僧便ち喝す。（作家の禪客。且く詐明頭なること莫れ。也た作麽に解し去ることを。）州曰く、老僧汝に一喝せらる。（陷虎の機、人を猱して作麽かせん。）

（近離）近頃と云ふに同じ。
（甚）何に同じ。

〔掠虛頭〕躁念の意

僧又喝す。（頭角を看取せよ。似たることは則ち似たり、是なることは則ち未だ是ならず。只だ恐らくは龍頭蛇尾ならん。）州曰く、三喝四喝の後ち作麼生。（逆水の波、未だ曾て一人の出得頭なる有らず。那裏にか入り去る。）僧無語。（果然として模索不著。）州便ち打つて曰く。（若し睦州をして令を盡して行ぜしめば、盡大地の草木、悉く斬つて三段と爲さん。）這の掠虛頭の漢。（一着を放過す。第二に落在す。）

【評】大凡そ宗教を扶竪せんには、須らく是れ本分の宗師の眼目あり、本分の宗師の作用有るべし。睦州の機鋒、閃電光の如くに相似たり。愛して座主を勘す、尋常一言半句を出すに、箇の荊棘叢に似て相似たり、脚手を著け得ず。他纔かに僧の來るを見て、便ち道く、見成公案、汝に三十棒を放すと。又僧を見て曰く、上座。僧首を回す。

〔擔板漢〕一方のみを見て外を知らぬこと、即ち融通のきかぬこと。

〔鼻孔を穿却す〕捕へて動かさぬこと。

州曰く、擔板漢。又衆に示して曰く、未だ箇の入頭の處有らずんば、須く箇の入頭の處を得べし、既に箇の入頭の處を得ば、老僧に辜負し得ずと。睦州人の爲めにすること、多く此の如し、這の僧也た善く雕琢す、爭奈せん龍頭蛇尾なることを。當時若し是れ睦州にあらずんば、他に惑亂一場せられん。只だ他、近離什麼の處ぞと問ふ、僧便ち喝するが如きんば、且らく道へ、他の意作麼生。這の老漢也た忙せず、緩々地に他に向つて道ふ、老僧汝に一喝せらると。他の話を領して、一邊に在るに似たり、又他を驗するに似て相似たり、身を斜にして、他を如何と看よ。這の僧又喝す、似たることは相似たり、是なることは則ち未だ是ならず。這の老僧、鼻孔を穿却し來れ、遂ひに問うて曰く、三喝四喝の後ち作麼生。這の僧果然として無語。州便ち打つて曰く、這の掠虛頭の漢と。人を驗する端的

の處、口を下せば便ち知音なるに。可惜許、這の僧無語、睦州、掠虛頭の漢と道ふことを惹き得たり。若し是れ諸人ならば、睦州に三喝四喝の後ち作麼生と道はれて、合に作麼生か祗對して、他に掠虛頭の漢と道はるゝことを免れ得ん。這裏若し是れ存亡を識り、休咎を別ち、脚、實地を踏む漢ならば、誰れか三喝四喝の後ち作麼生と云ふことを管せん。只だ這僧語無きが爲めに、這の老漢に、便ち欵に據りて、案に結せらる。雪竇の頌出するを聽取せよ。

頌。兩喝與三喝、雷聲浩大雨點全無。自古至今罕有人恁麼。作者知機變。若不是作家爭驗得。只恐不恁麼。若謂騎虎頭、団。瞎漢。虎頭如何騎。多少人恁麼會。也有人作這見解。二倶成瞎漢。親言出親口。何止兩箇。自領出去。誰瞎漢。敎誰辨。賴有末後句。泊乎賺殺人。拈來天下與人看。看即不無。覷着即瞎。闍梨若着眼看則兩手掊空。恁麼麼且道是第幾機。

〔団〕力を出す時に自然に發する聲。〔親言〕親は慈悲なり。

讀方　兩喝と三喝と。(雷聲浩大、雨點全く無し。古より今に至るまで、人の恁麼なる有ること罕なり。)作者機變を知る。(若し是れ作家にあらずんば、爭でか驗得せん。只だ恐らくは不恁麼ならんことを。)若し虎頭に騎ると謂はゞ、(団。瞎漢。虎頭如何か騎らん。多少の人恁麼に會す。也た人有りて這の見解を作す。)二り倶に瞎漢と成らん。(親言は親口より出づ。何ぞ止だ兩箇のみならん。自領出去。)誰れか瞎漢。(誰をして辨ぜしめん。賴に末後の句有り。泊乎人を賺殺す。)拈じ來つて天下、人に與へて看せしむ。(看ることは即ち無きにあらず、覷着せば即ち瞎せん。闍梨若し眼を着けて看ば、則ち兩手に空を掊るならん。恁麼に舉す、且らく道へ、是れ第幾機ぞ。)

〔興化〕存奬禪師のこと。

〔紫羅帳裏云々〕方語に尊貴の中に向つて奇特玄妙を説かぬこと。

〔黄龍の心和尚〕死心和尚のことにして悟新に嗣法すと。

〔有般〕俗にアチラコチラ那般這般と云ふ如く般に意味

【評】雪竇、妨げず爲人の處有ることを、若し是れ作者にあらずんば、只だ是れ胡喝亂喝せん。所以に古人道く、有時の一喝は、一喝の用を作さず、有時の一喝は、却つて一喝の用を作す、有時の一喝は、踞地の獅子の如く、有時の一喝は金剛王寶劍の如し。興化道く、我、汝諸人を見るに、東廊下にも也た喝し、西廊下にも也た喝す、且らく胡喝亂喝すること莫れ。直饒ひ興化を喝し得て、三十三天に上つて、却つて撲下來して、氣息一點も也た無きとも、我が甦醒し起き來るを待つて、汝に向つて未在と道はん。何が故ぞ、興化未だ曾て紫羅帳裏に向つて、眞珠を撒して、汝諸人に與へず、只管に胡喝亂喝して、什麼とか作さん。臨濟道く、我聞く汝等、總に我が喝を學すと。我且らく汝に問はん、東堂に僧有りて出で、西堂に僧有りて出で、兩箇一齊に喝を下さば、那箇か是れ賓、那箇か是れ主、汝若し賓主を分ち得ずんば、已後老僧を學ぶことを得ずと。所以に雪竇頌して道く、作者機變を知ると。這の僧、睦州に收せらると雖も、他却つて機變を知る處有り。且らく道へ、什麼の處か、是れ這の僧機變を知る處ぞ。鹿門の知禪師、這の僧を點じて曰く、法を識る者は懼ると、巖頭道く、若し戰を論ぜば、箇々轉處に立在すと。黄龍の心和尚道く、窮する時は則ち變じ、變ずる時は則ち通ずと。這箇の些子、是れ祖師、天下人の舌頭を坐斷する處なり、汝若し機變を識つて擧着せば、便ち落處を知らん。有般の漢曰く、他の三喝四喝と道ふことを管して、什麼か作さん、只管に喝し將ち去らん、什麼の三十二十喝とか説かん、喝して彌勒佛の下生に到る、之れを虎頭に騎ると謂ふと。若し恁麼の知見ならば、睦州を識らざることは、則ち故に是なり、這の僧を見んと要すとも、太だ遠きに在らん、

なし。

〔千處萬處〕ドコもカシコも到る處と云ふこと。

人の虎頭に騎るが如きは、須らく是れ手中に力あり、兼ねて轉變有つて始めて得べし。雪竇道く、若し恁麼ならば、二り倶に、瞎漢と成ると、雪竇、天に倚り、長劍凛々たる、全威に似たり。若し雪竇の意を會得せば、自然に千處萬處、一時に會して、便ち地の雪竇後面に頌することを見る。只だ是れ注脚を下して、又道く、誰れか瞎漢と。且らく道へ、是れ賓家瞎するか、是れ主家瞎するか、是れ賓主一時に瞎すること莫しや。拈じ來りて天下、人に與へて看せしむ、此れは是れ活處、雪竇一時に頌し了れり。什麼としてか却つて道ふ、拈じ來つて天下、人に與へて看せしむと。且らく道へ、作麼生か看ん。開眼も也た着け、合眼も也た着く、還つて人免れ得る有りや。

佛果圜悟禪師碧巖錄第一卷　終

夾山無礙禪師降魔表

慧　芳　附　刊

臣聞く、三乘路廣うして、法界涯り無く、知海晏清にして、十方安泰なり。時に魔軍有り、競ひ起つて、心田を侵撓す、六賊既に強くして、心王驚動す。朝に百恠を生じ、暮に千邪を起す。眞如を撼惑し、法體を困勞す。菩提の道、路隔絶して通ぜず。三寶を傷殘す。塵勞無爲の珠玉、悉く偸將せられ、大藏の法財、皆な劫奪せらる。臣乃ち斯日を翳し、欲火天に亘り、法城を飄蕩し、聖境を焚燒す。六波羅密と商量しの如き暴亂を見て、佛法遂に存し難きを恐れ、六波羅密と商量して、同じく剪滅せんとす。性空を遣して、密使と爲して、魔軍を聽探するに、見に今屯して五蘊山中に在りて、八萬四千衆有り。既に體勢を知る、計、刹那に在り。遂に十八界の雄兵を點じて、並に體空を立て丶號と爲す、人々無礙の力あり、箇々勇健の能を懷く。

直心、見性の功を爲し、一正、百邪の亂を去る。堅固の甲を擐ね、三昧の鎗を執る、智箭禪弓、光明の慧劍、大乘の門中に向つて、寂滅山內に安營す。三明嶺上に旗を開き、八正路邊に排布す。大覺の性を遣して、捉生の將と爲し、四方に游歷して、妄想の踪を搜求し、無明の蹟を抄截して、復た慈悲王をして、三毒の塞を破り、忍辱の帥をして、嗔怒の城を伐ち、精進の軍をして、傲慢の妖を除き、喜捨の士をして、慳貪の賊を捉へしむ。逡巡として魔軍大いに起り、殺氣天を衝く。臣乃ち摩訶を部領して、一時に齊しく入る。爾の時に當つて、眼、色を觀ぜず、耳、聲を聽かず、鼻、香を嗅かず、舌、味を了せず、身、觸を受けず、意、攀緣せず。志を一にして向前して、念々退かず、倏忽として魔軍大に敗れ、六賊全く輸く。殺戮無邊にして、掃除蕩盡す。妄想を生擒し、無明を活捉し、領して涅槃城中に向つて慧劍を以て、斬つて三段と爲す。煩惱の林、當時に摧折し、人我の山、化して微塵と作る。痴愛の綱、智火に焚燒せられ、邪見の林、慧風に吹き竭さる。茲に因つて三明再び朗らかに、四智重ねて圓かにして、內外瑕無く、廓然として淸淨なり。心王は懽喜の殿に坐し、眞如は解脫の樓に登り、自性は無碍の堂に遊び、三身は法空の座に踞す。茲れより法界寧靜にして、永く囂塵を絕し、共に生死の河を渡り、齊しく菩提の岸に到る。魔軍既に退く、合に具さに奏聞す。

夾山無礙禪師降魔表

〔指呼〕主人が下男下女を追ひ使ふ如きこと。〔什麼人〕何人に同じ。

佛果圜悟禪師碧巖錄第二卷

第十一則　黃蘗噇酒糟

垂示曰。佛祖大機、全歸掌握。人天命脈、悉受指呼。等閑一句一言、驚群動衆。一機一境、打鎖敲枷。接向上機、提向上事。且道、什麼人曾恁麼來。還有知落處麼、試擧看。

讀方　垂示に曰く。佛祖の大機、全く掌握に歸し、人天の命脈、悉く指呼を受く。等閑の一句一言、群を驚かし衆を動かす。一機一境、鎖を打し枷を敲く。向上の機を接し、向上の事を提ぐ。且らく道へ、什麼人か曾て恁麼にし來る、還て落處を知ること有りや。試みに擧す看よ。

〔黃蘗〕名は希運、達磨大師十世の孫、百丈大智禪師に嗣法す。

擧。黃蘗示衆曰（打水碍盆。一口吞盡。天下衲僧跳不出。）汝等諸人、盡是噇酒糟漢、恁麼行脚（道著。踏破草鞋。掀天搖地。）何處有今日（用今日作什麼。不妨驚群動衆。）還知大唐國裏無禪師麼。（老僧不會。一口吞盡。也是雲居羅漢。）時有僧出曰、只如諸方匡徒領衆、又作麼生。（也好與一拶。臨機不得不恁麼。）蘗曰、不道無禪、只是無師。（直得分疎不下。瓦解氷消。龍頭蛇尾漢。）

讀方　擧す。黃蘗衆に示して曰く、（水を打し盆を碍ゆ。一口に吞盡す。天下の衲僧、跳不出。）汝等諸人、盡く是れ噇酒糟の漢、恁麼に行脚せば、（道着す。草鞋を踏破す。天を掀し地を動す。）何れの處にか今日有らん。（今日を用ひて什麼と作す。妨げず群を驚かし、衆を

（行脚）身を雲水に託し、東西に參師問法すること。

（屬）逢ふなり。

動かすことを。）還つて大唐國裏に、禪師無きことを知るや。（老僧不會。一口に呑盡す。也た是れ雲居の羅漢。）時に僧有り、出で、曰く、只だ諸方徒を匡し、衆を領するが如くんば又作麼生。（也た好し一拶を與ふるに。機に臨んで不恁麼なることを得ず。）蘗曰く、禪無しとは道はず、只だ是れ師無し。（直に得たり、分疎不下なることを。瓦解氷消。龍頭蛇尾の漢。）

【評】黃蘗身の長け七尺、額に圓珠あり、天性禪を會す。師昔し天台に遊び、路に一僧に逢ふ、之れと談笑すること、故相識の如し。熟々之れを視れば、目光人を射て、頗る異相有り。乃ち偕に行く、溪水の暴漲するに屬て、乃ち杖を植て、笠を損して止る。其の僧、師を牽ゐて同じく渡らんとす。師曰く、請ふ渡れ。彼れ即ち衣を褰げ、波を蹈むこと平地を履むが如く、回顧して曰く、渡來々々と。

（大乘）乘は宗乘の乘に同じ、大なる教、即ち發達したる佛教のこと、小乘に對して云ふ

（馬祖）道一禪師。

師咄して曰く、這の自了の漢、吾早く捏怪なることを知らば、當さに汝が脛を斫るべきにと。其の僧嘆じて曰く、眞に是れ大乘の法器と、言ひ訖て見えず。初め百丈に到る、丈問うて曰く、巍々堂々として、什麼の處よりか來る。蘗曰く、巍々堂々として、嶺中より來る。丈曰く、何の事の爲めぞ。蘗曰く、別事の爲めならず。百丈深く之れを器とす。次の日百丈を辭す。丈曰く、什麼の處にか去る。蘗曰く。江西に馬大師を禮拜し去らん。丈曰く、馬大師已に遷化し去れり。儞道へ。黃蘗恁麼に問ふ、是れ知り來りて問ふか、是れ知り來らずして問ふか。却て曰く、某甲特地に去て、禮拜せんとすと。福緣淺薄にして、一見するに及ばず、未審し平日、何の言句か有らん、願くは擧示を聞かん。丈遂に再び馬祖に參ずるの因緣を擧す。祖、我が來るを見て、便ち拂子を竪起す。我問うて曰く、此の用に

〔拂子〕昔佛蚊虻を拂はんが爲めに弟子に拂子を持することを許す、即ち棒の先きに毛をつけたる者、後禪家の一具となれり

即するか、此の用を離するか。祖遂に拂子を禪床の角に掛けて良久す。祖却て我に問ふ、汝已後兩片皮を皷して、如何か人の爲めにせん。我拂子を取て竪起す。祖曰く、此の用に即するか、此の用を離するか。我拂子を將て、禪床の角に掛く。祖振威一喝す。我當時直に得たり、三日聾することを。黃蘗覺えず、悚然として舌を吐く。丈曰く、子已後、馬大師に承嗣すること莫しや。蘗曰く、然らず、今日師、擧するに因て、馬大師の大機大用を見ることを得たり、若し馬師に承嗣せば、他日已後、我が兒孫を喪せん。丈曰く、如是如是。見よ師と齊しき時は、師の半德を減ず、智師に過ぎて、方さに傳授するに堪へたり、子が今の見處、宛も超師の作有り。諸人且らく道へ、黃蘗恁麼に問ふ、是れ知て故に問ふか、是れ知らずして問ふか、須らく是れ親しく、他家の父子行履の處を見て、始めて得べ

〔裴相國〕名は休、字は公美、黃蘗の嗣たり。

〔頌〕古則公案を謳つたる詩偈のこと、又は頌古と云ふ。

し。黃蘗一日、又百丈に問ふ、從上の宗乘、如何か指示せん。百丈良久す。蘗曰く、後人をして斷絕し去らしむべからず。百丈曰く、將さに謂へり、汝は是れ箇の人と、遂に乃ち起て方丈に入る。蘗裴相國と、方外の友たり。裴、宛陵を鎭す。師を請して郡に至らしむ、所解一編を以て師に示す。師接して座に置いて、略披閱せず、良久して乃ち曰く、會すや。裴曰く、不會。蘗曰く、若し便ち恁麼に會得せば、猶ほ些子に較れり、若し也た紙墨に形さば、何の處にか更らに我が宗有らん。裴乃ち頌を以て贊して曰く、大士、心印を傳へてより、額に圓珠あり、七尺の身、錫を掛けて十年蜀水に棲む、盃を浮べて今日、漳濱を渡る、八千の龍象、高步に隨ひ、萬里の香花、勝緣を結ぶ、師に事へて、弟子と爲らんことを擬し欲す、知らず法を以て、何人にか付せん。師亦喜色無し、曰く、心は大海の、邊

第十一則　黃蘗噇酒糟

際無きが如し。口は紅蓮を吐いて、病身を養ふ。自ら一双、無事の手有り。曾て等閑の、人に祗揖せず。蘗住して後ち、機鋒峭峻、臨濟會下に在り、睦州首座と爲りて、問うて曰く、此に在ること多時、何ぞ去て問話せざる。濟曰く、某甲をして什麼の話を問はしめてか即ち得てん。座曰く、何ぞ去て、如何なるか是れ佛法的々の大意と問はざる。濟便ち去て問ふ、三度打出せらる。濟座を辭して曰く、首座の三番去て問はしむることを蒙て、打出せらる、恐らくは因緣、這裏に在らざらんことを、暫且く山を下らん、座曰く、子若し去らば、須らく和尙を辭し去て、方さに可なるべし。首座預じめ去て、蘗に白して曰く、問話の上座、甚だ不可得なり、和尙何ぞ穿鑿して、一株樹と成し去らしめ、後人の與めに、陰凉と爲さざる。蘗曰く、吾已に知れり。濟來り辭す。蘗曰く、汝別處に向つて去ることを得

〔臨濟〕諱は義玄、姓は刑氏、曹州華南の人、黄蘗に學び、大愚に參ず、後ちに臨濟宗の一派を生ず、滅後惠照禪師と諡す

ざれ、直に高安灘頭に向て、大愚に見え去れ。濟大愚に到て、遂に前話を擧す、知らず某甲、過什麼の處にか在る。愚曰く、蘗與麼に老婆心切、汝が爲にするに徹困なり、更らに何の有過無過とか說かん。濟忽然として大悟して曰く、黃蘗の佛法、多子無しと。大愚搊住して曰く、汝適來又道ふ、有過と、今却て道ふ、佛法に多子無しと。濟大愚の脇下に於て、築くこと三拳、愚拓開して曰く、黃蘗我が事に干るに非らず。一日蘗衆に示して曰く、牛頭の融大師、橫說竪說、猶ほ未だ向上の關捩子を知らざること在り。是の時石頭馬祖下の禪和子、浩々地に禪を說き道を說く。他何が故に、却て與麼に道ふ。所以に衆に示して曰く、汝等諸人、盡く是れ噇酒糟の漢、恁麼に行脚せば、笑を人に取らん、但だ八百一千人の處を見て便ち去る、只だ熱鬧を圖るべからず。可の中總に、汝が此の如く容易なる

第十一則　黃蘗噇酒糟

〔高安〕瑞州高安縣のこと。

〔石頭〕希遷禪師、青原行思に嗣法す

〔噇酒糟〕噇は喫なり酒糟食ひと云ふ

が如し。

〔便ち〕即ちに同じ

〔禪〕梵語譯して靜慮と云ふ即ち靜坐觀察工夫すること

に似ば、何れの處にか、更らに今日の事有らん。唐の時愛して人を罵て、噇酒糟の漢と作す。人多く喚んで、黃蘗人を罵ると作す、具眼の者は、自ら他の落處を見ん。大意一鉤を垂れて、人の問を釣る。衆中に身命を惜しまざる底の禪和有りて、便ち恁麼に衆を出でて、他に問ふことを解して道ふ、只だ諸方、徒を匡し衆を領するが如きんは又作麼生と。也た好し一摑するに、這の老漢果然として、分疎不下、便ち却て漏逗して曰く、禪無しとは道はず、只だ是れ師無しと。且らく道へ、意什麼の處にか在る。他從上の宗旨、有時は擒、有時は縱、有時は殺、有時は活、有時は放、有時は收、敢へて諸人に問ふ、什麼生か是れ禪中の師。山僧恁麼に道ふとも、已に是れ頭を和して、沒却し了れり、諸人の鼻孔什麼の處にか在る。良久して曰く　穿却し了れり。

〔雲居の羅漢〕大層鼻が高いぞと云ふことにて、高慢と云はんが如し。

〔死蝦蟆〕

頌。凜々孤風、不自誇、猶自不知有。也是雲居羅漢。端居寰海、定龍蛇。也要別緇素。也要皂白分明。大中天子、曾輕觸、說什麼大中天子。任大也須從地起。更高爭奈有天何。三度親、遭弄爪牙。死蝦蟆。多口作什麼。未爲奇特。猶是小機巧。若是大機大用現前、盡十方世界、乃至山河大地、盡在黃蘗處乞命。

讀方　凜々たる孤風、自ら誇らず、(猶ほ自ら有ることを知らず。也た是れ雲居の羅漢。)寰海に端居して、龍蛇を定む。(也た緇素を別たんことを要す。也た皂白分明ならんことを要す。)大中天子、曾て輕觸す、(什麼の大中天子とか說かん。任ひ大なるも、也た須らく地より起つべし。更らに高きも、天有ることを爭奈何。)三度親しく、爪牙を弄するに遭ふ。(死蝦蟆。多口にして什麼か作さん。未だ奇特と

價値なく役に立たぬもの、こと。

〈他底〉他は彼に同じ、底の字は助字なり意味なし。

〈古人〉管子を指す

爲さず、猶ほ是れ小機巧。若し是れ大機大用現前せば、盡十方世界、乃至山河大地、盡く黃蘗の處に在て命を乞はん。）

【評】　雪竇の此の一頌、一へに黃蘗の眞贊に似て、相似たり。人却て眞贊の會を作すを得ず、他底の句下、便ち出身の處有り、分明に道ふ、凜々たる孤風、自ら誇らずと。黃蘗恁麼に衆に示す、且つ是れ人と爭ひ、我を負み、自ら逞うし、自ら誇るにあらず。若し這箇の消息を會せば、七縱八橫なるに一任す。有時は孤峯頂に獨立し、有時は閙市裏に身を橫ふ、豈に一隅を僻守す可けんや。愈々捨つれば愈々歇きず、愈々尋ぬれは愈々見えず、愈々擔荷すれば愈々沒溺す。古人道く、翼無くして天下に飛び、名有りて世間に傳ふと。情を盡して、佛法の道理、玄妙奇特を捨却して、一時に放下せば、却て些子に較れり、自然に觸處に現成せん。雪竇道く、寰海に端居して、龍蛇を定むと。是れ龍、是れ蛇、門に入り來れば、便ち驗取す、之れを龍蛇を定むるの眼、虎兒を擒ふるの機と謂ふ。雪竇又道ふ、龍蛇を定むる眼、何ぞ正しからん、虎兒を擒ふるの機、全からずと。又道ふ、大中天子曾て輕觸す、三度親しく、爪牙を弄するに遭ふ。黃蘗豈に是れ、如今の惡脚手なるのみならんや。從來此の如し。大中天子は、續咸通傳中に載す。唐の憲宗二子有り、一りを穆宗と曰ひ、一りを宣宗と曰ふ、宣宗は乃ち大中なり。年十三、少うして敏黠なり、常に愛して跏趺坐す。穆宗在位の時、早朝罷むに因て、大中乃ち戲れて、龍床に登つて、群臣を揖する勢を作す。大臣見て、之れを心風と謂へり、乃ち穆宗に奏す。穆宗見て、撫歎して曰く、我が弟は、乃ち吾が宗の英冑なりと。穆宗長慶四年に於て晏駕す。三子有り、敬宗、文宗、武宗と曰ふ。敬宗父の位を繼いで、二

〈惡脚手〉惡手段と云ふに同じ。

（志閑）一本に智閑とあり、蓋し是なり、香嚴智閑禪師のことなるべし、前に香嚴閑和尚云々の語あり。（鹽官）齊

年にして内臣謀つて之れを易ふ。文宗位を繼いで、一十四年にして、武宗即位す、常に大中を喚んで、癡奴と作す。一日武宗、大中昔日戯れに、父の位に登りしことを恨んで、後苑の中に致く。不潔を以て、灌いで復た甦らしむ。遂に潛に遁れて、香嚴閑和尚の會下に在り、後ち剃髮して沙彌と爲る。未だ具戒を受けず、後ち志閑と遊方して、廬山に到る。因に志閑、瀑布に題する詩に曰く、雲を穿ち石を透て、勞を辭せず、地遠うして方さに知る、出處の高きことを。閑此の兩目を吟じて、佇思すること之れを久うし、他の語脈を釣て、如何と看んと欲す。大中續いで曰く、溪閑豈に能く留むれども、住まることを得んや、終に大海に歸して、波濤と作る。閑、方さに是れ尋常の人にあらざることを知て、乃ち默して之れを識る。後ちに鹽官の會下に到る、大中を請じて書記と作す。黃

安國師のこと、馬祖に嗣法す。（太麁生）太と生との字に意味なし、麁々しいこと。

蘗彼に在て、首座と作る。蘗一日、佛を禮する次で、大中見て問うて曰く、佛に著て求めず、法に著て求めず、衆に著て求めず、禮拜當さに何の求むる所ぞ。蘗曰く、佛に著て求めず、法に著て求めず、衆に著て求めず、常に禮すること是の如し。大中曰く、禮を用ひて何にかせん。蘗便ち掌す。大中曰く、太麁生。蘗曰く、這裏什麼の所在ぞ、麁と說き細と說くと云うて、蘗又掌す。大中後ちに、國位を繼ぐ、黃蘗に賜うて、麁行の沙門と爲す。裴相國朝に在り、後ちに奏して、斷際禪師と賜ふ。雪竇、他の血脈の出處を知て、便ち用ひ得て巧みなり。如今還て爪牙を弄する底有りや、便ち打たん。

第十二則　洞山麻三斤

垂示曰。殺人刀、活人劍、乃上古之風規、亦今時之樞要。

〔殺人刀活人劍〕殺人刀は消極的方面、活人劍は積極的方面、即ち萬物の實相を顯はすの二語なり。〔也〕又に同じ。

若論㆑殺、也不㆑傷㆓一毫㆒、若論㆑活、也喪身失命。所以道、向上一路、千聖不傳、學者勞㆑形、如㆓猿捉㆑影。且道、既是不傳、爲㆓什麼㆒、却有㆓許多葛藤公案㆒、具眼者試說看。

讀方 垂示に曰く。殺人刀、活人劍、乃ち上古の風規、亦今時の樞要なり。若し殺を論ぜば、也た一毫を傷らず、若し活を論ぜば、也た喪身失命す。所以に道ふ、向上の一路、千聖不傳、學者形を勞すること、猿の影を捉ふるが如しと。且らく道へ、既に是れ不傳、什麼としてか、却て許多の葛藤公案か有る、具眼の者は試みに說く看よ。

擧。僧問㆓洞山㆒、如何是佛。鐵蒺藜。天下衲僧跳不出。山曰、麻三斤。灼然。破草鞋。指㆓槐樹㆒罵㆓柳樹㆒、爲㆓秤槌㆒。

〔洞山〕守初禪師、雲門の法嗣。〔秤鎚と爲す〕この語一本になし。〔鐵蒺藜〕周圍に針のある鐵の丸のこと、即ち手もつけられぬと云ふこと。〔有底〕有る者と云ふに同じ。

讀方 擧す。僧洞山に問ふ、如何なるか是れ佛。（鐵蒺藜。天下の衲僧跳不出。）山曰く、麻三斤。（灼然。破草鞋。槐樹を指して、柳樹を罵り秤鎚と爲す。）

【評】 這箇の公案、多少の人錯て會す、直に是れ咬嚼し難し、儞が口を下す處、何故ぞ淡うして味無き。古人多少佛に答ふる話有り、或は曰く、殿裏底。或は曰く三十二相。或は曰く杖林山下の竹筋鞭と。洞山に到るに及んで、却て道ふ、麻三斤と、妨げず古人の舌頭を截斷することを。人多く話會を作して道ふ、洞山是の時、庫下に在て麻を秤る、僧有り問ふ、所以に此の如く答ふと。有底は道ふ、洞山東と問へば西を答ふと。有底は道ふ、汝は是れ佛、更らに去て佛を問ふ、所以に洞山遶路に之れを答ふと。死漢更らに一般有て道ふ、只だ這の麻三斤、便ち是れ佛と。也た未だ夢にだも見ざる

こと在り。何故ぞ、言語は只だ是れ載道の器なり、殊に古人の意を知らず、只管に句中に去て求めば、什麼の巴鼻か有らん。見ずや古人道く、道本と言無し、言に因て道を顯す、道を見れば即ち言を忘すと。若し這裏に到らば、我に第一機を還し來て始めて得てん。只だ這の麻三斤、一へに長安の大路一條あるに似て相似たり。擧足下足、是ならずと云ふこと有ること無し、這箇の話、雲門餬餅の話と是れ一般なり、妨げず會し難きことを。五祖先師頌して曰く、賤賣擔板漢、貼秤す麻三斤、千百年の滯貨、渾身を著くるに處無し。汝但だ情塵意想、計較得失是非を打疊し得て、一時に淨盡せば、自然に會し去らん。

〔擧足下足〕日常の行爲のこと。

頌。金烏急、左眼半斤。快鷂趕不及。火焰裏橫身。玉兎速、右眼八兩。姮娥宮裏作窠窟。善應何曾有輕觸。如鐘在叩。如谷受響。展事投機、見洞山、錯認定盤星。自是闍梨恁麼見。跛鼈盲龜、入空谷。自領出去。同坑無異土。阿誰打汝鶻子死。花簇々、錦簇々、兩重公案。一狀領過。依舊一般。南地竹兮、北地木。三重也有。四重公案。頭上安頭。因思長慶陸大夫、癩兒牽伴。山僧也恁麼。雪竇也恁麼。解道合笑、不合哭。呵々。蒼天夜半更添冤苦。咦　咄。是什麼。便打。

讀方　金烏急に、（左眼半斤。快鷂趕へども及ばず。火焰裏に身を橫ふ。）玉兎速かなり。（右眼八兩。姮娥宮裏に窠窟を作す。）善應何ぞ曾て輕觸有らん。（鐘の叩に在るが如く、谷の響を受くるが如し。）事を展し機に投じて、洞山を見ば、（錯て定盤星を認む。自ら是れ闍梨恁麼に見る。）跛鼈盲龜、空谷に入る。（自領出去。同坑に異士無し。阿

〔姮娥〕淮南子に出づ、羿と云ふ人が西王母から不死の藥を貰う

たのを、其妻姮娥が盜んで仙人となつて月の世界へ行きしとの怪談なり。

〔陸大夫〕陸亘のこと、唐の人、南泉に嗣す。

誰そ汝が鵪子を打し死す。）花簇々く、錦簇々く、（兩重の公案。一狀に領過す。舊に依て一般。）南地の竹北地の木。（三重も也た有り。四重の公案。頭上に頭を案ず。）因て思ふ、長慶陸大夫。（獺兒伴を牽く。山僧も也た恁麼、雪竇も也た恁麼。）道ふことを解す、笑ふべし哭すべからず。（呵々。蒼天夜半、更らに寃苦を添ふ。）咦。（咄。是れ什麼ぞ。便ち打つ。）

【評】雪竇見得透す、所以に劈頭に便ち道ふ、金烏急に、玉兎速かなりと。洞山、麻三斤と答ふると、更らに兩般なし。日出で、月沒す、日々是の如し。人多く情解して、只管に道ふ、金烏は是れ左眼、玉兎は是れ右眼と。纔かに問着すれば、便ち瞠眼して曰く、這裏に在りと。什麼の交渉か有らん。若し什麼に會せば、達磨の一宗、地を掃うて盡きん。所以に道ふ、鈎を四海に垂れて、只だ獰龍を釣る、格外の言機、知己を尋ねんが爲めなりと。雪竇は是れ陰界を出づる底の人、豈に這般の見解を作さんや。雪竇輕々に、敲關擊節の處に去て、畧些子を露はして、汝をして見せしむ。便ち箇の注脚を下して道ふ、善應何ぞ曾て輕觸有らんと。洞山輕々しく、這の僧に酬いず、鐘の叩に在るが如く、谷の響を受くるが如し。大小隨應して、敢て輕觸せず。雪竇一時に、心肝五臟を突出して、汝諸人に呈似し了れり。雪竇靜而善應の頌有り、曰く、覿面に相呈す、多端に在らず、龍蛇は辨じ易く、衲子は瞞じ難し、金鎚影動き、寶劍光寒し、直下に來るや、眼を着けて看よと。洞山初め雲門に參ず。門問ふ、近離甚れの處ぞ。山曰く、渣渡。門曰く、夏甚麼の處にか在る。山曰く、湖南の報慈。門曰く、幾時が彼の中を離る、山曰く、八月二十五。門曰く、汝に三頓棒を放す、參堂し去れ。師晩間に入

〔呈似〕示すこと。

〔飯袋子〕日本の俗語に、穀潰し奴と云ふが如し。

室し、親近して問うて曰く、某甲過什麼の處にか在る。門曰く、飯袋子、江西湖南、便ち什麼に去るや。洞山言下に於て、豁然として大悟す。遂に曰く、某甲他日、人煙無き處に向て、箇の庵子を卓てて、一粒の米を蓄へず、一莖の菜を種ゑず、常に往來十方の、大善知識を接待して、盡く伊が爲めに、釘を抽却し、楔を拔却し、職脂帽子を拈却し、鶻臭布衫を脫却し、各々灑々落々地にして、箇の無事の人と作し去らしめん。門曰く、身は椰子の大さの如くにして、許くの大口を開き得たり。洞山便ち辭し去る。當時の悟處直下に穎脫す、豈に小見に同ぜんや。後來出世應機、麻三斤の語、諸方只だ佛に答ふる話會を作す。如何なるか是れ佛、杖林山下の竹筋鞭、丙丁童子來求火、只管に佛の上に於て、道理を作す。雪竇曰く、若し恁麼に、展事と投機との會を作さば、正に破鼈盲龜の、空谷に入るに似たり、何れの年の日月にか、出路を尋ね得去らん。花簇々錦簇々と。此れは是れ僧、智門和尚に問ふ、洞山麻三斤と道ふ、意旨如何、智門曰く、花簇々錦簇々、會すや。僧曰く、不會。智門曰く、南地の竹北地の木。僧回て洞山に擧似す。山曰く、我汝が爲めに說かず、我大衆の爲めに說かんと。遂に上堂して曰く、言は展事無く、語は投機せず、言を承くる者は喪し、句に滯る者は迷ふと。雪竇人の情見を破して、故意に引いて、一串と作して頌出す。後人却て轉々情見を生じて道く、麻は是れ孝服、竹は是れ孝杖、所以に道ふ、南地の竹北地の木と。花簇々錦簇々は、是れ棺材頭邊に畫く底の花草なり、還て羞を識るや。殊に知らず、南地の竹北地の木と、麻三斤と、只だ是れ阿爺と、阿爹とに相似たることを。古人一轉語を答ふ、決して是れ意恁麼ならず、正に雪竇の、金烏急に、玉兎速かな

〔阿爺阿爹〕南人は父を呼

んで阿爺と云ひ、北人は呼んで阿爹と云ふと

〔都盧〕都べてのこと、盧の字に意味なし。

りと道ふに似たり、自ら是れ一般に寛曠なり。只だ是れ金鍮辨じ難く、魚魯參差す。雪竇老婆心切にして、汝が疑情を破せんことを要して、更らに箇の死漢を引く。因て思ふ、長慶陸大夫、道ふことを解す、笑ふ合し哭す合からずと。若し他の頌を論ぜば、只だ頭上の三句に、一時に頌し了れり。我且らく汝に問はん、都盧只だ是れ箇の麻三斤、雪竇却て許多の葛藤有り、只だ是れ慈悲可煞し、所以に此の如し。陸亘大夫、宣州の觀察使と作て、南泉に參ず、泉遷化して、亘喪を聞いて、寺に入て下祭して呵々大笑す。院主曰く、先師、大夫と師資の義有り、何ぞ哭せざる。大夫曰く、道ひ得ば即ち哭せん。院主無語、亘大に哭して曰く、蒼天々々、先師世を去て遠し。後來長慶聞いて曰く、大夫笑ふ合し、哭す合からずと。雪竇此の大綱を借りて道ふ。汝若し這般の情解を作さば、正に好し笑ふに、哭する莫れと。是は即ち是、末後に一箇の字あり、妨げず聱訛なることを。更らに道ふ、咦と。雪竇還て洗得し脫するや麼や。

第十三則　巴陵提婆宗

垂示曰。雲凝大野、偏界不藏、雪覆蘆花、難分朕迹。冷處冷如氷雪、細處細如米末。深々處、佛眼難窺、密々處、魔外莫測。擧一明三即且止、坐斷天下人舌頭、作麼生道。且道、是什麼人分上事、試擧看。

讀方　垂示に曰く。雲は大野に凝りて、偏界藏さず、雪は蘆花を覆うて、朕迹を分ち難し、冷處は氷雪よりも冷かに、細處は米末よりも細かなり。深々たる處、佛眼も窺ひ難く、密々たる處、魔外も測ること莫し。擧一明三は即ち且く止く、天下人の舌頭を坐斷して、

〔咦〕笑ふ貌、又尤もとうなづくの意あり。

〔雲凝大野〕雲の字他本には雪とあり。

〔朕迹〕朕は未だ明かならざれどもキザシのあ

ることと、迹は明瞭に顯はれたアトのこと。

〔巴陵〕岳州の處名、其所に新開院と云ふがあり、顥鑒禪師住す、今は其の人のこと。

作麼生か道はん。且らく道へ、是れ什麼人の分上の事ぞ、試みに擧す看よ。

擧。僧問㆓巴陵㆒、如何是提婆宗。（白馬入㆓蘆花㆒。道㆓什麼㆒。點。）**巴陵曰、銀椀裏盛㆓雪㆒。**（塞㆓斷汝咽喉㆒。七花八裂。）

【讀方】擧す。僧巴陵に問ふ、如何なるか是れ提婆宗。（白馬蘆花に入る。什麼と道ふぞ。點。）巴陵曰く、銀椀裏に雪を盛る。（汝が咽喉を塞斷す。七花八裂。）

【評】這箇の公案、人多く錯て會して道ふ、此れは是れ外道宗と。什麼の交渉か有らん。第十五祖、提婆尊者、亦是れ外道の中の一數、因に第十四祖、龍樹尊者に見えて、針を以て鉢に投ず。龍樹深く之れを器として、佛心宗を傳ふ、繼いで第十五祖と爲る。楞伽經に曰く、佛語心を宗と爲し、無門を門と爲す。馬祖曰く、凡そ言句有るは、是れ提婆宗、只だ此箇を以て主と爲す、諸人盡く是れ衲僧門下の客、還て曾て提婆宗を體究し得てんや。若し體究得せば、西天九十六種の外道、汝に一時に降伏せられん。若し體究不得ならば、未だ著しく袈裟を返披し去ることを免れざること在らん。且らく道へ、是れ什麼生。若し言句是と道はゞ、也た沒交涉、若し言句不是と道はゞ、也た沒交涉。且らく道へ、馬大師、意什麼の處にか在る。後來雲門道く、馬大師の好言語、只だ是れ人の問ふ無し。僧有り便ち問ふ、如何なるか是れ提婆宗。門曰く、九十六種、汝は是れ最下の一種と。昔し僧有り、大隋を辭す。隋曰く、什麼の處にか去る。僧曰く、普賢を禮拜し去る。大隋拂子を竪起して曰く、文殊普賢、盡く這裏に在り。僧一圓相を畫して、手を以て師に托呈して、又背後

〔西天〕印度のこと之れに對して支那を東土と云ふ。

〔道〕謂に同じ。

に抛向す。隋曰く、侍者一貼の茶を將ち來て、這の僧に與へ去れ。雲門別して曰く、西天には頭を斬り臂を截る、這裏は自領出去。又曰く、赤旛我が手裏に在りと。西天の論議、勝つ者は手に赤旛を執り、負墮する者は、袈裟を返披して、偏門より出入す。西天に論議せんと欲するには、須らく王勅を奉じて、大寺の中に於て、鐘を聲らし皷を撃て、然る後ちに論議することを得べし。是に於て外道、僧寺の中に於て、鐘皷を封じ禁じて、之れが爲めに沙汰す。時に迦那提婆尊者、佛法、難あらんことを知て、遂に神通を運らし、樓に登つて鐘を撞いて、外道を擯せんと欲す。外道遂に問ふ、樓上に鐘を聲す者は誰ぞ。提婆曰く、天。外道曰く、天は是れ誰ぞ。婆曰く、我。外道曰く、我は是れ誰ぞ。婆曰く、我は是れ汝。外道曰く、汝は是れ誰ぞ。婆曰く、汝は是れ狗。外道曰く、狗は是れ誰ぞ。婆曰く、

〔鑒多口〕辯舌の倿利なることを云ふ

狗は是れ汝。是の如くすること七返、外道自ら負墮することを知て、義に伏して遂に門を開く。提婆是に於て、樓上より赤旛を持して下り來る。外道曰く、汝何ぞ後れざる。婆曰く、汝何ぞ前まざる。外道曰く、汝は是れ賤人か。婆曰く、汝は是れ良人か。是の如く展轉酬問す。提婆折くに無礙の辯を以てす。是れに由て歸伏す。時に提婆尊者、手に赤旛を持す、義墮する者は旛下に立つ。外道皆首を斬て、過を謝せんとす。時に提婆之れを止めて、但だ化して髮を削り、道に入らしむ。是に於て提婆宗大に興る。雪竇後ちに此の事を用ひて、之れを頌す。巴陵をば衆中、之れを鑒多口と謂ふ、常に坐具を縫うて行脚す。深く雲門脚跟下の大事を得、所以に奇特なり。後ち出世して、雲門に嗣法し、先づ岳州の巴陵に住す、更らに法嗣の書を作さず。只だ三轉語を將て、雲門に上る、如何なるか是れ道。

〈同人〉道常禪師のこと。〈作者〉三平を指す

明眼の人井に落つ。如何なるか是れ吹毛の劍、珊瑚枝々月を撐着す。如何なるか是れ提婆宗。銀椀裏に雪を盛る。雲門曰く、他日老僧が忌辰、只だ此の三轉語を擧せば、恩を報ずるに足らんと。自後ち果して忌辰の齋を作さず、雲門の囑に依て、只だ此の三轉語を擧す。然れども諸方、此の話に答ふるに、多くは事上に就て答ふ。唯だ巴陵のみ有て、恁麽に道ふ、極めて是れ孤峻なり、妨げず會し難きことを。些子の鋒鋩を露はさず、八面に敵を受け、着々出身の路有り、陷虎の機有り、人の情見を脫す。若し一色邊の事を論ぜば、這裏に到て、須らく是れ自家に透脫し了るべし。却て須らく是れ人に遇うて、始めて得べし。所以に道ふ、道吾笏を舞せば、同人會す、石鞏弓を彎けば、作者諳んず。此の理若し師の印授する無くんば、何の法を將てか、玄談を語らんと擬す。雪竇後に隨て拈提して

〈老新開〉巴陵のこと、老は尊稱なり、大に同じ。

人の爲めにす、所以に頌出す。

頌。老新開、千兵易レ得。一將難レ求。多口阿師。端的別。是什麼端的。頂門上一着夢見也未。解レ道、銀椀裏盛レ雪。鰕跳不レ出レ斗。兩重公案。多少人喪身失命。九十六箇、應二自知一、兼レ身在レ內。闍梨還知麼。一坑埋却。不レ知却問二天邊月一。遠之遠矣。自領出去。望レ空啓告。提婆宗、提婆宗、道什麼。山僧在二這裏一。滿口含レ霜。赤旛之下、起二清風一。百雜碎。打曰、已着了也。汝且去斬レ頭截レ臂來。與レ汝道二一句一。

讀方　老新開、(千兵は得易く、一將は求め難し。多口の阿師。)端的別なり。(是れ什麼の端的ぞ。頂門上の一着、夢にも見るや也た未だしや。)道ふことを解す、銀椀裏に雪を盛ると。(鰕跳れども斗を出でず。兩重の公案。多少の人か喪身失命。)九十六箇、應さに自知すべし、

〔滿口に霜を含む〕口に含んで滿たしむ不能、即ち言ふに言はれぬことを云ふ

〔山僧〕禪僧の住山せるもの、自ら稱して言ふ語。

（身を兼ねて內に在り。闍梨還て知るや。一坑に埋却す。）知らずんば却て天邊の月に問へ、（遠うして遠し。自領出去。空を望んで啓告す。）提婆宗、提婆宗。（什麼と道ふぞ。山僧這裏に在り、滿口に霜を含む。）赤旛の下、清風を起す。（百雜碎。打して曰く、已に着了や。汝且らく去て、頭を斬り臂を截り來れ、汝が爲めに一句を道はん。）

【評】老新開、新開は乃ち院の名なり。端的別なり、雪竇讃歎するに分有り。且らく道へ、什麼の處か是れ別處、一切の語言は、皆是れ佛法。山僧此の如く說話す、什麼の道理か成し去らん。雪竇徹しく些子の意を露はして道ふ、唯だ是れ端的別なり。後面に打開して云く、道ふことを解す、銀椀裏に雪を盛ると。更らに汝が爲めに、箇の注脚を下す、九十六箇、應さに自知すべし、負墮して始めて得ん。汝若し知らずんば、天邊の月に問取せよ。古人曾て、此の話に答へて曰く、天邊の月に問取せよと。雪竇頌し了りて、末期に須らく活路有て、獅子邊擲の句有るべし。更らに提起して、汝が與めに道ふ、提婆宗提婆宗、赤旛の下清風を起す。巴陵曰く、銀椀裏に雪を盛ると。什麼と爲てか雪竇却て道ふ、赤旛の下清風を起すと。還て雪竇、人を殺すに刀を用ゐざることを知るや。

〔雲門〕雲門宗の高祖、青原下七世の

第十四則　雲門對一說

擧。僧問二雲門一、如何是一代時教。直至二如今一不レ了。座主不レ會。葛藤窠裏。雲門曰、對一說。無孔鐵鎚。七花八裂。老鼠咬二生薑一。

【讀方】擧す。僧雲門に問ふ、如何なるか是れ一代時教。（直に如今に至つて了せず。座主會せず。葛藤窠裏。）雲門曰く、對一說。（無孔の

孫、達磨門下十三代の法孫たり。

（森羅萬象）諸法萬有と云ふが如し

鐵鎚。七花八裂。老鼠生薑を咬む。）

【評】禪家流、佛性の義を知らんと欲せば、當さに時節因緣を觀ずべし。之れを敎外別傳、單傳心印、直指人心、見性成佛と謂ふ。釋迦老子、四十九年住世し、三百六十會、頓漸權實を開談す、之れを一代時敎と謂ふ。這の僧拈じ來つて、問うて曰く、如何なるか是れ一代時敎。雲門何ぞ他の與めに、紛々に解說せずして、却て他に向つて、箇の對一說と道ふ。雲門尋常、一句の中に須らく三句を具すべし。之れを函蓋乾坤の句、隨波逐浪の句、截斷衆流の句と謂ふ。放去收來、自然に奇特なり、釘を斬り、鐵を截るが如く、人をして他底を、義解し卜度し得ざらしむ。一大藏敎、只だ三箇の字を消して、四方八面、汝が穿鑿の處無し。人多く錯會して却て道ふ、一時機宜の事に對するが故に說くと。又道ふ、森羅及び萬象、皆是れ一法の所印なり、之れを對一說と謂ふと。更らに有は道ふ、只だ是れ那箇の一法を說くと、什麼の交涉か有らん。唯だ會せざるのみにあらず、更らに地獄に入ること箭の如し。殊に知らず、古人の意此の如くならざることを。所以に道ふ、粉骨碎身、未だ酬ゆるに足らず、一句了然として、百億を超ゆと。妨げず奇特なることを。如何なるか是れ一代時敎、只だ箇の對一說と道ふことを消す。若し當頭に薦得せば、便ち歸家穩坐すべし、若し薦不得ならば、且らく伏して處分を聽かん。

頌。對一說。（活鱍々。言猶在レ耳。不レ妨孤峻。）太孤絕。（傍觀有レ分。何止壁立千仞。豈有二恁麼事一。）無孔鐵鎚重下レ楔。（錯會二名言一也。雲門老漢也是泥裏洗二土塊一。雪竇也是粧飾。）閻浮樹下、笑呵々。（四州八縣、不三曾見二箇漢一。同道者方知。能有二幾人一知。）昨夜驪

（驪龍）僧が一代時敎と問うて來たのは、恰も

龍、拗角折。非止驪龍拗折。有誰見來。還有證明麼。啞。別々。讃歎有分。須是雪竇始得。有什麼別處。韶陽老人、得一橛。在什麼處。更有一橛。分付阿誰。德山臨濟也須退倒三千。那一橛又作麼生。便打。

讀方　對一說、（活鱍々。言猶ほ耳にあり。妨げず孤峻なることを。）太だ孤絕。（傍觀分有り。何ぞ止だ壁立千仞のみならん。豈に恁麼の事有らんや。）無孔の鐵鎚、重ねて楔を下す。（錯つて名言を會す。雲門老漢、也是れ泥裏に土塊を洗ふ。雪竇也是粧飾。）閻浮樹下、笑呵々。（四州八縣、曾て箇の漢を見ず。同道の者方さに知る。能く幾人か有りて知らん。）昨夜驪龍、角を拗して折す。（止だ驪龍の拗折のみに非らず。誰有りてか見來る。還て證明する有りや。啞。）別々。（讃歎するに分有り。須く是れ雪竇にして、始めて得べし。什麼の別處か有らん。）韶陽老人、一橛を得たり。（什麼の處にか在る。更らに一楔有り、阿誰にか分付せん。德山臨濟も、也た退倒三千なるべし。那一楔又作麼生。便ち打つ。）

龍が二本の角を振り立てゝ來たやうだと云ふこと。

（奈何）如何に同じ

（無孔の鐵鎚）何とも手の下しやう

讀方　對一說、太だ孤絕、雪竇之れを讃し及ばず。此の語獨脫孤危にして、光前絕後なり、萬丈の懸崖の如くに相似たり。亦百萬の軍陣の如く、汝が入處なし、只だ是れ可煞孤危なり。古人道く、親切を得んと欲せば、問を將ち來つて問ふこと莫れと。問は答處に在り、答は問端にあり、直に是れ孤峻なり。且らく道へ、什麼れの處か是れ孤峻の處、天下の人奈何ともすることを得ず。這の僧也た是れ箇の作家、所以に此の如く問ふ。雲門又恁麼に答ふ、大に無孔の鐵鎚、重ねて楔を下すに似て相似たり。雪竇文言を使ふこと、用ひ得て甚だ巧みなり、閻浮樹下、笑呵々と。起世經の中に說く、須彌南畔の

のなきこと。

吠琉璃、閻浮洲に映じて、中は皆青色なり。此の洲乃ち大樹を名と爲して、閻浮提と名く。其の樹の縱廣七千由旬、下に閻浮檀金聚有り、高さ二十由旬、金、樹下より出生するを以て、故に閻浮樹と號す。所以に雪竇自ら說く、他、閻浮樹下に在りて、笑呵々と。且らく道へ、他箇の什麼をか笑ふ、昨夜驪龍、角を拗して折することを笑ふ。只だ之れを瞻之れを仰いで、雲門を讚歎するに分有ることを笑ふ。雲門道く、對一說と。箇の什麼にか似たる、驪龍の一角を拗折するが如くに似て、相似たり。這裏に到つて、若し恁麼の事無くんば、焉んぞ能く、恁麼に說話せん。雪竇一時に頌し了りて、末後に却て道ふ、別々、韶陽老人、一橛を得たりと。何ぞ全得と道はざる、如何ぞ只だ一橛を得たる。且らく道へ、那一橛什麼の處にか在る。直に得たり、第二人を穿過することを。

第十五則　雲門倒一說

垂示曰。殺人刀、活人劍、乃上古之風規、是今時之樞要。且道、如今那箇是殺人刀、活人劍、試擧看。

讀方 垂示に曰く。殺人刀、活人劍、乃ち上古の風規、是れ今時の樞要なり。且らく道へ、如今那箇か是れ殺人刀、活人劍、試みに擧す看よ。

擧。僧問雲門、不是目前機、亦非目前事時如何。𨁝跳作什麼。倒退三千里。**門曰、倒一說。**平出。款出囚人口。也不得放過。荒草裏橫身。

讀方 擧す。僧雲門に問ふ、是れ目前の機にあらず、亦目前の事に非ざる時如何。(𨁝跳して什麼か作さん。倒退三千里。)門曰く、倒一說。

〔欵〕罪人の白狀書のこと。

〔古人〕雲門のこと

(平出す。欵は囚人の口より出づ。也た放過することを得ざらん。荒草裏に身を橫ふ。)

【評】　這の僧、妨げず是れ個の作家にして、恁麼の門頭邊を解することを。之れを請益と云ふ。此れは是れ呈解問、亦之れを藏鋒問と謂ふ。若し是れ雲門にあらずんば、他を奈何ともせず。雲門這箇の手脚あり、他既に問を將ち來る、已むことを得ずして之れに應ず。何が故ぞ。作家の宗師、明鏡の臺に臨んで、胡來れば胡現じ、漢來れば、漢現するが如し。古人道く、親切を得んと欲せば、問を將ち來つて問ふこと莫れと。何故ぞ。問は答處に在り、答は問處に在り。從上の諸聖、何ぞ曾て一法の人に與ふる有らん。那裏にか禪道の汝に與へ來る有らん、汝若し地獄業を造らずんば、自然に地獄の果を招かず、汝若し天堂の因を造らずんば、自然に天堂の果を受けず、一切の業緣は、皆是れ自ら作り自ら受く。古人分明に汝に向て道ふ、若し此の事を論ぜば、言句上にあらず、若し言句上に在らば、三乘十二分教、豈に是れ言句無けんや、更らに何ぞ祖師西來を用ひん。前頭には對一說と道ひ、這裏には、倒一說と道ふ、只だ一字を爭ふ、什麼としてか却て千差萬別なる。且らく道へ、聱訛什麼の處にか在る。所以に道ふ、法は法に隨つて行じ、法幢は處に隨つて建立す。是れ目前の機にあらず、亦目前の事に非ざる時如何。只だ當頭の一點を消す、若し是れ具眼の漢ならば、一點も也た謾することを得ず。問處既に聱訛、答處須らく恁麼なることを得べし。其れ實に雲門、賊馬に騎て賊を趕ふ。有者は錯て會して道ふ、本是れ主家の話、却て是れ賓家に道ふ、所以に雲門、倒一說と云ふと、什麼の死急か有る。這の僧問ひ得て好し、是れ目前の機にあらず、亦目前の事に非

〔賊馬に騎て：〕相手の棒を奪つて打つと云ふ

つたやうなこと。

ざる時如何と。雲門何ぞ他に、別の語言を答へずして、却て只だ他に向つて、倒一說と云ふ。雲門一時に、他底を打破す。這裏に到つて、倒一說と道ふも、也た是れ好肉上に瘡を剜る。何が故ぞ、言迹の興り、白雲萬里、異途に由て生ずる所なり。設使ひ一時に、言無く語無きも、露柱燈籠、何ぞ曾て言句有らん。還て會すや、若し會せずんば、這裏に到つて、也た須らく是れ轉動して、始めて落處を知るべし。

頌。倒一說。放不下。七花八裂。須彌南畔。卷盡五千四十八。分一節。在汝邊。在我邊。半河南半河北。把手共行。同死同生、爲君決。泥裏洗土塊。着甚來由。放汝不得。八萬四千、非鳳毛。羽毛相似。太煞減人威光。漆桶如麻如粟。三十三人、入虎穴。唯我能知。一將難求。野狐精一隊。別々。有什麼別處。少賣弄。一任踍跳。擾々忽、水裏月。青天白日。迷頭認影。着忙作什麼。

（泥裏に土塊：」親が子の相手になり、醜を忘れて居ると云ふやうなこと、大慈悲を云ふ

讀方　倒一說。（放不下。七花八裂。須彌南畔。卷き盡す五千四十八。）分一節。（汝が邊に在るか、我が邊に在るか。半は河南、半は河北。手を把て共に行く。）同死同生、君が爲めに決す。（泥裏に土塊を洗ふ。甚の來由を着けたる。汝を放すことを得ず。）八萬四千、鳳毛に非ず。（羽毛相似たり。太煞だ人の威光を減ず。漆桶麻の如く粟の如し。）三十三人、虎穴に入る。（唯だ我れ能く知る。一將は求め難し。野狐精の一隊。）別々。（什麼の別處か有らん。少賣弄。踍跳するに一任す。）擾々忽々たり、水裏の月。（青天白日、頭に迷うて影を認む。着忙して什麼か作さん。）

【評】　雪竇、亦妨げず作家なることを、一句下に於て、便ち分一

〔同條〕條はミチスヂと云ふこと、即ち同樣と云ふが如し。

節と道ふ。分明に一着を放過して、他と手を把て共に行く。他從來放行の手段有り、敢て汝が與めに、泥に入り水に入て、同死同生す。所以に雪竇恁麼に頌す、其れ實に他無し、只だ汝が與めに、粘を解き縛を去け、釘を抽き楔を拔かんことを要す。如今却て言句に因て、轉た情解を生ず。只だ巖頭、雪峰我と同條に生ずと雖も、我と同條に死せずと道ふが如きんば、若し全機透脫して、大自在を得る底の人に非ずんば、焉んぞ能く汝と同死同生せん。何が故ぞ、許多の得失是非、滲漏の處無きが爲めに。故に洞山云く、若し向上の人の眞僞を辨認せんと要せば、三種の滲漏あり、情滲漏、見滲漏、語滲漏。見滲漏とは、機、位を離れざれば、毒海に墮在す、情滲漏とは、智常に向背して、見處偏枯なり、語滲漏とは、體妙、宗を失し、機、終始を昧ます、此の三滲漏、宜しく己れ之れを知るべし。又

〔王母殷淑儀〕孝武帝の第八子、孝敬王子鸞の母、殷は其姓、淑儀は女官の

三玄有り、體中玄、句中玄、玄中玄なり。古人這の境界に到りて、全機大用、生に遇うては汝と同生し、死に遇うては汝と同死す。虎口裏に向て身を横へ、手脚を放得して、千里萬里、汝が銜み去るに隨ふ。何故ぞ他這の一着子を得るに還して、始めて得ん。八萬四千鳳毛に非ずんば、靈山八萬四千の聖衆、鳳毛に非ずとなり。南史に曰く、宋の時謝超宗は、陳郡陽夏の人、謝鳳が子なり、博學にして文才傑俊なり、朝中に比無し、當世之れを獨步と爲す。善く文を爲て、王府常侍と爲る。王の母殷淑儀甍ず、超宗誄を作て之れを奏す。武帝其の文を見て、大に嘆賞を加へて曰く、超宗殊に鳳毛有りと。古詩に曰く、朝罷めて香煙を滿袖に携へ、詩成て珠玉、毫を揮ふに在り、世、絲綸を掌る美を知らんと欲せば、地上如今鳳毛有りと。昔日靈山會上、四衆雲の如く集る。世尊花を拈ず、唯だ迦葉獨り破顏

名なり。〔古詩〕杜子美の和賈至早朝大明宮の詩を云ふ

〔七事〕内外の二種あり、即ち内の七事とは、

微笑す、餘は是れ何の宗旨と云ふことを知らず。雪竇所以に道ふ、八萬四千、鳳毛に非ずと。三十三人、虎穴に入るとは、阿難迦葉に問うて曰く、世尊金襴の袈裟を傳ふる、外別に何の法をか傳ふと。迦葉阿難と召す、阿難應諾す。迦葉曰く、門前の刹竿、倒却着せよ。阿難遂に悟る。已後祖々相傳し、西天此土、三十三人、虎穴に入る底の手脚有り。古人道く、虎穴に入らずんば、爭でか虎子を得んと。雲門は是れ、這般の人にして、善能同死同生す。宗師、人の爲めにすること、須らく此の如くなるに至て、曲彔木牀に據て座すべし。捨得す、汝をして打破せしめて、汝が虎鬚を捋づることを容すことを。須らく是れ這般の田地に到て、始めて得べし。七事を具して、身に隨へて、以て同生同死すべし。高ぶる者をば之れを抑へ、下れる者をば之れを上げ、足らざる者には之れを與へ、孤峯に在る

一、大機大用、二、機關迅速、三、語句の妙靈、四、殺活の機鋒、五、學廣覽博、六、鑒覺不昧、七、隱顯自在。外の七事とは、柱杖、拂子、禪版、几案、如意、竹篦、木蛇、但し今は之等の謂にあらずして・下

者をば、救うて荒草に入らしめ、荒草に落つる者をば、救うて孤峯に入らしむ。汝若し鑊湯爐炭に入らば、我も也た鑊湯爐炭に入らん。其れ實に他無し、只だ汝が與めに、粘を解き縛を去けて、釘を抽き楔を拔き、籠頭を脫却し、角駄を卸却せんことを要す。平田和尚、一頌有り最も好し、靈光不昧、萬古の徽猷、此の門に入り來て、知解を存する莫れと。別々、擾々忽々、水裏の月、妨げず出身の路有り、亦活人の機有ることを。雪竇拈じ了て、人をして自ら去て、生機を明悟せしむ、他の詩句に隨ふこと莫し。汝若し他に隨はゞ、正に是れ擾々忽々たる、水裏の月ならん、如今作麼生か平穩を得去らん、一着を放過す。

文の文句を指す、而して、之れに餘りある者は之れを奪ふの一句を加へて七句となす、蓋し一句脫文ならんと。

第十六則　鏡清啐啄

垂示曰。道無橫經、立者孤危。法非見聞、言思迥絕、若能透過荊棘林、解開佛祖縛、得箇穩密田地、諸天捧花無路。外道潛窺無門。終日行而、未嘗行、終日說而、未嘗說。便可以自由自在、展啐啄之機、用殺活之劒。直饒恁麼、更須知有建化門中、一手擡一手搦、猶較些子。若是本分事上、且得沒交涉、作麼生是本分事、試擧看。

讀方　垂示に曰く。道に橫徑無し、立者孤危。法は見聞に非らず、言思迥かに絕す。若し能く荊棘林を透過し、佛祖の縛を解開して、箇の穩密の田地を得ば、諸天花を捧ぐるに路無く、外道潛かに窺ふに門無けん。終日行じて、而も未だ行ぜず。終日說いて、而も未だ說かず。便ち以て自由自在にして、啐啄の機を展べ、殺活の劒を用ふべし。直饒ひ恁麼なるも、更らに須らく建化門中、一手擡一手搦有ることを知て、猶ほ些子に較るべし。若し是れ本分の事上ならば、且得すらくは沒交涉。作麼生か是れ本分の事、試みに擧す着よ。

〔啐啄〕鷄が卵を溫めて孵化させる時に已に中の子が殼を破つて出でんとする時、內よりコツ〳〵とつゝく、之れが啐すると親鳥が寸分の時を違へず外からコツ〳〵とつゝき破ろ、之れが啄である、今禪

擧。僧問鏡清、學人啐、請師啄。無風起浪作什麼。汝用許多見解作什麼。清曰、還得活也無。劄。買帽相頭。將錯就錯。不可總恁麼。僧曰、若不活、遭人怪笑。相帶累。撐天拄地。擔板漢。清曰、也是草裏漢。果然。自領出去。放過即不可。

讀方　擧す。僧鏡清に問ふ、學人啐す、請ふ師啄せよ。(風無きに浪を起して、什麼をか作す。汝許多の見解を用ひて、什麼をか作す。)清曰く、還て活を得るや也た無しや。(劄、帽を買ふに頭を相す。錯

家に於て師家と學人との機、機投ずるを之れに譬へて啐啄同時と云ふ。〔帽を買ふに：〕帽子を買ふ時、頭の寸方を量ること、即ち頭に相應せぬ帽子は役に立たぬ故に。〔鏡清〕道恁禪師、名は高安、洞山

を將て錯に就く、總に恁麼なるべからず。）僧曰く、若し活せずんば、人に怪笑せられん。（相帶累す。天を撐げ地を拄ふ。擔板漢。）清曰く、也た是れ草裏の漢。（果然。自領出去。放過せば即ち不可。）

【評】鏡清は雪峯に承嗣す、本仁、玄沙、疎山、太原、孚の輩と同時なり。初め雪峰に見えて、旨を得て後ち常に、啐啄の機を以て、後學に開示す。善能應機說法す。衆に示して曰く、大凡そ行脚の人は、須らく啐啄同時の眼を具し、啐啄同時の用有て、方さに衲僧と稱すべし。母啄せんと欲するに、而も子啐せざるを得ず、子啐せんと欲するに、而も母啄せざることを得ざるが如し。僧有り、便ち出でゝ問ふ。母啄し子啐す、和尚分上に於て、箇の什麼邊の事を成し得る。清曰く、好箇の消息。僧曰く、子啐し母啄す、學人分上に於て、箇の什麼邊の事をか成し得る。清曰く、箇の面目を露はすと。所以に

艮价和尚に法を嗣ぐ。〔玄沙〕名は師備。〔太原〕〔揚愛〕共に雪峰の法嗣。〔那裏〕何處と云ふが如し。

鏡清門下に、啐啄の機有り。這の僧も亦是れ他の門下の客、他の家裏の事を會す、所以に此の如く問ふ、學人啐す、請ふ師啄せよと。此の問を洞下に、之れを借事明機と謂ふ。那裏にか此の如くならん。子啐して母啄す。自然に恰好同時なり。鏡清也た好し、謂つべし拳踢相應し、心眼相照すと。便ち答へて道ふ、還て活を得るや、也た無しやと。其僧也た好し、亦機變を知て、一句下に賓有り主有り、照有り用有り、殺有り活有り。僧曰く、若し活せずんば、人に怪笑せられん。清曰く、也た是れ草裏の漢と、一等に是れ泥に入り水に入る。鏡清妨げず、惡脚手あることを。這の僧既に會して、恁麼に問ふ、什麼としてか却て道ふ、也た是れ草裏の漢と。所以に作家の眼目、須らく是れ恁麼なるべし、擊石火の如く、閃電光に似たり、構得構不得、未だ喪身失命を免れず。若し恁麼ならば、便ち鏡清の

〔南院〕興化の法嗣

〔燈影裏〕埒のあかぬこと、判然せぬこと。

草裏の漢と道ふことを見ん。所以に南院衆に示して曰く、諸方たゞ啐啄同時の眼を具して、啐啄同時の用を具せず。僧有り出で、問ふ、如何なるか是れ啐啄同時の用。南院曰く、作家は啐啄せず、啐啄すれば同時に失す。僧曰く、猶ほ是れ學人が疑ふ處。南院曰く、作麼生か之れ汝が疑ふ處。僧曰く、失。南院便ち打つ。其の僧肯はず、院便ち趕出す。僧後ちに雲門の會裏に到て、前話を擧す。一僧有りて曰く、南院棒折るや。其の僧豁然として省有り。且らく道へ、意什麼の處にか在る。其の僧却回して、南院に見えんとす。院適に已に遷化す。却て風穴に見えて、纔かに禮拜す。穴曰く、是れ當時先師に啐啄同時を問ふ底の僧なる莫きや。僧曰く是なり。穴曰く、汝當時作麼生か會す。僧曰く、某甲當初時、燈影裏に行くが如くに相似たり。穴曰く、汝會せり。且らく道へ、是れ箇の什麼の道理ぞ。這の僧都來只だ道ふ、某甲當初時、燈影裏に行くが如くに相似たりと。什麼に因てか、風穴便ち他に向て道ふ、汝會せりと。後來翠巖拈じて曰く、南院然も籌を帷幄に運らすと雖も、爭奈せん土曠く人稀にして、知音の者少きことを。風穴拈じて曰く、南院ならば當時、他の口を開かんを待て、劈背に便ち打て、他を作麼生と看んと。若し此の公案を見ば、便ち這の僧、鏡清と相見の處を見ん。諸人作麼生か、他に草裏の漢と道ふことを免れ得ん。所以に雪竇、他の草裏の漢と道ふことを愛して、便ち頌出す。

頌。古佛有家風、（言猶在耳。千古榜樣。莫謗釋迦老子好。）對揚遭貶剝。（鼻孔爲什麼却在山僧手裏。八棒對十三。爾作麼生。放過一着。便打。）子母不相知、（既不相知。爲什麼却有啐啄。果然。）是誰同啐啄。（百雜碎。老婆心切。且莫錯認。）啄覺、（道什麼。落在第二頭。）猶在殼、（何不出頭來。）重遭撲。（錯。便打。兩重公案。三重四重了也。）天

〔對揚〕人に對して道を舉揚すること

〔貶剝〕貶はオトシメ、ソシル義、剝はハグなり、俗に面皮を剝ぐと云ふやうな意

下衲僧、徒名邈。放過了也。不ㇾ須二舉起一。還有二名邈得底一麼。若名邈得也是草裏漢。千古萬古黑漫漫。塡ㇾ溝塞ㇾ壑無二人會一。

讀方　古佛家風有り、（言猶ほ耳に在り、）千古の榜樣、釋迦老子を謗すること莫くんば好し。）對揚貶剝に遭ふ。（鼻孔什麼としてか、却て山僧が手裏に在る。八棒十三に對す。汝作麼生か一着を放過す。便ち打つ。）子母相知らず、（既に相知らず。什麼としてか却て啐啄有る。果然。）是れ誰か同じく啐啄す。（百雜碎。老婆心切。且らく錯て認むること莫れ。）啄。覺。（什麼と道ふぞ。第二頭に落在す。）猶ほ𣪊に在り、（何ぞ出頭し來らざる。）重ねて撲に遭ふ。（錯。便ち打つ。兩重の公案。三重四重にし了れり。）天下の衲僧、徒に名邈す。（放過し了れり。舉起することを須ゐず。還て名邈し得る底有りや。若し名邈し得るも、也た是れ草裏の漢。千古萬古黑漫々。溝に塡し壑に塞す、人の會する無し。）

〔一揚一蹋〕白雲守端、黃

【評】　古佛家風有り。雪竇一句に頌し了れり。凡そ是れ出頭し來るに、直に是れ近傍し得ず。若し近傍に着せば、即ち萬里崖州、纔かに出頭し來るも、便ち是れ落草、直饒ひ七縱八橫なるも、一揑を消せず。雪竇道ふ古佛家風有り、是れ如今恁麼なるのみならず、釋迦老子、初め生下し來て、一手は天を指し、一手は地を指す、四方を目顧して曰く、天上天下唯我獨尊と。雲門曰く、我當時若し見なば、一棒に打殺して、狗子に與へて喫却せしめん、貴ぶらくは天下太平を要せんと。此の如く方さに酬得して恰好なり。所以に啐啄の機、皆是れ古佛の家風、若し此の道に達せば、便ち一拳に黃鶴樓を拳倒し、一蹋に鸚鵡洲を蹋飜すべし。大火聚の如く、是れに近く時は、則ち

襲三頌の棒を頌するの前二句なり。

面門を燎却し、太阿の劍の如く、之れを擬する時は、則ち喪身失命す。此箇は唯だ是れ透脫して、大解脫を得る者の、方さに能く此の如し。苟し或は源に迷ひ、句に滯らば、決定して這般の說話に構ふことを得ず。對揚貶剝に遭ふ、則ち是れ一賓一主、一問一答、問答の處に於て、便ち貶剝有り、之れを對揚貶剝に遭ふと謂ふ。末後、只深く此の事を知る、所以に只だ兩句下に向て、頌し了る。雪竇只だ是れ落草して、汝が爲めに注破す。子母相知らず、是れ誰か同じく啐啄する。母啄すと雖も、子の啐を致すこと能はず、子啐すと雖も、母の啄を致すこと能はず、各々相知らず、啐啄の時に當て、是れ誰か同じく啐啄する。若し恁麼に會せば、也た雪竇の末後の句を出で得ざること有らん。何が故ぞ、見ずや、香嚴道く、子啐し母啄す、子覺めて殼無し、子母俱に忘ず、緣に應じて錯らず、同道唱

（落草）慈悲の故に草裏に墮すること

和、妙玄獨脚と。雪竇、妨げず落草なることを。葛藤を打して道く、啄と。此の一字、鏡淸の答へて、還て活を得るや、也た無しやと道ふことを頌す。覺。這の僧、若し活せずんば、人に怪笑せられんと道ふことを頌す。什麼としてか、雪竇却て便ち道ふ、猶ほ殼に在りと。雪竇石火光中に向て、緇素を別ち、閃電機裏に端倪を辨ず。鏡淸道く、也た是れ草裏の漢と。雪竇道く、重ねて撲に遭ふ、者の難處の些子、是れなり。鏡淸道く、也た是れ草裏の漢と。喚で鏡淸、人の眼睛を喚ぶと作し得てんや、這の句是れ猶ほ殼に在ること莫しや。且得すらくは沒交涉、那裏にか此の如くならん。若し會得せば、天下を繞て行脚すとも、恩を報ずるに分有らん。山僧が恁麼の說話、也た是れ草裏の漢。天下の衲僧、徒らに名邈す、誰か是れ名邈せざる者ぞ。這裏に到て、雪竇自ら名邈し出さず、却て更

に他の天下の衲僧を累はす。且らく道へ、鏡淸作麼生か、是れ這の僧の爲めにする處ぞ、天下の衲僧跳不出。

第十七則　香林坐久成勞

垂示曰。斬釘截鐵、始可爲本分宗師。避箭隈刀、焉能爲通方作者。針劄不入處、則且置、白浪滔天時如何。試擧看。

讀方 垂示に曰く。釘を斬り鐵を截て、始めて本分の宗師たるべし。箭を避け刀に隈れば、焉んぞ能く通方の作者と爲さん。針劄不入の處は、則ち且ら置く。白浪滔天の時如何、試みに擧す看よ。

擧。僧問香林、如何是祖師西來意。大有人疑着。猶有這箇消息在。林曰、坐久成勞。魚行水濁鳥飛毛落。合取狗口好。作家眼目。鋸解稱鎚。

〔隈〕廻の字と同韻にして通用する字、廻避の義。

讀方 擧す。僧香林に問ふ、如何なるか是れ祖師西來意。(大に人の疑着する有り。猶ほ這箇の消息の在る有り。)林曰く、坐久成勞。(魚行けば水濁り、鳥飛べば毛落つ。狗口を合取せば好し。作家の眼目。鋸解稱鎚。)

【評】香林道く、坐久成勞と、還て會すや。若し會得せば、百草頭上に干戈を罷却せん、若し也會せずんば、伏して處分を聽け。古人の行脚、交を結び友を擇び、同行道伴と爲して、撥草瞻風す。此の時雲門、化を廣南に盛にす。香林得々として蜀を出づ、鵝湖、鏡淸同時なり。先づ湖南の報慈に參ず、後ちに方さに、雲門の會下に至る。侍者と作ること十八年、雲門の處に在りて親しく得、親しく聞く。他悟時晩しと雖も、妨げず是れ大根器なることを、雲門の左右に居ること十八年、雲門常に、只だ遠侍者と喚ぶ。纔かに應諾すれば、

〔香林〕益州青城の香林院澄遠禪師のこと、雲門に嗣法す。〔鵝湖〕信州鵝湖の智孚禪師、雪峯の法嗣なり。〔報慈〕潭州報慈の人、匡化

禪師なり龍牙に嗣ぐ。

〔川〕蜀の四川なり

門曰く、是れ什麽ぞ。香林當時、也た下語して見解を呈す、精魂を弄して、終に相契はず、一日忽ち曰く、我會せりと。門曰く、何ぞ向上に道ひ將ち來らざる。又住すること三年。雲門室中に、大機辯を垂るゝこと、多半は他の遠侍者の隨處に入作せんが爲めなり。雲門凡そ一言一句有る、都て遠侍者の處に收在す。香林後ちに蜀に歸る、始め導江の水晶宮に住す、後ちに青城の香林に住す。智門の祚和尚、本と浙の人なり、盛に香林の道化を聞て、特に來りて蜀に入りて參禮す、祚は乃ち雪竇の師なり。雲門人を接すること、無數なりと雖も、當代道行の者、只だ香林の一派最も盛なり。川に歸て住院すること四十年、八十歲にして方さに遷化す。嘗て曰く、我れ四十年、方さに打成一片と。凡そ衆に示して曰く、大凡そ行脚して、知識に參尋せんとす、眼を帶して行かんことを要す、須らく緇素を分

〔三句〕隨波逐浪の句、截斷衆流の句、函蓋

ち深淺を看て、始めて得べし、先づ須らく志を立つべし。釋迦老子、因地に在せし時、一言一念を發すること、皆是れ志を立つ。後來僧問ふ、如何なるか是れ室內一盞の燈。林曰く、三人龜を證して鼈と成す。又問ふ、如何なるか是れ衲衣下の事。林曰く、臘月火山を燒く。古來祖師意に答ふること甚だ多し、唯だ香林の此の一則、天下人の舌頭を坐斷す。汝が計較して、道理を作す處無し。僧問ふ、如何なるか是れ祖師西來意。林曰く、坐久成勞と。謂つべし言無味、句無味、無味の談、人口を塞斷す、汝が氣を出す處無し。見んと要せば便ち見よ、若し見ずんば、切に忌む解會をなすことを。香林嘗て作家に遇ひ來れり、所以に雲門の手段有り、三句の體調有り。人多く錯て會して道ふ、祖師西來意、九年面壁、豈に是れ坐久成勞にあらずやと、什麽の巴鼻か有らん。他の古人、大自在を得る

乾坤の句

〔麻の如く……〕澤山あること。

處を見ず、他は是れ脚實地を踏んで、許多の佛法の知見道理無し、時に臨んで應用す。所以に謂ゆる法は法に隨つて行じ、法幢は處に隨つて建立す。雪竇風に因て火を吹いて、傍に一箇半箇を指出す。

頌。一箇半箇、千萬箇。何不依而行之。如麻似粟。成群作隊作什麼。脫卻籠頭、卸角馱。從今日去應須灑々落々。還休得也未。左轉右轉、隨後來。猶自放不下。影影響々。便打。紫胡、要打劉鐵磨。山僧拗折柱杖子更不行此令。賊過後張弓。便打。嶮。

讀方 一箇半箇、千萬箇。(何ぞ依て之れを行ぜざる。麻の如く粟に似たり。群を成し隊を作して、什麼か作さん。)籠頭を脫却し、角馱を卸す。(今日より去て、應に須らく灑々落々たる可し。還て休し得るや、也た未だしや。)左轉右轉、後に隨て來る。(猶ほ自ら放不下。影々響々。便ち打つ。)紫胡、劉鐵磨を打たんことを要す。(山僧、柱杖子を拗折して、更らに此の令を行ぜず。賊過ぎて後ち弓を張る。便ち打つ。嶮。)

〔紫胡〕子胡なり、衢州子胡巖の利蹤禪師のこと、南泉の弟子。

〔劉鐵磨〕比丘尼にして機鋒鋭き豪傑なり。

〔籠頭〕馬の鼻づらをとる綱のこと。

〔角馱〕馬の背に積む荷物のこと。

【評】 雪竇直下に、擊石火の如く、閃電光に似たり、拶出して放つて、汝をして見せしむ。聊か擧着するを聞いて、便ち會して始めて得てん。也た妨げず是れ他の屋裏の兒孫にして、方さに能く恁麼に道ふことを。若し能く直下に、便ち恁麼に會し去らば、妨げず奇特なることを。一箇兩箇、千萬箇。籠頭を脫却して、角馱を卸すと、灑灑落々として、生死の所染を被らず、聖凡情解の所縛を被らず、上攀緣無く、下己躬を絕す、一へに他の香林、雪竇の如くに相似たり。何ぞ必らずしも只だ是れ千萬箇のみならん。直に得たり、盡大地の

こと。

人、悉く皆此の如く、前佛後佛も、也た悉く皆此の如きことを。苟し或は言句の中に於て、解會を作さば、便ち紫胡の、劉鐵磨を打たんことを要するに似て相似たり。其れ實には纔かに擧せば、聲に和して便ち打たん。紫胡、南泉に參ず、趙州の岑大蟲と同參。時に劉鐵磨、潙山下に在りて、庵を卓し、諸方皆他を奈何ともせず、一日紫胡、得々として去て訪うて曰く、便ち是れ劉鐵磨なること莫しや否や。磨曰く、不敢。胡曰く、左轉か右轉か、磨曰く、和尚顚倒すること莫れ。胡、聲に和して便ち打つ。香林這の僧、如何なるか是れ祖師西來意を問ふに答へて、却て曰く、坐久成勞と。若し恁麼に會せば、左轉右轉、後に隨て來る。且らく道へ、雪竇此の如く頌出する意作麼生。無事にして好し、試に擧す看よ。

第十八則　國師塔樣

擧。肅宗皇帝本是代宗此誤。問忠國師、百年後所須何物。預搔待痒。果然起模畫樣。老々大々作這去就。不可指東作西。國師曰、與老僧作箇無縫塔。把不住。帝曰、請師塔樣。好與一劄。國師良久曰、會麼。停囚長智。直得指東劃西、將南作北。直得口似匾擔。帝曰、不會。國師曰、吾有付法弟子耽源、却諳此事、請詔問之。賴値不撥倒禪床。何不與他本分草料。莫搽胡人好。放過一着。國師遷化後可惜。果然錯認定盤星。帝詔耽源、問此意如何。子承父業去。也落在第二頭第三頭。源曰、湘之南潭之北。

〔忠國師〕南陽の慧忠國師なり、六祖慧能禪師の法嗣。

也是把不住。兩々三三作什麼。半開半合。雪竇着語曰、獨掌不浪鳴。一盲引衆盲。果然隨語生解。隨邪逐惡作什麼。中有黃金充一國。上是天下是地。無這箇消息。是誰分上事。雪竇着語曰、山形拄杖子、拗折了也。也是起模畫樣。無影樹下合同船。祖師喪了也。闍黎道什麼。雪竇着語曰、海晏河清。洪波浩渺白浪滔天。猶較些子。瑠璃殿上無知識。咄。雪竇着語曰、拈了也。賊過後張弓。言猶在耳。

讀方　擧す。肅宗皇帝、（本是れ代宗、此には誤る。）忠國師に問ふ、百年の後ち、須ふる所何物ぞ。（預め搔て痒を待つ。果然、模を起し樣を畫す。老々大々、這の去就を作す。東を指して西と作す可からず。）國師曰く、老僧が與めに、箇の無縫塔を作れ。（把不住。）帝曰く、

〔口匾擔〕への字口と云ふことにて、無言の形容。

〔異然〕果

請ふ師塔樣。（好し一割を與ふるに。）國師良久して曰く、會すや。（因に停て智を長ず。直に得たり東を指し西を劃し、南を將て北と作すことを。直に得たり口匾擔に似ることを。）帝曰く、不會。（賴に不會に値ふ。當時更らに一摻を與へて、伊をして滿口に霜を含ましむ。却て些子に較れり。）國師曰く、吾に付法の弟子、耽源と云ふもの有り、却て此事を諳んず、請ふ詔して之れに問へ。（賴に禪床を掀倒せざるに値ふ。何ぞ佗に本分の草料を與へざる。人を探胡すること莫くんば好し。一着を放過す。）國師遷化の後ち、（惜しむ可し。果然として錯て定盤星を認む。）帝耽源に詔して、此の意如何と問ふ。子は父の業を承け去れり。也第二頭第三頭に落在す。）源曰く、湘の南潭の北。（也是れ把不住。兩々三三什麼をか作さん。半開半合。）雪竇著語して曰く、獨掌浪りに鳴らず。（一盲衆盲を引く。果然とし

て語に隨て解を生ず。邪に隨て惡を逐うて、什麼か作す。）中に黃金有り、一國に充つ。（上は是れ天、下は是れ地。這箇の消息無し。是れ誰が分上の事ぞ。）雪竇着語して曰く、山形の柱杖子。（拗折了也。也た是れ模を起し樣を畫す。）無影樹下の合同船。（祖師喪し了れり。闍梨什麼と道ふぞ。）雪竇着語して曰く、海晏河淸。（洪波浩渺、白浪滔天。猶ほ些子に較れり。）瑠璃殿上に知識無し。（咄。）雪竇着語して曰く、拈了也。（賊過ぎて後ち弓を張る。言猶ほ耳に在り。）

【評】肅宗、代宗、皆玄宗の子孫なり、太子爲る時、常に參禪を愛す。國に巨盜有るが爲めに、玄宗遂に蜀に幸す、唐本と長安に都す、安祿山が爲めに借據せられて、後ちに洛陽に都す。肅宗攝す。是の時忠國師、鄧州の白崖山に在て住庵す。今の香嚴の道場是れなり。四十餘年山を下らず、道行千里に聞ゆ。上元二年、中使に勅し

せる哉と云ふが如し。
〔肅宗〕玄宗の第三子。
〔代宗〕肅宗の長子
〔太子たる時〕これ肅宗の

て、詔して入內せしむ、待するに師の禮を以てし、甚だ之れを敬重す。嘗て帝と與に無上道を演ず、師朝より退く、帝自ら車を攀ぢて之れを送る。朝臣皆慍れる色有り、其の不便を奏せんと欲す。國師他心通を具して、先づ聖に見えて奏して曰く、我天帝釋の前に在りて、粟散天子を見るに、閃電光の如くに相似たり。帝愈々敬重を加ふ。代宗臨御に及んで、復た延いて光宅寺に止まらしむること十有六載、隨機說法、大曆十年に至り遷化す。山南府の靑銼山和尙、昔し國師と同行たり、國師嘗て帝に奏して、他に詔せしむ。三度招すれども起たず、常に國師の、名に耽り利を愛し、人間に戀着することを罵る。國師他の父子三朝の中に於て、國師と爲り、他家の父子、一時に參禪す。傳燈錄に考ふる所に據れば、此れは乃ち是れ代宗の設くる問なり。若し是れ國師に、如何なるか是れ十身調御と問ふは、

ことなり
〔上元〕は肅宗帝の年號なり
〔大曆〕代宗帝の年號なり。
〔三朝〕は二朝の誤りにして肅宗、代宗のこと

第十八則　國師塔樣

なりと。

此れ却て是れ肅宗の問なり。國師緣終て、將さに涅槃に入らんとす、乃ち代宗を辭す。代宗問うて曰く、國師百年の後ち、須ふる所何物ぞやと、也た只だ是れ平常一箇の問端なり、這の老漢、風なきに浪を起す。却て道ふ、老僧が與めに、箇の無縫塔を造れと。且らく道へ、白日青天、此の如くにして什麼か作さん。箇の塔を倣る時は便ち了ぜん、什麼としてか却て道ふ、箇の無縫塔を倣れと。代宗也た妨げず作家なることを、汝に一拶を與へて道く、請ふ師塔樣と。國師良久して曰く、會すや。奇怪なり這の些子、最も是れ參じ難し。大少の國師、他に一拶せられて、直に得たり、口匾擔に似たること を。然も此の如くなりと雖も、若し是れ這の老漢にあらずんば、幾乎ど弄倒され了らん。多少の人道ふ、國師不言の處、便ち是れ塔樣と。若し恁麼に會せば、達磨の一宗、地を掃うて盡きん。若し良久して、

〔却て些子……〕方語なり、少分相應する

便ち是と謂はゞ、啞子も也た禪を會す合し。豈に見ずや、外道佛に問ふ、有言を問はず、無言を問はずと。世尊良久す。外道禮拜し、贊嘆して曰く、世尊大慈大悲、我が迷雲を開いて、我をして得入せしむと。外道去るに及んで、後ち阿難佛に問ふ、外道何の所證有て、而も得入と言ふや。世尊曰く、世の良馬の鞭影を見て行くが如し。人多くは、良久の處に向て會す、什麼の巴鼻か有らん。五祖先師拈じて曰く、前面は是れ珍珠瑪瑙、後面は是れ瑪瑙珍珠、左邊は是れ觀音勢至、右邊は是れ文殊普賢、中間に箇の旛子有て、風に吹着せられて、胡盧胡盧と道ふと。國師曰く、會すや。帝曰く、不會と。却て些子に較れり。且らく道へ、這箇の不會と、武帝の不識と、是れ同か是れ別か、然も似ることは則ち似たりと雖も、是なることは則ち未だ是ならず。國師曰く、吾に付法の弟子、耽源と云ふ者あり。

こと。(性空)潭州石霜の性空禪師なり。(湖南の暢和尚云々)杜撰少なからずと云ふ方語。

却て此の事を諳んず、請ふ詔して之れに問へと。雪竇拈じて曰く、獨掌浪りに鳴らず。代宗の會せざることは且らく置く、耽源還て會すや。只だ箇の請ふ師塔樣と道ふを消する、盡大地の人、奈何ともせず、五祖先師拈じて曰く、汝は是れ一國の師、箇の什麼と爲てか道はずして、却て弟子に推與する。國師遷化の後ち、帝耽源に詔し、此の意如何と問ふ。源便ち來て、國師の爲めに、胡言漢語して道理を說き、自然に國師の說話を會す、只だ一頌を消す、(祖庭事苑に齊の時と出づ。)湘の南、潭の北、中に黃金有り、一國に充つ、無影樹下の、合同船、瑠璃殿上に、知識無しと。耽源名は應眞、國師の處に在りて侍者と作る、後ち吉州の耽源寺に住す。時に仰山來て耽源に參ず、源言は重く性は惡くして犯すべからず、住することを得ず。仰山先づ去て、性空禪師に參ず。僧有り性空に問ふ、如何なるか是れ祖師西來意。空曰く、人千尺の井中に在るが如き、寸繩を假らずして、此の人を出し得ば、即ち汝に西來意を答へん。僧曰く、近日湖南の暢和尚、亦人の爲めに東語西話す。空乃ち沙彌と喚び、這の死屍を拽出着せよ。(沙彌は仰山なり。)山後ちに擧して耽源に問ふ、如何か井中の人を出し得ん。耽源曰く、咄、痴漢、誰か井中に在る。仰山契はず。後ち潙山に問ふ。山乃ち惠寂と呼ぶ。山應諾す。潙曰く出了也、仰山此に因て大悟す。我れ耽源の處に在て體を得、潙山の處に用を得たり。只是れ這の一箇の頌子、人の邪解を引くこと少なからず。人多く錯會して道ふ、相は是れ相見、譚は是れ譚論、中間に箇の無縫塔有り、所以に道ふ、中に黃金有りて、一國に充つ。帝國師と對答す、便ち是れ無影樹下の、合同船。帝會せず、遂に道ふ瑠璃殿上に、知識なしと。又有底は道ふ、湘は是れ湘州の

〔眨〕まじろぐ、眼を動かす貌。

南、譚は是れ譚州の北と。中に黃金有りて、一國に充つとは、官家を須ふと。眨眼顧視して曰く、這箇は是れ無縫塔と、若し恁麼に會せば、情見を出でず。只だ雪竇、四轉語を下すが如きんば、又作麼生か會せん。今の人殊に古人の意を知らず、且らく道へ、湘の南潭の北、汝作麼生か會す。中に黃金有りて、一國に充つ、汝作麼生か會す。無影樹下の、合同船、汝作麼生か會す。瑠璃殿上に、知識なし、汝作麼生か會す。若し恁麼に見得せば、妨げず平生を慶快することを。湘の南潭の北。雪竇道く、獨掌浪りに鳴らずと。已むことを得ず汝が與めに說く、中に黃金有りて、一國に充つ、雪竇道く、山形の柱杖子と。古人道く、柱杖子を識得せば、一生參學の事畢ぬと。無影樹下の合同船。雪竇道く、海晏河淸と。一時に戶牖を豁開して、八面玲瓏たり、瑠璃殿上に、知識なし。雪竇道く、拈

〔下語〕古則公案等に一轉語を下すこと。

〔大小大〕龍頭蛇尾と云ふが

了也と。一時に汝が與めに、說き了れり、妨げず見難きことを。見得せば也た好し、只だ是れ些子も、錯て認むる處有らば、語に隨て解を生ず。末後に至て道く、拈了也と、却て些子に較れり。雪竇分明に、一時に下語し了て、後面に單に箇の無縫塔子を頌す。

頌。無縫塔、這一縫大小大。道二什麼一。見還難。非二眼可一レ見。瞎。澄潭不レ許、蒼龍蟠。見麼。洪波浩渺。蒼龍向二什麼一蟠。這裏直得模索不着。層落々莫二眼花一。眼花作二什麼一。影團々。通身是眼。落七落八。兩々三三舊路行。左轉右轉隨レ後來。千古萬古、與レ人看。見麼。瞎漢作麼生看。闍梨覰得見麼。

讀方　無縫塔、（這の一縫大小大。什麼と道ふぞ。）見ること還て難し。（眼の見るべきに非ず。瞎。）澄潭には許さず、蒼龍の蟠ることを。

如し、下大の字は衍字なり

(見るや。洪波浩渺。蒼龍什麼處に向てか蟠る。這裏直に得たり、模索不着なることを。)層落々、(眼花すること莫れ。眼花して什麼と作す。)影團々。(通身是れ眼。七に落ち八に落つ。兩々三三舊路に行く。左轉右轉、後に隨て來る。)千古萬古、人に與へて看せしむ。(見るや。瞎漢作麼生か看ん。闍梨覷得見すや。)

【評】雪竇當頭に道ふ、無縫塔、見ること還て難しと。然も獨露私なしと雖も、則ち是れ見んと要する時、還て難し。雪竇、忒煞だ慈悲、更らに汝に向て道ふ、澄潭には許さず、蒼龍の蟠ることをと。五祖先師道く、雪竇の頌古一冊、我は只だ他の、澄潭には許さず、蒼龍の蟠ることをと云ふ一句を愛すと、猶ほ些子に較れり。多少の人、他の國師良久の處に去て、活計を作す。若し恁麼に會せば、一時に錯り了れり。也た道ふことを見ずや、臥龍止水を鑒みず、無處には月有て波澄み、有處には風無うして浪起る。又道ふ、臥龍長へに怖る、碧潭の清きことを。若し是れ這箇の漢ならば、直饒ひ洪波浩渺、白浪滔天なるも、亦裏許に在て蟠らず。雪竇此に到て頌し了る。後頭に些子の眼目を着けて、一箇の無縫塔を琢出す。後に隨うて說て道ふ、層落々、影團々。千古萬古、人に與へて看せしむと。汝作麼生か看る、即今什麼の處にか在る。直饒ひ汝見得して分明なるも、也た錯て定盤星を認むること莫れ。

(層落々影團々)塔樣を形容したる語。

第十九則　倶胝一指

垂示曰。一塵擧大地收、一花開世界起。只如塵未擧、花未開時如何着眼、所以道、如斬一綟絲、一斬一切斬、如染一綟絲、一染一切染。只如今便將葛藤截斷、運出自

己家珍、高低普應、前後無差、各々現成。儻或未然、看取下文。

讀方　垂示に曰く。一塵擧て大地收り、一花開いて世界起る。只だ塵未だ擧らず、花未だ開かざる時、如何か眼を着けん。所以に道ふ、一綟絲を斬るが如し、一斬一切斬、一綟絲を染むるが如し、一染一切染と。只だ如今便ち葛藤を將て截斷して、自己の家珍を運出せば、高低普く應じ、前後差ふこと無し、各々現成せん。儻し或は未だ然らずんば、下文を看取せよ。

擧。俱胝和尙、凡有所問、有什麼消息。鈍根阿師。只豎一指。這老漢也要坐斷天下人舌頭。熱則普天普地熱、寒則普天普地寒。換却天下人舌頭。

讀方　擧す。俱胝和尙、凡そ所問あれば、(什麼の消息か有る。鈍根の阿師。)只だ一指を竪つ。(這の老漢、也た天下人の、舌頭を坐斷せんことを要す。熱する時は、則ち普天普地熱し。寒する時は、則ち普天普地寒ず。天下人の舌頭を換却す。)

【評】　若し指頭上に向て會せば、則ち俱胝に辜負せん、若し指頭上に向て會せずんば、則ち生鐵鑄就すに相似ん。會も也た恁麼にし去り、不會も也た恁麼にし去り、高も也た恁麼にし去り、低も也た恁麼にし去り、是も也た恁麼にし去り、非も也た恁麼にし去る。所以に道ふ、一塵纔かに起て、大地全く整り、一花開かんと欲して、世界便ち起る、一毛頭の獅子、百億毛頭に現ずと。圓明道く、寒する時は、則ち普天普地寒し、熱する時は、則ち普天普地熱すと、山河大地、下黃泉に徹し、森羅萬象、上霄漢に通ず。且らく道へ、是れ什麼物か、恁麼に奇怪なることを得たる。若し也た識得せば、一揑

〔俱胝〕南嶽下五世、達磨十一代の孫、婺州金華山に住せし天龍和尙なり、一指頭の禪を受く

〔圓明〕德山の緣密圓明禪師のこと。

を消せじ、若し識不得ならば、人を礙塞殺せん。倶胝和尚は、乃ち婺州金華の人なり。初め住庵の時、一尼有り實際と名く、庵に到て直に入て、更らに笠を下さず、錫を持して禪牀を遶ること、三匝して曰く、道ひ得ば即ち笠を下さんと。此の如く三たび問ふ。倶胝對無し、尼便ち去る。倶胝曰く、天勢稍や晩れぬ、且く留て一宿せよ。尼曰く、道ひ得ば即ち宿せん。胝又對無し。尼便ち行く、胝嘆じて曰く、我丈夫の形に處すと雖も、而も丈夫の氣無し。遂に發憤して、庵を棄て諸方に往て參請し、打疊行脚せんことを要すと。其夜山神告げて曰く、此を離るべからず　來日肉身の菩薩有て、來て和尚の爲めに說法せん、去ることを須ひざれと。果して是の次の日、天龍和尚庵に到る。胝乃ち迎禮して、具さに前事を陳ぶ。天龍、只だ一指を竪て丶之れに示す。胝忽然として大悟す。是れ他當時、鄭重に專注す、所以に桶底脫し易し。後來凡そ所問あれば、只だ一指を竪つ。長慶曰く、美食飽人の喫に中らず。玄沙道く、我當時若し見えたらば、指頭を拗折せんと。玄覺曰く、玄沙恁麼に道ふ、意作麼生。雲居の錫曰く、只だ玄沙、恁麼に道ふが如きんば、是れ伊を肯ふか、是れ伊を肯はざるか、若し伊を肯はゞ、何ぞ指頭を拗折せんと言ふ、若し伊を肯はずんば、倶胝過什麼の處にか有る。先曹山曰く、倶胝承當の處、莽鹵なり、只だ一機一境を認得す、一等に是れ手を拍ち掌を撫す、他の西園を見るに奇怪なりと。玄覺又曰く、且らく道へ、倶胝還て悟るや、也た未だしや、什麼としてか承當の處莽鹵なる。若し是れ悟らずんば、又道ふ平生只だ一指頭を用ひ盡さずと。且らく道へ、曹山の意什麼の處にか在る。當時倶胝、實に然も會せずんば、他の悟後に到るに及んで、凡そ所問有れば、只一

〔天龍〕杭州天龍の人、大梅法常禪師に法を嗣ぐ。
〔玄覺、雲居〕共に法を法眼に嗣ぐ。
〔先曹山〕本寂禪師のこと。
〔西園〕南岳の西園、馬祖に嗣法す。

〔明招〕德

指を竪つ、什麼に因てか、千人萬人、羅籠すれども住せず、他を撲すれども破らざる。汝若し用ひて、指頭の會を作さば、決定して古人の意を見ず。這般の禪は參じ易し、只だ會し難し。如今の人纔かに問着すれば、也た指を竪て拳を竪つ。只だ是れ精魂を弄す、也た須く是れ徹骨徹髓、見透して始めて得べし。倶胝庵中に一りの童子有り、外に於て人に詰られて曰く、和尚尋常、何の法を以て人に示すと、童子指頭を竪起す。歸て師に擧似すれば、倶胝刀を以て、其指頭を斷つ。童子叫喚して走り出づ。倶胝召すこと一聲、童子首を回す。倶胝却て指頭を竪起す、童子豁然として領解す、且らく道へ、箇の什麼の道理をか見る。遷化に至るに及んで、衆に謂て曰く、吾れ天龍の、一指頭の禪を得て、平生用ひ盡きず、會せんと要すやと云うて、指頭を竪起し、便ち脫去す。後來明招の獨眼龍、國泰の

謙のこと羅山道閑の嗣左眼を失せるが故に獨眼龍と云ふ。

〔國泰の深師叔〕の國泰院の瑫和尚のこと、即ち道深師之れなり。

〔秘魔〕岩和尚、法を永泰の靈湍に嗣ぐ。

〔打地和尚〕馬祖の法嗣。

深師叔に問うて曰く、古人道く、倶胝只だ三行の呪を念じて、便ち名一切の人に超ゆることを得たりと、作麼生か他の與めに、三行の頌を拈却せん。深亦一指頭を竪起す。招曰く、今日に因らずんば、爭でか這の瓜州の客を識得せん。且らく道へ、意作麼生。秘魔は平生、只だ一杈を用ひ、打地和尚は、凡そ所問有れば、只だ地を打つこと一下す。後ち人に他の棒を藏却して、却て如何なるか是れ佛と問はれて、他只だ口を張る、亦是れ一生用ひ盡さず。無業曰く、祖師此土に、大乘の根器有ることを觀て、唯だ心印を單傳して、迷塗を指示す。之れを得る者は、愚と智と凡と聖とを揀ばず、且つ虛の多からんよりは、實の少なからんには如かず。大丈夫の漢、即今直下に休歇し去て、頓に萬緣を息め去らば、生死の流れを超えて、逈かに常格を出でん。縱ひ眷屬莊嚴あるも、求めざるに自ら得。無業

一生、凡そ所問有れば、只だ道く莫妄想と。所以に道ふ、一處透れば、千處萬處一時に透る、一機明なれば、千機萬機一時に明らかなりと。如今の人、總に不恁麼、只管に意を恣にして情解し、他の古人、省要の處を會せず、他豈に是れ機關轉換の處無からざらんや。什麼としてか只だ一指頭を用ふる、須らく知るべし、倶胝這裏に到て、深密爲人の處有ることを。省力を會得せんと要すや、他の圓明の、寒する時は、則ち普天普地寒し、熱する時は、則ち普天普地熱すと道ふを還す。山河大地、通上孤危、萬象森羅、徹下嶮峻、什麼れの處よりか、一指頭の禪を得來る。

〔無業〕馬祖に法を嗣ぐ。
〔不恁麼〕然らず、又は是の如くならずと云ふこと、宋時代の俗語。

頌。對揚深愛、老倶胝。（獺兒牽レ伴。同道方知。）宇宙空來、更有レ誰。（兩箇三箇。更有二一箇一。也須二打殺一。）曾向二滄溟一、下二浮木一。（全是這箇。是則是、太孤峻生。破草鞋。有二什麼用處一。）夜濤相共接二盲龜一。（撈レ天摸レ地。有二什麼了期一。接得堪レ作二何用一。據レ令而行。趕二向無佛世界一。接二得闍梨一箇瞎漢一。）

讀方 對揚深く愛す、老倶胝。（獺兒伴を牽く。同道方さに知る。）宇宙空し來るに、更らに誰か有らん。（兩箇三箇。更らに一箇有り。也た須らく打殺すべし。）曾て滄溟に向て、浮木を下す。（全く是れ這箇。是なることは則ち是なり、太孤峻生。破草鞋、什麼の用處か有らん。）夜濤相共に盲龜を接す。（天を撈し地を模す。什麼の了期か有らん。接得して何の用をか作すに堪へん。令に據て行ふ。無佛世界に趕向せん。闍梨一箇の瞎漢を接得す。）

〔是〕肯諾の意、宜しいと云ふこと。
〔破草鞋〕用に立たぬこと。

【評】雪竇四六の文章を會して、七通八達。凡そ是れ譎訛奇特の公

案、偏に去て頌することを愛す。對揚深く愛す、老俱胝、宇宙空じ來るに、更らに誰か有らんと。今時の學者、古人を抑揚す、或は賓或は主、一問一答、當面に提持して、此の如く爲人の處有り。所以に道ふ、對揚深く愛す、老俱胝と。且らく道へ、雪竇他を愛して什麼か作さん。天地開闢より以來、更らに誰人か有らん、只だ是れ俱胝老一箇なり。若し是れ別人ならば、須らく參雜すべし、唯だ是れ俱胝老、只だ一指頭を用ゐて、直に老死に至る。時の人多く邪解して道ふ、山河大地も也た空じ、人も也た空じ、法も也た空じ、直饒ひ宇宙、一時に空じ來るも、只だ是れ俱胝老一箇と。且得すらくは沒交涉。曾て滄溟に向て、浮木を下す、如今之れを生死海と謂ふ。衆生業海の中に在て、頭出頭沒して、自己を明めず、出期有ること無し。俱胝老慈を垂れて物を接す、生死海の中に於て、一指頭を用ゐて人を接す、浮木を下して、盲龜を接するに似て相似たり、諸々の衆生をして、彼岸に到ることを得せしむ。夜濤相共に、盲龜を接す、法華經に曰く、一眼の龜浮木の孔に値うて、沒溺の患無きが如しと。大善知識、一箇の龍の如く、虎に似たる底の漢を接得して、他をして有佛世界に向て、互に賓主と爲り、無佛世界に、要津を坐斷せしめん。箇の盲龜を接得して、何の用を作すにか堪へん。

〔盲龜浮木〕稀有難得の義

第二十則　龍牙禪板

垂示曰。堆山積嶽、撞墻磕壁、佇思停機、一場苦屈。或有箇漢出來、掀翻大海、踢倒須彌、喝散白雲、打破虛空。直下向一機一境、坐斷天下人舌頭、無汝近傍處。且道、從上來、是什麼人、曾恁麼。試擧看。

（堆山積嶽云々）無限の空間に充滿して、到る處に普くあると云ふ意。

讀方 垂示に曰く。堆山積嶽、撞牆磕壁、佇思停機せば、一場の苦屈。或は箇の漢有て出で來て、大海を掀翻し、須彌を踢倒し、白雲を喝散し、虚空を打破して、直下に一機一境に向て、天下人の舌頭を坐斷せば、汝が近傍の處無し。且らく道へ、從上來、是れ什麼人か、曾て什麼なる。試に擧す看よ。

擧。龍牙問翠微、如何是祖師西來意。諸方舊話、也要勘過。微曰、與我過禪板來。用禪板作什麼。泊合放過。嶮。牙過禪板、與翠微。也是把不住。駕與青龍、不解騎。可惜許。當面不承當。微接得便打。着。打得箇死漢濟甚事。也落在第二頭了也。牙曰、打即任打、要且無祖師西來意。這漢話在第二頭。賊過後張弓。牙又問臨濟如何是祖師西來意。諸方舊公案、再問將來。不直半文錢。濟曰、與我過蒲團來。曹溪波浪如相似、無限平人被陸沈。一狀領過。一坑埋却。牙取蒲團過與臨濟。依前把不住。依前不伶俐。依稀越國、髣髴楊州。濟接得便打。着。可惜打這般死漢。一模脫出。牙曰、打即任打、要且無祖師西來意。灼然。在鬼窟裏作活計。將謂得便宜。賊過後張弓。

（龍牙）湖南の龍牙山妙濟院に住した居遁禪師のこと、後ち證空大師と諡せらる

讀方 擧す。龍牙翠微に問ふ。如何なるか是れ祖師西來意。（諸方の舊話、也た勘過せんことを要す。）微曰く、我が與めに禪板を過し來れ。（禪板を用ひて什麼か作さん。泊ど放過す合し。嶮。）牙禪板を過して、翠微に與ふ。（也た是れ把不住。青龍に駕與すれども、騎ることを解せず。可惜許。當面に承當せず。）微接得して便ち打つ。（着。箇

ろ、法を青原下五世の洞山悟本大師に嗣ぐ、達磨大師十二世の孫。〔翠微〕京兆終南山の無學禪師のこと、青原下三世丹霞天然禪師に嗣法す龍牙の祖父なる雲居と法の從兄弟なり、故に龍牙よりは先輩。

の死漢を打得して、甚の事をか濟す。也た第二頭に落在し了れり。）牙曰く、打つことは即ち打つに任す、要且つ祖師西來意無し。（這の漢第二頭に話在す。賊過ぎて後ち弓を張る。）牙又臨濟に問ふ、如何なるか是れ祖師西來意。（諸方の舊公案、再び問ひ將ち來る。半文錢に直せず。）濟曰く、我が與めに蒲團を過し來れ。（曹溪の波浪、如し相似たらば、限り無き平人に陸沈せられん。一狀に領過し、一坑に埋却す。）牙蒲團を取て、臨濟に過與す。（依前として把不住。依前として不伶俐。越國に依稀として、楊州に髣髴たり。）濟接得して便ち打つ。（着。惜しむべし、這般の死漢を打つことを。一模に脫出す。）牙曰く、打つことは即ち打つに任す、要且つ祖師西來意無し。（灼然。鬼窟裏に在りて、活計を作す。將さに謂へり便宜を得と。賊過ぎて後ち弓を張る。）

〔翠巖〕瑞州大愚の守芝禪師、後ちに翠巖に住す。〔潙山〕潭州大潙の慕喆眞如禪師。

【評】翠巖の芝和尙曰く、當時是の如し、今時の衲子、皮下還て血有りや。潙山の喆曰く、翠微、臨濟、謂つ可し本分の宗師と。龍牙一等に、是れ撥草瞻風す、妨げず後人の與めに、龜鑑となることを。牙曰く、肯ふことは即ち肯ふ、只だ是れ祖師西來意なし。龍牙前を瞻後を顧て、病に應じて藥を與ふ。大潙は則ち然らず、伊が、和尙當時住院の後ち、僧有り問ふ、和尙當時、還て二尊宿を肯ふやと問はんことを待て、明不明、劈脊に便ち打たん。惟だ翠微臨濟を扶竪するのみに非らず、亦來問に辜負せず。石門の聰曰く、龍牙、人の撈着する無くんば猶ほ可なり、箇の衲子に撈着せられて、一隻眼を失却す。雪竇曰く、臨濟翠微、只だ把住することを解して、放開することを解せず、我當時、如し龍牙と作らば、伊が蒲團禪板を索かんを待て、拈起して劈面に便ち打たん。五

〔土宿〕土曜星のこと、九曜の中の一凶星にして歳運之れに當る時は災害多しと、故に方語に命懸絲の如しと云ふ。

祖の戒曰く、和尚恁麼に面長なることを得。或は曰く、祖師土宿頭に臨むと。黃龍の新曰く、龍牙は耕夫の牛を驅り、飢人の食を奪ふ。既に明らかなることは、則ち明らかなり、什麼に因て、却て祖師西來意無きや、會すや。棒頭眼あり、明なること日の如し、眞金を識らんと要せば、火裏に看よ。大凡そ要妙を激揚し、宗乘を提唱せんには、第一機の下に向て明得して、以て天下人の舌頭を坐斷すべし。儻し或は躊躇せば、第二に落在せん。這の老漢、然も風を打し雨を打し、天を驚かし地を動かすと雖も、要且つ曾て這箇の明眼の漢を打着せず。古人の參禪、多少か辛苦する、大丈夫の志氣を立して、山川を經歷し、尊宿に參見す。龍牙先づ翠微臨濟に參じ、後ちに德山に參ず。遂に問ふ、學人鏌鎁の劍に仗て、師の頭を取らんと擬する時如何。德山頭を引て曰く、囮。牙曰く、師の頭落ちぬ。山微笑して、便ち休し去る。次に洞山に到る。洞山問ふ、近離甚の處ぞ。牙曰く、德山より來る。洞山曰く、德山何の言句か有りし。牙遂に前話を擧す。洞山曰く、他什麼とか道ひし。牙曰く、他無語。洞山曰く、道ふこと莫れ語無しと、且らく試に德山落る底の頭を將て、老僧に呈似せよ看ん。牙此に於て省有り、遂に香を焚いて、遙かに德山を望んで、禮拜懺悔す。德山聞いて曰く、洞山老漢、好惡を識らず、這の漢死し來ること、多少の時ぞ、救ひ得るとも什麼の用處か有らん、從す他老漢が頭を擔うて、天下を遶り走ることを。龍牙根性聰敏、一肚皮の禪を擔うて行脚す、直に長安の翠微に向て、便ち問ふ、如何なるか是れ祖師西來意。微曰く、我が與めに禪板を過し來れ。牙禪板を取て、微に與ふ。微接得して便ち打つ。牙曰く、打つことは即ち打つに任す、要且つ祖師西來意なし。又臨濟に問ふ、

〔懺悔〕前非を後悔し謝して正善に向ふこと。

〔五洩〕婺州五洩の靈默禪師のこと、馬祖に法を嗣ぐ。〔麻谷、章敬〕共に是れ南泉の法嗣。〔南泉〕普願禪師、馬祖に嗣ぐ。

如何なるか是れ祖師西來意。濟曰く、我が爲めに蒲團を過し來れ。牙蒲團を取て、臨濟に與ふ。濟接得して便ち打つ。牙曰く、打つことは即ち打つに任す、要且つ祖師西來意なし。他箇の問端を致す、妨げず他の、曲彔木床上の老漢を見んと要し、亦自己一段の大事を明らめんと要することを。謂つべし言慮りに設けず、機亂りに發せず、做工夫の處に出在すと。見ずや五洩、石頭に參ず、先づ自ら約して曰く、若し一言に相契はゞ、即ち住らん、然らずんば即ち去らんと。石頭據座、洩拂袖して出づ。石頭是れ法器なることを知て、即ち開示を垂る。洩其旨を領せず、告辭して出で、門に至る。石頭之れを呼んで曰く、闍梨と。洩、回顧す。石頭曰く、生より死に至るまで、只だ是れ這箇、頭を回らし腦を轉じて、更らに別に求むること莫れと。洩、言下に於て大悟す。又麻谷錫を持して、章敬に到て、禪床を遶ること三匝、錫を振ふこと一下、卓然として立つ、敬曰く、是々。又南泉に到て依前として床を遶り、錫を振うて立つ。谷曰く、章敬は是と道ふ。和尚什麼としてか不是と道ふ。南泉曰く、不是不是、此れは是れ風力の所轉、終に敗壞を成す。谷南泉曰く、章敬は即ち是、是れ汝は不是と。古人也妨げず、提持して此の一件の事を透脱せんと要することを。如今の人、纔かに問着すれば、全く些子の工夫を用ふる處なし。今日も也た只だ是れ恁麼、明日も也た只だ是れ恁麼、汝若し只だ恁麼ならば、盡未來際にも、也た未だ了する日有らず。須らく是れ精神を抖擻して、始めて少分の相應有ることを得べし。汝看よ、龍牙一問を發して道く、如何なるか是れ祖師西來意。翠微曰く、我が與めに禪板を過し來れ。牙、微に過與す。微接得して便ち打つ。牙當時禪板を取る時、豈に翠微、他を打たんと

要することを知らざらんや。也た便ち他會せずと云ふことを得ず、什麼としてか却て禪板を過して他に與ふ。且らく道へ、當機承當得する時、合に作麼生。他活水の處に向て用ひず、自ら死水裏に去て、活計を作して、一向に主宰と作て、便ち道ふ、打つことは即ち打つに任す、要且つ祖師西來意無しと。又走て河北に去て、臨濟に參ず、依前として恁麼に問ふ。濟曰く、我が與めに蒲團を過し來れ。牙、濟に過與す、濟接得して便ち打つ。牙曰く、打つことは即ち打つに任す、要且つ祖師西來意無し。且らく道へ、二尊宿、又法嗣を同じうせず、什麼としてか、答處相似て、用處一般なる。須らく古人、一言一句を、亂りに施爲せざることを知るべし。他後來住院す。僧有り問うて曰く、和尚當時、二尊宿に見ゆ、是れ他を肯ふか、他を肯はざるか。牙曰く、肯ふことは即ち肯ふ、要且つ祖師西來意無しと。爛泥裏に刺有り、放過して人に與ふ、已に第二に落在す。這老漢把得定して、只だ洞下の尊宿と做り得たり、若し是れ德山臨濟の門下ならば、須らく知るべし別に生涯あることを。若し是れ山僧ならば、則ち然らず、只だ他に向て道はん、肯ふことは即ち未だ肯はず、要且つ祖師西來意無しと。見ずや僧大梅に問ふ、如何なるか是れ祖師西來意。梅曰く、西來無意。鹽官聞いて曰く、一箇の棺材、兩箇の死漢。玄沙聞いて曰く、鹽官是れ作家と。雪竇道く、三箇も也た有り。只だ這の僧、祖師西來意を問ふが如きんば、却て他に向て道ふ、西來無意と。汝若し恁麼に會せば、無事界裏に墮在せん。所以に道ふ、須らく活句に參ずべし、死句に參ずること莫れ、活句下に薦得せば、永劫にも忘せず、死句下に薦得せば、自救不了。龍牙恁麼に道ふ、妨げず善を盡すことを。古人道く、相續や也た大に

〔大梅〕法常禪師、馬祖の法嗣。〔鹽官〕齊安和尚、亦馬祖の嗣たり。〔古人〕上

の古人は洞山良价和尙、下の古人は翠微臨濟のこと。

難し、他の古人一言一句、施爲を亂さず、前後相照す、權有り實有り、照有り用有り、賓主歷然として、互換縱橫なり。若し其の親切を辨せんと要せば、龍牙宗乘に昧からずと雖も、奈何せん第二頭に落在することを。當時二尊宿、禪板蒲團を索む、牙、他の意を知らずんばある可からず、是れ他の胸襟裏の事を用ひんと要す。然も是の如くなりと雖も、用ひ得て太だ峻なることを。龍牙恁麼に問ひ、二老恁麼に答ふ、什麼としてか却て、祖師西來意無き。這裏に到て須らく知るべし、別に箇の奇特の處あることを。雪竇拈出して、人をして看せしむ。

頌。龍牙山裏、龍無眼。瞎。謾別人即得。泥裏洗土塊。天下人總知。死水何曾振古風。忽然活時、無奈何。累及天下人出頭不得。禪板蒲團不能用。教阿誰說。汝要禪板蒲團、作什麼。莫是分付闍梨麼。只應分付與盧公。也則分付不着。漆桶莫作這般見解。

〔阿誰〕誰に同じ。

讀方　龍牙山裏、龍に眼無し。（瞎。別人を謾することは即ち得たり。泥裏に土塊を洗ふ。天下の人總に知る。）死水何ぞ曾て、古風を振はん。（忽然として活する時、奈何ともすること無し。累天下人に及び、出頭不得ならしむ。）汝禪板蒲團を要して、什麼をか作す。是れ闍梨に分付すること莫しや。

【評】雪竇欵に據て案を結す、他然も恁麼に頌すと雖も、且らく道へ、意恁麼の處にか在る。甚れの處か是れ眼無き、甚れの處か是

〔道ふことを見ずや死水云云〕とは、首山省念の語なり

〔伊〕彼に同じ。

れ死水の裏。這裏に到て、須らく是れ變通有て、始めて得べし。所以に道ふ、澄潭には許さず、蒼龍の蟠ることを、死水何ぞ曾て獰龍あらんと。道ふことを見ずや、死水龍を藏さずと。若し是れ活底の龍ならば、須らく洪波浩渺、白浪滔天の處に向て去るべし。此れ龍牙走て、死水中に入り去て、人に打せられんと言ふ。他却て道ふ、打つことは即ち打つに任す、要且つ祖師西來意無しと。雪竇死水何ぞ曾て、古風を振はんと道ふことを招き得たり。然も此の如くなりと雖も、且らく道へ、雪竇是れ伊を扶持するか、是れ他の威光を滅するか。人多く錯て會して道ふ、什麼としてか、只だ應さに分付して、盧公に與ふべき。殊に知らず、却て是れ龍牙、分付して人に與ふることを。大凡そ參請は、須らく是れ機上に向て辨別して、方さに他の古人相見の處を見るべし。禪板蒲團、用ふること能はずと。翠微曰く、我が與めに禪板を過し來れ、牙他に過與す、豈に是れ死水裏に、活計を作すにあらずや。分明に是青龍を駕與すれども、只だ是れ他、騎ることを解せず、是れ用ふること能はざるなり。只だ應さに分付して、盧公に與ふべし、往々喚で六祖と作すは非なり、曾て分付して人に與へず。若し分付して人に與へて、用ひて人を打たしめんことを要すと道はゞ、却て箇の什麼をか成し去らん。昔し雪竇自ら呼んで、盧公と爲す。他迹を晦して自ら貽すと云ふに題して曰く、圖畫當年、洞庭を愛す、波心七十二峰青し、而今高臥の、前事を思へば、添へ得たり盧公が、石屛に倚りしことを。雪竇龍牙の頭上に去て行かんことを要す、又人の錯て會せんことを恐る。所以に別頌して、人の疑解を剪んことを要す。雪竇復た拈じて曰く、

頌。這老漢、也未得勦絶、復成一頌。灼然。能有幾人知。自知較

第二十則　龍牙禪板

〔勦絶〕物のサツパりとしたこと、此の語書經などにも見ゆ。

一半。賴有末後句。盧公付了、亦何憑。盡大地討恁麼人。也難得。參詳頌話。坐倚、休將繼祖燈。草裏漢。打入黑山下坐。落在鬼窟裏去也。堪對暮雲歸、未合。一箇半箇。擧着即錯。果然出不得。遠山無限、碧層々。塞却汝眼。塞却汝耳。沒溺深坑。更參三十年。

讀方　這の老漢、也た未だ勦絶することを得ず、復た一頌を成す。賴に末後の句有り。（灼然、能く幾人有りてか知る。自ら知る一半に較れることを。）盧公に付し了るも、亦何ぞ憑らん。（盡大地恁麼の人を討ぬるに、也た得難し。誰か頌話せしめん。）坐倚して、將て祖燈を繼ぐを休すと。（草裏の漢。黑山下に打入して坐す。鬼窟裏に落在し去るや。）暮雲の歸て、未だ合せざるに對するに堪へたり。（一箇半箇。擧着せば即ち錯らん。果然として出不得。）遠山限り無く、碧層々。（汝が眼を塞却し、汝が耳を塞却す。深坑に沒溺す。更らに參ぜよ三十年。）

〔株を守つて云云〕百姓が兎が木の株につき當つて死んだのを拾うてから、之れは百姓するよりよいことだと思ひ毎日其株を守つて

【評】　盧公に分付し了るも、亦何ぞ憑らんと、何の憑據か有らん。直に須らく這裏に向て、恁麼に會し去るべし。更らに株を守て、兎を待つこと莫れ。髑髏前に、一時に打破して、一點の事の胸中に在ること無うして、放て灑々落々ならしめば、又何ぞ憑むことを要せん。或は坐、或は倚、佛法の道理を作すことを消せず。所以に道ふ、坐倚して將て、祖燈を繼ぐことを休すと。雪竇一時に拈じ了れり。他箇の轉身の處有て、末後に自ら、箇の消息を露はす。些子の好處有りて道く、暮雲の歸て、未だ合せざるに對するに堪たりと。且らく道へ、雪竇意什麼の處にか在る。暮雲の歸て、合せんと欲し

兎の來て死ぬのを待つて居たと云ふ故事。〔鬼窟裏〕文字窨句の拘束を離れることの出來ぬ處と云ふ意。

て、未だ合せざるの時、汝道へ作麼生。遠山限り無く、碧層々、舊に依て鬼窟裏に打入し去る。這裏に到て、得失是非、一時に坐斷して、灑々落々として、始めて些子に較れり。遠山限り無く、碧層々、且らく道へ、是れ文殊の境界か、是れ普賢の境界か、是れ觀音の境界か。此に到て且らく道へ、是れ什麼人の、分上の事ぞ。

佛果圜悟禪師碧巖錄卷之二　終

〔法幢〕人の師となりて法を說く者が其の徽章として幡幢を門頭に立てるのが古來印度の風

佛果圜悟禪師碧巖錄卷之三

第二十一則　智門蓮華

垂示曰。建法幢、立宗旨。錦上鋪花、脫籠頭卸角駄。太平時節、或若辨得格外句、擧一明三。其或未然、依舊伏聽處分。

讀方　垂示に曰く。法幢を建立し、宗旨を立す。錦上に花を舖き、籠頭を脫し角駄を卸す。太平の時節、或は若し格外の句を辨得せば、擧一明三。其れ或は未だ然らずんば、舊に依て伏して處分を聽け。

擧。僧問智門、蓮花未出水時如何。鈎在不疑地。泥裏洗土塊。那裏得這消息來。智門曰、蓮花。一二三四五六七。疑殺天下人。僧曰、出水

俗であつたのだ。

〔智門〕諱は光祚、雪竇重顯の師なり、青原

後如何。莫下向二鬼窟裏一作中活計上。又恁麼去也。門曰、荷葉。幽州猶自可、最苦是江南。兩頭三面。笑二殺天下人一。

讀方　擧す。僧智門に問ふ、蓮花未だ水を出でざる時如何。（不疑の地に鈎在す。泥裏に土塊を洗ふ。那裏よりか箇の消息を得來る。）智門曰く、蓮花。（一二三四五六七。天下の人を疑殺す。）僧曰く、水を出でゝ後ち如何。（鬼窟裏に向て、活計を作すこと莫れ。又恁麼にし去れり。）門曰く、荷葉。（幽州は猶ほ自ら可なり。最も苦なるは是れ江南。兩頭三面。天下の人を笑殺す。）

【評】　智門若し之れ、機に應じて物を接せば、猶ほ些子に較れり。若し是れ衆流を截斷せば、千里萬里。且らく道へ、這の蓮花、出水と未出水と、是れ一か是れ二か。若し恁麼に見得せば、汝に許す、箇の入處あることを。然も是の如くなりと雖も、若し是れ一と道はゞ、心境未だ忘ぜず、解路上に落在して走らば、什麼の歇欺か有らん。且らく道へ、古人の意作麼生。其の實は許多の事なし、所以に投子道く、汝但だ名言數句に着く莫れ、若し諸事を了せば、自然に着せず、即ち許多の位次不同無し。汝一切の法を攝し、一切の法、汝を攝することを得ず、本と得失無し、夢幻如許多の名目、强て他の爲めに名字を安立すべからず。汝諸人を誑謼し得てんや。汝諸人問ふが故に、所以に言有り、汝若し問はずんば、我をして汝に向て、什麼と道はしめてか即ち得ん。一切の事は、皆是れ汝將ち得來る、都て我が事に干からず。古人曰く、佛性の義を識らんと欲せば、當さに時節因緣を觀ずべし。見ずや、雲門擧す、僧靈雲に問うて曰く、佛未だ出世せ

下八世香林澄遠和尚に嗣法す、隋州の智門と云ふ寺に住せしを以て呼ぶ

〔古人〕智門のこと

〔誑謼〕謼は縛なり誑と同意

〔古人〕百丈なり、此文固是

れ涅槃經に出づ。

（牛頭）法融禪師。

ざる時如何。雲拂子を竪起す。僧曰く、出世して後ち如何。雲亦拂子を竪起す。雲門曰く、前頭は打着、後頭は打不着。又云く、出と不出とを說かずんば、何んの處にか、伊が問ふ時節有らんと。古人の一問一答、時に應じ節に應じて、許多の事無し、汝若し言を尋ね句を逐はゞ、了に交涉無し。汝若し能く言中に、言を透得し、意中に、意を透得し、機中に機を透得して、放つて閑々地ならしめば、方さに智門、答話の處を見ん。問ふ佛未だ出世せざる時如何。牛頭未だ四祖に見えざる時如何。斑石の內、混沌未分の時如何。父母未生の時如何。雲門曰く、古より今に至るまで、只だ是の一段の事、是無く非無く、得なく失なく、生と未生と無し。古人這裏に到て、一綫道を放て、出有り入有り。若し是れ未了底の人ならば、扶籬摸壁、依草附木、或は他をして放下せしめ、又奔々蕩々、荒然たる處に打入し去る。若し是れ得底の人は、二六時中、一物に依倚せず。一物に依倚せずと雖も、若し一機一境を露さば、作麼生か他を模索せん。這の僧問うて道く、蓮花未だ水を出でざる時如何。智門曰く、蓮花。便ち只だ攔問の一答、妨げず奇特なることを。諸方皆之れを顚倒語と謂ふ、那裏か此の如くならん。見ずや巖頭道く、常に貴ぶらくは、未だ口を開かざる已前、猶ほ些子に較ることを。古人機を露はす處、已に是れ遍逗し了れり。如今の學者、古人の意を省みず、只管に去て、出水と未出水とを理論せば、什麼の交涉か有らん。見ずや僧智門に問ふ、如何なるか是れ般若の體。門曰く、蚌含明月。僧曰く、如何なるか是れ般若の用。門曰く、兎子懷胎と。看よ他此の如く對答す、天下の人、他の語脈を討ぬるに得ざることを。或は人有りて、夾山に問うて、蓮花水を出でざる時如何と道ふ。只だ他に對

第二十一則　智門蓮華

して道はん、露柱燈籠と、且らく道へ、蓮花と是れ同か是れ別か。水を出で、後ち如何。他に對して道はん、枝頭日月を挑げ、脚下太だ泥深し。汝且らく道へ、是か不是か、且らく錯て定盤星を認むること莫れ。雪竇忒煞だ慈悲、人の情解を打破す、所以に頌出す。

頌。蓮花荷葉、報レ君知。老婆心切。見成公案。文彩已彰。出水、何ニ如未出時。泥裏洗ニ土塊。分開也好。不レ可ニ儱侗去一也。江北江南、問ニ王老一。主人公在ニ什麼處一。問ニ王老師一作ニ什麼。汝自踏ニ破草鞋一。一狐疑了、一狐疑。一坑埋却。自是汝疑。不レ免ニ疑情未レ息一。打曰會麼。

讀方　蓮花荷葉、君に報じて知らしむ。(老婆心切。見成公案。文彩已に彰はる。)出水は、未出の時に何如。(泥裏に土塊を洗ふ。分開す

(定盤星)秤子の盤に重量を載せずして、稱錘の平均する點なり

(忒煞)甚だに同じ

(儱侗)事柄の不滿なること

るも也た好し。儱侗し去る可からず。)江北江南、王老に問はゞ、(主人公、什麼の處にか在る。王老師に問うて什麼か作さん。汝自ら草鞋を踏破す。)一狐疑し了て、一狐疑せん。(一坑に埋却せん。自ら是れ汝疑ふ。疑情未だ息まざるを免れず。打して曰く、會すや。)

【評】智門は本と是れ浙の人なり、得々として川に入て、香林に參ず。既に徹して却回して、隋州の智門に住す。雪竇は是れ他の的子、見得して好く玄に窮して妙を極む。直に道ふ、蓮花荷葉、君に報じて知らしむ。出水は、未出の時と何如と。這裏人の直下に、便得せんことを要す。山僧道く、未出水の時如何、露柱燈籠。出水の後如何、杖頭日月を挑げ、脚下太だ泥深し。汝且らく錯て、定盤星を認むること莫れ。如今の人、人の言句を咬む者は、甚の限りか有らん。汝且らく道へ、出水の時、是れ什麼の時節、未出水の時、

と、器の成らざるを云ふ。

(王老)王とは支那人の姓に最も多いので、老は一寸尊稱の意故に日本では太郎兵衛權兵衛と云ふが如し。

(川)蜀の西川なり

(的子)的はタシカの意。

是れ什麼の時節ぞ、若し這裏に向て見得せば、汝に許す、親しく智門を見ることを。雪竇道く、汝若し見ずんば、江北江南、王老に問へ、雪竇の意に道く、汝只管に、江北江南に去て、尊宿に出水と、未出水とを問うて、江南兩句を添へ得、江北兩句を添へ得て、一重に一重を添へば、展轉して疑を生ぜんことを。且らく道へ、何れの時か疑はざることを得去らん。野狐の疑多くして、冰凌上に行て、以て水聲を聽き、若し鳴らざれば、方さに河を過ぐべきが如し、參學の人、若し一狐疑し了りて、一狐疑せば、幾時か平穩にし得去らん。

第二十二則　雪峰鼈鼻蛇

垂示曰。大方無外、細若隣虛、擒縱非他、卷舒在我。必欲解粘去縛、直須削迹呑聲。人々坐斷要津、箇々壁立千仞。且道、是什麼人境界。試擧看。

讀方　垂示に曰く。大方外無く、細かなること隣虛の若く、擒縱他に非らず、卷舒我に在り。必らず粘を解き縛を去らんと欲せば、直に須らく、迹を削り聲を呑むべし、人々要津を坐斷して、箇々壁立千仞ならん。且らく道へ、是れ什麼人の境界ぞ、試みに擧す看よ。

〔要津〕肝要なる場處のこと

擧。雪峯示衆曰、南山有一條鼈鼻蛇、見怪不怪其怪自壞。大小大怪事。不妨令人疑着。汝等諸人、切須好看。囫。一場遍逗。長慶曰、今日堂中、大有人喪身失命。普州人送賊。以己方人。僧擧似玄沙。同坑無異土。奴見婢慇懃。同病相憐。玄沙曰、須是稜兄始得、雖然如此、我即不恁麼。不免作野狐精見解。是什麼消息。毒

〔雪峰〕既に第五則に出づ、眞覺禪師と諡號を賜はり、雪峰山に住して青原下六世の宗風を擧揚す。

氣傷人。僧曰、和尚作麼生。也好撈着這老漢。玄沙曰、用南山作什麼。釣魚船上謝三郎。只這野狐精。猶較些子。喪身失命也不知。雲門以拄杖、攛向雪峰面前、作怕勢。怕他作什麼。一子親得。一等是弄精魂。諸人試辨看。

讀方　擧す。雪峰衆に示して曰く、南山に一條の鼈鼻蛇有り、（怪を見て怪まざれば、其の怪自ら壞す。大小大の怪事。妨げず人をして疑着せしむることを。）汝等諸人、切に須らく好く看るべし。（囮。一場の漏逗。）長慶曰く、今日堂中、大いに人有りて、喪身失命。（普州の人賊を送る。己を以て人に方ぶ。）僧玄沙に擧似す。（同坑に異土無し。奴は婢を見ること慇懃。同病相憐む。）玄沙曰く、須らく是れ稜兄にして始めて得べし、然も此の如くなりと雖も、我は即ち不恁麼。（野狐精の見解を作すことを免れず。是れ什麼の消息ぞ。毒氣人を傷ふ。）僧曰く、和尚作麼生。（也た好し、這の老漢を撈着す。）玄沙曰く、南山を用ゐて什麼か作さん。（釣魚船上の謝三郎。只だ這の野狐精。猶ほ些子に較れり。喪身失命も也た知らず。）雲門柱杖を以て、雪峰の面前に攛向して、怕るゝの勢を作す。（他を怕れて什麼か作さん。一子親しく得たり。一等に是れ精魂を弄す。諸人試みに辨ぜよ看ん。）

〔攛〕擲なり。

〔瞳眠〕喫眠なり。

【評】　汝若し平展せば、平展するに一任す。汝若し打破せば、打破するに一任す。雪峰巖頭欽山と同行なり、凡そ三たび投子に到り、九たび洞山に上る、後ち德山に參じて、方さに漆桶を打破す。一日巖頭を率ゐて欽山を訪はんとす、鰲山店上に至て、雪に隔てらる、岩頭毎日只だ是れ打睡す、雲峯は一向に坐禪す。岩頭喝して曰く、瞳眠し去れ、毎日床上に、恰かも七村裏の土地に似て、相似たり。佗時後日、人家の男女を魔魅し去ることあらん。峰自ら點胸して曰

鹽官上堂に曰く、夫れ諸佛の本源は衆生の本有、迷ふ時は空を呼んで色となし、了る時は色を呼んで空となす、色空

く、某甲這裏未穩在、敢へて自ら瞞ぜず、頭曰く、我れ將に謂へり、汝已後、孤峰頂上に向て、草庵を盤結して、大敎を擧揚せんと、猶ほ這箇の語話を作す。峰曰く、某甲實に未穩在。頭曰く、汝若し實に此の如くならば、汝が見處に據て、一々に通じ來れ、是處をば我れ汝が爲めに證明し、不是處をば汝か爲めに剗却せん。峯遂に擧す、鹽官の上堂に、色空の義を擧するを見て、箇の入處を得たりと。頭曰く、此去て三十年、切に忌む擧著することを。峯又擧す、洞山過水の頌を見て、箇の入處を得たりと。頭曰く、若し與麼ならば、自救不了。後ちに德山に到て問ふ、從上宗乘中の事、學人還て分有りや也た無しや。山打つこと一棒して、什麼と道ふぞと、我れ當時桶底の脫するが如く相似たり。頭遂に喝して曰く、汝道ふことを聞かずや、門より入るものは、是れ家珍にあらずと。峰曰く、他後

明暗、終に差別無し、看破せば還て同じ。洞山過水の頌に曰く、切に忌む他に從て覓むることを、迢々として我と疎なり、我今獨り自ら往く、處々渠に逢ふを得、渠今正に是れ我、我今是渠ならず、

如何が即ち是ならん。頭曰く、他日若し大敎を播揚せんと欲せば、一々自己の胸襟より流出し將ち來て、我が與めに蓋天蓋地にし去れ。峰言下に於て大悟し、便ち禮拜して、起ち來て連聲に叫んで曰く、今日始めて是れ鰲山成道、今日始めて是れ鰲山成道と。後ち閩中に回て、象骨山に住す。自ら貽るに頌を作て曰く、人生倐忽たり暫く須臾、浮世那ぞ能く久居することを得ん、嶺を出でゝ纔かに三十二に登らんとす、閩に入れば、早く是れ四旬餘、他の非、頻々に擧することを用ゐず、己が過、應さに須らく旋々に除くべし、滿朝朱紫の貴に報じ奉らん、閻王は怕れず、金魚を佩ぶることをと。凡そ上堂衆に示して曰く、一々蓋天蓋地、更らに玄と說き妙と說かず、亦心と說き性と說かず、突然として獨露す、大火聚の如し、之れに近けば、則ち面門を燎却す、太阿の劍に似たり、之れを擬すれば、則

第二十二則　雪峰鼈鼻蛇

應さに須らく恁麼に會せば方さに如如に契ふことを得べし。

〔大雄山〕百丈山のこと。

〔趙州〕從諗禪師。

ち喪身失命す。若し也た佇思停機せば、則ち沒干涉、只だ百丈黃蘗に問ふが如くんば甚づれの處よりか去來する。蘗曰く、大雄山下、菌を採て去來す。丈曰く、還て大蟲を見るや。蘗便ち虎聲を作す。丈便ち斧を拈じて斫る勢を作す。蘗遂に百丈を打つこと一摑、丈吟々として笑ふ。便ち歸て陞座、衆に謂うて曰く、大雄山に一の大蟲あり、汝等諸人、切に須らく好く看るべし、老僧今日、親しく一口に遭ふと。趙州凡そ僧を見ては便ち問ふ、曾て此間に到るや。云く曾て到る。或は曰く、曾て到らず。州總に曰く、喫茶去と。院主曰く、和尚尋常僧に問ふ、曾て到ると、曾て到らざると、總に喫茶去と、意旨如何。州曰く、院主。主應諾す。州曰く、喫茶去。紫胡門下に一牌を立て、牌上に書して曰く、紫胡に一狗有り、上、人の頭を取り、中、人の腰を取り、下、人の脚を取る、擬議すれば、

〔他家〕雪峯のこと

〔兒孫〕長慶、玄沙、雲門等なり。

則ち喪身失命す。或は新到纔かに相看すれば、便ち喝して曰く、狗を看よと。僧纔かに首を回らせば、師便ち方丈に歸る。正に雪峰の、南山に一條の鼈鼻蛇あり、汝等諸人、切に須らく好く看るべしと道ふが如し。正當恁麼の時、汝作麼生か祗對せん、前蹤を踐まず、試みに請ふ道へ看ん。這裏に到て、也た須らく是れ格外の句を會して、始めて得べし、一切の公案言語、擧し得將ち來さば、便ち落處を知らん、看よ他の恁麼に衆に示すことを。且らく汝か爲めに、行と說き解と說かず、還て情識を持て、測度し得てんや。是れ他家の兒孫、自然に道ひ得て恰好なり、所以に古人道く、言を承けては、須らく宗を會すべし、窠窟を離れざれば、毒海の中に墮在せんと。雪峰恁麼に衆に示す、謂つべし無味の談、人口を塞斷す。長慶玄沙、皆是れ他家屋裏の人にして、方さに他の恁麼の說話を會す。只だ雪

峰、南山に一條の鼈鼻蛇有りと云ふが如きは、諸人還て落處を知るや、這裏に到て、須らく是れ通方の眼を具して、始めて得べし。見ずや眞淨頌有り曰く、鼓を打ち琵琶を奏す、相逢ふ兩會家、雲門能く唱和す、長慶邪に隨ふことを解す。古曲音韻無し、南山の鼈鼻蛇、何人か此の意を知らん、端的是れ玄沙。只だ長慶恁麼に祗對するが如きんば、且らく道へ、意作麼生、這裏に到て、擊石火の如く、閃電光に似て、方さに搆得すべし。若し纖毫も去り盡さゞること有らば、便ち他底に搆すると不得ならん。可惜許、人多く長慶の言下に向て、情解を生じて道く、堂中纔かに聞處有らば、便ち是れ喪身失命せん。有者は道く、元一星事無し、平白地上に、這般の話を說いて、人を疑はしむ。人他の南山に一條の鼈鼻蛇有りと道ふを聞いて、汝便ち疑着すと。若し恁麼に會せば、且得すらくは沒交涉、只だ他の

〔眞淨〕名は克文、黃龍慧南和尙に嗣法す。

〔搆得〕搆は到なり

〔沒交涉〕

言語上に去て、活計を作す。既に恁麼に會せずんば、又作麼生か會せん。後來僧有り、玄沙に擧似す、玄沙曰く、須らく是れ稜兄にして、始めて得べし、然も是の如くなりと雖ども、我は即ち不恁麼。僧曰く、和尙又作麼生。沙曰く、南山を用ひて什麼か作さんと。但だ看よ玄沙の語中、便ち出身の處あることを、便ち曰く、南山を用ひて什麼か作さんと。若し是れ玄沙にあらずんば、只だ大いに酬對し難し。只だ他南山に一條の鼈鼻蛇有りと道ふが如きんば、且らく道へ、什麼の處にか在る。這裏に到て、須らく是れ向上の人にして、方さに恁麼の說話を會すべし。古人道く、釣魚船上の謝三郎、南山の鼈鼻蛇を愛せず、却て雲門に到て、柱杖を以て、雪峰の面前に攛向して、怕るゝ勢を作す、雲門蛇を弄するの手脚有りて、鋒鋩を犯さず、明頭も亦た打着、暗頭も也た打着。他尋常人の爲めにす

關係のなきこと。

〔釣魚船上云々〕海邊に釣ることのみ知つて、山中の樂しみ

を知らざること。〔南山の鼈鼻蛇を愛せず〕の一句、或は南山を愛せず鼈鼻蛇を愛す、と云ふ、蓋し釣魚船上の句に對して可なるが如し。

ること、太阿の劍の舞ふが如くに、相似たり。有時は飛んで、人の眉毛、眼睫の上に向ひ、有時は飛んで、三千里外に向て、人の頭を取る。雲門柱杖を攛つて、怕るゝ勢を作す、且つ是れ精魂を弄するにあらず、他也た喪身失命すること莫しや。作家の宗師、終に一言一句の上に去て、活計を作さず。雪竇只だ雲門の、雪峰の意に契證することを愛するが爲めに、所以に頌出す。

頌。象骨巖高、人不到。(千箇萬箇模索不着。非公境界。) 到者、須是弄蛇手。(是精識精。是賊識賊。成群作隊作什麼。也須是同火始得。) 稜師備師、不奈何。(一狀領過。放過一着。) 喪身失命、有多少。(罪不重科。帶累平人。) 韶陽知(猶較些子。這老漢只具一隻眼。老漢不免作伊倆。) 重撥草。(落草漢。有什麼用處。果然在什麼處。便打。) 南北東西、無處討。(有麼有麼。闍梨眼瞎。) 忽然突出、柱杖頭。(看高着眼。便打。) 拋對雪峰、大張口。(自作自受。呑却千箇萬箇。濟什麼事。天下人模索不着。) 大張口兮、同閃電。(兩重公案。果然。) 剔起眉毛、還不見。(蹉過了也。五湖四海。覓恁麼人也難得。如今在什麼處。) 如今藏、在乳峯前。(向什麼處去也。大小雪竇也作這去就。山僧今日也遭一口。) 來者一々、看方便。(瞎。莫向脚跟下看。看取上座脚跟下。着一箭了也。) 師高聲喝曰、看脚下。(賊過後張弓。第二頭第三頭。重言不當吃。)

〔象骨巖〕雪峯山の別名。

讀方　象骨巖高うして、人到らず、(千箇萬箇、模索不着。公の境界に非らず。)到る者は須らく是れ蛇を弄するの手なるべし。(是れ精、

〔同火〕一つの鍋の飯を食うた者と云ふこと、索引を見よ。
〔稜師備〕長慶慧稜、玄沙師備の二人。

精を識り、是れ賊、賊を識る。群を成し隊を作して、什麼か作さん、也た須らく是れ同火にして、始めて得べし。）稜師備師、奈何ともせず。（一狀に領過し、一着を放過す。）喪身失命、多少か有る。（罪重ねて科せず、平人を帶累す。）韶陽知て、（猶ほ些子に較れり。這の老漢、只だ一隻眼を具す。老漢免れず、伎倆を作すことを。）重ねて草を撥ふ。（落草の漢。什麼の用處か有らん。果然として什麼の處にか在る。便ち打つ。）南北東西、討ぬるに處無し。（有りや無しや。闍梨眼瞎す。）忽然として突出す、拄杖頭。（看よ。高く眼を着けよ。便ち打つ。）雪峰に拋對して、大いに口を張る、（自作自受。千箇萬箇を呑却すとも、什麼の事をか濟さん。天下の人模索不着。）大いに口を張る、閃電に同じ。（兩重の公案。果然。頼に末後の句有り。）眉毛を剔起すれば、還て見えず、（蹉過了也、五湖四海、恁麼の人を覓むるに、也た得難し。如今什麼の處にか在る。）如今藏れて、乳峯の前に在り。（什麼の處に向て去るや。大小の雪竇、也た這の去就を作す。山僧今日、也た一口せらる。）來る者は一々、方便を看よ。（瞎。脚跟下に向て看る莫れ。上座が脚跟下を看取せよ。一箭を着け了れり。）師高聲に喝して曰く、脚下を看よ。（賊過ぎて後ち弓を張る。第二頭第三頭。重言は吃に當らず。）

【評】象骨巖高うして、人到らず、到る者は、須らく是れ蛇を弄する手なるべし。雪峰山下に、象骨巖有り、雪峯の機鋒高峻にして、人の他の處に到る有ること罕なり。雪竇は是れ他の屋裏の人、毛羽相似て、同聲相應じ、同氣相求む。須らく是れ通方の作者にして、共に相證明すべし。只だ這の鼈鼻蛇、也た妨げず弄し難きことを。須らく是れ弄することを解して、始めて得べし。若し弄することを

〔五祖〕法演禪師、圜悟の師なり。

解せずんば、反て蛇の傷を被らん。五祖先師道く、此の鼈鼻蛇、須らく是れ手脚を傷犯せざる底の機有りて、他の七寸上に於て、一捏に捏住して、便ち老僧と手を把て、共に行くべし。長慶玄沙、這般の手脚有り、雪竇道く、稜師備師、奈何ともせずと。人多く道ふ、且得すら長慶玄沙奈何ともせず、所以に雪竇、獨り雲門を美むと、只だ是れ親疎有くは没交渉。殊に知らず、三人の中、機得失無し、是れ稜師備師、奈何とすることを。且らく諸人に問ふ、什麼の處か、是れ長慶、今日堂中、大いにもせざる處。喪身失命、多少か有らん、此れは長慶、今日堂中、大いに人有りて、喪身失命すと道ふを頌す。這裏に到て、須らく是れ蛇を弄するの手有りて、子細にして始めて得べし。雪竇他の雲門より出づ、所以に一時に撥却して、獨り雲門一箇を存す、道く、韶陽知て、重ねて草を撥ふと。蓋し雲門、他の雪峰の、南山に一條の鼈鼻蛇有

〔古人〕摩拏羅尊者のこと。

りと道ふ落處を知る爲めに、所以に重ねて草を撥ふと。雪竇頌して、這裏に到て、更らに妙處有り曰く、南北東西、討ぬるに處無しと。汝道へ、什麼の處にか在る。忽然として突出す、柱杖頭と、元來只だ這裏に在りて、汝便ち柱杖頭上に向て、活計を作し去る可からず。雲門柱杖を以て、雪峰の面前に攛向して、怕るゝ勢を作す、雲門便ち柱杖を以て、鼈鼻蛇と作して用ふ。有時は却て曰く、柱杖子化して龍と爲り、乾坤を呑却し了れり、山河大地、甚の處よりか得來ると。只だ是れ一條の柱杖子、有時は龍と化し、有時は蛇と作る、什麼としてか此の如くなる、這裏に到て、方さに知る、古人の心は萬境に隨て轉じ、轉處實に能く幽なりと道ふことを。頌して道く、雪峰に拋對して、大いに口を張る。大いに口を張る、閃電に同じと。雪竇餘才有り、雲門の毒蛇を拈出して曰く、只だ這の大いに口を張

る。閃電に於て相似たり、汝若し擬議せば、喪身失命せん。眉毛を剔起すれば、還て見えず、什麼の處に向て去る。雪竇頌し了る、須らく活處に去て、人の爲にすべし。雪峰の蛇を將て、自ら拈じ自ら弄す、妨げず殺活時に臨むことを。見んと要すや。曰く、如今藏れて、乳峰の前に在りと、乳峯は雪竇山の名なり。雪竇頌有り、曰く、石叢四もに顧れば、滄溟窄し、寥々として許さず、白雲の白きことを。長慶玄沙雲門、弄得すと雖も了に見ず。却て曰く、如今藏れて、乳峯の前に在り、來る者は一々方便を看よと。雪竇猶ほ廉纖に渉ること在り、便ち用ひよと言はずして、却て高聲に喝して曰く、脚下を看よと。從上來多少の人有りてか拈弄する、且らく道へ、還て人を傷着するか、曾て人を傷着せざるか、師便ち打つ。

〔廉纖に渉る〕些細な處まで言ひ過ぎたと云ふこと。

第二十三則　保福遊山

垂示曰。玉將火試、金將石試、劍將毛試、水將杖試。至於衲僧門下、一言一句、一機一境、一出一入、一挨一拶、要見深淺、要見向背。且道將什麼試。請擧看。

讀方　垂示に曰く。玉は火を將て試み、金は石を將て試み、劍は毛を將て試み、水は杖を將て試む。衲僧門下に於ては、一言一句、一機一境、一出一入、一挨一拶、深淺を見んことを要し、向背を見んことを要す、且らく道へ、什麼を將てか試みん、請ふ擧す看よ。

擧。保福、長慶、遊山次、（這兩箇落草漢。）福以手指曰、只這裏、便是妙峰頂。（平地上起骨堆。切忌道着。掘地深埋。）慶曰、是則

（保福）從展禪師、雪峰の弟子。

（鐵眼銅睛）堅固非凡なる眼睛と云ふこと。

是、可惜許。（若不是鐵眼銅睛、幾被惑了。同病相憐。兩箇一坑埋却。）雪竇着語曰、今日共這漢游山、圖箇什麼。（不妨減人斤兩。猶較些子。傍按劍。）復曰、百千年後、不道無、只是少。（少賣弄。也是雲居羅漢。）後擧似鏡清。（有好有惡。）清曰、若不是孫公、便見髑髏遍野。（同道者方知。大地茫々愁殺人。奴見婢慇懃。設使臨濟德山出來、也須喫棒。）

【讀方】擧す。保福、長慶、遊山する次で、（這の兩箇落草の漢。）福手を以て指して曰く、只だ這裏便ち是れ妙峰頂。（平地上に骨堆を起す。切に忌む道着することを。地を掘り深く埋む。）慶曰く、是なることは則ち是、可惜許。（若し是れ鐵眼銅睛にあらずんば、幾んど惑了せられん。同病相憐む。兩箇一坑に埋却せん。）雪竇着語して曰く、今日這の漢と共に遊山す、箇の什麼をか圖る。（妨げず人の斤兩を減ずることを。猶ほ些子に較れり。傍人劍を按ず。）復た曰く、百千年後、無しと道はず、只だ是れ少し。（少賣弄。也た是れ雲居の羅漢。）後ち鏡清に擧似す、（好有り惡有り。）清曰く、若し是れ孫公にあらずんば、便ち髑髏野に遍きを見ん。（同道の者方さに知る。大地茫々として、人を愁殺す。奴は婢を見るに慇懃。設使ひ臨濟德山出で來るも、也た須らく棒を喫すべし。）

【評】保福長慶鏡清、總に雪峰に承嗣す、他の三人、同得同證、同見同聞、同拈同用、一出一入、遞ひに相挨拶す。蓋し他是れ同條に生ずる底の人なるが爲めに、擧着すれば便ち落處を知る。雪峰の會裏に在て、居常問答する、只だ是れ他の三人なり。古人行住坐臥、此の道を以て念と爲す、所以に擧着すれば、便ち落處を知る。一日

〔罕〕稀に同じ。

遊山する次で、保福手を以て指して曰く、只だ這裏便ち是れ妙峰頂と。如今の禪和子、恁麼に問着せば、便ち只だ口匾擔に似たり。賴に問着するに長慶に値ふ、汝道へ、保福恁麼に道ふ、箇の什麼をか圖る。古人此の如く、他の有眼無眼を驗せんと要す、是れ他の家裏の人、自然に他の落處を知て、便ち他に對して道ふ、是は則ち是、可惜許と。且らく道へ、長慶恁麼に道ふ、意旨如何。一向に恁麼に し去るべからず、似たることは則ち似たり、等閑に一星事無き有る罕なり、賴に是れ長慶他を識破す。雪竇著語して曰く、今日這の漢と共に遊山して、箇の什麼をか圖ると、且らく道へ、什麼の處にか落在す。復た曰く、百千年後、無しとは道はず、只だ是れ少しと、雪竇點胸を解す、正に黃蘗の、禪無しとは道はず、只だ是れ師無しと道ふに似たり。雪竇恁麼に道ふ、也た妨げず險峻なることを。若し

〔敎中に說く〕唐譯華嚴經の取意文なり。

是れ同聲相應ずるにあらずんば、爭でか此の如く孤危奇怪なることを得ん。此れ之れを着語と謂ひ、兩邊に落在す。兩邊に落在すと雖も、却て兩邊に住せず。後ちに鏡淸に擧す、淸曰く、若し是れ孫公にあらずんば、便ち髑髏野に遍きを見んと、孫公は乃ち長慶の俗姓なり。見ずや、僧趙州に問ふ、如何なるか是れ妙峰孤頂。州曰く、老僧汝に這の話を答へず。僧曰く、什麼としてか這の話に答へざる。州曰く、我若し汝に答へば、恐らくは平地上に落在せん。敎中に說く、妙峰孤頂の、德雲比丘、從來山を下らず、善財去て參ず、七日までも逢はず。一日却て別峯に在て相見し、見え了るに及んで、却て他の與めに、一念三世、一切諸佛、智慧光明、普見の法門を說く。德雲既に山を下らず。什麼に因てか、却て別峯に在て相見す。若し他山を下らずと道はゞ、敎中に道ふ、德雲比丘、從來曾て山を下ら

〔李長者〕字は通玄、棗伯大士と號す、華嚴合論四十卷を造る。

〔所以に道ふ〕華嚴經中の意を取つて道ふなり。

ず、常に妙峰孤頂に在りと。這裏に到て、德雲と善財と、的的那裏にか在る。自後李長者、葛藤を頌す、打し得て好しと、道く妙峰孤頂は、是れ一味平等の法門、一々皆眞、一々皆全、無得無失、無是無非の處に向て獨露す、所以に善財見ずと。稱性の處に到て、眼自ら見ず、耳自ら聞かず、指自ら觸れざるが如く、刀自ら割かず、火自ら燒かず、水自ら洗はざるが如し。這裏に到て、敎中大いに老婆相爲めにする處有り。所以に一線道を放て、第二義門に於て、賓を立し主を立し、機境を立し問答を立す。所以に道ふ、諸佛出世せず、亦涅槃有ること無し、方便に衆生を度す、故に斯の如き事を現ずと。且らく道へ、畢竟作麼生か、鏡淸雪竇、恁麼に道ふを免れ得去らん。當時拍々相應ずること能はず、所以に盡大地の人、髑髏野に遍し。鏡淸恁麼に證し將ち來る、那兩箇恁麼に用ひ將

〔妙峰孤頂〕又は孤峯頂、上共に平等一味の本體本性のことを智慧に屬して云ふ、而し

ち來る。雪竇後面に頌出して、更らに顯煥たり。頌に曰く。

頌。妙峰孤頂、草離々、（和レ身沒却。脚下已深數丈也。）拈得分明、付ニ與誰ニ。（用作ニ什麼一。大地沒ニ人知一。乾屎橛。堪レ作ニ何用一。拈ニ得鼻孔一失ニ却口一。）不三是孫公、辨ニ端的、（錯。看レ箭。着レ賊了也不レ知。）髑髏着レ地、幾人知。（更不ニ再活一。如レ麻似レ粟。闍梨拈ニ得鼻孔一失ニ却口一。）

讀方 妙峰孤頂、草離々。（身に和して沒却す。脚下已に深きこと數丈なり。）拈得分明なり、誰れにか付與せん。（用ひて什麼か作さん。大地に人の知る沒し。乾屎橛。何の用をか作すに堪へん。鼻孔を拈得して、口を失却す。）是れ孫公、端的を辨ずるにあらずんば、（錯。箭を看よ。賊を着け了ることも、也た知らず。）髑髏地に着く、幾人か

て草裏、落草とは慈悲に屬して現相妙用を云ふ。
〔乾屎橛〕俗に糞カキ棒と云ふこと、汚くて手も付けられぬこと。
〔離々〕繁茂の貌。
〔孫公〕長慶の俗姓なり。

知らん。（更らに再活せず、麻の如く粟に似たり。闍梨鼻孔を拈得して、口を失却す。）

【評】妙峰孤頂、草離々、草裏に輥せば、什麼の了期か有らん。拈得分明なり、誰れにか付與せん、什麼の處か、是れ分明の處。保福の只だ這裏、便ち是れ妙峰頂と道ふことを頌す。是れ孫公、端的を辨ずるにあらずんば、孫公什麼の道理を見てか、便ち曰ふ、是なることは則ち是、可惜許。只だ髑髏地に着く、幾人か知ると云ふか。汝等諸人、還て知るや、瞎。

第二十四則　潙山劉鐵磨

〔靈龜尾を曳く〕隱せば愈々現はると云ふこと。
〔劉鐵磨〕

垂示曰、高々峰頂立、魔外莫能知、深々海底行、佛眼覰不見。直饒眼似流星、機如掣電、未免靈龜曳尾。到這裏、合作麼生。試擧看。

讀方 垂示に曰く。高々たる峰頂に立つ、魔外も能く知ること莫し、深深たる海底に行く、佛眼も覰れども見えず。直饒ひ眼流星に似、機掣電の如くなるも、未だ免れず、靈龜尾を曳くことを。這裏に到て、合に作麼生、試みに擧す看よ。

擧。劉鐵磨到潙山。（不妨難湊泊。這老婆不守本分。）山曰、老牸牛、汝來也。（點。探竿影草。向什麼處見譬訛。）磨曰、來日臺山大會齋、和尚還去麼。（箭不虛發。大唐打鼓新羅舞。放去太速。收來太遲。）潙山放身臥。（中也。汝向什麼處見潙山。誰知遠煙浪別有好思量。）磨便出去。（過也。見機而作。）

讀方 擧す。劉鐵磨潙山に到る、（妨げず湊泊し難きことを。這の老

俗姓は劉氏、潭州潙山の近傍に小庵を結びて住し、常に潙山に參じ、大悟せる老比丘尼なり、機鋒鋭利の故に鐵磨と字さる、即ち鐵曰と云ふことと。

婆、本分を守らず。）山曰く、老牸牛、汝來也。（點。探竿影草。什麼の處に向てか、聱訛を見る。）磨曰く、來日臺山に大會齋あり、和尚還て去るや。（箭虛りに發せず。大唐に鼓を打てば、新羅に舞ふ。放去は太だ速かに、收來は太だ遲し。）潙山身を放て臥す、（中れり。汝什麼の處に向てか、潙山を見る。誰れか知る、遠き煙浪、別に好思量有ることを。）磨便ち出で去る。（過てり。機を見て作す。）

【評】劉鐵磨は（尼なり）、擊石火の如く、閃電光に似たり、擬議すれば則ち喪身失命す。禪道若し緊要の處に到らば、那裏にか許多の事有らん、他の作家の相見、墻を隔てゝ角を見て、便ち是れ牛なることを知り、山を隔てゝ煙を見て、便ち是れ火なることを知るが如し、拶着すれば便ち動し、捺着すれば便ち轉す。潙山道く、老僧百年の後ち、山家の檀越家に向て、一頭の水牯牛と作て、左脇下に五字を

〔牸牛〕子を育てる牛のことにて、即ち女牛なり。〔臺山〕天臺の五臺山なり、潭州の潙山を距ること數十里。〔大會齋〕無遮會と

書して曰ん、潙山僧某甲と。且らく正當恁麼の時、喚んで潙山僧と作すが即ち是か、喚んで水牯牛と作すが則ち是か。如今の人問着すれば、管取して分疎不下。劉鐵磨は久參にして、機鋒峭峻なり、人號して劉鐵磨と爲す。潙山を去ること十里にして、庵を卓す。一日去て潙山を訪ふ、山來るを見て、便ち曰く、老牸牛、汝來也。磨曰く、來日臺山に、大會齋有り、和尚還て去るや。潙山身を放て臥す。磨便ち出で去る。汝看よ、他一へに說話の如くに相似たり、且つ是れ禪にあらず、又是れ道にあらず、喚んで無事の會と作し得てんや。潙山は臺山を去ること、自ら數十里を隔つ。劉鐵磨、什麼に因てか、却て潙山をして、去て齋せしめん。且らく道へ、意旨如何、這の老婆、他の潙山の說話を會して、絲來線去、一放一收、互ひに相酬唱す、兩鏡の相照らして、影像の觀るべき無きが如し。機鋒相

も云ひ、上は佛、菩薩より、下餓鬼畜生に到る、まで、平等に大供養を行ふ法要なり

副ひ、句句相投ず、如今の人、三搭すれども頭を廻らさず、這の老婆、一點も也た他を瞞することを得ず、這箇、却て是れ世諦の情見にあらず、明鏡の臺に當り、明珠の掌に在るが如く、胡來れば胡現じ、漢來れば漢現ず。是れ他向上の事あるを知る、所以に此の加し。如今只管に無事の會を倣す、五祖の演和尚道く、有事を將て無事と爲すこと莫れ、往々に事は、無事より生ずと。汝若し參得透し去らば、他の恁麼に、尋常の人の說話の如く、一般なることを見ん。多くは言語に隔碍せらる、所以に會せず、唯だ是れ知音にして、方さに他底を會せん。只だ乾峯の、衆に示して云ふが如きんば、一を擧して之を擧することを得ず、一着を放過すれば、第二に落在す。雲門衆に示して曰く、昨日一僧有り、天台より來て、却て南岳に往き去る。乾峯曰く、典座今日、普請することを得ざらんと。看よ兩人、

〔端倪〕大體を究むること、又本際を盡すこと、なり、端倪はハシ、倪はホトリのこと。

放つ時は則ち雙放、收むる時は則ち雙收、潙山下に、之れを境致と謂ふ。風塵草動するにも、悉く端倪を究む、亦之れを隔身の句と云ふ、意通じて語隔つ。這裏に到て、須らく左撥右轉して、方さに是れ作家なるべし。

頌。曾騎鐵馬入重城（慣戰作家。塞外軍神。七事隨身。）勅下傳聞六國清。（狗銜赦書。寰中天子。爭奈海晏河清。）猶握金鞭問歸客、（是什麼消息。一條拄杖兩人扶。相招同往又同來。）夜深誰共御街行。（君向瀟南我向秦。且道行作什麼。）

讀方　曾て鐵馬に騎て、重城に入る、（戰に慣ふ作家。塞外の軍神、七事身に隨ふ。）勅下て傳へ聞く、六國の淸きことを。（狗赦書を銜む。

〔海晏河清〕天下太平と云ふ如し。

〔貼體〕上手に仕立てた衣裳抔を着た時の如く能く身體について着よいこと、即ち雪竇の頌がよく公案に合ふと。

寰中の天子。爭奈せん海晏河清なることを。）猶ほ金鞭を握て、歸客に問ふ。（是れ什麼の消息ぞ。一條の拄杖兩人扶く。相招いて同じく往き、又同じく來る。）夜は深し、誰れと共にか御街に行かん。（君は瀟南に向ひ、我は秦に向ふ。且らく道へ、行て什麼か作さん。）

【評】雪竇の頌、諸方以て極則と爲す、一百の頌中、這の一頌、最も理路を具す。中に就いて極妙、貼體分明に頌出す。曾て鐵馬に騎て、重城に入る、劉鐵磨、恁麼に來ることを頌す。勅下つて傳へ聞く、六國の淸きことを、潙山、恁麼に問ふことを頌す。猶ほ金鞭を握て、歸客に問ふ、磨、來日臺山に、大會齋あり、和尚還て去るやと云ふことを頌す。夜は深し、誰れと共にか御街に行かん、潙山身を放て便ち臥し、磨便ち出で去るを頌す。雪竇這般の才調有りて、急切の處をば、急切の處に向て頌し、緩々の處をば、緩々の處に向て頌す。風穴亦曾て拈ず、雪竇の意に同じ。此の頌諸方皆之れを美む。高々たる峯頂に立つ、魔外も能く知ること莫し、深々たる海底に行く、佛眼覷れども見えず。看よ他の一箇は身を放て臥し、一箇は便ち出で去る、若し更らに周遮せば、一時に路を求むれども見えず、雪竇の頌意、最も好し。是れ曾て鐵馬に騎て、重城に入る、若し是れ同得同證にあらずんば、焉んぞ能く恁麼ならん。且らく道へ、箇の什麼をか得たる。見ずや僧、風穴に問ふ、潙山道く、老牸牛、汝來也と、意旨如何。穴曰く、白雲深き處、金龍躍る。僧曰く、劉鐵磨、來日臺山に、大會齋あり、和尚還て去るやと道ふが如きんば、意旨如何。穴曰く、碧波心裏、玉兎驚く。僧曰く、潙山便ち臥する勢を作す、意旨如何。穴曰く、老倒疎慵、無事の日、閑眠高臥して、青山に對すと。此の意亦雪竇と同じきなり。

〔才調〕文彩風調なり。

〔機〕大明録に、言を離れて獨り至る之を機と云ふとあり、即ち心中に感じまだ言葉に現はさぬこと

第二十五則　蓮華峰庵主楖櫟

垂示曰。機不離位、墮在毒海、語不驚群、陷於流俗。忽若擊石火裏、別緇素、閃電光中、辨殺活、可以坐斷十方、壁立千仞。還知恁麼時節麼。試擧看。

讀方 垂示に曰く。機、位を離れずんば毒海に墮在し、語、群を驚かさずんば流俗に陷る。忽ち若し擊石火裏に、緇素を別ち、閃電光中に、殺活を辨ぜば、以て十方を坐斷して、壁立千仞なるべし。還て恁麼の時節を知るや、試みに擧す看よ。

擧。蓮花峰庵主、拈拄杖示衆曰、看。門上具一隻眼。也是時人窠窟。古人到這裏、爲什麼不肯住。不可向虛空裏釘橛。權立化城。

〔蓮華峯〕天台山にあると云ひ、又盧山にあると云ふ、併し鳳潭の鐵壁雲片に據れ

衆無語。千箇萬箇如麻似粟。却較些子。可惜許。一棚俊鶻。自代曰、爲他途路不得力。若向途中辨、猶爭半月程。設使得力堪作什麼。豈可全無一箇。復曰、畢竟如何。千人萬人只向箇裏坐却。千人萬人中一箇兩箇會。又自代曰、楖櫟橫擔、不顧人、直入千峯萬峯去。也好與三十棒。只爲他擔板。腦後見腮、莫與往來。

讀方 擧す。蓮花峯庵主、拄杖を拈じて、衆に示して曰く、(看よ。頂門上に一隻眼を具す。也た是れ時の人の窠窟。)古人這裏に到て、什麼と爲てか、肯て住せざる。(虛空裏に向て、釘橛すべからず。權に化城を立す。)衆無語。(千箇萬箇、麻の如く粟に似たり。却て些子に較れり。可惜許。一棚の俊鶻。)自ら代て曰く、他の途路に力を得

ば、天台の桐柏山上に九峰あり、其の中に蓮華峰と云ふ一峯ありと、而して其の峰に祥庵主と云ふが住して居た、雲門大師の法嗣である、金陵の奉先道深禪師に嗣法す。〔楖標〕拄杖を作る木の名、後ちには

ざるが爲めなり。(若し途中に向て辨ぜば、猶ほ半月程を爭はん。設使ひ力を得るも、什麼を作すにか堪へん。豈に全く一箇無かる可けんや。)復た曰く、畢竟如何。(千人萬人、只だ箇裏に向て坐却す。千人萬人中、一箇兩箇會す。)又自ら代て曰く、楖標横に擔うて、人を顧みず、直に千峰萬峰に入り去る。(也た好し三十棒を與ふるに。只だ他の擔板なるが爲めに。腦後に腮を見ば、爲に往來すること莫れ。)

【評】諸人還て蓮花峯庵主を辨得すや、脚跟也た未だ地に點ぜざる在り。國初の時、天台の蓮花峯に在りて、庵を卓す。古人既に得道の後ち、茅茨石堂の中にして、折脚鐺兒の中、野菜根を煑、喫して日を過す、且つ名利を求めず、放曠として緣に隨ふ。一轉語を垂れて、且つ佛祖の恩を報じ、佛心印を傳へんことを要す。纔かに僧

拄杖のことを云ふ。〔國初〕趙宋始めて國を統ぶる時を云ふ。

〔道本云々〕華嚴大疏の語

の來るを見れば、便ち拄杖を拈じて曰く、古人這裏に到て、什麼としてか、肯て住せざると、前後二十餘年、終に一人も答へ得る無し。只だ這の一問、也た權有り實有り、照有り用有り、若し也た他の圈繢を知らば、一揑を消せず。汝且らく道へ、什麼に因てか、二十年此の如く問ふ、既に是れ宗師の爲す所、何故ぞ只だ一橛を守る。若し箇裏に向つて見得せば、自然に情塵の上に向て走らず、凡そ二十年中、多少の人有てか、他の與めに平展し、下語して見解を呈し、伎倆を做し盡す。設使ひ箇の道得有るも、也た他の極則の處に到らず、況んや此の事は、言句の中に在らずと雖も、言句に非らざれば、即ち辨ずる能はず。道ふことを見ずや、道本と言なく、言に因て道を顯はすと。所以に人を驗する端的の處、口を下せば便ち知音。古人一言半句を垂るゝこと、亦他無し、只だ汝が知有不知有を見んと要

す。他人の會せざるを見て、所以に自ら代て曰く、他の途路に力を得ざるが爲めなりと。看よ他の道德、自然に理に契ひ機に契ふことを、幾か曾て宗旨を失却せん。古人曰く、言を承けては、須らく宗を會すべし、自ら規矩を立すること勿れと。如今の人只管に、撞將し去て便ち了す、得ることは則ち得たり、爭奈せん顢頇儱侗なることを。若し作家の面前に到つて、三要の語を將ち、空に印し泥に印し水に印して、他を驗せば便ち見ん、方木圓孔に逗して、下落の處無きことを。這裏に到て、一箇の同情同證を訪ぬるに、時に臨んで、什麼の處に向つてか求めん。若し是れ知有底の人ならば、懷を開いて、箇の消息を通ぜん、何の不可か有らん。若し人に遇はずんば、且つ卷いて之れを懷にせん。且らく汝諸人に問ふ、柱杖子は、是れ衲僧尋常の用底なり、什麼に因てか、却て道ふ、途路力を得ずと。

〔善導〕長髭の曠禪師の法嗣、沙汰に逢うて行者となり石室に居れり。〔沙汰〕會昌沙汰のこと、唐の武宗帝會昌年中に佛法を沙汰せしを云ふ。

古人此に到つて肯て住せず、其の實は金屑貴しと雖も、眼に落ちて翳と成る。石堂の善道和尚、當時沙汰に遭ふ、常に柱杖を以て、衆に示して曰く、過去の諸佛、也た恁麼、未來の諸佛も也た恁麼、現前の諸佛も也た恁麼と。雪峯一日、僧堂前に柱杖を拈じて、衆に示して曰く、這箇は只だ、中下根の人の爲めにす。時に僧有り、出で、問うて曰く、忽ち上々人の來るに遇ふ時如何。峯、柱杖を拈じて便ち去る。雲門曰く、我は即ち雪峯の、打破して狼籍なるに似ず。僧問ふ、未審和尚如何。雲門便ち打つ。大凡そ參問は、許多の事無し、汝外山河大地有ることを見、內見聞覺知有ることを見、上に諸佛の求むべきを見、下に衆生の度すべき有るを見るが爲めなり。直に須らく一時に吐却して、然る後ちに十二時中、行住坐臥、打成一片なるべし。一毛頭上に在りと雖も、寬きこと大千沙界の若く、鑊湯爐

〔巖陽〕趙州の法嗣にして、諱は善信

炭の中に居ると雖も、安樂國土に在るが如く、七珍八寶の中に居ると雖も、茅茨蓬蒿の下に在るが如し。這般の事、若し是れ通方の作者ならば、古人の實處に到つて、自然に力を費さず。他、人の他底に搆得すること無きを見て、復た自ら徵して曰く、畢竟如何、又奈何ともすることを得ず。自ら曰く、楖標横に擔うて、人を顧みず、直に千峯萬峯に入り去る、這箇の意又作麼生。且らく道へ、什麼れの處を指してか、地頭と爲さん。妨げず句中に眼有り、言外に意有て、自ら起き自ら倒れ、自ら放ち自ら收むることを。豈に見ずや、嚴陽尊者、路に一僧に逢ふ、拄杖を拈起して曰く、是れ什麼ぞ。僧曰く、不識。嚴曰く、一條の拄杖も也た識らず。嚴復た拄杖を以て、地上に劄一下して曰く、還て識るや。僧曰く、不識。嚴曰く、土窟子も也た識らず。嚴復た拄杖を以て擔うて曰く、會すや。僧曰く、不會。嚴曰く、楖標横に擔うて、人を顧みず、直に千峯萬峯に入り去る。古人這裏に到つて、什麼としてか、肯て住せざる。雪竇頌有り曰く、誰そ、機に當る、擧するに慊らず、亦還て希なる、峭峻を摧殘し、玄微を銷鑠す、重關曾て巨に闢く、作者未だ歸に同せず、玉兎乍ち圓に乍ち缺く、金烏飛ぶに似て飛ばず、盧老は知らず、何の處にか去る、白雲流水、共に依々と。什麼に因て山僧は道ふ、腦後に腮を見ば、與に往來すること莫れと。纔かに計較を作さば、便ち是れ黑山の鬼窟裏に、活計を作さん。若し見得徹し、信得及せば、千人萬人、自然に羅籠すとも住せず、奈何ともすることを得ず、動着撈着、自然に殺有り活有り。雪竇他の意に、直に千峯萬峯に入り去ると道ふことを會して、方さに始めて頌を成す、落處を知らんと要せば、雪竇の頌を看取せよ。

〔頌有り曰く云々〕此頌之れを一發七終の格と云ふ、即ち始め、誰かと是れ一句每句に一字を增して七字に終れば也。

（懞幢三百擔）懞幢とは不慧不分曉のこと、三百擔とは三百は大數をあぐ、即ち澤山擔ふこと。

頌。眼裏塵沙、耳裏土。懞幢三百擔。鶻々突々有什麼限。更有什麼漢。千峰萬峯、不肯住。汝向什麼處去。且道是什麼消息。落花流水、太茫茫。好箇消息。閃電之機徒勞佇思。左顧千生右顧萬劫。剔起眉毛、何處去。脚跟下更贈一對眼。元來只在這裏。還截得庵主脚跟麼。雖然如是也須是到這田地始得。打曰、爲什麼只在這裏。

讀方　眼裏の塵沙、耳裏の土、（懞幢三百擔。鶻々突々、什麼の限りか有らん。更らに恁麼の漢有り。）千峯萬峯、肯て住せず。（汝什麼の處に向つてか去る、且らく道へ、是れ什麼の消息ぞ。）落花流水、太だ茫々。（好箇の消息。閃電の機、徒らに佇思するに勞す。左顧千生、右顧萬劫。）眉毛を剔起すれば、何の處にか去る。（脚跟下、更らに一對の眼を贈らん。元來只だ這裏に在り。還て庵主の脚跟を截得するや。然かも是の如くなりと雖も、也た須らく是れ、這の田地に到つて始めて得べし。打して曰く、什麼としてか、只だ這裏に在る。）

（禪月）名は貫休。（法燈）法眼に嗣法す。（盧行者）六祖大鑑慧能禪師のこと。

【評】雪竇頌し得て甚だ好し、轉身の處有り、一隅を守らず、便ち道ふ、眼裏の塵沙、耳裏の土と。此の一句、蓮花峯庵主を頌す、衲僧家、這裏に到つて、上攀仰無く、下己躬を絕す。一切時に於て、癡の如く兀に似たり。見ずや南泉道く、學道の人、癡鈍の如くなる者、也た得難し。禪月の詩に曰く、常に憶ふ、南泉の好言語、斯の如く癡鈍なる者。還て希なり。法燈曰く、誰人か此の意を知る、我をして南泉を憶はしむ。南泉又道く、七百の高僧、盡く是れ佛法を會する底の人なり、唯だ盧行者のみ有りて佛法を會せず、只だ道を會す、所以に他の衣鉢を得と。且らく道へ、佛法と道と、相去ること多少ぞ。雪竇拈じて曰く、眼裏に沙を着くることを得ず、耳裏に水を着く

〔椀鳴聲〕クダラヌことをがや〳〵云ふこと。

ることを得ず、或は若し箇の漢有りて、信得及し、把得住して、人の瞞を受けずんば、佛祖の言敎、是れ什麼の熱碗鳴聲ぞ。便ち請ふ、高く鉢囊を掛け、柱杖を拗折し、一員無事の道人なることを管取せよ。又曰く、眼裏に須彌山を着得し、耳裏に大海水を着得す。一般の漢有り、人の商量を受く、祖佛の言敎、龍の水を得るが如く、虎の山に靠るに似たり、却て須らく鉢囊を挑起し、横に柱杖を擔ふべし。亦是れ一員無事の道人なり。復た曰く、恁麼も也た不得、不恁麼も也た不得、然る後ち沒交涉。三員の無事道人の中、一人を選で師と爲すことを要す。正に是れ這般の生鐵鑄就す底の漢ならば、何故ぞ、或は惡境界に遇ひ、或は奇特境界に遇ふ。他の面前に到て、悉く皆夢の如くに相似たり、六根あることを知らず、亦旦暮有ることを知らず。直饒ひ這般の田地に到るも、切に忌む寒灰死火を守

〔古人〕大陽警玄を指す。

つて、黑漫々の處に打入し去ることを。也た須らく是れ轉身の一路有て、始めて得べし。見ずや古人道く、寒巖異草の青を守ること莫れ、白雲を坐却するも、宗、妙ならず。所以に蓮花峰庵主道く、他の途路、力を得ざるが爲めなり、直に須らく是れ、千峯萬峯に去て、始めて得べし。且らく道へ、什麼を喚んで、千峯萬峯と作す。雪竇只だ他の、榔標横に擔うて、人を顧みず、直に千峯萬峯に入り去ると云ふことを愛して、所以に頌出す。且らく道へ、什麼の處に向てか去る、還て去處を知得する者有りや。落花流水、太だ茫々、落花紛紛、流水茫々、閃電の機、眼前是れ什麼ぞ。眉毛を剔起すれば、何れの處にか去る、雪竇什麼としてか、他の去處を知らざる。只だ山僧が道、適來拂子を擧する如きんば、且らく道へ、即今什麼の處にか在る。汝諸人若し見得せば、蓮花峯庵主と同參、其れ或は未だ然

第二十五則　蓮華峰庵主榔標

らず、三條椽下、七尺單前、試に去つて參詳して看よ。

第二十六則　百丈大雄峯

舉。僧問二百丈一、如何是奇特事。（言中有レ響。句裏呈レ機。驚二殺人一。有レ眼不二曾見一。）丈曰、獨坐大雄峯。（凜々威風四百州。坐者立者二倶敗缺一。）僧禮拜。（伶悧衲僧。也有二恁麼人一。要レ見二恁麼事一。）丈便打。（作家宗師。何故來言不レ豐。令不二虛行一。）

【讀方】舉す。僧百丈に問ふ、如何なるか是れ奇特事。（言中に響あり。句裏機を呈す。人を驚殺す。眼有れども曾て見ず。）丈曰く、獨坐大雄峯。（凜々たる威風、四百州。坐者立者、二り倶に敗缺。）僧禮拜す。（伶悧の衲僧。也た恁麼の人有り、恁麼の事を見んことを要す。）丈便ち打つ。（作家の宗師。何故ぞ來言豐ならざる。令虛りに行せず。）

〔百丈〕山の名、本名は大雄山なり、高さ百丈ありとて名とす、法燈の法嗣なる慧海禪師此山に住す、依つて常に稱して百丈禪師と云ふ、後に大智禪師の勅號を賜はる。

〔禮拜〕梵語那謨、悉羯羅、此に禮拜、又は和南と

【評】機に臨んで眼を具して、危亡を顧みず。所以に道ふ、虎穴に入らずんば、爭でか虎子を得んと。百丈尋常、虎の翅を揷むが如くに相似たり。這の僧也た死生を避けず、敢て虎鬚を捋で、便ち問ふ、如何なるか是れ奇特の事と、這の僧也た眼を具す。百丈便ち他の爲めに、擔荷して曰く、獨坐大雄峯。其の僧便ち禮拜す。衲僧家、須らく是れ未問已前の意を別けて、始めて得べし。這の僧禮拜す、尋常と同じからず、也た須らく是れ具眼にして、始めて得べし。平生の心膽をして、人に向つて傾けしむること莫れ、相識は還て不相識の如し。只だ這の僧問ふ、如何なるか是れ奇特の事と。百丈曰く、獨坐大雄峰と。僧禮拜す。丈即ち打つ。看よ他、放去する時は、則ち一時に倶に是、收來する時は、則ち蹤を掃ひ跡を滅す、且らく道へ、他便ち禮拜する、意旨如何。若し是れ好ありと道はゞ、甚に因

云ふ、道宣の飯敬儀に曰く、禮は履なり、敬のみ、經に曰く、塔廟を恭し比丘を謙下するもの之れなり云々。

〔王老師〕南泉自ら言ふ、俗姓王氏の故に。

てか、百丈便ち他を打て、什麼か作さん、若し是れ不好なりと道はば、他禮拜す、什麼の不得の處か有らん。這裏に到て、須らく是れ休咎を識り、緇素を別ち、千峰頂上に立向して、始めて得べし。這の僧便ち禮拜す、虎鬚を捋づるに似て相似たり、只だ轉身の處を爭ふ。頼に百丈の頂門に眼有り、肘後に府有りて、四天下を照破し、深く來風を辨ずるに値ふ、所以に便ち打つ。若し是れ別人ならば、他を奈何ともすること無けん。這の僧、機を以て機に投じ、意を以て、意を遣る、他所以に禮拜す。南泉の云ふが如きは、文殊普賢、昨夜三更、佛見法見を起し、各々二十棒を與へて、二鐵圍山に貶向し去れりと。時に趙州衆を出で、曰く、和尚の棒、誰をしてか喫せしむ、泉曰く、王老師什麼の過か有る。州禮拜す。宗師家等閑に他の受用の處を見ず、纔かに當機拈弄の處に到れば、自然に活鑁々地なり。五祖先師常に說く、馬前の相撲の如くに相似たり。汝但だ常に見聞聲色をして、一時に坐斷せしめて、把得定、作得主せば、始めて他の百丈を見んと。且らく道へ、放過する時作麼生、雪竇の頌出するを看取せよ。

頌。祖域交馳天馬駒。五百年一間生。千人萬人中有㆓一箇半箇㆒。子承㆓父業㆒。化門舒卷不㆑同㆑途。已在㆓言前㆒。渠儂得㆓自由㆒。還㆓他作家手段㆒。電光石火存㆓機變㆒。劈面來也。左轉右轉。還見㆓百丈爲人處㆒也無。堪㆑笑人來捋㆓虎鬚㆒。好與㆓三十棒㆒。重賞之下必有㆓勇夫㆒。不㆑免㆓喪身失命㆒。放㆓過闍梨一着㆒。

讀方　祖域交馳す、天馬駒。（五百年に一たび間生す。千人萬人の中に、一箇半箇有り。子は父の業を承く。）化門の舒卷、途を同じうせ

〔渠儂〕彼に同じ。〔劈面〕間に髮を容れざる端的。

す。(已に言前に在り。渠儂自由を得たり。他の作家の手段に還す。)電光石火、機變を存す。(劈面に來れり。左轉右轉。還て百丈爲人の處を見るや也た無しや。)笑ふに堪へたり、人の來て虎鬚を捋づることを。(好し三十棒を與ふるに。重賞の下には、必らず勇夫有り。喪身失命を免れず。闍梨に一着を放過す。)

【評】 雪竇見得透して、方さに乃ち頌出す、天馬駒は、日に行くこと千里、横行竪走、奔驟すること飛ぶが如くなるを、方さに天馬駒と名く。雪竇、百丈の祖域の中に於て、東に走て西に向ひ、西に走て東に向ひ、一來一往、七縱八横、殊に少礙無きこと、天馬駒の如くに相似て、善く能く交馳し、方さに自由の處を見ることを頌す。這箇は自ら是れ、他の馬祖の大機大用を得たり。見ずや僧馬祖に問ふ、如何なるか是れ佛法の大意。祖便ち打つて曰く、我れ若し汝を打たずんば、天下の人、我を笑ひ去ると在らん。又問ふ如何なるか是れ祖師西來意。祖曰く、近前來、汝に向て道はん。僧近前す。祖劈耳に便ち掌して曰く、六耳 謀を同じうせずと、看よ他恁麼に、大自在を得ることを。建化門中に於て、或は卷或は舒、有時の舒は卷處に在らず、有時の卷は舒處に在らず、有時は卷舒倶に在らず。所以に道ふ、塗を同じうして轍を同じうせず、此れは百丈、這般の手脚有ることを頌す。雪竇道く、電光石火、機變を存すと、這の僧、擊石火の如く、閃電光に似て、只だ些子機變の處に在ることを頌す。巖頭道く、物を却るを上と爲し、物を逐ふを下と爲す、若し戰を論ぜば、箇々轉處に立在すと。雪竇道く、機輪曾て未だ轉ぜず、轉ずれば必らず兩頭に走ると。若し轉不得ならば、什麼の用處か有らん、大丈夫の漢、也た須らく是れ些子の機變を識て、始めて得べし。如

〔有時卷舒處云々〕放行中に把住あり、把住中に放行あること。

〔眉毛を惜まず〕眉毛を失へば醜なり、醜を忘れて慈悲説法すること。

今の人、只管に他に款を供して、他に鼻孔を穿却せらる、什麼の了期か有らん。這の僧、電光石火の中に於て、能く機變を存して、便ち禮拜す。雪竇道く、笑ふに堪へたり、人の來て虎鬚を捋づることを。百丈一箇の大蟲に似て相似たり、笑ふに堪へたり、這の僧去て、虎鬚を捋づることを。

第二十七則　雲門體露金風

垂示曰、問一答十、擧一明三。見兎放鷹、因風吹毛。不惜眉毛則且置、只如入虎穴時如何。試擧看。

讀方 垂示に曰く。一を問へば十を答へ、一を擧ぐれば三を明む。兎を見て鷹を放ち、風に因て毛を吹く、眉毛を惜しまざることは則ち且らく置く、只だ虎穴に入る時の如きんば如何。試みに擧す看よ。

〔青霄に平歩〕沒蹤跡の消息。

擧。僧問雲門、樹凋葉落時如何。（是什麼時節。家破人亡人亡家破。）**雲門曰、體露金風。**（撑天拄地。斬釘截鐵。淨躶躶赤洒洒。平步青霄。）

讀方 擧す。僧雲門に問ふ、樹凋み葉落つる時如何。（是れ什麼の時節ぞ。家破れて人亡し、人亡して家破る。）雲門曰く、體露金風。（天を撑へ地を注ふ。斬釘截鐵。淨躶々赤洒々。青霄に平歩す。）

【評】 若し箇の裏に向て薦得せば、始めて雲門爲人の處を見ん、其れ或は未だ然らずんば、舊に依て只だ是れ鹿を指して馬と爲さん、眼瞎し耳聾す、誰人か這の境界に到らん。且らく道へ、雲門復た是れ、他の話を答ふとやせん、復た是れ他と酬唱すとやせん。若し他の話に答ふと道はゞ、錯て定盤星を認む、若し他と唱和すと道はゞ、且得すらくは沒交涉、既に恁麼ならずんば、畢竟して作麼生。汝若

（虎口に向つて云々）全身を學者に打ち任すこと。

（十八問）汾陽の所立なり、詳しくは人天眼目に就て見るべし。

し見得透せば、衲僧の鼻孔、一捏を消せず、其れ或は未だ然らずんば、舊に依て鬼窟裏に打入し去らん。大凡そ宗乘を扶竪せんには、也た須らく是れ全身擔荷して、眉毛を惜しまず、虎口に向て身を橫へて、他の橫に拖き倒に拽くに任すべし。若し此の如くならずんば、爭でか能く人の爲にし得ん。這の僧、箇の問端を致す、也た妨げず嶮峻なることを。若し尋常の事を以て他を看ば、只だ箇の閑事を管する底の僧に似て、若し衲僧門下に據らば、命脈裏に去て觀る時は、妨げず妙處有ることを。且らく道へ、樹凋み葉落つ、是れ什麼人の境界ぞ、十八問の中、此れは之れを辨主問と謂ひ、亦之れを借事問と謂ふ。雲門一絲毫も移易せず、只だ他に向て道く、體露金風と、答へ得て甚だ妙なり、亦敢て他の門頭に辜負せず。蓋し他の門處に眼あるが爲めに、答處も亦端的なり。古人道く、親切を得んと欲せば、問を將ち來て問ふこと莫れ、若し是れ知音底ならば、擧着せば便ち落處を知らん。汝若し雲門の、語脈裏に向て討ねば、便ち錯り了れり、只だ是れ雲門の句中に、多く人の情解を惹くことを愛す、若し情解の會を作さば、未だ免れず我が兒孫を喪することを。雲門恁麼に、賊馬に騎て賊を逐ふことを愛す。見ずや僧問ふ、如何なるか是れ、非思量の處。門曰く、識情測り難し。這の僧問ふ、樹凋み葉落つる時如何。門曰く、體露金風。句中妨げず要津を把斷して、凡聖を通ぜざることを。須らく他の、一を擧ぐれば三を明め、三を擧ぐれば一を明むることを會すべし。汝若し他の三句の中に去て求めば、則ち腦後に箭を拔き、他の一句の中に、須らく三句を具ふべし。函蓋乾坤の句、隨波逐浪の句、截斷衆流の句、自然に恰好なり。雲門三句の中、且らく道へ、那句を用ひてか人を接せん、試みに辨ず看よ。

（遼る）透るに同じ

頌。問既有宗、（深辨來風。箭不虛發。）答亦攸同。（豈有兩般。如鐘待扣。功不浪施。）三句可辨、（上中下。如今是第幾句。須是向三句外薦取始得。）一鏃遼空。（中。過也。墪着磕着。箭過新羅。）大野兮、涼飇颯々。（普天匝地。還覺骨毛卓竪麼。放行去也。）長天兮、疎雨濛々。（風浩浩、水漫々。頭上漫々、脚下漫々。）君不見、少林久坐、未歸客。（更有不唧嚁漢。帶累殺人。黃河頭上瀉將過來。）靜依熊耳一叢々。（開眼也着、合眼也着。鬼窟裏作活計。眼瞎耳聾。誰到這境界。不免打折汝版齒。）

讀方　問既に宗有り、（深く來風を辨ず。箭虛りに發せず。）答も亦同じき攸なり。（豈に兩般有らんや。鐘の扣を待つが如し。功浪りに施さず。）三句辨ずべし、（上中下。如今是れ第幾句ぞ。須らく是れ三句の外に向て、薦取して始めて得べし。）一鏃空に遼る。（中れり。過てり。墪着磕着。箭新羅を過ぐ。）大野や、涼飇颯颯、（普天匝地。還て骨毛卓竪することを覺ゆるや。放行し去れり。）長天や、疎雨濛々。（風浩々、水漫々、頭上漫々、脚下漫々。）君見ずや、小林久坐、未歸の客、（更らに不唧嚁の漢有り。人を帶累殺す。黃河頭上より、瀉き將ち過ぎ來る。）靜かに依る熊耳の一叢々。（開眼も也た着、合眼も也た着、鬼窟裏に活計を作す。眼瞎し耳聾す。誰か這の境界に到る。免かれず汝が版齒を打折することを。）

（墪着磕着）四方に充滿せること。

（淨觸）清淨汚濁のこと。

【評】　古人道く、言を承けては、須らく宗を會すべし、自ら規矩を立すること勿れと。古人言虛りに設けず、所以に謂ふ、大凡そ箇の事を問ふには、也た須らく些子の好惡を識るべし。若し尊卑の去就を識らず、淨觸を識らずして、口に信せて亂道せは、什麼の利濟か有らん。凡そ言を出し氣を吐くには、須らく是れ鉗の如く鋏の如く、

鉤有り鏁有るべし、須らく是れ相續不斷にして、始めて得べし。這の僧の問處、宗旨有り、雲門の答處も亦然り。雲門尋常、三句を以て人を接す、此れは是れ極則なり。雪竇這の公案を頌すること、大龍の公案を頌すると相類す。三句辨す可し、一句の中に三句を具す、若し辨得せば、則ち三句の外に透出せん。一鏃空に遼る、鏃は乃ち箭鏃なり、射得て太だ遠し、須らく是れ急に眼を着けて、始めて得べし。若し也た見得分明ならば、以て一句の下に、大千沙界を開展すべし。此に到て頌し了る。雪竇餘才有り、所以に展開して頌出して道く、大野や涼飈颯々、長天や疎雨濛々と。且らく道へ、是れ心か是れ境か、是れ玄か是れ妙か。古人道く、法々隱藏せず、古今常に顯露すと。他問ふ、樹凋み葉落つる時如何。雲門道く、體露金風と。雪竇の意は、只だ一境と作す。如今眼前に、風拂々地、是れ東南の風にあらずんば、便ち是れ西北の風、直に須らく便ち恁麼に會して、始めて得べし。汝若し更らに禪道の會を作さば、便ち沒交涉、君見ずや、小林久坐、未歸の客と。達磨未だ西天に歸らざる時、九年面壁、靜悄々地。且らく道へ、是れ樹凋み葉落つるか、且らく道へ、是れ體露金風か。若し這裏に向て、古今凡聖を盡して、乾坤大地、打成一片ならば、方さに雲門雪竇、的々爲人の處を見ん。靜かに熊耳の、一叢々に依る、熊耳は則ち西京、嵩山の少林なり、前山も也た千叢萬叢、後山も也た千叢萬叢。諸人什麼の處に向てか見ん、還て雪竇爲人の處を見るや、也た是れ靈龜尾を曳く。

〔鋏の如く云々〕シツカリとハヅレヌ樣に相續せよとの意。

〔三句〕函蓋乾坤、隨波逐浪、衆流截斷の三句なり。

〔靜悄々地〕寂靜の貌

第二十八則　南泉不是心佛

擧。南泉參百丈涅槃和尚。丈問、從上諸聖、

還有下不二爲レ人說一底法上麼。和尚合レ知。壁立萬仞。還覺二齒落一麼。泉曰、有。落草了也。孟八郎作二什麼一。便有二恁麼事一。丈曰、作麼生、是不二爲レ人說一底法。看他作麼生。看他手忙脚亂。將レ錯就レ錯。但試問看。泉曰、不是心、不是佛、不是物。果然納二敗闕一。果然漏逗不レ少。丈曰、說了也。莫二與レ他說破一。從レ他錯二一平生一。不レ合二爲レ他恁麼道一。泉曰、某甲只恁麼、和尚作麼生、賴有二轉身處一。與レ長即長與レ短即短。理長則就。丈曰、我又不二是大善知識一、爭知レ有二說不說一。看他手忙脚亂。藏レ身露レ影。去死十分。爛泥裏有レ刺。恁麼那賺レ我。泉曰、某甲不會。作可二恁麼一。賴値二不會一。會即打二汝頭一破。賴値二這漢只恁麼一。丈曰、我太煞爲レ汝、說了也。雪上加レ霜。龍頭蛇尾作二什麼一。

〔涅槃和尚〕百丈慧海禪師の法嗣にして、法正禪師のことなり、常に涅槃經を讀誦せるが故に此の名あり、而して師の後を承けて百丈山の山主になられたるが故に百丈の涅槃和尚と云ふ、然るに今此の

讀方　擧す。南泉百丈涅槃和尚に參ず、丈問ふ。從上の諸聖、還て人の爲めに說かざる底の法有りや。(和尚知る可し。壁立萬仞。還て齒の落つることを覺えんや。)泉曰く、有り。(落草し了れり。孟八郎にして、什麼をか作さん。便ち什麼の事有り。)丈曰く、作麼生か、是れ人の爲めに說かざる底の法。(看よ他作麼生。看よ他手忙にして脚亂なることを。錯を將て錯に就く。但だ試みに問うて看よ。)泉曰く、不是心、不是佛、不是物。(果然として敗闕を納る。果然として漏逗少なからず。)丈曰く、說き了れり。(他の與めに說破すること莫れ。他に從へば一平生を錯ることを。他の爲めに恁麼に道ふ合からず。)泉曰く、某甲は只だ恁麼、和尚作麼生。(賴に轉身の處有り。長に與れば即ち長、短に與れば即ち短。理長すれば則ち就る。)丈曰く、我又是れ大善知識ならず、爭でか說不說有ることを知らん。(看よ他

問答の和尙は法正和尙にあらずして、馬祖の法嗣にして先百丈の爲めには兄弟であり、且つ百丈山に住したる惟政禪師なりと云ふ、何れにせよ人に用なし。〔孟八郎〕疎忽者のこと、道理に依らずして事をなす亂暴者のこと。〔西堂〕又は西菴と云ふ、他山の前住の人を西堂と稱す、蓋し西は賓位なり、故に他山に退院の人此山に來る時は賓なり、依て西堂と云ふ。

手忙にして脚亂することを、身を藏し影を露はす。去死十分。爛泥裏に刺有り。恁麼に那ぞ我を賺す。）泉曰く、某甲不會。（乍ちに恁麼なる可し。賴に不會に値ふ。會せば即ち汝が頭を打し破らん。賴に這の漢の、只だ恁麼なるに値ふ。）丈曰く、我太煞作が爲めに說き了れり。（雪上に霜を加ふ。龍頭蛇尾にして、什麼をか作さん。）

【評】這裏に到て、也た即心不即心を消せず、非心不非心を消せず、直下に頂より足に至るまで、眉毛一莖も也た無くんば、猶ほ些子に較れり。即心非心、壽禪師之れを表詮遮詮と謂ふ。此れ是の涅槃和尙は、法正禪師なり。昔時百丈に在りて、西堂と作て、田を開いて大義を說く者なり。是の時南泉、已に馬祖に見え了る、只だ是れ諸方に往いて決擇す。百丈此の一問を致す、也た大いに酬い難し。曰く從上の諸聖、還て人の爲めに說かざる底の法有りや。若し是れ山僧ならば、耳を掩うて出でゝ、這の老漢、一場の懡㦬を看ん。若し是れ作家ならば、他の恁麼に問ふを見て、即ち他を識破得せん。南泉只だ他の所見に據て、便ち有りと道ふ、也た是れ孟八郎なり。百丈便ち、錯を持て錯に就き、後に隨うて道く、作麼生か、是れ人の爲めに說かざる底の法。泉曰く、不是心、不是佛、不是物。這の漢、惜許、他の爲めに注破す、當時但だ劈脊に便ち棒して、他をして痛痒を知らしめん。然も是の如しと雖も、汝且らく道へ、什麼の處か、是れ說く處。南泉の見處に據らば、不是心、不是佛、不是物、曾て說着せず。且らく汝諸人に問ふ、什麼に因てか、却て道ふ、說き了れりと。他の語下に又蹤跡無し、若し他不說と道はゞ、百丈什麼としてか、却て恁麼に道ふ。南泉は是れ變通底の人、便ち後に隨つて、

〔分疎不下〕條理を分ち得ざること

〔太煞〕甚だに同じ。

〔淈々淳々〕手の付けられない痴漢と云ふこと。

一拶して曰く、某甲は只だ恁麼、和尚又作麼生と。若し是れ別人ならば、未だ免れず分疎不下なることを。爭奈せん百丈は是れ作家、答處妨げず奇特なることを。便ち道く、我又是れ大善知識ならず、爭でか說不說あることを知らんと。南泉便ち箇の不會と道ふ、是れ渠れ果して會し來て、不會と道ふか、是れ眞箇不會すること莫しや。百丈曰く、我太煞だ汝が爲めに說き了れり。且らく道へ、什麼の處か是れ說の處、若し是れ泥團を弄する漢ならん時は、兩箇淈々淳々、若し是れ二り倶に作家ならん時には、明鏡の臺に當るが如く、其實は、前頭は二り倶に放過す。若し是れ具眼の漢ならば、分明に驗取せん。且らく道へ、作麼生か他を驗せん、雪竇の頌出するを看よ。

頌。佛祖從來不レ爲レ人、各自守二疆界一。有レ條攀レ條。記二得箇元字脚一在レ心、入二地獄一如レ箭。

〔條有れば云々〕法官が罪を斷ずる時、法律の正條があれば、それに依て決すること。

衲僧今古競レ頭走。踏二破草鞋一、拗二折柱杖一、高掛二鉢嚢一。明鏡當レ臺列像殊、墮也破也。打二破鏡一來、與レ汝相見。一々面レ南看二北斗一。還見下老僧騎二佛殿一出中山門上麼。新羅國裏曾上レ堂、大唐國裏未レ打レ鼓。斗柄垂、落處也不レ知。無レ處レ討、在二什麼處一。可レ惜許。椀子落レ地、楪子成二七八片一。拈二得鼻孔一失二却口一。那裏得二這消息一來。果然恁麼。便打。

讀方　佛祖從來、人の爲めにせず、(各自に疆界を守る。條有れば條を攀づ。箇の元字脚を記得して心に在かば、地獄に入ること箭の如くならん。)衲僧今日、頭を競うて走る。(草鞋を踏破し、柱杖を拗折して、高く鉢嚢を掛けよ。)明鏡臺に當て、列像殊なり、(墮せり破れり。鏡を打破し來れ、汝と相見せん。)一々南に向て、北斗を看る。(還て老僧が、佛殿に騎て、山門を出づるを見るや。新羅國裏曾て上

欠

〔楪子〕椀の下へ布く木皿のこと。

〔光耀土〕普光明殿に於て、三七日、七處九會、華嚴經を說く、之れ說經の始め也。

〔修山主〕地藏の法嗣にして、杭州龍濟の紹

堂、大唐國裏未だ皷を打せず。）斗柄垂る、（落處も也知らず、什麼の處にか在る。）討ぬるに處無し、（瞎。可惜許。椀子地に落て、楪子七八片と成る。）鼻孔を拈得して、口を失却す。（那裏よりか這の消息を得來る。果然として恁麼。便ち打つ。）

【評】釋迦老子出世、四十九年、未だ曾て一字を說かず。始め光耀土より、終り拔提河に至るまで、是の二中間に於て、未だ嘗て一字を說かず、恁麼に道ふ、且らく道へ。是れ說か是れ不說か、如今龍宮に滿ち、海藏に盈つ、且らく作麼生か是れ不說。豈に見ずや、修山主道く、諸佛出世せず、四十九年の說、達磨西來せず、少林に妙訣有りと。又道く、諸佛曾て出世せず、亦一法の人に與ふる無し、但だ能く衆生の心を觀て機に隨ひ、病に應じて藥を與へ、方を施す、遂に三乘十二分教有り、其の實は、祖佛古より今に至るまで、

瞞却多少人來。此是風力所轉、終成敗壞。果然被他籠罩。爭奈自己何。

讀方 擧す。麻谷錫を持して、章敬に到り、禪床を遶ること三匝して、錫を振ふこと一下して卓然として立つ。（曹溪の樣子、一模脫出す。）敬曰く、是々。（泥裏に土塊を洗ふ。一船の人を賺殺す。是れ什麼の語話ぞ。繫驢橛子。）雪竇着語して曰く、錯。（放過せば則ち不可。猶ほ一着を較くこと在り。）麻谷又南泉に到り、禪床を遶ること三匝し、錫を振ふこと一下、卓然として立つ。（依前として泥裏に土塊を洗ふ。再運前來。鰕跳れども斗を出でず。）泉曰く、不是々々。（何ぞ承當せざる。人を殺すに眼を貶さず。是れ什麼の語話ぞ。）雪竇着語して曰く、錯。（放過せば不可。）麻谷當時曰く、章敬は是と道ひ、和尚は什麼としてか、

（麻谷）蒲州麻谷山の寶徹禪師なり。
（章敬）京兆章敬寺の懷暉禪師。
（較）今は闕の義也
（南泉）池州南泉の普願禪師
麻谷、章敬、南泉、共に江西馬祖山の

欠

道一禪師に嗣法す。

〔瞞却〕マゴツカセルこと。

〔錫〕詳しくは錫杖と云ふ、禪僧が旅行の時携ふる杖也。

不是と道ふ。（主人公什麼の處にか在る。這の漢元來、人の舌頭を取る。遍逗し了れり。）泉曰く、章敬は即ち是、是汝は不是。（也た好し人を殺しては、須らく血を見るべし、人の爲めには、須らく徹せしむべし。多少の人を瞞却し來る。）此れは是れ風力の所轉、終に敗壞を成す。（果然として他に籠罩せらる。自己を爭奈せん。）

【評】古人の行脚、叢林を遍歷して、直に此の事を以て念と爲す。古他の曲彔木床上の老和尚、具眼か、不具眼かを辨ぜんことを要す。古人、一言に相契へば即ち住まり、一言に契はざる時は即ち去る。看よ他の麻谷、章敬に到りて、禪床を遶ること三匝し、錫を振ふこと一下、卓然として立つ。章敬曰く、是々と。殺人刀、活人劍、須らく是れ本分の作家なるべし。雪竇曰く、錯、兩邊に落在す、汝若し兩邊に去つて會せば、雪竇の意を見ず。秖卓然として立つ、且らく道へ、

〔一下〕一回と云ふが如し。

什麼の事の爲めぞ。雪竇什麼としてか、却つて錯と道ふ、什麼の處か是れ他の錯の處。章敬曰く、是と、什麼の處か是れ是の處。雪竇坐ながら、判語を讀むが如し。麻谷箇の是の字を擔うて、便ち去つて南泉に見ゆ、依前として禪床を遶ぐること三匝し、錫を振ふこと一下、卓然として立つ。泉曰く、不是々々と。殺人刀、活人劍、須らく是れ本分の宗師なるべし。雪竇着語して曰く、錯と。章敬道ふ、是々、南泉曰く不是々々と、爲復是れ同か是れ別か。前頭は是と道ふ、什麼としてか也た錯なる。若し章敬の句下に向つて薦得せば、自救も亦た不了、若し南泉の句下に向つて薦得せば、祖佛の爲めに師と爲るべし。然も恁麼なりと雖も、衲僧家須らく是れ自ら肯うて、始めて得べし、一向に人の口辯を取ること莫れ。他の問既に一般、什麼としてか、一箇は是と道

〔慶藏主〕自慶藏主のこと。

ひ、一箇は不是と道ふ、若し是れ通方の作者にして、大解脱を得る底の人ならば、必らず須らく別に生涯有るべし、若し是れ機境忘ぜざる底ならば、決定して、這の兩頭に滯在せん。若し古今に明辨して、天下の人の舌頭を坐斷せんと要せば、須らく是れ這の兩錯を明取して、始めて得べし。後頭に至るに及んで、雪竇の頌、也た只だ這の兩錯を頌す。雪竇活鱍々の處を提げんことを要す、所以に此の如し。若し是れ皮下に血有る底の漢ならば、自然に言句中に向つて解會を作さず、繫驢橛上に向つて、道理を作さず。有る者は道ふ、雪竇、麻谷に代りて這の兩錯を下すと、什麼の交渉か有らん、殊に知らず、古人の着語、要關を鎖斷することを。這邊も也た是、那邊も也た是、畢竟這の兩頭に在らず。慶藏主道く、錫を持して禪床を遶る、是と不是と、倶に錯、其の實亦此に在らずと。汝見ずや、

蜀の人にして、圜悟の最も親近なりしといふ
〔永嘉〕眞覺大師。
〔繫驢橛〕驢馬を繫ぐ杭なり、ツマラヌ者と云ふこと

永嘉、曹溪に到つて六祖に見ゆ、禪床を遶ぐること三匝し、錫を振ふこと一下、卓然として立つ。祖曰く、夫れ沙門は、三千の威儀、八萬の細行を具す、大德、何れの方より來つて、大我慢を生ずと。什麼としてか、六祖却つて道ふ、他、大我慢を生ずと。此箇也た是と說かず、也た不是と說かず、是と不是と、都て是れ繫驢橛。唯だ雪竇有りて、兩錯を下す、猶ほ些子に較れり。麻谷曰く、章敬は是と道ひ、和尙は什麼としてか、不是と道ふ、這の老漢、眉毛を惜しまず、漏逗少なからず。南泉曰く、章敬は則ち是、是れ汝は不是と、南泉謂つべし、兎を見て鷹を放つ。慶藏主曰く、南泉忒煞だ郞當、不是と云うて便ち休せんに、更に佗の爲めに過を出して道ふ、此れは是れ風力の所轉、終に敗壞を成すと。圓覺經に曰く、我が今此の身は、四大和合す、所謂髮毛爪齒、皮肉筋骨、髓腦垢色は、皆地

第三十一則　麻谷持錫

に歸し、唾涕膿血は、皆水に歸し、暖氣は火に歸し、動轉は風に歸すと。四大各々離れば、今者の妄身、當さに何の處にか在らん。佗の厤谷、錫を持して禪床を遶ぐること、既に是れ風力の所轉、終に敗壞を成す、且く道へ、畢竟心宗を發明する底の事、什麼の處にか在らん。這裏に到つて、也た須らく是れ、生鐵鑄就す底の箇の漢にして、始めて得べし。豈見ずや、張拙秀才、西堂の藏禪師に參ず、問うて曰く、山河大地、是れ有か是れ無か、三世の諸佛、是れ有か此れ無か。藏曰く、有。張拙秀才曰く、錯。藏曰く、先輩曾て什麼の人にか參見し來る、拙曰く、徑山和尚に參見し來る、某甲凡そ問話する所有れば、徑山皆無と言ふ。藏曰く、先輩什麼の眷屬か有る。拙曰く、一りの山妻兩箇の痴頑有り。又却つて問ふ、徑山甚の眷屬か有る。拙曰く、徑山は古佛なり、和尚、渠を謗すること莫くんば好し。藏曰く、先輩、徑山に似ることを得る時を待つて一切無と言へ。張拙俛首するのみ。大凡そ作家の宗師は、人の爲めに粘を解き、縛を去り、釘を抽き、楔を拔くことを要す。只だ一邊を守る可らず、左撥右轉、右撥左轉、但だ看よ仰山、中邑の處に到つて謝戒す、邑來るを見て、禪床上に於て、手を拍つて曰く、和尚と。仰山即ち東邊に立ち、又西邊に立ち、又中心に於て立つ、然る後ち謝戒し了りて、却つて退後して立つ。邑曰く、什麼の處にか、此の三昧を得來る。仰山曰く、曹溪の印子上に於て、脫し持ち來る。邑曰く、汝道へ、曹溪此の三昧を用ひて、什麼人をか接す。仰曰く、一宿覺を接す。仰山又復中邑に問うて曰く、和尚什麼の處よりか、此の三昧を得來る。邑曰く、我れ馬祖の處に於て、此の三昧を得來ると。恁麼の說話に似たらば、豈に是れ擧一明三、本を見て末を逐ふ底の漢にあら

〔張拙〕石霜の法嗣

〔西堂〕西堂智藏禪師、馬祖の法嗣。

〔中邑〕洪恩禪師のこと、馬祖に嗣法す。

〔和尚〕一本に和和とあり、和和は哆々唎々の和々にして嬰兒悟あり、此の方可なるが如し

〔一宿覺〕

ずや。龍牙衆に示して道く、夫れ參學の人は、須らく祖佛を透過して、始めて得べしと。新豐和尚道く、祖佛の言敎を見ること、生寃家の如くにして、始めて參學の分有り、若し透不得ならば、即ち祖佛に瞞ぜられ去らんと。時に僧有り問ふ、祖佛還つて人を瞞するの心有りや、也た無しや。牙曰く、汝道へ、江湖還つて人を碍ふるの心有りや、也た無しや。又曰く、江湖人を碍ふるの心無しと雖も、自ら是れ時の人過ることを得ず、所以に江湖却つて、人を碍へ去ると成す。江湖人を碍へずと道ふことを得ず、祖佛人の心を瞞ずること無しと雖も、自ら此れ時の人、透ることを得ず、祖佛却て、人を瞞じ去ると成す。也た祖佛人を瞞ぜずと道ふことを得ず、若し祖佛を透得過すれば、此の人即ち祖佛を過却す。也た須らく是れ、祖佛の意を體得して、方に向上の古人と同じかるべし。如し未だ透得せざる、儻くば佛を學し祖を學せば、即ち萬劫にも得期有ること無けん。又問ふ如何んか祖佛に瞞ぜられざることを得去らん。牙曰く、直に須らく自ら悟り去るべし。這裏に到つて、須らく是れ此の如くにして、始めて得べし。何が故ぞ、人の爲めにせんには、須らく爲めに徹せしむべし、人を殺さんには、須らく血を見るべし、南泉雪竇は、是れ這般の人にして、方に敢へて拈弄す。

頌。此錯彼錯、（惜取眉毛。據令而行。天上天下唯我獨尊。）切忌拈却。（兩箇無孔鐵鎚。直饒千手大悲也提不起。或若拈去闍黎喫三十棒。）四海浪平、（天下人不敢動着。東西南北一等家風。近日多雨水。）百川潮落。（淨躶々赤洒々。且得自家安穩。直得海晏河淸。）古策風高、十二門、（何似這箇。杖頭無眼。切忌向拄杖頭上作活計。）門々有路、空蕭索。（一物也無。賺汝平生。覷著即瞎。）非蕭索。（果然。賴有轉身處。已瞎了也。便打。）作者

永嘉眞覺大師なり

〔新豐〕洞山良价和尚なり。

〔江湖〕世間と云ふが如し、詳しくは索引を見よ。

〔無病の藥〕無病の病を癒するもの、即悟邊に滯つて居るは更に又高尚なる迷なり、此の迷を除くが無病の藥也

好、求ニ無病藥一。一死更不ニ再活一。十二時中爲ニ什麼一瞌睡。撈レ天模レ地作ニ什麼一。

讀方 此錯彼錯、(眉毛を惜取せよ。令に據つて行ず。天上天下唯我獨尊。)切に忌む拈却することを。(兩箇無孔の鐵鎚。直饒ひ千手大悲も、也た提不起。或は若し拈じ去らば、闍黎三十棒を喫せん。)四海浪平らかに、(天下の人、敢て動着せず。東西南北、一等の家風。近日雨水多し。)百川潮落す。(淨躶々、赤洒々。且く得たり、自家安穩なることを。直に得たり、海晏河淸。)古策風高し、十二門。(這箇に何似ぞ。杖頭に眼無し。切に忌む、拄杖頭上に向つて、活計を作すことを。)門々路有り、空しく蕭索。(一物も也た無し。汝平生を賺る。覰着すれば即ち瞎す。)蕭索に非ず、(果然。頼に轉身の處有り。已に瞎し了れり。便ち打つ。)作者好し、無病の藥を求むるに。(一死更に再活せず。十二時中、什麼としてか瞌睡する。天を撈し地を模して、什麼か作す。)

【評】 這の一箇の頌、德山の潙山に見ゆるの公案に似て、相似たり、先づ公案を持つて、兩轉語を着けて、穿つて一串と作し、然る後に頌出す。此錯彼錯、切に忌む拈却することを。雪竇の意に曰く、此處一錯、彼處一錯、切に忌む拈却することを、拈却せば即ち乖かん、須らく是れ此の如くにして、這の兩錯を着くべし。直に得たり、四海浪平かに、百川潮落することを。可煞だ淸風明月、儞若し這の兩錯下に向つて會得せば、更らに一星事沒けん、山は是れ山、水は是れ水、長者は自ら長、短者は自ら短、五日一風、十日一雨、所以に道ふ、四海浪平らかに、百川潮落すと。後面は麻谷錫を持することを頌す、曰く古策風高し、十二門と。古人鞭を以て策と爲す、

（古人）汾陽善昭の語なり。

衲僧家は、拄杖を以て策と爲す。（祖庭事苑中に、古策、錫杖經を擧ぐ。）西王母が、瑤池の上に、十二の朱門有り、古策は即ち是れ拄杖頭上の淸風、十二の朱門よりも高し。天子及び帝釋所居の處、亦各々十二の朱門有り。若し僧這の兩錯を會得せば、拄杖頭上に光を生ぜん、古策も也た用ふることを着けず。古人道く、拄杖子を識得せば、一生參學の事畢んぬと。又道く、是れ標形虛事の禰にあらず、如來の寶杖、親しく蹤跡、此の類なり。這裏に到つて、七轉八倒、一切時中に於て、大自在を得。門々路有り、空しく蕭索と。路有りと雖も、只だ是れ空しく蕭索たり、雪竇此に到つて、自ら覺ゆ遷逗することを。更らに汝が爲めに打破す。然も是の如しと雖も、也た蕭索にあらざる處有り、任ひ是れ作者なるも、無病の時、也た須らく是れ先づ些の藥を討ねて、喫して始めて得べし。

（不下）能はずと云ふに同じ

第三十二則　定上座佇立

垂示曰。十方坐斷、千眼頓開。一句截流、萬機寢削。還有同死同生底麽。見成公案、打疊不下。古人葛藤、試請擧看。

讀方 垂示に曰く。十方坐斷して、千眼頓に開け。一句截流して、萬機寢削す、還つて同死同生底有りや。見成公案、打疊不下、古人の葛藤、試みに請ふ擧す看よ。

擧。定上座、問臨濟、如何是佛法大意。多少人到此茫然。猶有這箇在。訝。郎當作什麼。濟下禪床、擒住與一掌、便托開。今日捉敗。老婆心切。天下衲僧跳不出。定佇立。已落鬼窟裏。蹉過了也。未免失卻鼻孔。傍僧

〔訝郎當〕市町中賣買する者の大口を吐き廻はること、種電抄には、狼藉の義、疑怪の義とあり、訝は嗟訝とつゞき、

曰、定上座何不禮拜。（冷地裏有人覰破。全得他力。東家人死西家人助哀。）定方禮拜、（將勤補拙。）忽然大悟。（如暗得燈。如貧得寶。將錯就錯。且道定上座見箇什麼便禮拜。）

讀方 擧す。定上座、臨濟に問ふ、如何なるか是れ佛法の大意。（多少の人此に到つて茫然たり。猶ほ這箇の在る有り。訝郎當にして、什麼か作さん。）濟禪床を下りて、擒住して一掌を與へて、便ち托開す。（今日捉敗す。老婆心切。天下の衲僧跳不出。）定佇立す、（已に鬼窟裏に落つ。蹉過し了れり。未だ免れず鼻孔を失却することを。）傍僧曰く、定上座、何ぞ禮拜せざる。（冷地裏人有りて覰破す。全く他の力を得たり。東家の人死すれば、西家の人哀しみを助く。）定禮拜するに方りて、（勤を將て拙を補ふ。）忽然として大悟す。（暗に燈を得るが如く、貧の寶を得るが如し。錯を持て錯に就く。且らく道へ、定上座、箇の什麼を見てか、便ち禮拜す。）

日本の俗にサテモ〱と云ふが如し、郎當は零落の姿なりと

〔順世〕遷化のこと

〔和尚〕臨

【評】 看よ他の恁麼に、直出直入、直往直來することを。乃ち是れ臨濟の正宗、恁麼の作用有り、若し透得し去らば、便ち天を翻して、地と作して、自ら受用を得可し。定上座、是れ這般の漢、臨濟に一掌せられて、禮拜し起ち來つて、便ち落處を知る、他は是れ江北の人、最も朴直なり。既に之れを得て後、更に出世せず、後來全く臨濟の機を用ふ、也た妨げず穎脫なることを。一日路に、岩頭雪峰欽山の三人に逢ふ、岩頭乃ち問ふ、甚れの處よりか來る。定曰く、臨濟。頭曰く、和尚萬福なりや。定曰く、已に順世し了れり。頭曰く、某等三人、特に去つて禮拜せんとす、福緣淺薄にして、又歸寂に値ふ、未審和尚在日、何の言句か有りし、請ふ上座、一兩則

濟を指す
〔赤肉團上〕身體のこと。
〔揑殺〕揑

を擧せよ看ん。定遂に擧す、臨濟一日、衆に示して曰く、赤肉團上に、一無位の眞人有り、常に汝諸人の面門より出入す、未だ證據せざる者は看よ々々。時に僧有り出でゝ問ふ、如何なるか是れ無位の眞人。濟便ち擒住して曰く、道へ道へ。僧擬議す。濟便ち托開して曰く、無位の眞人、是れ什麼の乾屎橛ぞと云うて、便ち方丈に歸る。岩頭覺えず舌を吐く。欽山曰く、何ぞ非無位の眞人と道はざる。定に、擒住され、無位の眞人と非無位の眞人と、相去ること多少ぞ、速かに道へ、速かに道へと云はれて、山無語。直に得たり、面黄に面青なることを。岩頭、雪峯、近前し禮拜して曰く、這の新戒好惡を識らず、上座に觸忤す、望むらくは慈悲、且らく放過せよ。定曰く、若し是れ這の兩箇の老漢にあらずんば、這の尿床の鬼子を揑殺してましと。又鎭州に在りて、齊より回る、橋上に到つて歇ふに、三人の座主に逢ふ、一人問ふ、如何なるか是れ禪河深き處、須らく底を窮むべき。定擒住して、橋下に拋向せんと擬す。時に二座主連忙して救うて曰く、休めよ〱、是れ伊れ上座に觸忤す、且く望むらくは慈悲。定曰く、若し是れ二座主にあらずんば、他の窮めて底に到り去るに從せんと。看よ他の恁麼の手段、全く是れ臨濟の作用なることを、更に雪竇の頌出するを看よ。

は音褫、塞の義なり。
〔斷際〕臨

頌。斷際全機、繼後蹤。黄河從源頭濁了也。子承父業。持來、何必在從容。在什麼處。爭奈有如此人。無脚手人還得他也無。巨靈擡手、無多子。一嚇殺人。少賣弄。打一拂子。更不再勘。分破、華山千萬重。乾坤大地一時露出。墮也。

讀方　斷際の全機、後蹤を繼ぐ。(黄河源頭より濁了せり。子は父の

濟の師黃檗のことなり、宣宗皇帝より賜はりし勅號なり。

業を承く。）持し來つて、何ぞ必らずしも從容に在らん。（什麼の處にか在る。爭奈せん此の如きの人有ることを。脚手無き人、還つて他を得んや、也た無しや。）巨靈、手を擡ぐるに多子無し。（人を嚇殺す、少賣弄。打つこと一拂子。更に再勘せず。）分破す、華山の千萬重。（乾坤大地、一時に露出す。墮せり。）

【評】雪竇頌す、斷際の全機、後蹤を繼ぐ、何ぞ必ずしも、從容に在らんと。黃檗の大機大用、唯だ臨濟獨り其蹤を繼ぐ、拈得し將ち來つて、擬議を容れず。或は若し躊躇せば、便ち陰界に落ちん。楞嚴經に曰く、我れ指を按ずるが如し、海印光を發す、汝暫くも心を擧すれば、塵勞先づ起ると。巨靈、手を擡ぐるに多子無し、分破す、華山の千萬重とは巨靈神、大神力有り、手を以て太華を擘開して、水に放つて黃河に流入す。定上座の疑情、山の堆く岳の積むが如し。臨濟に一掌せられて、直に得たり、瓦解氷消することを。

（瞌睡）俗にネボケて居ると云ふこと

第三十三則　資福一圓相

垂示曰。東西不辨、南北不分、從朝至暮、從暮至朝。還道伊瞌睡麼。有時眼似流星、還道伊惺々麼。有時呼南作北。且道、是有心、是無心、是道人、是常人。若向箇裏透得、始知落處、方知古人恁麼不恁麼。且道、什麼時節。試擧看。

讀方　垂示に曰く。東西辨ぜず、南北分たず、朝より暮に至り、暮より朝に至り、還つて伊れ瞌睡すと道はんや。有時は眼流星に似たり、還つて伊れ惺々と道はんや。有時は南を呼んで北と作す。且く道へ、是れ有心か、是れ無心か、是れ道人か、是れ常人か、若し箇

〔陳操〕陳操は姓、操は名、睦州の刺史たる時、

裏に向つて透得して、始めて落處を知らば、方に古人の恁麼不恁麼を知らん。且く道へ、是れ什麼の時節ぞ。試みに擧す看よ。

擧。陳操尚書、看資福。（是精識精。是賊識賊。若不蘊藉、爭識這漢。還見金剛圈麼。）福見來、便畫一圓相。操曰、弟子恁麼來、早是不着便、何況更畫一圓相。（今日撞着箇瞌睡漢。這老賊。）福便掩却方丈門。（賊不打貧兒家。已入作圈繢了也。）雪竇云、陳操只具一隻眼。（雪竇頂門具眼。且道他意在什麼處。也好與一圓相。灼然龍頭蛇尾。當時好與一摑。教伊進亦無門退亦無路。且道更與他什麼一摑。）

◎**讀方**　擧す。陳操尚書、資福に看ゆ。福來るを見て、便ち一圓相を畫す。（是れ精精を識る。是れ賊賊を識る。若し蘊藉せずんば、爭でか這の漢を識らん。還つて金剛圈を見るや。）操曰く、弟子恁麼に來る、早く是れ便を着けず、何に況んや、更に一圓相を畫することを。（今日箇の瞌睡の漢を撞着す。這の老賊。）福便ち方丈門を掩却す。（賊は貧兒の家を打せず。已に他の圈繢に入り了れり。）雪竇曰く、陳操只だ一隻眼を具す。（雪竇頂門に眼を具す。且く道へ、他の意什麼の處にか在る。也た好し、一圓相を與ふるに。灼然として龍頭蛇尾ならん。當時好し、一摑を與へて、伊れをして進むにも亦門無く、退くにも亦路なからしめん。且く道へ、更に他に什麼の一摑をか與へん。）

記興寺の道明禪師に參じて法嗣となる、尚書は官名。〔資福〕吉州資福寺の如寶禪師、仰山慧寂の孫弟子、南嶽下七世、達磨十三代の宗匠なり。

〔襯〕通常嚫に作る、梵語に達嚫拏と云ひ、

【評】陳操尚書は、裴休李翺と同時なり。凡そ一僧の來るを見れば、先づ齋に請して、錢三百を襯して、是の勘辨を須ふ。一日雲門到る、相看して便ち問ふ、儒書の中は即ち問はず、三乘十二分教は、自ら座主に有り、作麼生か是れ衲僧家行脚の事。雲門曰く、尚書曾て幾

此に財施と譏す。

〔三經五論〕雲門錄には十經五論とあり、何れにせよ今は三五の數字に用なし。

〔驀〕驀直なり。

〔他〕尙書を指す。

人にか問ひ來る。操曰く、即今上座に問ふ。門曰く、即今は且らく置く、作麼生か是れ敎意。操曰く、黃卷赤軸。門曰く、這箇は是れ文字語言、作麼生か是れ敎意、操曰く、口談ぜんと欲して辭喪し、心緣ぜんと欲して慮亡ず。門曰く、口談ぜんと欲して辭喪するは、有言に對するが爲め、心緣ぜんと欲して、慮亡ずるは、妄想に對するが爲めなり、作麼生か是れ敎意。操無語。門曰く、見說く尙書、法華經を看すと、是なりや否や。操曰く、是。門曰く、經中に道ふ、一切の治生產業は、皆實相と違背せずと、且らく道へ、非々想天即今幾人有りてか退位す。操又無語。門曰く、尙書且く草々なること莫れ、師僧家、三經五論を抛却し、來つて叢林に入つて、十年二十年、尙ほ自ら奈何ともせず、尙書又爭でか會することを得てん。操禮拜して曰く、某甲が罪過と。又一日衆官と樓に登る次で、數僧の來るを望み見て、一官人曰く、來る者は總に是れ禪僧。操曰く、不是。官曰く、焉んぞ不是なることを知らん。操云く、近く來らんを待つて、汝が爲めに勘過せん。僧樓前に至る、操驀に召して曰く、上座と。僧頭を擧ぐ。書、衆官に謂つて曰く、道ふことを信ぜずやと。唯だ雲門一人のみ有つて、他勘することを得ず、他睦州に參見し來れり。一日去つて資福に參ず。福來るを見て、便ち一圓相を畫す、資福は乃ち潙山仰山下の尊宿なり、尋常境致を以て、人を接することを愛す。陳操尙書を見て、便ち一圓相を畫す、爭奈せん操却て是れ作家、人の瞞を受けざることを。自ら點檢することを解して曰く、弟子恁麼に來る、早く是れ便を着けず、那ぞ更らに一圓相を畫するに堪へん。福門を掩却す。這般の公案、之れを言中に的を辨じ、句裏に機を藏すと謂ふ。雪竇道く、陳操只だ一隻眼を具すと。雪竇謂ひつ可し、

〔頂門に眼〕拔群の眼光を云ふ。

〔攪〕搔なり亂なり

頂門に眼を具すと。且く道へ意什麼の處にか在る、也た好し一圓相を與ふるに。若し總に恁麼地ならば、衲僧家如何んか人の爲めにせん。我れ且く汝に問ふ、當時若し是れ諸人陳操と作らん時、箇の什麼の語を下し得てか、雪竇に他只だ一隻眼を具すと道はるゝことを免れ得るに堪へん。所以に雪竇、踏翻して頌して云ふ。

頌。團々珠遶、玉珊々、（三尺杖子攪黃河。須是碧眼胡僧始得。生鐵鑄就）馬載驢駝、上鐵船。（用許多作什麼。有什麼限。且與闍黎看。）分付海山無事客、（有人不要。若是無事客也不消得。須是無事始得。）釣鼇時、下一圈攣。（恁麼來恁麼去。一時出不得。若是蝦蟆堪作什麼。蝦蜆螺蚌。怎生奈何。須是釣鼇始得。）雪竇復曰、天下衲僧跳不出。（兼身在內。一坑埋却。闍黎還跳得出麼。）

讀方　團々珠遶る、玉珊々、（三尺の杖子黃河を攪す。須らく是れ碧眼の胡僧にして、始めて得べし。生鐵鑄就す。）馬載驢駝、鐵船に上す。（許多を用ひて什麼か作す。什麼の限りか有る。且く闍黎に與へよ看ん。）海山無事の客に分付す、（人の要せざる有り。若し是れ無事の客ならば、也た消得せず。須らく是れ無事にして始めて得べし。）鼇を釣りて、時に、一圈攣を下す。（恁麼にし來り、恁麼にし去る。一時に出不得。若し是れ蝦蟆ならば、什麼を作すにか堪へん。蝦蜆螺蚌、怎生奈何。須らく是れ鼇を釣りて、始めて得べし。）雪竇復た曰く、天下の衲僧跳不出。（身を兼ねて內に在り。一坑に埋却せん。闍黎還つて跳得出すや。）

〔碧眼の胡僧〕達磨大師を云ふ。

〔闍黎〕詳しくは阿闍黎、人を尊稱する語、今は座下の學人を總

【評】　團々珠遶る、玉珊々、馬載驢駝、鐵船に上すと。雪竇當頭に頌出す、只だ箇の圓相を頌す。若し會得し去らば、虎の角を戴くが如くに相似ん、這箇の些子、須らく是れ桶底脫し、機關盡き、得

稱す、又自らを呼んで稱することあり。

〔三山〕蓬萊、方丈、瀛洲の三なり、共に渤海の中にありしと云ふ

失是非、一時に放却すべし。更に道理の會を作すことを要せず、也た玄妙の會を作すことを得ず、畢竟作麼生か會せん。這箇は須らく是れ馬載驢馳、鐵船に上す、這裏に看て始めて得てん、別處に則ち分付すべからず。須らく是れ將ち去つて、海山無事底の客に分付すべし。汝若し肚裏に、些子の事有らば、即ち承當し得ず、這裏須らく此れ有事無事、違情順境、若しは佛若しは祖、他を奈何ともし得ざる底の人にして、方に承當すべし。若し禪の參ずべき有り、凡聖の情量有らば、決定して他底を承當し得ず、承當し了るも、作麼生か會せん。他の鼇を釣りて時に一圏攣を下すと道ふことを。鼇を釣ることは、須らく是れ圏攣にして、始めて得べし。所以に風穴曰く、鯨鯢を釣つて、巨浸を澄ましむるに慣れて、却つて嗟す、蛙步の泥沙に輾することを。又曰く、巨鼇三山を載せて去ること莫れ、吾れ蓬萊頂上に行かんと欲すと。雪竇復た曰く、天下の衲僧跳不出。若し是れ巨鼇ならば、終に衲僧の見解を作さず、若し是れ衲僧ならば、終に巨鼇の見解を作さず。

第三十四則　仰山五老峰

擧。仰山問僧、近離甚處。（天下人一般。也要問過。因風吹火。不可不作常程。）僧曰、廬山。（實頭人難得。）山曰、曾遊五老峰麼。（因行不妨掉臂。何曾蹉過。）僧曰、不曾到。（移一步。面赤不如語直。也似忘前失後。）山曰、闍黎不曾遊山。（太多事生。惜取眉毛。好。這老漢着甚死急。）雲門曰、此語皆爲慈悲之故、有落草之談。（殺人刀活人劍。兩箇三箇。要知山上路須是去

〔仰山〕慧寂禪師、袁州の人、潙山靈祐禪師の嫡嗣にして、潙仰宗の第二祖、智通大師と諡號を賜はる。
〔五老峯〕廬山の名所。

來人。

【讀方】擧す。仰山僧に問ふ、近離甚れの處ぞ。（天下の人一般。也た問過せんことを要す。風に因つて火を吹く。常程を作さずんばあるべからず。）僧曰く、廬山。（實頭の人得難し。）山曰く、曾て五老峯に遊ぶや。（行に因つて妨げず臂を掉ふことを。何ぞ曾て蹉過せん。）僧曰く、曾て到らず。（一歩を移す。面の赤からんよりは、語の直きに如かず。也た忘前失後するに似たり。）山曰く、闍黎曾て遊山せず。（太多事生。眉毛を惜取せば好し。這の老漢、甚の死急をか着けたる。）雲門曰く、此の語皆慈悲の爲めの故に、落草の談有り、（殺人刀、活人劍。兩箇三箇。山上の路を知らんと要せば、須らく是れ去來の人なるべし。）

〔古人〕雲門のこと
〔古人〕雲門を指す
〔潙山〕仰山馬祖百丈の問答

【評】人を驗する端的の處、口を下せば便ち知音。古人道く沒量の大人、語脈裏に向つて轉却す、若し是れ頂門に眼を具せば、擧着せば、便ち落處を知らん。看よ他の一問一答、歷々分明なり、雲門什麼としてか却つて道ふ、此の語皆な慈悲の爲めの故に、落草の談有りと。古人這裏に到つて、明鏡の臺に當り、明珠の掌に在るが如し、胡來れば胡現じ、漢來れば漢現ず、一箇の蠅子も、也た他の鑑を過ぐることを得ず。且く道へ、作麼生か是れ慈悲の故に落草の談ある。也た妨げず嶮峻なり。這の田地に到つて、也た須らく是れ箇の漢にして、始めて提撥するに可なるべし。雲門拈じて曰く、這の僧親しく、廬山より來る、什麼に因つてか却つて道ふ、闍黎曾て遊山せずと。潙山一日仰山に問うて曰く、諸方若し僧有り來らば、汝什麼を將てか他を驗せん。仰山曰く、某甲驗處有り。潙山曰く、試みに擧せよ

は、人を驗する端的の處、口を下せば便ち知音と云ふに引くなり。

看ん。仰山曰く、某甲尋常僧の來るを見ば、只だ拂子を擧して、伊れに向つて道ふ、諸方還つて這箇有りや。伊れが語有らんを待つて、只だ伊れに向つて道はん、這箇は且らく置く、那箇如何と。潙山曰く、此れは是れ向上の人の牙爪なり。豈に見ずや、馬祖百丈に問ふ、什麼れの處よりか來る。丈曰く、山下より來る。祖曰く、路上還つて一人に逢着するや。丈曰く、曾てせずと。祖曰く、什麼としてか曾て逢着せざる。丈曰く、若し逢着せば、即ち和尚に擧似せん。祖曰く、那裏よりか、這の消息を得來る。丈曰く、某甲が罪過。祖曰く、却つて是れ老僧が罪過。仰山僧に問ふ、正に此れに相類す。當時他の、曾て五老峰に到るやと道ふを待つて、這の僧、若し是れ箇の漢ならば、只だ過事と言はん。却つて道ふ、曾て到らずと、這の僧既に不作家。仰山何ぞ令に據つて行して、後面に許多の葛藤を見

ることを免かれず、却つて曰く、闍黎曾て遊山せずと。所以に雲門道く、此の語皆慈悲の爲めの故に落草の談有りと、若し是れ出草の談ならば、則ち不恁麼。

頌。出草入草、（頭上漫々、脚下漫々。半開半合。他也恁麼、我也恁麼。）誰解二尋討一。（頂門具二一隻眼一。闍黎不レ解二尋討一。）白雲重々、（千重百匝。頭上安レ頭。）紅日杲々。（破也。瞎。擧レ眼即錯。）左顧無レ瑕、（瞎漢。依前無事。汝作二許多伎倆一作二什麼一。）右眄已老。（一念萬年。過。）君不レ見寒山子、（癩兒牽レ伴。）行太早。（也不レ早。）十年歸不レ得、（即今在二什麼處一。灼然。）忘二却來時道一。（渠儂得二自由一。放二過一着一。便打。莫レ做二這忘前失後一好。）

讀方 出草入草、（頭上漫々、却下漫々。半開半合。他も也た恁麼、

〔眄〕恨視の貌、又勤苦して休息せざる貌を云ふ。〔十年云々〕寒山子の詩中の句なり、同詩は評唱中にあり。

我も也た恁麼。）誰れか尋討することを解せん。（頂門に一隻眼を具す。闍黎尋討することを解せず。）白雲重々、（千重百匝。頭上に頭を安ず。）紅日杲々。（破れたり。瞎。眼を擧すれば即ち錯。）左顧瑕無く、（瞎漢。依前として無事。汝許多の伎倆を作して、什麼か作す。）右眄已に老いたり。（一念萬年。過。）君見ずや寒山子、（癩兒伴を牽く。）行くこと太だ早し、（也た早からず。）十年歸り得ざれば、（即今什麼の處にか在る。灼然。）來時の道を忘却す。（渠儂自由を得たり。一着を放過す。便ち打つ。這の忘前失後を做すこと莫くんば好し。）

【評】出草入草、誰れか尋討することを解すと、雪竇却つて、他の落處を知る。這裏に到つて、一手擡一手搦。白雲重々、紅日杲々と、大に草茸々、煙羃々たりと云ふに似たり。這裏に到つて、一絲毫の凡に屬する無し。一絲毫の聖に屬する無し。偏界曾て藏さず、一々

〔肅宗〕蓋し德宗ならんとのこと、下亦然り、德宗は諱は适、代宗の長子、肅宗の孫、唐の第十主なり。

蓋覆することを得ず、所謂無心の境界なり。寒すれども寒を聞かず、熱すれども熱を聞かす、都盧是れ箇の大解脫門。左顧瑕無く、右眄已に老いたりと。懶瓚和尙、衡山石室の中に隱居す、唐の肅宗、其の名を聞いて、使を遣はして之れを召す、使者其の室に至つて宣言す、天子詔有り、尊者當に起つて恩を謝すべしと、瓚方に牛糞の火を撥いて、煨芋を尋ねて食す、寒涕頤に垂れて、未だ嘗て答へず。使者笑つて曰く、且く勸む、尊者涕を拭へ。瓚曰く、我れ豈工夫の、俗人の爲めに涕を拭ふこと有らんやと云うて、竟に起たず。使回つて奏す、肅宗甚だ之れを欽嘆す。這般の淸寥々、白的々に似たらば、人の處分を受けず、直に是れ把得定して、生鐵鑄就すが如くに相似たり。只だ善道和尙の如きは、沙汰に遭うて後、更に復た僧と作らず、人呼んで石室行者と爲す、碓を踏む每に、歩を

〔法眼〕文益禪師のこと。

移すことを忘る。僧臨濟に問ふ、石室行者、歩を移すことを忘る意旨如何。濟曰く、深坑に沒溺す。法眼圓成實性の頌に曰く、理極つて情謂を忘ず、如何ぞ喩齊有らん、到頭霜夜の月、任雲前溪に落つ、菓熟して猿を兼ねて重く、山長うして路の迷ふに似たり、頭を擧すれば殘照在り、元是れ住居の西。雪竇道く、君見ずや寒山子、行くこと太だ早し、十年皈ることを得ざれば、來時の道を忘却すと。寒山子の詩に曰く、安心の處を得んと欲せば、寒山長へに保つ可し、微風幽松を吹き、近く聽けば聲愈々好し、下に斑白の人有り、嘮々として黃老を讀む、十年歸り得ざれば、來時の道を忘却すと。永嘉又道ふ、心は是れ根、法は是れ塵、兩種猶ほ鏡上の痕の如し、痕垢盡くる時、光始めて現ず、心法双忘して、性即ち眞なりと。這裏に到つて、痴の如く兀に似て、方さに此の公案を見ん。若し這裏に到らずして只だ語言中に在つて走らば、甚の了日か有らん。

第三十五則　文殊無着問答

〔龍蛇云々〕宗師家の眼正しくして、學人の心肝を悉く見得して働くを云ふ。

垂示曰。定龍蛇、分玉石、別緇素、決猶豫。若不是頂門上有眼、肘臂下有符、往々當頭蹉過。只如今、見聞不昧、聲色純眞。且道、是皂是白、是曲是直。到這裏、作麽生辨。

讀方　垂示に曰く。龍蛇を定め、玉石を分ち、緇素を別ち、猶豫を決す。若し是れ頂門上に眼有り、肘臂下に符有るにあらずんば、往々に當頭に蹉過せん。只だ如今、見聞不昧、聲色純眞。且らく道へ、是れ皂か是れ白か、是れ曲か是れ直か、這裏に到つて、作麽生か辨ぜん。

擧。文殊問無着、近離什麼處。（不可不借問。也有這箇消息。）無着曰、南方。（草窠裏出頭。何必擔向眉毛上。大方無外。爲什麼却有南方。）殊曰、南方佛法、如何住持。（若問別人則禍生。猶掛脣齒在。）着曰、末法比丘、少奉戒律。（實頭人難得。）殊曰、多少衆。（當時便與一喝。一摎摎倒了也。）着曰、或三百、或五百。（盡是野狐精。果然漏逗。）無着問文殊、此間如何住持。（摎着。便回轉鎗頭來也。）殊曰、凡聖同居、龍蛇混雜。（敗缺不少。直得脚忙手亂。）着曰、多少衆。（還我話頭來。也不得放過。）殊曰、前三三、後三三。（顚言倒語。且道是多少。千手大悲數不足。）

讀方　擧す。文殊無着に問ふ、近離什麼の所ぞ。（借問せずんばあるべからず。也た這箇の消息有り。）無着曰く、南力。（草窠裏より出頭す。何ぞ必らずしも眉毛上に擔向せん。大方外無し、什麼としてか却つて、南方に有る。）殊曰く、南方の佛法、如何か住持す。（若し別人に問はゞ、則ち禍生ぜん。猶ほ脣齒を掛くること在り。）着曰く、末法の比丘、少しく戒律を奉ず。（實頭の人得難し。）殊曰く、多少衆ぞ、（當時便ち一喝を與へん。一摎に摎倒し了れり。）着曰く、或は三百、或は五百。（盡く是れ野狐精。果然として漏逗。）無着文殊に問ふ、此間如何が住持す。（摎着。便ち鎗頭を回轉し來れり。）殊曰く、凡聖同居、龍蛇混雜。（敗缺少なからず。直に得たり、脚忙に手亂なることを。）着曰く、多少衆ぞ。（我れに話頭を還し來れ。也た放過することを得ず。）殊曰く、前三三、後三三。（顚言倒語。且らく道へ、是れ多少ぞ。千手大悲も數へ足らず。）

（無着）傳不詳、或は云ふ、姓董氏、永嘉の人、牛頭法融禪師に嗣法すと。

【評】無着五臺に遊ぶ、中路荒僻の處に至つて、文殊一寺を化し

て、他を接して宿せしむ、遂に問ふ、近離甚の處ぞ。着曰く、南方。殊曰く、南方の佛法、如何か住持す。着曰く、末法の比丘、少しく戒律を奉ず。殊曰く、多少衆ぞ、着曰く、或は三百、或は五百。無着却つて文殊に問ふ、此間如何か住持す。殊曰く、凡聖同居、龍蛇混雜。着曰く、多少衆ぞ。殊曰く、前三三、後三三と。却茶を喫せしむ、文殊玻璃盞子を擧起して曰く、南方に還つて這箇有りや。着曰く、無し。殊曰く、尋常什麼を將てか茶を喫す。着無語、遂に辭し去る。文殊均提童子をして、送つて門首に出でしむ。無着童子に問うて曰く、適來道ふ、前三三、後三三、是れ多少ぞ。童子曰く、大德と。着應諾す。童子曰く、是れ多少ぞ。又問ふ此れは是れ何の寺ぞ。童子金剛の後面を指す。着首を回す。化寺と童子、悉く隱れて見えず、只だ是れ空谷なり、彼の處後來之れを金剛窟と謂ふ。

〔大德〕尊稱なり、今は無着を指す。〔金剛〕金剛密迹にて二王のこと。〔地藏〕地藏の桂琛禪師、玄沙に嗣法す。

後に僧有り、風穴に問ふ、如何なるか是れ清凉山中の主。穴曰く、一句無着の問ふに遑あらず、今に猶ほ野盤の僧と作ると。若し參透平々實々にして、脚實地を踏まんと要せば、無着の言下に向て薦得せよ。自然に鑊湯爐炭の中に居るとも、亦熱を聞かず、寒氷上に居るとも、亦冷を聞かず。若し參透して、孤危峭峻にして、金剛王寶劍の如くならんと要せば、文殊言下に向つて薦取せよ。自然に水灑ぐとも着かず、風吹くとも入らず。見ずや漳州の地藏、僧に問ふ、近離甚の處ぞ。僧曰く、南方。藏曰く、彼の中の佛法如何。僧曰く、商量浩々地。藏曰く、爭でか我が這裏、田を種ゑ飯に摶めて喫するに似んと。且く道へ、文殊の答處と、是れ同か是れ別か。或底は道ふ、無着の答處は不是、文殊の答處は、也た龍有り蛇有り、凡有り聖有りと、什麼の交涉か有らん。還つて前三三、後三三を辨明得

すや。前箭は猶ほ輕く、後箭は深し。且く道へ、是れ多少ぞ、若し這裏に向つて透得せば、千句萬句、只だ是れ一句、若し此の一句下に向つて、截得斷し、把得住せば、相次の間に、這の境界に到らん。」

頌。千峰盤屈、色如レ藍。還見二文殊一麼。誰謂、文殊是對談。設使普賢也不レ顧。蹉過了也。堪レ笑、清涼多少衆。且道笑二什麼一。已在二言前一。前三三、與二後三三一。試請脚下辨看。爛泥裏有レ刺。碗子落レ地、楪子成二七片一。

讀方 千峰盤屈して、色藍の如し、(還つて文殊を見るや。)誰れか謂ふ、文殊是れ對談すと。(設使ひ普賢なりとも、也た顧みず。蹉過し了れり。)笑ふに堪へたり、清涼多少の衆ぞ、(且く道へ、什麼を笑ふ。已に言、前に在り。)前三三と、後三三と。(試みに請ふ、脚下に辨じて看よ。爛泥裏に刺有り。碗子地に落ちて、楪子七片と成る。)

【評】千峰盤屈して、色藍の如し、誰れか謂ふ、文殊是れ對談すと。有者は謂ふ、雪竇只だ是れ重ねて拈ずること一偏す、曾て頌着せず。只だ僧法眼に問ふが如し、如何なるか是れ曹源の一滴水。眼曰く、是れ曹源の一滴水。又僧瑯琊の覺和尚に問ふ、清淨本然、云何忽生山河大地。覺曰く、清淨本然、云何忽生山河大地、也た喚んで、重ねて拈ずること一偏すと作す可からず。明招の獨眼龍、亦其の意を頌す、蓋天蓋地の機有り、道く、沙界に廓周す、勝伽藍、滿目の文殊、是れ對談すと、言下佛眼を開くことを知らず、頭を回らせば、只だ見る翠山岩と。沙界に廓周す、勝伽藍とは、此れ草窟の化寺を指す、所謂權實雙行の機有り。滿目の文殊、是れ對談す、言下に佛眼を開くことを知らず、頭を回らせば、只だ見る翠山岩。正當恁麼

〔碗子云々〕茶碗を落せば茶臺が破るると云ふことにて、七片に意味なし、八片九片と云ふも亦可。

〔明招〕明招の德謙、羅山道閑に嗣法す。

〔針線〕工夫のこと

の時、喚んで文殊、普賢、觀音の境界と作し得てんや、要且つ是れ這箇の道理にあらず。雪竇只だ明招底を改めて用ふ、却つて針線有り。千峰盤屈して、色藍の如し、更に鋒を傷り手を犯さず、句中に權有り實有り、理有り事有り。誰れか謂ふ、文殊是れ對談すと、一夜對談、是れ文殊なることを知らず。後來無着、五臺山に在つて、典座と作る、文殊每に粥鍋上に於て現す、無着に攪粥篦を拈じて、便ち打たる。然も是の如くなりと雖も、也た是れ賊過ぎて後ち弓を張る。當時他の、南方の佛法、如何か住持すと道はんを等つて、劈脊に便ち棒せば、猶ほ些子に較らん。笑ふに堪へたり、清涼の多少の衆、雪竇笑中に力有り、若し這の笑處を會得せば、便ち他の前三三と、後三三と道ふことを見ん。

第三十六則　長沙遊山

〔長沙〕湖

舉。長沙、一日遊山、歸至門首。 今日一日只管落草。前頭也是落草。後頭也是落草。 首座問、和尚什麼處去來。 也是勘過這老漢。箭過新羅。 沙曰、遊山來。 不可落草。敗缺不少。草裏漢。 首座云、到什麼處來。 撈。若有所至未免落草。相牽入火坑。 沙曰、始隨芳草去、又逐落花回。 漏逗不少。元來只在荊棘林裏坐。 座曰、大似春意。 相隨來也。將錯就錯。一手擡一手搦。 沙曰、也勝秋露滴芙蕖。 土上加泥。前箭猶輕後箭深。有什麼了期。 雪竇着語曰、謝答話。 一火弄泥團漢。三箇一狀領過。

讀方　舉す。長沙、一日遊山して、歸つて門首に至る。（今日一日、

南長沙の鹿苑寺景岑禪師なり、南嶽下三世にして、南泉の願禪師に嗣法す。

只管に落草。前頭も也た是れ落草。後頭も也た是れ落草。）首座問ふ、和尚什麼の處にか去來する。（也た是れ這の老漢を勘過す。箭新羅を過ぐ。）沙曰く、遊山し來る。（落草すべからず。敗缺少なからず。草裏の漢。）首座曰く、什麼の處にか到り來る。（摋。若し至る所有らば、未だ落草を免かれず。相牽いて火坑に入る。）沙曰く、始めは芳草に隨つて去り、又落花を逐うて回へる。（漏逗少なからず、元來只だ荊棘林の裏に在つて坐す。）座曰く、大に春意に似たり。（相隨ひ來れり。錯を將つて錯に就く。一手擡、一手搦。）沙曰く、也た秋露の芙蕖に滴るに勝れり。（土上に泥を加ふ。前箭は猶ほ輕く、後箭は深し。什麼の了期か有らん。）雪竇着語して曰く、答話を謝す。（一火泥團を弄するの漢。三箇一狀に領過す。）

【評】長沙鹿苑の招賢大師、南泉に法嗣す、趙州、紫胡の輩と同時

〔師叔〕仰山は長沙の法姪なるが故にかく云ふ。

にして、機鋒敏捷なり。人有り敎を問はゞ、便ち與めに敎を說き、頌を要すれば、便ち與めに頌す。汝若し作家の相見を要せば、便ち汝と作家と相見す。仰山尋常、機鋒最も第一と爲す、一日長沙と同じく月を翫ぶ次で、仰山月を指して曰く、人々盡く這箇有り、只だ是れ用不得。沙曰く、恰も是れ便ち汝を倩うて用ひんや。仰山曰く、汝試みに用ひよ看ん。沙一踏に倒踏す。仰山起つて曰く、師叔一へに箇の大蟲に似たり。後來人號して、岑大蟲と爲す。因みに一日遊山して歸る、首座も亦是れ他の會下の人、便ち問ふ、和尚什麼の處にか去來する。沙曰く、遊山し來る、座曰く、什麼の處にか到つて去來する。沙曰く、始めは芳草に隨つて去り、又落花を逐うて回ると。須らく是れ十方を坐斷する底の人にして、始めて得べし。古人は出入にも、未だ嘗て此の事を以て、念と爲さずんばあらず、看よ

〔夾山亭〕濃州の夾山即ち圜悟の住せし所なり

〔崔顥〕武昌に遊び黃鶴樓に登る、感慨して詩を賦す、後ちに李白來りて曰く、眼前景あれども道ふことを不得、崔顥が詩上頭にありと、乃ち作らずして歸る、顥が詩に曰く。昔人已乘白雲去、此地空餘黃鶴樓、黃鶴一去不復返、白雲千載空悠悠

他賓主互換、當機直截、各々相饒さず。既に是れ遊山す、什麼としてか、却つて問うて道ふ、什麼の處に到つてか去來すと。若し是れ如今の禪和子ならば、便ち道はん、夾山亭に到り來ると。看よ他の古人、絲毫の道理計較無く、亦住着の處無し、所以に道ふ、始めは芳草に隨つて去り、又落花を逐うて囘ると、首座便ち他の意に隨つて、他に向つて道ふ、大に春意に似たり。沙曰く、秋露の芙蕖に滴るに勝れりと。雪竇曰く、答話を謝すと。末後の語に代れり、也た兩邊に落つ、畢竟這の兩邊に在らず。昔、張拙秀才有り、千佛名經を看て、乃ち問ふ、百千の諸佛、但だ其の名を聞く、未審し何れの國土にか居る、還つて物を化すや、也た無しや。沙曰く、黃鶴樓に崔顥、詩を題して後、秀才曾て題すや、也た未だしや。拙曰く、未だ曾て題せず、沙曰く、閑を得て一篇を題取せば也た好し。岑大蟲平生、人の爲めにすること、直に得たり、珠囘り玉轉ずることを。人の當面に便ち會せんことを要す。頌に曰く。

頌。大地絕纖埃、豁開戶牖當軒者誰。盡少這箇不得。天下太平。何人眼不開。頂門上放大光明始得。撒土撒沙作什麼。始隨芳草去、漏逗不少。不是一回落草。賴値前頭已道了。又逐落花囘。處々全眞。且喜歸來。脚下泥深三尺。羸鶴翹寒木、左之右之添一句。更有許多閑事在。狂猿嘯古臺。却因親着力。添一句也不得。減一句也不得。長沙無限意。便打。末後一句道什麼。一坑埋却。墮在鬼窟裏。咄。草裏漢。賊過後張弓。更不可放過。

讀方　大地纖埃を絕す、(戶牖を豁開して、軒に當る者は誰ぞ。盡く這箇を少うすることを得ず。天下太平。)何人か眼を開かざる。(頂門

悠、晴川歷々漢陽樹、芳草萋々鸚鵡洲、日暮鄕關何處是、煙波江上使㆓人愁㆒。」

〔贏鶴云々〕大地纖埃を絕したる境界の遊山玩水を喩へて謠ひたるもの

上に大光明を放つて、始めて得てん。土を撒し沙を撒して、什麼をか作す。）始めは芳草に隨つて去り、（遍逗少なからず。是れ一回草に落つるのみにあらず。賴に前頭、已に道ひ了るに値ふ。）又落花を逐うて囘る。（處々全眞。且喜すらくは歸來することを。脚下泥深きこと三尺。）贏鶴寒木を翔り、（左之右之、一句を添ふ。更に許多の閑事の在るあり。）狂猿古臺に嘯く。（却つて親しく力を着くるに因る。一句を添ふることも也た得ず、一句を減ずることも也た得ず。）長沙限り無きの意。（便ち打つ。末後の一句、什麼と道ふぞ。一坑に埋却せん。鬼窟裏に墮在す。）咄。（草裏の漢。賊過ぎて後弓を張る。更に放過すべからず。）

【評】且く道へ、這の公案と。仰山僧に問ふ、近離甚の處ぞ、僧曰く、廬山。仰曰く、曾て五老峯に到るや。僧曰く、曾て到らず。

〔勝妙〕解脫の境界、修證の邊、奇麗サツパりとした處のこと

仰曰く、闍黎曾て遊山せずと云ふと、緇素を辨じて看よ、是れ同か是れ別か。這裏に到りて、須らく是れ機關盡き、意識忘じ、山河大地、草芥人畜、些子の滲漏無し。若し此の如くならざれば、古人之れを猶勝妙の境界に在りと謂ふ。見ずや雲門道く、直に得たり山河大地、纖毫の過患無きも、猶ほ轉句と爲す、一切の色を見ざるも、始めて是れ半提、更に須らく全提の時節、向上の一竅有ることを知つて、始めて穩坐を解すべし。若し透得せば、舊に依つて山は是れ山、水は是れ水、各々自位に住し、各々本體に當つて、大拍盲の人の如く、相似たり。趙州道く、鷄鳴丑、愁へ見る、起き來つて還つて邋遢することを。裙子褊衫箇も也た無し、袈裟の形相、些々有り、褌に襠無く、袴に口無し、頭上の青灰、三五斗、本修行して人を利濟せんが爲めにす、誰れか知らん、翻つて不喞嚁と成らんとは。若し

〔貼〕添附の義。

眞實に這の境界に到ることを得ば、何人か眼を開かざらん。七顚八倒するに一任す。一切處都て是れ這の境界、都て是れ這の時節、十方壁落無く、四面亦門無し。所以に道ふ、始めは芳草に隨つて去り、又落花を逐うて囘ると。雪竇妨げず巧みなり、只だ他の左邊に去て、一句を貼け、右邊に一句を貼く、一へに一首の詩に似て相似たり。羸鶴寒木に翹り、狂猿古臺に嘯くと、雪竇引いて這裏に到つて、自ら邐迤することを覺つて、驀に曰く、長沙限り無きの意、咄と。夢を作して却つて醒むるが如くに相似たり。雪竇一喝を下すと雖も、未だ勦絕することを得ず、是れ山僧ならば、即ち然らず、長沙限り無きの意、地を掘つて更に深く埋めん。

第三十七則　盤山三界無法

〔掣電云々〕學人を接する宗師家の活機敏捷嶮峻なるを云ふ。

垂示曰。掣電之機、徒勞佇思。當空霹靂、掩耳難諧。腦門上播紅旗、耳背後輪雙劍。若不是眼辨手親、爭能構得。有般底、低頭佇思、意根下卜度、殊不知髑髏前、見鬼無數。且道、不落意根、不拘得失、忽有箇恁麼擧覺、作麼生祇對。試擧看。

讀方　垂示に曰く。掣電の機、徒らに佇思するに勞す。空に當るの霹靂、耳を掩ふに諧ひ難し。腦門上に紅旗を播げ、耳背後に雙劍を輪す。若し是れ眼辨じ、手親しきにあらずんば、爭でか能く構得せん。有般の底は、低頭佇思し、意根下に卜度して、殊に知らず髑髏前に、鬼を見る無數なることを。且く道へ、意根に落ちず、得失に拘はらず、忽ち箇の恁麼に擧覺する有らば、作麼生か祇對せん。試みに擧す看よ。

〔盤山〕幽州の盤山寶積禪師なり、馬祖の法嗣にして後に寂大師と諡せらる。

擧、盤山垂語曰、三界無法、箭既離レ弦無ニ返回勢一。月明照見夜行人。中也。識レ法者懼。好和レ聲便打。何處求レ心。莫レ瞞レ人好。不レ勞ニ重擧一。自點檢看。便打云是什麼。

【讀方】擧す。盤山垂語して曰く、三界無法、(箭既に弦を離れて、返回の勢無し。月明に照らし見る、夜行の人。中れり。法を識る者は懼る。好し聲を和して便ち打つに。)何れの處にか心を求めん。(人を瞞すること莫くんば好し。重ねて擧するに勞せず。自ら點檢して看よ。便ち打して曰く、是れ什麼ぞ。)

【評】向北幽州、盤山の寶積和尚は、乃ち馬祖下の尊宿、後ちに普化一人を出す。師遷化に臨んで、衆に謂うて曰く、還つて人の、吾が眞を邈得する有りや。衆皆眞を寫して師に呈す。師皆之れを叱す。普化出でゝ云く、某甲邈得す。師曰く、何ぞ老僧に呈似せざる。普化便ち筋斗を打して出づ。師曰く、這の漢向後、風狂の如くにして、人を接し去ること在らん。一日衆に示して曰く、三界無法、何れの處にか心を求めん。四大本空、佛何に依つてか住せん、璿璣動ぜず、寂止として痕無く、覿面に相呈す、更に餘事無し。雪竇兩句を拈じ來つて頌す、直に是れ渾金璞玉。道ふことを見ずや、病を瘥すは驢駞藥を假らず、山僧什麼として道ふ、聲に和して便ち打つと。只だ佗の擔枷過狀なるが爲めなり。古人道く、聲外の句を稱すること を聞いて、意中に向つて求むること莫れ。且く道へ、佗の意作麼生。直に得たり、奔流度刄、電轉じ星飛ぶことを。若し擬議尋思せば、千佛出世すとも、也た他を摸索することを着けず。若し是れ深く閫奥に入つて、徹骨徹髓、見得透する底あらば、盤山一場の敗缺。若し言を承けて宗を會し、左轉右轉する底あらば、盤山只だ一橛を得たり。

〔驢駞藥〕澤山な藥と云ふこと。

〔古人〕盤山寶積を指す。

若し是れ拖泥帶水、聲色堆裏に轉ぜば、未だ夢にだも盤山を見ざること在らん。五祖先師道く、那邊を透過して、方さに自由の分有らんと。見ずや三祖道く、之れを執すれば度を失して、必らず邪路に入り、之れを放てば自然なり、體に去住無しと。古人之れを解脫の深坑と謂ふ、本是れ善因なれども而も惡果を招く、所以に道ふ、無爲無事の人、猶ほ金鎖の難に遭ふと、也た須らく是れ窮まつて、底に到つて始めて得べし。若し無言の處に向つて言ひ得、行不得の處に向つて行じ得ば、是れを轉身の處と謂ふ。三界無法、何れの處にか心を求めん、汝若し情解を作さば、只だ他の言下に去つて死却せん。雪竇の見處七穿八穴、所以に頌出す。

（所以に道ふ）盤山の語なり。

頌。三界無法、（言猶在レ耳。）何處求レ心。（不レ勞二重擧一。自點檢看。打曰是什麼。）白雲爲レ蓋、（頭上安レ頭。千重萬重。）流泉作レ琴。（聞麼。相隨來也。一聽一堪レ悲。）一曲兩曲、無二人會一、（不レ落二宮商一、非レ干二角徵一。借レ路經過。五音六律盡分明。自領出去。聽則聾。）雨過夜塘秋水深。（迅雷不レ及レ掩レ耳。直得拖泥帶水。在二什麼處一。便打。）

讀方　三界無法、（言猶ほ耳に在り。）何れの處にか心を求めん。（重ねて擧するに勞せず。自ら點檢して看よ。打して曰く是れ什麼ぞ。）白雲を蓋と爲し、（頭上に頭を安ず。千重萬重。）流泉を琴と作す。（聞くや。相隨ひ來れり。一たび聽いて、一たび悲しむに堪へたり。）一曲兩曲、人の會する無し、（宮商に落ちず、角徵に干るに非らず。路を借りて經過す。五音六律盡く分明。自領出去。聽けば則ち聾す。）雨過ぎて夜塘、秋水深し。（迅雷耳を掩うて及ばず。直に得たり

（三界）欲界、色界、無色界なり、浮世と云ふが如し。

拖泥帶水。什麼の處にか在る。便ち打つ。〕

【評】　三界無法、何れの處にか心を求めん、雪竇頌し得て、一へに華嚴の境界に似たり。有者は道ふ、雪竇無中に唱出すと。若し是れ眼皮綻ぶる底ならば、終に恁麼に會せず。雪竇他の傍邊に去つて、兩句を貼く、道く、白雲を蓋と爲、流泉を琴と作す。蘇內翰照覺に見えて頌有り、曰く、溪聲は便ち是れ廣長舌、山色豈に淸淨身に非らざらんや、夜來八萬四千の偈、他日如何か人に擧似せん。雪竇流泉を借りて、一片の長舌頭と作す。所以に道ふ、一曲兩曲、人の會する無しと。見ずや九峰の虔和尚道く、還つて命を識得すや。流泉は是れ命、湛寂は是れ身、千波競ひ起る、是れ文殊の家風、一亘の晴空、是れ普賢の境界。流泉を琴と作す、一曲兩曲、人の會する無し、這般の曲調、也た須らく是れ知音にして、始めて得べし。若し其の人に非ずんば、徒らに耳を側つるに勞す。古人道く、聾人も也た胡家の曲を唱ふ、好惡高低、總に聞かずと。雲門道く、擧するに顧せざれば、即ち差互す、思量せんと擬せば、何の劫にか悟らん。擧は是れ體、顧は是れ用、未だ擧せざる已前、朕兆未分已前に見得せば、要津を坐斷せん。若し朕兆纔かに分れて見得せば、便ち照用有らん、若し朕兆分れて後ち見得せば、意根に落在せん。雪竇式煞だ慈悲、更に汝に向つて道ふ、却つて雨過ぎて、夜塘秋水深きに似たり。此の一頌、曾て人有りて論量して、雪竇に翰林の才有ることを美む。雨過ぎて夜塘、秋水深し、也た須らく是れ急に眼を着けて看る可し、更に若し遲疑せば、即ち討ぬるとも見えじ。

〔蘇內翰〕翰林學士蘇東坡のこと。〔照覺〕東林の常聰禪師なり、黃龍の慧南禪師に嗣法す。〔九峰〕九峰道虔のこと、石霜慶諸の法嗣なり。〔古人〕道場如訥。

第三十八則　風穴鐵牛機

〔頓漸〕頓は頓悟直入の法門、漸は漸々修習學の法門なり、蓋し人々の根機に依る。

垂示曰。若論漸也、返常合道、鬧市裏七縱八横。若論頓也、不留朕迹、千聖亦摸索不着。儻或不立頓漸、又作麼生。快人一言、快馬一鞭。正恁麼時、誰是作者。試舉看。

讀方　垂示に曰く。若し漸を論ぜば、常に返りて道に合す、鬧市裏に七縱八横。若し頓を論ぜば、朕迹を留めず、千聖も亦摸索不着。儻し或は頓漸を立せずんば、又作麼生。快人の一言、快馬の一鞭、正恁麼の時、誰れか是れ作者、試みに擧す看よ。

舉。風穴在郢州衙內、上堂曰、倚公說禪。道什麼。祖師心印、狀似鐵牛機。千人萬人撼不動。誵訛節角在什麼處。三要印開不犯鋒鋩。去即印住、正令當行。錯。住即印破。再犯不容。看取令行時。撈。便打。只如不去不住、看無頓置處。多少誵訛。印即是、不印即是。天下人頭出頭沒有分。文彩已彰。但請掀倒禪床。喝散大衆。時有盧陂長老、出問、某甲有鐵牛機、釣得一箇諳曉得。不妨奇特。請師不搭印。好箇話頭。爭奈誵訛。穴曰、慣釣鯨鯢澄巨浸、却嗟蛙步𩥇泥沙。似鶻捉鳩。寶網漫空。神駒千里。陂佇思。可惜許。也有出身處。可惜放過。穴喝曰、長老何不進語。攙旗奪鼓。炒鬧來也。陂擬議。三回死了。兩重公案。穴打一拂子。好打。這箇令須是恁麼人行始得。穴曰、還記得話頭麼、試舉看。何必。雪上加霜。陂擬開口。一死更不再活。這漢鈍置殺人。遭他毒手。穴又打一拂子。牧主曰、佛法與王法一般。穴曰、見箇什麼道理。也好與一撈。却回鎗頭來也。牧灼然。却被傍人覷破。主曰、當斷不斷、返招其亂。似則似。是則未是。須知傍人有眼。東家人死西

（風穴）臨濟下の尊宿、延昭禪師なり、南院慧顒に嗣法す。

家人助哀。穴便下座。將錯就錯。見機而變。且得參學事畢。

讀方 擧す。風穴郢州の衙內に在りて、上堂に曰く、（公に倚り禪を說く。什麼と道ふぞ。）祖師の心印、狀鐵牛の機に似たり。（千人萬人撼不動。諸訛節角、什麼の處にか在る。三要印開して、鋒鋩を犯さず。）去れば即ち印住し、（正令當行。錯。）住すれば即ち印破す。（再犯容さず、令行の時を看取せよ。撥。便ち打つ。）只だ去らず住せざるが如きは、（看よ頓置の處無きことを。多少の諸訛。）印するが即ち是か、印せざるが即ち是か。（天下の人、頭出頭沒するに分有り。文彩已に彰はる。但だ請ふ禪床を掀倒し、大衆を喝散することを。）時に盧陂長老と云ふもの有り、出で、問ふ、某甲鐵牛の機有り、（一箇の諳曉得を釣り得たり。妨げず、奇得なることを。）請ふ師印を搭せざれ。（好箇の話頭。爭奈せん諸訛あることを。）穴曰く、鯨鯢を釣つて、巨浸を澄ましむるに慣れて、却つて嗟す、蛙步の泥沙に驟することを。（鶻の鳩を捉ふるに似たり。寶網空に漫たり。神駒千里。）陂佇思す。（可惜許。也た出身の處有り。惜しむ可し放過することを。）穴喝して曰く、長老何ぞ進語せざる。（旗を攙き鼓を奪ふ。炒鬧し來れり。）陂擬議す。（三回死し了れり。兩重の公案。）穴打つこと一拂子。（好し打つに。這箇の令、須らく是れ恁麼の人にして、行じて始めて得べし。）穴曰く、還つて話頭を記得すや、試みに擧せよ看ん。（何ぞ必せん、雪上に霜を加ふ。）陂口を開かんと擬す。（一死更に再活せず。這の漢人を鈍置殺す。他の毒手に遭ふ。）穴又打つこと一拂子。牧主曰く、佛法と王法と一般。（灼然。却つて傍人に覷破せらる。）穴曰く、箇の什麼の道理をか見る。（也た好し一撥を與ふるに。

（巨浸）大海なり、即ち禪海の廣大なるを喩ふ。

〔噓々〕口を圓くして息を出すなり、吹は陰に屬し、噓は陽に屬すと、計較なき作家の働きを云ふ。

〔讖〕豫め將來を明める義なり、猶ほ未來記の如し。

却つて鎗頭を回し來れり。）牧主曰く、斷ずべきに斷ぜざれば、返つて其亂を招く。（似ることは則ち似たり、是なることは則ち未だ是ならず。須らく知るべし、傍人に眼あることを。東家の人死すれば、西家の人哀しみを助く。）穴便ち下座す。（錯を將て錯に就く。機を見て變ず。且く參學の事畢ることを得たり。）

【評】風穴は乃ち臨濟下の尊宿なり。臨濟當初、黃檗の會下に在つて、松を栽うる次で、檗曰く、深山裏許多の松を栽ゑて、什麼をか作す。濟曰く、一には山門の與めに境致を作し、二には後人の與めに、標榜と作さんと、道ひ了つて、地を钁すること一下。檗曰く、然も是の如くなりと雖も、子已に二十棒を喫し了れり。濟又地を打つこと一下して曰く、噓々。檗曰く、吾が宗汝に到つて、大に世に興らん。潙山の喆曰く、臨濟恁麼に、大に平地に喫交するに似たり、然も是の如くなりと雖も、危きに臨んで變ぜず、始めて眞の丈夫と稱す。檗曰く、吾が宗汝に到つて、大に世に興らん、兒を憐んで醜を覺らざるに似たり。後來潙山、仰山に問ふ、黃檗當時、只だ臨濟一人に囑付するか、別に更に在ること有るか。仰山曰く、有り、只だ是れ年代深遠、和尙に擧似するを欲せず。潙山曰く、然も是くの如くなりと雖も、吾れ亦知らんと要す、但だ擧せよ看ん。仰山曰く、一人南を指して、吳越に令行せん、大風に遇はゞ即ち止らんと。此れ乃ち風穴を讖するなり。穴初め雪峯に參ずること五年、因みに、臨濟堂に入る、兩堂の首座、齊しく一喝を下す。僧臨濟に問ふ、還つて賓主有りや、也た無しや。濟曰く賓主歷然と云ふを請益す。穴曰く、未審し意旨如何。峯曰く、吾れ昔岩頭欽山と去つて、臨濟に見えんとす、途中に在つて、已に遷化すと聞く、若し他の賓主

〔南院〕慧忠國師。

の話を會せんと要せば、須らく是れ他の宗派下の尊宿に參ずべし。穴後に又瑞巖の、常に自ら主人公と喚んで、自ら曰く、諾。復た曰く、惺々著、他後人の瞞却を受くること莫し、と云ふを見て穴曰く、自ら拈じ自ら弄す、什麼の難きか有らんと。後に襄州の鹿門に在つて、廓侍者と夏を過す、廓他を指し來らして、南院に參ぜしむ。穴曰く、門に入らば、須らく主を辨ずべし、端的請ふ師分てと。一日遂に南院に見ゆ、前話を擧して曰く、某甲特に來つて親覲す。南院曰く、雪峰は古佛。一日鏡淸に見ゆ。淸問ふ、近離甚の處ぞ。穴曰く自ら東を離れ來る。淸曰く、還つて小江を過ぐるや、否や。穴曰く、大舸獨り空に飄ひ、小江濟るべき無し。淸曰く、鏡水の圖山、鳥飛んで渡らず、子遺言を盜聽すること莫れ。穴曰く、滄溟尙ほ艨艟の勢を怯る、列漢に帆を飛ばして、五湖を渡る。淸拂子を竪起して曰く、這箇を爭奈せん。穴曰く、這箇は是れ什麼ぞ。淸曰く、果然として識らず。穴曰く、出沒卷舒、師と同用なり。淸曰く、杓卜して虛聲を聽き、熟睡譫語饒し。穴曰く、澤廣うして山を藏し、理能く豹を伏す。淸曰く、罪を赦し愆を放す、速かに須らく出で去れ。穴曰く、出でなば即ち失せん。乃便ち出で、、法堂上に至り、自ら謂うて言く、大丈夫、公案未だ了ぜず、豈に便ち休す可けんや。却回して再び方丈に入る。淸坐する次で、便ち問ふ、某適來輙ち駮見を呈して、尊顏を冒瀆す、伏して和尙の慈悲を蒙むる、未だ罪責を賜はらず。淸曰く、適來東より來る、豈に是れ翠岩より來るにあらずや。穴曰く、雪竇親しく棲む寶蓋の東。淸曰く、亡羊を逐うて、狂解息まず、却つて這裏に來つて、詩篇を念ず。穴曰く、路に劍客に逢はば、須らく劍を呈すべし、是れ詩にあらずんば、詩人を獻ずるこ

〔杓卜〕柄杓を抛つて吉凶を卜すること。

〔駮見〕愚痴無智の見處を云ふ。

〔寶蓋〕雪竇山、寶蓋共に明州に在り、直ち

に來處なし言はずしてかく云ふは、法は無所住の故に、也た是れ賊手段なりと種電抄にあり

と莫れ。清曰く、詩は速かに祕却せよ、畧〻劍を借せ看ん。穴曰く、首を刎ぬる甑人、劍を携へて去る。清曰く、獨り風化に觸る〻のみにあらず、亦自ら顢頇を顯はす。穴曰く、若し風化に觸れずんば、焉んぞ古佛の心を明めん。清曰く、何をか古佛の心と名く。穴又曰く、再び允容を許せ、師今何か有らん。清曰く、東來の衲子菽麥分たず。穴曰く、只だ以まずして、而かも以むことを聞く、何ぞ抑へて以めて、而かも以むことを得ん。清曰く、巨浪湧くこと千尋、澄波水を離れず。清曰く、一句截流、萬機寢削、穴便ち禮拜す。清拂子を以て、點ずること三點して曰く、俊なるかな且坐喫茶。風穴初めて南院に到る、門に入つて禮拜せず。院曰く、門に入らば主を辨ずべし。穴曰く、端的請ふ師分て。院左手を以て、膝を拍つこと一下。穴便ち喝す。院右手を以て膝を拍つこと一下。穴亦喝す。院左

〔黄面の浙子〕タハケ者即ち白凝漢と云ふが如し、浙子とは浙江より出でたる人なるが故に云ふ。

手を擧して曰く、這箇は即ち闍黎に從す、又右手を擧して曰く、這箇又作麼生。穴曰く、瞎。院遂ひに拄杖を拈ず。穴曰く、什麼をか作す、某甲拄杖を奪却して、和尚を打着せん、言ふこと莫れ道はじと。院便ち拄杖を擲下して曰く、今日這の黄面の浙子に、頓置一上せらる。穴曰く、和尚大に持鉢することを得ずして、詐つて飢ゑずと道ふに似たり。院曰く、闍黎曾て此間に到ること莫しや。穴曰く、是れ何と云ふぞや。院曰く、好々に借問す。穴曰く、也た放過することを得ず。院曰く、且坐喫茶と。汝看よ、俊流自ら是れ機鋒峭峻なることを、南院亦未だ他を辨得せず。次の日に至りて、南院只だ平常の問を作して曰く、今夏甚の處にか在りし。穴曰く、鹿門にして、廓侍者と同じく夏を過す。院曰く、元來親しく作家を見來る。又曰く、佗汝に向つて什麼をか道ひし。穴曰く、始終某甲をして、

〔五代〕梁、唐、晉、漢、周なり。

一向に主と作さしむ。院便ち打して、方丈を推し出して曰く、這般の敗缺を納る、底の漢、什麼の用處か有らんと。穴此れより服膺す。南院の會下に在りて園頭と作る。一日院、園裏に到り問うて曰く、南方の一棒、作麼生か商量する。穴曰く、奇特の商量を作す。穴曰く、和尚此間作麼生か商量する。院棒を拈起して曰く、棒下の無生忍、機に臨んで師に讓らず。穴是に於て、豁然として大悟す。是の時五代離亂す、郢州の牧主、師を請じて夏を度らしむ、是の時臨濟の一宗大に盛なり。他凡そ是れ問答垂示、妨げず語句尖新にして、花を攅し錦を簇して、字々皆下落あることを。一日牧主、師を請じて上堂せしむ、衆に示して曰く、祖師の心印、狀、鐵牛の機に似たり。去れば即ち印住し、住すれば即ち印破す。只だ去らず住せざるが如きんば、印するが即ち是か、印せざるが即ち是か。何故ぞ

石人、木馬の機に似ず、直下に鐵牛の機に似るや。汝が撼動の處無し、汝才かに去れば、即ち印住し、汝才かに住すれば、即ち印破す。汝をして百雜碎せしめ、只だ去らず住せざるが如きんば、印するが即ち是か、印せざるが即ち是か。看よ他恁麼の垂示、謂つべし鉤頭に餌有ることを。是の時座下に、盧陂長老なるもの有り、亦是れ臨濟下の尊宿なり。敢へて出頭し來つて、他の與めに機に對して、便ち他の話頭を轉じて、箇の問端を致す。妨げず奇特なることを。道く某甲に鐵牛の機有り、請ふ師印を搭せざれと。爭奈せん風穴は是れ作家なることを。便ち他に答へて道く、鯨鯢を釣つて、巨浸を澄ましむるに慣れて、却つて嗟す、蛙步の泥沙に驟することを。也た是れ言中に響有り。雲門曰く、鉤を四海に垂れて、只だ獰龍を釣る。格外の玄機、知己を尋ぬるが爲めなりと。巨浸に乃ち十二頭の水牯

〔苕帚云々〕氣力の敗失して何の用をなさぬことならん、又死亡の敗卒多く途に滿ちて、苕帚を以て掃盡し難きを云ふとも云へり、蓋し前者の意可なるべし。

牛を鈎餌と爲して、却つて只だ一蛙を釣り得て出で來る、此の語且らく玄妙無し、亦道理計較無し。古人道く、若し事上に向つて覰ば、則ち易し、若し意根下に向つて卜度せば、則ち沒交渉と。盧陂佇思す、之れを見て取らずんは、千載にも逢ひ難し。可惜許。所以に道ふ、直饒ひ千經論を講得するも、一句機に臨んで口を下すこと難しと。其の實は盧陂、好語を討ねて、他に對へんと要す、令を行ぜんと欲せずして、風穴に一向に、旗を攙し鼓を奪ふ底の機鋒を用ひて、一向に逼り將ち去らる。只だ奈何ともすること沒きことを得たり。俗諺に曰く、陣敗れて苕帚の掃ふに禁へず。當初更に鎗法を討ねて、他に敵せんことを要す、汝が討ね得來るを等たば、即ち頭地に落ちん。牧主亦久しく風穴に參じ、佛法と王法と一般なりと云ふことを解す。穴曰く、汝箇の什麼をか見る。牧主曰く、斷すべきに當つて斷ぜざれば、返つて其の亂を招くと。風穴渾て是れ一團の精神、水上の胡蘆子の如くに相似たり、捺着すれば便ち轉じ、按着すれば便ち動ず。機に隨つて說法することを解す、若し機に隨はずんば、翻つて妄語と成らん。穴便ち下座す。只だ臨濟、四賓主の話有るが如きんば、夫れ參學の人、大に須らく子細にすべし。賓主相見の如きは、語論賓主往來有り、或は物に應じて形を見はし、全體作用し、或は機權を把つて喜怒し、或は半身を現はし、或は獅子に乘り、或は象王に乘る。眞正の學人有るが如くんば、便ち喝して、先づ一箇の膠盆子を拈出す。善知識是れ境なることを辨ぜずして、便ち他の境上に上つて、模を作し樣を作す。學人便ち喝す。前人肯て放下せず。此れは是れ膏肓の病、醫治するに堪へず、喚んで賓、主を看ると作す。或は是れ善知識、物を拈出せずして、學人の問處に隨

第三十八則　風穴鐵牛機

（慈明）汾陽の嗣にして楚圓禪師なり

つて便ち奪ふ、學人奪はれて、死に抵るまで放たず、此れは是れ主、賓を看る。或は學人有り、一箇清淨の境に應じて、善知識の前に出づ。知識是れ境なることを辨得し、他を把へて坑裏に抛向す。學人言く、大好善知識と。知識即ち曰く、咄哉好惡を識らずと。學人禮拜す、此れを喚んで主、主を看ると作す。或は學人有り、枷を被り鎖を帶びて、善知識の前に出づ。知識更に他の爲めに、一重の枷鎖を安ず。學人歡喜、彼此辨せず、呼んで賓、賓を看ると爲す。大德、山僧が擧する所、皆是れ魔を辨じ異を揀んで、其邪正を知らしむ。見ずや僧慈明に問ふ、一喝賓主を分ち、照用一時に行ずる時如何。慈明便ち喝す。又雲居の弘覺禪師、衆に示して曰く、譬へば獅子の、象を捉ふるにも亦其の力を全うし、兎を捉ふるにも亦其の力を全うするが如し。時に僧有りて問ふ、未審し什麽の力をか全うす

（鐵牛）東坡の詩に、誰能知ニ鐵牛一、横レ身負ニ黄河一とあり、註に陝州に鐵牛の廟あり、今封じて順

る。雲居曰く、欺かざるの力。看よ他の雪竇頌出することを。

頌。擒ニ得盧陂、跨ニ鐵牛一、（千人萬人中也要レ呈ニ巧藝一。敗軍之將不ニ再斬一。）**三玄戈甲、未ニ輕酬一。**（當レ局者迷、受レ災如レ受レ福。受レ降如レ受レ敵。）**楚王城畔、朝宗水、**（説ニ什麽朝宗水一。浩々充ニ塞天地一。任是四海也須ニ倒流一。）**喝下、曾令ニ却倒流一。**（不三是這一喝截ニ却佗舌頭一。咄。驚ニ走陝府鐵牛一。嚇ニ殺嘉州大象一。）

讀方　盧陂を擒得して、鐵牛に跨がらしむ、（千人萬人の中、也た巧藝を呈せんことを要す。敗軍の將、再び斬らず。）三玄の戈甲、未だ輕しく酬いず。（局に當る者は迷ふ。災を受くることは、福を受くるが如し。降を受くることは、敵を受くるが如し。）楚王城畔、朝宗の水、（什麽の朝宗の水とか説かん。浩々として天地に充塞す、任ひ是れ四海なるも、也た須らく倒流すべし。）喝下、曾て却つて倒流せし

齊王と爲す、頭は河の南に在つて尾は河の北にありとあり。〔大象〕唐の玄宗の時、沙門海通、嘉州の大江に、高さ三十六丈の彌勒佛を石を以て作る、九層を覆開すと。〔三玄〕體中玄、句中玄、玄中玄。

めん。（是れ這の一喝、佗の舌頭を截却するのみに非らず。咄。陝府の鐵牛を驚走し、嘉州の大象を嚇殺す。）

【評】雪竇、風穴に這般の宗風有ることを知つて、便ち頌して道く、盧陂を擒得して、鐵牛に跨がらしむ、三玄の戈甲、未だ輕しく酬いず。臨濟下に、三玄三要あり、凡そ一句の中に、須らく三要を具すべし、一言の中に、須らく三要を具すべし。僧臨濟に問ふ、如何なるか是れ第一句。濟曰く、三要印開して、朱點窄し、未だ擬議を容れざるも、主賓分る。如何なるか是れ第二句。濟曰く、妙辨豈に無着の問を容れんや、漚和截流の機を負はず。如何なるか是れ第三句。濟曰く、但だ看よ棚頭に傀儡を弄することを、抽牽全く裏頭の人に藉る。風穴一句の中に、便ち三玄の戈甲を具す。七事身に隨つて、輕しく他に酬いず。若し此の如くならずんば、盧陂を爭奈何せ

〔三要〕第一要、第二要、第三要。實、統曰く、句中に玄要なきは死句なりと。〔七事〕第十五則頌の評唱に出づ見るべし。

ん。後面に雪竇、臨濟下の機鋒を出さんことを要す。道ふこと莫れ是れ盧陂、假饒ひ楚王城畔、洪波浩渺、白浪滔天なりとも、盡く去つて朝宗するも、只だ一喝を消して、也た須らく倒流せしむべし。

第三十九則　雲門金毛獅子

垂示曰。途中受用底、似㆓虎靠㆒㆑山、世諦流布底、如㆓猿在㆒㆑檻。欲㆑知㆓佛性義㆒、當㆑觀㆓時節因緣㆒。欲㆑煆㆓百錬精金㆒、須㆓是作家爐鞴㆒。且道、大用現前底、將㆓什麼㆒試驗。

讀方　垂示に曰く。途中受用底は、虎の山に靠るに似たり、世諦流布底は猿の檻に在るが如し。佛性の義を知らんと欲せば、當さに時節因緣を觀ずべし。百錬の精金を煆へんと欲せば、須らく是れ作家

の爐鞴なるべし。且らく道へ、大用現前底、什麼を將つてか試驗せん。

擧。僧問㆓雲門㆒、如何是清淨法身。（壒圾堆頭見㆓丈六金身㆒。斑々駁駁是什麼。）門曰、花藥欄。（問處不㆑眞答來鹵莽。堊着磕着。曲不㆑藏㆑直。）僧曰、便恁麼去時如何。（渾崙吞㆓箇棗㆒。放憨作麼。）門曰、金毛獅子。（也褒也貶。兩采一賽。將㆑錯就㆑錯。是什麼心行。）

【讀方】 擧す。僧雲門に問ふ、如何なるか是れ清淨法身。（壒圾堆頭に、丈六の金身を見る。斑々駁々是れ什麼ぞ。）門曰く、花藥欄。（問處眞ならざれば、答へ來ること鹵莽なり。堊着磕着。曲は直を藏さず。）僧曰く、便ち恁麼にし去る時如何。（渾崙に箇の棗を吞む。放憨にして作麼。）門曰く、金毛の獅子。（也た褒也た貶。兩采一賽。錯を將つて錯に就く。是れ什麼の心行ぞ。）

〔膿滴々地〕玄沙因に錯つて毒藥を服して、偏身紅爛す、時に僧問ふ、如何なるか是れ堅固法身、沙曰く膿滴々地。

【評】 諸人還つて這の僧の問處と、雲門の答處とを知るや。若し知得せば、兩口同じく一舌無し、若し知らずんば、未だ顢頇を免れず。僧玄沙に問ふ、如何なるか是れ清淨法身。沙曰く膿滴々地、金剛眼を具すと、試みに請ふ辨じて看よ。雲門別人に同じからず、有時は把定して、壁立萬仞、汝が湊泊の處なし、有時は汝が爲めに、一線道を開いて、同死同生す、雲門の三寸甚だ密なり。或者は道ふ、是れ彩に信せて答へ去ると。若し恁麼に會せば、且らく道へ、雲門什麼の處にか落在する。這箇は是れ屋裏の事なり、外に向つて卜度すること莫れ。所以に百丈道く、森羅萬象、一切の語言、皆轉じて自己に歸して、轉轆々地ならしむ。活潑々の處に向つて、便ち道ふ、若し擬議尋思せば、便ち第二句に落ち了れり。永嘉道く、法身覺了

（水中の月云々」戸利禪師の語なり

すれば無一物、本源自性天眞佛と。雲門這の僧を驗す、其の僧亦是れ他の屋裏の人、自ら是れ久參なり、他の屋裏の事を知つて、進んで曰く、便ち恁麼にし去る時如何。門曰く、金毛の獅子と。且く道へ、是れ他を肯ふか、是れ他を肯はざるか、是れ他を褒するか、是れ他を貶するか。岩頭道く、若し戰を論ぜば、箇々轉處に立在せん。又道く、他活句に參じて、死句に參ぜず、活句下に薦得すれば、永劫にも忘せず、死句下に薦得すれば自救不了と。又僧雲門に問ふ佛法は水中の月の如しと、是なりや否や。門曰く、淸波透路無し。進んで曰く、和尙何よりしてか得る。門曰く、再問復た何よりか來る。僧曰く、正恁麼にし去る時如何。門曰く、重疊たる關山の路。須らく知るべし此の事、言句上に在らず、擊石火の如く、閃電光に似たり、構得構不得、未だ免れず、喪身失命することを。雪竇は是

（普州の

れ其の中の人、便ち當頭に頌出す。

頌。花藥欄、（言猶在耳。）莫顢頇。（如麻似粟。也有些子。自領出去。）星在秤兮不在盤。（太葛藤。各自向衣單下返觀。不免說道理。）便恁麼（渾崙呑箇棗。）太無端。（自領出去。灼然。莫錯怪他雲門好。）金毛獅子大家看。（放出一箇半箇。也是箇狗子。雲門也是普州人送賊。）

讀方　花藥欄、（言猶ほ耳に在り。）顢頇すること莫れ。（麻の如く粟に似たり。也た些子有り。自領出去。）星は秤に在りて盤に在らず。（太だ葛藤。各自衣單下に向つて返觀せよ。免かれず道理を說くことを。）便ち恁麼、（渾崙に箇の棗を呑む。）太だ端無し。（自領出去。灼然。錯りて他の雲門を怪しむこと莫くんば好し。）金毛の獅子大家看よ。（一箇半箇を放出す。也た是れ箇の狗子。雲門也た是れ普州の人

人〕普州は古來盜賊の多く出でし處、遂ひに普州の人と云へば盜賊と云ふことになれり、〔席を見て云々〕方語に風を見て帆を使ふと云ふ意。

賊を送る。〕

【評】雪竇席を相て令を打し、絃を動かして曲を別つ、一句一句に判將し去る、此の一頌、拈古の格に異ならず。花藥欄、便ち道ふ、顢頇すること莫れ。人皆道ふ、雲門彩に信せて、答へ將ち去ると、總に情解を作して、佗底を會す。所以に雪竇、本分の草料を下して、便ち道ふ、顢頇すること莫れと。蓋し雲門の意、花藥欄の處に在らず。所以に雪竇道く、星は秤に在つて盤に在らずと。這の一句忒煞だ遷迶。水中に元月無し、月は靑天に在り、星は秤に在つて、盤に在らざるが如し。且く道へ、那箇か是れ秤。若し辨明得出せば、雪竇に辜負せず。古人這裏に到つて、也た妨げず慈悲なることを。分明に汝に向つて道ふ、這裏に在らずんば、那邊に在り去らん、且く道へ、那邊は是れ什麼の處ぞ。此れは頭邊の一句を頌し了る、後面に這の僧、便ち恁麼にし去る時如何と道ふことを頌す。雪竇道く、這の僧也た太だ端無しと、且らく言へ、是れ明頭合か、暗頭合か。會し來つて恁麼に道ふか、會し來らずして恁麼に道ふか。金毛の獅子、大家看よと、還つて金毛の獅子を見るや。瞎。

〔瞎〕盲目なり、メクラ共此の金毛の獅子が見えまいと云ふ程の意。

〔黠兒〕黠は敏黠にてカシコ

第四十則　南泉一株花

垂示曰。休去歇去、鐵樹開花。有麼有麼、黠兒落節。直饒七縱八横、不免穿他鼻孔。且道、諸訛在什麼處。試擧看。

讀方　垂示に曰く。休し去り歇し去る、鐵樹花開く。有りや有りや、黠兒落節。直饒ひ七縱八横なるも、他に鼻孔を穿たる丶ことを免れず。且らく道へ、諸訛什麼の處にか在る。試みに擧す看よ。

イ者のこと、兒は敢て小兒に非らず

〔陸亘〕陸は姓名は亘字は景山蘇州の人なり、南泉に嗣

舉。陸亘大夫、與南泉語話次、陸曰、肇法師道、天地與我同根、萬物與我一體、也甚奇怪。鬼窟裏作活計。畫餅不可充飢。也是草裏商量。南泉指庭前花、道什麼。咄。經有經師、論有論師、不干山僧事。咄。大丈夫當時下得一轉語、不唯截斷南泉、亦乃與天下衲僧出氣。召大夫曰、時人見此一株花、如夢相似。鴛鴦繡了從君看、莫把金針度與人。莫寐語。引得黃鸞下柳條。

讀方 擧す。陸亘大夫、南泉と語話する次で、陸曰く、肇法師道く、天地と我と同根、萬物と我と一體、也た甚だ奇怪なり。(鬼窟裏に活計を作す。畫餅は飢を充たす可からず。也た是れ草裏に商量す。) 南泉庭前の花を指して。(什麼と道ふぞ。咄。經に經師有り、論に論師有り、山僧が事に干からず。咄。大丈夫、當時一轉語を下し得ば、唯だ南泉を截斷するのみにあらず、亦乃ち天下の衲僧の與めに、氣を出さしめん。) 大夫を召して曰く、時の人此の一株の花を見るに、夢の如くに相似たり。(鴛鴦繡し了つて、君が看るに從す、金針を把つて、人に度與すること莫れ。寐語すること莫れ。黃鸞を引き得て、柳條を下さしむ。)

法す。

〔肇法師〕僧肇法師姚秦の時代に龜茲國より支那へ來り、法華、阿彌陀經大智度論等を始め、多くの經論を譯したる羅什の高足なり、羅什門下の四哲の一人、後罪を得て死刑に處せられんと

【評】陸亘大夫は、久しく南泉に參ず、尋常心を理性の中に留めて、肇論に遊泳す。一日坐する次で、遂に此の兩句を拈じて、以て奇特と爲して問うて曰く、肇法師道く、天地と我と同根、萬物と我と一體、也た甚だ奇怪なりと。肇法師は、乃ち晉の時の高僧、生融叡と同じく、羅什の門下に在り、之れを四哲と謂ふ。幼年より好んで莊老を讀んで、後に古維摩經を寫すに因つて、悟る處有り。方に莊老

すろや官に請うて七日の猶豫と筆墨紙とを得、寶藏論を著すと云ふ、其遺著を集めて肇論と稱し世に行はる。〔夢の如くにし〕文殊の偈に曰く、淨極光通達、寂照含虛空、却來觀世間、猶如夢中

の猶ほ未だ善を盡さゞるを知る、故に諸經を綜して、乃ち四論を作る。莊老の意に謂く、天地は形の大なり、我が形亦爾かなり、同じく虛無の中に生ず。莊生が大意は、只だ齊物を論ず、肇公の大意は、性は皆自己に歸することを論ず。見ずや他の論の中に道く、夫れ至人は空洞として象無く、萬物は我が造るに非らざるなし、萬物を會して自己と爲る者は、其れ唯だ聖人か、神有り人有り、賢有り聖有り、各別なりと雖も、而かも皆同じく、一性一體なり。古人道く、盡乾坤大地は、只だ是れ一箇の自己、寒する時は則ち普天普地寒し、熱する時は則ち普天普地熱し、有なる時は則ち普天普地有、無なる時は則ち普天普地無、是なる時は則ち普天普地是、非なる時は則ち普天普地非と。法眼曰く、渠れは渠れが渠、我れは我れが我、南北東西皆可々、可々不可々、但だ唯り我れ不可無しと。所以に道ふ、

事と。〔繡〕繡なり。〔黃鶯〕を云々、胡釘鉸の詩に曰く、日暮堂前華蘂嬌、爭拈小筆上牀描、繡成安向春園裡、引得黃鶯下柳條と。〔肇論〕全部四卷あり、物不遷論一、不眞空論二、三般

天上天下唯我獨尊と。石頭因みに肇論を看、此の萬物を會して、自己と爲すと云ふ處に至つて、豁然として大悟す、後に一本の參同契を作る、亦此の意を出でず。看よ他の恁麼に問ふことを。且らく道へ、什麼の根と同じく、那箇の體と同じき。這裏に到つて、也た妨げず奇特なることを。豈に他の常人、天の高く地の厚きことを知らざると同じからんや、豈恁麼の事有らんや。陸亘大夫恁麼に問ふ、奇特なることは則ち奇特なり、只だ是れ教意を出でず。若し教意是れ極則と道はゞ、世尊何故ぞ、更に拈花し、祖師更に西來して作麼。南泉の答處、衲僧の巴鼻を用ひて、他の爲めに痛處を拈出す。他の窠窟を破り、遂に庭前の花を指して、大夫を召して曰く、時の人此の一株の花を見て、夢の如くに相似たりと。人を引いて萬丈の懸崖上に向つて、推一推して、他をして命斷せしむるが如し。

若無知論、四涅槃無明論
〔生、融、叡〕道生、道融、僧叡なり。
〔羅什〕具さに鳩摩羅什、多くの經論を飜譯せる有名なる人、此に童壽と云ふ。
〔他の論中〕肇論の中、涅槃無明論を指す。
〔古人〕德

汝若し平地上に推倒せば、彌勒佛下生にも、也た只だ命斷することを解せず、也人の夢に在るが如く、覺めんと欲して覺めず、人に喚び醒まさるゝに相似たり。南泉若し是れ眼目正しからずんば、必定して他に搽糊し持ち去られん。看よ他の恁麼の說話、也た妨げず會し難きことを。若し是れ眼目定動して、活底あらば、聞き得て醍醐上味の如けん、若し是れ死底あらば、聞き得て飜つて毒藥と成らん。古人道く、若し事上に於て見ば、常情に墮在せん、若し意根下に向つて卜度せば、卒に摸索不着。岩頭道く、此れは是れ向上の人の活計、只だ目前の些子を露はす、電の拂に如同すと。南泉の大意此の如し、虎兕を擒へ、龍蛇を定むる底の手脚有り、這裏に到つて、也た須らく是れ自ら會して、始めて得べし。道ふことを見ずや、向上の一路、千兕不傳、學者形を勞すること、猿の影を捉ふるが如しと。

山緣密なり。
〔所以道〕大莊嚴經、瑞應經等に出づ。
〔向上の一路云云〕盤山寶積の語なり。
〔在〕オイテと訓むは風外禪師の意也

看よ他の雪竇の頌出することを。

頌。聞見覺知、非一々、森羅萬象無有一法。七花八裂。眼耳鼻舌身意。一時是箇無孔鐵鎚。山河不在鏡中觀。我這裏無這箇消息。長者自長、短者自短。青是青、黃是黃。汝向什麼處觀。霜天月落夜將半、引汝入草了也。徧界不曾藏。切忌向鬼窟裏坐。誰共澄潭照影寒。有麼有麼。若不同床睡、焉知被底穿。愁人莫向愁人說、說向愁人愁殺人。

讀方 聞見覺知、一々に非ず、(森羅萬象、一法の有ること無し。七花八裂。眼耳鼻舌身意、一時に是れ箇の無孔の鐵鎚。)山河鏡中に在て觀ず。(我が這裏、這箇の消息無し。長者は自ら長、短者は自ら短、青は是れ青、黃は是れ黃。汝什麼の處に向つてか觀る。)霜天月落ちて、夜將に半ならんとす、(汝を引いて草に入り了れり。徧

界曾て藏さず。切に忌む鬼窟裏に向つて坐することを。)誰れと共にか澄潭に影を照して寒き。(有りや有りや。若し同床に睡らずんば、焉ぞ被底の穿つことを知らん。愁人、愁人に向つて說くこと莫れ、愁人に說向すれば、人を愁殺す。)

【評】南泉は少睡語、雪竇は大睡語、然も夢を作すと雖も、却つて箇の好夢を作し得たり。前頭には一體と說き、這裏には不同と說く。聞見覺知、一々に非ず、山河鏡中に在て觀ず。若し鏡中に在て觀て、然る後に方さに曉了すと道はゞ、則ち鏡處を離れず。山河大地草木叢林、鏡を將つて鑑すること莫し、若し鏡を將つて鑑せば、便ち兩段と爲らん。但只山は是れ山、水は是れ水、法々住法位、世間相常住なるべし。山河鏡中に在て觀ず、且く道へ、什麼の處に向つてか觀ん。還つて會すや。這裏に到つて、霜天月落ちて、夜半ならんとするに向つて、這邊は汝が爲めに、打併し了れり、那邊は汝自ら相度れ。還つて雪竇、本分の事を以て、人の爲めにすることを知るや。誰れと共にか澄潭に影を照らして寒きと、復た自ら照すとやせん、復た人と共に照らすとやせん、須らく是れ機を絶し、解を絕して、方さに這の境界に到るべし。即今也た澄潭を要せず、也た霜天月の落つることを待たず、即今作麼生。

佛果圜悟禪師碧巖錄第四卷終

第四十則　南泉一株花

佛果圜悟禪師碧巖錄第五卷

第四十一則　趙州大死底

垂示曰。是非交結處、聖亦不レ能レ知、逆順縱橫時、佛亦不レ能レ辨。爲二絕世超倫士一、顯二逸群大士之能一、向二氷凌上一行、劍刄上走。直下如二麒麟頭角一、似二火裏蓮花一。宛見二超方一、始知二同道一。誰是好手者、試擧看。

讀方　垂示に曰く。是非交結の處、聖も亦知る能はず、逆順縱橫の時、佛も亦辨ずる能はず。絕世超倫の士と爲つて、逸群大士の能を顯はし、氷凌上に向つて行き、劍刄上に走る。直下に麒麟の頭角の如く、火裏の蓮花に似たり。宛かも超方を見て、始めて同道することを知る。誰れか是れ好手の者ぞ、試みに擧す看よ。

擧。趙州問二投子一、大死底人、却活時如何。（有二恁麼事一。）**投子曰、不レ許二夜行一、投レ明須レ到。**（賊不レ打二貧兒家一。慣曾作レ客方憐レ客。看レ樓打レ樓。是賊識レ賊。若不二同床臥一、焉知二被底穿一。）

讀方　擧す。趙州、投子に問ふ大死底の人、却つて活する時如何。（恁麼の事有り。）投子曰く、夜行を許さず、明に投じて須らく到るべし。（賊は貧兒の家を打せず。曾て客と作るに慣れて、方さに客を憐れむ。樓を看て樓を打す。是れ賊賊を識る。若し同床に臥さずんば、焉んぞ被底の穿つことを知らん。）

【評】　趙州、投子に問ふ、大死底の人、却つて活する時如何。投子他に對へて道ふ、夜行を許さず、明に投じて須らく到るべしと。且く

〔是非交結〕不可思議向上の行履を云ふ。
〔麒一角〕出格の義
〔火裏蓮〕不可思議の義。
〔投子〕舒州投子山の大同禪師、達磨十一世の孫。
〔打〕賊の忍び入ると云ふ意
〔樓を見て〕樓に依て樓を模樣など

書くと云ふに同じ、或は先方の出方に依つて應ずるとの意とも云ふ、蓋し前者の意可ならん乎。

〔承嗣不同〕趙州は南嶽下にして即ち南泉の嗣たり、投子は青原下にして翠微に嗣ぐ。

道へ、是れ什麼の時節ぞ、無孔の笛、氈柏版に撞着す、此れ之れを驗主問と謂ひ、亦之れを心行問と謂ふ。投子、趙州、諸方皆之れを逸群の辯を得と美む、二老承嗣同じからずと雖も、看よ他の機鋒相投じて一般なることを。投子一日、趙州の爲めに、茶筵を置いて相待す、自ら蒸餅を過して、趙州に與ふ。州管せず。投子行者をして、胡餅を過して、趙州に與へしむ。州、行者を禮すること三拜。且く道へ、他の意是れ如何。看よ他、盡く是れ根本の上に向つて、此の本分の事を提げて、人の爲めにすることを。僧有り問ふ、如何なるか是れ道。答へて曰く、道。如何なるか是れ佛。答へて曰く、佛。又問ふ、金鎖未だ開かざる時如何。答へて曰く、開。金雞未だ鳴かざる時如何。答へて曰く、總て此の如き音響無し。鳴いて後如何。答へて曰く、各自時を知ると。投子平生、問答總て此の如し。看よ

〔古人〕雲門のこと

〔永光〕永光の眞和尙にして雲居の嗣なり。

趙州問ふ、大死底の人、却つて活する時如何。他便ち道ふ、夜行を許さず、明に投じて須らく到るべしと。直下に擊石火の如く、閃電光に似たり、他の向上の人に還して始めて得ん。大死底の人、都て佛法の道理、玄妙得失、是非長短無し、這裏に到つて、只だ恁麼に休し去る。古人之れを平地上に死人無數、荊棘林を過得せば、是れ好手と謂ふ。也須らく是れ那邊を透過して、始めて得べし。然かも是の如くなりと雖も、如今の人、這般の田地に到ること、早く是れ得難し。或は若し依倚有り、解會有らば、則ち沒交涉。喆和尙は、之れを見不淨潔と謂ひ。五祖先師は、之れを命根不斷と謂ふ。須らく是れ大死一番して、却つて活して始めて得べし。浙中の永光和尙道く、言鋒若し差はゞ、鄕關萬里、直に須らく懸崖に手を撒して、自ら肯うて承當すべし。絕後に再び甦らば、君を欺くこと得ず、非常の

〔古人〕首山なり。

旨、人焉んぞ廋さんや。趙州の問意此の如し、投子は是れ作家、亦他の所問に辜負せず、只だ是れ情を絶ち迹を絶つ、妨げず會し難きことを。只だ面前の些子を露はす、所以に古人道く、親切を得んと欲せば、問を持ち來つて問ふこと莫れ、問は答處に在り、答は問處に在りと。若し投子に非らずんば、趙州に一問せられて、也た大に酬對し難からん、只だ他は是れ作家の漢なるが爲めに、擧着すれば、便ち落處を知る。

頌　活中有レ眼、還同レ死。兩不二相知一。翻來覆去。若不二蘊藉一爭辨二得這漢緇素一。藥忌何須レ鑑二作家一。若不二驗過一爭辨二端的一。遇着試與二一鑑一又且何妨。也要二問過一。古佛尚言、曾未レ到。賴是有レ伴。千聖也不レ傳。山僧亦不レ知。不レ知誰解、撒二塵沙一。即今也不レ少。開眼也着。合眼也着。闍黎恁麼擧。落二在什麼處一。

〔活中〕趙州を頌す

〔藥忌〕藥を服用するとき物忌みをすること。

〔古人〕德山緣密。

〔古人〕雲

讀方　活中に眼有り、還つて死に同じ。(兩ながら相知らず。飜來覆去。若し蘊藉せずんば、爭でか這の漢の緇素を辨得せん。)藥忌何ぞ須ひん、作家を鑑みることを。(若し驗過せずんば、爭でか端的を辨ぜん。遇着して試みに一鑑を與ふ、又且つ何ぞ妨げん。也た問過せんことを要す。)古佛尚ほ言ふ、曾て未だ到らずと。(賴ひに是れ伴有り。千聖も也た傳へず、山僧も亦知らず。)知らず誰れか解せん、塵沙を撒くことを。(即今也た少なからず、開眼も亦た着、合眼も也た着。闍黎恁麼に擧す、什麼の處にか落在す。)

【評】　活中に眼有り、還つて死に同じと、雪竇は是れ有ることを知る底の人、所以に敢へて頌す。古人道く、他活句に參じて、死句に參ぜずと。雪竇道く、活中に眼有り、還つて死漢に同じく相似たり、何ぞ曾て死す、死中に眼を具せば、活人に如同す。古人道く、死人

門文假。

を殺盡して、方さに活人を見る、死人を活盡して、方さに死人を見ると。趙州は是れ活底の人、故に死問を作して、投子を驗取す、藥性の忌む所の物、故らに將ち去つて、試驗するが如くに相似たり。所以に雪竇道く、藥忌何ぞ須ひん、作家に鑒みることをと。此れ趙州の問所を頌し、後面は投子を頌す。古佛尙ほ言ふ、未だ曾て到らずと、只だ這の大死底の人、却つて活する處、古佛も亦曾て到らず、天下の老和尙も亦曾て到らず。任ひ是れ釋迦老子、碧眼の胡僧も、也た須らく再參して、始めて得べし。所以に道ふ、只だ老胡の知を許して、老胡の會を許さずと。雪竇道く、知らず誰れか解せん、塵沙を撒くことを。見ずや僧長慶に問ふ、如何なるか是れ善知識の眼、慶曰く、願有りて沙を撒かず。保福曰く、更に撒す可からずと。天下の老和尙、曲彔木床上に據つて、棒を行じ喝を行じ、拂を竪て床を敲き・神通を現はし、主宰と作るも、盡く是れ沙を撒す。且く道へ、如何が免れ得ん。

第四十二則　龐居士好雪

〔單提獨弄〕些少の方法手段を用ひざること

垂示曰。單提獨弄、帶水拖泥、敲唱俱行。銀山鐵壁、擬議則髑髏前見レ鬼、尋思則黑山下打坐。明々杲日麗レ天、颯颯清風匝レ地。且道、古人還有二諸訛所一。試擧看。

讀方 垂示に曰く。單提獨弄、帶水拖泥、敲唱倶に行ず。銀山鐵壁、擬議する時は、則ち髑髏前に鬼を見、尋思する時は、則ち黑山下に打坐す。明々たる杲日天に麗き、颯々たる清風地に匝る。且らく道へ、古人還つて諸訛する所有りや。試みに擧す看よ。

擧。龐居士、辭二藥山一、這老漢作レ怪也。**山命二十人禪客一、相**

送至門首。〔也不輕他。是什麼境界。也須是識端倪底衲僧始得。〕居士指空中雪曰、好雪片々、不落別處。〔無風起浪。指頭有眼。這老漢言中有響。〕時有全禪客曰、落在什麼處。〔中也。相隨來也。果然上鉤來。〕士打一掌。〔着。果然。勾賊破家。〕全曰、居士也不得草々。〔棺木裏瞠眼。〕士曰、汝恁麼稱禪客、閻老子、未放汝在。〔第二杓惡水潑了。何止閻老子。山僧這裏也不放過。〕全曰、居士作麼生。〔麁心不改。又是要喫棒。這僧從頭到尾不着便。〕士又打一掌。〔果然。雪上加霜。喫棒了呈欵。〕曰、眼見如盲、口說如啞。〔更有斷和句。又與他讀判語。〕雪竇別曰、初問處、但握雪團便打。〔是則是。賊過後張弓。也漏逗不少。雖然如是要見箭鋒相拄。爭奈落在鬼窟裏了也。〕

〔龐居士〕

衡州衡陽縣の人、姓は龐、名は蘊、字は道玄、初め石頭希遷禪師に參じ、更に馬祖道一に參じて大悟徹底す、馬祖の法嗣百三十八人中の隨一なりと。

讀方　擧す。龐居士、藥山を辭す、(這の老漢、怪を作せり)。山十人の禪客に命じて、相送つて門首に至らしむ。(也た他を輕んぜず。是れ什麼の境界ぞ。也た須らく是れ端倪を識る底の衲僧にして、始めて得べし。)居士空中の雪を指して曰く、好雪片々、別處に落ちず。(風無きに浪を起す。指頭に眼有り。這の老漢、言中に響有り。)時に全禪客と云ふものあり曰く、什麼の處にか落在する。(中れり。相隨ひ來れり。果然として鉤に上り來る。)士打つこと一掌す。(着。果然として勾賊破家。)全曰く、居士也た草々なることを得ざれ。(棺木裏に瞠眼す。)士曰く、汝恁麼に禪客と稱せば、閻老子、未だ汝を放さゞること在らん。(第二杓の惡水潑ぎ了れり。何ぞ止だ閻老子のみならん、山僧が這裏も、也た放過せず。)全曰く、居士作麼生。(麁心改めず。又是れ棒を喫せんと要す。這の僧頭めより尾りに到るまで、便を着けず。)士又打つこと一掌す。(果然。雪上に霜を加ふ。棒を喫し

（自ら偶諧）自悟の境界を云ふ、即ち獨り自ら合ふのみ。

了つて。欵を呈す。）曰く、眼見て盲の如く、口說いて啞の如し。（更に斷和の句有り。又他の與めに判語を讀む。）雪竇別して曰く、初問の處に、但だ雪團を握て、便ち打たん。（是は則ち是。賊過ぎて後ち弓を張る。也た漏逗少からず。然も是くの如くなりと雖も、箭鋒相拄ふを見んと要す。爭奈せん鬼窟裏に落在し了れり。）

【評】龐居士、馬祖石頭兩處に參じて頌有り。初め石頭に見えて、便ち問ふ、萬法と侶ならざる、是れ什麼人ぞ。聲未だ斷たざるに、石頭に口を掩却せられて、箇の省處有り、頌を作つて曰く、日用事別無し、唯だ吾れ自ら偶諧す、頭々取捨に非ず、處々張乖沒し、朱紫誰か號を爲す、青山點埃を絕す、神通並に妙用、水を運び及び柴を搬ぶと。後に馬祖に參ず、又問ふ、萬法と侶ならざる、是れ什麼人ぞ。祖曰く、汝が一口に、西江の水を吸盡せんを待つて、即ち汝に向つて道はん。士豁然として大悟す。頌を作つて曰く、十方の同聚會、箇々學無爲、此れは是れ選佛場、心空及第して歸ると。佗は是れ作家なるが爲めに、後に列刹相望んで、至る所競ひ譽む。藥山に到つて、盤桓すること既に久し、遂に藥山を辭す、山、他を至重して、十人の禪客に命じて相送らしむ。是の時雪の下るに値ふ、居士雪を指して曰く、好雪片々、別處に落ちず。全禪客曰く、什麼の處にか落在する。士便ち掌す。全禪客、既に令を行すること能はず、居士令一半を行ず。令行はずと雖も、全禪客、恁麼に酬對す也た是れ他の落處を知らずんばあらず。各々機鋒有りて、卷舒同じからず、然かも居士の處に到らざることあり、所以に他の彀中を出で難し。居士打し了つて、更に與めに道理を說いて曰く、眼見て盲の如く、口說いて啞の如しと。雪竇前語に別して

（列刹）諸寺諸山のこと。

曰く、初問の處に、但だ雪團を握つて、便ち打たんと。雪竇恁麼に、他の問端に辜せざらんことを要す、只だ是れ機遲し。慶藏主道ふ、居士の機、掣電の如し、汝が雪團を握るを等たば、幾時にか到らん、聲に和して便ち應じ、聲に和して便ち打たば、方さに始めて勦絕せんと。雪竇自ら、佗の打處を頌して曰く。

頌。雪團打、雪團打、爭奈落㆓在第二機㆒。不㆑勞㆓拈出㆒。頭上漫々脚下漫々。龐老機關、沒可把。往々有㆓人不㆑知。只恐不恁麼。天上人間、不㆓自知㆒、是什麼消息。雪竇還知麼。眼裏耳裏、絕瀟灑。箭鋒相拄。眼見如㆑盲口說如㆑啞。瀟灑絕、作麼生。向㆓什麼處㆒見㆔龐老與㆓雪竇㆒。碧眼胡僧、難㆓辨別㆒。達磨出來、向㆑汝道㆓什麼㆒。打曰、闍黎道㆓什麼㆒。一坑埋却。

讀方　雪團打、雪團打、（爭奈せん第二機に落在することを。拈出するを勞せず。頭上漫々、脚下漫々。）龐老の機關、沒可把。（往々に人の知らざる有り。只だ恐る不恁麼ならんことを。）天上人間、自ら知らず、（是れ什麼の消息ぞ。雪竇還つて知るや。）眼裏耳裏、絕瀟灑。（箭鋒相拄ふ。眼見て盲の如く、口說いて啞の如し。）瀟灑絕。（作麼生。什麼の處に向つてか、龐老と雪竇とを見る。）碧眼の胡僧も、辨別すること難し。（達磨出で來るとも、汝に向つて什麼とか道はん。打して曰く、闍黎什麼と道ふぞ。一坑に埋却せん。）

〔漫可把〕讀んで字の如く、把るべきなし、即ち手のつけやうのなきこと

【評】　雪團打、雪團打、龐老の機關、沒可把と、雪竇、居士の頭上に在つて行かんことを要す。古人雪を以て、一色邊の事を明す。雪竇の意に道く、當時若し雪團を握つて打たん時、居士縱ひ如何なる機關あるも、也た搆得し難からん。雪竇自ら他の打處に誇る、殊に知らず、落節の處有ることを。天上人間、自ら知らず、眼裏耳裏、

絕瀟灑。眼裏も也た是れ雪、耳裏も也た是れ雪、正に一色邊に住在す、亦之れを普賢の境界一色邊の事と謂ひ、亦之れを打成一片と謂ふ。雲門道く、直に盡乾坤大地、纖毫の過患無きを得るも、猶ほ轉句と爲る、一色を見ざるも、始めて是れ半提、若し全提を要せば、須らく向上の一路有ることを知つて、始めて得べし。這裏に到つて、須らく是れ大用現前、針劄不入にして、他人の處分を聽かざるべし。所以に道ふ、他活句に參じて、死句に參せずと。古人道く、一句合頭の語、萬劫の繫驢橛、什麼の用處か有らん。雪竇此に到つて、頌殺し了れり。復た機を轉じて道ふ、只だ此の瀟灑絕、碧眼の胡僧も、也た辨別し難し。眼碧の胡僧、尙ほ辨別し難し、更に山僧をして、箇の什麼とか說かめん。

〔古人〕船子徳誠を云ふ。

第四十三則　洞山無寒暑

垂示曰。定乾坤句、萬世共遵。擒虎兕機、千聖莫辨。直下更無纖翳、全機隨處齊彰。要明向上鉗鎚、須是作家爐韛。且道、從上來、還有恁麼家風也無。試擧看。

讀方　垂示に曰く。乾坤を定むるの句、萬世共に遵ふ、虎兕を擒ふるの機、千聖も辨ずること莫し。直下更に纖翳無く、全機處に隨つて齊しく彰はる。向上の鉗鎚を明らめんと要せば、須らく是れ作家の爐韛なるべし。且く道へ、從上來、還つて恁麼の家風有りや、也た無しや。試みに擧す看よ。

擧。僧問洞山、寒暑到來、如何廻避。不是這箇時節。劈頭劈面。在什麼處。山曰、何不向無寒暑處去。天下人尋不得。藏身露影。蕭何賣却

〔洞山〕曹洞宗の高祖、名は良价、後ち勅して悟本大師と云ふ、達磨十一世の法孫なり。〔假銀城〕蕭何人を欺いて銀城を賣與せんと云ふ、されど漢地に銀城なし、只だ假に謀を設けて敵を欺きしのみといふ。〔黄龍悟新〕死心悟新和尚のこと、晦堂祖心に嗣法す。〔安禪〕杜荀鶴、夏日悟空上人の院に題する詩に曰く、三伏閉門披一衲、兼無

假銀城。僧曰、如何是無寒暑處。賺殺一般人。隨他轉也。一鉤便上。山曰、寒時寒殺闍黎、熱時熱殺闍黎。眞不掩僞、曲不藏直。臨崖看虎兕。特地一場愁。掀翻大海、踢倒須彌。且道、洞山在什麼處。

【讀方】 擧す。僧洞山に問ふ、寒暑到來、如何が廻避せん。（是れ這箇の時節にあらず。劈頭劈面。什麼の處にか在る。）山曰く、何ぞ無寒暑の處に向つて去らざる。（天下の人、尋ぬるに得ず。身を藏して影を露はす。蕭何賣却す、假銀城。）僧曰く、如何なるか是れ無寒暑の處。（一般の人を賺殺す。他に隨つて轉ず。也た一鉤に便ち上る。）山曰く、寒時には闍黎を寒殺し、熱時には闍黎を熱殺す。（眞は僞を掩はず、曲は直を藏さず。崖に臨んで虎兕を看る。特地一場の愁。大海を掀飜し、須彌を踢倒す。且らく道へ、洞山什麼の處にか在る。）

【評】 黄龍の新和尚、拈じて曰く、洞山袖頭に領を打し、腋下に襟を剜る、爭奈せん這の僧甘はざることを。如今箇の出で來つて、黄龍に問ふこと有らば、且らく道へ、如何か支遣せん。良久して曰く、安禪は必らずしも山水を須ひず、心頭を滅却すれば、火も自ら涼し。諸人且く道へ、洞山の圈繢、什麼の處にか落在する。若し明辨得せば、始めて洞山下の五位、回互正偏、人を接することを知らん、妨げず奇特なることを。這の向上の境界に到つて、方に能く此の如く、安排を消せず、自然に恰好なり。所以に道ふ、正中偏、三更初夜、月明の前、怪しむ莫れ、相逢うて相識らざることを、隱々として猶ほ舊日の嫌を懷く。偏中正、失曉の老婆、古鏡に逢ふ、分明覿面、更に眞無し、更に頭に迷うて、還つて影を認むることを休めよ。正中來、無中に路有りて、塵埃を出づ、但だ能く、當今の諱に觸れ

松竹蔭二房廊一安、禪不三必須二山水一、滅二却心頭一火自涼。
（折合）畢竟の義。
（洞山）守初禪師なり。

ず、也た前朝、斷舌の才に勝れり。偏中至、兩刄鋒を交へて、避くることを須ひず、好手還つて、火裏の蓮の如し、宛然として、自ら衝天の氣有り。兼中到、有無に落ちず、誰れか敢て和せん、人々盡く、常流を出でんと欲す、折合して還つて、炭裏に歸つて坐す。浮山の遠錄公、此の公案を以て、五位の格を爲す、若し一則を會得せば餘者自然に會し易からん。岩頭道く、水上の葫蘆子の如くに、相似たり、捺着すれば便ち轉ず、絲毫の氣力を消せず。曾て僧有り、洞山に問ふ、文殊普賢、來參の時如何。山曰く、水牯牛の群裏に趕向し去らん。僧曰く、和尙、地獄に入ること箭の如し。山曰く、全く他の力を得たり。洞山道く、何ぞ無寒暑の處に向つて去らざる。此れは是れ偏中正。僧曰く、如何なるか是れ無寒暑の處。山曰く、寒時には闍黎を寒殺し、熱時には闍黎を熱殺すと。此れは是れ正中偏なり。正と雖ども却つて偏、偏と雖も却つて圓、曹洞錄中に、備さに子細を載す。若し是れ臨濟下ならば、許多の事無し、這般の公案、直下に便ち會す。有者は道ふ、大好無寒暑と。什麼の巴鼻か有らん。古人道く、若し劒刄上に向つて走らば、則ち快、若し情識上に向つて見ば則ち遲。見ずや僧翠微に問ふ、如何なるか是れ祖師西來意。微曰く、人無からんを待つて來れ、汝に向つて道はん。遂に園中に入て行く。僧曰く、此間人無し、請ふ和尙道へ。微、竹を指して曰く、這の一竿竹、恁麼に長きことを得たり、那の一竿竹、恁麼に短きことを得たり。其僧忽然として大悟す。又曹山僧に問ふ、恁麼に熱す、什麼の處に向つてか廻避せん。僧曰く、鑊湯爐炭裏に廻避せん。山曰く、鑊湯爐炭裏、如何か廻避せん。僧曰く、衆苦も到ること能はず。看よ他の家裏の人、自然に他の家裏の人の說話を會す

〈垂手〉落草の手段、恰も手を垂れて小供を導くが如しとの意よりかく云ふなり〈安排〉思慮分別のこと。〈忍俊〉悧俐俊發を云ふ。

ることを。雪竇他の家裏の事を用ひて頌出す。

頌。垂手還同萬仞崖。不是作家誰能辨得。何處不圓融。王勅既行諸侯避道。正偏何必在安排。若是安排何處有今日。作麼生。兩頭不渉。風行草偃水到渠成。琉璃古殿照明月。圓陀陀地。切忌認影。且莫當頭。忍俊韓獹空上階。不是這回。蹉過了也。逐塊作什麼。打云汝與這僧同參。

讀方　垂手還つて萬仞崖に同じ。（是れ作家にあらずんば、誰れか能く辨得せん。何處にか圓融せざる。王勅既に行はれて、諸侯道を避く。）正偏何ぞ必ずしも安排に在らん。（若し是れ安排せば、何れの處にか今日有らん。作麼生か兩頭に渉らざる。風行けば草偃し、水到れば渠成る。）琉璃古殿明月照らす、（圓陀々地。切に忌む影を認むることを。且らく當頭なること莫れ。）忍俊たる韓獹空しく階に上る。（是れ這囘のみにあらず。蹉過し了れり。塊を逐うて什麼か作さん。打して曰く、汝這の僧と同參。）

【評】　曹洞下に出世不出世有り、垂手不垂手有り。若し不出世なれば、目に雲霄を視、若し出世なれば便ち灰頭土面。若し目に雲霄を視ば、即ち是れ萬仭峯頭、灰頭土面は、即ち是れ垂手邊の事なり。有時は灰頭土面にして、即ち萬仭峯頭に在り、有時は萬仭峯頭にして、即ち是れ灰頭土面、其の實は、鄽に入つて手を垂ると、孤峯に獨立すると一般なり。歸源了性と、差別智と異なる無し。切に忌む兩概の會を作すことを。所以に道ふ、垂手還りて、萬仭崖に同じと、直に是れ汝が湊泊の處無し、正偏何ぞ必らずしも、安排に在らん。若し用ふる時に到らば、自然に此の如し、安排に在らず。此れは洞山の答處を頌す。後面に道く、琉璃古殿、明月照らす、忍俊たる韓獹

〔石女〕寶鏡三昧に曰く、木人方歌、石女起舞。
〔木馬〕曹山正中來の頌に曰く、泥牛吼二水面一、木馬逐レ風嘶。
〔無底籃〕夾山曰く、路逢二死蛇一莫二打殺一、無底籃子盛將歸。
〔夜明珠〕

空しく階に上る、此れ正に這の僧の、言語を逐うて走ることを頌す。洞下に此の石女、木馬、無底籃、夜明珠、死蛇等の十八般有り、大綱只だ正位を明す。月の琉璃古殿を照らすが如きは、圓影有るに似たり。洞山答へて曰く、何ぞ無寒暑の處に向つて去らざると。其の僧一へに、韓獹の塊を逐うて、連忙に階に上りて、其の月影を捉ふるに似て、相似たり。又問ふ、如何なるか是れ無寒暑の處。山曰く、寒時には闍黎を寒殺し、熱時には闍黎を熱殺すと。韓獹の塊を逐うて、走つて階上に到つて、又却つて月影を見ざるが如し。韓獹は乃ち戰國策に出づ、曰く、韓氏の獹、駿狗なり、中山の兎は、狡兎なりと。是れ其の獹、方に能く其の兎を尋ぬ。雪竇引いて以つて、這の僧に喩ふ、只だ諸人の如くんば、還つて洞山、爲人の處を知るや。良久して曰く、甚の兎子をか討ねん。

同安觀志曰く、夜明簾、外排班立、萬里歌謠道太平。
〔死蛇〕青林師虔曰く、死蛇當二大路一、勸レ子莫二當頭一。
〔韓獹〕戰國策の故事、即ち齊魏を伐たんとす、時に淳于髡なる者齊王に說いて曰く、韓獹は天下

第四十四則　禾山解打鼓

擧、禾山垂語曰、習學謂二之聞一、絶學謂二之鄰一、天下衲僧跳不出。無孔鐵鎚。一箇鐵橛子。過二此二一者一、是爲二眞過一。頂門上具二一隻眼一。作二什麼一。僧出問、如何是眞過。道二什麼一。一筆勾下。有二一箇鐵橛子一。山曰、解打鼓。鐵橛。鐵蒺藜。確々。又問、如何是眞諦。道二什麼一。兩重公案。又有二一箇鐵橛子一。山曰、解打鼓。鐵橛。鐵蒺藜。確々。又問、即心即佛、即不レ問、如何是非心非佛。道二什麼一。這箇垃圾堆。三段不レ同。又一箇鐵蒺藜子。山曰、解打鼓。鐵橛。鐵蒺藜。確々。又問、向上人來時、如何接。道二什麼一。遭二他第四杓惡水一來也。又有二一箇鐵橛子一。山曰、解打鼓。鐵橛。鐵蒺藜。確々。且道、落二在什麼處一。朝到二西天一、暮歸二東土一。

の俊犬なり、東郭狻は海内の狡兎なり、韓獹、東郭の狻を逐ふ、山に騰ること五たび、山を環ること三たび、兎は前に極り、犬は後に疲る、兎犬倶に疲れて、各々其の處に死すと云々。

（禾山）吉州禾山の殷禪師、青原下第七世、達磨十三世の法孫なり、九峰道虔に嗣法す。

（習學云云）肇法師の寶藏論に出づ。

（所以に道ふ）雲門の語なり。

（一宿覺）永嘉の眞覺なり。

【讀方】 舉す。禾山垂語して曰く、習學之れを聞と謂ひ、絶學之れを隣と謂ふ。（天下の衲僧跳不出。無孔の鐵鎚。一箇の鐵橛子。）此の二を過ぐる者を、是れを眞過と爲す。（頂門上に一隻眼を具して、什麼か作す。）僧出で、問ふ、如何なるか是れ眞過。（什麼と道ふぞ。一筆に勾下す。一箇の鐵橛子有り。）山曰く、解打鼓。（鐵橛。鐵蒺藜。確確。）又問ふ、如何なるか是れ眞諦。（什麼と道ふぞ。兩重の公案。又一箇の鐵橛子有り。）山曰く、解打鼓。（鐵橛。鐵蒺藜。確々。）又問ふ、即心即佛は即ち問はず、如何なるか是れ非心非佛。（什麼と道ふぞ。這箇の坵堆。三段同じからず。又一箇の鐵蒺藜子。）山曰く解打鼓。（鐵橛。鐵蒺藜。確々。）又問ふ、向上の人來る時、如何か接せん。（什麼と道ふぞ。他の第四杓の惡水に遭ひ來れり。又一箇の鐵橛子有り。）山曰く、解打鼓。（鐵橛。鐵蒺藜。確々。且く道へ、什麼の處にか落在する。朝に西天に到り、暮に東土に歸る。）

【評】 禾山垂語して曰く、習學之れを聞と謂ひ、絶學之れを隣と謂ふ、此の二を過ぐる者を、是れを眞過と爲すと。此の一則の語、寶藏論に出でたり。學、無學に至る、之れを絶學と謂ふ、所以に道ふ、淺く聞いて深く悟る、深く聞いて悟らず、之れを絶學と謂ふ。一宿覺道く、吾れ早年より來た、學問を積む、亦曾て疏を討ね、經論を尋ね、習學既に盡く、之れを絶學無爲の閑道人と謂ふ、絶學に至るに及んで、方に始めて道と相近し。直に此の二學を過ぐることを得る、是れを眞過と謂ふ、其の僧也た妨げず明敏なることを。便ち此の語を拈じて、禾山に問ふ。山曰く、解打鼓と、所謂言無味、語無味、這箇の公案を明らめんと欲せば、須らく是れ向上の人にして、方に能く此の語、理性に涉らず、亦議論の處無きことを見るべし。

〔國師水碗〕第四十八則の評唱に此公案あり

直下に便ち會せば、桶底の脫するが如くに相似たり。方に是れ衲僧安穩の處、始めて祖師西來意に契得せん。所以に雲門道く、雪峯の輥毬、禾山の打鼓、國師の水碗、趙州の喫茶、盡く是れ向上の拈提。又問ふ、如何なるか是れ眞諦、山曰く、解打鼓。眞諦の更に一法を立せず、若し是れ俗諦ならば、萬物倶に備はる。眞俗無二、是れ聖諦第一義。又問ふ、即心即佛は即ち問はず、如何なるか是れ非心非佛、山曰く、解打鼓と。即心即佛は、即ち求め易し、若し非心非佛に到つては、即ち難し、人の到ること有ること少し。又問ふ、向上の人來る時、如何か接せん。山曰く、解打鼓。向上の人は、即ち是れ透脫灑落底の人なり、此の四句語、諸方以て宗旨と爲す、之れを禾山の四打鼓と謂ふ。只だ僧鏡淸に問ふが如きは、新年頭、還つて佛法有りや、也た無しや。淸曰く、有り。僧曰く、如何なるか

〔淨果大師〕護國安澄禪師のこと、疎山匡仁に嗣法す
〔會昌沙汰〕唐の武宗帝道士に歸し、會昌五年大に僧尼を淘汰せりしを云ふ。

是れ新年頭の佛法。淸曰く、元正啓祚、萬物咸な新なり。僧曰く、師の答話を謝す。淸曰く、老僧今日失利と、此の答話に似たり、十八般の失利有り。又僧淨果大師に問ふ、鶴孤松に立つ時如何。果曰く、脚底下一場の懡㦬、又問ふ、雪千山を覆ふ時如何。果曰く、日出で丶後、一場の懡㦬。又問ふ、會昌沙汰の時、護法神什麼の處に向つてか去る。果曰く、三門の外兩箇の漢、一場の懡㦬と。諸方之れを三懡㦬と謂ふ。又保福僧に問ふ、殿裏是れ什麼の佛ぞ。僧曰く、和尙、定當して看よ。福曰く、釋迦老子。僧曰く、人を瞞ずること莫くんば好し。福曰く、却つて是れ汝我れを瞞ず。又僧に問うて曰く、汝名は什麼と。僧曰く、咸澤。福曰く、或は枯涸に遇はん時如何。僧曰く、誰か是れ枯涸の者ぞ。福曰く、我。僧曰く、和尙、人を瞞ずること莫くんば好し。福曰く、却つて是れ汝我れを瞞

〔落索〕始終と云ふに同じ。

ず。又僧に問ふ。汝什麼の業を作してか、喫し得て恁麼に大なる。僧曰く、和尚も也た小ならず。福身を蹲する勢を作す。僧曰く、和尚、人を瞞ずること莫くんば好し。福曰く、却つて是れ汝我れを瞞ず。又浴主に問ふ、浴鍋闊きこと多少ぞ。主曰く請ふ和尚量つて看よ。福量る勢を作す。主曰く、和尚、人を瞞ずること莫くんば好し。福曰く、却つて是れ汝我れを瞞ずと。諸方之れを保福の四瞞と云ふ。又雪峯の四漆桶の如きは、皆是れ從上の宗師、各々深妙の旨を出して、人を接するの機なり。雪竇後面に、一落索を引いて、雲門の衆に示すに依つて、此の公案を頌出す。

頌。一拽石、寰中天子勅。癩兒牽レ伴。向上人恁麼來。一般土。塞外將軍令。兩箇一狀領過。同病相憐。發レ機須ニ是千鈞弩一。若是千鈞也透不レ得。不レ可ニ輕酬一。豈爲ニ死蝦蟆一。象骨老師、曾輥レ毬、也有レ人曾恁麼來。有ニ箇無孔鐵鎚一。阿誰不レ知。爭似ニ禾山、解打鼓一。鐵橛子。須下還ニ這老漢一始得上。一子親得。報レ君知、雪竇也未ニ夢見一在。雪上加レ霜。汝還知麼。莫ニ莽鹵一。也有ニ些子一。儱々侗々。甜者甜兮、苦者苦。謝ニ答話一。錯下ニ注脚一。好與ニ三十棒一。喫レ棒得也未。便打。依レ舊黑漫々。

〔象骨老師〕雪峯義存禪師のこと。

讀方　一拽石、(寰中は天子の勅。癩兒伴を牽く。向上の人恁麼に來る。)一般土。(塞外は將軍の令。兩箇一狀に領過す。同病相憐む。)機を發することは、須らく是れ千鈞の弩なるべし。(若し是れ千鈞なるも也た透ることを得ず。輕々しく酬ゆべからず。豈死蝦蟆の爲めにせんや。)象骨老師、曾て毬を輥す。(也た人有りて曾て恁麼に來る。箇の無孔の鐵鎚有り。阿誰か知らざる。)爭でか禾山の、解打鼓に似ん。(鐵橛子。須らく這の老漢に還して、始めて得べし。一子親

〔歸宗〕馬祖の法嗣、歸宗智常禪師。
〔般〕搬なり。
〔木平善道〕盤龍の法嗣。

しく得たり。）君に報じて知らしむ、（雪竇也た未だ夢にだも見ざる在り。雪上に霜を加ふ。汝還つて知るや。）莽鹵なること莫れ、（也た些子有り。儱々侗々。）甜き者は甜く、苦き者は苦し。（答話を謝す。錯つて注脚を下す。好し三十棒を與ふるに。棒を喫し得るや、也た未だしや。便ち打つ。舊に依つて黑漫々。）

【評】歸宗一日、普請して石を拽く、宗、維那に問ふ、什麼の處にか去る。維那曰く、石を拽き去る。宗曰く、石は且く汝が拽くに從す、即ち中心の樹子を動着することを得ざれ。木平凡そ新到有りて至れば、先づ三轉の土を般ばしむ。木平頌有り、衆に示して曰く、東山は路窄く、西山は低し、新到三轉の泥を辭すること莫れ、嗟す汝が途に在りて、日を經ること久し、明々に曉らずんば、却つて迷と成ると。後來僧有り問うて曰く、三轉の內は即ち問はず、三轉の外の事作麼生。平曰く、鐵輪の天子、寰中の勅。僧無語。平便ち打つ。所以に道ふ、一拽石、二般土、機を發することは、須らく是れ千鈞の弩なるべし、雪竇千鈞の弩を以て、此の話に喩ふ、他の爲人の處を見んことを要す。三十斤を一鈞と爲す、一千鈞は則ち三萬斤なり。若し是れ獰龍虎狼の猛獸には、方に此の弩を用ふ、若し是れ鷦鷯、小可の物には、必ず輕々しく發すべからず。所以に千鈞の弩は、鼷鼠の爲めに發せざるの機なり。象骨老師、曾て毬を輥す。即ち雪峯一日、玄沙の來るを見て、三箇の木毬、一齊に輥す。玄沙便ち斫牌の勢を作す。雪峯、深く之れを肯ふ。然かも總て是れ全機大用の處なりと雖ども、倶に禾山の解打鼓に如かず、多少か徑截なる、只だ是れ會し難し、所以に雪竇道く、爭でか禾山の解打鼓に似んと。又人の只だ話頭上に在つて、活計を作し、來由を知ら

ずして、莾々鹵々ならんことを恐る、所以に道はく、君に報じて知らしむ、莾鹵なること莫れと。也た須らく是れ實に這般の田地に到つて始めて得べし、若し莾鹵ならざらんことを要せば、甜き者は甜く、苦き者は苦し。雪竇、然も是の如く拈弄すと雖も、畢竟也た跳不出。

第四十五則　趙州布衫

垂示曰。要道便道、擧世無雙。當行即行、全機不讓。如擊石火、似閃電光。疾焰過風、奔流度刃。拈起向上鉗鎚、未免亡鋒結舌。放一線道、試擧看。

讀方　垂示に曰く、道はんと要すれば便ち道ふ、世に擧して雙び無し。行すべきに當つては即ち行ず全機讓らず。擊石火の如く、閃電光に似たり。疾焰過風、奔流度刃、向上の鉗鎚を拈起するも、未だ免かれず鋒を亡し舌を結ぶことを。一線道を放つて、試みに擧す看よ。

〔疾焰過風〕大火事に大風、手もつけられぬこと。

〔鋒を亡じ云々〕戰を息め、默して退く貌なり。

〔趙州〕六十歳にして初めて師に參じ、廿年の修行を經八十歳にして大悟し四十

擧。僧問趙州、萬法歸一、一歸何處。拶著這老漢。堆山積嶽。切忌向鬼窟裏作活計。**州曰、我在青州、作一領布衫、重七斤。**果然七縱八橫。拽却漫天網。還見趙州麼。衲僧鼻孔曾拈得。還知趙州落處麼。若這裏見得、便乃天上天下唯我獨尊。水到渠成、風行草偃。苟或未然、老僧在汝脚跟下。

讀方　擧す。僧趙州に問ふ、萬法一に歸す、一何れの處にか歸す。（這の老漢を拶着す。堆山積嶽。切に忌む、鬼窟裏に向つて活計を作すことを。）州曰く、我れ青州に在つて、一領の布衫を作る、重きこと七斤。（果然として七縱八橫。漫天の網を拽却す。還つて趙州を見るや。衲僧の鼻孔、曾て拈得す。還つて趙州の落處を知るや。若し這

年爲人度生して百二十歳の壽を保つたと云ふ

〔銀山鐵壁〕一歩も足を進

裏に見得せば、便乃ち天上天下唯我獨尊。水到れば渠成り、風行けば草偃す、苟し或は未だ然らずんば、老僧汝が脚跟下に在り。)

【評】若し一撃に便ち行く處に向つて會し去らば、天下の老和尙の鼻孔、一時に穿却せん。汝を奈何ともせず、自然に水到れば渠成る。苟し或は躊躇せば、老僧汝が脚跟下に在り。佛法省要の處、言多きに在らず、語繁きに在らず。只だ這の僧、趙州に問ふが如く、萬法一に歸す、一何れの處にか歸す。他却つて答へて道く、我れ青州に在つて、一領の布衫を作る、重きこと七斤と。若し語句上に向つて辨ぜば、錯つて定盤星を認めん、語句上に向つて辨ぜずんば、爭何せん却つて恁麼に道ふことを。這箇の公案、見難しと雖も、却つて會し易く、會し易しと雖も、却つて見難し。難き時は銀山鐵壁、易き時は直下惺々、汝か計較是非の處無し。此の話普化の、來日大悲

め難きを云ふ。〔惺々〕小利口のこと。

〔古德〕歸宗道詮。

院裏に齋有りと道ふ話と、更に兩般なし。一日僧趙州に問ふ、如何なるか是れ祖師西來意、州曰く、庭前の栢樹子。僧曰く、和尙、境を將つて人に示すこと莫れ。州曰く、老僧曾て境を將つて人に示さずと。看よ他恁麼に、極則轉不得の處に向つて轉得して、自然に蓋天蓋地なることを。若し轉不得ならば、途に觸れて滯を成さん。且く道へ、他、佛法の商量有りや、也た無しや。若し他、佛法有りと道はゞ、又何ぞ曾て心と說き性と說き、玄と說き妙と說かん。若し他、佛法の旨趣無しと道はゞ。他又曾て汝が問頭に辜負せん。豈見ずや僧木平和尙に問ふ、如何なるか是れ佛法の大意。平曰く、這箇の冬瓜、許の如く大なりと。又僧古德に問ふ、深山懸崖、逈絕無人の處、還つて佛法有りや、也た無しや。古德曰く、有り。僧曰く、如何なるか是れ深山裏の佛法。古德曰く、石頭大底は大、小底は小。

〔編辟〕萬法歸一一歸何處の端的なり、編はアムこと辟はツメヨセルことにて逼

看よ這般の公案、諸訛什麼の處にか在る。雪竇他の落處を知つて、故らに義路を打開して、汝が爲めに頌出す。

頌。編辟曾挨、老古錐。何必撈二着這老漢一。挨撈向二什麼處一去。**七斤衫重、幾人知。**再來不レ直二半分錢一。直得口似二匾擔一。又却被三他贏二得一籌一。**如今拋擲、西湖裏、**還二雪竇手脚一始得。山僧也不レ要。**下載清風、付二與誰一。**自古自今。且道雪竇與レ他酬唱。與レ他下二注脚一。一子親得。

【讀方】編辟曾て挨す、老古錐。（何ぞ必ずしも這の老漢を撈着せん。挨撈して什麼の處に向つてか去る。）七斤衫重し、幾人か知る。（再來半分錢に直せず。直に得たり口匾擔に似ることを。又却つて他に一籌を贏得せらる。）如今拋擲す、西湖の裏、（雪竇の手脚に還して、始めて得ん。山僧も也た要せず。）下載の淸風、誰れにか付與せん。（自古自今。且く道へ、雪竇他と酬唱するか、他の與めに注脚を下すか。一子親しく得たり。）

なり。〔口匾擔〕への口と云ふこと、無言の貌。〔十八問〕汾陽の十八問なり、人天眼目に出づ見るべし。

【評】十八問の中、此れ之れを編辟問と謂ふ。雪竇道く、編辟曾て挨す、老古錐と、萬法を編辟して、一致に歸せしむ。這の僧、他の趙州を挨撈せんことを要す。州也た妨げず作家なることを。轉不得の處に向つて、出身の路あり、敢て大口を開いて便ち道ふ、我れ靑州に在りて、一領の布衫を作る、重きこと七斤と。雪竇道く、這箇の七斤の布衫、能く幾人有りてか知らん、如今西湖の裏に拋擲す。一時に西萬法一に歸す、一も亦た要せず、七斤の布衫も亦要せず、西湖の裏に拋在す。雪竇洞庭の翠峰に住す、西湖有るなり。下載の淸風、誰れにか付與せんと、此れは是れ趙州衆に示して、汝若し向北より來らば、汝が與めに上載せん、汝若し向南より來らば、汝が與

〔擔板漢〕讀んで字の如く、板を擔へる男と云ふことにて一方に偏向して轉身の術を知らぬ漢を云ふ

めに下載せん、汝若し雪峰雲居より來らば、也た是れ箇の擔板漢と。雪竇道く、此の如き清風、阿誰そにか付するに堪へん。上載は汝が與めに心と說き性と說き、玄と說き妙と說く、種々の方便なり。若し是れ下載ならば、更に許多の義理玄妙無し。有底は一擔の禪を擔うて、趙州の處に到つて、一點も也た使ひ着けず、一時に他の與めに打疊して、灑々落々にして、一星事無からしむ、之れを悟了還つて、未悟の時に同じと謂ふ。如今の人、盡く無事の會を作す。有底は道ふ、迷無く悟無し、更に求むることを要せず、只だ佛未だ出世せざる時、達磨未だ此の土に來らざる時の如きは、恁麼ならずんばあるべからずと。佛の出世を用ひて什麼か作さん、祖師更に西來して什麼か作さん、總に此の如くならば、什麼の干渉か有らん。也た須らく是れ大徹大悟し了つて、舊に依つて山は是れ山、水は是れ水、

〔快龍舟云々〕大信心を發せば、大徹處に至らざる無しと云ふに喩ふ、悟りを目當てにして彼方へ渉るの遲速を爭ふなり、故事あり荊楚歳事記に曰く、屈原此の日を以て

乃至一切萬法、悉く皆成現して、方に始めて箇の無事底の人と作すべし。見ずや龍牙道く、學道は先づ須らく悟由有るべし、還つて曾て快龍舟を鬪はしむるが如し、然も舊閑田地に閣くと雖も、一度贏ち來つて、方さに始めて休すと。只だ趙州、這箇七斤の布衫の話子の如きは、看よ他の古人恁麼に道ふ、金の如く玉の如きことを。山僧恁麼に說き、諸人恁麼に聽く、總に是れ上載、且く道へ、作麼生か是れ下載、三條椽下に看取せよ。

第四十六則　鏡淸雨滴聲

垂示曰。一槌便成、超凡越聖。片言可折、去縛解粘。如氷凌上行、劍刃上走。聲色堆裏坐、聲色頭上行。縱橫妙用、則且置、剎那便去時如何。試舉看。

汨羅に死す、人其の死を傷み、並に舟楫を以て之を拯ふ、今に至つて競ひ渡るは、是れ其の遺俗なりと。〔槌〕印度以來の鳴りものゝ一、鐘太鼓等の如し、槌は木を八角に削りたるものを下に立て更らに八

讀方 垂示に曰く、一槌に便ち成ず、凡を超え聖を越ゆ。片言に折む可し、縛を去り粘を解く。氷凌上に行き、劍刄上に走るが如し、聲色堆裏に坐し、聲色頭上に行く。縱橫妙用は、則ち且く置く、刹那に便ち去る時如何。試みに擧す看よ。

擧。鏡清問僧、門外是什麼聲。（等閑垂一鉤。不患聾問什麼。）僧曰、雨滴聲。（不妨實頭。也好箇消息。）清曰、衆生顚倒、迷己逐物。（事生也。慣得其便。鐃鉤搭索。還他本分手脚。）僧曰、和尚作麼生。（果然納敗缺。轉槍來也。不妨難當。却把槍頭倒刺人。）清曰、洎不迷己。（咄。直得分疎不下。）僧曰、洎不迷己、意旨如何。（拶著這老漢。逼殺人。前箭猶輕後箭深。）清曰、出身猶可易、脫體道應難。（養子之緣。雖然如是、德山臨濟向什麼處去。不喚作雨滴聲、喚作什麼聲。直得分疎不下。）

角の少なるものを以て之れを打つ。〔鏡清〕雪峰義存禪師の法嗣にして、常に啐啄の機を以て人を接せり。〔鐃鉤搭索〕鏡清の手段を云ふ、物を引きからめて取ること。

讀方 擧す。鏡清僧に問ふ、門外是れ什麼の聲ぞ。（等閑に一鉤を垂る。聾を患へざれば、問を什麼かせん。）僧曰く、雨滴聲。（妨げず實頭なることを。也た好箇の消息。）清曰く、衆生顚倒して、己に迷て物を逐ふ。（事生ぜり。其の便を得るに慣る。鐃鉤搭索。他の本分の手脚に還す。）僧曰く、和尚作麼生。（果然として敗缺を納る。槍を轉じ來れり。妨げず當り難きことを。却つて槍頭を把つて、倒に人を刺す。）清曰く、洎んど己れに迷はず。（咄。直に得たり分疎不下なることを。）僧曰く、洎んど己に迷はざる、意旨如何。（這の老漢を拶着す。人を逼殺す。前箭は猶ほ輕く、後箭は深し。）清曰く、出身は猶ほ易かる可し、脫體に道ふことは難かる可し。（養子の緣。然かも是の如くなりと雖も、德山臨濟、什麼の處に向つてか去る。喚んで雨滴聲と作さずして、喚んで什麼の聲とか作す。直に得たり、分疎

〔鍛煉〕工夫のこと

不下なることを。)

【評】只だ這裏也た好し薦取するに、古人一機一境を垂示して、人を接せんことを要す。一日鏡清僧に問ふ、門外是れ什麼の聲ぞ。僧曰く雨滴聲。清曰く、衆生顚倒して、己れに迷うて物を逐ふ。又問ふ、門外什麼の聲ぞ。僧曰く、鵓鳩の聲。清曰く、無間の業を招かざらんと欲せば、如來の正法輪を謗すること莫れ、又問ふ、門外什麼の聲ぞ、僧曰く、蛇、蝦蟆を咬むの聲。清曰く、將に謂へり衆生苦、更らに苦衆生有ることを。此の語前頭の公案と、更らに兩般無し。衲僧家這裏に於て、透得し去らば、聲色堆裏に於て、妨げず自由なることを。若し透不得ならば、便ち聲色の所拘を被る。這般の公案、諸方之れを鍛煉の語と謂ふ、若し是れ鍛煉ならば、只だ心行と成り、他の古人爲人の處を見ず。亦喚んで聲色を逐うて、一には道眼を明かし、一には聲色を明かし、三には心宗を明かし、四には忘情を明かし、五には展演を明かすと作す、然かも妨げず子細なることを。爭奈せん窠臼の在る有り、鏡清恁麼に問ふ、門外什麼の聲ぞ。僧曰く、雨滴聲。清却つて道ふ、衆生顚倒して、己に迷うて物を逐ふと。人皆錯つて會して、喚んで故意に人を轉ずと作す、且得すらくは沒交渉。殊に知らず、鏡清爲人底の手脚有りて、膽大にして、一機一境に拘はらず、忒煞だ眉毛を惜しまざることを。鏡清豈に是れ雨滴聲と知らずとせんや。何ぞ更らに問を消する。須らく知るべし、古人探竿影草を以て、這の僧を驗せんと欲す、這の僧也た善く挨拶して、更に道ふ、和尚又作麼生と。直に得たり、鏡清泥に入り水に入り、他に向つて道ふことを。泊んど己に迷はずと。其の僧己に迷うて物を逐ふ、則ち故らに是れ鏡清什麼としてか、也た己に迷

〔心行〕分別情慮を云ふ。

〔展演〕演は度門の義なり、展開演説にして説法のこと

〔眉毛を惜まず〕眉毛墜落を恐れず醜を忘れての慈悲落草を云ふ。

〔古人〕洞山良价なり。

ふ。須らく知るべし、他を驗する句中に、便ち出身の處有ることを。這の僧太だ懞憧、此の話を勸絕せんと要して、更に問うて道ふ、只だ箇の泊んど己に迷はずと云ふ、意旨如何と。若し是れ德山臨濟門下ならば、棒喝已に行ぜん。鏡淸一線道を通じて、他に隨つて葛藤を打して、更らに他に向つて道く、出身は猶ほ易かる可し、脫體に道ふことは難かる應し。然かも恁麼なりと雖も、古人道く、相續すること也た大いに難しと。他の鏡淸、只だ一句に、便ち這の僧の與めに、脚跟下の大事を明す。

頌。虛堂雨滴聲、（從來無間斷。大家在這裏。）作者難酬對。（果然不知。山僧從來不是作者。有權有實有放有收殺活擒縱。）若謂曾入流、（刺頭入膠盆。不喚作雨滴聲。喚作什麼聲。）依前還不會。（山僧幾曾問汝來。這漆桶還我無孔鐵鎚來。）會不會、（兩頭坐斷。兩處不分。不在這兩邊。）南山北山轉霶霈。（頭上脚下。若喚作雨聲則瞎、不喚作雨聲喚作什麼聲。到這裏須是脚踏實地始得。）

〔虛堂〕虛は空虛なり、人の居らぬ堂と云ふ意

讀方　虛堂の雨滴聲、（從來間斷無し。大家這裏に在り。）作者酬對し難し。（果然として知らず。山僧從來、是れ作者ならず。權有り實有り、放有り收有り、殺活擒縱。）若し曾て流れを入すと謂はゞ、（頭を刺して膠盆に入る。喚んで雨滴聲と作さず、喚んで什麼の聲とか作す。）依前として還つて不會。（山僧、幾か曾て汝に問ひ來る。這の漆桶、我れに無孔の鐵鎚を還し來れ。）會不會、（兩頭、坐斷す。兩處、分たず。這の兩邊に在らず。）南山北山、轉霶霈。（頭上脚下。若し喚んで雨聲と作さば、則ち瞎、喚んで雨聲と作さずんば、什麼の聲とか作さん。這裏に到つて、須らく是れ脚實地を踏んで、

始めて得べし。）

【評】虛堂の雨滴聲、作者酬對し難し。若し喚んで雨聲と作さば、則ち是れ己に迷うて物を逐ふ、喚んで雨聲と作さずんば、又如何か物を轉ぜん。這裏に到つて、任ひ是れ作者も也た酬對し難し。所以に古人曰く、見よ師と齊うして、師に半德を減ず、見よ師に過ぎて、方に傳授に堪へたりと。又南院道く、棒下の無生忍、機に臨んで師に讓らず。若し曾て流れを入すと謂はゞ、依前として還つて不會と。教中に道く、初め聞中に於て、流れを入して所を忘ず、所入既に寂なれば、動靜の二相、了然として生ぜずと。若し是れ雨滴聲と道はゞ、也た不是、若し是れ雨滴聲にあらずと道はゞ、也た不是。前頭に頌す、兩喝と三喝と、作者機變を知らずと、正に此の頌に類す。若し是れ聲色の流れを入すと道はゞ、也た不是、若し喚んで、聲色と作さば、依前として他の意を會せず。譬へば指を以て、月を指すが如し、月は是れ指にあらず、會と不會と、南山北山、轉雱霈たり。

〔古人〕馬祖のこと

〔教中〕楞嚴經。

〔流を入す〕云々觀音菩薩耳根圓通より得道せりしを說いて曰く、初め聞中に於て、流を入し、所を亡し、所入既に寂にして動靜の二相了然として生ぜずと、即ち流とは眼見耳聞を思慮分別することにして、主觀の作用所は客觀のものなり、されば流を入して云々とは客

第四十七則　雲門六不收

垂示曰。天何言哉、四時行焉。地何言哉、萬物生焉。向四時行處、可以見體。於萬物生處、可以見用。且道、向什麼處見得衲僧。離却言語動用、行住坐臥、併却咽喉脣吻、還辨得麼。

【讀方】垂示に曰く。天何をか言ふや、四時行はれ、地何をか言ふや、萬物生る。四時の行はるゝ處に向つて、以つて體を見るべく、萬物の生る處に向つて、以つて用を見るべし。且く道へ、什麼の處に向つ

てか、衲僧を見得せん、言語動用、行住坐臥を離却し、咽喉、唇吻を併却して、還つて辨得すや。

擧。僧問㆓雲門㆒、如何是法身。多少人疑着。千聖跳不出。遝逗不㆑少。門曰、六不收。斬釘截鐵。八角磨盤空裏走。靈龜曳㆑尾。朕兆未分時薦得、已是第二頭。朕兆已生後薦得、又落㆓第三首。若更向㆓言語上㆒辨得、且喜沒交涉。

【讀方】擧す。僧雲門に問ふ、如何なるか是れ法身。（多少の人疑着す。千聖も跳不出。遝逗少なからず。）門曰く、六不收。（斬釘截鐵。八角の磨盤、空裏に走る。靈龜尾を曳く。朕兆未分の時薦得するも、已に是れ第二頭、朕兆已に生じて後ち薦得せば、又第三首に落つ。若し更に言語上に向つて辨得せば、且喜すらくは沒交涉。）

【評】雲門道く、六不收、直に是れ構り難し。若し朕兆未分の時に向つて構得するも、已に是れ第二頭、若し朕兆已生の後に薦得せば、又第三首に落つ。若し言句上に向つて辨明せば、卒に摸索不着。且らく畢竟、何を以てか法身と爲す。若し是れ作家底ならば、聊か擧着するを聞いて、剔起して則ち行かん、苟くも或は佇思停機せば、伏して處分を聽け。太原の孚上座、本講師たり、一日座に登つて講ずる次で、法身を說いて曰く、竪に三際を窮め、横に十方に亘ると。一禪客有り、座下に在りて、之れを聞いて失笑す。孚、座を下りて曰く、某甲適來甚の短處か有りし、願くば禪者爲めに說けよ看ん。禪者曰く、座主只だ法身量邊の事を講得して、法身を見ず。孚曰く、畢竟如何して即ち是ならん。禪者曰く、暫く講を罷めて、靜室の中に於て坐すべし、必らず自ら見ることを得んと。孚其の言の如く、一夜靜坐す、忽ちに五更の鐘を打するを聞いて、忽然として大悟す。

観を主観の心性へ引き戻して、決して主観を客観へ引き出されぬやうにすること、即ち客観の爲めに心性を倒さるることなし、是に於て自ら客観が亡くなるなり、故に所を亡ずと云ふ。〔天何をか言ふ云云〕論語にある孔子の語なり。〔朕兆未分以下の句〕一本には評中の語なりとして削り去る、蓋し然らん乎。〔雲門〕韶州の人文偃禪師なり。〔太原の孚上座〕雪峰の法嗣なり。

〔教中〕金光明經なり。

〔教中道ふ〕法華經方便品にあり。

遂に禪者の門を敲いて曰く、我れ會せり、禪者曰く、汝試みに道へ看ん。孚曰く、我れ今日より去つて、更らに父母所生の鼻孔を將つて、扭捏せず。又教中に道く、佛の眞法身は、猶ほ虛空の如し、物に應じて形を現す、水中の月の如しと。又僧夾山に問ふ、如何なるか是れ法身。山曰く、法身無相。如何なるが是れ法眼。山曰く、法眼に瑕無し。雲門道く、六不收。此の公案有者は道ふ、只だ是れ六根、六塵、六識、此の六皆法身より生ず、六根他を收して得ずと。若し恁麼に情解せば、且喜すらくは沒交涉。更に雲門を帶累す、見んと要せば便ち見よ、汝が穿鑿の處無し。見ずや教中に道く、是の法は思量分別の能く解する處に非ず、他の答話多く人の情解を惹く、所以に一句中に、須らく三句を具すべし。更に汝が問頭に辜負せず、時に應じ節に應じて一言一句、一點一畫、妨げず出身の處有ること

〔數へ足さず〕種電抄には數へ盡きずとあり

を。所以に道ふ、一句透れば、千句萬句、一時に透ると、且らく道へ、是れ法身か、是れ祖師か、汝に放す三十棒。雪竇頌しく曰く、

頌。一二三四五六、周而復始。滴水滴凍。費許多工夫作什麼。碧眼胡僧、數不足。三生六十劫。達磨何曾夢見。闍黎爲什麼知而故犯。少林謾道、付神光、一人傳虛萬人傳實。從頭來已錯了也。卷衣又說、歸天竺、賺殺一船人。懡㦬不少。天竺茫々、無處尋、在什麼處。始是太平。如今在什麼處。夜來、却對乳峰宿。剗破儞眼睛。也是無風起浪。且道、是法身、是佛身。放儞三十棒。

讀方　一二三四五六、(周て復た始まる。滴水滴凍。許多の工夫を費して、什麼か作さん。)碧眼の胡僧も、數へ足さず。(三生六十劫。達磨何ぞ曾て夢にも見ん。闍黎什麼としてか、知つて故らに犯す。)少林謾りに道ふ、神光に付すと、(一人虛を傳ふれば、萬人實を傳ふ。從

〔從頭來〕根元最初と云ふ意。

〔無縫罅〕縫目やスキマのないこと。

〔他の屋裏の兒孫〕雪竇を指す。

頭來已に錯り了れり。〕衣を卷いて又說く、天竺に歸へると。〔一船の人を賺殺す、懡㦬少なからず。〕天竺茫々、尋ぬるに處無し。〔什麼の處にか在る。始めは是れ太平。如今什麼の處にか在る。〕夜來、却つて乳峰に對して宿す。〔汝が眼睛を刺破す。也た是れ風無きに浪を起す。且く道へ、是れ法身か、是れ佛身か。汝に放す三十棒。〕

【評】雪竇善く能く縫罅無き處に於て、眼目を出して頌出して、人をして見せしむ。雲門道く、六不收と。雪竇什麼としてか、却つて道ふ、一二三四五六と。直に是れ碧眼の胡僧も、數へ足さず。所以に道ふ、只だ老胡の知を許して、老胡の會を許さずと。須らく是れ他の屋裏の兒孫に還して、始めて得べし。適來道ふ、一言一句、時に應じ節に應ずと。若し透得し去らば、方さに言句の中に在らずと道ふを知る。其れ或は未だ然らず、免れず情解を作すことを。五祖老師道く、釋迦牟尼佛も、下賤客作の兒、庭前の柏樹子は、一二三四五、若し雲門の言句下に向つて、諦當に見得せば、相次で這の境界に到らん。少林譌りに言ふ、神光に付すと。二祖始め神光と名く。後來に至るに及んで、又道ふ天竺に歸ると。達磨熊耳山の下に葬る、時に宋雲使を奉じて西より歸る、西嶺に在りて、達磨の手に隻履を携へて、西天に歸り去るを見る。使回つて聖に奏す。墳を開くに、惟だ一隻履を遺下するを見ると。雪竇道く其れ實に此の事、作麼生か分付せん。既に分付無し、衣を卷いて又說く、天竺に歸ると。且く道へ、什麼としてか此の土に、却つて二三有り、遞に相恁麼に傳へ來る、這裏妨げず誵訛なることを、也た須らく是れ講得して、始めて入作するに可なるべし。天竺茫々として、尋ぬるに處なし、夜來、却つて乳峰に對して宿すと。且らく道へ、即今什麼の

〔西嶺〕葱嶺なり。

〔乳峯〕雪

竇の別峯なり。

處にか在る、師便ち打して曰く、瞎。

第四十八則　王太傅煎茶

擧。王太傅、入招慶煎茶、(作家相聚、須有奇特。等閑無事。大家著一隻眼。惹禍來也。)時朗上座、與明招把銚、(一火弄泥團漢。不會煎茶帶累別人。)朗翻却茶銚。(事生也。果然。)太傅見問上座、茶爐下是什麼。(果然禍事。)朗曰、捧爐神。(果然中他箭了也。不妨奇特。)太傅曰、既是捧爐神、爲什麼翻却茶銚。(何不與他本分草料。事生也。)朗曰、仕官千日、失在一朝。(錯指注。是什麼語話。杜撰禪和如麻似粟。)太傅拂袖便去。(灼然作家。許他具一隻眼。)明招曰、朗上座喫却招慶飯了、却去江外、打野榸。(更與三十棒。這獨眼龍、只具一隻眼。也須是明眼人、點破始得。)朗曰、和尚作麼生。(拶著。也好與一拶。終不作這般死郎當見解。)招曰、非人得其便。(果然只具一隻眼。道得一半。一手擡一手搦。)雪竇曰、當時但踏倒茶爐。(爭奈賊過後張弓。雖然如是、也未稱德山門下客。一等是潑郎潑賴、就中奇特。)

〔王太傅〕王延彬と云ひ、後ちに三公の一に數へらる、王は姓太傅は官名なり、長慶に嗣ぐ、此の問答は泉州の知事

讀方　擧す。王太傅、招慶に入つて煎茶す、(作家相聚まる。須らく奇特有るべし。等閑に無事。大家一隻眼を著はす。禍を惹き來れり。)時に朗上座、明招の與めに銚を把る、(一火泥團を弄するの漢。煎茶することを會せず、別人を帶累す。)朗茶銚を翻却す。(事生ぜり。果然。)太傅見て上座に問ふ、茶爐下是れ什麼ぞ。(果然として禍事。)朗曰く、捧爐神。(果然として他の箭に中り了れり。妨げず奇特なることを。)太傅曰く、既に是れ捧爐神。什麼としてか茶銚を翻却する。(何ぞ他に

たりし時のもの。
(招慶)寺號なり泉州にあり、長慶慧稜禪師の住する處。
(朗上座)慧朗と稱し、亦長慶の嗣なり、後ち福州報慈に住す。
(明招)羅山道閑禪師の法嗣、婺州明招の德謙禪師なり。

本分の草料を與へざる。事生ぜり。)朗曰く、官に仕ふること千日、失一朝に在り。(錯つて指注す。是れ什麼の語話ぞ。杜撰の禪和、麻の如く粟に似たり。)太傅拂袖して便ち去る。(灼然として作家。許す他の一隻眼を具することを。)明招曰く、朗上座、招慶の飯を喫却し了つて、却つて江外に去つて、野榸を打す。(更に三十棒を與へん。這の獨眼龍、只だ一隻眼を具す。也た須らく是れ明眼の人、點破して始めて得べし。)朗曰く、和尚作麼生。(撥着。也た好し一撥を與ふるに。終に這般の死郎當の見解を作さず。)招曰く、非人其の便を得たり。(果然として只だ一隻眼を具す。一半を道ひ得たり。一手擡一手搦。)雪竇曰く、當時但だ茶爐を踏倒せん。(爭奈せん賊過ぎて後弓を張ることを。然も是の如くなりと雖も、也未だ德山門下の客と稱せず。一等に是れ潑郎潑頼、中に就いて奇特なり。)

(銚)音は兆、茶を溫むる器なり。
(潑郎潑頼)亂暴者道樂者と云ふこと、俗にゴロツキと云ふが如し。

【評】佛性の義を知らんと欲せば、當さに時節因緣を觀ずべし。王太傅、泉州に知たり、久しく招慶に參す。一日因に寺に入る、時に朗上座煎茶の次で、茶銚を翻却す。太傅也た是れ箇の作家、纔かに他の茶銚を翻却するを見て、便ち上座に問ふ、茶爐下是れ什麼ぞ。朗曰く、捧爐神と。妨げず言中に響きあることを。爭奈せん首尾相違して、宗旨を失却す、鋒を傷り手を犯すことを。惟だ自己に辜負するのみにあらず、亦且つ他人に觸忤す。這箇は是れ得失無き底の事と雖も、若し拈じ來らば、舊に依つて親疎有り、黑白有り。若し此の事を論ぜば、言句上に在らず、却つて言句上に向つて、箇の活處を辨せんことを要す。所以に道ふ、他の活句に參じて、死句に參ぜざれと。朗上座の恁麼に道ふに據らば、狂狗の塊を逐ふが如し。太傅拂袖して便ち去る、他を背はざるに似たり。明招曰く、朗上座、

〔野狸〕ワケもなくガヤ〳〵と騷ぐこと。

〔寶壽〕延詔禪師、臨濟に嗣法す。

招慶の飯を喫却し了つて、却つて江外に去つて、野狸を打すと。野狸は即ち是れ荒野の中、火燒底の木橛、之れを野狸と謂ふ。用ひて朗上座、正處に向つて行かず、却つて外邊に向つて走ることを明かす。朗摋して曰く、和尚又作麼生。招曰く、非人其の便を得たりと。明招自然に出身の處有り、亦他の所問に辜負せず。所以に道ふ、俊狗人を咬むに、牙を露はさずと。潙山喆和尚曰く、王太傅大いに相如が璧を奪つて、直に鬚鬢冠を衝くことを得るに似たり。蓋し明招忍俊不禁、其の便に逢ひ難し、大潙若し朗上座と作らば、他の太傅拂袖して、便ち行かんを見て、茶銚を放下して呵々大笑せん。何故ぞ、之れを見て取らずんば、千載にも逢ひ難し。見ずや寶壽、胡釘鉸に問うて曰く、久しく胡釘鉸と聞く、便ち是なること莫しや否や。胡曰く、是。壽曰く、還つて虛空に釘ち得てんや。胡曰く、

〔胡釘鉸〕唐朝の人

〔七師〕京兆府の米和尚、亦七師と稱す、僞山の法嗣なり。

〔千年の桃核〕千年の桃核豈に蔽日

請ふ師、打破し將ち來れ。壽便ち打つ、胡肯はず。壽曰く、異日自ら多口の阿師有りて、汝が爲めに點破すること在らん。胡後に趙州に見えて、前話を擧似す。州曰く、汝什麼に因つてか他に打せらる。胡曰く、知らず過什麼の處にか在る。州曰く、只だ這の一縫、尚ほ奈何ともせず、更らに他をして、虛空を打破し來らしめんや。胡便ち休し去る。州代つて曰く、且く這の一縫を釘て。胡是に於て省有り。京兆の米七師、行脚して歸る、老宿有り問うて曰く、月夜の斷井索、人皆喚んで蛇と作す、未審し七師佛を見る時、喚んで什麼とか作す。七師曰く、若し所見有れば、即ち衆生に同ぜん。老宿曰く、也た是れ千年の桃核。忠國師、紫璘供奉に問ふ、聞說く供奉、思益經を解註すと、是なりや否や。奉曰く、是。師曰く、凡そ經を註するに當つては、須らく佛意を解して、始めて得べし。奉曰

の枝葉を生ずることを得んや、と。之れ生機無きを抑ゆるなり。

く若し意を會せずんば、爭でか敢へて經を註すと言はん。師遂に侍者をして、一椀の水を將つて、七粒米、一隻筋を椀上に在いて、供奉に送與せしむ。問うて曰く、是れ什麼の義ぞ、奉曰く、不會。師曰く、老師が意すら尙ほ會せず、更に甚んの佛意を說かんと。王太傅朗上座と、此の如く話會一ならず。雪竇末後に却つて道ふ、當時但だ與めに、茶爐を踏倒せんと。明招是れ此の如くなりと雖も、終に雪竇に如かず。雪峰、洞山の會下に在りて、飯頭と作る、一日米を淘る次いで、山問ふ什麼をか作す。峰曰く米を淘る。山曰く、米を淘つて沙を去るか、沙を淘つて米を去るか。峰曰く、沙米一時に去る。山曰く、大衆箇の什麼をか喫せん。峰便ち盆を覆却す。山曰く、子が因緣此に在らずと。然も恁麼なりと雖も、爭でか雪竇、當時但だ茶爐を踏倒せんと云ふに似ん。一等に是れ什麼の時節ぞ。他

〔風〕種電には之れをオトと訓ぜり。

〔一隻眼〕左右の兩眼は人各

の用處に到りて、自然に今に騰り古に煥りて、活脫の處有り。

頌。來問若成風、箭不虛發。偶爾成文。不妨要妙。應機非喜巧。弄泥團漢。有什麼限。方木逗圓孔。不妨撞着作家。堪悲獨眼龍、只具一隻眼。只得一橛。曾未呈牙爪。也無牙爪可呈。說什麼牙爪。也不得欺他。牙爪開、汝還見麼。雪竇却較些子。生雲雷。盡大地人一時喫棒。天下衲僧無著身處。旱天霹靂。逆水之泡經幾回。七十二棒翻成一百五十。

讀方　來問風を成すが如し、（箭虛りに發せず。偶爾として文を成す。妨げず要妙なることを。）應機善巧に非ず。（泥團を弄するの漢、什麼の限りか有らん。方木圓孔に逗る。妨げず作家に撞着することを。）悲しむに堪へたり獨眼龍。（只だ一隻眼を具す。只だ一橛を得たり。）曾て未だ牙爪を呈せず。（也た牙爪の呈す可き無し。什麼の牙爪とか

各之れを具す、此の外更に越格の眼光ありと云ふこと。

說かん。也た他を欺くことを得ず。）牙爪開く、（汝還つて見るや。雪竇却つて些子に較れり。若し恁麼の手脚有らば、茶爐を踏倒せん。）雲雷生ず。（盡大地の人、一時に棒を喫せん。天下の衲僧、身を著くるに處無し。旱天の霹靂。）逆水の波幾回をか經る。（七十二棒、翻つて一百五十と成る。）

【評】來問風を成すが若し、應機善巧に非ず。太傅の問處、斤を運らして風を成すに似たり。此れは莊子に出でたり、郢の人壁を泥るに、一少竅を餘す、遂に泥を圓めて、擲つて之れを補ふ、少泥有りて鼻端に落在す。傍らに匠者有りて曰く、公、竅を補ふこと甚だ巧みなり、我れ斤を運らして、汝が爲めに鼻端の泥を取らん。其の鼻端の泥、蠅子の翼の如し、匠者をして之れを斲らしむ。匠者斤を運らして風を成して之れを斲る、其の泥を盡して、鼻を傷けず。郢人立

〔他の意〕他の大夫を指す。
〔逆水云云〕格外の手段を云ふ。
〔順水云云〕平生底のこと

ろに容を失はず、所謂二り俱に巧妙なり。朗上座其の機に應ずと雖も、語善巧無し。所以に雪竇道く、來問風を成すが如く、應機善巧に非ず。悲しむに堪へたり獨眼龍、曾て未だ牙爪を呈せざることを、明招道ひ得て、也た太だ奇特なり。爭奈せん未だ雲を拏ひ、霧を攫む底の牙爪有らざることを。雪竇傍に肯はず、忍俊不禁にして、他に代つて氣を出す。雪竇暗に去つて他の意に合へり、自ら他の茶爐を踏倒する語を頌して、牙爪開く、雲雷生ず、逆水の波幾回をか經ると。雲門道く、汝が逆水の波あることを望まず、但だ順水の意有らば、亦得てんや。所以に道ふ、活句下に薦得すれば、永劫にも忘せず。朗上座と明招と、語句死に似たり、若し活處を見んと要せば、但だ雪竇の茶爐を踏倒せんことを看よ。

第四十九則　三聖透網

垂示曰。七穿八穴、攙鼓奪旗。百匝千重、瞻前顧後。踞虎頭、收虎尾、未是作家。牛頭沒、馬頭回、亦未爲奇特。且道、過量底人、來時如何。試擧看。

讀方 垂示に曰く。七穿八穴、鼓を攙き旗を奪ふ。百匝千重、前を瞻後を顧る。虎頭に踞して虎尾を收むるも、未だ是れ作家ならず。牛頭沒し、馬頭回る、亦未だ奇特と爲さず。且く道へ、過量底の人來る時如何。試みに擧す看よ。

擧。三聖問雪峰、透網金鱗、未審以何爲食。（不妨縱橫自在。此問太高生。汝合只自知、何必更問。）峰曰、待汝出網來、向汝道。（滅人多少聲價。作家宗師天然自在。）聖曰、一千五百人善知識、話頭也不識。（迅雷霹靂、可煞驚群。一任踍跳。）峰曰、老僧住持事繁。（不在勝負。放過一著。此語最毒。）

〔三聖〕鎭州三聖院の慧然禪師なり、臨濟の嫡嗣。〔太高生〕太と生とに意味なし、俗に御天狗ぢやと云ふ程の意。

讀方 擧す。三聖雪峰に問ふ、網を透る金鱗、未審し何を以てか食とせん。（妨げず縱橫自在なることを。此の問太高生。汝只だ自知すべし、何ぞ必ずしも更に問はん。）峰曰く、汝が網を出で來らんを待つて、汝に向つて道はん。（人の多少の聲價を減ず、作家の宗師、天然自在なり。）聖曰く、一千五百人の善知識、話頭だも也た識らず。（迅雷霹靂、可煞だ群を驚かす。踍跳するに一任す。）峰曰く、老僧住持事繁し。（勝負に在らず、一着を放過す。此の語最も毒なり。）

【評】 雪峰三聖、然かも一出一入、一挨一拶すと雖も、未だ勝負を

〔匹似閑〕等閑の義なり。

〔頂門に眼有り〕一隻眼を具すること。

分たざること在り。且らく道へ、二尊宿、什麼の眼目をか具す。三聖は臨濟より訣を受けて、諸方を偏歷す、皆高賓を以て之れを待つ。看よ他の箇の問端を致すことを。多少の人摸索不着。且く理性佛法に涉らず、却つて問うて道く、網を透る金鱗、何を以てか食と爲んと。且く道へ、他の意作麼生。網を透る金鱗、尋常旣に他の香餌を食はず、知らず什麼を以てか食と爲す。雪峰は是れ作家、匹似閑に、只だ一二分を以て他に酬ゆ、却つて他に向つて道ふ、汝が網を出で來らんを待つて、汝に向つて道はん。汾陽は之れを呈解問と謂ひ、洞下に之れを借事問と謂ふ。須らく是れ倫を超え類を絕して、大受用を得て、頂門に眼有りて方さに之れを網を透る金鱗と謂ふべし、爭奈せん雪峰は是れ作家なることを。妨げず人の聲價を減ず。却つて曰く、汝が網を出で來らんを待つて、汝に向つて道はんと。看

〔正法眼藏〕佛々祖々直傳

よ他の兩家、封疆を把定して、壁立萬仞なることを、若し是れ三聖にあらずんば、只だ此の一句、便ち去ることを得ず、爭奈せん三聖も亦是れ作家なることを。方さに他に向つて道ふことを解す。一千五百人の善知識、話頭だも也た識らず。雪峰却つて道ふ、老僧住持事繁しと。此の語恁麼に、頑慢なることを得たり、他の作家の相見、一擒一縱、强に逢うては即ち弱、賤に逢うては即ち貴、汝若し勝負の會を作さば、未だ夢にだも雪峰を見ざること在らん。看よ他の二人は最初は孤危峭峻、末後は二り倶に死郎當、且く道へ、還つて得失勝負有りや。他の作家の酬唱、必らずしも此の如くならず。三聖臨濟に在つて院主となる、臨濟遷化、垂示して曰く、吾れ去るの後ち、吾が正法眼藏を滅却することを得ざれ。三聖出でゝ曰く、爭でか敢へて和尙の、正法眼藏を滅却せん。濟曰く、已後人有り、汝

の大法のこと。〔瞎驢邊云々〕語は抑下するに似たれども、意は托上せるなり。

に問はゞ作麼生。三聖便ち喝す。濟曰く、誰れか知らん吾が正法眼藏、這の瞎驢邊に向つて滅却することを。三聖便ち禮拜す。他は是れ臨濟の眞子、方さに敢へて此の如く酬唱す。雪竇末後に、只だ網を透るの金鱗を頌して、他の作家の相見の處を顯す。

頌。 透㆑網金鱗、千兵易㆑得、一將難㆑求。何似生。千聖不㆓奈何㆒。休㆑云滯㆑水。向㆓他雲外㆒立。活潑々地。且莫㆓鈍置㆒好。搖㆑乾蕩㆑坤、作家々々。未㆓是他奇特處㆒。放出又何妨。振㆑鬣擺㆑尾。誰敢辨㆓端倪㆒。做㆓得箇伎倆㆒。賣弄出來。不㆑妨驚㆑群。千尺鯨噴、洪浪飛、轉㆓過那邊㆒去。不㆑妨奇特。盡大地人一口吞盡。一聲雷震、清飆起。有㆑眼有㆑耳如㆑聾如㆑盲。誰不㆓悚然㆒。清飆起、在㆓什麼處㆒。咄。天上人間、知幾幾。雪峰牢把㆓陣頭㆒、三聖牢把㆓陣脚㆒。撒㆑土撒㆑沙作㆓什麼㆒。打曰。儞在㆓什麼處㆒。

【讀方】 網を透る金鱗、（千兵は得易く、一將は求め難し。何似生。千聖も奈何ともせず。）云ふことを休めよ水に滯ると。（他の雲外に向つて立つ。活潑々地。且く鈍置すること莫くんば好し。）乾を搖かし坤を蕩かす。（作家々々、未だ是れ他の奇特の處にあらず。放出又何ぞ妨げん。）鬣を振ひ尾を擺ふ。（誰か敢て端倪を辨ぜん。箇の伎倆を做し得たり。賣弄出し來る。妨げず群を驚かすことを。）千尺の鯨噴いて洪浪飛び、（那邊に轉過し去る。妨げず奇特なることを、盡大地の人、一口に吞盡す。）一聲雷震うて、清飆起る。（眼有り耳有るも、聾の如く啞の如し。誰か悚然たらざらん。）清飆起る、（什麼の處にか在る。咄。）天上人間、知んぬ幾々ぞ。（雪峰は牢く陣頭を把り、三聖は牢く陣脚を把る。）土を撒し沙を撒して什麼をか作す。打して曰く、汝什麼の處にかある。）

〔言ふことを休めよ云々〕五祖法演禪師曰く、此一句を以て此公案を頌し了れりと、刮目して見るべし。

【評】 網を透るの金鱗、云ふことを休めよ水に滯ると。五祖道く、

〔分に隨ふ〕人々本具の頭角爪牙の分に應ずること。

只だ此の一句に頌し了ると。旣に是れ網を透るの金鱗、豈居して水に滯らんや、必らず洪波浩渺、白浪滔天の處在らん、且く道へ、二六時中、何を以てか食と爲ん。諸人且らく三條椽下、七尺單前に向つて、試みに定當して看よ。雪竇道く、此の事分に隨つて拈弄すと。金鱗の類の如きんば、鬣を振ひ尾を擺ふ時、直に得たり、乾坤動搖することを。千尺の鯨噴いて、洪浪飛ぶ、此れは三聖の、一千五百人の善知識、話頭だも也た識らずと道ふことを頌す。鯨の洪浪を噴くが如くに相似たり。一聲雷震うて、淸飇起るとは、雪峰の、老僧住持事繁しと道ふことを頌す。一聲雷震うて、淸飇の起るが如くに、相似たり。大綱他の兩箇、倶に是れ作家なることを頌す。淸飇起る、天上人間、知んぬ幾々ぞとは、且く道へ這の一句、什麼の處にか落在する。飇とは風なり、淸飇の起る時に當りて、天上人間、能く幾人有りてか知る。

〔度越〕度は過の義なり、猶ほ超越と云はんが如し。

第五十則　雲門三昧

垂示曰。度越階級、超絶方便。機々相應、句々相投。儻非入大解脫門、得大解脫門用、何以權衡佛祖、龜鑑宗乘。且道。當機直截、逆順縱橫、如何道得出身句。試請擧看。

讀方　垂示に曰く、階級を度越し、方便を超絶す。機々相應じ、句々相投ず。儻し大解脫門に入つて、大解脫門の用を得るに非ずんば、何を以てか佛祖を權衡し、宗乘に龜鑑たらん。且く道へ。當機直截、逆順縱橫、如何か出身の句を道ひ得ん、試みに請ふ擧す看よ。

擧。僧問雲門、如何是塵々三昧。天下衲僧、盡在這裏作窠窟。滿口含霜。撒沙撒土作什麼。**門曰、鉢裏飯、桶裏水。**布袋裏盛錐。金沙混雜。將錯就錯。含

元殿裏、不レ問ニ長安一。

讀方 擧す。僧雲門に問ふ、如何なるか是れ塵々三昧。(天下の衲僧、盡く這裏に在りて窠窟を作す。滿口に霜を含む。沙を撒し土を撒して、什麼をか作す。)門曰く、鉢裏の飯、桶裏の水。(布袋裏に錐を盛る。金沙混雜す。錯を將て錯に就く。含元殿裏、長安を問はず。)

【評】還つて定當得すや。若し定當得すれば、雲門の鼻孔、諸人の手裏に在らん。若し定當不得ならば、諸人の鼻孔、雲門の手裏に在らん。雲門斬釘截鐵の句有り、此の一句の中に、三句を具す。有底は問着すれば、便ち道ふ、鉢裏の飯、粒々皆圓に、桶裏の水、滴々皆濕ふと。若し恁麼に會せば、且つ雲門の端的、爲人の處を見ず。

〔含元殿〕唐の景宗皇帝の建立せりし宮殿のことこれ即ち宮城なり宮城は都なる長安にあり、既に此宮城に在れば即ち長安に在るもの、殊更に長安を問ふの要あらんや

頌。鉢裏飯、桶裏水。露也。撒レ沙撒レ土作ニ什麼一。漱レ口三年始得。多口阿師、難レ下レ觜。縮ニ却舌頭一。識レ法者懼。爲ニ什麼一却恁麼擧。北斗南星、位不レ殊。喚レ東作レ西作ニ什麼一。坐立儼然。長者長法身、短者短法身。白浪滔天、平地起。脚下深數丈。賓主互換。驀然在ニ汝頭上一。汝又作麼生。打。擬不擬、蒼天々々。咄。止不止。說ニ什麼一。更添ニ怨苦一。箇々無裩長者子。郎當不レ少。傍觀者哂。

讀方 鉢裏の飯、桶裏の水、(露れたり。沙を撒し土を撒して什麼か作す。口を漱ぐこと三年して始めて得ん。)多口の阿師、觜を下し難し。(舌頭を縮却す。法を識る者は懼る。什麼としてか却つて、恁麼に擧する。)北斗南星、位殊ならず。(東を喚んで西と作す、什麼をか作さん。坐立儼然。長者は長法身、短者は短法身。)白浪滔天、平地に起る。(脚下深きこと數丈。賓主互換。驀然として汝が頭上に在り。汝又作麼生。打す。)擬不擬、(蒼天々々。咄。)止不止。(什麼と說くぞ。更に

〔多口の阿師云々〕如何にお饒舌りな方でも一言もあるまいとなり。

〔四句〕一異、有、無。〔百非〕四句交加して百非をなす。

怨苦を添ふ。）箇々無裩の長者子。（郞當少なからず、傍觀者哂ふ。）

【評】雪竇前面に、雲門の對一說の話を頌して道く、對一說、太孤絕、無孔の鐵鎚、重ねて楔を下すと。後面に又馬祖の四句を離れ百非を絕するの話を頌して道く、藏頭白、海頭黑、明眼の衲僧、會不會と。若し此の公案に於て透得せば、便ち這箇の頌を見ん。雪竇當頭に便ち道ふ、鉢裏の飯、桶裏の水と、言中に響あり、句裏に機を呈す。多口の阿師、觜を下し難し、後へに隨つて、便ち汝が爲めに注脚を下す。汝若し這裏に向つて、玄妙の道理を求めんと要して計較せば、轉た觜を下し難し。雪竇只だ這裏に到りて也た得たり、他恁麼に、頭上に先づ把定することを愛す。衆中に具眼の者有りて、覰破せんことを恐れて、後面に到つて、須らく一着を放過して、傍して初機の爲めに、打開頌出して、人をして見しむべし。北斗は舊に依りて北に在り、南星は舊に依つて只だ南に在り。所以に道ふ、北斗南星、位殊ならずと。白浪滔天、平地に起る。忽然として平地上に、波瀾を起さば、又作麼生。若し事上に向つて覰ば則ち易く、若し意根下に向つて尋ねば、卒に模索不着ならん。這箇は鐵橛子の如くに相似たり、擺撥することを得ず、觜を挿むことを得ず。汝若し擬議して會せんと欲すとも會せず、止まんとして止まず、亂に懞袋を呈せば正に是れ箇々無裩の長者子。寒山の詩に道く、六極常に苦に嬰る、九維徒らに自ら論ず、才有りて草澤に遣られ、勢無うして蓬門を閉づ、日上つて巖猶ほ暗く、煙消して谷尙ほ昏し、其の中の長者子、箇々總に裩無しと。

〔六極〕天地四方なり、九維四方四維及び天を云ふ。〔裩〕禪なり、犢鼻禪のこと

佛果圜悟禪師碧巖錄第五卷　終

〔纔かに云々〕三祖僧璨大師著「信心銘」にある語なり。

佛果圜悟禪師碧巖錄第六卷

第五十一則　雪峰住庵

垂示曰。纔有ニ是非一、紛然失レ心。不レ落ニ階級一、又無ニ摸索一。且道、放行即是、把住即是。到ニ這裏一、若有ニ一絲毫解路一、猶滯ニ言詮一。尙拘ニ機境一、盡是依草附木。直饒便到ニ獨脫處一、未レ免ニ萬里望ニ鄕關一。還搆得麼。若未ニ搆得一、且只理ニ會箇現成公案一。試擧看。

讀方　垂示に曰く、纔かに是非あれば、紛然として心を失す。階級に落ちずんば、又摸索すること無し。且く道へ、放行するが即ち是か、把住するが即ち是か。這裏に到つて、若し一絲毫の解路有りて、猶ほ言詮に滯り、尙ほ機境に拘らば、悉く是れ依草附木。直饒ひ、便ち獨脫の處に到るも、未だ免れず、萬里鄕關を望むことを。還つて搆得すや。若し未だ搆得せずんば、且く只だ箇の現成公案を理會せよ。試みに擧す看よ。

〔依草附木〕俗に云ふ幽靈とか亡魂とかゞ人の體を離れて依り處なきままに草や木に依り附いて居て種々な姿を現はすと云ふことにて支那の昔より言ひ傳へたる語。

擧。雪峰住庵時、有ニ兩僧一、來禮拜。作ニ什麼一。狀領過。一峰見レ來、以レ手托ニ庵門一、放レ身出曰、是什麼。鬼眼睛。無孔笛子。擊レ頭戴レ角。僧亦曰、是什麼。泥彈子。氈柏板。箭鋒相拄。峰低頭歸レ庵。爛泥裏有レ刺。如ニ龍無レ足、似ニ蛇有レ角。就レ中難レ爲ニ措置一。僧後到ニ巖頭一。也須ニ是問過始得一。同道方知。頭問、什麼處來。也須ニ是作家始得一。這漢往々納ニ敗闕一。若不ニ是同參一、洎乎放過。僧曰、嶺南來。傳ニ得什麼消息一來。也須ニ是通ニ箇消息一。還見ニ雪峰一麼。頭曰、曾到ニ雪峰一麼。勘破了多時。不レ可レ道レ不レ到。僧曰、曾到。實頭人難レ得。打作ニ兩橛一。頭曰、有ニ何

〔雪峯〕義

言句。（便恁麼去也。）僧舉前話。（便恁麼去也。重々納敗闕。）頭曰、他道什麼。（好劈口便打。失却鼻孔了也。）僧曰、他無語、低頭歸庵。（又納敗闕。汝且道、他是什麼。）頭曰、噫我當初悔、不向他道末後句。（洪波浩渺、白浪滔天。）若向伊道、天下人、不奈雪老何。（瀨兒。牽伴。）（不必。須彌也須粉碎。且道、他圈繢在什麼處。）僧至夏末、再舉前話請益。（已是不惺惺。正賊去了多時。賊過後張弓。）頭曰、何不早問。（好與掀倒禪床。過也。）僧曰、未敢容易。（這棒本是這僧喫。穿却鼻孔。停囚長智。已是兩重公案。）頭曰、雪峰雖與我同條生、不與我同條死。（慢天網地。）要識末後句、只這是。（賺殺一船人。我也不信。洎乎分疎不下。）

讀方　舉す。雪峰住庵の時、兩僧有り、來つて禮拜す。（什麼をか

存禪師のこと、住庵の時とは、唐の昌宗帝會武年間に廢佛の沙汰ありし時、雪峯は嶺南に遁れて小庵を結びて居りしを云ふ。（泥彈子。氈柏版）共に用をなさぬこと。（巖頭）會昌沙汰の時には鄂渚湖にあ

作す、一狀に領過す。）峰來るを見て、手を以て庵門を托して、身を放つて出で、曰く、是れ什麼ぞ。（鬼眼睛。無孔の笛子。頭を擊げ角を戴く。）僧亦曰く、是れ什麼ぞ。（泥彈子。氈柏板。箭鋒相拄ふ。）峰低頭して庵に歸る。（爛泥裏に刺有り。龍の足無きが如く、蛇の角有るに似たり。中に就いて措置するに難し。）僧後に巖頭に到る。（也た須らく是れ問過して、始めて得べし。同道方に知る。）頭問ふ、什麼の處よりか來る。（也た須らく是れ作家にして、始めて得べし。這の漢往々、敗闕を納る。若し是れ同參に非らずんば、洎んど放過せん。）僧曰く、嶺南より來る、（什麼の消息をか傳へ得來る。也た須らく是れ箇の消息に通ずべし。却つて雪峯を見るや。）頭曰く、曾て雪峰に到るや、（勘破し了ること多時。到らずと道ふ可からず。）僧曰く、曾て到る。（實頭の人得難し。打して兩橛と作す。）頭曰く、

りて渡守となり世を避けたる人、即ち全豁禪師なり德山宣鑑禪師の弟子にして雪峰の師兄なり。

〔前話〕ゼンワなれども、宗門にては習慣上センナと讀む、猶ほ看話をカンナと讀むが如し

〔圏繢〕羇積に同

何の言句か有りし。(便ち恁麽にし去れり。)僧前話を擧す、(便ち恁麽にし去れり。重々敗闕を納る。)頭曰く、他什麽とか道ひし。(好し劈口に便ち打たん。鼻孔を失却し了れり。)僧曰く、他無語、低頭して庵に歸る。(又敗闕を納る。汝且く道へ、他は是れ什麽ぞ。)頭曰く、噫我れ當初悔ゆらくは、他に向つて末後の句を道はざりしことを、(洪波浩渺、白浪滔天。)若し伊れに向つて道はましかば、天下の人、雪老を奈何ともせず。(癩兒伴を牽く。必せず。須彌も亦た須らく粉碎すべし。且く道へ、他の圏繢、什麽の處にか在る。)僧夏末に至つて、再び前話を擧して請益す。(已に是れ惺々ならず。正に賊去り了ること多時、賊過ぎて後弓を張る。頭曰く、何ぞ早く問はざる。(好し與に禪床を掀倒するに。過ぎたり。)僧曰く、未だ敢へて容易ならず。(這の棒本是れ這の僧喫せん。鼻孔を穿却す。囚に停て智に

じ、獸類を捕ふるワナのこと。

〔掀倒〕蹴倒すること。

〔過たり〕モウ遲いと云ふこと。

〔囚に停て智に長ず〕監獄の中に囚はれて居て、罪を遁れんといろ〳〵と工夫をめぐらすこと。

長ず。已に是れ兩重の公案。)頭曰く、雪峰我れと同條に生ずと雖も、我れと同條に死せず。(幔天網地。)末後の句を識らんと要せば、只だ這れ是れ。(一船の人を賺殺す。我れも也た信ぜず。洎んど分疎不下ならん。)

【評】大凡そ宗敎を扶竪せんには、須らく是れ箇の當機を辨じ、進退是非を知つて、殺活擒縱を明かすべし。若し忽ち眼目迷黎麻羅して、到る處問に逢うては便ち問ひ、答に逢うては便ち答へば、殊に知らず、鼻孔別人の手裏に在ることを。只だ雪峰巖頭の如くんば、同じく德山に參ず。這の僧雪峯に參ず、見解只だ恁麽の處に到り、巖頭に見ゆるに及んで、亦曾て一事を成し得ず、虛しく他の二老宿を煩はす。一問一答、一擒一縱、直に如今に至るまで、天下の人、節角紊訛と成つて、分疎不下なることを。且らく道へ、節角諸訛、

〔幔天網地〕宇宙間に充満すると云ふこと。〔迷黎麻羅〕謎瞭瞞曬の音を借る、謎は音米なり、即ち眇目のこと、瞭は黎なり、視ること、瞞は綏く視ること、而して目に色なきを瞞曬と云ふ、今は乃ち無眼

什麼の處にか在る。雪峰諸方に遍歴すと雖も、末後に鰲山店に於て、巖頭因に之れを激して、方に剿絕して大徹することを得たり。巖頭後に沙汰に値うて、湖邊に於いて渡子と作り、兩岸に各各一板を懸く。人有りて過ちて板を敲くこと一下すれば、頭曰く、汝那邊に過ぐと、遂に蘆葦の間より棹を舞して出づ。雪峯嶺南に歸つて住庵す。這の僧亦是れ久參底の人、雪峰來るを見て、手を以つて庵門を托し、身を放つて出で、曰く、是れ什麼ぞと。如今の有底は、恁麼に問着すれば、便ち他の語下に去つて咬嚼す。這の僧亦怪なり、也た只だ他に向つて道ふ、是れ什麼ぞと、峯低頭して庵に歸る、往々に喚んで無語の會を作し去る、這の僧便ち摸索不着。有底は道ふ、雪峰這の僧に一問せられて、直に得たり、語無くして庵に歸る、殊に知らず、雪峯の意毒害の處有ることを。雪峰便宜を得と

子の漢と云ふ意にて迷黎麻羅と云ふ〔沙汰〕會昌沙汰のこと。〔湖邊〕即ち鄂渚湖也。〔爭奈〕如何に同じ〔緇素〕緇

雖も、爭奈せん身を藏して影を露はすことを。這の僧、後に雪峰を辭す。此の公案を持して、巖頭をして判ぜしむ。既に彼れに到る、岩頭問ふ、什麼の處よりか來る。僧曰く、嶺南より來る。頭曰く、曾て雪峰に到るや。若し雪峰を見んと要せば、只だ此の一問、也た好し急に眼を着けて看るに。僧曰く、曾て到る。頭曰く、何の言句か有りし。此の語亦空しく過さず、這の僧曉らず、只管に他の語脈を逐うて轉ず。頭曰く、他什麼とか道ひし。僧曰く、他低頭無語歸庵すと。這の僧殊に知らず、巖頭草鞋を着けて、他の肚皮裏に在つて、行くこと幾回し了ることを。巖頭曰く、噫我れ當初悔ゆらくは、他に向つて末後の句を道はざりしことを、若し他に向つて道はゞ、天下の人、雪老を奈何ともせずと。巖頭也た是れ、强を扶けて弱を扶けず。這の僧舊に依つて、黑漫々地にして、緇素を分たず、一肚皮

は黒い糸、素は白い糸、即ち緇素とは猶ほ黒白と云ふが如し

〔托鉢〕托は捧げ持つこと。

の疑を懐いて、眞箇に道ふ、雪峰會せずと。夏末に至つて、再び前話を擧して巖頭に請益す、頭曰く、何ぞ早く問はざる。這の老漢、計較生ぜり。僧曰く、未だ敢て容易にせず。頭曰く、雪峰我れと同條に生ずと雖も、我れと同條に死せず、末後の句を識らんと要せば、只だ這れ是れと。巖頭太煞だ眉毛を惜しまず。諸人畢竟して、作麼生か會せん。雪峯徳山の會下に在りて、飯頭と作る。一日齋晩し、徳山托鉢して、法堂を下り至る。峰曰く、鐘未だ鳴らず、鼓未だ響かず、這の老漢托鉢して、什麼の處に向つてか去る。山無語、低頭して方丈に歸る。雪峰巖頭に擧似す。頭曰く、大小の徳山、末後の句を會せず。山聞いて侍者をして、喚んで方丈に至らしめ、問うて曰く、汝老僧を肯はざるや。頭、密に其の語を啓す。山來日に至りて上堂す、尋常と同じからず。頭、僧堂前に於て、掌を撫し大笑して曰く、

〔古人〕樂普の安禪師を指す

且喜すらくは老漢、末後の句を會することを。他後に、天下の人、他を奈何ともせず、然も是の如くなりと雖も、只だ三年を得んと。此の公案の中、雪峰の如くんば、徳山の語無きを見て、將に謂へり、便宜を得と。殊に知らず、賊を着け了ることを。蓋し他曾て賊を着け來るが爲めに、後來亦賊と做ることを解す、所以に古人道く、末後の一句、始めて牢關に到ると。有者は道ふ、巖頭、雪峰に勝れりと、則ち錯つて會し了れり。巖頭常に此の機を用ひて、衆に示して曰く、明眼の漢、窠臼に沒し、物に却るを上と爲し、物を逐ふを下と爲すと。這の末後の句、設使ひ親しく祖師を見來るとも、也た理會することを得ず。徳山齋晩し、老子自ら鉢を捧げて、法堂を下り去る。巖頭曰く、大小の徳山、未だ末後の句を會せざること在りと。雪竇拈じて曰く、曾て聞説く、箇の獨眼龍、元來只だ一隻眼を具す、殊に

第五十一則　雪峰住庵

〔老胡〕老漢と云ふが如し、老は尊大の義なり、漢は罵りし語なり、今は男子の通稱に用ふ、老胡、老僕は卑詞なり、元は罵る時に用ひたるも、時に老熱せしを指して呼ぶ即ち尊稱なり。

〔明暗双々〕双明双暗と云ふも同じ、明は

知らず、徳山是れ箇の無齒の大蟲なることを。若し是れ巖頭識破するにあらずんば、爭でか昨日と今日と、同じからざることを知得せん、諸人末後の句を會せんと要すや、只だ老胡の知を許して、老胡の會を許さずと。古より今に及ぶまで、公案萬別千差、荆棘林の如くに相似たり、汝若し透得し去らば、天下の人、奈何ともせず、三世の諸佛、下風に立在せん。汝若し透不得ならば、巖頭道く、我れと同條に生ずと雖も、我れと同條に死せずと。只だ這の一句、自然に出身の處有り。雪竇頌して曰く、

頌。末後句、已在言前、將謂眞箇。覰着則瞎。爲君說。舌頭落也。說不着。有頭無尾有尾無頭。明暗雙々底時節、葛藤老漢。如牛無角、似虎有角。彼此是恁麼。同條生也共相知、是何種族。彼此沒交涉。君向瀟湘我向秦。不同條死還殊絕。拄杖子在我手裏。爭怪得山僧。汝鼻孔、爲什麼在別人手裏。還殊絕。還要喫棒麼。有什麼摸索處。黃頭碧眼、須甄別。也盡大地人亡鋒結舌。我也恁麼、他人却不恁麼。只許老胡知、不許老胡會。南北東西、歸去來。收。脚跟下猶帶五色線在。乞汝一條拄杖子。夜深同看、千巖雪。猶較半月程。從他大地雪漫漫。塡溝塞壑無人會。也只是箇瞎漢。還識得末後句麼。便打。

讀方　末後の句、(已に言前に在り。將に謂へり眞箇と。覰着すれば則ち瞎す。)君が爲めに說く。(舌頭地に落ちぬ。說不着。頭有りて尾無く、尾有りて頭無し。)明暗雙々底の時節、(葛藤の老漢。牛の角無きが如く、虎の角有るに似たり。彼此是れ恁麼ぞ。)同條生、也た共に相知る、(是れ何の種族ぞ。彼此沒交涉。君は蕭湘に向ひ、我

萬物歷々分明に差別せること、暗は都盧一平等に無差別の貌なり、乃ち明暗双々と云へば迷とも悟とも付かぬ事。

〔黃頭碧眼〕黃頭とは釋尊のこと、碧眼とは達磨のこと。

れは秦に向ふ。）不同條死、還つて殊絕す。（拄杖子我が手裏に在り。爭でか山僧を怪しみ得ん。汝が鼻孔、什麼としてか別人の手裏に在る。）還つて殊絕す、（還つて棒を喫せんと要すや。什麼の摸索する處か有らん。）黃頭碧眼も、須らく甄別すべし。（盡大地の人、鋒を亡し舌を結く。我れは也た恁麼、他人は却つて不恁麼。只だ老胡の知を許して、老胡の會を許さず。）南北東西、歸去來、（收。脚跟下猶ほ五色の線を帶ぶること在り。汝に一條の拄杖子を乞はん。）夜深うして同じく看る、千巖の雪。（猶ほ半月程に較れり。從他ばあれ大地雪漫漫なることを。溝を塡め壑を塞ぐ、人の會する無し、也た只だ是れ箇の瞎漢、還つて末後の句を識得すや。便ち打つ。）

【評】末後の句、君が爲めに說くと、雪竇此の末後の句を頌す、他の意極めて草に落ちて相爲めにすること有り。頌することは則ち煞

〔羅山〕巖頭に嗣法す、道閑禪師なり

だ頌す、只だ毛彩の些子を頌す、若し透得せんと要せば、也た未在。更に敢へて大口を開いて、便ち道ふ、明暗雙々底の時節と、汝が與めに一綫路を開き、亦汝が與めに、一句に打殺し了れり。末後更に汝が與めに注解す。只だ招慶の如くんば、一日羅山に問うて曰く、巖頭道く、恁麼々々、不恁麼々々と、意旨如何。羅山召して曰く、大師。師應諾す。山曰く、雙明亦雙暗。慶禮謝して去る。三日の後又問ふ、前日和尚の垂慈を蒙る、只だ是れ看不破。山曰く、情を盡して、汝に向つて道ひ了れり。慶曰く、和尚是れ火を把つて行け。山曰く、若し恁麼ならば、大師の疑處に據つて、問ひ將ち來れ。慶曰く、如何なるか是れ雙明亦雙暗。山曰く、同生亦同死。慶禮謝して去る。後に僧有り、招慶に問ふ、同生亦同死の時如何。慶曰く、狗口を合取せよ。僧曰く、大師口を收取して飯を喫せよ。其の

〔牛の角無く虎の角を戴く〕有るものが無いやうなと云ふこと、有を無にし無を有にすると云ふ意にて、畢竟有無共に非一非異の處を指して云ふ。

僧却來して、羅山に問うて曰く、同生不同死の時如何。山曰く、牛の角無きが如し。僧曰く、同生亦同死の時如何、山曰く、虎の角を戴くが如し。末後の句、正に是れ這箇の道理。羅山の會下に僧有り、便ち這箇の意を用ひて、問を招慶に致す。慶曰く、彼此皆知る、何故ぞ、我れ若し東勝身洲に一句を道はば、西瞿耶尼洲にも也た知る、天上に一句を道へば、人間にも也た知る、心々相知り、眼々相照らすと。同條生は也た則ち猶ほ見易く、不同條死は也た還つて殊絶せり。釋迦達磨も也た摸索不着、南北東西、歸去來と。些子の好境界有り。夜深うして同じく看る、千巖の雪と。且く道へ、是れ雙明か雙暗か、是れ同條生か、是れ同條死か、具眼の衲僧、試みに甄別して看よ。

第五十二則　趙州石橋

〔趙州〕從諗禪師なり、禪師の住せし觀音院は趙州城の東にし

舉。僧問趙州、久響趙州石橋、到來只見略彴。也有人來捋虎鬚。也是衲僧本分事。州曰、汝只見略彴、且不見石橋。慣得其便。這老漢賣身去也。僧曰、如何是石橋。上鉤來也。果然。州曰、渡驢渡馬。一網打就。直得盡大地人無出氣處。一死更不再活。

讀方　舉す。僧趙州に問ふ、久しく趙州の石橋と響く、到來すれば只だ略彴を見る。(也た人有り來つて、虎鬚を捋づ。也た是れ衲僧本分の事。) 州曰く、汝只だ略彴を見て、且く石橋を見ず。(其の便を得るに慣へり。這の老漢身を賣り去れり。) 僧曰く、如何なるか是

て、石橋を距るヿ十里なりしと、因に云ふ石橋とは臺山と南嶽と、趙州との三石橋を稱して天下名所の隨一なりしと。

〔略彴〕獨木橋即ち一本の丸木の橋のこと。

〔他〕趙州

れ石橋。（鈎に上り來れり。果然。）州曰く、驢を渡し馬を渡す。（一網に打ち就す。直に得たり盡大地の人、氣を出だすに處無きことを。一死更に再活せず。）

【評】趙州に石橋有り、蓋し李膺造れり、今に至りて天下に名有り。略彴は即ち是れ獨木橋なり。其の僧故意に他の威光を滅じて、他に問うて道く、久しく趙州の石橋と響く、到來すれば、只だ略彴を見る。趙州便ち道ふ、汝只だ略彴を見て、且つ石橋を見ずと。他の問處に據らば、也た只だ是れ平常の說話に相似たり、趙州用ひ去つて他を釣る。這の僧果然として鈎に上つて、後に隨つて便ち問ふ、如何なるか是れ石橋。州曰く、驢を渡し馬を渡すと。趙州は臨濟德山の、棒を行じ、喝を行ずるに似ず、他只だ言句を以て殺活す。這の公案、好々

を指す。

〔李膺〕又李春に作る、然れども兩人の傳に石橋を造りしことなしと、天桂老師は云へり。

に看來れば、只だ是れ尋常、機鋒を鬪はしむるに相似たり。然も是の如くなりと雖も、也た妨げず湊泊し難きことを。一日首座と石橋を見る、州乃ち首座に問ふ、是れ什麼人か造れる。座曰く、李膺造れり。州曰く、造る時什麼の處に向つてか手を下す。座無對。州曰く、尋常石橋を說く、手を下す處に問着すれば、也た知らず。又一日州掃地の次で、僧問ふ、和尚は是れ善知識、什麼としてか塵有る。州曰く、外來底。又問ふ、清淨の伽藍、什麼としてか塵有る。州曰く、又一點有り。又僧問ふ、如何なるか是れ道。州曰く、墻外底。僧曰く、這箇の道をば問はず、大道を問ふ。州曰く、大道は長安に透ると。趙州偏へに此の機を用ふ、他平實安穩の處に到つて、人の爲めにするに、更に鋒を傷り手を犯さず、自然に孤峻にして、此の機を用ひ得て甚だ妙なり。雪竇頌して曰く、

〔孤危立せず〕臨濟徳山の如く拂拳喝棒の孤危峭峻の手段を用ゐざること。〔兩々三々〕彼れも此れもと云ふが如し。

頌。孤危不レ立、道方高。須下是到二這田地一始得上。言猶在レ耳。還二他本分草料一。入レ海還、須レ釣二巨鼇一。坐二斷要津一不レ通二凡聖一。鰕蜆螺蚌不レ足レ問。大丈夫漢不レ可二兩兩三三一。堪レ笑、同時灌溪老。也有二恁麼人一曾恁麼來。也有下恁麼用二機關一底手脚上。解レ云二劈箭一、亦徒勞。猶較二半月程一。似則似。是則未レ是。

讀方　孤危立せず、道方に高し。（須らく是れ這の田地に到つて、始めて得べし。言猶ほ耳に在り。他に本分の草料を還す。）海に入つて還つて、須く巨鼇を釣るべし。（要津を坐斷して、凡聖を通ぜず。鰕蜆螺蚌問ふに足らず。大丈夫の漢、兩々三々なる可からず。）笑ふに堪へたり、同時の灌溪老。（也た恁麼の人有りて、曾て恁麼に來る。也た恁麼に機關を用ふる底の手脚有り。）劈箭と云ふことを解するも、亦徒らに勞す。（猶ほ半月程に較れり。似ることは則ち似たり。是なることは則ち未だ是ならず。）

【評】　孤危立せず、道方に高しと、雪竇、趙州の尋常爲人の處を頌す。玄妙を立せず、孤危を立せず、諸方に虚空を打破し、須彌を撃碎し、海底に塵を生じ、須彌に浪を鼓すと道うて、方に他の祖師の道と稱するに似ず。所以に雪竇道く、孤危立せず、道方さに高しと、壁立萬仞にして、佛法の奇特靈驗を顯す。然も孤危峭峻なりと雖も、如かず孤危を立せざらんには、但だ平常自然に、轉轆々地に立せずして自ら立し、高からずして自ら高し、機孤危を出でゝ、方に玄妙を見る。所以に雪竇曰く、海に入つて還つて、須らく巨鼇を釣るべしと。看よ他の具眼の宗師、等閑に一語を垂れ、一機を用ひて、鰕蜆螺蚌を釣らず、直に巨鼇を釣る、也た妨げず是れ作家なる

〔灌溪〕志閑禪師。〔漚麻池〕漚は漬すなり、詩に曰く、東門池、可以漚麻と、水の僅かにピチャピチャして麻をヒタす程の池〔黄龍〕晦機禪師。〔拖々地〕拖々は行く貌なり

ことを。此の一句、用ひて前面の公案を顯はす。笑ふに堪へたり、到來する同時の灌溪老と。見ずや僧灌溪に問ふ、久しく灌溪と響く、到來するに及んで、只だ箇の漚麻池を見る。溪曰く、汝只だ漚麻池を見て、且つ灌溪を見ず。僧曰く、如何なるか是れ灌溪。溪曰く、劈箭急なり。又僧黄龍に問ふ、久しく黄龍と響く、到來するに及んで、只だ箇の赤斑蛇を見る。龍曰く、子只だ赤斑蛇を見て、且つ黄龍を見ず。僧曰く、如何なるか是れ黄龍。龍曰く、拖拖地。僧曰く、忽ち金翅鳥の來るに遇ふ時如何。龍曰く、性命存じ難し。僧曰く、恁麼ならば、則ち他の食噉に遭ひ去らん。龍曰く、子が供養を謝すと。此れ總に是れ孤危を立す、是は則ち也た是なり、免れず力を費すことを、終に趙州の尋常用ふる底には如かず。所以に雪竇道はく、劈箭と云ふことを解するも、亦徒らに勞すと。只だ灌溪黄龍の如くんば、即ち且く致く。趙州曰く、驢を渡し馬を渡すと、又作麼生か會せん。試みに辨じて看よ。

〔偏界云々〕宇宙の本體は萬象の上に其作用の全分を露はして些の藏す

第五十三則　百丈野鴨子

垂示曰。偏界不藏、全機獨露。觸途無滯。着々有出身之機。句下無私、頭々有殺人之意。且道、古人畢竟、向什麼處休歇。試擧看。

讀方　垂示に曰く。偏界藏さず、全機獨露す。途に觸れて滯る無く、着々出身の機有り。句下私無し、頭々殺人の意有り。且く道へ、古人畢竟、什麼の處に向つてか休歇す。試みに擧す看よ。

擧。馬大師、與百丈行次、見野鴨子飛過。兩箇

處なきを云ふ。

〔馬大師〕江西馬祖山の道一禪師のこと。〔百丈〕百丈山の懷海禪師、馬祖の上足の法嗣なり。〔啗啄〕啗は啐啄の啄の字に親して、鳥が卵の中の兒鳥をつゝき出すこと

落草漢。草裏輥。驀顧作什麼。

大師曰、是什麼。和尚合知。這老漢鼻孔也不知。**丈曰、野鴨子。**鼻孔已在別人手裏。只管供欵。第二杓惡水更毒。**大師曰、什麼處去也。**前箭猶輕後箭深。第二回啗啄。也合自知。**丈曰、飛過去也。**只管隨他後轉。當面蹉過。**大師遂扭百丈鼻頭。**父母所生鼻孔却在別人手裏。捩轉鎗頭、裂轉鼻孔來也。**丈作忍痛聲。**只在這裏、還喚作野鴨子得麼。還識痛痒麼。**大師曰、何曾飛去。**莫瞞人好。這老漢元來只在鬼窟裏作活計。

【讀方】擧す。馬大師、百丈と行く次いで、野鴨子の飛過するを見る。（兩箇落草の漢、草裏に輥す。驀に顧みて什麼か作す。）大師曰く、是れ什麼ぞ。（和尚合に知るべし。這の老漢、鼻孔も也た知らず。）丈曰く、野鴨子。（鼻孔已に別人の手裏に在り。只管に欵を供す。第二杓の惡水更に毒あり。）大師曰く、什麼の處にか去る。（前箭は猶ほ輕く、後箭は深し。第二回の啗啄す。也た合に自知すべし。）丈曰く、飛過し去る。（只管に他の後に隨つて轉ず。當面に蹉過す。）大師遂に百丈の鼻頭を扭る。（父母所生の鼻孔、却つて別人の手裏に在り。鎗頭を捩轉して、鼻孔を裂轉し來れり。）丈忍痛の聲を作す。（只だ這裏に在り。還つて喚んで野鴨子と作し得てんや。還つて痛痒を識るや。）大師曰く、何ぞ曾て飛び去らん。（人を瞞すること莫くば好し。這の老漢、元來只だ鬼窟裏に在りて活計を作す。）

【評】正眼に觀來れば、却つて是れ百丈正因を具す、馬大師、風無きに浪を起す。諸人佛祖の與めに師と爲らんと要せば、百丈に參取せよ、自救不了ならんことを要せば、馬祖大師に參取せよ。看よ他の古人、二六時中、未だ嘗て箇の裏にあらずんばあらず。百丈

〔丱歳〕角髮の頃の幼弱のこと。〔塵を離る〕出家のこと。

丱歳にして塵を離れて、三學該練、大寂の化を南昌に闡くに屬うて、乃ち心を傾けて依附す。二十年侍者と爲り、再參するに至るに及んで、喝下に於て、方に始めて大に悟る。而今有者は道ふ、本と悟處なし、箇の悟門を作して、此の事を建立すと。若し恁麼の見解ならば、獅子身中の蟲の、自ら獅子の肉を食ふが如し。見ずや古人道く、源深からざれば流れ長ぜず、智大ならざれば、見ること遠からずと。若し用ひて建立の會を作さば、佛法豈に如今に到らんや。看よ他の馬大師、百丈と行く次いで、野鴨子の飛過するを見る。大師豈に是れ野鴨子なることを知らざらんや、什麼としてか却つて恁麼に問ふ。且く道へ、他の意什麼の處にか落在する。百丈只管に他の後に隨つて走る。馬祖遂に他の鼻孔を扭る、丈忍痛の聲を作す。馬祖曰く、何ぞ曾て飛過し去らんと。百丈便ち省す。而今

〔世諦流布〕世間流俗の雜談のこと

有底は錯會して、纔かに問着すれば、便ち忍痛の聲を作す、且喜すらくは跳不出。宗師家、人の爲めにせんには、須らく爲めに徹せしむべし、他の會せざるを見ては、免れず鋒を傷り手を犯すことを。只だ他をして此の事を明らめしめんことを要す。所以に道く、會する時は途中受用、會せざる時は則ち世諦流布。馬祖當時、若し扭住せずんば、只だ世諦流布と成らん、也た須らく是れ境に逢ひ縁に遇うて宛轉して自己に歸せしむべし。十二時中、空缺の處無し、之れを性地明白と謂ふ。若し只だ依草附木、箇の驢前馬後を認めば、何の用處か有らん、看よ馬祖、百丈恁麼に用ふることを。昭々靈々に似たりと雖も、却て昭々靈々の處に住在せず、百丈忍痛の聲を作す。若し恁麼に見得し去らば、偏界藏さず、頭々成現せん、所以に道ふ、一處透れば千處萬處、一時に透ると。馬祖次の日陞座、衆

〔阿轆々地〕轉轆々地に同

纔かに集る。百丈出で、拜席を卷却す。馬祖便ち下座して、方丈に歸る。次の日百丈に問ふ、我れ適來上堂、未だ曾て說法せず、汝什麼としてか、便ち席を卷却する。丈曰く、昨日和尙に鼻孔を扭得せられて痛む。祖曰く、汝昨日甚の處に向つてか心を留むる。丈曰く、今日鼻頭又痛まず。祖曰く、汝深く今日の事を知る。丈乃ち作禮す、却つて侍者寮に歸つて哭す。同事の侍者問うて曰く、汝哭して什麼をか作す。丈曰く、汝去つて和尙に問取せよ。侍者遂に去つて馬祖に問ふ。祖曰く、汝去つて他に問取して看よ。侍者却つて寮に歸つて百丈に問ふ。丈却つて呵々大笑す。侍者曰く、汝適來は哭す、而今什麼としてか却つて笑ふ、丈曰く、我れ適來は哭す、如今は却つて笑ふと。看よ他悟つて後、阿轆々地、羅籠すれども住せず、自然に玲瓏たることを。雪竇頌して曰く。

じ、圓轉して遊滯なくして流通すること、轆は井水を汲む所謂井戸車のこと、阿と地とには別に意味なし

〔東家云々〕兩者

頌。野鴨子、成レ群作レ隊。又有二一隻一。知何許。用作二什麼一。如レ麻似レ粟。馬祖見來相共語。打二葛藤一有二什麼了期一。說二箇什麼一。獨有二馬祖一識二箇俊底一。話盡山雲海月情。東家杓柄長、西家杓柄短。知他打二葛藤一多少。依前不レ會還飛去。因。莫レ道他不レ會レ言。欲二飛去一、鼻孔在二別人手裏一。已是與レ他下二注脚一了也。却把住。老婆心切。更道二什麼一。道々。什麼道。不レ可三也敎二山僧道一。不レ可レ作二野鴨子叫一。蒼天々々。脚跟下好與二三十棒一。不レ知向二什麼處一去。

讀方 野鴨子、(群を成し隊を作す。又一隻有り。)知んぬ何許ぞ。(用ひて什麼をか作す。麻の如く粟に似たり。)馬祖見來つて、相共に語る。(葛藤を打せば、什麼の了期か有らん。箇の什麼をか說く。獨り馬祖のみ有りて。箇の俊底を識る。)話り盡す山雲海月の情。(東家の

力量の程度の違ふこと。

〔刅〕日本の俗に何か不慮に付いた氣のときハツと云ふと同じ音を寫したる字なりと。

杓柄は長く、西家の杓柄は短し。知んぬ他、葛藤を打すること多少ぞ。）依前として會せず、還つて飛び去る。（刅。道ふこと莫れ、他言ふことを會せずと。什麽の處にか飛過し去る。）飛び去らんと欲す、（鼻孔別人の手裏に在り。已に是れ他の爲めに注脚を下し了れり。）却つて把住す。（老婆心切、更に什麽とか道はん。）道へ道へ。（什麽とか道はん。也た山僧をして道はしむべからず。野鴨子の叫びを作すべからず。蒼天々々。脚跟下好し三十棒を與ふるに。知らず什麽の處に向つて去る。）

【評】雪竇劈頭に、便ち頌して道く、野鴨子、知んぬ何許ぞと、且く道へ、多少か有る。馬祖見來つて、相共に語るとは、此れ馬祖、百丈に問うて曰く、是れ什麽ぞ、丈、野鴨子と云ふことを頌す。話り盡す山雲海月の情と、再び百丈に問ふ、什麽の處にか去ると云ふを頌す。馬大師他の爲めにするの意旨、自然に脫體なり。百丈依前として不會、却つて道ふ、飛過し去ると。兩重に蹉過す。飛び去らんと欲す、却つて把住す、雪竇欵に據つて案を結す。又曰く、道へ道へと。此れは是れ雪竇轉身の處、且く道へ、作麽生か道はん。若し忍痛の聲を作さば、則ち錯、若し忍痛の聲を作さずんば、又作麽生か會せん。雪竇然も頌し得て甚だ妙なりと雖も、奈何せん跳不出なることを。

〔欵に據て案を決す〕罪人の白狀に由て罪狀をきめること。

第五十四則　雲門展兩手

垂示曰。透出生死、撥轉機關。等閑截鐵斬釘、隨處蓋天蓋地。且道、是什麽人行履處。試擧看。

讀方 垂示に曰く、生死を透出し、機關を撥轉す、等閑に截鐵斬釘、隨處に蓋天蓋地。且く道へ、是れ什麼人の行履の處ぞ。試みに擧す看よ。

擧。雲門問僧、近離甚處。不可也道西禪。探竿影草。不可道東西南北。僧曰、西禪。果然可煞實頭。當時好與本分草料。門曰、西禪近日、有何言句。欲擧恐驚和尚。深辨來風。也似和尚相似寱語。僧展兩手。敗闕了也。勾賊破家。不妨令人疑着。門打一掌。據令而行。好打。快便難逢。僧曰、某甲話在。汝待要翻款那。却似有攙旗奪鼓底手脚。門却展兩手。喩。駕與青龍。不解騎。僧無語。可惜。門便打。不可放過。此棒合是雲門喫。何故、當斷不斷返招其亂。闍黎合喫多少。放過一着。若不放過、合作麼生。

（近離）近頃と云ふに同じ。（甚）何に同じ。

讀方 擧す。雲門僧に問ふ、近離甚の處ぞ。（也た西禪と道ふべからず。探竿影草。東西南北と云ふべからず。）僧曰く、西禪。（果然として可煞實頭。當時好し本分の草料を與ふるに。）門曰く、西禪近日、何の言句か有りし。（擧せんと欲するも、恐らくは和尚を驚かさんことを。深く來風を辨す。也た和尚に似て、寱語するに相似たり。）僧兩手を展ず。（敗闕し了れり。勾賊破家。妨げず人を疑着せしむることを。）門打つこと一掌す。（令に據つて行す。好し打つに。快便は逢ひ難し。）僧曰く、某甲話在り。（汝翻款を要せんことを待つや。却つて旗を攙き鼓を奪ふ底の手脚有るに似たり。）門却つて兩手を展ず。（喩。青龍に駕與すれども、騎ることを解せず。）僧無語。（惜しむべし。）門便ち打つ。（放過すべからず。此の棒合に是れ雲門喫すべし。何故ぞ、當さに斷ずべきに斷ぜざれは、返つて其の亂を招く。闍黎合に

〔當面の話〕尋常の話、尋常の挨拶と云ふこと

多少を喫すべし。一着を放過す。若し放過せざれば、合に作麽生。)

【評】雲門這の僧に問ふ、近離甚の處ぞ。僧曰く、西禪と。這箇は是れ當面の話、閃電の如くに相似たり。門曰く、近日何の言句か有りし、也た只だ是れ平常の說話なり。這の僧、也た妨げず是れ箇の作家なることを。却つて倒し去つて、雲門を驗す、便ち兩手を展ず。若し是れ尋常の人ならば、此の一驗に遭うて、便ち手忙に脚亂なることを見る。他の雲門、石火電光の機有りて、便ち打つこと一掌す。僧曰く、打つことは即ち故らに是、奈何せん某甲に話あることを。這の僧轉身の處有り、所以に雲門放開して、却つて兩手を展ず、其の僧無語、門便ち打つ。看よ他の雲門、自ら是れ作家なることを。一步を行ずれば、一步の落處を知る、前を瞻んことを會し、亦後を顧みんことを解して、蹤由を失せず。這の僧只だ前を瞻んことを解して、後を顧ること能はず。頌して曰く、

〔虎頭虎尾云々〕頭尾照應して圓滿なることを云ふ。〔盲枷瞎棒〕メクラ打ちと云ふが如き意。

頌。虎頭虎尾、一時收。(殺人刀活人劍。須是這僧始得。千兵易得、一將難求。)凛凛威風、四百州。(坐斷天下人舌頭。蓋天蓋地。)却問、不知何太嶮。(不可盲枷瞎棒。雪竇元來未知在。闍黎相次着也。)師曰、放過一着。(若不放過、又作麽生。盡天下人一時落節。擊禪床一下。)

【讀方】虎頭虎尾、一時に收む。(殺人刀活人劍。須らく是れ這の僧にして、始めて得べし。千兵は得易く、一將は求め難し。)凛々たる威風、四百州。(天下の人の舌頭を坐斷す。蓋天蓋地。)却つて問ふ、知らず何ぞ太だ嶮なる。(盲枷瞎棒すべからず。雪竇元來、未だ知らざること在り。闍黎相次着せり。)師曰く、一着を放過す。(若し放過せずんば、又作麽生。盡天下の人、一時に落節す。禪床を撃つこと一下。)

〔闍黎〕雪竇を指す、相次は造次に同じく、不注意の意味又は粗忽のこと。〔古人〕羅山の道閑禪師を指す。

下。）

【評】雪竇此の話を頌し得て、極めて會し易し、大意只だ雲門の機鋒を頌す。所以に道く、虎頭虎尾、一時に收むと。古人曰く、虎頭に據つて、虎尾を收むるは、第一句下に宗旨を明かすと。雪竇只だ欵に據つて案を結す、雲門の虎頭に據ることを會して、又能く虎尾を收むることを愛す。僧兩手を展ず、門便ち打つ、是れ虎頭に據るなり。雲門兩手を展ず、僧無語、門又打つ、是れ虎尾を收むるなり。頭尾齊しく收めて、眼流星に似たり、自然に擊石火の如く、閃電光に似たり。直に得たり、凛々たる威風、四百州、直に得たり、盡大地世界、風颯颯地なることを。却つて問ふ、知らず何ぞ太だ嶮なると、妨げず嶮處あることを。雪竇曰く、一着を放過すと。且く道へ、如今放過せざる時、又作麼生。盡大地の人、總に須らく棒を喫すべし、如今の禪和子、總に道ふ、他の手を展ずる時を等つて、也た他に本分の草料を還さんと。似たることは則ち也た似たり、是なることは則ち未だ是ならず。雲門只だ恁麼に、汝をして休せしむべからず、也た須らく別に事の在る有るべし。

〔當頭〕俗に云ふ出合頭と云

第五十五則　道吾不道不道

垂示曰。穩密全眞、當頭取證。涉流轉物、直下承當。向㆓擊石火、閃電光中㆒、坐㆓斷諸訛㆒。於㆘據㆓虎頭㆒、收㆓虎尾㆒處㆖、壁立千仭、則且置。放㆓一線道㆒、還有㆓爲人處㆒、也無。試擧看。

【讀方】垂示に曰く。穩密全眞、當頭に取證し。涉流轉物、直下に承當す。擊石火、閃電光中に向つて、諸訛を坐斷し、虎頭に據りて、

ふ程の意にて、見るもの、聞くもの、何に付けてもと云ふこと。

虎尾を收むる處に於て、壁立千仭なることは、則ち且く置く。一線道を放て、還つて爲人の處有りや、也た無しや。試みに擧す看よ。

擧。道吾與漸源、至一家弔慰。源拍棺曰、生邪死邪。道什麼。好不惺々。這漢猶在兩頭。吾曰、生也不道、死也不道。龍吟霧起、虎嘯風生。買帽相頭。老婆心切。源曰、爲什麼不道。蹉過了也。果然錯會。吾曰、不道不道。惡水驀頭澆。前箭猶輕、後箭深。回至中路、太惺々。源曰、和尚快與某甲道、若不道打和尚去也。卻較些子。罕逢穿耳客。多遇刻舟。人似這般不喞嚁漢、入地獄如箭。吾曰、打即任打、道即不道。再三須重事。就身打劫。這老漢滿身泥水。初心不改。源便打。好打。且道、打他作什麼。屈棒元來有人喫在。後道吾遷化。源到石霜、擧示前話。知而故犯。不知是、不是、是則也太奇。霜曰、生也不道、死也不道。可煞新鮮。這般茶飯、卻元來有人喫。源曰、爲什麼不道。語雖一般、意無兩種。且道、與前來問是同是別。霜曰、不道不道。天上天下。曹溪波浪、若相似無限平人被陸沈。源於言下有省。瞎漢。且莫瞞山僧好。源一日、將鍬子、於法堂上、從東過西、從西過東。也是死中得活。好與先師出氣。莫問他。且看這漢一場懡㦬。霜曰、作什麼。隨後婁藪也。源曰、覓先師靈骨。喪車背後、懸藥袋。悔不愼當初。爾道什麼。霜曰、洪波浩渺、白浪滔天、覓什麼先師靈骨。也須還他作家、始得。成群作隊。作什麼。雪竇着語曰、蒼天々々。太遲生。賊過後張弓。好與一坑埋卻。源曰、正好着力。且道落在什麼處。先師曾向汝道什麼。這漢從頭到尾。直至如今、出身不得。太

〔道吾〕達磨大師十世の法孫にして、潭州の道吾山に住し、名を圓智と云ふ。〔漸源〕道吾圓智の法嗣にして、後に同じく潭州の漸源に住したる、仲興禪師のことなり。

原孚曰、先師靈骨猶在。大衆見麼。閃電相似。是什麼破草鞋。猶較些子。

讀方　擧す。道吾漸源と、一家に至りて弔慰す。源、棺を拍つて曰く、生か死か。（什麼と道ふぞ。好し不惺々。這の漢猶ほ兩頭に在り。）吾曰く、生とも也た道はじ、死とも也た道はじ。（龍吟ずれば霧起り、虎嘯けば風生ず。帽を買ふに頭を相す。老婆心切。）源曰く、什麼としてか道はざる。（蹉過し了れり。果然として錯つて會す。）吾曰く、道はじ道はじ。（惡水驀頭に澆ぐ。前箭は猶ほ輕く、後箭は深し。）回つて中路に至つて、（太だ惺々。）源曰く、和尚、快に某甲が與めに道へ、若し道はずんば、和尚を打ち去らん。（却つて些子に較れり。穿耳の客に逢ふこと罕なり。多くは舟を刻む人に遇ふ。這般の不喞𠺕の漢に似たらば、地獄に入ること箭の如し。）吾曰く、打つこ

〔帽を買ふに云々〕帽子を、買ふに、頭の大いさを計ること〔不喞𠺕〕又不喞嚠に作る、不慧、不洒脫の貌なり。〔滿身泥水〕泥水中の人を救はうには、自ら滿身泥水にならねばならぬ、即ち

とは即ち打つに任す、道ふことは即ち道はじ。（再三須らく事を重んずべし。就身打劫。這の老漢、滿身泥水。初心改めず。）源便ち打つ。（好し打つに。且く道へ、他を打つて什麼をか作さん。屈棒元來、人の喫する有る在り。）後ち道吾遷化す。源、石霜に到りて、前話を擧示す。（知つて故らに犯す。知らず是か不是か、是ならば則ち也太奇。）霜曰く、生とも也た道はじ、死とも也た道はじ。（可煞だ新鮮。這般の茶飯、却つて元來、人の喫する有り。）源曰く、什麼としてか道はざる。（語は一般なりと雖も、意に兩種無し。且く道へ、前來の問と、是れ同か是れ別か。）霜曰く、道はじ道はじ。（天上天下。曹溪の波浪、若し相似たらば、限無きの平人、陸沈せられん。）源言下に於て省有り。（瞎漢。且く山僧を瞞すること莫くんば好し。）源一日、鍬子を將つて、法堂上に於て、東より西に過ぎ、西より東に過

ぐ。（也た是れ死中に活を得たり。好し先師の與めに氣を出すに。他に問ふこと莫れ。且く看よ、這の漢一場の懡㦬。）霜曰く、什麼をか作す。（隨後婁藪也。）源曰く、先師の靈骨を覓む。（喪車背後に藥袋を懸く。悔ゆらくは當初を愼しまざることを。爾什麼と道ふぞ。）霜曰く、洪波浩渺、白浪滔天。什麼の先師の靈骨をか覓めん。（也た須らく他の作家に還して、始めて得べし。群を成し隊を作して、什麼をか作さん。）雪竇着語して曰く、蒼天々々。（太遲生。賊過ぎて後弓を張る。好し與に一坑に埋却するに。）源曰く、正に好し力を着くるに。（且く道へ、什麼の處にか落在する。先師曾て汝に向つて、什麼とか道ひし。這の漢、頭よりして尾に到り、直に如今に至るまで、出身することを得ず。）太原の孚曰く、先師の靈骨猶ほ在り。（大衆見るや。閃電に相似たり。是れ什麼の破草鞋ぞ。猶ほ些子に較れり。）

慈悲のこと。
〔屈棒〕罪なきものを打つこと。
〔石霜〕道吾の弟子石霜慶諸禪師、即ち漸源の法兄。
〔隨後婁藪〕何の分別思慮もなく、人の言語に付き隨うて追ひ廻ることの俗語、婁は即小

【評】道吾漸源と、一家に至りて弔慰す。源、棺木を拍つて曰く、生か死か。吾曰く、生とも也た道はじ、死とも也た道はじ。若し句下に向つて、便ち入得せば、言下に便ち歸を知らん。只だ這れ便ち是れ生死を透脱する底の關鍵なり、其れ或は未だ然らずんば、往々當頭に蹉過せん。看よ他の古人、行往坐臥、妨げず此の事を以て念と爲すことを。纔かに人家に至つて弔慰す、漸源便ち棺を拍つて、道吾に問うて曰く、生か死か。道吾一絲毫を移易せず、他に對して道ふ、生とも也た道はず、死とも也た道はず。漸源當面に蹉過して、他の語句を逐うて走つて、更に曰く、什麼としてか道はざる。吾道く、道はじ道はじ。吾、謂つべし赤心片々。錯を以て錯に就くと源猶ほ自ら惺々ならず、回つて中路に至りて、又曰く、和尚、快に某甲が與めに道へ、若し道はずんば、和尚を打ち去らんと。這の漢

僂、藪は四足の竹器にて、米などを漉す器なりと。
〔蒼天々々〕天を仰いで長太息し嘆き悲しむ貌。
〔他の古人〕漸源のこと。
〔不惺々〕他を惡口する語、日本の俗に好い馬鹿だと云ふが如し
〔快〕疾速

什麼の好惡をか識らん、所謂好心、好報を得ずと。道吾舊に依つて老婆心切、他に向つて道ふ、打つことは即ち打つに任す、道ふことは即ち道はじと。源便す打つ。然かも斯くの如くなりと雖も、却つて是れ他、一籌を贏ち得たり。道吾恁麼に、血滴々地に他の爲めにす、漸源恁麼に瞥地せず。道吾既に他に打たる、遂に漸源に向つて曰く、汝且く去れ、恐らくは院中の知事探得して、汝が爲めに禍を作さんことを。密に漸源をして出で去らしむ、道吾忒煞だ傷慈。源後來一小院に至りて、行者の觀音經を誦して、應以比丘身得度者、即現比丘身而爲說法と云ふを聞いて、忽然として大悟して曰く、我れ當時、錯つて先師を怪しむ、爭でか知らん此の事、言句上に在らざることを。古人道く、沒量の大人、語脈裏に轉却せらると。有底は情解して道ふ、道吾道はじ道はじと云ふ、便ち是れ道ひ了れ

の義にてスミヤカと訓讀すべし。

〔觀音經〕法華經廿八品中の第廿五品にして、詳しくは妙法蓮華經觀世音菩薩普門品と云ふ。

り、喚んで背翻の筋斗を打して、人をして摸索不着ならしむと作す。若し恁麼に會せば、作麼生か平穩なることを得去らん。若し脚實地を踏まば、一絲毫を隔てず。見ずや七賢女、屍陁林に遊び、遂に屍を指して問うて曰く、屍這裏に在り、人什麼の處にか在る。大姉曰く、作麼作麼。一衆齊しく無生法忍を證すと。且く道へ、幾箇か有る、千箇萬箇、只だ是れ一箇。漸源後に石霜に到りて、前話を擧す、石霜依前として曰く、生とも也た道はじ、死とも也た道はじ。源曰く、什麼としてか道はざる。霜曰く、道はじ道はじ。他便ち悟り去る。一日鍬子を將つて、法堂上に於て、東より西に過ぎ、西より東に過ぐ、意、己が見解を呈せんと欲す。霜果して問うて曰く、什麼をか作す。源曰く、先師の靈骨を覓む。霜便ち他の脚跟を截斷して曰く、我が這裏、洪波浩渺、白浪滔天、什麼の先師の靈骨をか

〔古人〕雲門を云ふ。〔背翻筋斗〕前にかへらず後にかへるやうな頗る難解のこと。〔屍陁〕詳しくは屍多婆耶と云ひ、譯して寒林と云ふ。

〔兩邊に落在す〕抑揚ありと云ふこと。

覔むと。他既に是れ先師の靈骨を覔む、石霜什麼としてか、却つて恁麼に道ふ。這裏に到りて、若し生とも也た道はじ、死とも也た道はじ、と云ふ處に於て、言下に薦得せば、方に始めより終りに至つて、全機受用することを知らん。汝若し道理を作して、擬議尋思せば、直に是れ見難し。漸源曰く、正に好し力を着くと。看よ他、悟りて後ち道ひ得て、自然に奇特なることを。道吾一片の頂骨、金色の如く、擊つ時銅聲を作す。雪竇着語して曰く、蒼天々々と。其の意兩邊に落在す。太原の孚曰く、先師の靈骨猶ほ在りと、自然に道ひ得て穩當なり、這の一落索、一時に一邊に拈向す。且く道へ、作麼生か是れ省要の處、作麼生か是れ着力の處。道ふことを見ずや、一處透れば、千處萬處一時に透ると。若し道はじ道はじと云ふ處に向つて、透得し去らば、便乃ち天下の人の舌頭を坐斷して、若し透

〔可煞〕甚だに同じ

不得ならば、也た須らく是れ自ら參じ自ら悟るべし、容易に日を過すべからず、許の時光を惜しむべし。雪竇頌して曰く、

頌。兎馬有角、斬。可煞奇特。可煞新鮮。牛羊無角。斬。作什麼模樣。瞞別人。即得。絕毫絕氂。天上天下唯我獨尊。汝向什麼處摸索。如山如嶽。在什麼處。平地起波瀾。翠着汝鼻孔。黃金靈骨今猶在。截却舌頭。塞却咽喉。拈向一邊。只恐無人識得伊。白浪滔天何處着。放過一着。脚跟下蹉過。眼裏耳裏着不得。無處着。果然。却較些子。果然沒溺深坑。隻履西歸曾失却。祖禰不了。累及兒孫。打云、爲什麼却在這裏。

讀方　兎馬に角有り、（斬。可煞だ奇特。可煞だ新鮮。）牛羊に角無し。（斬。什麼の模樣をか成す。別人を瞞ずることは即ち得。）毫を絕

〔啞着〕啞は塞なり、到る處に充滿して居ること。

し聻を絕す。(天上天下唯我獨尊。汝什麼の處に向つてか摸索せん。)山の如く嶽の如し。(什麼の處にか在る。平地に波瀾を起す。汝が鼻孔を啞着す。)黃金の靈骨、今猶ほ在り。(舌頭を截却し、咽喉を塞却す。一邊に拈向す。只だ恐らくは、人の伊れを識得する無からんことを。)白浪滔天、何の處にか着けん。(一着を放過す。脚跟下蹉過す。眼裏耳裏、着くることを得ず。)着くるに處なし。(果然。却つて些子に較れり。果然として深坑に沒溺す。)隻履西に歸つて、曾て失却す。(祖禰了ぜざれば、累ひ兒孫に及ぶ。打して曰く、什麼としてか、却つて這裏に在る。)

【評】　雪竇偏に會して、注脚を下す、他は是れ雲門下の兒孫、凡そ一句の中に、三句底の鉗鎚を具す、難道の處に向つて道破し、撥不開の處に向つて撥開し、他の緊要の處に去つて頌し出す。直に道ふ、兎馬に角有り、牛羊に角無しと、且く道へ、兎馬什麼としてか角有る、牛羊什麼としてか角無き。若し前話を透得せば、始めて雪竇爲人の處有ることを知らん。有者は錯會して道ふ、不道便ち是れ道、無句是れ有句。兎馬に角無しは、却つて角有るを云ひ、牛羊に角有るは、却つて角無きを云ふと、且得すらくは沒交涉。殊に知らず、古人千變萬化、此の如く神通を現す、只だ汝が這の精靈鬼窟を打破せんが爲めなることを。若し透得し去らば、一箇の了の字を消せず、兎馬に角有り、牛羊に角無し、毫を絕し釐を絕す、山の如く嶽の如し、這の四句、摩尼寶珠の一顆に似て相似たり。雪竇渾崙地に、汝が面前に吐在し了れり、末後は皆な是れ、欵に據つて案に結す。黃金の靈骨、今猶ほ在り、白浪滔天、何の處にか着けんと、此れ石霜と、大原の孚との語を頌す、什麼としてか、着くるに處無き。

〔精靈鬼窟〕情識計較のこと。

〔一火〕五人を伍となし、二伍を火となす、即ち十人なり、此十人同釜の飯を喫する故に一火と云ふ、今は達磨の兒孫なること。

隻履西に歸る、曾て失却す、靈龜尾を曳く、此れは是れ雪竇、轉身爲人の處。古人道く、他の活句に參じて、死句に參ぜざれと。既に是れ失却す、他の一火、什麼としてか、却つて頭を競うて爭ふ。

第五十六則　良禪客破三關

垂示曰。諸佛不曾出世、亦無一法與人。祖師不曾西來、未嘗以心傳授。自是時人不了、向外馳求。殊不知自己脚跟下、一段大事因緣、千聖亦摸索不着。只如今見不見、聞不聞、說不說、知不知、從什麼處得來。若未能洞達、且向葛藤窟裏會取。試擧看。

讀方　垂示に曰く、諸佛曾て出世せず、亦一法の人に與ふる無し。祖師曾て西來せず、未だ嘗て心を以て傳授せず、自ら是れ時の人了せず、外に向つて馳求す。殊に知らず、自己の脚跟下、一段の大事因緣、千聖も亦摸索不着なることを。只だ如今の見不見、聞不聞、說不說、知不知、什麼の處よりか得來る。若し未だ洞達すること能はずんば、且く葛藤窟裏に向つて會取せよ。試みに擧す看よ。

〔一段の大事因緣〕即ち一大事因緣なり、此語の本據は「法華經」に、釋迦世尊が、我れ一大事因緣の故に此の世に出現すと云ひしに據る、一大事とは衆生を佛の知見に開示悟入せしむること。

擧。良禪客問欽山、一鏃破三關時如何。（嶮。不妨奇特。不妨是箇猛將。）山曰、放出關中主看。（劈面來也、也要大家知。主山高、按山低。）良曰、恁麼則知過必改。（見機而作。已落第二頭。）山曰、更待何時。（有擒有縱。風行草偃。）良曰、好箭放不着所在、便出。（果然。擬待翻款那。第二棒打人不痛。）山曰、且來闍黎。（呼則易、遣則難。喚得回頭、堪作什麼。）良回首。（果然把不住。中也。）山把住曰、一鏃破三

關卽且止、試與欽山發箭看。虎口裏橫身。逆水之波。見義不爲無勇也。良擬議。果然摸索不着。打曰、可惜許。山打七棒曰、且聽這漢、疑三十年。令合恁麼。有始有終。頭正尾正。這箇棒合是欽山喫。

讀方　擧す。良禪客、欽山に問ふ、一鏃破三關の時如何。(嶮。妨げず奇特なることを。)山曰く、關中の主を放出せよ看ん。(劈面に來れり。也た大家知らんことを要す。主山は高く、按山は低し。)良曰く、恁麼ならば則ち過を知りて必ず改めん。(機を見て作す。)山曰く、更に何の時をか待たん。(擒有り縱有り、風行けは草偃す。)良曰く好箭放ちて、所在を着けずと云うて、便ち出づ。(果然。翻欵を待たんと擬するや。第二棒、人を打つとも痛からず。)山曰く、且來闍黎。(呼ぶことは則ち易く、遣ることは則ち難し。喚び得て頭を回さば、什麼を作すにか堪へん。)良首を回す。(果然として把不住。中れり。)山把住して曰く、一鏃破三關は即ち且く止く、試みに欽山が與めに箭を發せよ看ん。(虎口裏に身を横ふ、逆水の波。義を見て爲さゞるは勇なきなり。)良擬議す。(果然として摸索不着。打して曰く、可惜許。)山打つこと七棒して曰く、且く聽す這の漢、疑ふこと三十年ならんことを。(令は合に恁麼なるべし。始有り終有り。頭正尾正這箇の棒合に是れ欽山喫すべし。)

【評】　良禪客、也た妨げず是れ一員の戰將なることを。欽山の手裏に向つて、左盤右轉して、鞭を墜し鐙を閃す、末後可惜許、弓折れ箭盡く。然も是の如しと雖ども、李將軍自ら嘉聲の在る有り、封侯を得ざれば、也た是れ閑なり。這箇の公案。一出一入、一

〔良禪客〕巨良和尚のこと、傳燈錄には其傳見えざるも本則の因緣は傳燈錄にも佛祖宗派圖にもありと云ふ。〔欽山〕洞山悟本禪師の法嗣にて灃州欽山の文邃禪師なり。〔主山按山〕前山後山と云ふも同じ。語は雲門語錄に出づ、彼の土に於て宮城第宅を創營するに、主山、按山輔山と云ふことあり、連山還拱の中にて北方に高く聳えた

ろを主山とし、其南方にあるを按山、左右に續きて主山を輔けたる形の山を輔山と云ふ〔鞭を墜し鞚を閃かす〕従容錄には鞭を執り鞚を墜すとあり、輟耕錄にも亦同様にありと意は大同小異なり武士の

擒一縱、當機覿面に提け、覿面當機に疾し。都て有無得失に落ちず之れを立機と謂ふ、稍〻些子の力量を虧かば、便ち顚蹶有らん。這の僧亦是れ箇の英靈底の衲子、箇の問端を致す、妨げず群を驚かすことを。欽山は是れ作家の宗師、便ち他の問頭の落處を知る。鏃は箭鏃なり、一箭三關を射透する時如何。欽山の意に道く、汝か射透し得ることは則ち且く置く、試みに關中の主を放出せよ看ん。良曰く、恁麼ならば則ち過ちを知つて必らず改めんと、妨げず奇特なることを。欽山曰く、更に何時をか待たん。看よ他恁麼の祗對、欽山の所問、更に些子空缺の處無し。後頭に良禪客、却つて道ふ、好箭放つことは、所在を着けずと云うて、拂袖して便ち出づ。欽山纔に、他の恁麼に道ふことを見て、便ち喚んで曰く、且來闍黎と。良禪客、果然として把不住、便ち首を回す。欽山擒住して曰

馬上にて武者振りの體なり墜は垂下の意なり〔封侯を得ざれば云々〕李廣匈奴を防ぎ大に功ありしにも封侯を得ざりし如く良禪客も禪苑の名將であつても只だ始のみありて其の終を全うせず恰も封侯を得ざ

く、一鏃破三關は則ち且く止く、試みに欽山の與めに箭を發せよ看ん。良擬議す、欽山便ち打つこと七棒して、更に後に隨うて、他の與めに一道の呪を念じて曰く、且く聽す這の漢、疑ふこと三十年せんことを。如今の禪和子、盡く道ふ、什麼としてか、打八下せざる、又打六下せず、只だ打つこと七下すと。然らずんば他問うて、試みに欽山が與めに、箭を發せよ看んと道ふを等つて、便ち打たんと。似ることは則ち也た似たり、是なることは則ち未だ是ならざる在り。這箇の公案、須らく是れ胸襟裏に、些子の道理計較を懷かず、語言の外に超出して、方に能く一句下に、三關を破すること有り、及び箭を放つ處有るべし。若し是れ之れが非と與ふるを存せば、卒に摸索不着。當時這の僧、若し是れ箇の漢ならば、欽山也た大に嶮、他既に此の令を行ふこと能はず、免かれず倒に行はる、

ろが如く、從前の戰功空しく閑事となりしと云ふこと。

〔顢頇〕相續せざる貌。俗にケツマヅクこと。

〔退後退

ことを。且く道へ、關中の主、畢竟是れ什麼人ぞ。看よ雪竇頌して曰く、

頌。與君放出關中主、（中也。當頭蹉過。退後退後。）放箭之徒、莫莽鹵。（一死不再活。一大諸訛。過了。）取箇眼兮、耳必聾、（左眼半斤。放過一着。左邊不前右邊不後。）捨箇耳兮、目雙瞽。（右眼八兩。只得一路。進前則墮坑落塹、退後則猛虎銜脚。）可憐一鏃破三關、（全機恁麼來時如何。道什麼。破也墮也。）的々分明箭後路。（死漢。咄。打曰、還見麼。）君不見、（癩兒牽伴。打葛藤去也。）玄沙有言兮、（那箇不是玄沙。）大丈夫先天爲心祖。（一句截流、萬機寢削。鼻孔在我手裏。未有天地世界已前、在什麼處安心立命。）

讀方　君が與めに放出す、關中の主、（中れり。當頭に蹉過す。退後

後〕警蹕の辭、昔時將父は諸侯の通行の時、下に居れと云うて道路を警戒せり、即ち近寄つて無禮するなとの意。

〔歸宗〕智

退後。）放箭の徒、莽鹵なること莫れ。（一死再活せず。大いに諸訛。過了。）箇の眼を取れば、耳必らず聾す、（左眼半斤。一着を放過す。左邊前まず、右邊後れず。）箇の耳を捨つれば、目雙ら瞽す。（右眼八兩。只だ一路を得。進前する時は則ち坑に墮ち塹に落つ。退後する時は則ち猛虎脚を銜む。）憐れむべし、一鏃破三關。（全機恁麼に來る時如何。什麼と道ふぞ。破れたり墮せり。）的々分明なり、箭後の路。（死漢、咄。打して曰く、還つて見るや。）君見ずや、（癩兒伴を牽く。葛藤を打し去れり。）玄沙言へること有り、（那箇か是れ玄沙にあらざる。）大丈夫天に先つて、心の祖と爲る。（一句截流萬機寢削。鼻孔我が手裏に在り。未だ天地世界有らざる已前、什麼の處に在りてか、安心立命せん。）

【評】　此の頌數句、歸宗の頌中の語を取る、歸宗昔日、此の頌を作

常至眞禪師なり、頌を作りて曰く、歸宗事理絶、日輪正當午、自在如獅子、不爲物依怙、獨步四山項、優游三大路、欠咳飛禽墜、嚬呻衆邪怖、機竪箭易反、影沒手難覆、施張若工伎、裁剪如尺

るに因つて、號して歸宗と曰ふ、宗門の中に、之れを宗旨の說と謂ふ。後來同安之れを聞いて曰く、良公善く能く箭を發す、要且つ的に中つることを解せず。僧有り便ち問ふ、如何か的に中つることを得ん。安曰く、關中の主、是れ什麼人ぞと。後に僧有り、欽山に擧似す。欽山曰く、良公若し恁麼なるも、也た未だ欽山の口を免れ得ず、然も是の如くなりと雖も、同安是れ好心にあらず。雪竇道く、君が與めに、關中の主を放出すと。開眼も也た着たり、合眼も也た着たり、有形無形、盡く斬つて三段と爲す、放箭の徒、莽鹵なること莫れと。若し善く能く箭を放たば、則ち莽鹵ならず、若し善く放たずんば、則ち莽鹵なることを知るべし。箇の眼を取れば、耳必らず聾す、箇の耳を捨つれば、目雙べ瞽す。且く道へ、箇の眼を取れば、什麼としてか、却つて耳聾する、箇の耳を捨つれば、什麼としてか、却つて

度、巧鏤萬般名、歸宗還似土、語默音聲絶、旨妙情難措、棄箇眼還聾、取箇耳還瞽、一鏃破三關、分明前後路、可憐大丈夫、先天爲心祖と。〔同安〕九峰の思、虔に嗣ぐ、常察禪師のこと。

目雙べ瞽す。此の語取捨無くんば、方に能く透得せん、若し取捨有らば、則ち見難し。憐むべし、一鏃破三關、的々分明なり、箭後の路。良禪客問ふ、一鏃破三關の時如何。欽山曰く、關中の主を放出せよ看んと。乃至末後同安の公案、盡く是れ箭後の路なり、畢竟して作麼生。君見ずや、玄沙言へること有り、大丈夫天に先つて、心の祖と爲ると。尋常心を以て祖宗の極則と爲す、這裏什麼としてか、却つて天地未生已前に於て、猶ほ此の心の祖と爲す。若し這箇の時節を識破せば、方に關中の主を識得せん。的々分明なり、箭後の路、若し的に中てんと要せば、箭後分明に路あり、且く道へ、作麼生か是れ箭後の路、也た須らく是れ自ら精彩を着けて、始めて得べし。大丈夫天に先つて、心の祖と爲る、玄沙常に此の語を以て衆に示す、此れ乃ち是れ歸宗に此の頌有り、雪竇誤つて用ひて、

〔玄沙常に…〕玄沙歸宗の頌に依て作りし頌に曰く、一二三四五、日輪正當午、可レ憐大丈夫、先レ天爲二心祖一、

玄沙の語と爲す。今の參學の者の如きんば、若し此の心を以て祖宗と爲さば參じて彌勒佛下生に到るも、也た未だ會せずして在らん。若し是れ大丈夫の漢ならば、心猶ほ是れ兒孫、天地未分も、已に是れ第二頭。且く道へ正當恁麼の時、作麼生か是れ天地に先たん。

第五十七則　趙州不揀擇

垂示曰。未レ透二得已前一、一似二銀山鐵壁一、及二乎透得了一、自己元來、是鐵壁銀山。或有レ人問二且作麼生一、但向レ他道、若向二箇裏一、露二得一機一、看二得一境一、坐二斷要津一、不レ通二凡聖一、未レ爲二分外一。苟或未レ然、看二取古人樣子一。

讀方　垂示に曰く、未だ透得せざる已前、一へに銀山鐵壁に似たり、透得し了るに及んで、自己元來、是れ鐵壁銀山。或は人有りて、且く作麼生と問はゞ、但だ他に向つて道はん、若し箇裏に向つて、一機を露得し、一境を看得せば、要津を坐斷して、凡聖を通ぜざるも、未だ分外となさず。苟くも或は未だ然らずんば、古人の樣子を看取せよ。

〔至道無難云々〕三祖大師

擧。僧問二趙州一、至道無難、唯嫌揀擇、如何是不揀擇。這鐵蒺藜、多少人呑不レ得。大有二人疑着在一。滿口含レ霜。州曰、天上天下唯我獨尊。平地上起二骨堆一。衲僧鼻孔一時穿却。金剛鑄二鐵券一。僧曰、此猶是揀擇。果然隨レ他轉了也。摎二着這老漢一。州曰、田庫奴、什麼處是揀擇。山高石裂。僧無語。放レ汝三十棒。直得目瞪口呿。

讀方　擧す。僧趙州に問ふ、至道無難、唯嫌揀擇、如何なるか是れ不揀擇。（這の鐵蒺藜、多少の人呑むことを得ず。大いに人の疑着する

在ること有り、滿口に霜を含む。)州曰く、天上天下唯我獨尊。(平地上に骨堆を起す。衲僧の鼻孔、一時に穿却す。金剛鐵券を鑄る。)僧曰く、此れ猶ほ是れ揀擇。(果然として他に隨つて轉じ了れり。這の老漢を拶着す。)州曰く、田厙奴、什麼の處か、是れ揀擇。(山高く石裂く。)僧無語。(汝に放す三十棒。直に得たり目瞪し口呿することを。)

【評】僧趙州に問ふ、至道無難、唯嫌揀擇と。三祖の信心銘、劈頭に便ち這の兩句を道ふ。多少の人有りて、錯つて會す、何故ぞ、至道本難無き、亦難せざる無き。只だ是れ唯だ揀擇を嫌ふと、若し恁麼に會せば、一萬年にも、也た未だ夢にも見ざること在らん。趙州常に此の語を以て人に問ふ、這の僧此の語を以て、倒まに去りて他に問ふ、若し語上に向つて覓めば、此の僧却つて、天を驚かし地を動かす。若し語句上に在らずんば、又且つ如何。更に參ぜよ三十年。

信心銘の冒頭にある語。

〔田厙奴〕厙は舍なり、即ち田舍奴にて、下賤の人無智の言を叱る言葉、田舍ものと云ふこと。

〔劈頭〕眞最初のこと。

這箇は些子の關棙子、須らく是れ轉じ得て、始めて解すべく、虎鬚を捋づることは、也た須らく是れ本分の手段にして、始めて得べし。這の僧也た危亡を顧みず、敢へて虎鬚を捋で、便ち道ふ、此れ猶ほ是れ揀擇と。趙州劈口に、便ち塞いで道ふ、田厙奴、什麼の處か是れ揀擇と。若し別底を問着せば、便ち脚忙に手亂なることを見ん、爭奈せん這の老漢、是れ作家なることを。動不得の處に向つて動じ轉不得の處に向つて轉ず、汝若し透得せば、一切惡毒の言句、乃至千差萬狀、世間の戲論、皆是れ醍醐上味、若し着實の處に到らば、方に趙州の、赤心片々たることを見ん。田厙奴は乃ち福唐人の鄉語、人の無意智に似て、相似たることを罵る。這の僧道く、此れ猶ほ是れ揀擇と。趙州道く、田厙奴、什麼の處か、是れ揀擇と。宗師の眼目、須らく恁麼に至りて、金翅鳥の海に擘て、直に龍を取つ

〔福唐〕明の福清縣のことなり。

〔海の深きに似て云々〕趙州の境介の定慧圓明にして機轉宛轉無碍自在なること窺ひ知るべからざろを讃嘆したる語

て呑むが如くすべし。雪竇頌して曰く、

頌。似海之深、（是什麼度量、淵源難測。也未得一半在。）如山之固。（什麼人撼得。猶在半途。）蚊蝱弄空裏猛風、（也有恁麼底。果然不料力。可煞不自量。）螻蟻撼於鐵柱。（同坑無異土。且得沒交涉。闍黎與他同參。）揀兮擇兮、（擔水河頭賣。道什麼。趙州來也。）當軒布鼓。（已在言前。一坑埋却。如麻似粟。打云、塞却汝咽喉。）

讀方　海の深きに似て、（是れ什麼の度量ぞ。淵源測り難し。也た未だ一半を得ざる在り。）山の固きが如し。（什麼人か撼得せん。猶ほ半途に在り。）蚊虻空裏の猛風を弄す、（也た恁麼底有り。果然として力を料らず、可煞だ自ら量らず。）螻蟻鐵柱を撼かす。（同坑に異土無し。且得すらくは沒交涉。闍黎他と同參。）揀たり擇たり、（水を擔うて河頭に賣る。什麼と道ふぞ。趙州來れり。）軒に當る布鼓。（已に言前に在り。一坑に埋却す。麻の如く粟に似たり。汝が咽喉を塞却す。）

【評】　雪竇兩句を注して曰く、海の深きに似て、山の固きが如しと。僧曰く、此れ猶ほ是れ揀擇と。雪竇曰く、這の僧一へに、蚊蝱空裏に猛風を弄し、螻蟻鐵柱を撼かすに似たり。雪竇他の膽の大なることを賞す。何故ぞ、此れは是れ上頭の人の用ふる底、他敢て恁麼に道ふ、趙州亦他を放さず、便ち曰く、田厙奴、什麼の處か、是れ揀擇と、豈に是れ猛風鐵柱にあらざるか。揀たり擇たり、軒に當る布鼓と、雪竇末後に提起して活せしむ。若し識得して明白ならば、十分に汝自ら將ち來り了れり。何故ぞ、道ふことを見ずや、親切を得んと欲せば、問ひを將ち來りて問ふこと莫れと、是の故に軒に當る布鼓。

〔秤鎚云々〕秤鎚は物の輕重を量るものなり故に何れかの一方

第五十八則　趙州五年分疎

舉。僧問趙州、至道無難、唯嫌揀擇。是時人窠窟否。兩重公案。也是疑人處。踏着秤鎚、硬似鐵。猶有這箇在。莫以己方人。州曰、曾有人問我、直得五年分疎不下。面赤不如語直。胡孫喫毛蟲。蚊子咬鐵牛。

【讀方】舉す。僧趙州に問ふ、至道無難、唯嫌揀擇、是れ時の人の窠窟なりや否や。（兩重の公案。也た是れ人を疑はしむる處。秤鎚を踏着すれば、硬きこと鐵に似たり。猶ほ這箇の在る有らん。己を以て人を方ること莫れ。）州曰く、曾て人有りて我れに問ふ、直に得たり五年分疎不下なることを。（面の赤からんよりは、語の直からんには如かず。胡孫毛蟲を喫す。蚊子鐵牛を咬む。）

に片寄らねばならぬ、寄れば窠を作し窟を作す、之れ恰かも鐵の如く硬くして手のつけやうもなし〔胡孫毛蟲〕猿が毛蟲を食つたやうであるとの俗語、即ち呑むことも吐くことも出來ぬこと。〔宗道者〕

【評】趙州平生棒喝を行せず、用ひ得て棒喝に過ぎたり。這の僧問ひ得て來る、也た甚だ奇怪なり。若し是れ趙州にあらずんば、也た伊れに答へ難からん。蓋し趙州は是れ作家なり、只だ伊れに向つて道ふ、曾て人有り我れに問ふ、直に得たり五年分疎不下なることを。問處壁立千仞なれば、答處も亦他を輕んぜず。只だ恁麼に會せば、直に是れ當頭ならん。若し會せずんは、且く道理計較を作すこと莫れ。見ずや投子の宗道者、雪竇の會下に在りて、書記と作る、雪竇至道無難、唯嫌棟擇に參ぜしむ、此に於て省有り。一日雪竇他に問ふ、至道無難、唯嫌揀擇、意作麼生。宗曰く、畜生畜生。後ちに投子に隱居す。凡そ去つて住持するに、袈裟を將つて草鞋と經文とを裹む。僧問ふ、如何なるか是れ道者の家風。宗曰く、袈裟に

投子の法宗禪師のこと。〔桐城〕投子長山と同じく舒州にあり〔所以に道ふ〕云々五祖法演禪師上堂に曰く、淺聞深悟、深聞不レ悟、爭奈何々々々。献レ佛不レ在ニ香多一。

草鞋を裹む。僧曰く、未審し意旨如何。宗曰く、赤脚にして桐城に下ると。所以に道ふ、佛に献ずる香多きに在らずと。若し透得し去らば、縱奪我れに在り、旣に是れ一問一答、歷々現成す、什麼としてか、趙州却つて道ふ、分疎不下と。且く道へ、是れ時の人の窠窟なりや否や。趙州窠窟の裏に在りて、他に答ふるか、窠窟の外に在りて、他に答ふるか。須らく知るべし此の事、言句上に在らず、或は箇の漢鐵骨鐵髓有りて、信得及し去らば、龍の水を得るが如く、虎の山に靠るに似たり。頌して曰く、

頌。象王嚬呻、富貴中之富貴。誰人不ニ悚然一。好箇消息。獅子哮吼。作家中作家。百獸腦裂。好箇入路。無味之談、相罵饒レ汝接レ觜。鐵橛子相似。有ニ什麼咬嚼處一。分疎不下、五年强。一葉舟中載ニ大唐一。渺々兀然波浪起。誰知別有ニ好思量一。塞ニ斷人口一。相唾饒レ汝潑レ水。咦。闍黎道ニ甚麼一。

〔象王獅子〕共に趙州老人の風姿を頌したるもの。〔嚬呻〕欠伸に同じく「アクビ」のことされど茲には鼻息の荒く大なる貌なり。

南北東西、有麼有麼。天上天下。蒼天々々。烏飛兎走。自古自今。一時活埋。

讀方　象王嚬呻し、(富貴中の富貴。誰人か悚然たらざらん。好箇の消息。)獅子哮吼す。(作家中の作家。百獸腦裂す。好箇の入路。)無味の談、(相罵ることは汝に饒す、觜を接す。鐵橛子に相似たり。什麼の咬嚼の處か有らん。分疎不下、五年强。一葉舟中に大唐を載す。渺々兀然として、波浪起る。誰か知る別に好思量有ることを。)人口を塞斷す。(相唾することは汝に饒す、水を潑げ。咦。闍黎甚麼と道ふぞ。)南北東西、(有りや有りや。天上天下。蒼天々々。)烏飛び兎走る。(自古自今。一時に活埋せん。)

【評】　趙州道く、曾て人有り我に問ふ、直に得たり五年分疎不下なることを。象王の嚬呻し、獅子の哮吼するに似たり。無味の談、人

口を塞斷す。南北東西、烏飛び兎走ると。雪竇若し末後の句無くんば、何れの處にか、更に雪竇有りて來らん。既に是れ烏飛び兎走る、且く道へ、趙州、雪竇、山僧、畢竟して什麼の處にか落在する。

第五十九則　趙州至道

垂示曰。該天括地、越聖超凡。百草頭上、指出涅槃妙心、干戈叢裏、點定衲僧命脈。且道、承箇什麼人恩力、便得恁麼。試擧看。

〔點定〕物事を確かに推し定めること

讀方 垂示に曰く、天を該ね地を括り、聖を越え凡を超え、百草頭上に、涅槃妙心を指出し、干戈叢裏に、衲僧の命脈を點定す。且く道へ、箇の什麼人の恩力を承けてか、便ち恁麼なることを得たる。試みに擧す看よ。

擧。僧問趙州、至道無難、唯嫌揀擇、（再運前來道什麼。三重公案。）纔有語言、是揀擇、（滿口含霜。）和尚如何爲人。（賊是小人智過君子。白拈賊。騎賊馬趕賊。）州曰、何不引盡這語。（撈着這老漢。㘞。）僧曰、某甲只念到這裏。（兩箇弄泥團漢。逢着箇賊。垜跟難敵手。）州曰、只這至道無難、唯嫌揀擇。（畢竟由這老漢。被他換却眼睛。捉敗了也。）

讀方 擧す。僧趙州に問ふ、至道無難、唯嫌揀擇、（再運前來。什麼と道ふぞ、三重の公案。）纔かに語言有れば、是れ揀擇、（滿口に霜を

〔白拈賊〕晝間の盜賊のこと
〔堁跟〕進まざる貌にして、自由に歩けぬこと

含む。）和尚如何か人の爲めにする。（這の老漢を拶着す。囮。）州曰く、何ぞ這の語を引盡せざる。（賊は是れ小人、智君子に過ぎたり。白拈賊。賊馬に騎つて賊を趕ふ。）僧曰く、某甲只だ念ずること、這裏に到る。（兩箇泥團を弄する漢。箇の賊に逢着す。堁跟敵手し難し。）州曰く、只だ這の至道無難、唯嫌揀擇。（畢竟這の老漢に由る。他に眼睛を換却せらる。捉敗し了れり。）

【評】趙州道く、只だ這の至道無難、唯嫌揀擇、擊石火の如く、閃電光に似たり、擒縱殺活、恁麼に自在なることを得たり。諸方皆謂ふ、趙州逸群の辯有りと。趙州尋常、衆に示すに此の一篇有り、曰く、至道無難、唯嫌揀擇、纔かに語言有れば、是れ揀擇、是れ明白、老僧は明白裏に在らず、汝等還つて護惜すや、也た無しや。時に僧有り問うて曰く、既に明白裏に在らずんば、箇の什麼をか護惜せん。州曰く、我れも亦知らず。僧曰く、和尚既に知らずんば、什麼としてか道ふ、明白裏に在らずと。州曰く、事を問ふことは即ち得たり、禮拜し了つて退け。後來這の僧、只だ他の釁罅の處を拈じ去つて他に問ふ、問ひ得て也た妨げず奇特なることを。爭奈せん只だ是れ心行なることを、若し是れ別人ならば、他を爭奈ともすることを得ず。爭奈せん趙州は是れ作家、便ち道ふ、何ぞ這の語を引盡せざると。這の僧也た身を轉じ、氣を吐くことを會して、便ち道ふ、某甲只だ念じて、這裏に到る、一へに安排するに似て相似たり。趙州聲に隨つて、拈起して便ち答ふ、須らく計較を須ひざれと。古人之れを相續や大難と謂ふ。他、龍蛇を辨じ、休咎を別つことは、他の本分の作家に還へす。趙州這の僧の眼睛を換却して、鋒鋩を犯さず計較を着けず、自然に恰好あり。汝喚んで有句と作すことも也た得

〔釁罅〕言句のすき間のあること。
〔古人〕洞山を指す

〔水を灑げども云々〕蓮の

ず、喚んで無句と作すことも也た得ず、喚んで不有不無の句と作すことも也た得ず、四句を離れ、百非を絶す。何故ぞ、若し此の事を論ぜば、擊石火の如く、閃電光に似たり、急に眼を着けて看ば方に見ん。若し或は擬議躊躇せば、免れず喪身失命することを。雪竇頌して曰く、

頌。水灑不着、（說什麼。大深遠生。有什麼共語處。）風吹不入。（如虛空相似。硬剝々地。）虎步龍行、（他家得自在。不妨奇特。）鬼號神泣。（大衆望空啓告。掩耳。草偃風行。闍梨莫是與他同參。）頭長三尺知是誰。（怪底物。何方聖者。見麼見麼。）相對無言獨足立。（咄。縮頭去。放過一着。山魈。放過即不可。便打。）

讀方　水灑げども着かず、（什麼と說く。大深遠生。什麼の共に語る處か有る。）風吹けども入らず。（虛空の如くに相似たり。硬剝々地。

葉の水を受け付けぬことで、趙州の答話の出格なるを云ふ。〔硬剝々地〕硬くして爪も立たぬこと。

空に望んで啓告す。）虎の如く歩み、龍の如く行く。（他家自在を得たり。妨げず奇特なることを。）鬼號び神泣く。（大衆耳を掩ふ。草偃し風行く。闍梨是れ他と同參なること莫しや。）頭長きこと三尺、知んぬ是れ誰ぞ。（怪底の物。何れの方の聖者ぞ。見るや見るや。）相對して無言、獨足にして立つ。（咄。頭を縮めて去る。一着を放過す。山魈。放過せば即ち不可。便ち打つ。）

【評】　水灑げども着かず、風吹けども入らず、虎の如く歩み、龍の如く行く、鬼號び神泣くと、汝が啗啄の處なし。此の四句、趙州の答話、大いに龍馳せ虎驟るに似ることを頌す。這の僧、只だ一場の懡㦬を得たり。但だ這の僧のみに非らず、直に得たり鬼も也た號び神も也た泣くことを。風行けば草偃すに相似たり。末後の兩句、謂つべし一句親しく得たり、頭長きこと三尺、知んぬ是れ誰ぞ、相對

して無言、獨足にして立つと。見ずや僧古德に問ふ、如何なるか是れ佛。古德曰く、頭長きこと三尺、頸長きこと二寸。雪竇引いて用ふ、未審し諸人、還つて識るや。山僧も也た識らず。雪竇一時に脫體、趙州を畫却す、眞箇裏に在り了れり。諸人須らく子細に、眼を着けて看るべし。

第六十則　雲門拄杖化龍

垂示曰。諸佛衆生、本來無レ異。山河自己、寧有二等差一。爲二什麼一却渾成二兩邊一去也。若能撥二轉話頭一、坐二斷要津一。放過即不可、若不二放過一、盡大地不レ消二一揑一。且作麼生是撥二轉話頭一處。試擧看。

〔要津〕を坐斷す　迷の此岸より悟の彼岸に到るなどの兩邊の見を打ち捨てること。

〔一揑〕を消せず　一握りにも足らぬと云ふこと。

〔雲門〕文偃禪師のこと。

讀方　垂示に曰く。諸佛衆生、本來異無し、山河自己、寧ろ等差有らん。什麼としてか、却つて渾べて兩邊と成り去るや。若し能く話頭を撥轉し、要津を坐斷するも、放過せば即ち不可、若し放過せざれば、盡大地一揑を消せず。且らく作麼生か、是れ話頭を撥轉する處ぞ。試みに擧す看よ。

擧。雲門以二拄杖一、示レ衆曰、點化在レ臨レ時。殺人刀活人劍。換二却汝眼睛一了也。拄杖子化爲レ龍、何用二周遮一。用レ化二作什麼一。呑二却乾坤一了也。山河大地、甚處得來。天下衲僧性命不レ存。還礙二着咽喉一麼。闍梨向二什麼處一安心立命。十方無二壁落一、四面亦無レ門。東西南北四維上下。爭二奈這箇一何。

讀方　擧す。雲門拄杖を以て、衆に示して曰く、（點化は時に臨むに在り。殺人刀、活人劍。汝が眼睛を換却し了れり。）拄杖子化して

〔點化〕龍門に於て魚が龍と化すること、今は點破の義にして把住、放行は、總じて變化の意。

龍と爲り、（何ぞ周遮することを用ひん。化することを用ひて什麼か作さん。）乾坤を呑却し了れり。（天下の衲僧、性命存せず。還つて咽喉を碍着すや。闍梨什麼の處に向つてか、安心立命せん。）山河大地、甚れの處よりか得來る。（十方壁落無く、四面亦門無し。東西南北、四維上下。這箇を爭奈何せん。）

【評】只だ雲門の、拄杖子化して龍と爲り、乾坤を呑却し了れり、山河大地、甚れの處よりか得來ると、道ふが如くんば、若し有と道はゞ則ち瞎す、若し無と道はゞ則ち死す、還つて雲門爲人の處を見るや、我れに拄杖子を還し來れ。如今の人、他の雲門獨露の處を會せずして、却つて道ふ、色に即して心を明らめ、物に附して理を顯はすと、且く釋迦老子、四十九年の說法の如くんば、此の議論を知らざるべからず。何が故ぞ、更に拈花を用ひて、迦葉微笑する。

〔縱然〕隆起の貌、又森然の意なり。

〔古人〕洛浦元安のこと。

這の老漢、便ち搽胡して道く、吾れに正法眼藏、涅槃妙心有り、摩訶大迦葉に分付すと。更に何ぞ必ずしも、心印を單傳せん。諸人旣に是れ、祖師門下の客、還つて單傳底の心を明得すや。胸中に若し一物有らば、山河大地、縱然として現前せん、胸中若し一物無くんば、外則ち了に絲毫無し、什麼の理と智と冥と、境と神と會すとか說かん。何故ぞ、一會一切會、一明一切明。長沙道く、學道の人、眞を識らざることは、只だ從前識神を認むるが爲めなり。無量劫來、生死の本、痴人喚んで本來人と作す。忽ちに若し陰界を打破して、身心一如、身外無餘なるも、猶ほ未だ一半を得ざる在り、什麼の色に即して心を明らめ、物に附して理を顯はすとか說かん。古人道く、一塵纔かに起つて、大地全く收まると。且く道へ、是れ那箇の一塵ぞ、若し這の一塵を識得せば、便ち拄杖子を識得せん。

〔芭蕉〕芭蕉の慧清なり、仰山に嗣ぐ

纔かに拄杖子を拈起すれば、便ち縦横の妙用を見ん、恁麼の說話、早く是れ葛藤し了れり、何に況んや更に化して龍と爲らんをや。慶藏主曰く、五千四十八巻、還つて曾て恁麼の說話有りやと。雲門每に拄杖の處に向つて、全機大用を拈掇し、活潑々地に人の爲めにす。芭蕉衆に示して曰く、衲僧が巴鼻、盡く拄杖頭上に在りと。永嘉亦曰く、是れ形を標して、虚しく事襯するにあらず、如來の寶杖、親しく蹤跡すと。如來昔、然燈佛の時に於て、髪を布き泥を掩うて、以て彼の佛を待す。然燈曰く、此の處當に梵刹を建つべし。時に一りの天子有り、遂に一莖草を標して曰く、梵刹を建て畢んぬと。諸人且く道へ、這箇の消息、那裏よりか得來る。祖師道く、棒頭に取證し、喝下に承當すと。且く道へ、箇の什麼をか承當する。忽ち人有りて、如何なるか是れ拄杖子と問はゞ、是れ筋斗を打すること莫しや、是れ掌を撫して一下すること莫しや、總に是れ精魂を弄す、且喜すらくは沒交涉。雪竇頌して曰く。

頌。拄杖子、呑乾坤、（道什麼。只用打狗。）徒說桃花浪奔、（撥開向上一竅、千聖齊立下風。也不在拏雲攫霧處。說得千偏萬偏、不如手脚羅籠一偏。）燒尾者、不在拏雲攫霧、（左之右之。老僧只管看。也只是一箇乾柴片。）曝腮者、何必喪膽亡魂。（人々氣宇如王。自是汝千里萬里。爭奈悚然。）拈了也、（謝慈悲。老婆心切。）聞不聞。（不免落草。用聞作什麼。）直須灑々落々、（殘羹餿飯。乾坤大地甚處得來。）休更紛々紜々。（擧令者先犯。相次到汝頭上。打曰、放過則不可。）七十二棒、且輕恕、（山僧不曾行此令。據令而行。賴値得山僧。）一百五十、難放君。（正令當行。豈可只恁麼了。直饒朝打三千、暮打八百、堪作什麼。）師驀拈拄

（乾柴片）枯れ柴のこと。

杖下座。大衆一時走散。雪竇龍頭蛇尾、作什麼。

【讀方】 拄杖子乾坤を呑む、（什麼と道ふぞ。只だ用ひて狗を打す。）徒らに說く、桃花の浪に奔ると。（向上の一竅を撥開すれば、千聖齊しく下風に立つ。也た雲を拏ひ、霧を攫む處に在らず。說き得て千徧萬徧せんよりは、如かず手脚羅籠一徧せんには。）尾を燒く者、雲を拏ひ霧を攫むに在らず。（左之右之。老僧只管に看る。也只是れ一箇の乾柴片。）腮を曝す者も、何ぞ必らずしも、膽を喪し魂を亡せん。（人くさ人氣宇王の如し。自ら是れ汝千里萬里。爭奈せん悚然たることを。）拈じ了れり。（慈悲を謝す。老婆心切。）聞くや聞ずや。（免れず草に落つることを。聞くことを用ひて什麼と作さん。）直に須らく灑々落々たるべし、（殘羹餿飯。乾坤大地、甚の處よりか得來る。）更に紛々紜々たることを休めよ。（令を擧する者は先づ犯す。相次に汝が頭上に到る。打して曰く、放過せば則ち不可。）七十二棒、且く輕恕す、（山僧曾て此の令を行ぜず。令に據つて行ず。賴に山僧に値ひ得たり。）一百五十、君に放し難し。（正令當行。豈に只だ恁麼に了す可けんや。直饒ひ、朝打三千、暮打八百するも、什麼と作すにか堪へん。）師驀に拄杖を拈じて下座。大衆一時に走散す。（雪竇龍頭蛇尾にして、什麼をか作さん。）

（師驀に云々）是れ編輯者の語なり。師とは雪竇を指す

【評】 雲門は委曲に人の爲めにす、雪竇は截徑に人の爲めにす、所以に化して龍と爲ることを撥却して、恁麼に道ふことを消せず、只だ是れ拄杖子、乾坤を呑むと。雪竇の大意、人の情解を免る、更に道く、徒らに說く、桃花の浪に奔ると。更に必らずしも龍と爲らず。蓋し禹門に三級の浪有り、三月に至る每に、桃花の浪漲る。魚能く

〔積行菩薩云々〕華嚴大疏の序に曰く、夫れ高きこと仰ぐべからず、則ち積行菩薩腮鱗を龍門に曝す、深きこと窺ふ

水に逆うて、躍つて浪を過ぐる者、即ち化して龍と爲ると。雪竇道く、縱ひ化して龍と爲るも、亦是れ徒に說く、尾を燒く者、雲を拏ひ霧を攫むに在らず。魚禹門を過れば、自ら天火有り、其尾を燒いて、雲を拏ひ霧を攫んで去る。雪竇の意に道ふ、縱ひ化して龍と爲るも、亦た雲を拏ひ霧を攫むに在らず、腮を曝す者も、何ぞ必らずしも、膽を喪し魂を亡せんと。清凉の疏の序に曰く、積行の菩薩、尙は乃ち腮を龍門に曝すと。大意は華嚴の境界、小德小智の造詣する所に非らず、獨り魚の龍門を過ぐるに、透り過ぎざる者は點額じて回る、死水沙磧の中に困じて、其の腮を曝すが如きことを明す。雪竇の意に道く、既に點額して回る、必らずしも膽を喪し魂を亡せんと。拈じ了れり、聞くや聞かずや、重ねて注脚を下す、一時に汝が與めに、掃蕩し了れり。諸人直に須らく、灑々落々地にし去るべ

べからず、則ち上德聲門、視聽を喜會に杜づと。〔古人道く云々〕雲門擧、雪峰曰、我見死馬醫、一口吞二盡乾坤一、懷禪曰、山河大地從二何處一得來直饒這裏倜儻分明、特舍兒七十棒反二成一百四十一。

し、更らに紛々紜々たることを休めよ。汝若し更に紛々紜々たらば、拄杖子を失却し了らん。七十二棒、且く輕恕すと。雪竇汝が爲めに、重を捨て、輕に從ふ。古人道く、七十二棒、翻つて一百五十と成らん。如今の人、錯つて會して、却つて只數目を算す、合に是れ七十五棒なるべし、什麽としてか、却つて只七十二棒なると。殊に知らず、古人の意、言外に在ることを。所以に道ふ、此の事言句の中に在らず・後人の去つて穿鑿することを免る。雪竇所以に引き用ひて、直饒ひ眞箇に、灑々落々地たるも、正に好し汝に七十二棒を與ふるに。猶ほ是れ輕恕す、直饒ひ總に此の如くならざるも、一百五十、君に放し難しと、一時に頌し了れり。却つて更に拄杖を拈じて、重々相爲めにす、然かも恁麽なりと雖ども、一箇も皮下に血有る無し。

佛果圜悟禪師碧巖錄卷之六　終

〔法幢〕人の師となりて法を説く者は、其の門庭に幢幡を建つるを常とせり、今

佛果圜悟禪師碧巖錄卷之七

第六十一則　風穴一塵

垂示曰。建二法幢一立二宗旨一還二他本分宗師一。定二龍蛇一別二緇素一須二是作家知識一。劔及上論二殺活一棒頭上別二機宜一則且置。且道、獨據二寰中一事、一句作麼生商量。試擧看。

讀方　垂示に曰く。法幢を建て、宗旨を立つることは、他の本分の宗旨に還す。龍蛇を定め、緇素を別つことは、須らく是れ作家の知識なるべし。劔及上に殺活を論じ、棒頭上に機宜を別つことは且く置く、且く道へ、獨り寰中に據るの事、一句作麼生か商量せん。試みに擧す看よ。

日學校や會堂等に於ける徽章の如し。〔寰中〕天子の宮城のある處を云ふ。〔風穴〕汝州風穴の延沼禪師なり、臨濟大師の孫、南嶽下七世、

擧風穴垂語曰、興雲致雨。也要爲主爲賓。若立一塵、我爲法王、於法自在。花簇々錦簇々。家國興盛、不是他屋裏事。不立一塵、掃蹤滅跡。失却眼睛。和鼻孔失也。家國喪亡。一切處光明。用家國作什麼。全是他家屋裏事。雪竇拈拄杖曰、須是壁立千仞始得。達磨來也。還有同生同死底衲僧麼。還我話頭來。雖然如是、要平不平之事。須於雪竇商量始得。還知麼。若知許爾自由自在。若不知、朝打三千暮打八百。

【讀方】擧す。風穴垂語して曰く、(雲を興し雨を致す。也た主と爲り賓と爲らんことを要す。)若し一塵を立すれば、(我れ法王と爲り、法に於て自在なり。花簇々錦簇々。)家國興盛し、(是れ他の屋裏の事にあらず。)一塵を立せざれば、(蹤を掃ひ跡を滅す。眼睛を失却す。鼻孔に和して失す。)家國喪亡す。(一切處光明。家國を用ひて什麼か作さん。全く是れ他家屋裏の事。)雪竇拄杖を拈じて曰く、(須らく是れ壁立千仞にして、始めて得べし。達磨來れり。)還つて同生同死底の衲僧有りや。(我れに話頭を還し來れ。然も是くの如くなりと雖も、不平の事を平げんことを要す。須らく雪竇に於いて、商量して始めて得べし。還つて知るや。若し知らば汝に許す、自由自在なることを。若し知らずんは、朝打三千暮打八百。)

達磨門下十三代の禪師なり。〔所以道〕

【評】只だ風穴の衆に示して云ふが如きんば、若し一塵を立すれば家國興盛し、一塵を立せざれば、家國喪亡すと。且く道へ、一塵を立するが即ち是か、一塵を立せざるが即ち是か。這裏に到つて、須らく是れ大用現前して、始めて得べし。所以に道く、設使ひ言前に薦得するも、猶ほ是れ殼に滯り封に迷ふ。直饒ひ句下に精通する

風穴上堂の語なり〔殺滯〕はまだ巣籠ぢやと云ふこと、不脫體の處なり。〔三家村裏の人〕猶ほ張三李四と云ふが如し

〔金屑云々の句〕德山圓密の頌なり。

も、未だ免れず途に觸れて狂見することを。他は是れ臨濟下の尊宿、直下に本分の草料を用ふ。若し一塵を立すれば、家國興盛し、野老顰蹙す。意、國を立し邦を安ずるは、謀臣猛將に藉るべきに在り、然して後、麒麟出で鳳凰翔る、乃ち太平の祥瑞なり、他の三家村裏の人、爭でか恁麼の事有ることを知らん。一塵を立せざれば、家國喪亡す、風颯々地、野老什麼としてか、出で來つて謳歌する。只だ家國喪亡するが爲めなり、洞下に之れを轉變の處と謂ふ。更に佛なく衆生無く、是無く非無く、好も無く惡も無く、音響蹤跡を絕す。所以に言ふ、金屑貴しと雖ども、眼に落ちて瞖と成る。又曰く、金屑は眼中の瞖、衣珠は法上の塵、己靈猶ほ重ぜず、佛祖是れ何人ぞと。七穿八穴、神通妙用、奇特と爲さず。箇裏に到つて、衲被蒙頭にして、萬事休す。此の時山僧、都べて不會。若し更に

〔双提〕此の話の把住と放行と兩頭を拈起せるを云ふ。

心と說き性と說き、玄と說き妙と說くも、都べて用不着。何が故ぞ、他家自ら神仙の境有り。南泉衆に示して曰く、黃梅七百の高僧、盡く是れ佛法を會する底の人、他の衣鉢を得ず、唯だ盧行者のみ有りて、佛法を會せず、所以に他の衣鉢を得と。又曰く、三世の諸佛有ることを知らず、貍奴白牯却つて有ることを知る。野老或は顰蹙し、或は謳歌す。且く道へ、作麼生か會せん、且く道へ、他什麼の眼を具してか、却つて恁麼なる。須らく知るべし、野老の門前、別に條章有ることを。雪竇双提し了つて、却つて拄杖を拈じて曰く、還つて同生同死底の衲僧有りや。當時若し箇の漢有りて、出で來つて、一句を道ひ得て、互に賓主と爲らば、雪竇這の老漢の後面に自ら點胸することを免れ得ん。

頌。野老從教、不㆑展㆑眉。（三千里外有㆓箇人㆒。美食不㆑中㆓飽人喫㆒。）且圖、家

（點胸）自慢し自負する貌。

國立雄基。太平一曲大家知。要行即行、要住即住。盡乾坤大地、是箇解脫門、汝作麼生立。謀臣猛將、今何在、有麼有麼。土曠人稀、相逢者少。且莫點胸。萬里清風、只自知。傍若無人。教誰掃地。也是雲居羅漢。

讀方　野老從教あれ、眉を展べざることを。（三千里外、箇の人有り。美食は飽人の喫するに中らず。）且く圖る、家國雄基を立することを。（太平の一曲、大家知る。行かんと要せば即ち行き、住まらんと要せば即ち住まる。盡乾坤大地、是れ箇の解脫門、汝作麼生か立せん。）謀臣猛將、今何くにか在る。（有りや有りや。土曠く人稀にして、相逢ふ者少きなり。且く點胸すること莫れ。）萬里清風只だ自知す。（傍若無人。誰れをして掃地せしめん。也た是れ雲居の羅漢。）

【評】　適來は双提し了れり。這裏は却つて只だ一邊を拈じ、一邊を放す、長を裁り短を補ひ、重を捨て輕に從ふ。所以に道ふ、野老從教あれ、眉を展べざることを、我れ且く圖る、家國の雄基を立せんことを、謀臣猛將、今何くにか在る。雪竇拄杖を拈じて曰く、還つて同生同死底の衲僧有りや。一へに還つて、謀臣猛將有りやと道ふに似たり、一口に一切の人を呑却し了れり。所以に道ふ、土曠く人稀にして、相逢ふ者少きなり、還つて相知る者有りや、出で來れ一坑に埋却せん。萬里の清風只だ自知す、便ち是れ雪竇點胸の處なり。

第六十二則　雲門祕在形山

垂示曰。以無師智、發無作妙用。以無緣慈、作不請勝友。

向一句下、有殺有活、於一機中有縱有擒。且道、作麼人曾恁麼來。試擧看。

讀方 垂示に曰く。無師の智を以て、無作の妙用を發し。無緣の慈を以て、不請の勝友と作る。一句下に向つて、殺有り活有り、一機中に於いて、縱有り擒有り。且く道へ、什麼人か曾て恁麼にし來る試みに擧す看よ。

擧。雲門示衆曰、乾坤之內、（土曠人稀。六合收不得。）宇宙之間、（休向鬼窟裏作活計。蹉過了也。）中有一寶、（在什麼處。光生也。切忌向鬼窟裏覓。）祕在形山。（拶。點。）拈燈籠、向佛殿裏、（猶可商量。）將山門、來燈籠上。（雲門大師、是即是、不妨諸訛。猶較些子。若子細檢點將來、未免屎臭氣。）

讀方 擧す。雲門衆に示して曰く、乾坤の內、（土曠く人稀なり。六合も收め得ず。）宇宙の間、（鬼窟裏に向つて、活計を作すことを休めよ。蹉過し了れり。）中に一寶有り、（什麼の處にか在る。光生ぜり。切に忌む、鬼窟裏に向つて覓むることを。）形山に祕在す。（拶。點。）燈籠を拈じて、佛殿裏に向ひ、（猶ほ商量すべし。）山門を將ち、燈籠上に來す。（雲門大師、是は即ち是。妨げず諸訛することを。猶ほ些子に較れり。若し子細に檢點し將ち來るも、未だ屎臭氣を免れず。）

【評】 雲門道く、乾坤の內、宇宙の間、中に一寶有り、形山に祕在す。且く道へ、雲門の意、釣竿頭に在るや、意、燈籠上に在るや。此れは乃ち肇法師、寶藏論の數句、雲門拈じ來つて衆に示す。肇公時に後秦の逍遙園に於いて、論を造り維摩經を寫して、方に莊老の未だ其の妙を盡さゞることを知る。肇乃ち羅什を禮して師と爲す、又瓦棺寺の跋陀婆羅菩薩の、西天二十七祖の處より、心印を傳へ來

〔無師智〕教家の說に四智あり、法華經に說いて曰く、一切智、佛智、自然智、無師智と、而して無師智とは見性悟道の智なり、即ち他の示敎を待たざるを云ふ〔無緣慈〕慈悲に三あり、曰く、衆生緣の慈悲、法緣の慈悲、及び無緣の慈悲なり、而して無緣の慈悲とは、自他を忘じ、能所を忘じたる無量無邊の慈悲なり〔雲門〕文偃禪師也、此垂語は、僧肇法師の寶藏論にある語な

るに參じ、肇深く其の堂奧に造る。肇一日難に遭ひ、刑に臨むの時、七日の暇を乞うて、寶藏論を造る。雲門便ち論中の四句を拈じて衆に示す、大意に曰く、如何ぞ無價の寶を以て、陰界の中に隱在すと。論中の語言、皆宗門の說話と相符合す。見ずや鏡淸、曹山に問ふ、淸虛の理、畢竟身無き時如何。山曰く、理は即ち是の如し、事作麼生。淸曰く、如理如事。山曰く、曹山一人を瞞することは即ち得たり、諸聖の眼を如何せん。淸曰く、若し諸聖の眼無くんば、爭でか不恁麼あることを知らん。山曰く、官には針をも容れず、私に車馬を通ずと。所以に道ふ、乾坤の內、宇宙の間、中に一寶有り、形山に祕在すと。大意、人々具足箇々圓成なることを明す。雲門便ち拈じ來つて衆に示す、已に是れ十分現成す、更に座主に似て相似たり、汝が爲めに注解し去るべからず。他慈悲、更に汝が爲めに注脚を

り。
〔宇宙〕上天下地を宇と云ひ、古往今來を宙と云ふ、即ち時間空間共に無限なることを含むを云ふ。
〔形山〕人間の肉體のこと。
〔拶、點〕共にあばき破ることなり、拶は破なり墮なり、點は又點破の

義也。
〔跋陀婆羅〕一に佛陀跋陀羅に作る、譯して覺賢と云ふ、迦毘羅衛國甘露飯王の苗裔なりと。
〔古人〕永嘉の眞覺大師。
〔又曰〕淸涼の華嚴大疏の序文なり。
〔所以道云々〕長沙の偈の詞。

下して道ふ、燈籠を拈じて、佛殿裏に向ひ、三門を將つて、燈籠上に來たす、且く道へ、雲門恁麼に道ふ、意作麼生。見ずや古人曰く、無明の實性即佛性、幻化の空身即法身。又曰く、凡心に即して、佛心を見ると。形山は即ち是れ四大五蘊なり、中に一寶有りて、形山に祕在す。所以に道ふ、諸佛心頭に在り、迷人外に向つて求む、內に無價の寶を懷いて、識らずして一生休すと。又道く、佛性堂々として顯現す、住相の有情は見難し、若し衆生無我なることを悟らば、我が面何ぞ佛面に殊ならん。心は是れ本來心、面は是れ娘生面、劫石は移動すべくとも、箇の中改變無しと。有る者は只だ箇の昭々靈靈を認めて寶と爲す、只だ是れ其の用を得ず、亦其の妙を得ず、所以に動轉することを得ず、開撥して行せず。古人道ふ、窮する時は則ち變じ、變ずる時は則ち通ずと。燈籠を拈じて、佛殿裏に向ふ、若

〔又道云々〕長沙の偈の文なり。〔古人〕易の繋辭傳にある語。〔又曰曲木云々〕雲竇、勝因長老に送るの偈中にある句なり。

し是れ常情ならば、測度し得べし、三門を將ちて、燈籠上に來す、還つて測度し得てんや。雲門汝が與めに、一時に情識意想、得失是非を打破し了れり。雪竇道く、我は愛す、韶陽新定の機、一生人の與めに、釘を抽き楔を拔くことを。又曰く、曲木位に據る、知んぬ幾何ぞ、利刄翦却して、人をして愛せしむ。他道く、燈籠を拈じて、佛殿に向ふ、這の一句已に截斷し了れり。又三門を將ちて、燈籠上に來す、若し此の事を論せば、擊石火の如く、閃電光に似たり。雲門道く、汝若し相當し去らんとならば、且く箇の入路を覓めよ、微塵の諸佛、汝が脚跟下に在り、三藏の聖教、汝が舌頭上に在り、如かず悟り去るの好からんには。和尙妄想すること莫れ、天は是れ天、地は是れ地、山は是れ山、水は是れ水、僧は是れ僧、俗は是れ俗。良久して曰く、我が與めに面前の按山を拈じ來れ看ん。便

〔三門云々〕本錄には、師手を以て面前に劃一劃して曰く、三門什麼としてか佛殿に騎り這裡より過ぐとあり。〔所以道〕同安觀志の語なり。〔形山に祕在す〕一本に此の句なし、種電

ち僧有り出で、問うて曰く、學人、山は是れ山、水は是れ水と見る時如何。門曰く、三門什麼としてか這裏より過ぐ、汝が死却せんことを恐れて、遂に手を以て劃一劃して曰く、識得する時は、是れ醍醐の上味、若し識不得ならば、反つて毒藥と爲らん。所以に道く、了々の時了すべき無く、玄々の處、直に須く呵すべし。雪竇又拈じて曰く、乾坤の內、宇宙の間、中に一寶有り、形山に祕在し、壁上に掛在す。達磨九年、敢て正眼に覰着せず、而今衲僧、見んと要すや、劈脊に便ち棒せんと。看よ他の本分の宗師、終に實法を將ちて、人を繫綴せざることを。玄沙曰く、羅籠すれども肯て住らず、呼喚すれども頭を回らさず、然も恁麼なりと雖も、也た是れ靈龜尾を曳く。雪竇の頌に道く。

抄に曰く、肇公は形山に祕在すと云ふ、雪竇什麼としてか壁上に掛在すと云ふと云々と說けり。

〔灸脂〕汗や脂が灸り付けたやうに汚なくついて居ること。

頌 看々、高着レ眼。用レ看作二什麼一。驪龍玩レ珠。古岸何人、把二釣竿一。孤危甚孤危。壁立甚壁立。賊過後張レ弓。腦後見レ腮、莫二與往來一。雲冉々、打斷始得。百匝千重。灸脂帽子、鶻臭布衫。水漫々。右之左之。前遮後擁。明月蘆花、君自看。看着則瞎。若識二得雲門語一、便見二雪竇末後句一。

讀方 看よ看よ、（高く眼を着けよ。看ることを用ひて什麼をか作さん。驪龍珠を弄ぶ。）古岸何人か、釣竿を把る。（孤危は甚だ孤危、壁立は甚だ壁立。賊過ぎて後弓を張る。腦後に腮を見ば、與に往來すること莫れ。）雲冉々、（打斷して始めて得ん。百匝千重。灸脂帽子、鶻臭布衫。）水漫々。（右之左之。前に遮り後に擁す。）明月蘆花、君自ら看よ。（看着すれば則ち瞎す。若し雲門の語を識得せば、便ち雪竇末後の句を見ん。）

〔鶻臭〕鶻は鷹の類にて肉食鳥なりと故に全身悪臭氣あり。

〔古人〕古靈の神讃禪師なり

【評】 若し雲門の語を識得せば、便ち雪竇爲人の處を見ん。他雲門の衆に示す、後面の兩句に向て、便ち汝が爲めに、箇の注脚を下して曰ふ、看よ看よと。汝便ち瞠眉瞠眼の會を作さば、且得すらくは沒交涉。古人道く、靈光獨り耀いて、逈かに根塵を脫す、體露眞常、文字に拘はらず、心性無染、本自ら圓成す、但だ妄緣を離るれば、即ち如々佛と。若し只だ瞠眉瞠眼の處に向つて坐殺せば、豈に能く根塵を脫得せんや。雪竇道く、看よ看よ、雲門古岸に在りて、釣竿を把るが如くに相似たり、雲又冉々、水又漫々、明月蘆花に映じ、蘆花明月に映ず。正當恁麼の時、且く道へ、是れ何の境界ぞ、若し便ち直下に見得せば、前後只だ是れ一句に相似ん。

〔提撕〕師家が學人を導いて行くこと〔傾湫倒嶽〕水の最も深き處を湫と云ひ、山の最も高き處を嶽と云ふ、即ち傾湫倒嶽は衲

第六十三則　南泉斬猫

垂示曰。意路不到、正好提撕、言詮不及、宜急着眼。若也電轉星飛、便可傾湫倒嶽。衆中莫有辨得底麼。試擧看。

讀方 垂示に曰く、意路不到、正に好し提撕するに、言詮不及、宜しく急に眼を着く可し。若し也た電轉じ星飛ばゞ、傾湫倒嶽すべし。衆中辨得する底有ること莫しや。試みに擧す看よ。

擧。南泉一日、東西兩堂、爭猫兒。（不是今日合閙。也一場漚逗。）南泉見遂提起曰、道得即不斬。（正令當行。十方坐斷。這老漢有定龍蛇手脚。）衆無對。（可惜放過。一隊漆桶、堪作什麼。杜撰禪和如麻似粟。）泉斬猫兒爲兩段。（快哉快哉。若不如此、盡是弄泥團漢。賊過後張弓。已是第二頭。未擧起時好打。）

僧の眞作略、思議言談を泯絶せる狀を形容したる語なり。〔南泉〕馬祖大師の法嗣にして達磨九代の法孫、普願禪師なり。〔兩堂〕僧堂內の東單と西單となりと云ひ、又經藏に東藏と西藏との二ありと云ふ

讀方 擧す。南泉一日、東西の兩堂、猫兒を爭ふ。（是れ今日合閙なるのみにあらず。也た一場の漚逗。）南泉見て遂ひに提起して曰く、道ひ得ば即ち斬らず。（正令當行。十方坐斷。這の老漢、龍蛇を定むるの手脚有り。）衆對無し。（惜しむ可し放過することを。一隊の漆桶、什麼を作すにか堪へん。杜撰の禪和、麻の如く粟に似たり。）泉猫兒を斬つて兩段と爲す。（快なる哉快なる哉。若し此の如くならずんば、盡く是れ泥團を弄するの漢。賊過ぎて後ち弓を張る。已に是れ第二頭。未だ擧起せざる時、好し打つに。）

【評】宗師家、看よ他の一動一靜、一出一入、且く道へ、意旨如何。這の猫兒の話、天下の叢林、商量浩々地。有者は道ふ、提起の處、即ち是と。有底は道ふ、斬處に在りと。且得すらくは都べて沒交涉。他若し提起せざる時、亦匝々地に道理を作し盡さんや、殊

說あり、今は夫等の詮索に用なし。

〔遍逗〕器物の破損して用をなさゞるを云ふ。

〔沒交涉〕或は沒較涉ともあり、意は同じ、相干らざるの義。

〔天外に出頭して見よ〕文字曾句の葛藤を超過して見よと云ふ

に知らず、他の古人、乾坤を定むる底の眼有り、乾坤を定むる底の劍有ることを。汝且らく道へ、畢竟して是れ誰れか猫兒を斬る。只だ南泉提起して、道ひ得ば即ち斬らずと道ふが如きんば、當時忽ち人有りて道ひ得ば、且く道へ、南泉斬るか斬らざるか。所以に道ふ、正令當行、十方坐斷と。天外に出頭して看よ、誰れか是れ箇の中の人、其の實は當時、元と斬らず、此の話亦斬と不斬との處にあらず、此の事軒かに知んぬ、此の如く分明なることを。情塵意見の上に在りて討ねざれ、若し情塵意見の上に向つて討ぬれば、則ち南泉に辜負し去らん。但だ當鋒劍刄上に向つて看よ、是れ有も也た得たり、無も也た得たり。不有不無も也た得たり。所以に古人道く、窮する時は則ち變じ、變ずる時は則ち通ずと。而今の人變通を解せず、只管に語句上に向つて走る。南泉恁麼に提起す、人をして合に甚の

こと。

〔軒〕明なり。

〔杜禪和〕杜は杜撰なり、禪和とは禪僧のこと、杜撰とは昔杜

語をも下し得しむ可からず、只だ人をして自ら薦め、各々自ら用ひ自ら知らしめんことを要す。若し恁麼に會せずんば、卒に摸索不着ならん。雪竇當頭に頌して曰く。

頌 兩堂俱是杜禪和、（親言出二親口一。一句道斷。據レ欵結レ案。）撥二動煙塵一不二奈何一。（看汝作二什麼折合一。現成公案。也有二些子一。）賴得二南泉能擧一レ令、（擧二拂子一曰、一似二這箇一。王老師猶較二些子一。好箇金剛王寶劍、用切レ泥去也。）一刀兩段任二偏頗一。（百雜碎。忽有レ人按二住刀一、看他作二什麼一。不レ可二放過一也。便打。）

讀方 兩堂俱に、是れ杜禪和、（親言は親口より出づ。一句に道斷す。欵に據つて案を結す。）煙塵を撥動して、奈何ともせず。（看よ汝什麼の折合をか作さん。現成公案。也た些子有り。）賴に南泉の、能く令を擧することを得て、（拂子を擧して曰く、一へに這箇に似たり。王

老師、猶ほ些子に較れり。好箇の金剛王寶劍、用ひて泥を切り去る。）一刀兩段、偏頗に任す。（百雜碎。忽ちに人有りて、刀を按住せば、看よ他什麼をか作さん。放過すべからず。便ち打つ。）

【評】兩堂倶に、是れ杜禪和、雪竇句下に向つて死せず、亦驢前馬後を認めず。撥轉の處有りて便ち道ふ、煙塵を撥動して、奈何ともせず。雪竇南泉と、手を把りて共に行く、一句に說き了れり。兩堂の首座、歇頭の處を沒し、到る處に只管に煙塵を撥動して、奈何ともすることを得ず。頼に南泉、他の與めに這の公案を斷じて、收得淨盡することを得たり。他奈何せん、前村に搆らず、後店に迯らざることを。所以に道ふ、頼に南泉の、能く令を擧することを得て、一刀兩段、偏頗に任すと。直下に一刀兩段す、更に偏頗あることを管せず、且く道へ、南泉什麼の令にか據る。

默と云ふ、人あり、頻りに多くの詩を作りしが、少しも法にも律にも合はぬので、人多く不合格なる詩文を稱して杜撰と云うたと云ふ。〔前村に搆らず云々〕兩頭共に失却の義。

第六十四則　趙州草鞋

擧。南泉復擧二前話一、問二趙州一。（也須二是同心同意一始得。同道者方知。）州便脫二草鞋一、於二頭上一戴出。（不レ免二拖泥帶水一。）南泉曰、子若在、恰救二得猫兒一。（唱拍相隨。知音者少。將レ錯就レ錯。）

【讀方】擧す。南泉復前話を擧して、趙州に問ふ。（也た須らく是れ同心同意にして、始めて得べし。同道の者方さに知る。）州便ち草鞋を脫し、頭上に於いて戴いて出づ。（拖泥帶水を免れず。）南泉曰く、子若し在らば、恰も猫兒を救ひ得たらん。（唱拍相隨ふ。知音の者少れなり、錯を以て錯に就く。）

【評】趙州は乃ち南泉の的子なり、頭を道へば尾を會す、擧着すれ

ば便ち落處を知る。南泉晩間に、復前話を擧して、趙州に問ふ、州は是れ老作家、便ち草鞋を脫し、頭上に於いて戴いて出づ。泉曰く、子若し在らば、却つて猫兒を救ひ得んと、且く道へ、眞箇に恁麼か不恁麼か。南泉曰く、道ひ得ば即ち斬らずと、擊石火の如く、閃電光に似たり。趙州便ち草鞋を脫して、頭上に於いて戴いて出づ、他活句に參じて、死句に參ぜず、日々新たに、時々新たなり。千聖も一絲毫を移易することを得ず、須らく是れ自己の家珍を運出して、方に他の全機大用を見るべし。他道ふ、我れ法王と爲つて、法に於て自在なりと。人多く錯つて會して道ふ、趙州權りに草鞋を將ちて、猫兒と作すと。有る者は道ふ、他の道ひ得ば即ち斬らずと云はんを待つて、便ち草鞋を戴いて出で去らん、是れ汝猫兒を斬る、我が事に干からずと。且得すらくは没交涉、只だ是れ精魂を弄す。

殊に知らず、古人の意、天の普く蓋ふが如く、地の普く擎ぐるに似ることを。他の父子相投じ、機鋒相合ふ、那箇頭めを擧すれば、他便ち尾りを會す。如今の學者、古人の轉處を識らず、空しく意路上に去つて卜度す、若し見ることを要せば、他の南泉趙州の轉處に去つて、便ち見ば好し。

頌。公案圓來、問趙州。（言猶在耳。不消更斬。）長安城裏、任閑遊。（得恁麼快活。得恁麼自在。信手拈來草。不可不教汝恁麼去也。）草鞋頭戴、無人會。（也有一箇半箇。別是一家風。明頭也合。暗頭也合。）歸到家山、即便休。（脚跟下好與三十棒。且道、過在什麼處。只爲汝無風起浪。彼此放下。只恐不恁麼。恁麼也太奇。）

〔那箇云々〕種電鈔には那箇（南泉）云々他（趙州）と二師の名を挿めり。〔頭尾〕は始終に同じ。

讀方 公案圓にし來つて、趙州に問ふ、（言猶ほ耳に在り。更に

（喪車背後云々）死人に藥を飲ませても何の効があるものかと、人を罵るの語なり。

斬ることを消せず。喪車背後に藥袋を懸く。）長安城裏、閑遊に任す。（恁麼に快活なることを得たり。恁麼に自在なることを得たり。手に信せて草を拈じ來る。汝をして恁麼にし去らしめずんばあるべからず。）草鞋頭に戴いて、人の會する無し、（也た一箇半箇有り。別に是れ一家風。明頭も也た合し、暗頭も也た合す。）歸つて家山に到り、即便ち休す。（脚跟下好し三十棒を與ふるに。且く道へ、過什麼の處にか在る。只だ汝風無きに浪を起すが爲めなり。彼此放下す只だ恐らくは不恁麼ならんことを、恁麼ならば也太奇。）

【評】公案圓にし來つて、趙州に問ふ。慶藏主道く、人の案に結するが如くに相似たり。八棒は是れ八棒、十三は是れ十三、已に斷り了れりと。却つて拈じ來つて趙州に問ふ、州は是れ他の屋裏の人、南泉の意旨を會す、他は是れ透徹底の人、磕着磕着、便ち轉ず、本分の作家の眼腦を具す、纔かに擧着するを聞いて、剔起して便ち行く。雪竇道く、長安城裏、閑遊に任すと、還逗少なからず。古人道く、長安樂しと雖も、是れ久居するにあらず。又曰く、長安甚だ鬧し、我が國晏然と。也た須らく是れ機宜を識り、休咎を別ちて、始めて得べし。草鞋頭に戴く、人の會する無し、草鞋を戴く處、這の些子、許多の事無しと雖ども、所以に道ふ、唯だ我れ能く知り、唯だ我れ能く證すと。方に南泉、趙州、雪竇、同得同用の處を見得せん。且く道へ、而今作麼生か會せん、歸つて家山に到つて、即便ち休す、什麼の處か是れ家山。他若し會せずんば、必らず恁麼に道はず、他既に會せば、且く道へ、家山什麼の處にか在る。便ち打つ。

第六十五則　外道問佛

垂示曰。無相而形、充十虛而方廣。無心而應、徧刹海而不煩。擧一明三、目機銖兩、直得棒如雨點、喝似雷奔、也未當得向上人行履在。且道、作麼生是向上人事。試擧。

讀方　垂示に曰く。無相にして形はれ、十虛に充ちて方廣たり、無心にして應ず、刹海に徧うして煩からず。擧一明三、目機銖兩、直に得たり棒雨點の如く、喝雷奔に似るも、也た未だ向上の人の行履に當得せざること在り。且く道へ、作麼生か是れ向上の人の事。試みに擧せん。

擧。外道問佛、不問有言、不問無言。 雖然如是、屋裏人也有些子香氣。双劍倚空飛。賴是不問。

世尊良久。 莫謗世尊。其聲如雷。坐者立者、皆動他不得。

外道讚嘆曰、世尊大慈大悲、開我迷雲、令我得入。 伶俐漢、一撥便轉。盤裏明珠。

外道去後、阿難問佛、外道有何所證、而言得入。 不妨令人疑着。也要大家知。鋼鑄着生鐵。

佛曰、如世良馬見鞭影而行。 且道喚什麼作鞭影。打一拂子。棒頭有眼明如日。要識眞金火裏看。拾得口喫飯。

〔十虛〕十方虛空の略なり。〔刹海〕刹とは世界のこと、卽ち刹海とは、十方虛空に無量無邊の多くの世界あることを、大海に多くの島のあるに譬へて云ふ

〔然かも是の云く云々〕一本には、「然も是れ屋裏の人ならず

讀方　擧す。外道佛に問ふ、有言を問はず、無言を問はず。（然も是の如くなりと雖ども、屋裏の人也た些子の香氣有り。双劍空に倚りて飛ぶ。賴に是れ問はず。）世尊良久。（世尊を謗すること莫れ。其の聲雷の如し。坐者立者、皆他を動ずること得ず。）外道讚嘆して曰

と雖も」に作る。
〔阿難〕釋尊の從弟にして、弟子となり、三十年間常隨昵近し、日々の說法を暗記せりと云ふ、佛滅後迦葉尊者に就て悟入す。
〔鋼鑄云々〕鋼鑄とは鑄物師が鍋釜等の穴を塞ぐに鑄

く、世尊大慈大悲、我が迷雲を開いて、我をして得入せしむ。（伶俐の漢、一撥すれば便ち轉ず。盤裏の明珠。）外道去つて後、阿難佛に問ふ、外道何の所證有つてか、而も得入と言ふ。（妨げず人をして疑着せしむることを。也た大家知らんことを要す。鋼鑄生鐵を着く。）佛曰く、世の良馬の鞭影を見て行くが如し。（且く道へ、什麽を喚んでか鞭影と作す。打つこと一拂子。棒頭に眼有り、明かなること日の如し。眞金を識らんと要せば、火裏に見よ。口を拾得して飯を喫せよ。）

【評】此の事若し言句上に在らば、三乘十二分敎、豈に是れ言句無けんや。或は無言便ち是と道はん、又何ぞ祖師西來を消して、什麽をか作さん。只だ從上來許多の公案の如きは、畢竟如何か其の下落を見ん。這の一則の公案、話會する者少からず、有る底は喚んで

掛けをなすことである、而して鑄掛けには鐵を著立ててせざるべからず、然るに生鐵を着くとは即ち役に立たぬこと。
〔天衣〕天衣の懷義、雪竇和尙の法嗣なり。

良久と作し、有る底は喚んで據坐と作し、有る底は喚んで默然不對と作す、且喜すらくは沒交涉、幾ぞ曾て摸索し得着け來らん。此の事其れ實に言句上に在らず、亦言句の中を離れず、若し稍々擬議有れば、則ち千里萬里にし去らん。看よ他の外道省悟の後、方に知んぬ亦此に在らず、亦彼に在らず、亦是に在らず、亦不是に在らず。且く道へ、是れ箇の什麽ぞ。天衣の懷和尙頌して曰く、維摩默せず良久せず、據坐商量、過咎を成す、吹毛匣裏、冷光寒し、外道天魔、皆手を拱す。百丈の常和尙、法眼に參ず、眼此の話を看しむ。法眼一日問ふ、汝什麽の因緣をか看る。常曰く、外道問佛の話。眼曰く、汝試みに擧せよ看ん。常口を開かんと擬す。眼曰く、住みね住みね、儞良久の處に向つて會せんと擬するや。常言下に於て、忽然として大悟す。後に衆に示して曰く、百丈に三訣

〔翠巖〕可眞禪師なり、慈明の法嗣。〔四維陀〕維陀は此に智論と云ふ、婆羅門の經典なり、或は吠陀に作る、即ち一に利倶吠陀、二に差阿磨吠陀、三に夜什嚧吠陀、四に阿達婆吠陀なり。

有り、喫茶、珍重、歇。擬議して更に思量せば、知んぬ君が猶ほ徹せざることを。翠巖の眞點胸し拈じて曰く、六合九有、青黃赤白、一一交羅すと。外道四維陀典の論を會して、自ら云ふ、我れは是れ一切智人と。在處に人の論議を索む。他問端を致して、釋迦老子の舌頭を坐斷せんと要す。世尊纖毫の氣力を費さず、他便ち省し去る。讃嘆して曰く、世尊大慈大悲、我が迷雲を開いて、我をして得入せしむと。且く道へ、作麼生か是れ大慈大悲の處、世尊の隻眼、三世に通ず、外道の双眸五天を貫くと。潙山の眞如拈じて曰く、外道懷に至寶を藏す、世尊親しく爲めに高く提ぐ、森羅顯現し、萬象歷然たり。且く畢竟して、外道箇の什麼をか悟る。狗を趁うて墻に逼るが如し。極則無路の處に至つて、他須らく回り來つて、活鱍々地なるべし。若し計較是非、一時に放下して、情盡き見除か

〔世尊の隻眼云々〕此の二句は道吾眞禪師の當則の拈語なり

ば、自然に徹底分明ならん。外道去つて後、阿難佛に問うて曰く、外道何の所證有りてか、而も得入と言ふ。佛曰く、世の良馬の鞭影を見て行くが如しと。後來諸方便ち道ふ、又風に別調の中に吹かる。又曰く、龍頭蛇尾、什麼の處か是れ世尊の鞭影、什麼の處か是れ鞭影を見る處。雪竇曰く、邪正分たず、過鞭影に由ると。眞如曰く、阿難金鐘再び擊つ、四衆共に聞く、然かも是の如くなりと雖ども、大いに二龍の珠を爭ふに似たり、他の智者の威獰を長ずと。雪竇の頌に曰く、

頌。機輪曾未轉、在這裏。果然不動一絲毫。轉必兩頭走。不落有、必落無。不東則西。左眼半斤右眼八兩。明鏡忽臨臺、還見釋迦老子麼。一撥便轉。破也破也、敗也敗也。當下分妍醜。盡大地是箇解脫門。好與三十棒。還見釋迦老子麼。妍醜

〔機輪〕人人箇々具有の本心本性が縁に隨ひ感に赴いて自由自在にして無碍に活動

分兮、迷雲開。放一線道。許汝有箇轉身處。爭奈只是箇外道。慈門何處、我有拄杖
生塵埃。偏界不曾藏。退後退後。達磨來也。因思、良馬窺鞭影、
子、不消汝與我。且道、什麼處
是鞭處、什麼處是眞馬處。千里追風、喚得回。騎佛殿出
三門去也。轉身即錯。
放過即不可。便打。喚得回、鳴指三下。前不搆村、後不迭店。拗折
拄杖子、向什麼處去。雪
竇雷聲甚大。雨點全無。

讀方　機輪曾て未だ轉せず、（這裏に在り。果然として一絲毫を動せず。）轉ずれば必ず兩頭に走る。（有に落ちざれば必らず無に落つ。東せざれば則ち西す。左眼半斤、右眼八兩。）明鏡忽ち臺に臨む、（還つて釋迦老子を見るや。一撥すれば便ち轉ず。破れり破れり、敗れり敗れり。）當下に妍醜を分つ。（盡大地是れ箇の解脫門。好し三十

することなり。

〔因て思ふ〕一本には因て憶ふとあり思ふは内外其の筋に違はぬやうに心をつけて工夫すること、憶ふは心に記憶してあることをおもひ起すことなり、

棒を與ふるに。還つて釋迦老子を見るや。）妍醜分かる、迷雲開く、（一線道を放つ。汝に許す箇の轉身の處有ることを。爭何せん只だ是れ箇の外道なることを。）慈門何れの處にか、塵埃を生ぜん。（偏界曾て藏さず。退後退後。達磨來れり。）因つて思ふ、良馬鞭影を窺ふことを、（我れに拄杖子有り、汝が我れに與ふることを消せず。且く道へ、什麼の處か是れ鞭影の處、什麼の處が是れ良馬の處。）千里追風、喚び得て回す。（佛殿に騎つて三門を出で去る。身を轉ぜば即ち錯る。放過せば即ち不可。便ち打つ。）喚び得て回らば、指を鳴らすこと三下せん。（前は村に搆らず、後は店に迭らず。拄杖子を拗折して、什麼の處にか向ひ去る。雪竇雷聲甚だ大にして、雨點全く無し。）

【評】　機輪曾て未だ轉ぜず、轉ずれば必ず兩頭に走る。機は乃ち千

茲にては憶ふの方可ならん〔古人道〕一本に雪竇道とあり。〔龍龍子を生ず〕漢文には龍生龍子とあり、故に龍生の龍子と讀むの說もあり

聖の靈機、輪は是れ從本已來諸人の命脈なり。見ずや古人道く、千聖の靈機、親しみ易からず、龍、龍子を生ず、因循すること莫れ、趙州奪ひ得たり、連城の璧、秦王相如、總て身を喪すと。外道却つて是れ把得住し、作得主して、未だ嘗て動着せず。何が故ぞ他道ふ有言を問はず、無言を問はずと、豈に是れ全機の處にあらずや。世尊風を看て帆を使ひ、病に應じて藥を與ふることを會す、所以に良久、全機提起す。外道全體會し去つて、機輪便ち阿轆々地に轉ず。亦轉じて有に向はず、亦轉じて無に向はず、得失に落ちず、凡聖に拘はらず、二邊一時に坐斷す。世尊纔かに良久、他便ち禮拜す。如今の人、多く無に落在す、然らずんば有に落在す、只管に有無の處に在りて、兩頭に走る。雪竇道く、明鏡忽ち臺に臨む、當下に姸醜を分つ。這箇曾て動着せず、只だ箇の良久を消して、明鏡の臺に臨むが如くに相似たり、萬象其の形質を逃るゝこと能はず。外道曰く、世尊大慈大悲、我が迷雲を開き、我をして得入せしむ。且く道へ、是れ什麼の處か是れ外道の入處。這裏に到りて、須らく是れ箇々自ら參じ、自ら究して、自ら悟り自ら會して、始めて得べし。便ち一切處に於いて、行住坐臥、高低を問はず、一時に現成せん。更に一絲毫を移易せず、纔かに計較を作して、一絲毫の道理有らば、即ち人を礙塞殺し、更に人作の分無けん。後面に世尊大慈大悲、我が迷雲を開いて、我をして得入せしむることを頌して、當下に忽然として姸醜を分つ。姸醜分かれ、迷雲開く、慈門何れの處にか、塵埃を生ぜん。盡大地是れ世尊、大慈大悲の門戸なり、汝若し透得せば、一揑を消せず、此れ亦是れ放開底の門戸あり。見ずや世尊三七日の中に於いて、是の如きの事を思惟す、我れ寧ろ說法せずして、

疾かに涅槃に入らんと。因つて思ふ、良馬の鞭を窺ふことを、千里追風、喚び得て回す。追風の馬、鞭影を見て、便ち千里を過ぐ、回さしむれば即ち回る。雪竇の意、他を賞して道ふ。若し俊流を得ば方さに一撥すれば便ち轉じ、一喚すれば便ち回るべし。若し喚び得て回らば、便ち指を鳴すこと三下せんと。且く道へ、是れ點破か、是れ撒沙か。

第六十六則　巖頭黃巢收劍

垂示曰。當機覿面、提陷虎之機。正按傍提、布擒賊之略。明合暗合、雙放雙收。解弄死蛇、還他作者。

〔正按傍提〕正按とは正面から向つて行くこと、傍提とは其反對で横合から突き込むこと。

讀方 垂示に曰く。當機覿面、陷虎の機を提げ。正按傍提、擒賊の略を布く。明合暗合、雙放雙收。死蛇を弄することを解するは、他の作者に還す。

舉。巖頭問僧、什麼處來。未開口時、納敗缺了也。穿過髑髏。要知來處也不難。僧曰、西京來。果然。一箇小賊。頭曰、黃巢過後、還收得劍麼。平生不曾做草賊。不懼頭落。便恁麼問。好大膽。僧曰、收得。敗也。未識轉身處。茅廣漢如麻似粟。巖頭引頸、近前曰、囫。也須識機宜始得。陷虎之機。是什麼心行。僧曰、師頭落也。只見錐頭利、不見鑿頭方。識甚好惡。着也。巖頭呵々大笑。盡天下衲僧、不奈何。歎殺天下人。尋這老漢頭落處不得。僧後到雪峰。依前顢頇懞懂。這僧往々十分納敗缺去。峰問、什麼處來。不可不說來處也。要勘過。僧曰、巖頭來。果然納敗缺。峰曰、有何言句。舉得不免喫棒。僧舉前

〔巖頭〕雪峯の法兄にして、德山宣鑑禪師の弟子、全豁禪師のことなり、鄂州巖頭に住せられしを以て巖頭と云ふ。〔黃巢〕曹州に黃巢と稱し、鹽を賣る人あり、性任俠な

話。便好趕出。雪峰打三十棒趕出。雖然斬釘截鐵、因甚只打三十棒。拄杖子也未到折在。且未是本分、何故朝打三千、暮打八百。若不是同參、爭辨端的。雖然如是、且道、雪峰巖頭、落在什麼處。

讀方　擧す。巖頭僧に問ふ、什麼の處より來る。(未だ口を開かざる時、敗缺を納れ了れり、髑髏を穿過す。來處を知らんと要するとも、也た難からず。)僧曰く、西京より來る。(果然。一箇の小賊。)頭曰く黃巢過ぎて後、還つて劍を收得するや。(平生曾て草賊と做らず。頭の落つることを懼れず、便ち恁麼に問ふ。好大膽。)僧曰く、收得す。(敗れり。未だ轉身の處を識らず。茅廣の漢、麻の如く粟に似たり。)巖頭頸を引いて、近前して曰く、囮。(也た須らく機宜を識つて、始めて得べし。陷虎の機。是れ什麼の心行ぞ。)僧曰く、師の頭落ちぬ。(只だ錐頭の利を見て、鑿頭の方を見ず。甚の好惡をか識らん。

りしを以て遂に土匪の頭となり、玉仙芝と呼ぶ友と黨を結び處々徘徊して諸方を荒らす、一時途に一劍を拾ふ、見れば「天賜黃巢」との銘あり、愈々自信の力固く、衝天大將軍と名乘り、長安を陷れ自

着せり。)巖頭呵々大笑す。(盡天下の衲僧、奈何ともせず。天下の人を欺殺す。這の老漢の頭の落處を尋ぬるに得ず。)僧後に雪峰に到る。(依前として顢預懵憧。這の僧往々、十分に敗缺を納れ去る。)峰問ふ、什麼の處よりか來る。(來處を說かずんばある可からず。也た勘過せんことを要す。)僧曰く、巖頭より來る。(果然として敗缺を納る。)峰曰く、何の言句か有りし。(擧し得て、免れず棒を喫することを。)僧前話を擧す。(便ち好し趕ひ出すに。)雪峰打つこと三十棒して趕ひ出す。(然も斬釘截鐵すと雖も、甚に因てか只だ打つと三十棒なる。拄杖子也た未だ折るに到らざる在り。且つ未だ是れ本分にあらず、何故ぞ、朝打三千、暮打八百。若し是れ同參にあらずんば、爭でか端的を辨ぜん。然も是の如くなりと雖も、且く道へ、雪峰巖頭、什麼の處にか落在する。)

ら皐帝と稱し、國號を大齊と名け、年號を大統と稱す、されど運長からず、李克用に破られて滅亡せり、今此の巖頭の問意は西京は昔黄巢が一旦占領したる長安なるが故に、黄巢亡びたりとも天賜の劔は

【評】大凡そ囊を挑げ鉢を負うて、撥草瞻風せんには、也た須く是れ行脚の眼を具して、始めて得べし。這の僧、眼流星に似たるも也た巖頭に勘破し了られて、一串に穿却せらる。當時若し箇の漢ならば、或は殺或は活、擧着せば便ち用ひん。這の僧迓郎當にして、却つて道ふ、收得すと。恁麼の行脚に似ば、閻羅老子、汝に問うて飯錢を索むること在らん。知んぬ他、多少の草鞋を踏破して、直に雪峰に到る。當時若し些子の眼筋有りて、便ち瞥地にして去ることを解せば、豈に快ならざらんや。這箇の因緣、節角諸訛の處有り。此の事然かも得失無しと雖ども、得失甚だ大なり。然も揀擇無しと雖も、這裏に到りて、却つて眼を具して揀擇せんことを要す。看よ他の龍牙、行脚の時、箇の問端を致して、德山に問ふ、學人鏌鎁の劒に仗つて、師の頭を取らんと擬する時如何。德山頭を引いて、

遺れるならんとの意なり、而して巖頭の云ふ一劔とは果して黄巢の劔か、否な人々分上固有の一劔なり。〔錐頭の利云々〕向ふ見ずと云ふ俗語なり。〔行脚の眼〕諸方の師家の深淺を辨じて參ずるを云ふ

近前して曰く、囮。龍牙曰く、師の頭落ちぬ。山便ち方丈に歸る。牙後に洞山に擧似す。洞山曰く、德山當時什麼とか道ひし。牙曰く、他無語。洞山曰く、他語無きことは則ち且く置く、我れに德山落つる底の頭を借し來れ看ん。牙言下に於いて大悟す。遂に香を焚いて、遙かに德山を望んで、禮拜懺悔す。僧有り傳へて德山の處に到る、德山曰く、洞山老漢好惡を知らず、這の漢死し來ること多少の時にして、救ひ得るにも什麼の用處か有らん、這箇の公案、龍牙底と一般なり。德山方丈に歸へる、則ち暗中最も妙なり。巖頭大に笑ふ、他笑中に毒有り、若し人有りて辨得せば、天下に橫行せん。這の僧當時、若し辨得出せば、千古の下、撿責を免れ得ん、巖頭門下に於て、已に是れ一場の蹉過。看よ他の雪峰老人、是れ同參にして、便ち落處を知る、他の與めに說破せず、只だ打つこと三十棒して、院

〔邋郎當〕一本には碍郎當とあり、物事を牽強附會して是とするの漢を云ふ。

〔鹽平の

を趕出して、以て光前絶後なるべし。這箇は是れ作家、衲僧の鼻孔を拈じて、人の爲めにする底の手段なり、更に他の與めに、之れを若何ともせず、他をして自ら悟り去らしむ。本分の宗師、人の爲めにするに、有る時は籠罩して、伊れをして出頭せしめず、有る時は放つて、死郎當地ならしむ、却つて須く出身の處有る可し。大少大の巖頭、雪峰、倒まに箇の喫飯の禪和に勘破せらる。只だ巖頭、黃巢過ぎて後、還つて劍を收得するやと道ふが如きんば、諸人且く道へ、這裏合に什麼の語を下し得てか、他の笑を免れ得ん。又雪峰の棒を行して趕出することを免れ得ん。這裏の誵訛、若し曾て親しく證し、親しく悟らずんば、縱使ひ口頭快利にして、究竟に到るも、生死を透脫することを得ず。山僧尋常、人をして這の機關の轉處を覷しむ、若し擬議すれば、則ち遠くして之れ遠し。見ずや投子、鹽平

僧〕鹽平は延平の誤りなりと、延平は福建の延平府なり、僧は疎山匡仁の法嗣にして守證禪師なり

〔孟八郎〕

の僧に問うて曰く、黃巢過ぎて後、劍を收得するや。僧手を以て地を指す。投子曰く、三十年馬騎を弄す、今日却つて驢子に撲せらると。看よ這の僧、也た妨げず是れ箇の作家なることを。收得すと道はず、也た收不得と道はず、西京の僧と、海を隔つるが如くなること在り。眞如拈じて曰く、他の古人、一箇は頭を做し、一箇は尾を做すこと定れり。雪竇の頌に曰く。

頌。黃巢過後、曾收レ劍。孟八郎漢、有二什麼用處一。只是錫刀子一口。大笑還、應二作者知一。一子親得。能有二幾箇一。不二是渠儂一、爭得二自由一。三十山藤、且輕恕、同條生、同條死。朝三千、暮八百。東家人死、西家人助レ哀。却與救得活。得二便宜一、是落二便宜一。據レ款結レ案。悔不レ愼二當初一。也有二些子一。

讀方　黃巢過ぎて後、曾て劍を收む、〔孟八郎の漢、什麼の用處か

亂暴者のこと或は孟八は忘八なり、仁義禮智孝悌忠信又は孝弟忠信禮儀廉恥の八を忘るゝ漢なりと云へども牽強附會なるが如し。〔山藤〕山から切り出した藤の拄杖と云ふこと

有らん。只だ是れ錫刀子の一口。）大笑は還つて、應に作者知るべし。（一子親しく得たり、能く幾箇か有る。是れ渠儂にあらずんば、爭でか自由を得ん。）三十山藤、且く輕恕す、（同條に生じ、同條に死す。朝三千、暮八百。東家の人死すれば、西家の人哀しみを助く。却つて與に救ひ得て活せしむ。）便宜を得るは、是れ便宜に落つ。（欵に據つて案を結す。悔ゆらくは當初を愼しまざることを。也た些子有り。）

【評】黄巢過ぎて後、曾て劒を收む、大笑は還つて、應に作者知るべし、雪竇便ち這の僧と、巖頭大笑の處とを頌す。這箇の些子、天下の人摸索不着、且く道へ、他箇の什麼をか笑ふ。須らく是れ作家にして、方に這の笑中に權有り實有り、照有り用有り、殺有り活有ることを知るべし。三十山藤、且く輕恕す。這の僧後に、雪峰の面前に到る、這の僧舊に依つて莽鹵、峰便ち令に據つて行じて、打つこと三十棒して、趕ひ出すことを頌す。且く道へ、什麼としてか却つて此の如くなる、汝情を盡して、此の話を會せんと要すや。便宜を得るは、是れ便宜に落つ。

第六十七則　傅大士講經

舉。梁武帝請傅大士講金剛經。（達磨兄弟來也。魚行酒肆即不無、衲僧門下即不可。這老漢、老々大々作這般去就。）大士便於座上、揮案一下、便下座。（直得火星迸散。似則似、是則未是。不煩打葛藤。）武帝愕然。（兩回三度被人瞞。也教他摸索不着。）誌公問、陛下還會麼。（黨理不黨情。肘膊不向外。也好與三十棒。）帝曰、不會。（可惜許。）誌公曰、大士講經竟。

也須下逐二出國一始得。當上時和二誌公一一時與趕二出國一、始是作家。兩箇漢、同坑無二異土一。

【讀方】擧す。梁の武帝、傅大士を請じて、金剛經を講ぜしむ。(達磨の兄弟來れり。魚行酒肆には、即ち無にあらず、衲僧門下は、即ち不可。這の老漢、老々大々として、這般の去就を作す。)大士便ち座上に於いて、案を揮ふこと一下して、便ち下座す。(直に得たり火星迸散することを。似ることは則ち似たり、是なることは則ち未だ是ならず。葛藤を打することを煩はさず。)武帝愕然たり。(兩回三度、人に瞞せらる。也た他をして摸索不着ならしむ。)誌公問ふ、陛下還つて會すや。(理に黨して、情に黨せず。肘膊外に向はず。也た好し三十棒を與ふるに。)帝曰く、不會。(可惜許。)誌公曰く、大士講經し竟んぬ。(也た須らく國を逐出して、始めて得べし。當時誌公に和して、一時に與に國を趕ひ出さば、始めて是れ作家。兩箇の漢、同坑に異土無し。)

【評】梁の高祖武帝は、蕭氏、諱は衍、字は叔達、功業を立てゝ、以て齊の禪を受くるに至る。即位の後、別に五經を註して講議す。黃老を奉ずること甚だ篤し。而も性至孝なり。一日出世の法を得て、以て劬勞に報いんことを思ふ。是に於て道を捨てゝ佛に事へ、廼ち菩薩戒を受く。婁約法師の處に於て、佛袈裟を披して、自ら放光般若經を講じて、以て父母に報ず。時に誌公大士、異を顯はし衆を惑はすを以て、獄中に繫がる。誌公乃ち身を分つて、城邑に遊化す。帝一日、之れを知りて感悟し、極めて之れを推重す。誌公數々遮護を行うて、隱顯測るべからざるに逮ぶ。時に婺州に大士と云ふ者有り、雲黃山に居る、手から二樹を栽ゑて、之れを双林と

〔傅大士〕婺州の人、名を翕と云ひ、齊の建武四年に生れて、劉氏妙光なるものを娶り、普建、普成の二子を擧ぐ。後ち雲黃山に二樹を栽ゑ、双林と稱し、自ら善慧大士と號して、大乘佛法中禪宗の宗風を達磨と同時に擧揚せり、遺著に「傅大士語錄」「心王銘」等ありて世に行はる。

〔火星迸散〕寸隙のなき處を云ふ。

〔遮護〕自身を掩遮して自身

を擁護し以て人をして知らしめざるを云ふ、天柱禪師解して曰く、武帝の爲めに災事を遮り、好事を守護せりと、

謂ひ、自ら當來の善慧大士と稱す。一日書を修して、弟子に命じて、表を上つて帝に聞す。時に朝廷其の君臣の禮無きを以て受けず。傅大士金陵の城中に入つて、魚を賣らんとす。時に武帝誌公を請して、金剛經を講ぜしめんとすること有り。誌公曰く、貧道講ずること能はず。市中に傅大士と云ふ者あり、能く此の經を講ずと。帝詔を下し、之れを召して禁中に入る。傅大士既に至つて、講座の上に於て、案を揮ふこと一下して、便ち下座す。當時便ち爲に推轉せば、一場の狼藉を見ることを免れん。還つて誌公に、陛下還つて會すやと云はれて、帝曰く不會。誌公曰く、大士講經し竟んぬと。是れ一人は頭めを作し、一人は尾りを作す。誌公恁麽に道ふ、還つて夢にだも傅大士を見んや、一等に是れ精魂を弄す、這箇中に就いて奇特なり。是れ死蛇なりと雖も、弄することを解すれば也た活す、既に是れ講經、甚としてか却て大に分つて二と爲さゞる。一へに尋常座主の道ふが如くんば、金剛の體は堅固にして、物々壞すること能はず、利用なるが故に、能く萬物を摧くと。此の如く講說するを、方に喚んで講經と作す。然も是の如くなりと雖も、諸人殊に知らず、傅大士只だ向上の關捩子を拈じて、略々鋒鋩を露はして人をして落處を知らしむ。直截して汝が爲めに壁立萬仞なることを。恰かも好し、誌公に好惡を識らず、却つて大士講經し竟んぬと云はる。正に是れ好心、好報を得ず。美酒一盞、却つて誌公に、水を以て攙過せらるゝが如く、一釜の羹、誌公に一顆の鼠糞を將つて、汚し了らるゝが如し。且く道へ、既に是れ講經せずんば、畢竟喚んで什麽とか作さん。

頌。不向雙林寄此身、只爲他把不住。却於梁土、惹埃塵。囊裏豈可藏錐。若不入草、爭見端的。不風流處、也風流。當時不得誌公老、作賊不須本。有牽伴底癩兒。也是栖々、去國人。正好一狀領過。便打。

讀方　雙林に向つて、此の身を寄せず、（只だ他の把不住なるが爲めなり。　囊裏豈に錐を藏すべけんや。）却つて梁土に於て、塵埃を惹く。（若し草に入らずんば、爭でか端的を見ん。風流ならざる處、也た風流。）當時誌公老を得ずんば、（賊と作つて本を須ひず。伴を牽く底の癩兒有り。）也た是れ栖々として、國を去る人ならん。（正に好し一狀に領過するに。便ち打つ。）

評　雙林に向つて、此の身を寄せず、却つて梁土に、埃塵を惹く、傅大士、沒板齒の老漢と、一般に相逢ふ。達磨初め金陵に到つて、武帝に見ゆ。帝問ふ、如何なるか是れ聖諦第一義。磨曰く、廓然無聖。帝曰く、朕に對する者は誰ぞ。磨曰く、不識。帝契はず。遂に江を渡り魏に至る。武帝擧して誌公に問ふ。公曰く、陛下還つて此の人を識るや否や。帝曰く、不識。誌公曰く、此れは是れ觀音大士、佛心印を傳ふ。帝悔いて、遂に使を遣はし、去つて取らんとす。誌公曰く、道ふこと莫れ、陛下使を發し、去つて取らんと、闔國人去るも、他亦回へらずと。所以に雪竇道く、當時誌公老を得ずんば、也た是れ栖々として、國を去る人ならんと。當時若し誌公、傅大士の爲めに、氣を出すにあらずんば、也た須らく是れ國を趕出し去るべし。誌公既に饒舌、武帝却つて他に熱瞞一上せらる。雪竇の大意に道く、他、梁土に來つて、講經して案を揮ふことを須ひず。所以に道ふ、何ぞ雙林に向つて此の身を寄せて、喫粥喫飯、分に隨

（趕出し去る）武帝に趕ひ出されたるにあずして、帝契はざる

が故に、是非なく出で下りしなり。

〔即今〕一本に過とあり、大に其意味を異にす、即今ならば、國を提出されて今何處にあるかとの意にして、過とせば提出さるゝ過は何處にあるか、又武帝の不會は誰れの過かと云ふ意、されど今の方可ならんと、天桂師も云へり。

〔垂示曰〕これ資主

つて時を過さずして、却つて梁土に來つて、恁麼に指注して、案を揮ふこと一下して、便ち下座すと。是れ他、埃塵を惹く處なり、既に是れ殊勝を要する時は、則ち目に雲霄を視て、上佛有ることを見ず、下衆生有ることを見ず。若し出世の邊の事を論ぜば、免れず灰頭土面にして、無を將ちて有と作し、有を將ちて無と作し、是を將ちて非と作し、麁を將ちて細と作し、魚行酒肆、橫拈倒用、一切の人をして、此れ箇の事を明らめしめん。若し恁麼に放行せずんば、直に彌勒下生に到るとも、也た一箇半箇も無けん。傅大士既に是れ拖泥帶水、賴ひに是れ知音有り。若し誌公老を得ずんば、幾乎んど國を趕出し了らん。且く道へ、即今什麼の處にか在る。

第六十八則　仰山呵々大笑

垂示曰。掀天關、翻地軸、擒虎兕、辨龍蛇。須是箇活鱍々漢、始得句々相投、機々相應。且從上來、什麼人合恁麼。請擧看。

讀方　垂示に曰く。天關を掀げ、地軸を飜し、虎兕を擒へ、龍蛇を辨ず。須らく是れ箇の活鱍々の漢にして、始めて句々相投じ、機々相應ずることを得べし。且く從上來、什麼人か合に恁麼なるべき。請ふ擧す看よ。

擧。仰山問三聖、汝名什麼。（名實相奪。勾賊破家。）聖曰、慧寂。（坐斷舌頭。攙旗奪鼓。）仰山曰、慧寂是我。（各自守封疆。）聖曰、我名慧然。（鬧市裏奪去。彼此却守本分。）仰山呵々大笑。（可謂是箇時節。錦上鋪花。天下人不知落處。何故土曠人稀、相逢者少。一似巖頭笑、又非巖頭笑。一等是笑、爲什麼却作兩段。具眼

相契ふ處を論ぜるなり。

〔仰山〕潙仰宗の第二祖、勅賜、智通大師、慧寂禪師なり第三十四則參照。〔三聖〕慧然禪師、臨濟下の高足なり、第四十五則參照。法系より見れば、仰山は百丈の孫、三聖は百丈の曾孫なり、年輩亦仰山が長じて居たされど實に難兄難弟の兩人である。〔昂々〕高く顯はるる貌、大丈夫と云ふことなり。〔向北より南方〕河北鎭州より江南を經て閩に至るな

者始定當看。

【讀方】擧す。仰山三聖に問ふ、汝名は什麼ぞ。（名實相奪ふ。勾賊破家。）聖曰く、慧寂。（舌頭を坐斷す。旗を擄き鼓を奪ふ。）仰山曰く、慧寂は是れ我れ。（各自に封疆を守る。）聖曰く、我が名は慧然。（鬧市裏に奪ひ去る。彼此却つて本分を守る。）仰山呵々大笑す。（謂つべし是れ箇の時節と。錦上に花を舖く。天下の人落處を知らず、何が故ぞ、土曠く人稀にして、相逢ふ者少し。一へに巖頭の笑に似て、又巖頭の笑に非ず。一等に是れ笑、什麼と爲てか却つて兩段と作す。具眼の者は始めに定當して看よ。）

【評】三聖は是れ臨濟下の尊宿なり、少より出群の作略を具へて、大機あり大用有り、衆中に在りて、昂々藏々として、名諸方に聞ゆ。後臨濟を辭して、偏く淮海に遊ぶ、到る處の叢林、皆高賓を以て之れを待す。向北より南方に至る、先づ雪峰に造つて便ち問ふ、網を透る金鱗、未審し何を以てか食と爲んと。峰曰く、汝が網を出で來らんを待つて、即ち汝に向つて道はん。聖道く、一千五百人の善知識、話頭だも也た識らず。峰曰く、老僧住持事繁し。峰、寺莊に往く、路に獼猴に逢ふ、乃ち曰く、這の獼猴、各々一面の古鏡を佩ぶ。聖曰く、歷劫名無し、何を以てか彰して古鏡と爲す。峰曰く、瑕生ぜり。聖曰く、一千五百人の善知識、話頭だも也た識らず。峯曰く、罪過、老僧住持事繁しと。後に仰山に至る、山極めて其の俊利なることを愛して、之れを明窓下に待す。一日官人有り、來りて仰山に參ず。山問ふ、官何の位にか居する。曰く推官。山拂子を竪起して曰く、還つて這箇を推し得てんや。官人無語。衆人下語す

り。〔罪過〕一本には此の二字なし。〔推官〕善を進め惡を退くる官、即ち犯罪の事を窮詰するの官屬なり。

〔人を驗するに云々〕一本には「知らんことを得」との二字なし。

るに、倶に仰山の意に契はず。時に三聖病んで延壽堂に在り、仰山侍者をして、此の語を持して之れを問はしむ。聖曰く、和尚事有りやと。再び侍者をして、未審し什麼の事か有ると問はしむ。聖曰く、再犯容さず。仰山深く之れを肯ふ。百丈當時禪版蒲團を以て黃檗に付し、拄杖拂子を潙山に付す。潙山後に仰山に付す。仰山既に大に三聖を肯ふ。聖一日辭し去る。仰山拄杖拂子を以て、三聖に付せんとす。聖曰く、某甲已に師有り。仰山其の由を詰る。乃ち臨濟の的子なり。只だ仰山 三聖に問ふが如きんば、汝名は什麼と。他其の名を知らざる可からず、何が故ぞ、更に恁麼に問ふ。所以に作家人を驗するに、子細を知ることを得んと要す、只だ等閑に似て問うて曰く、汝名は什麼ぞと。更に道ふに計較無し、何が故ぞ、三聖慧然と云はずして、却つて慧寂と道ふ。看よ他の具眼の漢、自然に同じからざることを。三聖恁麼、又是れ顚するにあらず、一向に旗を攙き鼓を奪ふ、意、仰山の語外に在りて、此の語常情に墮せず、摸索を爲し難し。這般の漢の手段、却つて人を活得す。所以に道ふ、他活句に參じて、死句に參ぜざれと、若し常情に順ぜば、則ち人を歇むることを得ざらん。看よ他の古人、道を念ふこと此の如し、精神を用ひ盡して、始めて能く大悟す。既に悟り了つて用ふる時、還つて未悟の時の人に同じく相似たり、分に隨つて一言半句、常情に落つることを得ず。三聖他の仰山の落處を知つて、便ち他に向つて道ふ、我が名は慧寂と。仰山 三聖を收めんと要す、三聖倒まに仰山を收む。仰山只だ就身打劫を得て道ふ、慧寂は是れ我と。是れ放行の處なり。三聖曰く、我が名は慧然と。亦是れ放行す。所以に雪竇、後面に頌して曰く、雙收雙放、若爲が宗とせん。只

〔若爲〕如何に同じ

だ一句の內に、一時に頌し了る。仰山呵々大笑す。也た權有り實有り、也た照有り用有り、他の八面玲瓏たるが爲めに、所以に用處、大自在を得たり。這箇の笑、巖頭の笑と同じからず、巖頭の笑は、毒藥有り、這箇の笑は、千古萬古、清風凜々地。雪竇の頌に曰く。

頌。雙收雙放、若爲宗、（知他有二幾人一。八面玲瓏。將謂眞箇有二恁麼事一。）騎レ虎由來、要二絕功一。（若不二是頂門上有レ眼、肘臂下有レ符、爭得レ到二這裏一。騎則不レ妨、只恐汝下不レ得。不二是恁麼人一、爭明二恁麼事一。）笑罷不レ知、何處去、（盡四百軍州、覓二恁麼人一、也難レ得。言猶在レ耳。千古萬古有二清風一。）只應二千古、動二悲風一。（如今在二什麼處一。咄。既是大笑、爲二什麼一却動二悲風一。大地黑漫漫。）

讀方　雙收雙放、若爲が宗とせん、（知んぬ他幾人か有る。八面玲瓏。將に謂へり、眞箇恁麼の事有らんと。）虎に騎る由來、絕功を要す。

〔四百軍州〕趙宋の時代に支那の天下を區分して四百軍區に分ち、一軍を一州と定めたるなり。

（若し是れ頂門上に眼有り、肘臂下に符有るにあらずんば、爭でか這裏に到ることを得ん。騎ることは則ち妨げず、只だ恐らくは汝下ることを得ざらんことを。是れ恁麼の人にあらずんば、爭でか恁麼の事を明らめん。）笑ひ罷んで知らず、何の處にか去る、（盡四百軍州、恁麼の人を覓むるに、也た得難し。言猶ほ耳に在り。千古萬古、清風有り。）只だ應に千古、悲風を動かすべし。（如今什麼の處にか在る。咄。既に是れ大に笑ふ。什麼としてか却つて悲風を動かす。大地黑漫々。）

【評】　雙收雙放、若爲が宗とせん、放行して互に賓主と爲る。仰山曰く、汝名は什麼ぞ。聖曰く、我が名は慧寂、是れ雙放なり。仰山曰く、慧寂は是れ我れ。聖曰く、我が名は慧然と、是れ雙收なり。其の實は是れ互換の機、收むる時は則ち大家收め、放つときは則ち大家

〔古人〕首山省念なり。

放つ。雪竇一時に頌し盡し了れり。他の意に道く、若し放收にあらず、若し互換にあらずんば、汝は是れ汝、我れは是れ我れ、都來只だ四箇の字、甚に因つてか却つて裏頭に於て、出沒卷舒する。古人道く、汝若し立たば、我れ便ち坐す、汝若し坐せば、我れ便ち立つ、若し也た同坐同立ならば、二り倶に瞎漢と。此れは是れ雙收雙放、以て宗要と爲すべし。虎に騎る由來、絕功を要す、此の如きの高風、最上の機要有り、騎らんと要せば、便ち騎り、下らんと要せば、便ち下る。虎頭に據ることも亦得たり、虎尾を收むることも亦得たり、三聖、仰山、二り倶に此の風有り。笑ひ罷んで知らず、何の處にか去る、且く道へ、他箇の什麼をか笑ふ。直に得たり清風凛々たることを。什麼としてか末後に却つて道ふ、只だ應に千古、悲風を動ずべしと。也た是れ死して弔せず、一時に汝が爲めに注解し了れり。爭奈せん天下の人、啗啄すれども入らず、落處を知らざることを。縱ひ是れ山僧も、也た落處を知らず、諸人還つて知るや。

〔啗啄〕共に嚙むと云ふ字なり、されば啗啄なき處とは、齒の

第六十九則　南泉一圓相

垂示曰。無啗啄處、祖師心印、狀似鐵牛之機。透荊棘林、衲僧家、如紅爐上一點雪。平地上七穿八穴則且止、不落寅緣、又作麼生。試擧看。

讀方　垂示に曰く。啗啄無き處、祖師の心印、狀鐵牛の機に似たり。荊棘林を透るの衲僧家、紅爐上一點の雪の如し。平地上七穿八穴なることは則ち且く止く、寅緣に落ちざる、又作麼生、試みに擧す看よ。

立て處も無き處にて宇宙の本體に形相なく、不可思議不可說の處を云ふ也。〔夤緣〕夤緣なり、連絡の義にして、色々と複雜なる貌、夤は和訓マツハルにて、纏綿と同じ意味に見ることあり〔南泉〕普願禪師。〔麻谷〕寶徹禪師之れ前に既に出づ。〔歸宗〕馬祖道一禪師の法嗣、達磨九世の法孫、廬山の歸宗寺に住す。〔忠國師〕慧忠國師なり、六祖に嗣法す、唐の肅宗代宗の二皇帝に尊敬せられ古今

舉。南泉歸宗麻谷、同去禮拜忠國師。至中路、三人同行、必有我師。有什麼奇特。也要辨端的。南泉於地上、畫一圓相曰、道得即去。無風起浪。也要人知。擲却陸沈船。若不驗過、爭辨端的。歸宗於圓相中坐。一人打鑼。同道方知。麻谷便作女人拜。一人打鼓。三箇也得。泉曰、恁麼則不去也。半路抽身、是好人。好一場曲調。作家作家。歸宗曰、是什麼心行。賴得識破。當時好與一掌。孟八郎漢。

【讀方】舉す。南泉、歸宗、麻谷、同じく去つて忠國師を禮拜せんとす。中路に至りて、（三人同じく行けば、必らず我が師有り。什麼の奇特か有らん。也た端的を辨ぜんことを要す。）南泉地上に於て、一圓相を畫して曰く、道ひ得ば即ち去らん。（風無きに浪を起す。也た人の知らんことを要す。陸沈の船を擲却す。若し驗過せずんば、爭でか端的を辨ぜん。）歸宗圓相の中に於て坐す。（一人鑼を打てば、同道方に和す。）麻谷便ち女人拜を作す。（一人鼓を打てば、三箇も也た得たり。）泉曰く、恁麼ならば則ち去らず。（半路にして身を抽んず、是れ好人。好一場の曲調。作家作家。）歸宗曰く、是れ什麼の心行ぞ。（賴ひに識破することを得たり。當時好し一掌を與ふるに。孟八郎の漢。）

【評】當時馬祖、化を江西に盛んにす。石頭の道は、湖湘に行はる。忠國師の道は、長安を化す。他親しく六祖に見え來る。此の時南方に、頭を擧げ角を帶ぶる者、其の堂に升り、其の室に入らんと欲せざる有ること無し、若し爾らずんば、人の爲めに恥づる所。這の老漢三箇、去つて忠國師を禮拜せんと欲す、中路に至つて、這の一場の

敗缺を做す。南泉曰く、恁麼ならは則ち去らずと。既に是れ一一道ひ得たり、什麼としてか、却つて去らずと道ふ。且く道へ、古人の意作麼生。當時他の恁麼ならば、則ち去らずと道はんを待つて、劈耳に便ち掌して、他什麼の伎倆をか作すを看ん。萬古綱宗を振ふ、只だ是れ這の些子の機要なり。所以に慈明道く、索を要すれば、只だ索頭邊に在つて撥着す、點着すれば便ち轉ず、水上に胡盧子を捺するが如くに相似たり。人多く喚んで相背はざる語と作す、殊に知らず、此の事極則の處に到りて、須らく泥を離れ水を離れ、楔を拔き釘を抽くべし。汝若し心行の會を作さば、則ち沒交涉。古人轉變し得て好し、這裏に到りて、恁麼ならざることを得ず、須らく是れ殺有り活有るべし。看よ他の一人は、圓相の中に去りて坐し、一人は女人拜を作す、也た甚だ好し。南泉曰く、恁麼ならば則ち去らず。歸宗曰く、是れ什麼の心行ぞ。孟八郎の漢、又恁麼にし去るや。他恁麼に道ふ、大意南泉を驗せんことを要す。南泉尋常道ふ、喚んで如々と作すも、早く是れ變了と。南泉、歸宗、麻谷、却つて是れ一家裏の人、一擒一縱、一殺一活、妨げず奇特なることを雪竇の頌に曰く。

頌。由基箭射猿、（當頭一路、誰敢向前。觸處得妙。未發先中。）遶樹何太直。（若不承當、爭敢恁麼。東西南北一家風。已周遮多時也。）千箇與萬箇、（如麻似粟。野狐精一隊。爭奈得南泉何。）是誰曾中的。（一箇半箇。更沒一箇。一箇也用不得。）相呼相喚歸去來、（一隊弄泥團漢。不如歸去好。却較些子。）曹溪路上、休登陟。（太勞生。想料不是曹溪門下客。低々處平之有餘、高々處觀之不足。）復曰、曹溪路坦平、爲什麼休登陟。（不唯南泉半路抽身。雪竇亦乃半路抽身。好事不如無。雪

無類の知識なり、第十八則參照。〔鑼〕銅鑼のこと。〔方に知る〕種電には方に和すとあり。〔女人拜〕男子の如く五體投地に及ばず、合掌して一寸腰をかゞめること。〔江西〕大明十三省の一なり。〔湖湘〕三國の呉には湘東と云ひ、唐には湖南潭洲と云ふ、洞庭湖の南方なるが故に、即ち明の長沙府を云ふ。〔索を要すれば云々〕一本には僧寶傳に據つて、收を要すれば只だ索頭を把て撥すとありと。

(由基が箭云々)三大老圓相の行處を讃嘆せり。

(高々の

寶也患這般病痛。

【讀方】由基が箭猿を射る、(當頭の一路、誰れか敢て向前せん。)觸處妙を得たり。未だ發せざるに先づ中る。(若し承當せずんば、爭でか敢て恁麼ならん。)樹を遶る何ぞ太だ直なる。(已に周遮すること多時なり。)千箇と萬箇と。(麻の如く粟に似たり。野狐精の一隊。南泉を得て爭奈何。)是れ誰れか曾て的に中つ。(一箇半箇。更に一箇も沒し。一箇も也た用ふることを得ず。)相呼び相喚んで、歸去來。(一隊泥團を弄する漢。如かず歸り去るの好からんには。却つて些子に較れり。)曹溪路上、登陟することを休めよ。(太勞生。想ひ料るに、是れ曹溪門下の客にあらず。低々の處、之れを平ぐるに餘り有り、高々の處、之れを觀るに足らず。)復曰く、曹溪路

(處云々)未だ圓成せざる意味なり、恰も日本の諺に、帶に短かし襷に長しと云ふが如し。

坦平、什麼としてか登陟することを休む。(唯だ南泉半路にして、身を抽んづるのみにあらず、雪竇も亦乃ち半路にして身を抽んづ。好事も無きに如かず、雪竇も亦這般の病痛を患ふ。)

【評】由基が箭猿を射る、樹を遶ること何ぞ太だ直なると。由基は乃ち是れ楚の時の人、姓は養、名は叔、字は由基。時に楚の莊王出て獵す、一の白猿を見て、人をして之れを射しむ。其の猿箭を捉へて戯る、群臣に勅して、之を射しむ、中つる者莫し。王遂に群臣に問ふ、群臣奏して曰く、由基と云ふ者善く射ると。遂に之れを射しむ。由基弓を彎くに方つて、猿乃ち樹を抱いて悲號す、箭發する時に至つて、猿樹を遶つて之を避く、其の箭も亦樹を遶つて中つて殺す。此れ乃ち神箭なり。雪竇何が故ぞ、却つて言ふ太だ直なりと。若し是れ太だ直ならば則ち中らず、已に是れ樹を遶る、何が故

ぞ却つて云ふ、太だ直なりと。雪竇其の意を借る、妨げず用ひ得て好し。此の事春秋に出づ。有る者は道ふ、樹を遶るは是れ圓相と。若し眞箇此の如くならば、蓋し語の宗旨を識らず、太だ直なる處を知らず。三箇の老漢、途を殊にして、歸きを同じうす、一撲一齊に太だ直なり。若し是れ他の去處を識得せば、七縱八横、方寸を離れず、百川異流、同じく大海に歸す。所以に南泉道く、恁麼ならば則ち去らずと。若し是れ衲僧、正眼に覰着せば、只だ是れ精魂を弄す。若し喚んで精魂を弄すと作さば、却つて是れ精魂を弄するにあらず。五祖先師道く、他の三人、是れ慧炬三昧、莊嚴王三昧、然かも此の如く女人拜を作すと雖ども、他終に女人拜の會を作さず、圓相を畫すと雖ども、他終に圓相の會を作さず、既に恁麼に會せずんば、又作麼生か會せん。雪竇道く、千箇と萬箇と、是れ誰れか曾て的に中つると、能く幾箇有つてか、百發百中する。相呼び相喚んで、歸去來、南泉の恁麼ならば則ち去らずと云ふことを頌す。南泉此れより去らず、故に曰ふ、曹溪路上、登陟することを休むと、荊棘林を滅却す。雪竇把不定にして、復曰く、曹溪路坦平、什麼としてか登陟を休むと。曹溪の路、塵を絶し迹を絶して、露裸々赤灑々、平坦々倫然地なり、什麼としてか却つて登陟を休む、各自に脚下を看よ。

第七十則　百丈咽喉唇吻

垂示曰。快人一言、快馬一鞭、萬年一念、一念萬年。要レ知直截、未レ擧已前。且道、未レ擧已前、作麼生摸索。請擧看。

〔萬年一念云々〕此の語三祖大師の信心銘にあり。〔直截〕二念に渉らざること〔五峰〕筠州五峯の常觀禪師、潙山の法弟にして、同じく百丈に嗣法す〔雲巖〕潭州雲巖の曇晟禪師、初めなり、百丈に隨身すること廿年、丈遷化の後、藥山惟儼禪師に嗣法す〔古人〕雲門なり。

讀方　垂示に曰く。快人の一言、快馬の一鞭、萬年一念、一念萬年。直截を知らんと要せば、未だ擧せざる已前。且く道へ、未だ擧せざる已前、作麼生か摸索せん、請ふ擧す看よ。

擧。潙山五峰雲巖、同侍二立百丈一。阿呵々。終始諸訛。君向二西秦一、我之二東魯一。百丈問二潙山一、併二却咽喉唇吻一、作麼生道。一將難レ求。潙山曰、却請和尚道。借レ路經過。丈曰、我不レ辭下向レ汝道上、恐已後、喪二我兒孫一。不レ免二老婆心切一。面皮厚三寸。和泥合水。就身打劫。

讀方　擧す。潙山、五峰、雲巖、同じく百丈に侍立す。（阿呵々。終始諸訛。君は西秦に向ひ、我は東魯に之く。）百丈潙山に問ふ、咽喉唇吻を併却して、作麼生か道はん。（一將は求め難し。）潙山曰く、却つて請ふ、和尚道へ。（路を借りて經過す。）丈曰く、我れ汝に向つて道ふことを辭せず、恐らくは已後、我が兒孫を喪せんことを。（免れず老婆心切なることを。面皮厚きこと三寸。和泥合水。就身打劫。）

【評】　潙山、五峰、雲巖、同じく百丈に侍立す、百丈潙山に問ふ、咽喉唇吻を併却して、作麼生か道はん。山曰く、却つて請ふ、和尚道へ。丈曰く、我れ汝に向つて道ふことを辭せず、恐らくは已後、我が兒孫を喪せんことを。百丈然も此の如くなりと雖ども、鍋子已に別人に奪ひ去り了る。丈復五峰に問ふ、峰曰く、和尚也た須らく併却すべし。丈曰く、人無き處に斫額して汝に望まん。又雲巖に問ふ、巖曰く、和尚有りや也た未だしや。丈曰く、我が兒孫を喪せんと。三人各是れ一家。古人道く、平地上に死人無數、荊棘林を過ぎ得る者、是れ好手と。所以に宗師家、荊棘林を以て人を驗

（他を采せず）とは采せざる事とせざるの意なり、取らざるの義

す。何が故ぞ。若し常情の句下に於て、人を驗することを得ずんば、衲僧家須らく是れ句裏に機を呈し、言中に的を辨すべし。若し是れ擔板漢ならば、多く句中に向つて、死却して便ち道はん、咽喉唇吻を併却して、更に口を下す處無しと。若し是れ變通底の人ならば逆水の波有らん。只だ問頭上に向つて、一條の路有り、鋒を傷り手を犯さず。潙山曰く、却つて請ふ和尚道へと、且く道へ、他の意作麼生。箇裏に向つて、擊石火の如く、閃電光に似て相似たり、他の問處を撈して便ち答ふ、自ら出身の路有り、纖毫の氣力を費さず。所以に道ふ。他活句に參じて、死句に參ぜずと。百丈却つて他を采せず、只だ云ふ、汝に向つて道ふことを辭せず、恐らくは已後我が兒孫を喪せんことををと。大凡宗師、人の爲めにすることは、釘を抽き楔を拔く。若し是れ如今の人ならば、便ち道はん、此の答他の

なり。

（風措）風雅措置にて風流の義なり。

（可煞）甚だに同じ

（十洲）仙境なり。

領話せざることを肯はずと。殊に知らず、箇裏一路生機の處、壁立千仭にして、賓主互換、活鱍々地なることを。雪竇他の此の語、風措宛轉自在にして、又能く封疆を把定することを愛す、所以に頌して曰く。

頌。却請、和尚道。函蓋乾坤。已是傷レ鋒犯レ手。虎頭生レ角、出ニ荒草ー。可煞驚レ群。不レ妨奇特。十洲春盡、花凋殘。觸處清涼。讚歎也不レ及。珊瑚樹林、日杲々。千重百匝。爭奈百草頭上、尋レ他不レ得。荅處蓋天蓋地。

讀方　却つて請ふ、和尚道へ。（函蓋乾坤。已に是れ鋒を傷り手を犯す。）虎頭に角を生じて、荒草を出づ。（可煞だ群を驚かす。妨げず奇特なることを。）十洲春盡きて、花凋殘、（觸處清涼。讚歎するも也た及ばず。）珊瑚樹林、日杲々。（千重百匝。爭奈せん百草頭上、

他を尋ぬるに得ざることを。答處蓋天蓋地。）

【評】此の三人の答處、各々同じからず、也た壁立千仞なる有り、也た照用同時なる有り、也た自救不了なる有り。却つて請ふ、和尚道へと。雪竇便ち此の一句中に向つて、機を呈し了れり、更に中に就いて輕々に撥して、人をして見易からしむ、曰く、虎頭に角を生じて、荒草を出づと。潙山の答處、一へに猛虎頭上に角を安ずるに似たり、什麼の近傍の處か有らん。見ずや僧羅山に問ふ、同生不同死の時如何。山曰く、牛の角無きが如し。僧曰く、同生亦同死の時如何。山曰く、虎の角を戴くが如し。雪竇只だ一句に頌し了れり。他轉變の餘才有りて、更に曰く、十洲春盡きて、花凋殘と。海上に三山十洲有り、百年を以て一春と爲す、雪竇の語、風措を帶びて、宛轉盤礴す。春盡くるの際、百千萬株の花、一時に凋殘す、獨り珊

〔羅山〕道閑禪師、巖頭の嗣なり。

〔盤礴〕坦

瑚樹林のみ有つて、凋落を解せず、太陽と相奪うて、其の光交映す、正當恁麼の時、妨げず奇特なることを。雪竇此れを用ひて、他の却つて請ふ、和尚道へと云ふことを明かす。十洲は皆海外諸國の附する所なり、一には祖洲、反魂香を出す、二には瀛洲、芝草、玉石、泉の酒味の如くなるを出す、三には玄洲、僊藥を出す、之を服すれば長生す、四には長洲、木瓜、玉英を出す、五には炎洲、火浣布を出す、六には元洲、靈泉の蜜の如くなるを出す、七には生洲、山川有りて、寒暑無し、八には鳳麟洲、人は鳳喙麟角を取つて、續弦膠を煎す、九には聚窟洲、獅子銅頭鐵額の獸を出す、十には檀洲（一に流洲に作る。）琨吾石を出す、劍を作れば玉を切るに泥の如し。珊瑚は、外國雜傳に曰く、大秦の西南、漲海の中、七八百里可りにして、珊瑚洲に到る、洲底に盤石あり、珊瑚其の石上に生ず、人鐵網

靜の貌。

〔附する所〕附屬の國の意なり。

〔火浣布〕列子湯問篇に曰く、火浣布は之を浣ふに必らず火に投ずと、又山海經の郭註に曰く、今扶南東萬里に耆薄國あり、復五千里許に火山

國あり、其山霖雨すと雖も、火常に燃ゆ、火中に白鼠あり、時に山邊に出で食を求む、人之れを捕へ、得て、毛を以て布を作る、之れを火浣布と名くと。
〔續絃膠〕斷弓絃を接續するに妙效ある膠なり

を以て之れを取ると。又十洲記に曰く、珊瑚は南海の底に生ず、樹の如し、高さ三二尺、枝有りて皮無し、玉に似て紅潤なり、月に感じて生ず、凡そ枝頭に、皆月暈有りと。

佛果圜悟禪師碧巖錄卷之七 終

〔箭新羅國を過ぐ〕落處を知らざること。
〔斫額〕額に手をかざすか

佛果圜悟禪師碧巖錄卷之八

第七十一則 百丈併却咽喉

擧。百丈復問二五峰一、併二却咽喉唇吻一、作麼生道。阿呵々。箭過二新羅國一。峰曰、和尚也須二併却一。攙レ旗奪レ鼓。一句截流。萬機寢削。丈曰、無レ人處、斫額望レ汝。土曠人稀相逢者少。

讀方 擧す、百丈復五峰に問ふ、咽喉唇吻を併却して、作麼生か道はん。(阿呵々。箭新羅國を過ぐ。)峰曰く、和尚也た須らく併却すべし。(旗を攙き鼓を奪ふ。一句截流、萬機寢削。)丈曰く、人無き處斫額して汝を望まん。(土曠く人稀にして、相逢ふ者少し。)

ざして遠方を見る貌。

【評】潙山は封疆を把定し、五峰は衆流を截斷す、這の些子、是れ箇の漢にして、當面に提掇せんことを要す。馬前の相撲の如く、擬議を容れず、直下に便ち用ひて、緊迅危峭なり、潙山の盤礴滔々地なるに似ず。如今の禪和子、只だ架下に向つて行いて、他の一頭地を出づること能はず、所以に道ふ、親切を得んと欲せば、問を將ち來つて問ふこと莫れと。五峰の答處、當頭に坐斷す、妨げず快俊なることを。百丈曰く、人無き處、斫額して汝を望まんと、且く道へ、是れ他を肯ふか、是れ他を肯はざるか、是れ殺か是れ活か、他の阿轆々地なるを見て、只だ他に一點を與ふ。雪竇の頌に曰く。

頌。和尚也併却。已在言前了。龍蛇陣上看謀略。須是金牙始解。七事隨身。慣戰作家。令人長憶李將軍、妙手無多子。疋馬單鎗。千里萬里。千人萬人。萬里天邊飛一鶚。大衆見麼。且道、落在什麼處。中也。打曰、飛過去也。

（龍蛇陣）武備志に曰く、東方は青龍の獸也、龍陣と云ふ、西方は白虎の獸なり、虎陣と云ふ、南方は朱鳥の獸なり、鳥陣と云ふ、北方は玄武の

讀方 和尚也た併却すべし、（已に言前に在り了る。）龍蛇陣上に謀略を看る。（須らく是れ金牙にして、始めて解すべし。七事身に隨ふ。戰に慣ふ作家。）人をして長へに李將軍を憶はしむ、（妙手多子無し。疋馬單鎗。千里萬里。千人萬人。）萬里の天邊一鶚を飛ばす。（大衆見るや。且く道へ、什麼の處にか落在する。中れり。打して曰く、飛過し去る。）

【評】和尚も也た併却すべしと、雪竇一句の中に於いて、拶一拶して曰く、龍蛇陣上に、謀略を看ると。兩陣を排して、突出突入、七縱八橫、鬪將底の手脚有り、大謀略底の人有りて、疋馬單鎗にして、

獸なり蛇陣と云ふと、又諸葛孔明の八陣圖には、天、地、風、雲、飛龍、翔鳥、虎翼、蛇蟠を八勢と云ふとあり、孫子には善く兵を用ふる者は、譬へば索然の如し、索然とは常山の蛇なり、其首を撃てば

龍蛇陣上に向つて、出沒自在なるが如し。爾作麼生か他を圍繞し得ん、若し是れ這箇の人にあらずんば、爭でか此の如きの謀略有ることを知らん。雪竇の此の三頌、皆裏頭に就いて、牀出する底の語此の如し、大いに李廣が神箭に似たり。萬里の天邊、一鶚を飛ばす、一箭に一鵰を落すことは定れり、更に放過せず。雪竇百丈の問處、一鶚の如く、五峰の答處、一箭の如くに相似たることを頌す。山僧只管に、五峰を讃歎して、覺えず渾身泥水に入り了れり。

第七十二則 百丈問雲巖

擧。百丈又問二雲巖一、併二却咽喉唇吻一、作麼生道。蝦蟆窟裏出來。道二什麼一。巖曰、和尚有也未。粘レ皮着レ骨。拖泥帶水。前不レ搆レ村。

則ち尾至り、其の尾を撃てば則ち首至る、其の中を撃てば首尾倶に至るとあり、今五峰が百丈の言下に間に髮を容れざる活作畧を讚嘆せる語なり。〔金牙〕將軍の旗は飾るに象牙を以てするが故に牙と云

丈曰、喪二我兒孫一。灼然有二此答得、半前落後一。後不レ迭レ店。

讀方 擧す。百丈又雲巖に問ふ、咽喉唇吻を併却して、作麼生か道はん。(蝦蟆窟裏より出で來る。什麼とか道はん。)巖曰く、和尚有りや也た未だしや。(皮に粘じ骨に着く。拖泥帶水。前村に搆らず、後店に迭らず。)丈曰く、我が兒孫を喪せん。(灼然として此れ答へ得て、半前落後なる有り。)

【評】 雲巖百丈に在りて、二十年侍者と作る、後ち道吾と同じく、藥山に至る。山問うて曰く、子百丈の會下に在りて、箇の什麼の事をか爲す。巖曰く、生死を透脫す。山曰く、還つて透脫すや也た未しや。巖曰く、渠れ生死無し。山曰く、二十年百丈に在りて、習氣も也た未だ除かず。巖辭し去つて、南泉に見ゆ、後復た藥山に

ひ、將軍の鼓は金なりと、即ち金牙は金鼓牙旗のことにて金鼓は將軍の氣、牙旗は將軍の精なり故に武將を云ひ顯はすの語なり、此の一句古寫本には「金毛の獅子にして始めて得べし」とあり。〔前村に〕

歸つて、方に契悟す。看よ他の古人、二十年參究するに、猶ほ自ら半青半黃、皮に粘し骨に着けて、穎脫すること能はず。是は則ち也た是、只だ是れ前村に搆らず、後店に迯らず。道ふことを見ずや。語は窠臼を離れずんば、焉んぞ能く蓋纏を出でん、白雲谷口に橫つて、幾人の源をか迷却すと、洞下に之れを觸破と謂ふ。故に云ふ、躍開す山仗の鳳凰樓、時の人當今の號に觸るゝことを嫌ふと。所以に道ふ、荊棘林は須らく是れ透過して、始めて得べし、若し透過せずんば、終始廉纖に渉つて、斬不斷ならん。適來道ふ、前村に搆らず、後店に迯らず、雲巖只管に去つて、他人底を點檢す。百丈他の此の如くなるを見て、一時に把り來つて、打殺し了れり、雪竇の頌に曰く。

搆らず云々」ドッチつかずの煮え切らぬ云ひ分ぢやと云ふ意。〔躍開山仗〕一本には畧ぼ仙杖を開く、とあり、仙杖とは御前の儀仗なり、又杖は兵器五叉の總名なりと云ふ。〔踞地〕身を地にピタリと着

頌。和尚有也未。（公案現成。隨波逐浪。和泥合水。）金毛獅子、不踞地。（灼然。有什麼用處。可惜許。）兩々三々、舊路行。（併却咽喉脣吻作麼生道。轉身吐氣。脚跟下蹉過了也。）大雄山下、空彈指。（一死更不再活。可悲可痛。蒼天中更添怨苦。）

讀方　和尚有りや也た未しや、（公案現成。隨波逐浪。和泥合水。）金毛の獅子、踞地せず、（灼然。什麼の用處か有らん。可惜許。）兩々三々、舊路に行く。（咽喉脣吻を併却して、作麼生か道はん。身を轉じ氣を吐く、脚跟下に蹉過し了れり。）大雄山下、空しく彈指す。（一死更に再活せず。悲しむべし痛むべし。蒼天中更に怨苦を添ふ。）

【評】　和尚有りや也た未しや、雪竇欵に據つて案に結す。是は則ち是、金毛の獅子、爭奈せん踞地せざることを。獅子物を捉ふるに、

けて踞ること、即ち猫が鼠を捕る時のやうな身構へ。〔大雄山下云々〕大雄山は百丈山のこと、大智懷海禪師の住地なり、空しく彈指すに就て二說あり、一は雲巖廿年の久しき百丈の提撕を被ると云へど

牙を藏し爪を伏して、踞地返擲す。物大小となく、皆以て威を全うし、其の功を全うせんことを要す。雲巖曰く、和尚有りや也た未しや、只だ是れ舊路上に向つて行く。所以に雪竇曰く、百丈大雄山下に向つて、空しく彈指すと。

第七十三則　馬祖四句百非

垂示曰。夫說法者、無說無示。其聽法者、無聞無得。說既無說無示、爭如ㇾ不ㇾ說。聽既無聞無得、爭如ㇾ不ㇾ聽。而無說又無聽、却較二些子一。只如今諸人、聽下山僧在二這裏一說上、作麼生免二得此過一、具二透關眼一者、試擧看。

讀方　垂示に曰く。夫れ說法とは、無說無示。其れ聽法とは、無聞無得。說既に無說無示、爭でか說かざるに如かん。聽既に無聞無得、爭でか聽かざるに如かん。而かも無說又無聽、却つて些子に較れり。只だ如今の諸人、山僧が這裏に在りて說くことを聽く、作麼生か此の過を免れ得ん。透關の眼を具する者は、試みに擧す看よ。

も、大悟の域に至らず、百丈がしばしば爪彈きせりと。又一には、雲巖自ら大事の究明し能はざるを嘆きて彈指して山を下れりと。〔說法〕口を以て法を說くを口業說法と云ひ、身に行うて法を實現するを

擧。僧問二馬大師一、離二四句一絕二百非一、請師直指二某甲西來意一。（什麼處得二這話頭一來。那裏得二這消息一。）馬師曰、我今日勞倦、不ㇾ能二爲ㇾ汝說一、問二取智藏一去。（退身三步。蹉過也不ㇾ知。藏ㇾ身露ㇾ影。不ㇾ妨是這老漢推二過與別人一。）僧問二智藏一。（也須ㇾ與二他一拶一。蹉過也不ㇾ知。）藏曰、何不ㇾ問二和尚一。（草裏焦尾大蟲出來也。道二什麼一。直得草繩自縛。去死十分。）僧曰、和尚教來問。（受二人處分一。前箭猶輕後箭深。）藏曰、我今日頭痛、不ㇾ能二

身業說法と云ひ、意に考へ思ひをめぐらして一切衆生に慈を蒙らすを意業說法とす、されど眞の說法は此の三を超絶す。〔馬大師〕江西馬祖道一禪師なり、既に第三則に出づ。〔四句、百非〕有、無、亦有

爲ㇾ汝說、問二取海兄一去。不ㇾ妨是八十四員善知識、一樣患二這般病痛一。僧問二海兄一。轉二與別人一。拕ㇾ贓叫ㇾ屈。海曰、我到二這裏一、却不會。不ㇾ用二忉々一。從敎千古萬古、黑漫々。僧擧二似馬大師一、這僧却有二些子眼睛一。馬師曰、藏頭白、海頭黑。寰中天子勅。塞外將軍令。

讀方　擧す。僧馬大師に問ふ、四句を離れ、百非を絕して、請ふ師某甲に西來意を直指せよ。(什麼の處よりか、這の話頭を得來る。那裏よりか、這の消息を得たる。)馬師曰く、我れ今日勞倦す、汝が爲めに說くこと能はず、智藏に問取し去れ。(退身三步。蹉過するだも也た知らず。身を藏して影を露はす。妨げず是れ這の老漢、別人に推過し與ふることを。)僧智藏に問ふ。(也た須らく他に一摑を與ふべし。蹉過するも也た知らず。)藏曰く、何ぞ和尙に問はざる。(草裏より焦尾の大蟲出で來る。什麼と道ふぞ。直に得たり草繩自縛すること を。去死十分。)僧曰く、和尙敎へ來つて問はしむ。(人の處分を受く。前箭は猶ほ輕く、後箭は深し。)藏曰く、我れ今日頭痛す、汝が爲めに說くこと能はず、海兄に問取し去れ。(妨げず是れ八十四員の善知識、一樣に這般の病痛を患ふることを。)僧海兄に問ふ、(別人に轉與す。贓を抱いて屈を叫ぶ。)海曰く、我れ這裏に到つて、却つて不會。(忉忉たることを用ひず。從敎あれ千古萬古、黑漫々なることを。)僧馬大師に擧似す。(這の僧却つて些子の眼睛有り。)馬師曰く、藏頭白、海頭黑。(寰中は天子の勅。塞外は將軍の令。)

【評】　這箇の公案、山僧舊日、成都に在つて眞覺に參ず。覺曰く、只だ馬祖の第一句を看ることを消せよ、自然に一時に理會し得ん

亦無、非有非無を四句と云ひ、此の四句各々四句を具するが故に十六となり、十六を過去、現在、未來の三世に配すれば四十八となる、而して此四十八を已起と未起とに約すが故に九十六となり、それ

に根本の四句を合せて百となる、之を百非と云ふ、されど要するに世間一切の言詮論量を總稱して四句百非と云ふなり、又四句を有、無、非有非無、非々有非々無の四と云ひ、一、異、有、無の四と云ふ

と。且く道へ、這の僧、是れ會し來つて問ふか、會し來らずして問ふか、此の問妨げず深遠なることを。四句を離るゝとは、有と無と、非有非無と、非々有と、非々無となり、此の四句を離るれば其の百非を絶す、只管に道理を作さば、話頭を識らず、頭腦を討ぬとも見えず。若し是れ山僧ならば、馬祖の道ひ了らんを待つて、便ち與めに坐具を展べて、禮三拜して、他の作麼生と道はんを看ん。當時馬祖ならば、若し這の僧來つて、四句を離れ、百非を絶して、請ふ師某甲に西來意を直指せよと問はんを見て、拄杖を以て、劈脊に便ち棒して趕出して、他の省するか省せざるかを看ん。馬大師只管に、他の與めに葛藤を打す、以て這の漢、當面に蹉過して、更に去つて智藏に問はしむるに至る、殊に知らず、馬大師來風深く辨ずることを。這の僧懞憧として、走り去つて智藏に問ふ、藏曰く、何ぞ和尚

何れにしても大同小異。〔贓を抱いて云云〕自ら盗んだものを抱いて盗まずと云ふこと、即ち自ら好んで辱を買ふことなり。〔忉々〕憂ふる貌なり、茲では餘計なことを云ふなと云ふ程の意〔成都〕蜀

に問はざる。僧曰く、和尚敎へ來つて問はしむ。看よ他這の些子、撥着すれば便ち轉ず、更に閑暇の處なきことを。智藏曰く、我れ今日頭痛す、汝が爲めに說き得ること能はず、海兄に問取し去れ。這の僧又去つて海兄に問ふ。海兄曰く、我れ這裏に到つて、却つて不會。且く道へ、什麼としてか、一人は頭痛と道ひ、一人は不會と云ふ、畢竟作麼生。這の僧却回し來つて、馬大師に擧似す。師曰く、藏頭白、海頭黑と。若し解路を以て卜度せば、却つて之れを相瞞すと云ふ。有る者は道ふ、只だ是れ相推過すと。有る者は道ふ、三箇總に他の問頭を識る、所以に答へずと。總に是れ拍盲地、一時に古人醍醐の上味を將つて、毒藥を着けて裏許に在く、所以に馬祖道く、汝が一口に西江の水を吸盡せんを待つて、即ち汝に向つて道はんと、此の公案と一般なり。若し藏頭白、海頭黑を會得せば、便ち

の地なり。〔眞覺〕黄龍惟勝なり、黄龍南禪師に嗣法す。〔智藏〕虔州西堂の智藏禪師、百丈と同じく馬祖道一大師の法嗣なり。〔海兄〕百丈懷海禪師なり。

西江水の話を會せん。這の僧、一擔の懞憧を將ちて、箇の不安樂に換へ得て、更に他の三人の尊宿を勞して、泥に入り水に入らしむ畢竟這の僧瞥地ならず。然も一へに恁麼なりと雖ども、這の三箇の宗師却つて箇の擔板漢に勘破せらる。如今の人、只管に語言上に去つて、活計を作して曰ふ、白は是れ明頭合し、黑は是れ暗頭合すと。只管に鑽研計較す、殊に知らず、古人の一句、意根を截斷することを。須らく是れ正脈裏に向つて、自ら看て始めて穩當なることを得べし。所以に道ふ、末後の一句、始めて牢關に到る、要津を把斷して、凡聖を通ぜずと。若し此の事を論ぜば、當門に一口の劍を按ずるが如くに、相似たり、擬議せば則ち喪身失命せん。又道く譬へば、劍を擲つて空に揮ふが如し、及と不及とを論ずること莫れと。但八面玲瓏の處に向つて會取せよ、見ずや、古人道く、這の漆

〔封后先生〕封或は風に作る、史記の註に曰く黄帝夢に、大風天下の塵垢を吹いて皆去ると夢む、帝寤めて歎じて曰く、風は號令なり、政を執る者也、垢の土を去るは后なり、天下豈に姓は

桶、或は曰く、野狐精、或は云く、瞎漢と。且く道へ、一棒一喝と、是れ同か是れ別か、若し知らば、千差萬別、只だ是れ一般なり、自然に八面に敵を受けん。藏頭白、海頭黑を會せんと要すや。五祖先師道く、封后先生と、雪竇の頌に曰く。

頌。藏頭白、海頭黑、半合半開。一手擡一手搦。金聲玉振。明眼衲僧、會不得。更行脚三十年。終是被人穿却鼻孔。山僧故是口似匾擔。馬駒踏殺天下人、叢林中也須是這老漢始得。放出這老漢。臨濟未是白拈賊。癩兒牽伴。直饒好手、也被人捉了也。離四句絕百非、道什麼。也須是自點檢看。阿爺似阿爹。天上人間唯我知。用我作什麼。奪却拄杖子。或若無人無我無得無失。將什麼知。

讀方　藏頭白、海頭黑、（半合半開。一手擡一手搦。金聲り玉振ふ。）

風名は后なるもの有らんやと、是に於て占して之れを求め、風后なるものを海隅に得たり、登せて以て相とせりと、今は馬祖の一句能く假塵を拂ふを讚せる者乎。〔口區擔に似たり〕無言の貌。〔馬駒踏

明眼の衲僧、會不得。（更に行脚すること三十年せよ。終に是れ人に汝が鼻孔を穿却せらる。山僧故らに是れ口匾擔に似たり。）馬駒踏殺す、天下の人。（叢林中也た須らく是れ這の老漢にして、始めて得べし。這の老漢を放出す。）臨濟未だ是れ白拈賊にあらず。（癩兒伴を牽く。直饒ひ好手も、也た人に捉へ了らる。）四句を離れ、百非を絕す、（什麼と道ふぞ。也た須らく是れ自ら點檢して看るべし。阿爺は阿爹に似たり。）天上人間、唯だ我れ知る。（我を用ひて什麼か作さん。拄杖子を奪却せん。或は若し人も無く我も無く、得も無く失も無くんば、什麼を將つてか知らん。）

【評】藏頭白、海頭黑、且く道へ、意作麼生、這の些子、天下の衲僧跳不出。看よ他雪竇後面に合殺し得て好きことを。道はく直饒ひ是れ明眼の衲僧も、也た會不得、這箇の些子の消息、之れを神仙

殺〕馬駒とは馬祖のこと、曾て馬祖の祖父たる曹溪の慧能禪師が、馬祖の父なる南嶽懷讓禪師に向つて云ひし語より出づ、評唱にあり見よ。〔阿爺阿爹〕共に父の稱呼なり、前者は南方の俗、後者は北方

の秘訣、父子不傳と謂ふ。釋迦老子、一代時教を說く、末後單傳の心印、喚んで金剛王寶劍と作し、喚んで正位と作す。恁麼の葛藤、早く是れ事已むことを獲ずして、古人略々些子の鋒鋩を露はす。若し是れ透得底の人ならば、便ち七穿八穴して、大自在を得ん。若し透不得ならば、從前悟入の處無し、轉た說けば、轉た遠からん。馬駒踏殺す、天下の人、西天の般若多羅、達磨を讖して曰く、震旦濶しと雖ども別路無し、兒孫の脚下を假つて行かんことを要す、金鷄一粒粟を銜むことを解して、十方の羅漢僧に供養す。又六祖讓和尙に謂うて曰く、向後佛法、汝が邊より去らん、已後一馬駒を出して、天下の人を踏殺せんと。厥の後江西の法嗣天下に布く、時に馬祖と號す、達磨六祖、皆先馬祖を讖す。看よ他の作略、果然として別なることを。只だ道ふ、藏頭白、海頭黑と、便ち天下の人を踏殺

の俗なり

〔讓和尙〕南嶽慧讓和尙のこと。

〔達磨六祖〕天桂師曰く達磨六祖とは誤りか、般若多羅と六祖とを云ふなりと

する處を見る。只だ這の一句、黑白の語、千人萬人咬不破。臨濟未だ是れ白拈賊にあらず、臨濟一日衆に示して曰く、赤肉團上に、一無位の眞人有り、常に汝等諸人の面門に向つて出入す、未だ證據せざる者は看よ看よと。時に僧有り出でゝ問ふ、如何なるか是れ無位の眞人。臨濟禪牀を下りて、搊住して曰く、道へ道へ。僧無語。臨濟托開して曰く、無位の眞人、是れ什麼の乾屎橛ぞと。雪峰後に聞いて曰く、臨濟大に白拈賊に似たり。雪竇他の臨濟と相見せんことを要す。馬祖の機鋒を觀るに、尤も臨濟に過ぎたり、此れ正に是れ白拈賊、臨濟は未だ是れ白拈賊にあらざるなり、雪竇一時に穿却し了れり。却つて這の僧を頌して道ふ、四句を離れ、百非を絕す、天上人間、唯だ我れ知ると。且く鬼窟裏に向つて、活計を作すこと莫れ。古人道く、問は答處に在り、答は問處に在りと、早く

〔眞如〕慕喆禪師也

是れ奇特なり、汝作麼生か、四句を離れ得、百非を絕し得ん。雪竇道く、此の事唯だ我れ能く知ると。直饒ひ三世の諸佛も、又覰不見既に是れ獨り自ら箇を知る、諸人更に上來して、箇の什麼をか求めん。大潙の眞如拈じて曰く、這の僧恁麼に問ひ、馬祖恁麼に答ふ、四句を離れ、百非を絕す、智藏海兄、都て知らず、會せんと要すや、道ふことを見ずや、馬駒踏殺す、天下の人と。

第七十四則　金牛飯桶

垂示曰。鏌鎁橫按、鋒前翦斷葛藤窠。明鏡高懸、句中引出毘盧印。田地穩密處、着衣喫飯、神通遊戲處、如何湊泊。還委悉麼。看取下文。

【讀方】垂示に曰く。鏌鎁橫に按じて、鋒前に葛藤窠を翦斷す。明鏡高く懸つて、句中に毘盧印を引出す。田地穩密の處、着衣喫飯、神通遊戲の處、如何が湊泊せん。還つて委悉すや。下文を看取せよ。

擧。金牛和尚、每レ至二齋時一、自將二飯桶一、於二僧堂前一作レ舞、呵々大笑曰、菩薩子喫飯來。竿頭絲線、從二君弄一、不レ犯二清波一、意自殊。醍醐毒藥一時行。是則是。七珍八寶、一時羅列。爭奈相逢者少。雪竇曰、雖二然如一レ此、金牛不二是好心一。是賊識レ賊。是精識レ精。來說二是非一者便是是非人。僧問二長慶一、古人道、菩薩子喫飯來、意旨如何。不レ妨疑着。元來不レ知二落處一。長慶道二什麼一。慶曰、大似二因レ齋慶讃一。相レ席打レ令。據レ款結レ案。

〔毘盧〕梵語、詳しくは毘盧舍那、譯して、偏一切處、所謂無限の宇宙に充ち滿ちて居ると云ふこと。

【讀方】擧す。金牛和尚、齋時に至る每に、自ら飯桶を將つて、僧堂前に於て舞を作し、呵々大笑して曰はく、菩薩子喫飯來と。（竿頭の絲線、君が弄するに從す、清波を犯さず、意自ら殊なり。醍醐毒藥、一時に行ず。是は則ち是。七珍八寶、一時に羅列す。爭奈せん相逢ふ者少きことを。）雪竇曰く、然も此の如しと雖ども、金牛是れ好心にあらず。（是れ賊、賊を識る。是れ精、精を識る。來つて是非を說く者は、便ち是れ是非の人。）僧長慶に問ふ、古人道ふ、菩薩子喫飯來と、意旨如何。（妨げず疑着することを。元來落處を知らず。長慶什麼と道ふぞ。）慶曰く、大に齋に因つて慶讃するに似たり。（席を相て令を打す。款に據つて案を結す。）

【評】金牛は乃ち馬祖下の尊宿なり、齋時に至る每に、自ら飯桶を將ちて、僧堂前に於て舞を作し、呵々大笑して曰く、菩薩子喫飯來

〔金牛和尚〕馬祖大師の法嗣にして、馬師門下八十餘員中の一人なり、鎭州の産。

〔長慶〕雪峰の法嗣、第二十三則にあり。

〔慶讃〕慶賀讃歎の義にして、凡そ物の出來上つた場

合に目出度いと云ふが如き語也。

と、是の如くする者二十年、且く道へ、他の意什麼の處にか在る。若し喚んで喫飯と作さば、尋常魚を敲き鼓を擊つて、亦自ら告報せん、又何ぞ須ひん、更に自ら飯桶を將ち來つて、許多の伎倆を作すことを。是れ他顚すること莫しや、是れ提唱建立すること莫しや。若し是れ此の事を提唱せば、何ぞ寶華王座上に去つて、床を敲き拂を竪てざる、此の如きことを須ひ要して、什麼とか作さん。今の人殊に知らず、古人の意、言外に在ることを。何ぞ且く祖師當時、初來底の題目、什麼とか道ひしと看ざる。分明に說いて道ふ、敎外別傳、單傳心印と。古人の方便、也た只だ汝をして、直截に承當し去らしむ。後來の人、妄りに自ら卜度して、便ち道ふ、那裏にか許多の事有らん、寒する時は則ち火に向ひ、熱する時は則ち涼に乘じ、飢うる時は則ち飯を喫し、困する時は則ち眠りを打すと。若し恁麼に常情を以て、義解詮注せば、達磨の一宗、土を掃つて盡きん。知らず古人、二六時中に向つて、念々捨てず、此の事を明らめんと要することを。雪竇曰く、然も是の如しと雖ども、金牛是れ好心にあらずと。只だ這の一句、多少の人錯つて會す、所謂醍醐の上味、世の爲めに珍とせらるるも、斯等の人に遇へば、飜つて毒藥と成る。金牛既に是れ落草して、人の爲めにす、雪竇什麼としてか道ふ是れ好心にあらずと。什麼に因つて却つて恁麼に道ふ、衲僧家須らく是れ生機有つて、始めて得べし。今の人古人の田地に至らずして只管に道ふ・什麼の心をか見、什麼の佛か有らんと。若し這の見解を作さば、金牛老作家を壞却し了らん、也た須らく是れ子細に看て始めて得べし。若し只だ今日明日、口快の些子ならば、了期有ること無けん。

〔好心にあらず〕尋常容易の手段ではない、看過すべからざる作略ありと云ふ意

第七十四則　金牛飯桶

後來長慶上堂す、僧問ふ、古人道く、菩薩子喫飯來と、

〔忒煞〕甚だに同じ

〔白雲影裏〕飯桶の白飯を指すとも云ひ、又僧堂を白雲堂と云ふとも云ふ、されど茲では絶對向上の處を白雪裏に譬へたるにて、金牛和尚の立脚地を指す。

意旨如何。慶曰く、大に齋に因つて慶讃するに似たりと。尊宿家忒煞だ慈悲、漏逗少なからず。是なることは則ち是、齋に因て慶讃すと。汝且く道へ、箇の什麼をか慶讃する、看よ他の雪竇の頌に曰く。

頌。白雲影裏笑呵々、（笑中有レ刀。熱發作二什麼一。天下衲僧不レ知二落處一。）兩手持來、付二與他一。（豈有二恁麼事一。莫レ謗二金牛一好。喚作二飯桶一得麼。若是本分衲僧。不レ喫二這般茶飯一。）若是金毛獅子子、（須二是他格外始得一。許二他具眼一。只恐眼不レ正。）三千里外見二誵訛一。（不レ直二半文錢一。一場漏逗。誵訛在二什麼處一。瞎漢。）

讀方 白雲影裏笑ひ呵々、（笑中に刀有り。熱發して什麼か作さん。天下の衲僧、落處を知らず。）兩手に持し來つて他に付與す。（豈に恁麼の事有らんや。金牛を謗すること莫くんば好し。喚んで飯桶と作し得てんや。若し是れ本分の衲僧ならば、這般の茶飯を喫せず。）若し是れ金毛の獅子子ならば、（須らく是れ他格外にして、始めて得べし。他の具眼を許す。只だ恐らくは眼正しからざらんことを。）三千里外に誵訛を見ん。（半文錢に直らず。一場の漏逗。誵訛什麼の處にか在る。瞎漢。）

【評】 白雲影裏、笑ひ呵々、長慶道く、齋に因つて慶讃すと。雪竇道く、兩手に持し來つて、他に付與す、且く道へ、只だ是れ他に與へて、喫飯せしむるか。爲當別に奇特有るか。若し箇裏に向つて、端的を知得せば、便ち是れ箇の金毛の獅子子ならん。若し是れ金毛の獅子子ならば、更に金牛の飯桶を將ち來りて、舞を作して大笑することを必とせず、直に三千里外に向つて、便ち他の敗缺の處を知らん。古人道く、鑒機先に在つて、一揑を消せず。所以に衲僧

家、尋常須らく是れ格外に向つて、用ひて始めて本分の宗師と稱することを得べし。若し只語言に據らば、未だ免れず遷逗することを。

第七十五則　烏臼屈棒

垂示曰。靈鋒寶劍、常露現前。亦能殺レ人、亦能活レ人。在レ彼在レ此、同得同失。若要二提持一、一二任提持一。若要二平展一、一二任平展一。且道、不レ落二賓主一、不レ拘二囘互一時如何。試擧看。

讀方 垂示に曰く。靈鋒の寶劍、常露現前。亦能く人を殺し、亦能く人を活す。彼れに在り此れに在り、同得同失。若し提持せんと要せば、提持するに一任す、若し平展せんと要せば、平展するに一任す。且く道へ、賓主に落ちず、囘互に拘はらざる時如何、試みに擧す看よ。

擧。僧從二定州和尚會裏一來、到二烏臼一。烏臼問、定州法道、何二似這裏一。（言中有レ響。要レ辨二淺深一。探竿影草。太煞瞞レ人。）僧曰、不レ別。（死漢中有二活底一。一箇半箇。鐵橛子一般。踏二着實地一。）臼曰、若不レ別、更轉二彼中一去。便打。（灼然。正令當行。）僧曰、棒頭有レ眼、不レ得二草草打一レ人。（也是這作家始得。却是獅子兒。）臼曰、今日打二着一箇一也、又打三下。（說二什麼一箇一。千箇萬箇。）僧便出去。（元來是屋裏人。只得レ受レ屈。）臼曰、屈棒元來、有二人喫一在。（啞子喫二苦瓜一。放去又收來。）僧轉レ身云、爭奈杓柄在二和尚手裏一。（只是見レ機而作。點得回來、堪レ作二何用一。）

〔提持〕把定と云ふに同じく、手を放さぬこと。

〔平展〕放行と同じく、兩手を開いて抛つこと

（定州）傳燈錄に定州和尚は二人在

（依前三百六十日。却是箇伶悧衲僧。）臼曰、汝若要、山僧回與汝。（知他阿誰是君、阿誰是臣。敢向虎口横身。忒煞不識好惡。）僧近前奪臼手中棒、打臼三下。（也是一箇。作家禪客始得。賓主互換。縱奪臨時。）臼曰、屈棒々々。（點。這老漢、着什麼死急。）僧曰、有人喫在。（呵々。是幾箇杓柄却在這僧手裏。）臼曰、草々打着箇漢。（不落兩邊。知他是阿誰。）僧便禮拜。（臨危不變。方是丈夫兒。）臼曰、和尚却恁麼去也。（點。）僧大笑而出。（作家禪客、天然有在。猛虎須得清風隨。方知盡始盡終。天下人摸索不着。）臼曰、消得恁麼、消得恁麼。（可惜放過。何不劈脊便棒。將謂走到什麼處去。）

讀方　擧す。僧定州和尚の會裏より來りて、烏臼に到る、烏臼問ふ、定州の法道、這裏に何似。（言中に響き有り。淺深を辨ぜんこと

り、一人は定州の善崔禪師、即ち臨濟下の尊宿なり此人は烏臼と時代を異にす今此の定州は石藏禪師にして、北宗の祖神秀の法嗣なる普寂禪師に嗣法す。（烏臼）景德傳燈錄に依るに、玄上屈との相見あ

を要す。探竿影草。太煞だ人を瞞す。）僧曰く、別ならず。（死漢中に活底有り。一箇半箇。鐵橛子と一般。實地に踏着す。）臼曰く、若し別ならずんば、更に彼の中に轉じ去らんと云うて、便ち打つ。（灼然。正令當行。）僧曰く、棒頭に眼有り、草々に人を打つことを得ざれ。（也た是れ這の作家にして、始めて得ん。却つて是れ獅子兒。）臼曰く、今日一箇を打着すと云うて、又打つこと三下。（什麼の一箇とか說かん、千箇萬箇。）僧便ち出で去る。（元來是れ屋裏の人、只屈を受くることを得たり。只だ是れ機を見て作す。）臼曰く、屈棒元來、人の喫する有る在り。（啞子苦瓜を喫す。放去又收來。點得して回り來らば、何の用を作すにか堪へん。）僧身を轉じて云く、爭奈せん杓柄、和尚の手裏に在ることを。（依前として三百六十日。却つて是れ箇の伶悧の衲僧。）臼曰く、汝若し要せば、山僧汝に回與せん。

り、直に棒を行ずと見ゆるも傳詳かならず。〔今日一箇を打着〕打ち甲斐のあるのに巡り逢うたと云ふ程の意。〔屈〕寃罪のこと。〔回與〕回は貸の義なり、即ち貸與せんとの意〔消得恁麼〕消は用の義な

(知る他阿誰か是れ君、阿誰か是れ臣。敢へて虎口に向つて身を横ふ。忒煞だ好惡を識らず。)僧近前して、臼の手中の棒を奪うて、臼を打つこと三下す。(也た是れ一箇。作家の禪客にして始めて得ん。賓主互換。縱奪時に臨む。)臼曰く、屈棒屈棒。(點。這の老漢、什麼の死急をか着けたる。)僧曰く、人の喫する有る在り。(呵々。是れ幾箇の杓柄か、却つて這の僧の手裏に在る。)臼曰く、草々に箇の漢を打着す。(兩邊に落ちず。知んぬ他は是れ阿誰ぞ。)僧便ち禮拜す。(危に臨んで變ぜざるは、方さに是れ丈夫兒。)臼曰く、和尚却つて恁麼に去るや。(點。)僧大笑して出づ。(作家の禪客、天然に在る有り。猛虎須らく清風の隨ふことを得べし。方さに知る始めを盡し終りを盡すことを。天下の人、摸索不着。)臼曰く、消得恁麼、消得恁麼。(惜しむ可し放過することを。何ぞ劈脊に便ち棒せざる。將に謂へり、

り是の如きことを用ひ得たかとなり

走つて什麼の處にか到り去ると。)

【評】僧定州和尚の會裏より來つて、烏臼に到る。臼亦是れ作家。諸人若し這裏に向つて、此の一二人の一出一入を識得せば、千箇萬箇、只だ是れ一箇。主と作ることも也た恁麼、賓と作ることも也た恁麼、二人畢竟合して一家と成る。一期の勘辨、賓主問答、始終作家。看よ烏臼這の僧に問うて曰く、定州の法道、這裏に何似。僧便ち曰く、別ならずと。當時若し是れ烏臼にあらずんば、這の僧を奈何ともし難からん。臼曰く、若し別ならずんば、更に彼の中に轉じて去らんと云うて、便ち打つ。爭奈せん這の僧是れ作家の漢なることを、便ち曰く、棒頭に眼有り、草々に人を打つことを得ざれと。臼一向に會を行じて曰く、今日一箇を打着すと云うて、又打つこと三下す。其の僧便ち出で去る。看よ他の兩箇、轉轆々地にして

倶に是れ作家にして、這の一事を了することを。須らく緇素を分ち、休咎を別たんことを要す。這の僧、出で去ると雖ども、這の公案、却つて未だ了せざると在り。烏臼始終、他の實處を驗して、他如何と看んことを要す。這の僧却つて門を撐へ、戸を拄ふるに似たり、所以に未だ他を見得せず。烏臼曰く、屈棒元來、人の喫する有る在り。這の僧、身を轉じて氣を吐くことを要して、却つて他と爭はず、輕々に轉じて曰く、爭奈せん杓柄、和尙の手裏に在ることを。烏臼は是れ頂門に眼を具する底の宗師、敢て猛虎口裏に向つて、身を横へて曰く、汝若し要せば、山僧汝に回與せんと。這の僧是れ箇の肘下に符有る底の漢、所謂義を見て爲さゞるは勇無きなり、更に擬議せず近前して、烏臼手中の棒を奪うて、臼を打つこと三下す。烏臼曰く、屈棒屈棒と。汝且く道へ、意作麼生、頭上に道ふ、屈棒

〔卓朔〕卓は獨立の貌、朔は蘇也、即ち蘇生した活漢と云ふこと

元來、人の喫する有る在り。這の僧他を打つに到るに及んで、却つて道ふ、屈棒屈棒と。僧曰く、人の喫する有る在り。臼曰く、草々に箇の漢を打着すと。頭上に道ふ、草々に一箇を打着すと。末後自ら棒を喫するに到つて、什麼としてか亦道ふ、草々に箇の漢を打着すと。當時若し是れ這の僧、卓朔地なるにあらずんば、也た他を奈何ともせず、這の僧便ち禮拜す。這箇の禮拜、最も毒なり、是れ好心にあらず、若し是れ烏臼にあらずんば、也た他を識不破ならん。烏臼曰く、却つて恁麼にし去ると。其の僧大笑して出づ。烏臼曰く、消得恁麼、消得恁麼と。看よ他の作家の相見、始終賓主分明にして、斷じて能く續くことを、其の實は、也只だ是れ互換の機なり。他這裏に到りて、亦箇の互換の處有りと道はず。自ら是れ他の古人、情塵意想を絶して、彼此作家、亦得有り失有りと道はず。是れ一期の間の

語言なりと雖ども、兩箇活鱍々地にして、都べて血脈針線有り。若し能く此に於て見得せば、亦乃ち十二時中に向つて、歴々分明ならん。其の僧便ち出づ、是れ雙放、已下は是れ雙收、之れを互換と謂ふ。雪竇正恁麼地に頌出す。

頌。呼即易、天下人總疑着。臭肉引ニ來蠅一。天下衲僧、總不レ知ニ落處一。遣即難。不妨勦絕。海上明公秀。互換機鋒、子細看。一出一入、二俱作家。一條拄杖、兩人扶。且道、在ニ阿誰邊一。劫石固來、猶可レ壞。袖裏金鎚、如何辨取。千聖不傳。滄溟深處、立須レ乾。向ニ什麼處一安排。棒頭有レ眼。獨許他親得。烏臼老、烏臼老。可惜許。這老漢不レ識ニ好惡一。幾何般、也是箇無レ端漢。百千萬里。與ニ他杓柄一、太無レ端。已言在レ前。洎合レ打ニ破蔡州一。好與ニ三十棒一。且道過在ニ什麼處一。

〔呼ぶこと云々〕蛇を捕ふるものに譬ふ、即ち笛を吹いて蛇を吹びよせるは、いと易いことなるが之れを捕へるは困難なりと遣るは捕ふること〔明公秀〕幻人が幻人に遇ふとの方語なりと云ふ、尙ほ種々の說

讀方　呼ぶことは即ち易く、(天下の人總に疑着す。臭肉蠅を引き來る。天下の衲僧、總に落處を知らず。)遣ることは即ち難し。(妨げず勦絕することを。海上の明公秀。)互換の機鋒、子細に看よ。(一出一入、二り俱に作家。一條の拄杖、兩人扶く。且く道へ、阿誰が邊にか在る。)劫石固うし來るも、猶ほ壞す可し。(袖裏の金鎚、如何か辨取せん。千聖不傳。)滄溟深き處、立ろに乾かすべし。(什麼の處に向つてか安排せん。棒頭に眼有り。獨り許す他の親しく得ることを。)烏臼老、烏臼老。(可惜許。這の老漢、好惡を識らず。)幾何般ぞ。(也た是れ箇の端無き漢。百千萬里。)他に杓柄を與ふ、太だ端無し。(已に言前に在り。洎んど合に蔡州を打破すべし。好し三十棒を與ふるに。且く道へ、過什麼の處にか在る。)

【評】　呼ぶことは即ち易く、遣ることは即ち難し、一等に是れ落

あれども風外老師は日輪との説最も好しと云へり。〔劫石〕劫は梵語劫波、譯して時間と云ふ、詳くは評唱に出づ。〔蔡州を打破すべし〕死して弔はずと云ふ意味の俗諺なり。

草。雪竇忒煞だ慈悲、尋常道ふ、蛇を呼ぶことは易く、蛇を遣ることは難しと。如今箇の瓢子を將ちて、吹き來つて蛇を喚ぶことは即ち易く、遣らんと要する時即ち難し。一へに棒を將つて他に與ふることは却つて易く、復地の棒を奪ひて、遣り去ることは却つて難きに似たり。須らく是れ本分の手脚有りて、方に能く他を遣り得去るべし。烏臼は是れ作家、蛇を呼ぶ底の手脚有り、亦蛇を遣る底の手段有り。這の僧、也た是れ瞌睡底にあらず。烏臼問ふ、定州の法道、這裏と何似と、便ち是れ他を呼ぶ。烏臼便ち打つ、是れ他を遣るなり。僧曰く、棒頭に眼有り、草々に人を打つことを得ざれと、却つて這の僧の處に轉在して、便ち是れ呼び來す。烏臼曰く、汝若し要せば、山僧汝に回與せん。僧便ち近前して、棒を奪うて也た打つこと三下す、却つて是れ這の僧遣り去る。乃至這の僧、大笑して出づ。烏臼曰く、消得恁麼、消得恁麼、此れ分明に是れ他を遣り得て恰好なり。看よ他の兩箇の機鋒互換、絲來り線去つて、打成一片、始終賓主分明なることを。有る時は主却つて賓と作り、有る時は賓却つて主と作る。雪竇也た讃歎し及ぼさず、所以に道ふ、互換の機人をして且く子細に看しむと。劫石固うし來るも、猶ほ壞す可し、謂はゆる此の劫石、長さ四十里、廣さ八萬四千由旬、厚さ八萬四千由旬、凡そ五百年に、乃ち天人有りて下り來りて、六銖の衣袖を以て、拂ふこと一下、又去りて五百年に至りて、又來つて此の如く拂ふ、此の石を拂ひ盡すを、乃ち一劫と爲す。之れを輕衣拂石劫と謂ふ。雪竇曰く、劫石固うし來るも、猶ほ壞す可し、石は堅固なりと雖も、尚ほ爾も消磨し盡すべし。此の二人の機鋒は、千古萬古更らに窮盡有ること無し。滄溟深き處も、立ろに乾かすべし、任ひ

〔絲來り線去る〕絲をヤリトリすること。

第七十五則　烏臼屈棒

是れ滄溟、洪波浩渺、白浪滔天なるも、若し此の二人をして、内に向つて地に立たしめば、此の滄溟も、也た須らく乾竭すべし。雪竇此に到つて、一時に頌し了る。末後に更に道ふ、烏臼老、烏臼老、幾何般ぞと。或は擒或は縱、或は殺或は活、畢竟是れ幾何般ぞ。他に杓柄を與ふ、太だ端無し、這箇の拄杖子、三世の諸佛も也た用ひ、歷代の祖師も也た用ひ、宗師家も也た用ひて、人の爲めに釘を抽き楔を拔き、粘を解き縛を去る、爭でか輕易に人に分付し與ふることを得ん。雪竇の意、獨り用ひんことを要す。賴に這の僧當時、只だ他の爲めに平展するに値ふ、忽ち若し旱地に雷を起さば、看よ他如何か當抵せん。烏臼杓柄を過して、人に與へ去る、豈に是れ太だ端無きにあらざらんや。

第七十六則　丹霞喫飯了

垂示曰。細如米末、冷似氷霜。逼塞乾坤、離明絕暗。低々處、觀之有餘。高々處、平之不足。把住放行、總在這裏許。還有出身處也無。試擧看。

讀方　垂示に曰く。細なることは米末の如く、冷なることは氷霜に似たり。乾坤に逼塞して、明を離れ暗を絕す。低々たる處、之れを觀るに餘り有り、高々たる處、之れを平ぐるに足らず。把住放行、總に這の裏許に在り。還つて出身の處有りや也た無しや。試みに擧す看よ。

擧。丹霞問僧、甚處來。正是不可總沒來處。也。要知來處也不難。**僧曰、**

山下來、（着草鞋入爾肚裏過也。只是不會。言中有響。諳含來。知他是黃是綠。）霞曰、喫飯了也未。（第一杓惡水澆。何必定盤星。要知端的。）僧曰、喫飯了。（果然撞着箇露柱。却被旁人穿却鼻孔。元來是箇無孔鐵鎚。）霞曰、將飯來與汝喫底人、還具眼麼。（雖然是倚勢欺人、也是據款結案。當時好掀倒禪床。無端作什麼。）僧無語。（果然走不得。這僧若是作家、向他道與和尚眼一般。）長慶問保福、將飯與人喫、報恩有分、爲什麼不具眼。（也只道得一半。通身是遍身是。一刀兩段。一手擡一手搦。）福曰、施者受者、二俱瞎漢。（據令而行。一句道盡。罕遇其人。）長慶曰、盡其機來、還成瞎否。（識甚好惡。猶自未肯。討什麼椀。）福曰、道我瞎得麼。（兩箇俱是草裏漢。龍頭蛇尾。當時待他道盡其機來、還成瞎否、只向他道瞎。也只道得一半。一等是作家、爲什麼前不搆材後不迭店。）

（丹霞）鄧州の人、天然禪師と云ふ。石頭希遷禪師に嗣す達磨門下九世の法孫。

（肚裏）腹の中のと

（無孔の鐵鎚）手のつけやうのなきこと也。

讀方

擧す。丹霞僧に問ふ、甚の處より來る。（正に是れ總に來處沒かるべからず。）僧曰く、山下より來る。（草鞋を着けて、爾が肚裏に入つて過ぐ。只だ是れ會せず。言中に響き有り。諳含し來る。知んぬ他は是れ黃か是れ綠か。）霞曰く、飯を喫し了るや未しや。（第一杓の惡水澆ぐ。何ぞ必らずしも定盤星のみならんや。端的を知らんことを要す。）僧曰く、飯を喫し了る。（果然として箇の露柱に撞着す。却つて旁人に鼻孔を穿却せらる。元來是れ箇の無孔の鐵鎚。）霞曰く、飯を將ち來つて、汝に與へて喫せしむる底の人、還つて眼を具するや。（然かも是れ勢に倚つて人を欺くと雖ども、也た是れ款に據つて案を結す。當時好し禪床を掀倒するに。端無うして什麼か作さん。）僧無語。（果然として走ることを得ず。這の僧若し是れ作家ならば、他に向つて道はん、和尚の眼

〔長慶、保福〕此二人共に雪峯の法嗣なり。

と一般と。）長慶保福に問ふ、飯を將て人に與へて喫せしむる、恩を報ずるに分有り、什麼としてか眼を具せざる。（也た只だ一半を道ひ得たり。通身是、遍身是。一刀兩段。一手擡一手搦。）福曰く、施者受者、二り倶に瞎漢。（令に據つて行ず。一句に道ひ盡す。其の人に遇ふこと罕なり。）長慶曰く、其の機を盡し來らんに、還つて瞎と成らんや否や。（甚の好惡をか識らん。猶ほ自ら肯はず。什麼の椀をか討ねん。）福曰く、我を瞎すと道ひ得てんや。（兩箇倶に是れ草裏の漢、龍頭蛇尾。當時他の其の機を盡し來らんに、還つて瞎と成らんや否やと道ふことを待つて、只だ他に向つて瞎と道はん。也た只だ一半を道ひ得たり。一等に是れ作家、什麼としてか、前村に搆らず、後店に迯らざる。）

【評】鄧州丹霞の天然禪師は、何許の人と云ふことを知らず。初め儒學を習ひ、將に長安に入て擧に應ぜんとす。方に逆旅に宿す、忽ち白光室に滿つと夢む、占者曰く、解空の祥なりと。偶ゝ一禪客有り、問うて曰く、仁者何くにか往く。曰く、選官し去る。禪客曰く、選官は何ぞ選佛に如かん。霞曰く、選佛當に何れの所にか往く。禪客曰く、今江西に馬大師出世す、是れ選佛の場なり、仁者往くべしと。遂に直に江西に造る、才かに馬大師を見て、兩手を以て幞頭脚（脚一に額に作る）を托ぐ。馬大師顧視して曰く、吾れ汝が師に非ず。南嶽石頭の處に去れ。遽かに南嶽に抵つて、還つて前意を以て之れに投ず。石頭曰く、槽廠に着き去れ。師禮謝して、行者堂に入る。衆に隨つて作務すること凡そ三年、石頭一日衆に告げて曰く、來日佛殿前の草を剗らん。來日に至つて、大衆各々鍬钁を備へて草を剗る。丹霞獨り盆を以て、水を盛つて淨頭して、師の前に於て

〔幞頭〕黒羅三尺を以て後に向けて髮を裹む、之れを俗に幞頭と云ふ、即ち頭巾のこと也。〔托〕捧なり。

第七十六則　丹霞喫飯了

〔槽廠〕槽は獸を養ふ處、廠は馬屋の壁なきを云ふ、茲にては雜房の意なりと。

跪膝す。石頭見て之れを笑ふ、便ち爲めに剃髮し、又爲めに說戒す。丹霞耳を掩うて出づ。便ち江西に往いて再び馬祖に謁す、未だ參禮せざるに、便ち僧堂の內に去つて、聖僧の頸に騎て坐す。時に大衆驚愕して、急に馬祖に報ず。祖躬ら堂に入つて之れを視て曰く、我が子天然と。霞便ち下つて、禮拜して曰く、師の法號を賜ふことを謝す、因て天然と名く。他の古人、天然是の如く穎脫なり、所謂選官は選佛に如かず、傳燈錄の中に其の語句を載す。直に是れ壁立千仞、句々人の爲めに釘を抽き、楔を拔く底の手脚有り、這の僧に問ふに似たり、道く、什麼の處より來る。僧曰く、山下より來ると。這の僧却つて來處を通ぜず、一へに眼を具して、倒まに去つて主家を勘するが如くに相似たり。當時若し是れ丹霞にあらずんば、也た收拾を爲し難からん。丹霞却つて曰く、喫飯し了るや也た未だしや。

〔眨々〕眼の動く貌

頭邊は總て未だ見得せず、此れは是れ第二回他を勘す。僧曰く、喫飯し了れり、懵憧の漢、元來會せず。霞曰く、飯を將つて汝に與へて喫せしむる底の人、還つて眼を具するや。僧無語。丹霞の意に道く、汝這般の漢に飯を與へて喫せしめば、什麼を作すにか堪へん。這の僧若し是れ箇の漢ならば、試に一劄を與へて、他如何と看ん。然かも是の如くなりと雖ども、丹霞也未だ汝を放さざること在り。這の僧便ち眼眨々地にして無語。保福長慶、同じく雪峰の會下に在りて、常に古人の公案を擧して商量す。長慶保福に問ふ、飯を將ち て人に與へて喫せしむ、恩を報ずるに分有り、什麼としてか眼を具せざると、必らずしも盡く公案中の事を問はず。大綱此の語を借つて、話頭を作して、他の諦當の處を驗せんことを要す。保福曰く、施者受者、二り倶に瞎漢と、快なる哉。這裏に到つて、只だ當

第七十六則　丹霞喫飯了

機の事を論ず、家裏出身の路有り。長慶曰く、其機を盡し來らんに、還つて瞎と成らんや。保福曰く、我れを瞎すと道ひ得てんや。保福の意に謂はく、我れ恁麼に眼を具して、汝が與めに道ひ了れり、還つて我れ瞎すと道ひ得てんやと。然かも是の如くなりと雖ども、半合半開、當時若し是れ山僧ならば、他の其の機を盡し來るに、還つて瞎と成るや否やと道はんを等て、只だ他に向つて瞎と道はん。可惜許、保福當時若し這箇の瞎の字を下し得ば、雪竇許多の葛藤を免れ得ん、雪竇亦只だ此の意を用ひて頌す。

頌。盡機不成瞎。只道得一半。也要驗他過。言猶在耳。按牛頭喫草。失錢遭罪。半河南半河北。殊不知傷鋒犯手。四七二三諸祖師。有條攀條。帶累先聖。不唯只帶累一人。寶器持來、成過咎。盡大地人換手槌胸。還我拄杖來。帶累山僧、也出頭不得。過咎深、可煞深。天下衲僧跳不出。且道深多少。無處尋。在汝脚跟下。摸索不着。天上人間同陸沈。天下衲僧、一坑埋却。還有活底人麼。放過一着。蒼天蒼天。

〔牛頭〕云々　昔或人神に供物を供へて祭れるを見て其傍へ牛の頭丈けを持つて往つて其の口へ草を當てて食はせんとした、乃で人がそ

讀方　機を盡して瞎と成らず、（只だ一半を道ひ得たり。也た他を驗過せんことを要す。言猶ほ耳に在り。）牛頭を按じて草を喫せしむ。（失錢遭罪。半は河南、半は河北。殊に知らず鋒を傷り手を犯すことを。）四七二三の諸祖師。（條有れば條を攀づ。先聖を帶累す。唯只一人を帶累するのみに非らず。）寶器持し來つて、過咎と成る。（盡大地の人、手を換へて胸を槌つ。我に拄杖を還し來れ。山僧を帶累して、也た出頭不得ならん。）過咎深し、（可煞だ深し。天下の衲僧跳不出。且く道へ深きこと多少ぞ。）尋ぬるに處無し。（汝が脚跟下に在り。摸索不着。）天上人間同じく陸沈す。（天下の衲僧、一坑に埋却す。還つ

れを笑ふと、神も供物を食はぬであらうと笑つたと云ふ話が大智度論に有り、以て長慶保福の問答に譬ふ。

て活底の人有りや。一着を放過す。蒼天蒼天。）

【評】機を盡して瞎と成らず。長慶曰く、其の機を盡し來らんに、還つて瞎と成らんや否や。保福曰く、我を瞎すと道ひ得てんやと。一へに牛頭を按じて、草を喫せしむるに似たり、須らく是れ他の自ら喫せんを等つて、始めて得べし。那裏にか他の頭を按じて喫せしむ。雪竇恁麼に頌す、自然に丹霞の意を見得す。四七二三諸祖師、寶器を持し來つて、過咎と成る、唯只長慶を帶累するのみにあらず、乃至西天の二十八祖、此土の六祖、一時に埋却す。釋迦老子、四十九年、一大藏教を說いて、末後に唯だ這箇の寶器を傳ふ。永嘉道く、是れ形を標して、虛しく事褫するにあらず、如來の寶杖、親しく縱跡と。若し保福の見解を作さば、寶器持し來るも、都べて過咎と成る。過咎深し、尋ぬるに處無し、這箇汝が與めに說くこと得ず、但だ去つて靜坐して、他の句中に向つて點檢して看よ。既に是れ咎深し、什麼に因つてか、却つて尋ぬるに處無き。此れ小過に非らず、祖師の大事を將つて、一齊に陸地上に於て、平沈却す。所以に雪竇道く、天上人間同じく陸沈すと。

第七十七則　雲門餬餅

垂示曰。向上轉去、可以穿天下人鼻孔、似鶻捉鳩。向下轉去、自己鼻孔、在別人手裏、如龜藏殼。箇中忽有箇出來、道本來無向上向下、用轉作什麼、只向伊道、我也知汝向鬼窟裏作活計。且道、作麼生辨箇緇素。良久曰、有條攀條、無條攀例。試舉看。

〔鶻の鳩を捉ふ〕勢の敏捷なるに譬ふ。

【讀方】垂示に曰く、向上に轉じ去らば、以て天下の人の鼻孔を穿つべし、鶻の鳩を捉ふるに似たり。向下に轉じ去らば、自己の鼻孔、別人の手裏に在らん、龜の殼に藏るが如し。箇の中忽ち箇の出で來つて、本來向上向下無し、轉ずることを用ひて、什麼か作さんと道ふこと有らば、只だ伊れに向つて道はん、我も也た知る、汝が鬼窟裏に向つて、活計を作すことを。且く道へ、作麼生か箇の緇素を辨ぜん。良久して曰く、條有れば條を攀ぢ、條無ければ例を攀づ、試みに擧す看よ。

擧。僧問雲門、如何是超佛越祖之談。（開。旱地忽雷。撈。）門曰、餬餅。（舌拄上齶。過也。）

【讀方】擧す。僧雲門に問ふ、如何なるか是れ超佛越祖の談。（開。旱地の忽雷。撈。）門曰く、餬餅。（舌、上の齶を拄ふ。過てり。）

〔餬餅〕餬餅の餬は胡なり、即ち胡麻をつけた餅のこと、餬は寄食の意にして所謂居候のことなりともいふ。

〔聲色佛

【評】這の僧雲門に問ふ、如何なるか是れ超佛越祖の談。門曰はく、餬餅。還つて寒毛卓竪することを覺ゆるや、衲僧家佛を問ひ祖を問ひ禪を問ひ道を問ひ、向上向下を問ひ了つて、更に問ふことを得べき無うして、却つて箇の問端を致して、超佛越祖の談を問ふ。雲門は是れ作家、便ち水長ければ船高く、泥多ければ佛大なり、便ち答へて道く、餬餅と、謂つべし道虛りに行せず、功浪りに施さず。雲門復衆に示して曰く、儞作し了るべきこと勿くして、人の祖師意を道着するを見て、便ち超佛越祖の談の道理を問ふ、汝且く什麼を喚んでか佛と作し、什麼を喚んでか祖と作して、便ち超佛越祖の談と說く。便ち箇の出三界を問ふ、汝三界を把り來れ看ん。什麼の見聞覺知の、汝を隔碍着するか有らむ、什麼の聲色佛法の、汝に與へて了せ

法〕本錄には聲色法とありて佛の字なし。

〔驢屎〕五祖上堂に曰く、擧す僧雲門に問ふ、如何なるか是れ超佛越祖の談、門曰く、餬餅と、白雲卽ち然らず、忽ち人あり如何なるか是れ超佛越祖の談と問はば、只だ彼れに向つて道はん、驢屎馬糞に似たりと。

しむ可きか有らん、箇の什麼の碗をか了せん、那箇を以てか、差殊の見と爲さん。他の古聖、汝を奈何ともすること勿うして、身を横へて物の爲めにす。箇の擧體全眞、物々覿體と道ふも、不可得なり、我れ汝に向つて道ふも、直下に什麼の事か有らん、早く是れ埋沒し了れり、此の語を會得せば、便ち餬餅を識得せん。五祖曰く、驢屎麝香に比すと。（一に馬糞に作る）。所謂直に根源を截るは、佛の印する所、葉を摘み枝を尋ぬるは、我れ能はずと、這裏に到つて、親切を得んと欲せば、問を將ち來りて問ふこと莫れ。看よ這の僧問ふ、如何なるか是れ超佛越祖の談。門曰く餬餅と、還つて羞慚を識るや、還つて漏逗することを覺ゆるや。一般の人有りて、杜撰にして道ふ、雲門兎を見て鷹を放つて、便ち道ふ餬餅と。若し恁麼に餬餅を將つて、便ち是れ超佛越祖の談として見去らば、豈に活路有らんや。餬餅の會を作すこと莫れ、又超佛越祖の會を作さゞれ、便ち是れ活路なり。麻三斤解打鼓と一般なり。然かも只だ餬餅と道ふと雖ども、其の實見難し。後人多く道理を作して曰く、麁言及び細語、皆な第一義に歸すと。若し恁麼に會せば、且く去つて、座主と作つて、一生多知多解を贏得せよ。如今の禪和子道はく、超佛越祖の時、諸佛も也た脚跟下に踏在し、祖師も也た脚跟下に踏在す、所以に雲門只だ他に向つて餬餅と道ふと。既に是れ餬餅、豈に超佛越祖を解せんや、試みに去つて參詳して看よ。諸方の頌、極めて多し、盡く門頭邊に向つて、言語を作す、唯だ雪竇のみ頌し得て最も好し。試みに擧す看よ。

頌。超談禪客、問偏多、（箇々出來、便作二這般見解一。如レ麻似レ粟。）縫罅披

〔縫罅披離〕縫罅とは衣服等の縫目の綻びたること、披離とは其の綻びの爲めにバラ〳〵になつたことなり〔木槵子〕珠數を作るに用ふる木の實なり。〔攔〕遮なりと。〔塈〕塞なり、充滿せる貌。

離、見也麼。已在二言前一。開也。自屎不レ覺レ臭。餬餅塈來、猶不レ住、將二木槵子一、換二却汝眼睛一了也。至レ今天下、有二誵訛一。畫二箇圓相一曰、莫二是恁麼會一麼。咬二人言句一、有二甚了期一。大地茫々、愁二殺人一。便打。

讀方　超談の禪客、問ひ偏へに多し、（箇々出で來つて、便ち這般の見解を作す。麻の如く粟に似たり。）縫罅披離たり、見るや也た麼や。（已に言前に在り。開也。自屎臭を覺えず。）餬餅塈し來れども、猶ほ住まず、（木槵子を將つて、汝が眼睛と換却し了れり。）今に至るまで、天下誵訛有り。（箇の圓相を畫いて曰く、是れ恁麼に會すること莫しや。人の言句を咬まば、甚の了期か有らん。大地茫々として、人を愁殺す。便ち打つ。）

【評】　超談の禪客、問ひ偏へに多し、此の語禪和家、偏へに問ふを愛す。見ずや雲門道く、汝諸人、橫に拄杖を擔うて、我れ參禪學道すと道うて、便ち箇の超佛越祖の道理を覓む。我れ且く汝に問はん、十二時中、行住坐臥、屙屎放尿、茅坑裏の蟲子、市肆買賣、羊肉案頭に至つて、還つて超佛越祖底の道理有りや。道ひ得る底は出で來れ、若し無くんば、我が東行西行を妨ぐること莫れと、便ち下座。有る者は更に好惡を識らず、圓相を作して、土上に泥を加へ、枷を添へ鎖を帶ぶ。縫罅披離たり、見るや也た麼や、他問を致す處、大小大の縫罅有り、雲門他の問處披離たるを見て、所以に餬餅を將て、攔縫に塞定す。這の僧猶ほ自ら肯うて住まず、却つて更に問ふ。是の故に雲竇道く、餬餅塈し來れども、猶ほ住まず、今に至つて、天下誵訛有りと、如今の禪和子、只管に餬餅上に去つて解會す、然らざれば超佛越祖の處に去つて、道理を作す。既に此の兩

頭に在らずんば、畢竟して什麼の所にか在る、三十年後、山僧が骨を換へて出で來らんを待つて、却つて汝に向つて道はん。

第七十八則　開士入浴

〔開士〕開は、達なり、明なり、解なり、士は士夫なり、故に多く菩薩を呼ぶに開士と云ふ、即ち菩薩、詳しくは菩提薩埵の義譯なり。〔妙觸宣明〕妙觸は六塵中の觸塵に心奪はれぬこと、宣明とは宣は顯なり、著明

擧。古有㆓十六開士㆒、（成㆑群作㆑隊、有㆓什麼用處㆒。這一隊不喞𠺕漢。）於㆓浴僧時㆒、隨㆑例入㆑浴。（撞㆓着露柱㆒。漆桶作㆓什麼㆒。）忽悟㆓水因㆒、（惡水驀頭澆。）諸禪德作麼生會、他道㆓妙觸宣明、（更不㆑干㆓別人事㆒。作麼生會㆑他。撲落非㆓他物㆒。）成佛子住㆒。（天下衲僧到㆓這裏㆒、摸索不着。兩頭三面作㆓什麼㆒。）也須㆓七穿八穴、始得㆒。（一棒一條痕。莫㆑辜㆓負山僧㆒好。撞着磕着。還曾見㆓德山臨濟㆒麼。）

【讀方】擧す。古へ十六開士有り、（群を成し隊を作して、什麼の用處か有らん。這の一隊、不喞𠺕の漢。）浴僧の時に於て、例に隨つて入浴す。（露柱に撞着す。漆桶什麼をか作す。）忽ち水因を悟る、（惡水驀頭に澆ぐ、）諸禪德作麼生か會せん。他の妙觸宣明、（更に別人の事に干からず。作麼生か他を會せん。撲落他物に非らず。）成佛子住と道ふことを。（天下の衲僧、這裏に到て、摸索不着。兩頭三面、什麼か作さん。）也た須らく七穿八穴にして、始めて得べし。（一棒一條の痕。山僧を辜負すること莫くんば好し。撞着磕着。還つて曾て德山臨濟を見るや。）

【評】楞嚴會上の跋陀婆羅菩薩、十六開士と各々梵行を修す。乃ち各々所證の圓通、法門の因を說く、此れ亦二十五圓通の一數なり。他因に浴僧の時、例に隨つて浴に入て、忽ち水因を悟る、云く、既に塵をも洗はず、亦體をも洗はずと。且く道へ、箇の什麼をか洗

なり、分明なりと〔撲落〕打ち落すことにして、今は妙觸の脫體の形容なり。〔跋陀婆羅〕此に善守と云ふ、又は賢守、賢首とも云ふ、自ら賢德を守り、又衆生を守護し、衆賢者の首たるを以てなりと。

ふ。若し會得し去らば、中間安然として、所有無きことを得ん、千箇萬箇、更に近傍することを得ず、所謂無所得、是れ眞の般若なるを以てなり。若し所得有らば、是れ相似の般若なり。見ずや達磨二祖に謂うて曰く、心を將ち來れ、汝が與めに安んぜん。二祖曰く、心を覓むるに了に不可得なりと。這裏の些子、是れ衲僧性命の根本、更に總に如許多の葛藤を消得せず。只だ箇の忽ちに水因を悟ると道ふことを消せば、自然に了當せん。既に塵をも洗はず、亦體をも洗はず、且く道へ、箇の什麼をか悟る。這般の田地に到つて一點も亦た着くることを得ず。箇の佛の字を道ふも、也た須らく諱却すべし、他道ふ、妙觸宣明、成佛子住と。宣は則ち是れ顯なり、妙觸は是れ明なり、既に妙觸を悟れば、佛子住を成して、即ち佛地に住す。如今の人も亦浴に入り、亦水に洗ふ、也た恁麼に觸る、甚に

〔水因を悟る〕水は元無因にして了に得べからず、即ち其の無情を悟るなり。〔便ち惺惺〕一本には便ちの文字なし。〔玄沙云々〕禪林類聚に曰く、玄沙初め雪峯に參じ、後ち遍く知識に參尋せんと

因てか却つて悟らざる。皆塵境に惑障せられて、皮に粘き骨に着く、所以に便ち惺々にして去ること能はず。若し這裏に向つて、洗も亦無所得、觸も亦無所得、水因も亦無所得ならば、且く道へ、是れ妙觸宣明か、是れ妙觸宣明にあらざるか。若し箇裏に向つて、直下に見得せば、便ち是れ妙觸宣明、成佛子住なり。如今の人も亦觸る、還つて妙處を見るや。妙觸は常の觸の觸する者と、合すれば則ち觸と爲り、離すれば則ち非なるに非ず。玄沙嶺を過ぎて、脚指頭を磕着す、以て至る德山の棒、豈に是れ妙觸にあらずや。然かも恁麼なりと雖ども、也た須らく是れ七穿八穴にして、始めて得べし。若し只だ身上に向つて摸索せば、什麼の交渉か有らん、汝若し七穿八穴にし去らば、何ぞ須ひん浴に入ることを。便ち一毫端上に於て、寶王刹を現じ、微塵裏に向つて、大法輪を轉ず、一處透得す

欲す、鉢囊を携へ飛猿嶺を出で石に脚指頭を築着して流血、痛楚、忽然として猛省す、曰く、是の身有に非らず、痛何より來ると、遂に即ち雪峯に回ると。〔德山の棒〕德山凡そ僧の門に入るあれば便

れば、千處萬處一時に透る、只だ一窠一窟を守ること莫れ。一切處都べて是れ觀音入理の門、古人亦聞聲悟道、見色明心有り。若し一人悟り去ることは、則ち故らに是、甚に因つてか十六開士、同時に悟り去る。是の故に古人、同修同證、同悟同解す。雪竇他の教意を拈じて、人をして妙觸の處に去つて會取せしむ。他の教眼を出して頌し得て、人の教網の裏に去つて、籠罩して半醉半醒なることを免れん、人をして直下に灑々落々たらしめんことを要す。

頌。了事衲僧、消二一箇一。（現有二一箇一。朝打三千、暮打八百。跳二出金剛圈一。一箇也不二消得一。）長連床上、展レ脚臥。（果然是箇瞌睡漢。論レ劫不レ論レ禪。）夢中曾說、悟二圓通一。（早是瞌睡更說レ夢。却許汝夢見。寐悟作二什麼一。）香水洗來、驀面唾。（咄。土上加レ泥又一重。莫下來二淨地上一屙上。）

ち棒す、棒下の無生忍、即ち是れ妙觸宣明なりと。〔了事云々〕心事了畢也。經に曰く既に一人眞を發して源に歸すれば、十方虛空消殞すと〔長連床〕僧堂にて衆僧の坐禪する處只だ單とも云ふ。〔古人〕夾

【讀方】了事の衲僧、一箇を消す、（現に一箇有り。朝打三千、暮打八百。金剛圈を跳出す。一箇も也消得せず。）長連床上、脚を展べて臥す。（果然として是れ箇の瞌睡の漢。劫を論じて禪を論ぜず。）夢中曾て說く、圓通を悟ると。（早く是れ瞌睡して、更に夢を說く。却つて汝に許す夢に見ることを。寐悟して什麼をか作さん。）香水洗ひ來るも、驀面に唾せん。（咄。土上に泥を加ふ又一重。淨地上に來つて屙すること莫れ。）

【評】了事の衲僧、一箇を消すと、且く道へ、箇の什麼の事をか了得する。作家の禪客、聊か擧着するを聞いて、剔起して便ち行く、恁麼の衲僧に似たる、只だ一箇を消得す、何ぞ用ひん、群を成し隊を成すことを。長連床上に、脚を展べて臥す。古人道く、明々として悟法無し、悟了せば却つて人を迷はす、長く兩脚を舒べて睡

山善會禪師なり。

れば、僞も無く亦眞も無しと。所以に胸中一事無し、飢來れば飯を喫し、困じ來れば眠る。雪竇の意に道く、汝若し浴に入て、妙觸宣明を悟得すと說かば、這般無事の衲僧分上に在つては、只だ夢中に夢を說くに似たり。所以に道ふ、夢中曾て說く、圓通を悟ると、香水洗ひ來るも、驀面に唾せんと。恁麼に似たるも、只是れ惡水驀頭に澆ぐ、更に箇の什麼の圓通とか說かん。雪竇道く、這般の漢に似たるも、正に好し驀頭驀面に唾せん。山僧は道ふ、土上に泥を加ふ又一重と。

第七十九則　投子𡱁沸碗

垂示曰。大用現前、不レ存二軌則一。活捉生擒、不レ勞二餘力一。且道、是什麼人曾恁麼來、試擧看。

讀方　垂示に曰く、大用現前、軌則を存せず。活捉生擒、餘力を勞せず。且く道へ、是れ什麼人か曾て恁麼にし來る。試みに擧す看よ。

擧。僧問二投子一、一切聲是佛聲、是否。也解レ捋二虎鬚一。靑天轟二霹靂一。自屎不レ覺レ臭。投子曰、是。賺二殺一船人一。賣レ身與レ汝了也。拈二放一邊一。是什麼心行。僧曰、和尚莫二𡱁沸碗鳴聲一。只見二錐頭利一、不レ見二鑿頭方一。道二什麼一。果然納二敗缺一。投子便打。着。好打、放過則不可。又問、麁言及細語、皆歸二第一義一、是否。第二回捋二虎鬚一。抱レ贜叫レ屈、作二什麼一。東西南北、猶有二影響一在。投子曰、是。又是賣レ身與レ汝了也。陷虎之機也。是什麼心行。僧曰、喚二和尚一、作二一頭驢一得麼。只見二錐頭利一、不レ見二鑿頭方一。雖レ有二逆水之波一、只是頭上無レ角。含レ血噀レ人。投子便打。不着。

可ニ放過一。好打、拄杖未ㇾ到ㇾ折、因ニ什麼一便休去。

【讀方】擧す。僧投子に問ふ、一切の聲は是れ佛聲と、是なりや否や。(也た虎鬚を捋づることを解す。青天に霹靂を轟かす。自屎臭を覺えず。)投子曰く、是。(一船の人を賺殺す。身を賣つて汝に與へ了れり。一邊に拈放す。是れ什麼の心行ぞ。)僧曰く、和尚屎沸碗鳴聲すること莫れ。(只だ錐頭の利を見て、鑿頭の方を見ず。什麼と道ふぞ。果然として敗缺を納る。)投子便ち打つ。(着。好打、放過せば則ち不可。)又問ふ、麄言及び細語、皆第一義に歸すと、是なりや否や。(第二回虎鬚を捋づ。贓を抱き屈を叫んで、什麼とか作さん。東西南北、猶ほ影響の在る有り。)投子曰はく、是。(又是れ身を賣つて汝に與へ了れり。陷虎の機也。是れ什麼の心行ぞ。)僧曰く、和尚を喚んで、一頭の驢と作し得てんや。(只だ錐頭の利を見て、鑿頭の方を見ず。逆水の波有りと雖ども、只だ是れ頭上に角無し。血を含んで人に噀ぐ)投子便ち打つ。(着。放過すべからず。好打、拄杖未だ折るるに到らず、什麼に因つてか便ち休し去る。)

〔投子〕舒州の投子山大同禪師、青原下五世達磨門下第十一世の法孫なり、實頭にして能辯なりしと。

〔一切の聲云々〕梵天所問經、法華經常不輕品等に出づ。

【評】投子は朴實頭にして、逸群の辯を得たり、凡そ問を致すこと有りて、口を開けば便ち膽を見る、餘力を費さず、便ち他の舌頭を坐斷す。謂つべし籌を帷幄の中に運らして、勝を千里の外に決すと。這の僧聲色佛法の見解を將ちて、他の額頭上に貼在して、人に逢うて便ち問ふ。投子は作家、來風深く辨ず。這の僧投子の實頭なることを知つて、合下に箇の圈繢を做して、投子をして入り來らしむ。所以に後語有り。投子却つて陷虎の機をして、他の後語を釣り出し來る。這の僧、他の答處を接して道ふ、和尚屎沸碗鳴聲すること莫れ

〔屎沸碗鳴聲〕屎は尾竅なり、尻なりとて肛門のこと、沸はフッ音聲のあること、碗鳴聲は塗物の椀に熱湯を注いだ時の音のすること、以て其の意を知るべし。

〔合下〕直下に同じ

〔後語〕再拶のこと

〔咬猪狗〕猛虎の手脚あることを云ふ

と。果然として一釣に便ち上る、若し是れ別人ならば、則ち這の僧を奈何ともせず。投子は具眼、後に隨つて便ち打つ、咬豬狗底の手脚なり、須らく作家に還して、始めて得べし。左轉も也た他に隨つて阿轆々地、右轉も也た他に隨つて阿轆々地。這の僧既に是れ箇の圈繢子を做して、來つて虎鬚を捋でんことを要す、殊に知らず、投子更に他の圈繢頭上に在ることを。投子便ち打つ。這の僧可惜許、頭有りて尾無し。當時他の棒を拈ぜんことを等つて、便ち與めに禪床を掀倒せば、直饒ひ投子全機なりとも、也た須らく倒退三千里すべし。又問ふ、麁言及び細語、皆第一義に歸すと、是なりや否や。投子亦曰く、是と。一へに前頭の語に似て異なること無し。僧曰はく和尚を喚んで、一頭の驢と作し得てんや。投子又打つ。這の僧然も窠窟を作すと雖ども、也た妨げず奇特なることを。若し是れ曲彔木床上の老漢、頂門に眼無くんば、也た他を折挫し難からん。投子轉身の處有り、這の僧既に箇の道理を做して、他の行市を攙かんことを要す。到り了れば、舊に依て投子老漢を奈何ともせず。見ずや巖頭道く、若し戰を論ぜば、箇々轉處に立在すと。投子放去は太だ遲く、收來は太だ急なり。這の僧當時若し身を轉じ、氣を吐くことを解せば、豈に箇の口、血盆に似たる底の漢と作り得ざらんや。衲僧家、一做さゞれば、二休せず、這の僧既に擲却すること能はず投子に鼻孔を穿了せらる。

〔擲却〕一本には返却に作る

頌。投子投子、（灼然。天下無二這實頭老漢一。敎二壞人家男女一。）機輪無レ阻。（有二什麼難一。奈二何他一處。也有二些子一。）放レ一得レ二、（換二却汝眼睛一。什麼處見二投子一。）同レ彼同レ此。（恁麼來也喫レ棒、不恁麼來也喫レ棒。闍梨替レ他便打。）可レ憐無レ限弄レ潮人、（叢林中放出一箇半箇。放出這

（阻無し）阻は阻礙の義なり、故に阻無しは自由自在の意なり

兩箇漢。天下衲僧恁麼去。**畢竟還落ニ潮中一死。**可惜許。爭奈出ニ這圏繢一不レ得。愁人莫下向ニ愁人一說上。**忽然活、**禪床震動。驚ニ殺山僧、也倒退三千里。**百川倒流鬧湉々。**嶮。徒勞ニ佇思一。山僧不ニ敢開レ口。投子老漢、也須下是拗ニ折拄杖一始得上。

【讀方】投子投子、（灼然。天下に這の實頭の老漢無し。人家の男女を教壞す。）機輪阻無し。（什麼の他を奈何ともし難き處か有らん。也た些子有り。）一を放ちて二を得たり、（汝が眼睛を換却す。什麼の處にか投子を見ん。）彼れに同じく此れに同じ。（恁麼にし來るも也棒を喫し、不恁麼にし來るも也た棒を喫す。闍梨他に替るも便ち打たん。）憐む可し限り無き潮を弄するの人、（叢林中一箇半箇を放出す。這の兩箇の漢を放出す。天下の衲僧、恁麼にし去る。）畢竟還つて潮中に落ちて死す。（可惜許。爭奈せん這の圏繢を出づることを得ず。愁人は愁人に向つて說くこと莫れ。）忽然として活せば、（禪床震動せん。山僧を驚殺して、也た倒退三千里ならしむ。）百川倒まに流れて、鬧湉々たらん。（嶮。徒らに佇思するに勞す。山僧敢へて口を開かず。投子老漢も、也た須らく是れ拄杖を拗折して、始めて得べし。）

（湉々）水の流れる音の形容なり。

（古人）雪竇なり。

【評】投子投子、機輪阻てなし。投子尋常道ふ、汝總に道ふ、投子實頭なりと、忽然として山を下ること三歩せん。人有り汝に問うて如何なるか是れ投子實頭の處と道はゞ、汝作麼生か抵對せん。古人道く、機輪轉ずる處、作者猶ほ迷ふと。他機輪轆々地にして、全く阻隔無し、所以に雪竇道く、一を放ちて二を得たりと。見ずや僧問ふ、如何なるか是れ佛。投子曰はく、佛。又問ふ、如何なるか是れ道。投子曰はく、道。又問ふ、如何なるか是れ禪。投子曰はく、禪。又

問ふ、月未だ圓かならざる時如何。投子曰はく、三箇四箇を吞却す。圓かなる後ち如何。七箇八箇を吐却す。投子人を接するに、常に此の機を用ふ、這の僧に答ふるに、只だ是れ一箇の是の字。這の僧兩回打せらる。所以に雪竇道はく、彼れに同じく此れに同じと。四句、一時に投子を頌し了れり。末後に這の僧を頌して道はく、憐れむべし限り無き、潮を弄する人と。這の僧、敢へて旗を攙き鼓を奪うて道ふ、和尙孛沸碗鳴聲すること莫れと。又道はく、和尙を喚んで、一頭の驢と作し得てんやと、此れ便ち是れ潮を弄する處なり。這の僧伎倆を做し盡して、依前として投子の句中に死在す。投子便ち打つ、此の僧便ち是れ畢竟還つて、潮中に落ちて死す。雪竇這の僧を出して曰はく、忽然として活して、便ち與めに禪定を掀倒せんには、投子も也た須らく倒退三千里すべし。直に得ん百川倒流して、

〔岌嶁〕岌は高山のこと、嶁は崖のこと也。
〔陡暗〕陡は頓なり峻立なり、即ち忽ち暗黒となること、一本に陡を陸に作るは誤りなり
〔孩子〕赤子のこと
〔六識〕眼耳鼻舌身

閙濶々たることを。唯だ禪床の震動するのみに非らず、亦乃ち山川岌嶁として、天地陡暗ならん。苟し或は箇々此の如くならば、山僧且く退鼓を打たん、諸人什麼の處に向つてか、安身立命せん。

第八十則　趙州急水上

擧。僧問趙州、初生孩子、還具六識也無。閃電之機。說什麼初生孩子。趙州曰、急水上打毬子。過也。俊鶻趁不及。也要驗過。僧復問投子、急水上打毬子、意旨如何。也是作家、同驗過。還會麼。過也。子曰、念々不停流。打葛藤漢。

讀方　擧す。僧趙州に問ふ、初生の孩子、還つて六識を具するや也た無しや。（閃電の機。什麼の初生の孩子とか說かん。）趙州曰く、急水上に毬子を打す。（過てり。俊鶻趁へども及はず。也た驗過せん

意の六根が、色聲香味觸法の六境に對して識別するの心的作用を云ふ。

〔古人道〕華嚴經離世間品の文也。

〔八識を轉じて云々〕第八阿賴耶識を轉じて大圓鏡智を得、第七末那識を轉じて平等性智を得、第六意識を轉じて妙觀察智を得、第五識を轉じて成所作智を得るなり、之を轉識得智と云ふ。

〔根塵識〕六根と六境(塵)と六識との十八界なり。

〔勝義根〕根に二種ありて、一を勝義

ことを要す。)僧復投子に問ふ、急水上に毬子を打すと云ふ、意旨如何。(也た是れ作家、同じく驗過す。還つて會すや。過てり。)子曰く、念々不停流。(葛藤を打する漢。)

【評】此の六識、教家に立て、正本と爲す、山河大地、日月星辰、其れに因つて生ずる所以なり、來る時に先鋒と爲り、去る時は殿後となる。古人道く、三界唯心、萬法唯識と。若し佛地を證すれば、八識を以て轉じて四智と爲す、教家に之れを名を改めて、體を改めずと謂ふ。根塵識是れ三つ、前塵は元分別を會せず、勝義根、能く識を發生し、識能く色の分別を顯はす、卽ち是れ第六の意識なり。第七識の末那識、能く去つて世間一切の影事を執持して、人をして煩惱して、自由自在なることを得ざらしむ、皆な是れ第七識なり。第八識に到つて、亦之れを阿賴耶識と謂ふ、亦之れを含藏識と謂ふ、一切善惡の種子を含藏す。這の僧教意を知りて、故らに將ち來つて趙州に問ふ、道く、初生の孩子、還つて六識を具するや也た無しやと。初生の孩兒、六識を具して、眼能く見、耳能く聞くと雖ども、然も未だ曾て六塵を分別せず、好惡長短、是非得失、他恁麼の時總に知らず。學道の人、復嬰孩の如くならんことを要す。榮辱功名、逆情順境、都て他を動ずることを得ず。眼色を見て盲と等しく、耳聲を聞いて聾と等し、痴の如く兀に似たり、其の心動ぜざること、須彌山の如し。這箇は是れ衲僧家、眞實得力の處なり。古人道く、衲被蒙頭萬事休す、此の時山僧、都て不會と。若し能く是の如くならば、方に少分の相應有らん。然も此の如しと雖ども、爭奈せん一點も也た他を瞞し得ざることを。山は舊に依つて是れ山、水は舊に依つて是れ水、造作無く、緣慮無し、日月の太虛を運つて、未だ

根と云ひ一を扶塵根と云ふ、扶塵根とは外相のことにして勝義根とは内在の微なり。
〔古人道〕石頭和尚草庵の歌にある文なり。
〔我〕日月を指す。
〔古人尚云々〕古人は同安の常察なり。
〔又道ふ〕

嘗て暫くも止まらざるが如し。亦我れ許多の名相有りと道はず、天の普く蓋ふが如く、地の普く擎ぐるに似たり。無心なるが爲めの故に、所以に萬物を長養す。亦我れ許多の功行有りと道はず、天地無心なるが爲めの故に、所以に長久なり。若し有心ならば、則ち限齊有らん。得道の人も、亦復是の如し、無功用の中に於て、功用を施す、一切の違情、順境、皆慈心を以て攝受す。這裏に到りて、古人尚ほ自ら呵責して道ふ、了々の時、了すべき無く、玄々の處、直に須らく呵すべしと。又道はく、事々通じ、物々明らかなり、達者は之れを聞いて、暗裏に驚くと。又曰はく、聖に入り凡を超えて、聲を作さず、臥龍長く怖る、碧潭の淸きことを、人生若し長く此の如きことを得ば、大地那ぞ能く一名を留めんと。然も恁麼なりと雖ども更に須らく窠窟を跳出して、始めて得べし。豈に見ずや教中に

紫塞野人雪子の吟なり。
〔又曰〕龍牙居遁の偈。
〔教中道〕華嚴經十地品に曰く、此の地の菩薩一切の功用を捨て、無功用の道を得、身口意業の念務皆息み、報行に住す、即ち佛心菩薩心涅槃心、尚

道はく、第八不動地の菩薩、無功用の智を以て、一微塵の中に於て、大法輪を轉ず、一切時の中、行住坐臥に於て、得失に拘はらず、任運に薩婆若海に流入す。衲僧家、這裏に到つて、亦執着すべからず、但だ時に隨つて自在なり。茶に遇うては茶を喫し、飯に遇うては飯を喫す、這箇向上の事、箇の定の字を着くることも也た得ず、箇の不定の字を着くることも也た得ず。石室の善道和尚、衆に示して曰く、汝見ずや、小兒出胎の時、何ぞ曾て我れ看教を會すと道はん、恁麼の時に當つて、亦有佛性の義、無佛性の義と云ふことを知らず、長大するに至るに及んで、便ち種々の知解を學んで、出で來つて便ち道ふ、我れ能くし我れ解すと、是れ客塵煩惱なることを知らず。十六觀行の中、嬰兒行を最と爲す、哆々啝々の時を、學道の人の、分別取捨の心を離るゝに喩ふ、故に嬰兒を讃歎して、況喩

第八十則　趙州急水上

ほ現起せず、況んや復た世間の心を起さんや云々と。〔薩婆著〕一切智と譯す。〔定不定〕華嚴合論に曰く、一切凡夫の法は是れ、不定法、一切諸佛の法は是れ定法と。〔客塵煩惱〕分別俱生の煩惱及び所

して之れを取るべし。若し嬰兒是れ道と謂はゞ、今時の人錯つて會せん。南泉曰く、我れ十八上にして作活計を解すと。趙州曰ふ、我れ十八上にして、破家散宅を解すと。又道く、我れ南方に在りて二十年、粥飯の二時、是れ雜用心の處なるを除くと。曹山僧に問ふ、菩薩定中に、香象の河を渡るを聞くこと、歷々地なりと、什麼の經よりか出でたる。僧曰はく涅槃經。山曰く定前に聞くか、定後に聞くか。僧曰はく和尙流せり。山曰く灘下に接取せよと。又楞嚴經に曰く湛入合湛、識の邊際に入ると。又楞伽經に曰く相生は執礙、想生は妄想、流注生は則ち妄を逐うて流轉すと。若し無功用の地に到るも、猶ほ流注相の中に在り、須らく是れ第三の流注生相を出得して、方に始めて快活自在なるべし。所以に潙山仰山に問うて曰く、寂子如何、仰山曰ふ、和尙他の見解を問ふか、他の

知の二障なり、是れ眞常の情に非ず、故に客なり、眞情を染汚惑亂する故に塵なり。〔十六觀行〕涅槃經に聖行、梵行、天行、嬰兒行、病行の五行を說けり、此五行中天行を除き、四敎に配す、故に四四十六となる、四

行解を問ふか、若し他の行解を問はば、某甲知らず、若し是れ見解ならば、一瓶の水を、一瓶の水に注ぐが如しと。若し此の如きことを得ば、皆以て一方の師と爲る可し。趙州曰く、急水上に毬子を打すと。早く是れ轉轆々地、更に急水上に向つて打する時、眨眼すれば便ち過ぐ。譬へば楞嚴經に云ふが如し、急流水の望みは恬靜と爲るが如し。古人曰く、譬へば駛流水の如し、水流れて定止無し、各各相知らず、諸法も亦此の如しと。趙州の答處、意渾べて此れに類す。此の僧又投子に問ふ、急水上に毬子を打すと云ふ、意旨如何。子曰く、念々不停流と。自然に他の問處と恰好なり。古人の行履、綿密に答へ得て、只だ一箇に似たり、更に計較を消せず、汝纔かに他に問はば、早く汝が落處を知り了れり。孩子の六識、然も無功用なりと雖ども、爭奈せん念々停まらずして、密水の流るゝが如き

教とは藏通別圓なり。〔十八上〕上は同、又は度の義か。即ち十八同又は十八度ならんとの説あれど、大悟十八、小悟其數を知らずの如きは自在を云ふものにして決して數に限らず。蓋しその意か。〔湛入合

ことを。投子恁麼に答ふ、謂つ可し深く來風を辨ずと。雪竇の頌に曰く、

頌。六識無功、伸二一問一。有レ眼如レ盲、有レ耳如レ聾。明鏡當レ臺、明珠在レ掌。一句道盡。作家曾共辨二來端一。何必也。要レ辨二箇緇素一。唯證乃知。茫々急水、打二毬子一。始終一貫。過也。道二什麼一。落處不レ停、誰解レ看。看即瞎。過也。灘下接取。

讀方　六識無功、一問を伸ぶ、（眼有れども盲の如く、耳有れども聾の如く、明鏡臺に當り、明珠掌に在り。一句に道ひ盡す。）作家曾て共に、來端を辨ず。（何ぞ必とせん。也た箇の緇素を辨ぜんことを要す。唯證して乃ち知る。）茫々たる急水に、毬子を打す、（始終一貫。過てり。什麼と道ふぞ。）落處停まらず、誰れか看ることを解せん。（看ば即ち瞎せん。過てり。灘下に接取せよ。）

湛〕上の湛は六識、即ち精を見精を聞く等、下の湛は八識の湛體、即ち情識を凝らして妙湛に合して、六八相冥する也と。〔古人曰く〕唐譯華嚴經の文なり。〔龍を降し云々〕佛本行經に曰く、佛初めに

【評】六識無功、一問を伸ぶ、古人の學道、養うて這裏に到る、之れを無功の功と謂ふ、嬰兒と一般なり。眼耳鼻舌身意有りと雖ども而も六塵を分別すること能ばず、蓋し無功用なればなり。既に這般の田地に到つて、便乃ち龍を降し虎を伏し、坐脫立亡す。如今の人は、但だ目前の萬境を將つて、一時に歇却す、何ぞ必らずしも八地以上にして、方に乃ち是の如くならん。然も無功用の處なりと雖ども、舊に依つて山は是れ山、水は是れ水。雪竇前面に頌して曰く、活中に眼有り、還つて死に同じ、藥忌何ぞ須ひん、作家を鑒みること。蓋し趙州投子、是れ作家なるが爲めに、故に云ふ、作家曾て共に、來端を辨ず、茫々たる急水に、毬子を打すと。投子道く、念々不停流、諸人還つて落處を知るや。雪竇末後に、人をして自ら眼を着けて看しむ。是の故に曰く、落處停まらず、誰か看ることを解せ

法輪を轉じて三迦葉を降す、火神堂に於て威光を放ち、彼の火龍の毒火を滅す、四面一時に洞然熾盛なり、唯だ所坐の所有寂靜として火光を見ず、火龍見つて漸く佛所に向ひ、便ち身を踊らして佛鉢中に入る云々と。虎を降すは巖隊尊者の如き是れなり。

んと。此れは是れ雪竇の活句、且く道へ、什麼の處にか落在する。

佛果圜悟禪師碧巖錄卷之八　終

〔旗を攙き云々〕宗師家大活現成の作略を云ふ。

佛果圜悟禪師碧巖錄卷之九

第八十一則　藥山麈中麈

垂示曰。攙レ旗奪レ鼓、千聖莫レ窮。坐二斷諸訛一、萬機不レ到。不二是神通妙用一、亦非二本體如然一。且道、憑二箇什麼一、得二恁麼奇特一。

讀方 垂示に曰く。旗を攙き鼓を奪ふ、千聖も窮むること莫し。諸訛を坐斷して、萬機到らず。是れ神通妙用にあらず、亦本體如然に非ず。且く道へ、箇の什麼に憑つてか、恁麼に奇特なることを得たる。

擧。僧問二藥山一、平田淺草、麈鹿成レ群、如何射二得麈中麈一。把レ髻投レ衙。擊レ頭帶レ角出來。腦後拔レ箭。山曰、看レ箭。就レ身打劫。下坡不レ走。

〔藥山〕澧州藥山の惟儼禪師なり石頭の法嗣、達磨九世の法

快便難逢。着。

僧放身便倒。灼然不同。一死更不再活。弄精魂漢。山曰、侍者拖出這死漢。據令而行。不勞再勘。前箭猶輕、後箭深。僧便走。棺木裡瞠眼。死中得活。猶有氣息在。山曰、弄泥團漢、有什麼限。可惜許放過。據令而行。雪上加霜。雪竇拈曰、三步雖活、五步須死。一手擡一手搦。直饒走百步、也須喪身失命。復云看箭。且道、雪竇意、落在什麼處。若是同死同生、藥山直得目瞪口呿。一向似無孔鐵鎚堪作何用。

【讀方】舉す。僧藥山に問ふ、平田の淺草、麈鹿群を成す、如何か麈中の麈を射得せん。（髻を把て衙に投ず。頭を擎げ角を帶して出で來る。腦後に箭を拔く。）山曰く、箭を看よ。（就身打劫。下坡に走らざれば快便逢ひ難し。着。）僧身を放つて便ち倒る。（灼然として同

孫。〔麈〕鹿の最も大なるものにて、多くの子を引き連れて歩くとか。〔髻を把て云々〕髻を把るは戰敗れて胄を脱いだ姿、衙は官衙なり、即ち罪人の自首する如きを云ふ。

じからず。一死更に再活せず。精魂を弄するの漢。）山曰く、侍者這の死漢を拖き出せ。（令に據つて行す。再勘するを勞せず、前箭は猶ほ輕く、後箭は深し。）僧便ち走る。（棺木裡に瞠眼す。死中に活を得たり。猶ほ氣息の在る有り。）山曰く、泥團を弄するの漢、什麼の限りか有らん。（可惜許放過することを。令に據つて行ず。雪上に霜を加ふ。）雪竇拈じし曰く、三步には活すと雖ども、五步には須らく死すべし。（一手擡一手搦。直饒ひ走ること百步するも、也た須らく喪身失命すべし。）復云く箭を看よ。且く道へ、雪竇の意、什麼の處にか落在する。若し是れ同死同生せば、藥山直に得たり、目瞪し口呿することを。一向に無孔の鐵鎚に似ば、何の用をか作すに堪へん。）

【評】這の公案洞下に之れを借事問と謂ひ、亦之れを辨主問と謂ふ、用ひて當機を明す。鹿と麈とは、尋常射易し、唯だ麈中の麈のみ有

〔弓弦上〕一本に弓箭上とあ

つて、是れ鹿中の王なり。最も是れ射難し。此の麈鹿、常に崖石の上に於て、其の角を利ぐ、鋒鋩の頴利なるが如し。身を以て群鹿を護惜す、虎も亦近傍すること能はず。這の僧亦惺々なるに似たり、引き來りて藥山に問ふ、用ゐて第一機を明かす。山曰く、箭を看よと、作家の宗師、妨げず奇特なることを。撃石火の如く、閃電光に似たり。豈に見ずや、三平初め石鞏に參ず、鞏才かに來るを見て、便ち弓を彎く勢を作して曰く、箭を看よ。三平胸を撥開して曰く、此れは是れ殺人箭か活人箭か。鞏、弓弦を彈ずること三下。三平便ち禮拜す。鞏曰く、三十年、一張の弓、兩隻の箭、今日只だ半箇の聖人を射得したり、と云うて便ち弓箭を拗折す。三平後に大顚に擧似す。顚曰く、既に是れ活人箭、什麼としてか弓弦上に向つて辨ず。三平無語。顚曰く、三十年後、人の此の話を擧似せんことを要

り、蓋し誤りなり

〔法燈〕清涼の泰欽法眼文益禪師に嗣法す。

〔垜〕射垜と云うて的を懸くる垜を云ふ。

すとも、也た得難し。法燈頌有り曰く、古 石鞏師あり、弓矢を架して坐す、かくの如くすること三十年、知音一箇も無し、三平的に中り來る、父子相投和す、子細に返つて思量すれば、元伊れ是れ垜を射ると。石鞏の作略、藥山と一般なり、三平頂門に眼を具して、一句下に向つて、便ち的に中つ、一へに藥山の箭を看よと道ふに似たり。其の僧便ち麈と作りて、身を放つて倒る、這の僧也た作家に似たり、只だ是れ頭有つて尾無し。旣に圏繢を做して、藥山を陷れんことを要す。爭奈せん藥山は是れ作家、一向に逼し將ち去る。山曰く、侍者這の死漢を拖き出せと。陳を展べて向前するが如くに相似たり。其の僧便ち走る、也た好し是は則ち是、爭奈せん脫灑ならず、脚に粘し手に粘するとを。所以に藥山曰く、泥團を弄するの漢、什麼の限りか有らんと。藥山當時若し後語無くんば、千古の下人の檢點

〔囫〕本來は船を索く音なり、物事に始めて氣付きて發する聲を云ふ。

に遭はん。山曰く、箭を看よ。這の僧便ち倒る。且く道へ、是れ會か是れ不會か。若し是れ會と道はゞ、藥山什麼に因つてか、却つて恁麼に道ふ、泥團を弄するの漢と。這箇最も惡なり、正に僧の德山に問ふに似たり。學人鏌鎁の劍に仗つて、師の頭を取らんと擬する時如何。山頸を引いて近前して曰く、囫。僧曰く、師の頭落ちぬ。德山低頭して方丈に歸る。又巖頭僧に問ふ、什麼の處より來る。僧曰く、西京より來る。巖頭曰く、黃巢過ぎて後、曾て劍を收得するや。僧曰く、收得す。巖頭頸を引いて、近前して曰く、囫。僧曰く、師の頭落ちぬ。巖頭呵々大笑す。這般の公案、都て是れ陷虎の機、正に此れに類す。恰かも是れ藥山、他を管せず、只だ識得破するが爲めに、只管に逼し將ち去る。雪竇曰く、這の僧三步には活すと雖ども、五步には須らく死すべし。這の僧甚だ箭を着くることを解して、便ち身を放つて倒ると雖ども、山曰ふ、侍者這の死漢を拖き出せと。僧便ち走る。雪竇道く、只だ恐らくは三步の外活せざらんことを。當時若し五步の外に跳出せば、天下の人便ち他を奈何ともせず。作家の相見、須らく是れ賓主始終互換、間斷有ること無うして、方に自由自在の分有るべし。這の僧當時、既に始終すること能はず、所以に雪竇の檢點に遭ふ、後面に亦自ら他の語を用ひて頌して曰く、

頌。塵中塵、（高着眼看。擎頭戴角去也。）君看取。（何似生。第二頭走。要射便射。看作什麼。）下一箭、（中也。須知藥山好手。）走三步。（活鱍々地。只得三步。死了多時。）五步若活、（作什麼。跳百步。忽有箇死中得活時如何。）成群趁虎。（二俱並照。須與他倒退始得。天下衲僧放他出頭。）正眼從來、付獵人、（爭奈藥山未肯承當這話。藥山也只在草窠裏。）

〔何似生〕何に似て居るかとの意也。

則故是、雪竇又作麼生。也不レ干二藥山事一、也不レ干二雪竇事一、也不レ干二山僧事一、也不レ干二上座事一。雪竇高聲曰、看レ箭。一狀領過。也須二與レ他倒退始得一。打曰、已塞二却汝咽喉一了也。

讀方 塵中の塵、（高く眼を着けて看よ。頭を擎げ角を戴きて去れり。）君看取せよ。（何似生。第二頭に走る。射んと要せば便ち射よ。看て什麼か作さん。）一箭を下す、（中れり。須らく知るべし、藥山好手なることを。）走ること三步。（活鱍々地。只だ三步を得たり。死了することを多時。）五步若し活せば、（什麼をか作す。跳ること百步。忽ち箇の死中に、活を得ること有らん時如何。）群を成して虎を趁はん。（二り倶に並べ照さん。須らく他の與めに倒退して、始めて得べし。天下の衲僧、他に出頭を放す。也た只だ草窠裏に在り。）正眼從來、獵人に付す。（爭奈せん藥山未だ肯て這の話を承當せざることを。藥山は則ち故らに是、雪竇又作麼生。也た藥山の事に干からず、也た雪竇の事に干からず、也た山僧の事に干からず、也た上座の事に干からず。）雪竇高聲に曰く、箭を看よ。（一狀に領過す。也た須らく他の與めに、倒退して始めて得べし。打して曰く、已に汝が咽喉を塞却し了れり。）

〔一狀領過〕一罪狀の同じきものは、別々の紙に認めず、一紙に之れを連れて認めること

【評】 塵中の塵、君看取せよと、衲僧家須らく是れ塵中の塵底の眼を具し、塵中の塵底の頭角有り、機關有り、作略有るべし。任ひ是れ翼を挿む猛虎、角を戴く大蟲も、也た只だ身を全うし害を遠けんことを得ん。這の僧當時、身を放つて便ち倒れて、自ら道ふ、我れ是れ塵と。一箭を下す、走ること三步。山曰く、箭を看よ。僧便ち倒る。山曰く、侍者這の死漢を拖き出せ。這の僧便ち走る、也た甚だ好し、奈何せん只だ三步を走り得ることを、五步に若し活せば、群

を成して虎を趁はん。雪竇道く、只だ恐らくは五歩には須らく死すべし、當時若し五歩の外に跳得出して活せん時、便ち能く群を成し去つて虎を趁はんと。其の麈中の麈、角の利なること鎗の如し、虎も見て亦之れを畏れて走る。麈は鹿中の王たり、常に群鹿を引いて、虎を趁うて別山に入らしむ。雪竇後面に、藥山の亦當機出身の處有ることを頌す、正眼從來、獵人に付すと。藥山射を能くする獵人の如し、其の僧麈の如し。雪竇是の時因みに上堂、此の語を擧して、束ねて一團の話と爲して、高聲に一句を道うて曰く、箭を看よと、坐者立者、一時に起つことを得ず。

第八十二則　大龍色身

垂示曰。竿頭絲線、具眼方知。格外之機、作家方辨。且道、作麼生是竿頭絲線。格外之機。試擧看。

讀方　垂示に曰く。竿頭の絲線、具眼方に知る。格外の機、作家方に辨ず。且く道へ、作麼生か是れ竿頭の絲線、格外の機。試みに擧す看よ。

擧。僧問大龍、色身敗壞、如何是堅固法身。話作兩橛。分開也好。龍曰、山花開似錦、澗水湛如藍。無孔笛子、撞着氈柏板。渾崙擘不破。人從陳州來、却往許州去。

讀方　擧す。僧大龍に問ふ、色身敗壞、如何なるか是れ堅固法身。(話兩橛と作る。分開するも也た好し。)龍曰く、山花開いて錦に似たり、澗水湛へて藍の如し。(無孔の笛子、氈柏板に撞着す。渾崙擘けども破れず。人は陳州より來りて、却て許州に往き去る。)

〔作家〕作者のこと、詩文より出でたる語にして雄偉なる人のことを云ふ。

〔大龍〕鼎州大龍山の智洪禪師とて、白兆志圓の法嗣、達磨門下十

四世の宗師なり。〔色身〕肉體のこと〔古人〕首山のこと〔是故道〕洛浦元安の語なり。洛浦は夾山善

【評】此の事若し言語上に向つて覓めば、一へに棒を掉つて月を打つが如し、且得すらくは沒交渉。古人分明に道ふ、親切を得んと欲せば、問を將ち來つて問ふこと莫れ、何が故ぞ、問は答處に在り、答は問處に在りと。這の僧一擔の莽鹵を擔うて、一擔の鶻突に換へ、箇の問端を致す、敗缺少なからず、若し是れ大龍にあらずんば、爭でか蓋天蓋地なることを得ん。他恁麼に問ふ、大龍恁麼に答ふ、一合相にして、更に一絲毫頭をも移易せず、一へに兎を見て鷹を放ち、孔を看て楔を着くるに似たり。三乘十二分教、還つて這箇の時節有りや、也た妨げず奇特なることを。只だ是れ言語無味にして、人口を杜塞す。是の故に道ふ、一片の白雲、谷口に横へ、幾多の歸鳥、夜巣に迷ふと。有る者は道ふ、只だ是れ口に信せて答へ將ち去ると、若し恁麼に會せば、盡く是れ胡種族を滅する漢ならん。殊に

會の法嗣〔答處恰好〕問處恰好の意にて問ひにピタリと合ふこと。〔也既に云々〕雲門の行處

知らず。古人一機一境、枷を敲き鎖を打ち、一句一言、渾金璞玉なることを。若し是れ衲僧の眼腦ならば、有る時は把住し、有る時は放行す。照用同時、人境倶に奪ひ、雙放雙收、時に臨んで通變す。若し大用大機無くんば、爭でか恁麼に天を籠め地を罩むることを解せん、大いに明鏡の臺に當つて、胡來れば胡現じ、漢來れば漢現ずるに似たり。此の公案は、花藥欄の話と一般なり、然も意却つて同じからず、這の僧の問處明らかならず、大龍の答處恰好なり。見ずや僧雲門に問ふ、樹凋み葉落つる時如何。門曰く、體露金風。之れを箭鋒相拄ふと謂ふ。這の僧大龍に問ふ、色身敗壞、如何んか是れ堅固法身、大龍曰く、山花開いて錦に似、澗水湛へて藍の如しと。一へに君は西秦に向ひ、我は東魯に之くと云ふが如し。他既に恁麼に行く、我れは却つて不恁麼に行く、他の雲門と、一倍相返く。那

なり。〔我却て云々〕今日の行處なり。古來之れを僧と大龍とに見るは誤りなりと、天桂師は云へり。

箇は恁麼に行く、却つて見易し、這箇は却つて不恁麼に行く、却つて見難し。大龍妨げず、三寸甚だ密なることを、雪竇の頌に曰く、

頌。問曾不知、(東西不辨。弄物不知名。買帽相頭。)答還不會。(南北不分。喚却髑髏。江南江北。)月冷風高、(何似生。今日正當這時節。天下人有眼不曾見、有耳不曾聞。)古巖寒檜。(不雨時更好。無孔笛子、撞着氈柏板。)堪笑路逢達道人、(也須是親到這裏始得。還我拄杖子來。成群作隊恁麼來。)不將語默對。(向什麼處見大龍。將箇什麼對他好。)手把白玉鞭。(一至七拗折了也。)驪珠盡擊碎。(留與後人看。可惜許。)不擊碎、(放過一着。又恁麼去。)增瑕類。(弄泥團作什麼。轉見郎當。過犯彌天。)國有憲章、(識法者懼。朝打三千、暮打八百。)三千條罪、(只道得一半在。八萬四千無量劫來、墮無間業也。未還得一半在。)

〔會せず〕俗に合點の行かぬこと。〔月冷に風高し〕不會の境界を云ふ、嚴子陵を贊せし語に曰く、先生の風、山高く水長しと、蓋し意同じ。〔笑ふに堪へたり云々〕香嚴の志閑禪師譚道

讀方

問曾て知らず、(東西辨ぜず。物を弄して名を知らず。帽を買ふに頭を相す。)答還た會せず。(南北分たず。髑髏を換却す。江南江北。)月冷かに風高し、(何似生。今日正當這の時節。天下の人、眼有つて曾て見ず、耳有つて嘗て聞かず。)古巖寒檜。(雨ふらざる時も更らに好し。無孔の笛子、氈柏板に撞着す。)笑ふに堪へたり、路に達道の人に逢うて、(也た須らく是れ親しく這裏に到つて、始めて得べし。我れに拄杖子を還し來れ。群を成し隊を作して、恁麼に來る。)語默を將ちて對せざることを。(什麼の處に向つてか大龍を見ん。箇の什麼を將てか、他に對して好からん。)手に白玉の鞭を把つて、(一より七に至るまで、拗折し了れり。)驪珠盡く擊碎す。(後人に留與して看しむ。可惜許。)擊碎せず。(一着を放過す。又恁麼にし去る。)瑕類を增さん。(泥團を弄して、什麼か作さん。轉た見る郎當たるこ

の頌の中にある語なり。

〔傍瞥〕流視なり、チラリと見ること、又曰く傍邊の事を以て其の事を明すを云ふ。

とを。過犯彌天。）國に憲章有り、（法を識る者は懼る。朝打三千、暮打八百。）三千條の罪。（只だ一半を道ひ得ること在り。八萬四千無量劫來、無間の業に墮すとも、也た未だ一半を還し得ざること在らん）

【評】雪竇頌し得て、最も工夫有り。前來雲門の話を頌するに、却つて曰く、問既に宗有り、答亦同じき攸なり。這箇は卽ち不恁麼、却つて曰く、問曾て知らず、答還た會せず。大龍の答處傍瞥にして、直に是れ奇特なり、分明に是れ誰れか恁麼に問ふ、未だ問はざる已前に、早く敗缺を納れ了れり。他の答處、俯して能く恰好なり、機宜に應じて道ふ、山花開いて錦に似、澗水湛へて藍の如しと。汝諸人、如今作麼生か、大龍の意を會す、答處傍瞥にして、直に是れ奇特なり。所以に雪竇頌出して、人をして知らしめ月冷かに風高し、更に古巖寒檜に撞着すと道ふ。且く道へ、他の意作麼生か會せん。所以に適來道ふ、無孔の笛子、氈柏板に撞着すと。只だ這の四句頌し了れり。雪竇又人の道理を作さんことを怕れて、却つて曰く、笑ふに堪へたり、路に達道の人に逢うて、語默を將ちて對せざることを。此の事、且らく是れ見聞覺知にあらず、亦思量分別にあらず。所以に曰ふ、的々兼帶無し、獨運何ぞ依賴せん、路に達道の人に逢うて、語默を將ちて對せずと。此れは是れ香巖の頌なり、雪竇引き用ふ。見ずや僧趙州に問ふ、語默を將ちて對せず、未審し什麼を將ちてか對せん。州曰く、漆器を呈すと。這箇は便ち適來の話に同じ、汝が情塵意想に落ちず、一へに什麼にか似たる。手に白玉の鞭を把つて、驪珠盡く擊碎す、是の故に祖令當行、十方坐斷。此れは是れ劍刃上の事なり、須く是れ恁麼の作略有る可し。若し不恁麼ならば、總に從上の諸聖に辜負せん。這裡に到つて、要ず些子の事無うして、

〔五刑〕墨刑、劓刑、剕刑、宮刑、大辟是なり、大辟とは死刑のこと。

自ら好處有り、便ち是れ向上人の行履の處なり。既に擊碎せずんば、必ず瑕纇を增さん、便ち漏逗を見ん、畢竟是れ作麼生か是なることを得ん。國に憲章有り、三千條の罪、五刑の屬ひ三千、不孝より大なるは莫し。憲は是れ法、章は是れ條、三千條の罪、一時に犯し了れり。何故ぞ此の如くなる、只だ本分の事を以て、人を接せざるが爲めなり。若し是れ大龍ならば、必ず不恁麼ならん。

第八十三則　雲門古佛交參

擧。雲門示レ衆曰、古佛與二露柱一相交、是第幾機。三千里外沒交涉。七花八裂。自代曰、東家人死、西家人助レ哀。一合相不可得。南山起レ雲、乾坤莫レ覩。刀斫不レ入。北山下レ雨。點滴不レ施。半河南、半河北。

〔雲門〕千古傑出の宗師にして遷化後の尊崇一方ならず、埋葬後十七年を經て、節度使、阮の紹莊なるもの靈夢を感じ、天子に奏して勅許を得、雲門山を開いて見るに、容姿儼然として、變らず、靜か

讀方　擧す。雲門衆に示して曰く、古佛と露柱と相交はる、是れ第幾機ぞ。(三千里外沒交涉。七花八裂。)自ら代つて曰く、(東家の人死すれば、西家の人哀しみを助く。一合相不可得。)南山に雲を起し、(乾坤覩ること莫し。刀斫るとも入らず。)北山に雨を下す。(點滴も施さず。半は河南、半は河北。)

【評】雲門大師、八十餘員の善知識を出す、遷化の後ち、七十餘年にして、塔を開いて之れを觀るに、儼然として故の如し。他見地明白にして、機境迅速なり。大凡垂語別語代語、直下に孤峻なり。只だ這の公案、擊石火の如く閃電光に似たり、直に是れ神出鬼沒す。慶藏主曰く、一大藏敎に還つて這般の說話有りや。如今の人多く情解の上に向つて、活計を作して道ふ、佛は是れ三界の導師、四生の慈父、既に是れ古佛、什麼としてか、却つて露柱と相交はると。若

し恁麼に會せば、卒に模索不着ならん。有る者は喚んで、無中に唱出すと作す、殊に知らず、宗師家の說話、意識を絕し、情量を絕し、生死を絕し、法塵を絕して、正位に入りて、更に一法を存せず、汝纔かに道理計較を作さば、便ち脚に纏ひ手に纏はん。且く道へ、他の古人の意作麼生。但只心境をして一如ならしめば、好惡是非、他を撼動することを得ず。便ち有と說くも也た得たり、無も也た得たり、有機も也た得、無機も也た得、這裏に到つて、拍々是れ令。五祖先師道く、大小の雲門、元來膽小なり、若し是れ山僧ならば、只だ他に向つて道はん、第八機と。他道ふ、古佛と露柱と相交はる、是れ第幾機ぞ、一時の問、且く目前に向つて包裹す、僧問ふ未審し意旨如何。門曰く、一條の條、三十文に買ふと。他乾坤を定むる底の眼有り、既に人の會する無し。後來自ら代つて曰く、南山に雲を起し、北山

に入定せり、依て其遺骨を都に運び宮中に留むること月餘、更に山に還して葬らしめ、勅して大慈雲匡眞弘明禪師と謚號を賜ふ。〈七十餘年〉種電には本錄に依つて十七載に改む。〈三界〉欲界、色界、

に雨を下すと。且く後學の與めに、箇の入路を通ず。所以に雪竇、只だ他の乾坤を定むる處を拈じて、人をして見しむ、若し纔かも計較を犯して、箇の鋒鋩を露さば、則ち當面に蹉過せん。只だ他の雲門の宗旨を原ねて、他の峻機を明らめんことを要す、所以に頌出して曰く、

頌。南山雲、（乾坤莫レ覩。刀斫下レ入。）北山雨。（點滴不レ施。半河南、半河北。）四七二三、面相覩。（幾處覓不レ見。帶ニ累傍人一。露柱掛ニ燈籠一。）新羅國裏、曾上堂、大唐國裏、未レ打レ皷。（遲一刻。還ニ我話頭一來。東湧西沒。東行不レ見ニ西行利一。那裏得ニ這消息一來。先行不レ到、末後太過。）苦中樂、（敎ニ阿誰知一。）樂中苦、（兩重公案。使ニ誰擧一。苦便苦、樂便樂。那裏有ニ兩頭三面一來。）誰道黃金、如ニ糞土一。（具眼者辨。試拂拭看。阿刺刺。可惜許。且道、是古佛是露柱。）

無色界。〈四生〉胎生、卵生、濕生、化生。〈南山北山〉同異の別を絕したる處を云ふ。

〔四七二三〕四七は西天の初祖迦葉より東土の初祖達磨に至るまで二十八代を云ひ、二三は少林の初祖達磨より曹溪六祖に至るまでの六代を云ふ。〔黄金糞土〕前漢書列傳の故事な

【讀方】 南山の雲、（乾坤観ると莫し。刀斫れども入らず。）北山の雨、（點滴も施さず。半は河南、半は河北。）四七二三、面りに相観る。（幾處か覓むるに見ざる。傍人を帶累す。露柱燈籠に掛く。）新羅國裏、曾て上堂、（東湧西沒。東行は西行の利を見ず。那裏よりか這の消息を得來る。）大唐國裏、未だ鼓を打せず。（遲きこと一刻。我れに話頭を還し來れ。先行到らず、末後太だ過ぎたり。）苦中の樂、（阿誰をして知らしめん。）樂中の苦、（兩重の公案。誰をしてか擧せしめん。苦は便ち苦、樂は便ち樂。那裏にか兩頭三面有り來る。）誰れか道ふ黃金、糞土の如しと。（具眼の者は辨せよ。試みに拂拭して看よ。阿剌々。可惜許。且らく道へ、是れ古佛か、是れ露柱か。）

【評】 南山の雲、北山の雨、雪竇帽を買ふに頭を相し、風を看て帆を使ふ。劍刃上に向つて、汝が與めに箇の注脚を下す、直に得たり

り、張耳と陳餘と親しく交り、其親密なる交りの堅きに比ぶれば、黄金も猶ほ糞土の如しと云ひしが、後ち意見衝突して互に權を爭ひ、糞土より汚らはしくなりたりと云ふ。〔阿剌々〕危いと云ふに似た

四七二三、面り相観ることを。也た錯つて會すること莫れ、此れ只だ古佛と露柱と相交はる、是れ第幾機ぞと云ふことを頌し了れり。新羅國裏、曾て上堂、後面に路を劈開し、葛藤を打して、他の意を見んことを要す。新羅國裏、曾て上堂、大唐國裏、未だ鼓を打せず。雪竇、雷轉じ星飛ぶ處に向つて便ち道ふ、苦中の樂、樂中の苦と。雪竇、七珍八寶を堆して、這裏に在き了るに似たり。所以に末後に這の一句子有り、曰く、誰れか道ふ黃金、糞土の如しと、此の一句は、是れ禪月行路難の詩なり、雪竇引き來つて用ふ。禪月曰く、山高く海深うして、人測らず、古往今來、轉た青碧、淺近輕浮、與に交はること莫れ、地卑うして、只だ荆棘を生ずることを解す、誰れか道ふ黃金、糞土の如しと、張耳陳餘、消息を斷ず、行路難し行路難し、君自ら看よと。且く土曠く人稀なること莫しや、雪居の羅漢。

り、阿は別に意味なし。ォーと不意に發する語。天桂師はセキ〳〵と訓じて、ブツ〳〵物言ふ意に取れり。

〔面前は云々〕是れ法堂の中央に立ちての語

第八十四則　維摩不二

垂示曰。道ㇾ是是無ㇾ可ㇾ是、言ㇾ非非無ㇾ可ㇾ非。是非已去、得失兩忘。淨裸々赤灑々。且道、面前背後、是箇什麼。或有㆓箇衲僧㆒、出來道、面前是佛殿三門、背後是寢堂方丈。且道、此人還具ㇾ眼也無。若辨㆓得此人㆒、許ㇾ汝親見㆓古人㆒來。

【評】垂示に曰く。是と道ふも是の是とすべき無く、非と道ふも非の非とすべき無し。是非已に去つて、得失兩ながら忘ず。淨裸々、赤灑々。且く道へ、面前背後、是れ箇の什麼ぞ。或は箇の衲僧有りて、出で來つて道はん、面前は是れ佛殿三門、背後は是れ寢堂方丈と、且く道へ、此の人還つて眼を具するや、也た無しや。若し此の人を辨得せば、汝に許す親しく古人を見來ることを。

にして、眼前の現成を云うたに過ぎず。

擧。維摩詰問㆓文殊師利㆒、這漢太煞合闇一場。合㆓取口㆒。何等是菩薩入不二法門。知而故犯。文殊曰、如㆓我意㆒者、道㆓什麼㆒。直得分疎不下。擔枷過狀。把ㇾ髻投ㇾ衙。於㆓一切法㆒、喚㆓什麼㆒作㆓一切法㆒。無言無說、道㆓什麼㆒。無示無識、瞞㆓別人㆒即得。離㆓諸問答㆒、道㆓什麼㆒。是爲㆓入不二法門㆒。用ㇾ入作㆓什麼㆒。用㆓許多葛藤㆒作㆓什麼㆒。於ㇾ是文殊師利、問㆓維摩詰㆒、我等各自說已、仁者當ㇾ說、何等是菩薩入不二法門。這一靠莫ㇾ道金粟如來、設使三世諸佛、也開ㇾ口不ㇾ得。倒轉㆓鎗頭㆒來也。剌㆓殺一人㆒。中ㇾ箭還似㆓射ㇾ人時㆒。雪竇曰、維摩道㆓什麼㆒。咄。萬箭攢ㇾ心。替ㇾ他說㆓道理㆒。復曰、勘破了也。非㆓但當時㆒、即今也恁麼。雪竇也是賊過後張ㇾ弓。雖㆓然爲ㇾ衆竭ㇾ力、奈何禍出㆓私門㆒。且道、

〔維摩詰〕譯して淨名又は無垢稱と云ふ。毘耶離國五百の長者の隨一なり、在家の居士にして大乘の眞髓を穿つ、蓋し理想の人物にして實在の人に非らず、此の則は維摩

雪竇還見ニ得落處一麼。夢也未ニ夢見一、說ニ什麼勘破一。嶮。金毛獅子、也摸索不着。

【讀方】擧す。維摩詰文殊師利に問ふ、(這の漢太煞だ合閙一場。口を合取せよ。)何等か是れ菩薩、入不二の法門。(知つて故らに犯す。)文殊曰く、我が意の如くんば、(什麼と道ふぞ。直に得たり分疎不下なることを。擔枷過狀。髻を把つて衙に投ず。)一切の法に於て、(什麼を喚んでか、一切の法と作す。)無言無說、(什麼と道ふぞ。)無示無識、(別人を瞞することは即ち得たり。)諸の問答を離る、(什麼と道ふぞ。)是れを入不二の法門と爲す。(入ることを用ひて、什麼か作さん。許多の葛藤を用ひて、什麼か作さん。)是に於て文殊師利、維摩詰に問ふ、我等各自に說き已る、仁者當に說くべし、何等か是れ菩薩、入不二の法門。(這の一棄、道ふこと莫れ金粟如來と。設使ひ三世諸

第八卷第九入不二法門品に出づ。〔仁者〕維摩詰を指す。〔這の一棄云々〕嘉祥大師維摩經疏に、思惟三昧經を引いて、文殊は過去の龍種上尊佛、維摩は金粟如來として、共に古佛なりと云ふ、然れども

佛も、也た口を開くことを得ず。倒に鎗頭を轉じ來れり。一人を刺殺す。箭に中ることは、還つて人を射る時に似たり。)雪竇曰く、維摩什麼とか道はん。(咄。萬箭心に攢る。他に替つて道理を說く。)復曰く、勘破了也。(但だ當時のみに非ず、即今も也た恁麼。雪竇也た是れ賊過ぎて後弓を張る。然も衆の爲めに力を竭すと雖ども、爭何せん禍 私門に出づることを。且く道へ、雪竇還つて落處を見得するや。夢にも未だ夢見ず、什麼の勘破とか說かん。嶮。金毛の獅子、也た模索不着。)

【評】維摩詰、諸大菩薩をして、各々不二の法門を說かしむ。時に三十二の菩薩、皆二見の有爲無爲、眞俗二諦を以て、合して一見と爲して、不二の法門と爲す。後に文殊に問ふ、文殊曰く、我が意の如くんば、一切の法に於て、無言無說、無示無識、諸の問答を離

本據明らかならず、靠は倚靠と續くときは依り懸る意味なれども、靠倒と熟字すれば推し倒す義なり、今は後者を是とす。〔攬る〕集る也、〔蹤跡を餘す〕一本には蹤跡を除くに作る、蓋し不可なり。

る、是れを入不二の法門と爲す。蓋し三十二人は、言を以て言を遣り、文殊は無言を以て言を遣るが如し。一時に掃蕩して、總に要せず、是れを入不二の法門と爲す。殊に知らず、靈龜尾を曳き、迹を拂へば痕を成すことを。又掃箒の塵を掃ふが如くに相似たり、塵去ると雖ども、箒迹猶ほ存す、末後依前として蹤跡を餘す。是に於て文殊却つて維摩に問うて曰く、我等各自に說き已る、仁者當に自ら說くべし、何等か是れ菩薩、入不二の法門。維摩詰默然たり。若し是れ活漢ならば、終に死水裏に去つて浸却せず、若し恁麼の見解を作さば、狂狗の塊を逐ふに似ん。雪竇亦良久と說かず、亦默然據坐と說かず、只だ急々の處に去つて曰く、維摩什麼とか道ひしと。只だ雪竇恁麼に道ふが如きんば、還つて維摩を見るや、也た未だ夢にだも夢見ざること在らん。維摩は乃ち過去の古佛なり、亦眷屬有

〔據坐〕一寸坐り直すこと。〔過去古佛〕思惟三昧經に維摩は金粟如來の後來の後身なりとあるが故にかく云へり。

りて佛の宣化を助く。不可思議の辯才を具し、不可思議の境界有り、不可思議の神通妙用有り、方丈の室中に於いて、三萬二千の獅子の寶座を容れて、八萬の大衆に與ふるに、亦寛狹ならず。且く道へ、是れ什麼の道理ぞ、喚んで神通妙用と作し得てんや。且く錯つて會すること莫れ。若し是れ不二法門ならば、同得同證して、方に乃ち相共に證知すと雖ども、獨り文殊のみ有りて、與めに酬對するに可なり。然も恁麼なりと雖ども、還つて雪竇の檢責を免れ得んや。也た無しや。雪竇恁麼に道ふ、也た這の二人と相見せんことを要す、曰く、維摩什麼とか道ひし、又曰く、勘破了也と。汝且らく道へ、是れ什麼の處か是れ勘破の處。只だ這の些子、得失に拘はらず、是非に落ちず、萬仞懸崖の如し。向上に性命を捨て得て、跳得過し去らば、汝に許す親しく維摩を見ることを。如し捨不得ならば、大い

（故然）此の二字福本にはなしと云ふ

に羝羊の藩に觸るゝに似ん。雪竇故然として、是れ性命を捨得する底の人。所以に頌出して曰く、

頌。咄這維摩老、咄他作什麼。朝打三千、暮打八百。咄得不濟事。好與三十棒。悲生空懊惱。悲他作什麼。自有金剛王寶劍。爲他閑事、長無明。勞而無功。臥疾毘耶離、因誰致得。帶累一切人。全身太枯槁。病則且置、爲什麼、口似匾擔。飯也喫不得。喘也喘不得。七佛祖師來、客來須看、賊來須打。成群作隊。也須是作家始得。一室且頻掃。猶有這箇在。元來在鬼窟裏作活計。請問不二門、若有可說、被他說了也。打曰、和闍黎也尋不見。當時便靠倒。蒼天々々。道什麼。不靠倒、死中得活。猶有氣息在。金毛獅子、無處討。咄。還見麼。蒼天蒼天。

讀方　咄這の維摩老、（他を咄して什麼か作さん。朝打三千、暮打八百。咄し得るも事を濟さず。好し三十棒を與ふるに。）生を悲しんで空しく懊惱す。（他を悲しんで什麼か作さん。自ら金剛王寶劍有り。他の閑事の爲めに、無明を長ず。勞して功無し。）疾に毘耶離に臥す、（誰れに因つてか致し得たる。一切の人を帶累す。）全身太だ枯槁す。（病むことは則ち且く置く、什麼としてか口匾擔に似たる。飯も也た喫することを得ず、喘ぐことも也た喘ぐを得ず。）七佛祖師來る、（客來らば須く看るべし、賊來らば須く打すべし。群を成し隊を作す。也た須く是れ作家にして、始めて得べし。）一室且つ頻りに掃ふ。（猶ほ這箇の在る有り。元來鬼窟裏に在りて活計を作す。）不二門を請問す、（若し說くべき有りとも、他に說き了らる。打して曰く、闍黎に和して、也た尋ぬれども見ず。）當時便ち靠倒す。（蒼天々々。什麼と道ふぞ。）靠倒せず、（死中に活を得たり、猶ほ氣息の在る有り。）

（七佛）毘婆尸佛、尸棄佛、毘沙浮佛、拘留孫佛、拘那含牟尼佛、迦葉佛、釋迦牟尼佛。

〔譬へば圓覺經に云ふが如き〕一本に見ずや圓覺經に云々とあ

金毛の獅子、討ぬるに處無し。（咄。還つて見るや。蒼天々々。）

【評】雪竇道く、咄這の維摩老と、頭上に先づ一咄を下して、什麼をか作す。金剛王寶劍を以て、當頭に直截す、須く朝打三千、暮打八百して、始めて得べし。梵語には維摩詰と云ふ、此には無垢稱と云ひ、亦淨名と云ふ、乃ち過去の金粟如來なり。見ずや僧雲居の簡和尚に問ふ、既に是れ金粟如來、什麼としてか、却つて釋迦如來の會中に於て聽法する。簡曰く、他、人我を爭はずと。大解脫の人、成佛不成佛に拘はらず、若し他修行して、務めて佛道を成すと道はば、轉た沒交涉。譬へば圓覺經に云ふが如き、輪廻の心を以て、輪廻の見を生じて、如來の大寂滅海に入らんとせば、終に至ること能はずと。永嘉曰く、或は是或は非、人識らず、逆行順行、天も測ること莫しと、若し順行する時は、則ち佛果位中に趣き、若し逆

り。〔壽禪師〕永明の延壽禪師なり、法眼の孫嗣。〔唐の時〕唐の高宗帝の時なり。〔信ずべからず〕永固を信ずべからずとなら

行する時は、則ち衆生の境界に入る。壽禪師道はく、直饒ひ汝磨鍊して、這の田地に到ることを得るも、亦未だ汝が意に順ず可からざること在らん、直に無漏の聖身を證せんを待つて、始めて逆行順行すべし。所以に雪竇道く、生を悲しんで空しく懊惱すと。維摩經に曰く、衆生病有るが爲めの故に、我れ亦病有りと。懊惱は則ち悲絕なり。疾に毘耶離に臥すとは、維摩疾を毘耶離城に示す、唐の時王玄策、西域に使して、其の居を過ぐ、遂に手板を以て、縱橫其の室を量るに、十笏を得たり、因つて方丈と名く。全身太だ枯槁す、因みに身の疾を以て、廣く爲めに說法して曰く、是の身は無常無强、無力無堅にして、速朽の法なり、信ずべからざるなり、苦を爲し惱を爲す、衆病の集まる所、乃至陰界入の、共に合成する所なりと。七佛の祖師來る。文殊は是れ七佛の祖師、世尊の旨を承けて、彼れに

り、即ち無常の義を云ふ。〔陰界入〕五蘊十八界、十二處なり、之れを三料の法と云ふ、舊譯には入と云ひ新譯には處と云ふ。

往いて疾を問ふ。一室且つ頻りに掃ふ、方丈の內、皆所有を除去して、唯だ一榻を留めて、文殊の來るを等ちて、不二の法問を請問す。所以に雪竇道はく、請問す不二門、當時便ち靠倒すと、維摩口扁擔に似たり。如今の禪和子、便ち道ふ、無語是れ靠倒と、且く錯つて定盤星を認むること莫れ。雪竇萬仭懸崖の上に撈倒して、却つて曰く、靠倒せずと。一手擡一手搦、他這般の手脚有り、直に是れ用ひ得て玲瓏なり。此れは前囘に拈じて、維摩什麼とか道ひしと云ふことを頌す。金毛の獅子、討ぬるに處無し、但だ當時のみに非ず、即今も亦恁麼、還つて維摩老を見るや。盡山河大地、草木叢林、皆變じて金毛の獅子と作ると、也た摸索不着ならん。

〔四天下〕世界中と云ふこと、須彌山說より出づ、即ち須彌山

第八十五則　庵主虎聲

垂示曰。把定世界、不漏纖毫。盡大地人、亡鋒結舌。是衲僧正令。頂門放光、照破四天下。是衲僧金剛眼睛。點鐵成金、點金成鐵。忽擒忽縱、是衲僧拄杖子。坐斷天下人舌頭、直得無出氣處、倒退三千里。是衲僧氣宇。且道、總不恁麼時、畢竟是箇什麼人。試擧看。

讀方　垂示に曰く。世界を把定して、纖毫を漏さず。盡大地の人、鋒を亡じ舌を結ぶ。是れ衲僧の正令なり。頂門に光を放つて、四天下を照破す、是れ衲僧金剛の眼睛なり。鐵を點じて金と成し、金を點じて鐵と成す。忽ち擒忽ち縱、是れ衲僧の拄杖子なり。天下の人の舌頭を坐斷して、直に氣を出す處無く、倒退三千里なることを得。

の四方に四大洲があるとのことである。

是れ衲僧の氣守なり。且く道へ、總に不恁麼なる時、畢竟是れ箇の什麼人ぞ。試みに擧す看よ。

擧。僧到二桐峯庵主處一、便問、這裏忽逢二大蟲一時、又作麼生。作家弄ㇾ影漢。草窠裏一箇半箇。庵主便作二虎聲一。將ㇾ錯就ㇾ錯。却有二爪牙一。同生同死。承ㇾ言須ㇾ會ㇾ宗。僧便作二怕勢一。兩箇弄二泥團一漢。見ㇾ機而作。似則也似、是則未ㇾ是。庵主呵々大笑。猶較二些子一。笑中有ㇾ刀。亦能放、亦能收。僧曰、這老賊。也須ㇾ識ㇾ破。敗也。兩箇都放行。庵主曰、爭二奈老僧一何。劈耳便掌。可ㇾ惜放過。僧休去。恁麼休去。二俱不ㇾ了。蒼天蒼天。雪上加ㇾ霜又一重。雪竇曰、是則是、兩箇惡賊、只解ㇾ掩ㇾ耳偸ㇾ鈴。言猶在ㇾ耳。遭二他雪竇點檢一。且道、當時合三作麼生、免二得點檢一。天下衲僧不ㇾ到。

〔桐峯庵主〕臨濟大師の弟子なり、即ち大師の弟子に四人の庵主あり、傳は傳燈錄に出づ、圜悟が評唱に云ふ處と少しく異れり、即ち傳燈には、虎溪、覆盆、杉洋、桐峯とあり。〔大蟲〕虎のこと。

讀方 擧す。僧桐峯庵主の處に到つて、便ち問ふ、這裏忽ちに大蟲に逢ふ時、又作麼生。(作家影を弄するの漢。草窠裏一箇半箇。)庵主便ち虎聲を作す。(錯を將て錯に就く。却つて爪牙有り。同生同死。言を承けては須く宗を會すべし。)僧便ち怕るゝ勢を作す。(兩箇泥團を弄するの漢。機を見て作す。似ることは則ち也た似たり、是なることは則ち未だ是ならず。)庵主呵々大笑す。(猶ほ些子に較れり。笑中に刀有り。亦能く放ち、亦能く收む。)僧曰く、這の老賊。(也た須く識破すべし。敗れり。兩箇都べて放行。)庵主曰く、老僧を爭奈何。(劈耳に便ち掌せん。惜しむべし放過することを。)僧休し去る。(恁麼に休し去る。二り倶に了せず。蒼天蒼天。)雪上に霜を加ふ又一重。)雪竇曰く、是は則ち是、兩箇の惡賊、只だ耳を掩うて鈴を偸むことを解す。(言猶ほ耳に在り。他雪竇の點檢に遭ふ。且く道へ、當時合

〔大雄宗派下〕桐峰は臨濟下なれば、大雄派下とは誤りなりと天桂師は云へり、然れども大雄峰は百丈山のことにして、臨濟は百丈の法孫なり、強ち誤りにも非ざるべし。〔遊州獵

に作麼生か點檢を免れ得べき。天下の衲僧も到らず。）

【評】大雄宗派下に、四庵主を出す、大梅白雲虎溪桐峰なり。看よ他の兩人、恁麼に眼親しく手辨ずることを。且く道へ、諸訛什麼の處にか在る。古人一機一境、一言一句、然も出すに時に臨むに在りと雖ども、若し是れ眼目周正ならば、自然に活鱍々地なり。雪竇拈じて、人をして邪正を識り、得失を辨ぜしむ。然も此の如くなりと雖ども、他の達人の分上に在りては、得失に處すと雖ども、却つて得失無し。若し得失を以て他の古人を見ば、則ち沒交涉。如今の人、須く是れ各々窮めて、得失無き處に到つて、然して後に、得失を以て人を辨ずべし。若し一向に、言句を揀擇する處に去つて用心せば、又幾時に到つてか、了することを得去らん。見ずや雲門大師道はく、行脚の漢只だ空しく遊州獵縣すること莫れ、只だ閑

縣〕諸國を馳走すること。〔提撕〕撕は取なり持なり、即ち提持の義なり。〔汝が屋裏云々〕體は究なり、本來の父母を究め取つて看よとの意なり。

言語を提撕することを得んと欲して、老和尚の口動ずるを待つて、便ち禪を問ひ道を問ひ、向上向下、如何若何と、大卷に抄し將ち去つて、肚皮裏に塑向して卜度し、到る處の火爐邊に、三箇五箇、頭を聚め口に擧して、喃々地にして便ち道ふ、這箇は是れ公才の語、這箇は是れ身に就いて打出するの語、這箇は是れ事上に道ふ底の語、這箇は是れ體裏の語、汝が屋裏の老爺老娘を體す、飯を噇却し了つて、只管に夢を說いて、便ち道ふ、我れ佛法を會し了れりと。將に知んぬ恁麼の行脚、驢年にも休歇し去ることを得んや。古人暫時の間の拈弄、豈に勝負得失是非等の見有らんや。桐峰臨濟に見ゆ、其の時深山に在つて庵を卓す、這の僧彼の中に到つて遂に問ふ、這裏忽大蟲に逢ふ時、又作麼生。峰便ち虎聲を作す、也た好し事に就いて便ち行ず。這の僧也た錯を將て錯に就くことを會して、便ち怕るの勢を作す。

第八十五則　庵主虎聲

庵主呵々大笑す。僧曰く、這の老賊。峰曰く、老僧を爭奈何せん。是は則ち是、二り倶に了せず、千古の下、人の點檢に遭ふ。所以に雪竇道はく、是は則ち是、兩箇の惡賊、只だ耳を掩うて鈴を偸むことを解すと。他の二人、皆是れ賊なりと雖ども、機に當つて却つて用ひず、所以に耳を掩うて鈴を偸む。此の二老、百萬の軍陣を排して、却つて只だ掃帚を鬪はしむるが如し。若し此の事を論せば、須く是れ人を殺すに、眼を眨さざる底の手脚なるべし。若し一向に、縱して擒せず、一向に殺して活せずんば、人に怪笑せられんことを免れず。然も此の如くなりと雖ども、他の古人、亦許多の事なし。看よ他の兩箇恁麼なることを、總に是れ機を見て作す。五祖道はく、神通遊戲三昧、彗炬三昧、莊嚴王三昧、自ら是れ後人、脚跟地に點ぜず。只去つて古人を點檢して、便ち道ふ、得有り失有りと。有る底は道ふ、分明に是れ庵主落節すと。且得すらくは沒交涉。雪竇道く、他の二人の相見、皆な放過の處ありと。其の僧道ふ、這裏忽ち大蟲に逢ふ時、又作麼生。峰便ち虎聲を作す、此れは便ち是れ放過の處なり、乃至道ふ、老僧を爭奈何せんと、此れ亦是れ放過の處なり。着々第二機に落在す。雪竇道く、用ひんと要せば便ち用ふ。如今の人、恁麼に道ふことを聞いて、便ち道ふ、當時好し與めに令を行ずるに、且く盲枷瞎棒すること莫れ。只德山門に入れば便ち棒し、臨濟門に入れば便ち喝するが如き、且く道へ、古人の意如何。雪竇後面に、便ち只だ此の如く頌出す。且く道へ、畢竟作麼生か耳を掩うて鈴を偸むことを免れ得去らん。

〔落節〕商賣の利を失ふこと、又好機會を逸するにも用ふ。

頌。見レ之不レ取、蹉過了也。已是千里萬里。思レ之千里。悔不レ愼二當初一。蒼天蒼天。

第八十五則　庵主虎聲

好箇斑々、闍黎自領出去。爭奈未解用在。爪牙未備。只恐用處不明。待爪牙備、向汝道。君不見大雄山下、忽相逢。有條攀條、無條攀例。落落聲光、皆振地。這大蟲却恁麼去。猶較些子。幾箇男兒是丈夫。大丈夫見也無、老婆心切。若解開眼、同生同死。雪竇打葛藤。收虎尾兮捋虎鬚。忽然突出、如何收。收天下衲僧、在這裏。忽有箇出來、便與一拶。若無收、放汝三十棒。敎汝轉身吐氣。喝。打曰、何不道這老賊。

讀方　之れを見て取らざれは、（蹉過し了れり。已に是れ千里萬里。）之れを思ふこと千里。（悔ゆらくは當初を愼しまざることを。蒼天蒼天。）好箇の斑々、（闍黎自領出去。爭奈せん未だ用ふることを解せざることを在るを。）爪牙未だ備はらず。（只だ恐らくは用處明らかならざらんことを。爪牙の備はらんを待つて、汝に向つて道はん。）君見ずや大雄山下、忽ち相逢ふ、（條有れは條を攀ぢ、條無ければ例を攀づ。）落落たる聲光、皆地を振ふ。（這の大蟲却つて恁麼に去る。猶ほ些子に較れり。幾箇の男兒か是れ丈夫。）大丈夫見るや也た無しや、（老婆心切。若し眼を開くことを解せば、同生同死せん。雪竇葛藤を打す。）虎尾を收め虎鬚を捋づ。（忽然として突出せば、如何か收めん。天下の衲僧を收めて、這裏に在り。忽ち箇の出で來ること有らば、便ち一拶を與へん。若し收むること無くんば、汝に放す三十棒。汝をして身を轉じて氣を吐かしむ。喝。打して曰く、何ぞ這の老賊と道はざる。）

【評】　之れを見て取らざれば之れを思ふこと千里、正に嶮處に當つて、都て使ふこと能はず、他の老僧を爭奈何せんと道はんを等つて、好し本分の草料を與ふるに。當時若し這の手脚を下し得ば、他必ず須らく後語有るべし。一人只放つことを解して、收むることを解せず、

（大雄山下忽相逢ふ）百丈黃蘗の相見なり、評唱にあり。（落々）廣大の貌。（虎頭を收め云云）潙山仰山の相見問答を引く、評唱にあり見よ。（後語）別

の手段と云ふこと

之れを見て取らず、早く是れ白雲萬里、更に什麼の之れを思ふことと千里とか說かん。好箇斑々、瓜牙未だ備はらず、是は則ち是、箇の大蟲、也た牙を藏し爪を伏することを解す、爭奈せん人を咬むことを解せざることを。君見ずや大雄山下、忽相逢ふ、落々たる聲光、皆地を振ふ。百丈一日黃蘗に問うて曰く、什麼の處より來る。蘗曰く、山下に菌子を採り來る。丈曰く、還つて大蟲を見るや。蘗便ち虎聲を作す。丈腰下に於て、斧を取つて斫る勢を作す。蘗約住して便ち掌す。丈晩に至つて上堂に曰く、大雄山下に一の虎有り、汝等諸人出入切に須く好看すべし、老僧今日、親しく一口に遭ふと。後來潙山、仰山に問ふ、黃蘗の虎話作麼生。仰曰く、和尙尊意如何。潙山曰く、百丈當時合に一斧に斫殺すべし、什麼に因つてか此の如くなるに到る。仰山曰く、然らず、潙山曰く、子又た作麼生か、仰曰く、唯だ虎頭に騎るのみにあらず、亦た虎尾を收むることを解す、潙山曰く、寂子甚だ嶮崖の句有りと。雲竇引き用ひて、前面の公案を明かす、聲光落々として、大地に振ふ、這箇の些子、轉變自在にして、句中に出身の路有らんことを要す。大丈夫見るや也た無しや、還つて見るや、虎尾を收め虎鬚を捋づ、也た須く是れ本分なるべし。任ひ汝虎尾を收め虎鬚を捋づるも、未だ免れず、一時に鼻孔を穿却することを。

〈絲毫、絹

第八十六則　雲門厨庫三門

垂示曰。把定世界、不漏絲毫。截斷衆流、不存涓滴。開口便錯、擬議即差。且道、作麼生是透關底之眼。試道看。

讀方　垂示に曰く。世界を把定して、絲毫を漏らさず、衆流を截斷し

〔滴〕語は異れども意は同じく、細末密少のこと。

〔光明〕本來具有大機大用の光明なり。

て、涓滴を存せず。口を開けば便ち錯り、擬議すれば即ち差ふ。且らく道へ、作麼生か是れ透關底の眼。試みに道へ看ん。

擧。雲門垂語曰、人々盡有二光明在一。黒漆桶。看時不レ見、暗昏々。看時瞎。作麼生是諸人光明。山是山、水是水。漆桶裏洗二黒汁一。自代曰、厨庫三門。老婆心切。打二葛藤一作二什麼一。又曰、好事不レ如レ無。自知較二一半一。猶較二些子一。

【讀方】擧す。雲門垂語して曰く、人々盡く光明の在る有り、(黒漆桶。)看る時は見えず、暗昏々、(看る時瞎す。)作麼生か是れ諸人の光明。(山は是れ山、水は是れ水。漆桶裏は黒汁を洗ふ。)自ら代つて曰く、厨庫三門、(老婆心切。葛藤を打して什麼か作さん。)又曰く、好事も無きには如かず。(自ら知る一半に較ることを。猶ほ些子に較れり。)

〔香林〕澄遠禪師、雲門の法嗣なり。

【評】雲門室中に、垂語して人を接す、汝等諸人、脚跟下に各々一段の光明有り、今古に輝騰して、逈かに見知を絶す。然かも光明なりと雖ども、恰かも問着するに到つて、又會せず、豈に是れ暗昏々地なるにあらずや。二十年垂示するに、都て人の他の意を會する無し。香林後來代語を請ふ。門曰く、厨庫三門。又曰く、好事も無きに如かずと。尋常代語は只だ一句、什麼としてか、這裏却つて兩句なる。前頭の一句、汝が爲めに略ぼ一線路を開いて、汝をして見せしむ。若し是れ箇の漢ならば、聊か擧着するを聞いて、剔起して便ち行かん。他、人の此に滯在せんことを怕れて、又曰く、好事も無きには如かずと。依前として汝が與めに掃却す。如今の人、纔かに

〔所以に道ふ心華圓云々〕

光明を擧着するを聞いて、便ち去つて瞠眼して曰く、那邊は是れ厨庫、那裏は是れ三門と。且得すらくは沒交涉。所以に道ふ、鈎頭の意を識取せよ、定盤星を認むること莫れと。此の事根上に在らず、亦境上に在らず、須く是れ知見を絕し、得失を忘じ、淨躶々赤灑々として、各々當人分上に、究取して始めて得べし。雲門曰く、日裏に來往し、日裏に人を辨ず、忽然として半夜、日月燈光無きに、曾て到る處は、則ち故らに是、未だ曾て到らざる處に、一件の物を取らんに、還つて取り得てんや。參同契に曰く、明中に當つて暗有り、暗相を以て覩ること勿れ、暗中に當つて明有り、明相を以て遇ふこと勿れと。若し明暗を坐斷せば、且く道へ、是れ箇の什麽ぞ。所以に道ふ、心花發明して、十方刹を照すと。盤山曰く、光、境を照すに非ず、境亦存するに非ず、光境倶に忘ず、復是れ何物ぞ。

覺經の文なり。〔又曰く此の見聞云々〕三平義忠の語なり〔古人道〕維摩經の文。〔古人道〕龍樹の語なり。

又曰く、此の見聞に即して見聞に非ず、餘の聲色の君に呈すべき無し、箇の中若し了せば、全く無事、體用何ぞ妨げん、分不分と。但だ末後の一句を會取し了つて、却つて前頭に去つて遊戲せば、畢竟して裏頭に在つて、活計を作さず。古人道はく、無住の本を以て、一切の法を立すと。這裏に去つて、光影を弄し、精魂を弄することを得ざれ。古人道はく、寧ろ有の見を起すこと、須彌山の如くなるべくとも、無の見を起すこと、芥子許の如くもす可からず。二乘の人、多く偏へに此の見に墜つ、雪竇の頌に曰く、

頌。自照列ニ孤明一、森羅萬象。賓主交參。裂ニ轉鼻孔一。瞎漢作ニ什麽一。爲レ君通ニ一線一。何止一線。十日並照。放ニ一線道一即得。花謝樹無レ影、打ニ葛藤一、有ニ什麽了期一。向ニ什麽處一摸索。

〔賓主交參〕森羅萬象相互に融通せる事。〔見不見〕石頭大師の參同契に曰く、「明中に當つて暗あり、暗相を以て遭ふこと勿れ、暗

黑漆桶裏盛㆓黑汁㆒。看時誰不㆑見。瞎。不㆑可㆓總扶籬摸㆒壁。兩瞎三瞎。見不見、兩頭俱坐斷。瞎。倒騎㆑牛兮入㆓佛殿㆒。中㆓三門㆒合掌。還㆓我話頭㆒來。打云、向㆓什麼處㆒去也。雪竇也只向㆓鬼窟裏㆒作㆓活計㆒。還會麼。半夜日頭出、日午打㆓三更㆒。

讀方　自照孤明を列す、(森羅萬象。賓主交參。鼻孔を裂轉す。瞎漢什麼をか作さん。)君が爲めに一線を通ず。(何ぞ止だ一線のみならん。十日並び照す。一線道を放つことは即ち得たり。)花謝して樹に影無し、(葛藤を打して什麼の了期かある、什麼の處に向つて摸索せん。黑漆桶裏黑汁を盛る)看る時誰れか見ざらん。(瞎。總に扶籬摸壁すべからず。兩瞎三瞎。)見不見。(兩頭共に坐斷す。瞎。)倒まに牛に騎つて佛殿に入る。(三門に中つて合掌す。我れに話頭を還し來れ。打して曰く、什麼の處に向つてか去る。雪竇も也た只鬼窟裏に向つて、活計を作す。還つて會すや。半夜日頭出で、日午三更を打す。)

中に當つて明あり、明相を以て見ること勿れ」とある如く、見不見超脫の處を云ふ。〔半夜云々〕明暗を借らざる時節なり。〔在〕置くなり。〔從却〕從他の義、任すこと。〔見ある

【評】　自照孤明を列して、自家の脚跟下、本此の一段の光明有り、只だ是れ尋常用ひ得て暗し。所以に雲門大師、汝が與めに此の光明を羅列して、汝が面前に在く、且く作麼生か是れ諸人の光明。廚庫三門、此れは是れ雲門孤明を列する處なり。盤山道はく、心月孤圓にして、光り萬像を呑むと。這箇は便ち是れ眞常獨露、然して後君が與めに一線を通ず、亦人の廚庫三門の處に着在せんことを怕る。廚庫三門は、則ち且く從却す、朝花亦謝して、樹亦影無し、日又落ち、月又暗し、盡乾坤大地、黑漫々地、諸人還つて見るや。看る時誰れか見ざらん。且く道へ、是れ誰れか見ざる。這裏に到つて、明中に當つて暗有り、暗中に明有り、皆前後の歩みの如し、自ら見る可し。雪竇道く、見不見と。好事も無きには如かずと云ふと

合くして云々」見に合して、乃至明に合してと讀む義あり。

〔那吒〕阿修羅の一種にして、譯して禿頂と云ふと。

〔竅〕穴なり。

〔撥着〕開くこと。

〔擺向〕拂ひのけること。

〔壁立千

を頌す。見ある合くして又見ず、明なる合くして又明ならず。倒まに牛に騎つて佛殿に入る、黑漆桶裏に入り去る、須く是れ汝自ら牛に騎つて、佛殿に入つて、是れ箇の什麼の道理ぞと道ふを見るべし。

第八十七則　雲門藥病

垂示曰。明眼漢沒窠臼。有時孤峰頂上、草漫々、有時閙市裏頭、赤灑々。忽若忿怒那吒、現三頭六臂、忽若日面月面、放普攝慈光。於一塵現一切身、爲隨類人、和泥合水。忽若撥着向上竅、佛眼也覷不着、設使千聖出頭來、也須倒退三千里。還有同得同證者麼、試擧看。

【讀方】垂示に曰く。明眼の漢、窠臼に沒し、有る時は孤峰頂上に、草漫々、有る時は閙市裏頭に、赤灑々、忽若し忿怒の那吒、三頭六臂を現じ、忽ち若し日面月面、普攝の慈光を放ち、一塵に於て、一切身を現じ、隨類人となつて、和泥合水。忽若し向上の竅を撥着せば、佛眼も也た覷不着、設使ひ千聖出頭し來るも、也た須らく倒退三千里なるべし。還つて同得同證の者有りや、試みに擧す看よ。

擧。雲門示衆曰、藥病相治、（一合相不可得。）**盡大地是藥、**（苦瓠連根苦。擺向一邊。）**那箇是自己。**（甜瓜徹蔕甜。那裏得這消息來。）

【讀方】擧す。雲門衆に示して曰く、藥病相治す、（一合相不可得。）盡大地是れ藥、（苦瓠は根に連つて苦し。一邊に擺向す。）那箇か是れ自己。（甜瓜は蔕に徹して甜し。那裏よりか這の消息を得來る。）

【評】雲門道はく、藥病相治す、盡大地是れ藥、那箇か是れ自己と、諸人還つて出身の處有りや。二六時中、壁立千仭なることを管取せ

〔似〕一本には壁立萬仞とあり、蓋し大差なし

〔回顧〕他の本には覷顧に作る。

よ。德山の棒雨點の如く、臨濟の喝雷奔に似ることは、則ち且く致く、釋迦は自ら釋迦、彌勒は自ら彌勒、未だ落處を知らざる者は、往々に喚んで藥病相投ずる會を作し去る。世尊四十九年、三百餘會、機に應じて教を設く、皆是れ病に應じて藥を與ふ、蜜果を將つて、苦葫蘆に換ふるが如くに相似たり。既に汝諸人の業根を淘して、灑々落々たらしむ。盡大地是れ藥、汝什麼の處に向つてか觜を揷む、若し觜を揷み得ば、汝に許す身を轉じて氣を吐く處有りて、便ち親しく雲門を見ることを。汝若し回顧躊躇せば、觜を揷むことを得ざることを管取せよ。雲門汝が脚跟底に在つて、藥病相治す、也た只だ是れ尋常の語論。汝若し有に着すれば、汝が與めに無と說き、汝若し無に着すれば、汝が與めに有と說く、汝若し不有不無に着すれば、汝が與めに糞掃堆上に去つて、丈六の金身を現じ、頭出頭沒す。只だ

〔金鵝〕廬山開先の善暹禪師

如今、盡大地森羅萬象、乃至自己、一時に是れ藥、恁麼の時に當つて、却つて那箇を喚んでか是れ自己とせん。汝一向に喚んで藥と作さば、彌勒佛下生にも、也た未だ夢にだも雲門を見ざること在らん、畢竟如何。鈎頭の意を識取せよ、定盤星を認むること莫れ。文殊一日、善財をして、去つて藥を採らしむ、曰く、是れ藥ならざる者を採り將ち來れ。善財偏く採るに、是れ藥ならざるもの無し、却り來つて白して曰く、是れ藥ならざる者無し。文殊曰く、是れ藥なる者を採り將ち來れ。善財乃ち一枝草を拈じて、文殊に度與す。文殊提起して衆に示して曰く、此の藥亦能く人を殺し、亦能く人を活すと。此の藥病相治の話、最も看難し、雲門室中、尋常用ひて人を接す。金鵝長老、一日雪竇を訪ふ、他は是れ箇の作家、乃ち臨濟下の尊宿、雪竇と此の藥病相治の話を論ず、一夜天光に至つて、方に能く善を

なり、法を德山の惡遠に嗣ぐ、即ち臨濟下にあらずして雲門下なりと。〔他の意〕雪竇の意なり。

盡す。這裏に到つて、學解思量計較、總に使ふことを着けず。雪竇後に頌有り、他に送つて道く、藥病相治す、見ること最も難し、萬重の關鎖、太だ端無し、金鵝道者、來つて相訪ふ、學海の波瀾、一夜に乾くと。雪竇後面に頌し得て、最も工夫有り。他の意亦賓に在るか、亦主に在るか、自ら見るべし。頌に曰く、

頌。盡大地是藥、敎誰辨的。撒沙撒土。架高處着。古今何太錯。言中有響。一筆勾下。咄。閉門不造車、大小雪竇爲衆竭力。禍出私門。坦蕩不掛一絲毫。阿誰有閑工夫。向鬼窟裏作活計。通途自寥廓。脚下便入草。上馬見路。信手拈來不妨奇特。錯、錯。双劍倚空飛。一箭落雙鵰。鼻孔遼天、亦穿却。頭落也。打曰、穿却了也。

讀方　盡大地是れ藥、（誰れをしてか的を辨ぜしめん。沙を撒し土を撒す。高處に架して着けよ。）古今何ぞ太だ錯まる、（言中に響有り。一筆に勾下す。咄。）門を閉ぢて車を造らず、（大小の雪竇、衆の爲めに力を竭す。禍は私門より出づ。坦蕩として一絲毫を掛けず。阿誰か閑工夫有る。鬼窟裏に向つて、活計を作す。）途に通ずれば自ら寥廓。（脚下便ち草に入る。馬に上つて路を見る。手に信せて拈じ來るに、妨げず奇特なることを。）錯、錯。（雙劍空に倚つて飛ぶ。一箭に雙鵰を落す。）鼻孔遼天も、亦穿却す。（頭落ちぬ。打して曰く、穿却し了れり。）

〔坦蕩として云云〕佛祖位中に拘はらず、全く修行證得を守らぬこと。

〔大梅〕禪林類聚に曰く、大

【評】　盡大地是れ藥、古今何ぞ太だ錯る。汝若し喚んで藥の會を作さば、自古自今、一時に錯り了れり。雪竇曰く、有る般の漢は、大梅の脚跟を截斷することを解せず、只管に道ふ、程を貪ること太だ速かなりと。他は雲門の脚跟を截斷することを解す、雲門の這の一

梅法常禪師、臨終の時、徒に示して曰く、來て仰ぐべきなく、往て追ふべき莫し、從容として麗鼠鳥鳴を聞く、即ち曰く、此物に即して他物に非ず、汝善く護持せよ、吾逝んとす、雪竇曰く、這の撲生前

句、天下の人を惑亂するが爲めなり。雲門曰く、拄杖子是れ浪ならば、汝に許す七縱八横、盡大地是れ浪ならば、看よ汝が頭出頭沒することを。門を閉ぢて車を造らず、途に通ずれば自ら寥廓。雪竇道く、汝が爲めに一線路を通ず、汝若し門を閉ぢ車を造り、門を出で轍に合せば、箇の甚の事をか濟さん。我が這裏門を閉ぢて、也た車を造らず、門を出づれば自然に寥廓たり。他這裏に略ぼ些子の縫罅を露はして、人をして見せしむ。又連忙して却つて道ふ、錯、錯と。前頭も也た錯、後頭も也た錯、誰れか知らん、雪竇一線路を開くも、也た是れ錯なることを。既に然かも鼻孔遼天、什麼としてか也た穿却する。會せんと要すや、且く參ぜよ三十年。汝拄杖子有らば、我れ汝に拄杖子を與へん、汝若し拄杖子無くんば、免かれず人に鼻孔を穿却せられんことを。

莽鹵、兎後顢頇、此物に即して他物に非ずと、是れ何物ぞ、還つて分付する處有りやまた無しや、有般の漢、大梅の脚跟を截斷することを解せず、只管に道ふ、程を貪る、太だ速なりと。〔汝拄杖

第八十八則　玄沙三種病人

垂示曰。門庭施設、且恁麼破レ二作レ三。入理深談、也須ニ是七穿八穴一。當機敲點、擊ニ碎金鎖玄關一。據レ令而行、直得掃レ蹤滅レ跡。且道、誵訛在ニ什麼處一。具ニ頂門眼一者、請試擧看。

讀方　垂示に曰く。門庭の施設、且く恁麼に二を破つて三と作す。入理の深談、也た須く是れ七穿八穴なるべし。當機敲點、金鎖玄關を擊碎す。令に據て行ず、直に得たり蹤を掃ひ跡を滅することを。且く道へ、誵訛什麼の處にか在る、頂門の眼を具する者は、請ふ試みに擧す看よ。

擧。玄沙示レ衆曰、（隨レ分開ニ箇舖席一。隨ニ家豐儉一。）諸方老宿、盡道接物利生、忽遇ニ三種病人來一、作麼生接。（打レ草只要ニ

子云々（南塔光涌）の嗣なる、鄂州芭蕉山慧清禪師、（新羅國の人）上堂に拄杖を拈じて衆に示して曰く、汝に拄杖子有らば、我、汝に拄杖子を與へん、汝若し拄杖子無くんば、我汝が拄杖子を奪却せんと、拄杖に靠り下座。云々と。會元第九卷にあり。（門庭の施設）宗家が學人を說化するに就ての方便を云ふ。（當機敲點）機は學人の機根なり、敲は問ふこと、點は答ふること。（玄沙）諱は師備、雪峯に嗣

〔蛇驚。山僧直得目瞪口呿。管取倒退三千里。〕患盲者、拈鎚竪拂、他又不見、〔端的瞎。是則接物利生。未必盲在。〕患聾者、語言三昧、他又不聞、〔端的聾。是則接物利生。未必聾在。是那箇未聞在。〕患啞者、敎伊說、又說不得、〔端的啞。是則接物利生。未必啞在。是那箇未說在。〕且作麼生接。若接此人不得、佛法無靈驗。〔誠哉是言。山僧拱手歸降。已接了也。便打。〕僧請益雲門。〔也要諸方共知。着。〕雲門曰、汝禮拜著。〔風行草偃。咄。〕僧禮拜起。〔這僧拗折拄杖子也。〕雲門以拄杖挃。僧退後。門曰、汝不是患盲。〔端的瞎。莫道這僧患盲好。〕復喚近前來、僧近前。〔第二杓惡水澆。觀音來。當時好與一喝。〕門曰、汝不是患聾。〔端的聾。莫道這僧患聾好。〕門乃曰、還會麼。〔何不與本分草料。當時好莫作聲。〕僧曰、不會。〔兩重公案。蒼天蒼天。〕門曰、汝不是患啞。〔端的啞。口吧々地。莫道這僧啞好。〕僧於此有省。〔賊過後張弓。討什麼碗。〕

讀方　擧す。玄沙衆に示して曰く、諸方の老宿、盡く道ふ接物利生と。（分に隨つて箇の舖席を開く。家の豐儉に隨ふ。）忽ち三種の病人の來るに遇はば、作麼生か接せん。（草を打しては、只だ蛇の驚かんことを要す。山僧直に得たり、目瞪し口呿することを。倒退三千里なることを管取せよ。）患盲の者は、拈鎚竪拂、他又見ず、（端的瞎す。是れ則ち接物利生。未だ必らずしも盲ならざること在らん。）患聾の者は、語言三昧、他又聞かず、（端的聾す。是れ則ち接物利生。未だ必らずしも聾せざること在り。是れ那箇か未だ聞かざること在

法し、福州玄沙に住す、即ち宗一大師のこと

〔目瞪し口呿す〕瞪は目を見張ること、呿は口の言はんとして言ひ得ざること、俗に目をパチ〳〵させて口をモグモグすること。

〔未だ必ずしも見

る。）患唖の者、伊をして說かしむるに、又說くことを得ず、（端的唖す。是れ則ち接物利生。未だ必らずしも唖せざること在り。是れ那箇か未だ說かざること在る。）且く作麼生か接せん。若し此の人を接することを得ずんば、佛法靈驗無からん。（誠なる哉是の言。山僧手を拱いて歸降せん。已に接し了れり。便ち打つ。）僧雲門に請益す。（也た諸方共に知らんことを要す。着。）雲門曰く、汝禮拜着せよ。（風行けば草偃す。咄。）僧禮拜して起つ。這の僧拄杖子を拗折す。）雲門拄杖を以て挃く、僧退後す。門曰く、汝是れ患盲にあらず。（端的瞎す。這の僧患盲と道ふこと莫くんば好し。）復近前來と喚ぶ、僧近前す。（第二杓の惡水澆ぐ。觀音來れり。當時好し一喝を與ふるに。）門曰く、汝是れ患聾にあらず。（端的聾す。這の僧患聾と道ふこと莫くんば好し。）門乃ち曰く、還つて會すや。（何ぞ本分の草料を與へざる。

ざることあり〕一本には未だ必ずしも盲せざることありとあり

〔請益〕先輩の指導を請ふこと、論語に「益を請ふ」とあり、已に幾分かあるに上に更に增して貰ふことを云ふ。

〔吧々〕饒舌のこと

當時好し聲を作すこと莫らんに。）僧曰く、不會。（兩重の公案。蒼天蒼天。）門曰く、汝是れ患唖にあらず。（端的唖す。口吧々地。這の僧唖すと道ふこと莫くんば好し。）僧此に於て省有り。（賊過ぎて後ち弓を張る。什麼の碗をか討ねん。）

【評】玄沙參じて、情塵意想を絕して、淨躶々赤灑々地の處に到つて、第恁麼に道ふことを解す。是の時、諸方の列刹相望む、尋常衆に示して道はく、諸方の老宿、盡く道ふ接物利生と。忽ち三種の病人來るに遇はん時、作麼生か接せん。患盲の者は、拈鎚竪拂、他又見ず、患聾の者は、語言三昧、他又聞かず、患唖の者は、他をして說かしむるとも、又說くことを得ず、且く作麼生か接せん。若し此の人を接することを得ずんば、佛法靈驗無しと。如今の人、若し盲聾瘖唖の會を作さば、卒に摸索不着ならん。所以に道ふ、句中に向つて

〔玄沙參〕久しく雪峰に參したこと。〔地藏〕羅漢の桂琛禪師にして、即ち玄沙の嗣なり。

死却すること莫れ、須く是れ佗の玄沙の意を會して、始めて得べし。玄沙常に此の語を以て人を接す。僧有り久しく玄沙の處に在り、一日上堂、僧問ふ、和尚曰ふ、三種病人の話、還つて學人が道理を說くことを許さんや、也た無しや。玄沙曰く、許す。僧便ち珍重して下り去る。沙曰く、不是々々。這の僧他の玄沙の意を會得す。後來法眼曰く、我れ地藏和尚の、這の僧の語を擧することを聞いて、方に三種病人の話を會すと。若し這の僧不會と道はゞ、法眼什麼としてか、却つて恁麼に道ふ、若し他會すと道はゞ、玄沙什麼としてか、却つて不是々々と道ふ。一日地藏道はく、某甲聞く、和尚に三種病人の話有りと、是なりや否や。沙曰く、是。藏曰く、桂琛現に眼耳鼻舌有り、和尚作麼生か接せん。玄沙便ち休し去る。若し玄沙の意を會得せば、豈言句上に在らんや、他會する底、自然に殊別なり。後ちに僧有り雲門に擧似す。門便ち他の意を會して曰く、汝禮拜せよ着、僧禮拜して起つ。門拄杖を以て挃く。這の僧退後、門曰く、汝是れ患盲にあらず。復近前來と喚ぶ、僧近前す。門曰く、汝是れ患聾にあらず、乃ち曰く、會すや。僧曰く、不會。門曰く、汝是れ患啞にあらず。其の僧此に於て省有り。當時若し是れ箇の漢ならば、他の禮拜せよ着と道はんを等つて、便ち與めに禪床を掀倒せば、豈に許多の葛藤有ることを見んや。且く道へ、雲門と玄沙と、會處是れ同か是れ別か。他の兩人の會處、都べて只だ一般なり。看よ他の古人出で來つて、千萬種の方便を作すことを、意鈎頭上に在り、多少か苦口なる、只だ諸人をして、各々此の一段の事を明らめしむ。五祖老師曰く、一人は說き得て、却つて不會、一人は却つて會して、說くことを得ず、二人若し來參せば、如何が他を辨得せん。

（若し恁麽に計較せば）此の句一本にはなし

（所以に道ふ）維摩經弟子品の文なり。

（又道ふ滿眼云云）長沙の景岑禪師の語なり。

若し這の兩人を辨得することを得ずんば、人の爲めに粘を解き、縛を去り得ざること在らんを管取せよ。若し辨得せば、纔かに門に入るを見て、我れ便ち草鞋を着けて、汝が肚裏に向つて、走ること幾遭し了れり。猶ほ自ら省せずんば、什麽の碗をか討ねん、出で去れと、且く盲聾瘖瘂の會を作すこと莫くんば好し。若し恁麽に計較せば、所以に道ふ、眼色を見て盲の如く等しく、耳聲を聞いて聾の如く等し。又道はく、滿眼色を視ず、滿耳聲を聞かず、文殊常に目に觸れ、觀音耳根に塞がると。這裏に到つて、眼見て盲の如くに相似、耳聞いて聾の如くに相似て、方に能く玄沙の意と、多きことを爭はざらん、諸人還つて盲聾瘖瘂底の漢子の落處を識るや、雪竇の頌を看取せよ。

頌。盲聾瘖瘂、已在言前。三竅倶明。已做一段了也。杳絕機宜。向什麽處摸索。還做計較得麽。天上天下、正理自由。我也恁麽。堪笑堪悲。笑箇有什麽交渉。悲箇什麽。半明半暗。離婁不辨正色、瞎漢。巧匠不留蹤。端的瞎。師曠豈識玄絲。聾漢。大功不立賞。端的聾。爭如獨坐虛窗下、須是恁麽始得。莫向鬼窟裏作活計。一時打破漆桶。葉落花開、自有時。即今什麽時節。切不得作無事會。今日也從朝至暮、明日也從朝至暮。復曰、還會也無、重說偈言。無孔鐵鎚。自領出去。可惜放過。便打。

（杳として云々）佛々祖々の機要洒々落々として無碍自在なる

讀方　盲聾瘖瘂、（已に言前に在り。三竅倶に明らかなり。已に一段と做し了れり。）杳として機宜を絕す。（什麽の處に向つてか摸索せん。還つて計較を做し得てんや。什麽の交渉か有らん。）天上天下、（正理自由。我も也た恁麽。）笑ふに堪へたり悲しむに堪へたり。（箇

を云ふ。（離婁五色）評唱に說明せり。

の什麼をか笑ひ、箇の什麼をか悲しむ。半明半暗。）離婁正色を辨ぜず。（瞎漢。巧匠は蹤を留めず。端的瞎す。）師曠豈に玄絲を識らんや。（聾漢。大功賞を立せず。端的聾す。）爭でか如かん虛窻下に獨坐するに、（須く是れ恁麼にして、始めて得べし。鬼窟裏に向つて、活計を作すこと莫れ。一時に漆桶を打破す。）葉落ち花開いて、自ら時有り。（即今什麼の時節ぞ。切に無事の會を作すことを得ざれ。今日も也た朝より暮に至り、明日も也た朝より暮に至る。）復曰く、還つて會すや也た無しや、（重說偈言。）無孔の鐵鎚。（自領出去。惜しむべし放過することを。便ち打つ。）

【評】盲聾瘖啞、杳として機宜を絕す、汝が見と不見と、聞と不聞と、說と不說とを盡して、雪竇一時に、汝が與めに掃却し了れり。直に得たり盲聾瘖啞の見解、機宜計較、一時に杳として絕し、總に

（黃帝赤水に游ぶ）此の事莊子に出づと云ふ、希逸が註に曰く、玄珠道也、知

用不着なることを。這箇向上の事、謂つべし眞盲眞聾眞啞、機無く宜無しと。天上天下、笑ふに堪へたり悲しむに堪へたり、雪竇一手擡一手搦、且く道へ、箇の什麼をか笑ひ、箇の什麼をか悲しむ。笑ふに堪へたり、是れ啞却つて啞せず、是れ聾却つて聾せず、悲しむに堪へたり、明々として盲せざるに却つて盲、明々として聾ならざるに却つて聾。離婁正色を辨ぜず、青黃赤白を辨すること能はず、正に是れ瞎す。離婁は黃帝の時の人なり、百歩の外に、能く秋毫の末を見る、其目甚だ明なり、黃帝赤水に游んで、珠を沈む、離朱をして之れを尋ねしむるに見えず、契詬をして之れを尋ねしむるに亦得ず、後に象罔をして之れを尋ねしめて、方に之れを獲たり、故に曰く、象罔到る時光燦爛、離婁行く處浪滔天と。這箇高處の一着、直に是れ離婁が目も、亦他の正色を辨ずることを得ず。師

曠豈に玄絲を識らんや、周の時絳州晉の景公の子なり、師曠子は子野、（一に曰く、晉の平公の樂太師なりと。）善く五音六律を別つ、山を隔て、蟻の闘ふを聞く。時に晉、楚と覇を爭ふ、師曠唯だ琴を鼓し、風絃を撥動して、戰ひは楚の必ず功無からんことを知る、然も是の如くなりと雖ども、雪竇道く、他尚ほ未だ玄絲を識らざること在りと。不聾却つて是れ聾底の人、這箇高處の玄旨、直に是れ師曠も亦識ることを得ず。雪竇道はく、我れも亦離婁と作らず、亦師曠と作らず、爭でか如かん虛窓下に獨坐して、葉落ち花開いて、自ら時有らんには。若し此の境界に到らば、然かも見ると雖ども、見ざるに似、聞くとも聞かざるに似、說くとも說かざるに似、飢うれば即ち飯を喫し、困すれば即ち打眠す。任佗あれ葉落ち花開くことを。葉落つる時は是れ秋、花開く時は是れ春、各々自ら時節有り、雪

知覺也、離朱明也、契詬言辯也、象罔無心也、知覺聽明言辯皆以て道を得べからず、必らず無心にして後之れを得べしと。〔師曠〕左傳杜註に曰く、師曠は晉樂太師子野也と、蓋し景公の子とは謀ならんか

竇汝が爲めに、一時に掃蕩し了れり。又一線道を放つて曰く、還つて會すや也た否や、雪竇力盡き神疲れて、只だ箇の無孔の鐵鎚を道ひ得たり、這の一句、急に眼を着けて看ば方に看ん、若し擬議せば、又蹉過せん。師拂子を擧して曰く、還つて見るや。遂に禪床を敲くこと一下して曰く、還つて聞くや。禪床を下つて曰く、還つて說得すや。

第八十九則　雲巖通身手眼

垂示曰。通身是眼、見不到。通身是耳、聞不及。通身是口、說不着。通身是心、鑒不出。通身即且止、忽若無眼、作麼生見、無耳作麼生聞、無口作麼生說、無心作麼生鑒、若向箇裏、撥轉得一線道、便與古佛同參。參則且止、且道、

〔絳州晉〕絳州は元と晉の都なり、故に云ひしものならん。〔戰〕此の字一本になし。〔楚必らず功無き〕左傳に師曠曰く、吾驟に北風を歌ふ、又南風を歌ふ、南風競はず死聲多し、楚必らず功無から

んと。

〔鑒〕照鑒又は鑒察等と熟字して、五欲七情の發動を云ふ。

參箇什麼人。

讀方 垂示に曰く。通身是れ眼、見不到。通身是れ耳、聞不及。通身是れ口、說不着。通身是れ心、鑒不出。通身は即ち且く止く、忽ち若し眼無くんば作麼生か見ん、耳無くんば作麼生か聞かん、口無くんば作麼生か說かん、心なくんば作麼生か鑒せん。若し箇裏に向つて、一線道を撥轉し得ば、便ち古佛と同參。參は則ち且く止く、且く道へ、箇の什麼人にか參ぜん。

擧。雲巖問道吾、大悲菩薩、用許多手眼作什麼。當時好與本分草料。汝尋常走上走下、作什麼。闍黎問作什麼。吾曰、如人夜半背手摸枕子。何不用本分草料。一盲引衆盲。巖曰、我會也。將錯就錯。賺殺一船人。同坑無異土。未免傷鋒犯手。吾曰、汝作麼生會。何勞更問也。要問過好與一摑。

此の則一說に道吾が雲巖に問うたと云ふ。〔雲巖〕藥山に嗣法し、門下大に洞山大師を出す〔道吾〕潭

巖曰、徧身是手眼。有什麼交涉。鬼窟裏作活計。泥裏洗土塊。吾曰、道即太煞道、只道得八成。同坑無異土。奴見婢慇懃。癩兒牽伴。巖曰、師兄作麼生。取人處分也好與一摑。吾曰、通身是手眼。蝦跳不出斗。換却汝眼睛、移却舌頭。還得十成也未。喚爹作爺。

讀方 擧す。雲巖道吾に問ふ、大悲菩薩、許多の手眼を用ひて、什麼をか作す。（當時好し本分の草料を與ふるに。汝尋常走上走下、什麼をか作す。闍黎問うて什麼か作さん。）吾曰く、人の夜半に、背手して枕子を摸するが如し。（何ぞ本分の草料を用ひざる。一盲衆盲を引く。）巖曰く、我れ會せり。（錯を將つて錯に就く。一船の人を賺殺す。同坑に異土無し。未だ免れず鋒を傷り手を犯すことを。）吾曰く、

州道吾山の圓智禪師なり、藥山の法嗣。〔大悲菩薩〕觀世音菩薩のこと、而して種々の形相なる中に就て、今は千手千眼のことを問ふなり、此のことを詳しく知らんと欲せば楞嚴經の巻六を見よ。

汝作麼生か會す。(何ぞ更に問ふことを勞せん。也た問過せんことを要す。好し一摑を與ふるに。)巖曰く、偏身是れ手眼。(什麼の交涉か有らん。鬼窟裏に活計を作す。泥裏に土塊を洗ふ。)吾曰く、道ふことは即ち太煞だ道ふ、只だ八成を道ひ得たり。(同坑に異土無し。奴は婢を見るに慇懃。癩兒伴を牽く。)巖曰く、師兄作麼生。(人の處分を取らば爭でか得ん。也た好し一摑を與ふるに。)吾曰く、通身是れ手眼。(鰕跳れども斗を出でず。汝が眼睛を換却し、舌頭を移却す。還つて十成を得るや也た未だしや。爹を喚んで爺と作す。)

【評】雲巖、道吾と、同じく藥山に參ず、四十年脇席に着けず。藥山曹洞の一宗を出すことは、三人有りて法道盛んに行はる、雲巖下の洞山、道吾下の石霜、船子下の夾山なり。大悲菩薩、八萬四千の母陀羅臂有り、大悲許多の手眼有り、諸人還つて有りや也た無しや。

〔師兄〕禪宗にて法の兄弟を呼ぶに皆な師の字を冠す、即ち法兄を師兄と云ひ法弟を師弟と云ふ。〔偏身通身〕偏身とは皮膚上のこと、通身とは骨髓までも含むとか、されど今は夫等の詮索用なきことな

百丈曰く、一切の語言文字、倶に皆宛轉して、自己に歸すと。雲巖常に道吾に隨つて、咨參決擇す、一日他に問うて道はく、大悲菩薩、許多の手眼を用ひて、什麼をか作す。當初好し他の與めに、劈脊に便ち棒せば、後に許多の葛藤有ることを見ることを免れん、道吾慈悲、此の如くなること能はず、却つて他の與めに道理を說く、意は他をして便ち會せしめんことを要す。却つて道ふ、人の夜半背手して、枕子を模するが如しと。深夜燈光無き時に當つて、手を將つて枕子を模する、且く道へ、眼什麼の處にか在る。他便ち道ふ、我れ會せりと。吾曰く、汝作麼生か會す。巖曰く、偏身是れ手眼と。吾曰く、道ふことは即ち太煞だ道ふ、只だ八成を道ひ得たり。巖曰く、師兄又作麼生。吾曰く、通身是れ手眼と。且く道へ、偏身是底が是か、通身是底が是か、爛泥に似ると雖ども、却つて脫灑。如今の人多くは

り。〔毋陀羅〕此に譯して印と云ひ、又多手と云ふと。〔見ずや曹山〕或は洞山なりと云ふ。何れにしても此の公案の意は同じ。

去つて情解を作して道ふ、偏身底は不是、通身底は是と。只管に他の古人の言句を咬んで、古人の言下に於て死し了る。殊に知らず、古人の意、言句上に在らざることを。此れ皆是れ事已むことを獲ずして之れを用ふ。如今注脚を下し、格則を立て、道ふ、若し此の公案を透得せば、便ち罷參の會を作さんと、手を以て渾身を模し、燈籠露柱を模して、盡く通身の話會を作す。若し恁麼に會せば、他の古人を壞すること少なからず、所以に道ふ、他の活句に參じて、死句に參ぜざれと。須らく是れ情塵意想を絶して、淨裸々赤灑々地にして、方に大悲の話を見得するに可なるべし。見ずや曹山僧に問ふ、物に應じて形を現ずること、水中の月の如くなる時如何。僧曰く、驢の井を覷るが如し。山曰く、道ふことは即ち太煞道ふ、只だ八成を道ひ得たり。僧曰く、和尚又作麼生。山曰く、井の驢を覷るが如しと、便ち此の意に同じ。汝若し語上に去りて見ば、總に道吾雲巖の圈繢を出づることを得ず。雪竇は作家、更に句下に向つて死せず、頭上に向つて行く。

頌。偏身是四肢八節。未是衲僧極則處。通身是。項門上有半邊。猶在窠窟裏瞎。拈來、猶較十萬里。放過則不可。何止十萬里。展翅鵬騰、六合雲、些子境界。將謂奇特。點。摶風鼓蕩、四溟水。些子塵埃。將謂天下人、不奈汝何。過。是何埃壒兮忽生、重爲禪人下注脚。斬。拈却著那裏。那箇毫釐兮未止。別々。吹散了也。截。君不見、又恁麼去。網珠垂範、影重々。大小大雪竇、作這箇去就。可惜許、依舊打葛藤。棒頭手眼、從何起。咄。賊過後張弓。放汝不得。盡大地人、無出氣處。放得又須喫棒。又打、咄曰、且道、山僧底是、雪竇底是。咄。三喝四喝後作麼生。

讀方　偏身是、(四肢八節。未だ是れ衲僧極則の處にあらず。)通身是。(頂門上に半邊有り。猶ほ窠窟裏に在り。瞎。)拈じ來つて、猶ほ十萬里に較れり。(放過せば則ち不可、何ぞ止だ十萬里のみならん。)翅を展べて鵬騰す、六合の雲、(些子の境界。將に謂へり奇特と。點。)風に搏ちて鼓蕩す、四溟の水。(些子の塵埃。將に謂へり天下の人、汝を奈何ともせずと。過。)是れ何の埃壒ぞ忽ちに生ず、(重ねて禪人の爲めに、注脚を下す。斬。)拈却して那裏にか著けん。)那箇の毫釐ぞ未だ止まず。(別々。吹き散じ了れり。截。)君見ずや、(又恁麼にし去る。)網珠範を垂れて、影重々、(大小大の雪竇、這箇の去就を作す。可惜許、舊に依つて葛藤を打す。)棒頭の手眼、何れよりか起る。(咄。賊過ぎて後弓を張る。汝に放すことを得ず。盡大地の人、氣を出す處無し。放得せば又須らく棒を喫すべし。又打して、咄して曰く。

〔壒〕塵なり。

〔又打して咄して曰く〕種電には福州本に依り改めて便ち打して曰くとせり。

且く道へ、山僧底が是か、雪竇底が是か。)咄。(三喝四喝の後作麼生。)

【評】　偏身是、通身是、若し背手にして、枕子を模する底便ち是、手を以て身を模する底、便ち是なりと道うて、若し恁麼の見解を作さば、盡く鬼窟裏に向つて、活計を作す、畢竟偏身通身都べて不是。若し情識を以て去つて、他の大悲の話を見んと要せば、直に是れ猶ほ十萬里に較る。雪竇一句を弄し得て、活せしめて道はく、拈じ來る、猶ほ十萬里に較ると。後句に雲巖、道吾、奇特の處を頌して曰く、翅を展べて鵬騰す、六合の雲、風に搏ちて鼓蕩す、四溟の水と、大鵬龍を呑むに、翼を以て風搏ちて浪を鼓す、其の水開くこと三千里、遂に龍を取つて之れを呑む。雪竇道く、汝若し大鵬にして、能く風に搏ちて浪を鼓して、也た太煞だ雄壯なるも、若し大悲の千手眼を以て之

れを觀れば、只だ是れ些子の塵埃、忽ち生ずるに相似たり。又一毫釐の風に吹かれて、未だ止まざるに相似たり。雪竇道はく、汝若し手を以て身を摸して、用ひて手眼と作さば、何の用を作すにか堪へん、是の大悲の話上に於て、直に是れ未在、所以に道ふ、是れ何の埃壒ぞ忽ちに生ずる、那箇の毫釐ぞ未だ止まざると。雪竇自ら謂へらく、作家にして、一時に迹を拂ひ了れりと、爭奈せん後面に、舊に依つて邐迤して、箇の諭子を說くことを、依前として只だ圈繢裏に在り。君見ずや、網珠範を垂れて、影重々、雪竇帝網の明珠を引いて、以て用ひて範を垂る、手眼且く道へ、什麼の處にか落在する。華嚴宗の中に四法界を立つ、一には理法界、一味平等を明かすが故に、二には事法界、理を全うして事を成すことを明すが故に、三には理事無礙法界、理事相融して、大小無礙なることを明かすが故に、四

〔賢首國師〕賢首大師のこと、又は香象國師と云ふ。〔鏡燈の諭〕賢首大師が則天武后の爲めに剎

には事々無礙法界、一事偏く一切事に入り、一切事偏く一切事を攝して、同時に交參無礙なることを明すが故に、所以に道ふ、一塵纔かに擧つて、大地全く收まると。一々の塵、無邊法界を含む、一塵既に爾り、諸塵も亦然り。網球は乃ち天帝釋、善法堂の前に、摩尼珠を以て網を爲る、凡そ一珠の中に、百千珠を映現し、百千球倶に一球の中に現ず、交映重々にして、主伴無盡なり、此れを用ひて、事々無礙法界を明す。昔し賢首國師、立て、鏡燈の諭を爲す、圓かに十鏡を列ねて、中に一燈を設く、若し東鏡を看ば、則ち九鏡の鏡燈、歷然として齊しく現ず、若し南鏡を看るも、則ち鏡々如然たり。所以に世尊、初め正覺を成じて、菩提道場を離れずして、偏く忉利諸天に昇り、乃至一切處に於て七處九會、華嚴經を說く。雪竇帝網球を以て、事々無礙法界を垂示す、然して六相の義、甚だ明

白なり。即總、即別、即同、即異、即成、即壞、一相を擧ぐれば、則ち六相倶に該ぬ、但だ衆生日に用ひて、而も知らざるが爲めに、雪竇帝網珠明を拈じて範を垂れ、此の大悲の話に況ふること、直に是れ是の如し。汝若し善能此の珠網の中に向つて、拄杖子を明得して、神通妙用、出入無礙ならば、方に手眼を見得すべし。所以に雪竇曰く、棒頭の手眼、何れよりか起ると、汝をして棒頭に取證し、喝下に承當せしむ。只だ德山門に入れば、便ち棒するが如きは、且く道へ、手眼什麼の處にか在る。臨濟門に入れば便ち喝す、且く道へ、手眼什麼の處にか在る。且く道へ、雪竇末後に、什麼としてか、更に箇の咄の字を着く。參。

海重々無盡の意を表示せしものなり
〔七處九會〕第一菩提場會、第二普光明堂會、第三忉利天宮會、第四夜摩天宮會、第五兜率天宮會、第六他化自在天宮會、第七重會普光明堂會、第八三會普光明堂

第九十則　智門般若

垂示曰。聲前一句、千聖不傳、面前一絲、長時無間。淨躶々、赤灑々。頭鬅鬆、耳卓朔。且道、作麼生、試擧看。

讀方　垂示に曰く、聲前の一句、千聖不傳、面前の一絲、長時無間。淨躶々、赤灑々、頭鬅鬆、耳卓朔。且く道へ、作麼生、試みに擧す看よ。

擧。僧問ニ智門一、如何是般若體。通身無ニ影象一。坐ニ斷天下人舌頭一。用レ體作ニ什麼一。

門曰、蚌含ニ明月一。光含ニ萬象一即且止、棒頭正眼事如何。曲不レ藏レ直。雪上加レ霜又一重。

僧曰、如何是般若用。倒退三千里。要レ用作ニ什麼一。

門曰、兎子懷胎。嶮。苦瓠連レ根苦、甜瓜徹レ蔕甜。向ニ光影中一作ニ活計一、不レ出ニ智門窠窟一。若有ニ箇出來一、且道、是般若體、是般若用。且要ニ土上加レ泥。

會、第九會逝多園林會なり。此則の垂示は九十四則の垂示と同じとて載せざるもあり、されど全く同じにもあられば今は載す。〔鬅鬆〕二字共に亂れ髮と云ふこと。〔卓朔〕卓立に同じ。眼：耳：は俊潑敏活の貌。

〔智門〕雲門の嫡孫にして雪竇禪師の本師なり
〔般若〕譯して智慧と云ふ、實相般若、觀照般若、文字般若の三ありと雖も、要するに諸佛の光明なり、人人固有の靈光なり

讀方　舉す。僧智門に問ふ、如何なるか是れ般若の體。（通身影象無し。）門曰く、蚌明月を含む。（光萬象を呑むことは即ち且く止く、棒頭正眼の事如何。曲は直を藏さず。雪上に霜を加ふ、又一重。）僧曰く、如何なるか是れ般若の用。（倒退三千里。）門曰く、兎子懷胎。（嶮。苦瓠は根に連つて苦く、甜瓜は蔕に徹して甜し。光影中に向つて活計を作す、智門の窠窟を出でず。若し箇の出で來ること有らば、且く道へ、是れ般若の體か、是れ般若の用か。且く土上に泥を加ふることを要す。）

【評】　智門道はく、蚌明月を含む、兎子懷胎と、都べて中秋の意を用ふ。然も此の如くなりと雖ども、古人の意、却つて蚌兎上に在らず、他は是れ雲門會下の尊宿、一句語に須らく三句を具すべし。所謂函蓋乾坤の句、截斷衆流の句、隨波逐浪の句、亦安排を消せざれども、自然に恰好なり。便ち嶮處に去つて、這の僧の話に答へて、略ぼ些子の鋒鋩を露はす、妨げず奇特なることを。然も恁麼なりと雖ども、他の古人、終に去つて光影を弄せず、只だ汝が與めに、些の路頭を指して、人をして見せしむ。這の僧問ふ、如何なるか是れ般若の體。智門曰く、蚌明月を含むと。漢江に蚌を出す、蚌中に明珠有り、中秋の月の出づるに到つて、蚌水面に於て浮び、口を開いて月光を含む、感じて珠を産ず、合浦の珠是れなり。若し中秋月有る時は、則ち珠多く、月無き時は、則ち珠少し。如何なるか是れ般若の用。門曰く、兎子懷胎、此の意亦異なること無し。兎は陰に屬す、中秋月生ずるに、口を開いて其の光を呑む、便乃ち懷胎して、口中より兒を産ず。亦是れ月有る時は則ち多く、月無き時は則ち少し。

他の古人の答處、許多の事無し、他只だ其の意を借りて、般若の光りを答ふ。然も恁麼なりと雖ども、他の意言句上に在らず、自ら是れ後人、言句上に去つて活計を作す。見ずや盤山道はく、心月孤圓、光萬象を含む、光境を照すに非ず、境亦存するに非ず、光境倶に亡ず、復是れ何物ぞと。如今の人、但だ瞠眼して喚んで光りと作す、只だ情上に去つて解を生じ、空裏に橛を釘す。古人道く、汝等諸人、六根門頭に、晝夜大光明を放ち、山河大地を照破す、只止眼根より光を放つのみにあらず、鼻舌身意も、亦皆光を放つと。這裏に到つて、直に須らく六根下を打疊して、一星事無く、淨躶々、赤灑々にして、方に此の話の落處を見るべし。雪竇正恁麼に、頌出す。

〔盤山〕道積禪師なり。

〔古人〕長慶の大安禪師なり

頌　一片虛凝、絕二謂情一、凝レ心即差、動レ念即隔。佛眼也覷不レ見。人天從

レ此、見二空生一。須菩提、好與二三十棒一。用二這老漢一作二什麼一。設使須菩提也倒退三千里。蚌含二玄兎一、深々意、也須二是當人始得一。有二什麼意一。何須更用二深々意一。曾與二禪家一作二戰爭一。干戈已息、天下太平。還會麼。打曰、闍梨喫二得多少一。

讀方　一片の虛凝、謂情を絕す、（心を凝すれば即ち差ふ、念を動ずれば即ち隔たる。佛眼也た覷れども見えず。）人天此れより、空生を見る。（須菩提、好し三十棒を與ふるに。這の老漢を用ひて、什麼か作さん。設使ひ須菩提も、也た倒退三千里。）蚌、玄兎を含む、深々の意、（也た須らく是當人にして、始めて得べし。什麼の意か有らん。何ぞ須ひん更に深々の意を用ふることを。）會て禪家に與へて、戰爭を作さしむ。（干戈已に息んで、天下太平。還つて會すや。打して曰く、闍梨多少をか喫し得たる。）

〔謂情〕謂言情識にして、心中にて思量分別するは情、口を以て云々するが謂なり、多くは情謂と熟字す。

〔空生〕須菩提尊者のこと。

第九十則　智門般若

〔玄兎〕玄は陰なり兎は陰に屬する者なるが故に玄兎と云ふと。

〔所以道〕永嘉大師の證道歌にある文なり。

〔又道く三間云々〕潭州龍山の語

【評】一片の虛凝、謂情を絕す、雪竇一句に便ち頌し得て好し、自然に古人の意を見得す。六根湛然、是れ箇の什麼ぞ、只だ這の一片、虛明凝寂なり。天上に去つて討ぬることを消せず、必ずしも別人に向つて求めざれ。自然に常光現前す、是の處壁立千仞なり。謂情は便ち是れ言謂情塵を絕す。法眼の圓成實性の頌に曰く、理極まつて情謂を忘ず、如何ぞ諭齊することを得ん、到頭霜夜の月、任運前溪に落つ、果熟して猿を兼ねて重く、山遙かにして、路の迷ふに似たり、頭を擧れば殘照在り、元是れ住居の西。所以に道ふ、心は是れ根、法は是れ塵、兩種は猶ほ鏡上の痕の如し、塵垢盡くる時、光始めて現ず、心法雙べ忘して性即ち眞なり。又道く、三間の茅屋、從來住す、一道の神光、萬境閑なり、是非を把り來つて、我れを辨ずること莫れ、浮生の穿鑿、相關はらず。只だ此の頌、

〔須菩提〕梵音也漢譯すれば空生と云ふ。

亦一片虛凝にして、謂情を絕することを見る、人天此れより空生を見る。見ずや須菩提、巖中に宴坐す、諸天花を雨らして讃歎す。尊者曰く、空中に花を雨らして讃歎するは、復是れ何人ぞ。天曰く、我れは是れ梵天。尊者曰く、汝云何ぞ讃歎する。天曰く、我れ尊者の善く般若波羅密多を說くことを重んず、尊者曰く、我れ般若に於て、未だ嘗て一字をも說かず、汝云何ぞ讃歎する。天曰く、尊者無說、我れ乃ち無聞、無說無聞、是れ眞の般若なりと云うて、又復地を動かして花を雨らす。看よ他の須菩提、善く般若を說くことを。且つ體用と說かず、若し此に於て見得せば、便ち智門の蚌明月を含み、兎子懷胎すと道ふことを見る可し。古人の意、言句上に在らずと雖ども、爭奈せん答處、深々の旨有ることを、雪竇の、蚌玄兎を含む、深々たる意と道ふことを惹き得たり。這裏に到つて、曾て禪家に與

へて、戰爭を作さしむ、天下の禪和子、鬧浩々地に商量す、未だ嘗て一人も、夢にだも見ること有らざること在り。若し智門雪竇と、同參ならんことを要せば、也須らく是れ自ら眼を着けて、始めて得べし。

佛果圜悟禪師碧巖錄卷之九　終

佛果圜悟禪師碧巖錄卷之十

第九十一則　鹽官犀牛

〔向上〕宇宙の本體を掌中に提り自ら萬物の主宰となり千佛萬祖も眼中になき境界

垂示曰。超情離見、去縛解粘。提起向上宗乘、扶竪正法眼藏、也須十方齊應、八面玲瓏、直到恁麼田地。且道、還有同得同證、同死同生底麼、試擧看。

讀方　垂示に曰く。情を超え見を離れ、縛を去り粘を解く。向上の宗乘を提起し、正法眼藏を扶竪することは、也た須らく十方齊しく應じ、八面玲瓏として、直に恁麼の田地に到るべし。且く道へ、還つて同得同證、同死同生底有りや、試みに擧す看よ。

擧。鹽官一日、喚侍者、與我將犀牛扇子來。

打二葛藤一不レ少。何二似這箇一好箇消息。侍者曰、扇子破也。可惜許。好箇消息。道二什麼一。官曰、扇子既破、還二我犀牛兒一來。漏逗不レ少。幽州猶自可、最苦是新羅。和尚用二犀牛兒一作二什麼一。侍者無レ對。果然是箇無孔鐵鎚。可惜許。投子曰、不レ辭二將出一。恐頭角不レ全。似則似、爭奈兩頭三面。也是說二道理一。雪竇拈曰、我要二不レ全底頭角一。堪レ作二何用一。將レ錯就レ錯。石霜曰、若還二和尚一即無也。道二什麼一。撞二着鼻孔一。雪竇拈曰、犀牛兒猶在。嶮。洎乎錯認。收レ頭去。資福畫二一圓相一、於レ中書二一牛字一。草藁不レ勞二拈出一。弄レ影漢。雪竇拈曰、適來爲二什麼一、不二將出一。金鍮不レ辨。也是草裏漢。保福曰、和尚年尊、別請レ人好。僻地裏罵二官人一。辭レ辛道レ苦、作二什麼一。雪竇拈曰、可レ惜勞而無レ功。兼レ身在レ內。也好與二三十棒一。灼然。

なり、世間普通に云ふそれとは大に趣きを異にすることを知るべし。

讀方　擧す。鹽官一日、侍者を喚ぶ、我が與めに犀牛の扇子を將ち來れと。(葛藤を打すること少からず。這箇と何似れ好箇の消息。)侍者曰く、扇子破れぬ。(可惜許。好箇の消息。什麼と道ふぞ。)官曰く、扇子既に破れなば、我れに犀牛兒を還し來れ。(漏逗少なからず。幽州は猶ほ自ら可なり、最も苦は是れ新羅。和尚犀牛兒を用ひて、什麼か作さん。)侍者對無し。(果然として是れ箇の無孔の鐵鎚。可惜許。)投子曰く、將ち出でんことを辭せず、恐らくは頭角全からざらんことを。(似ることは則ち似たり、爭奈せん兩頭三面なることを。也た是れ道理を說く。)雪竇拈じて曰く、我れは全からざる底の頭角を要す。(何の用をか作すに堪へん。錯を將つて錯に就く。)石霜曰く、

〔鹽官〕抗州鹽官の海昇院齋安國師なり馬祖大師に法を嗣ぐ。〔犀牛の扇子〕犀牛の角にて扇子の骨を作りしものとも、又は犀牛玩月の圖をかける扇子とも云ふ。

〔石霜〕慶諸禪師道吾の弟子にして門下に二十六員の龍象を打出せり。
〔資福〕潙仰宗の嫡流、如寶禪師なり
〔保福〕從展禪師。
〔縱然〕愈々盛なる貌。
〔無功の功無力の力〕本來無功無力と云ふべきなく作すべきなきも不得止云ひ不得止作す、これ等偏に無功の功無力の力なり。

若し和尚に還さんとせば即ち無からん。(什麼と道ふぞ。鼻孔に撞着す。)雪竇拈じて曰く、犀牛兒猶ほ在り。(嶮。殆んど錯つて認む。頭を收め去れ。)資福一圓相を畫して、中に於て一の牛の字を書す。(草藁拈出するに勞せず。影を弄するの漢。)雪竇拈じて曰く、適來什麼としてか、將ち出さゞる。(金鍮辨ぜず。也た是れ草裏の漢。)保福曰く、和尚年尊し、別に人を請ぜば好し。(僻地裏に官人を罵る。辛を辭し苦を道うて、什麼か作さん。)雪竇拈じて曰く、惜しむべし勞して功無きことを。(身を兼ねて内に在り。也た好し三十棒を與ふるに。灼然。)

【評】鹽官一日、侍者を喚ぶ、我が與めに犀牛の扇子を將ち來れと。此の事言句上に在らずと雖ども、且く人の平生の意氣、作略を驗せんと要せば、又須らく此の如く言を藉りて、顯はすことを得べし。臘月三十日に於て、力を着得して、主と作り得ば、萬境縱然たりとも、之れを覩て動ぜず、謂つべし無功の功、無力の力と。鹽官は乃ち齊安禪師なり、古時に犀牛の角を以て扇を爲る、時に鹽官、豈に犀牛の扇子の破るゝことを知らざらんや、故らに侍者に問ふ。侍者曰く、扇子破れぬと。看よ他の古人、十二時中、常に裏許に在つて、撞着磕着することを。鹽官曰く、扇子既に破れなば、我れに犀牛兒を還し來れと。且く道へ、他犀牛兒を要して、什麼か作さん、也た只だ人の落處を知得すや也無しやと驗せんとを要す。投子曰く、將ち出でんことを辭せず、恐らくは頭角全からざらんことを。雪竇曰く、我れは全からざる底の頭角を要すと、亦句下に向つて、便ち機を投ず。石霜曰く、若し和尚に還さば即ち無からん。雪竇曰く、犀牛兒猶ほ在り、資福一圓相を畫して、中に於て一の牛の字を書す。

〔境致〕圓相を云ふなり。

〔三則〕投子、石霜、資福を指す。

他は仰山に承嗣するが爲めに、平生境致を以て人を接して、此の事を明らめんことを愛す。雪竇曰く、適來什麼としてか、將ち出さゞると、又他の鼻孔を穿ち了れり。保福曰く、和尙年尊し、別に人を請せば好しと、此の語道ひ得て穩當なり。前の三則の語は、却つて見易く、此の一句の語は、遠意有り、雪竇亦打破し了れり。山僧舊日、慶藏主の處に在りて理會す、道く和尙年尊く老耄せり、頭を得ては尾を忘ず、適來は扇子を索め、如今は犀牛兒を索む、執侍を爲し難し、故に云ふ、別に人を請せば好しと。雪竇曰く、惜む可し勞して功無きことを、此れ皆是れ下語の格式なり。古人此の事を見徹する、各々不同なりと雖ども、道得出し來らば、百發百中、須らく出身の路有りて、區々血脈を失せざるべし。如今の人問着すれば、只管に道理計較を作す、所以に十二時中、人の咬嚼して、滴水滴涷ならしめて、箇の證悟の處を求めしめんことを要す。看よ他の雪竇、一串を頌して云ふことを。

頌、犀牛扇子用多時、（遇夏則涼、遇冬則暖。人々具足。爲甚不知。阿誰不曾用。）問着元來總不知。（知則知、會則不會。莫瞞人好。也怪別人不得。）無限清風與頭角、（在什麼處。不向自己上會、向什麼處會。天上天下。頭角重生。是什麼。無風起浪。）盡同雲雨去難追。（蒼天蒼天。也是失錢遭罪。）雪竇復曰、若要清風再復、頭角重生、（人人有箇犀牛扇子。十二時中、全得他力。因什麼問着、總不知、還道得麼。）請禪客各下一轉語。（鹽官獨在。三轉了也。）問曰、扇子既破、還我犀牛兒來。（也有一箇半箇。咄。也好推倒禪床。）時有僧出曰、大衆參堂去。（賊過後張弓。被奪却鎗。前不構村、後不迭店。）雪竇

初め二句を以て本則の頌終る。

〔限りなき清風〕以下投子等四大老を頌す。〔頭角重れて生

喝曰、拋釣鯤鯨、釣得箇蝦蟆、便下座。

招得他恁麼地。賊過後張弓。佛果自徵此語曰、又直問汝諸人。這僧道、大衆參堂去、是會、不會。若是不會。爭解恁麼道、若道會時、雪竇又道、拋釣鯤鯨、只釣得箇蝦蟆、便下座。且道、諸訛在什麼處、試請參詳看。

讀方　犀牛の扇子・用ふること多時、(夏に遇ふ時は則ち涼しく、冬に遇ふ時は則ち暖かなり。人々具足、甚としてか知らざる。阿誰か曾て用ひざる。)問着すれば元來、總に知らず。(知ることは則ち知る、會することは則ち會せず。人を瞞ずること莫くんば好し。也た別人を怪しむことを得ず。)限り無き清風と頭角と、(什麼の處にか在る。自己の上に向つて會せずんば、什麼の處に向つてか會せん。天上天下。)頭角重ねて生ず。是れ什麼ぞ。風無きに浪を起す。)盡く雲雨の去つて、追ひ難きに同じ。(蒼天蒼天、也た是れ失錢遭罪。)雪竇復曰く、

ず〕の下の著語は評中の語なりとて、種電には之を削ろ。〔鹽官猶在〕種電には福州本に從て還て道ひ得て三轉し了る鹽官猶在りに作れり。佛果自ら以下の著語は評中の語なりとて削り去る。

若し清風再び復し、頭角重ねて生ぜんことを要せば、(人人箇の犀牛の扇子有り。十二時中、全く他の力を得たり。什麼に因つてか、問着すれば總に知らずして、還つて道ひ得てんや。)請ふ禪客、各々一轉語を下せ。(鹽官猶ほ在り。三轉し了れり。)問うて曰、、扇子既に破れなば、我れに犀牛兒を還し來れ。(也た一箇半箇有り。咄。也た好し禪床を推倒するに。)時に僧有り出でゝ曰く、大衆參堂し去れ。(賊過ぎて後弓を張る。鎗を奪却せらる。前村に構らず、後店に迯らず。)雪竇喝して曰く、鈎を拋ちて鯤鯨を釣る、箇の蝦蟆を釣り得たり、便ち下座。(他の恁麼地なることを招き得たり。賊過ぎて後弓を張る。佛果自ら此の語を徵して曰く、又直に汝諸人に問ふ、這の僧道ふ、大衆參堂し去れと、是れ會か不會か。若し是れ不會ならば、爭でか恁麼に道ふことを解せん、若し會と道はん時は、雪竇又道ふ、

〔去着〕一本には無し。

〔崢嶸〕二字共にタカシ、ケハシ、と訓じて屹立せる貌

鈎を拋ちて鯤鯨を釣る、只だ箇の蝦蟆を釣り得たりと、便ち下座。且く道へ、諸訛什麼の處にか在る、試みに請ふ參詳して看よ。）

【評】　犀牛の扇子、用ふること多時、問着すれば元來、總に知らず、人々箇の犀牛の扇子有り、十二時中、全く他の力を得たり、什麼としてか問着すれば、總に去着を知らざる。侍者、投子、乃至保福も、亦總に知らず、且く道へ、雪竇還つて知るや。見ずや無着、文殊を訪ふ、喫茶の次で、文殊玻璃の盞子を擧起して曰く、南方に還つて這箇有りや。着曰く、無。殊曰く、尋常什麼を用ひてか喫茶する。着無、語。若し這箇の公案の落處を知得せば、便ち犀牛の扇子に、限り無き清風有ることを知得せん。亦犀牛の頭角、崢嶸たることを見ん。四箇の老漢、恁麼に道ふ、朝雲暮雨の、一たび去つて追ひ難きが如し。雪竇復曰く、若し清風再び復し、頭角重ねて生ぜんことを要せば、請ふ禪客、各々一轉語を下せ。問うて曰く、扇子既に破れなば、我れに犀牛兒を還し來れ。時に一禪客有り、出で、曰く、大衆參堂し去れと、這の僧主家の權柄を奪ひ得たり、道ひ得ることは、也た可煞だ道ふ、只だ八成を道ひ得たり、若し十成を要せば、便ち與めに禪床を掀倒せん、汝且く道へ、這の僧犀牛兒を會するか會せざるか。若し會せずんば、却つて恁麼に道ふことを解せんや、若し會せば、雪竇何に因つてか彼を肯はざる、什麼としてか道ふ、鈎を拋つて鯤鯨を釣る、只だ箇の蝦蟆を釣り得たりと。且く道へ、畢竟作麼生か諸人の無事、試みに拈掇して看よ。

第九十二則　世尊陞座

垂示曰。動レ絃別レ曲、千載難レ逢。見レ兎放レ鷹、一時取レ後。總ニ一

切語言、爲一句、攝大千沙界、爲一塵。同死同生、七穿八穴。還有證據者麼、試擧看。

【讀方】垂示に曰く。絃を動かして曲を別つは、千載にも逢ひ難し。兎を見て鷹を放つは、一時に俊を取る。一切の語言を總じて、一句と爲し、大千沙界を攝して、一塵と爲す。同死同生、七穿八穴、還つて證據の者有りや、試みに擧す看よ。

擧。世尊一日陞座。（賓主俱失。不是一同漏逗。）文殊白槌曰、諦觀法王法、法王法如是。（一子親得。）世尊便下座。（愁人莫向愁人説、説向愁人愁殺人。打鼓弄琵琶、相逢兩會家。）

【讀方】擧す。世尊一日陞座。（賓主俱に失す。是れ一同漏逗するのみにあらず。）文殊白槌して曰く、諦觀法王法、法王法、如是。（一子親しく得たり。）世尊便ち下座。（愁人は愁人に向つて説くこと莫れ、愁人に説向すれば、人を愁殺す。鼓を打ち琵琶を弄す相逢ふ兩會家。）

【評】世尊未だ拈花せざる已前、早く這箇の消息有り、始め鹿野苑より、終り抜提河に至るまで、幾か曾て金剛王寶劍を用着す。當時衆中に、若し衲僧の氣息有る底の漢、綽得し去らば他の末後に、拈花一場の狼藉を免れ得ん。世尊良久の間、文殊に一摋せられて、便ち下座、那時也た這箇の消息有り、釋迦室を掩ひ、淨名口を杜ぐ、皆此の這箇に似て、則ち已に説き了れり。肅宗、忠國師に問うて、無縫塔を造る話の如く、又外道佛に問ふ、有言を問はず、無言を問はざるの語の如し。看よ他の向上の人の行履、幾ぞ曾て鬼窟裏に入つて、活計を作さん。有る者は道ふ、意默然の處に在りと。有る者は道ふ、良久の處に有り、有言は無言底の事を明し、無言は有言底

〔七穿八穴〕七花八裂と大同小異、自由自在のこと。

〔陞座〕登壇と云ふに同じ。

〔白槌云々〕説法を始める前に、白槌して、法筵龍象衆當觀第一義と云ひ、説法終るや又白槌して諦觀法王云々と唱ふ。

〔綽得〕綽は音句なり提なりとの二説あり、意は寛なり、されど今用ふる處は超得の義なれは

趁に作るべしと云ひ、或は綽にても義通ずとも云ふ。天桂師の意に綽得は我が心な邪覺にせず、下に死句せぬ底在なりと。

（列聖）說法會座の大衆萬二

の事を明すと。永嘉道はく、默の時說、說の時默と。總に恁麼に會せば、三生六十刼にも、也た未だ夢にだも見ざること在らん。汝若し便ち直下に承當得し去らば、更に凡有り聖有ることを見ず。是の法平等にして、高下有ること無し、日々三世の諸佛と、手を把つて共に行かん。看よ雪竇の、自然に見得して頌出することを。

頌。列聖叢中作者知、（莫謗釋迦老子好。還他臨濟德山。千箇萬箇中、難得一箇半箇。）法王法令不如斯。（隨他走底、如麻似粟。三頭兩面。灼然能有幾人。到這裏。）會中若有仙陀客、（就中難得伶俐人。文殊不是作家。闍梨定不是。）何必文殊下一槌。（更下一槌、又何妨。第二第三槌總不要。當機一句、作麼生道。嶮。）

讀方　列聖叢中、作者知る、（釋迦老子を謗すること莫くんば好し。他の臨濟德山に還す。千箇萬箇の中、一箇半箇を得難し。）法王の法

千弟子千二百五十人及び菩薩羅漢等を指す。

令、斯くの如くならず。（他に隨つて走る底、麻の如く粟に似たり。三頭兩面。灼然として能く幾人有りてか、這裏に到る。）會中若し仙陀の客有らば、（中に就いて伶俐の人を得難し。文殊是れ作家にあらず。闍梨定んで不是。）何ぞ必らずしも文殊、一槌を下さん。（更に一槌を下すも、又何ぞ妨げん。第二第三槌、總に要せず。當機の一句、作麼生か道はん。嶮。）

【評】　列聖叢中、作者知ると、靈山八萬の大衆、皆是れ列聖なり、文殊普賢、乃至彌勒、主伴同じく會す、須らく是れ巧中の巧、奇中の奇にして、方に他の落處を知るべし。雪竇の意に謂へらく、列聖叢中、一箇も人の有ることを知る無し、若し箇の作家の者有らば、方に不恁麼なることを知らん。何が故ぞ、文殊白槌して曰く、諦觀法王法、法王法、如是と。雪竇道く、法王の法令、斯くの如くな

涅槃經に曰く以下、伶俐の漢にして始めて得べしまでの一段、種電抄には禰本に從つて之れを削れり

らずと、何が故ぞ斯くの如くなる。當時會中に、若し箇の漢有つて、頂門に眼を具し、肘後に符有つて、世尊未だ陞座せざる已前に向つて、覰得破せば、更に何ぞ必らずしも、文殊白槌せん。涅槃經に曰く、仙陀婆は一名四實、一には鹽、二には水、三には器、四には馬。一の智臣有り、善く四義を會す、王若し灑洗を欲して、仙陀婆を要すれば、臣即ち水を奉り、食する時に索むれば鹽を奉り、食し訖れば器を奉りて漿を飲ましむ、出でんと欲すれば馬を奉る、意に隨つて應用差ふこと無し、灼然として須らく是れ箇の伶俐の漢にして、始めて得べし。只だ僧香嚴に問ふが如きんば、如何なるか是れ王索仙陀婆、嚴曰く、這裏に過ぎ來れ。僧過ぐ。嚴曰く、人を鈍置す。又趙州に問ふ、如何なるか是れ王索仙陀婆。州、禪床を下つて、曲躬叉手す。當時若し箇の仙陀婆有つて、世尊の未だ陞座せざる已前に向つて透り去らば、猶ほ些子に較れり。世尊更に陞座、便ち下り去る、已に是れ便を着けずして了れり、那ぞ文殊更に白槌するに堪へん、妨げず他の世尊、一上の提唱を鈍置することを。且く作麼生か、是れ鈍置の處ぞ。

第九十三則　大光作舞

舉。僧問大光、長慶道、因齋慶讚、意旨如何。（重光。這漆桶。不妨疑着。不問不知。）大光作舞。（莫賺殺人。依舊從前恁麼來。）僧禮拜。（又恁麼去也。是則是、只恐錯會。）光曰、見箇什麼、便禮拜。（也好一撥、須辨過始得。）僧作舞。（依樣畫猫兒。果然錯會。弄光影漢。）光曰、這野狐精。（此恩難報。三十二祖、只傳這箇。）

〔大光〕潭州大光山の居誨禪師なり、石霜の法嗣にして達磨十二世の法孫

著語の三十二祖以下一本には評の最初の句なりとて削る。

〔西天四七東土二三〕釋尊より達磨まで二十八祖が西天の四七、達磨より六祖慧能までが唐土の二三なり、即ち西天は天竺、唐土は支那

〔這の漆桶〕雪峯義存の語

【讀方】擧す。僧大光に問ふ、長慶道はく、齋に因つて慶讃すと、意旨如何。(重ねて光れり。這の漆桶。妨げず疑着することを。問はずんば知らず。)大光舞を作す。(人を賺殺すること莫れ。舊に依つて從前、恁麼にし來る。)僧禮拜す。(又恁麼にし去るや。是は則ち是、只だ恐らくは錯つて會せんことを。)光曰く、箇の什麼を見てか、便ち禮拜する。(也た好し一拶するに。須らく辨過して始めて得べし。)僧舞を作す。(樣に依つて猫兒を畫く。果然として錯つて會す。光影を弄するの漢。)光曰く、這の野狐精。(此の恩報じ難し。三十二祖、只だ這箇を傳ふ。)

【評】西天の四七、唐土の二三、只だ這箇の些子を傳ふ、諸人還つて落處を知るや、若し知らば此の過を免れ得ん、若し知らずんば、舊に依て只是れ野狐精。有る者は道ふ、是れ他鼻孔を裂轉し來つて人を瞞すと。若し眞箇恁麼ならば、何の道理をか成さん、大光善く能く人の爲めにす、他の句中に出身の路有り。大凡そ宗師は、須らく人の與に、釘を抽き楔を抜き、粘を去り縛を解くべし、方に之れを善知識と謂ふ。大光舞を作す、這の僧禮拜す、末後に僧却つて舞を作す、大光曰く、這の野狐精と。是れ這の僧を轉ずるにあらず、畢竟的意を知らずして、汝只管に舞を作して、遞ひに相恁麼ならば、幾時に到つてか、休歇し去ることを得ん。大光道はく、野狐精と、此の語金牛を截斷す、妨げず奇特なることを。所以に道ふ、他活句に參じて、死句に參ぜずと。雪竇只だ他の這の野狐精と道ふことを愛す、所以に頌出す。且く道へ、這の野狐精と、藏頭白、海頭黑と、是れ同か是れ別か、這の漆桶。又道く、好師僧と。且らく道へ、是れ同か是れ別か、還つて知るや、觸處渠に逢ふ。雪竇の頌に曰く。

〔又道く〕南泉の語。〔前箭〕初め大光舞をなししにたとへたり。〔後箭〕後ち這の野狐精と叱したるを云ふ。〔黃葉黃金〕涅槃經に出づ如來度生の方便は小兒の啼を息めんとて、父母の楊樹の黃葉を以て黃金なりと與ふるが如しと。〔從上來〕西天の四七唐土の二三を云ふ。

頌。前箭猶輕、後箭深。百發百中。向二什麼處一迴避。**誰云、黃葉是黃金。**且作レ止レ啼。瞞二得小兒一也無二用處一。**曹溪波浪、如相似、**弄二泥團一漢。有二什麼限一。依レ樣畫二猫兒一。放二行一路一。**無レ限平人、被二陸沈一。**遇二着活底人一。帶二累天下衲僧一、摸索不着。帶二累闍梨一、出頭不得。

讀方 前箭は猶ほ輕く、後箭は深し、（百發百中。什麼の處に向つてか廻避せん。）誰れか云ふ黃葉是れ黃金と。（且く啼くを止めしむるとを作す。小兒を瞞し得るとも、也た用處無けん。）曹溪の波浪、如し相似ば、（泥團を弄するの漢、什麼の限りか有らん。樣に依つて猫兒を畫く。一路を放行す。）限り無き平人、陸沈せられん。（活底の人に遇着す。天下の衲僧を帶累して、摸索不著、闍梨を帶累して出頭不得。）

【評】 前箭は猶ほ輕く、後箭は深し、大光舞を作す是れ前箭。復曰く、這の野狐精と、是れ後箭。此れは是れ從上來の爪牙なり。誰れか曰ふ、黃葉是れ黃金と。仰山衆に示して曰く、汝等諸人、各自に回光返照せよ、吾が言を記すること莫れ、汝等無始劫來、明に背き暗に投じ、妄想根深うして、卒に頓に拔き難し、所以に假りに方便を設けて、汝が麤識を奪ふ、黃葉を將つて、小兒の啼くを止むるが如く、蜜果を將つて、苦胡蘆に換ふるが如くに、相似たり。古人權りに方便を設けて、人の爲めにす、其の啼き止むに及んで、黃葉金に非ず。世尊一代時教を說く、也た只だ是れ啼きを止むるの說なり。這の野狐精、只だ他の業識を換へんことを要す、中に於て也た權實有り、也た照用有り、方に衲僧の巴鼻有ることを見る、若し會得せば、虎の翼を挿むが如くならん。曹溪の波浪、如し相似ば、儻し忽ち四方八面の學者、只管大家、此の如く舞を作して、一向に恁麼な

（露地の白牛）露地は佛地なり、白牛は法身なり、本來露地とは平等一齊と云ふ意の俗語なり、白牛とは權方便の教を羊鹿に比して法華一乘を牛に譬ふ而して其牛が清淨無垢なりとの意にて白牛と云ふ。

（楞嚴經）具さに大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經と云ふ、唐

らば、限り無き平人も、陸沈せられん、什麼の救ふ處か有らん。

第九十四則　楞嚴不見

垂示曰。聲前一句、千聖不傳、面前一絲、長時無間。淨裸々、赤灑々、露地白牛。眼卓朔、耳卓朔、金毛獅子則且置、且道、作麼生是露地白牛。

讀方 垂示に曰く、聲前の一句、千聖不傳、面前の一絲、長時無間。淨裸々、赤灑々、露地の白牛。眼卓朔、耳卓朔、金毛の獅子は則ち且く置く。且く道へ、作麼生か是れ露地の白牛。

擧。楞嚴經曰、吾不見時、何不見吾不見之處。好箇消息。用見作什麼。釋迦老子漏逗不少。若見不見、自然非彼不見之相。咄。有甚閑工夫。不可教山僧作兩頭三面去也。若不見吾不見之地、向什麼處去也。釘鐵橛相似。咄。自然非物、按牛頭喫草。更說什麼口頭聲色。云何非汝。說汝說我、總沒交涉。打曰、還見釋迦老子麼。爭奈古人不肯承當、打曰、脚跟自家看取還會麼。

讀方 擧す。楞嚴經に曰く、吾が不見の時、何ぞ吾が不見の處を見ざる。（好箇の消息。見ることを用ひて什麼か作さん。釋迦老子、漏逗少なからず。）若し不見を見ば、自然に彼の不見の相に非ず。（咄。甚の閑工夫か有らん。山僧をして兩頭三面と作し去らしむ可からず。）若し吾が不見の地を見ずんば、（什麼の處に向つてか去る。鐵橛を釘つに相似たり。咄。）自然に物に非ず、（牛頭を按じて草を喫せしむ。更に什麼の口頭聲色をか說かん。）云何が汝に非ざらん。（汝と

の神龍元年天竺の沙門般剌密帝譯す。經の内容は阿難尊者始め摩鄧伽女の爲に惑はされんとしたるを世尊文殊に命じて之れを救はしめき。而して後阿難を呼び、汝未だ眞實の修行足らざる爲めかゝることあり

說き我と說く、總に沒交涉。打して曰く、還つて釋迦老子を見るや。爭奈せん古人、肯て承當せざることを。打して曰く、脚跟下自家に看取せよ。還つて會すや。）

【評】楞嚴經に曰く、吾が不見の時、何ぞ吾が不見の處を見ざる。若し不見を見ば、自然に彼の不見の相に非ず。若し吾が不見の地を見ずんば、自然に物に非ず、云何が汝に非ざらんと。雪竇此に到つて經文を引き盡さず、全く引かば則ち見る可し、經に曰く、若し見是れ物ならば、則ち汝も亦吾が見を見るべし。若し同じく見る物を名けて、吾れを見ると爲さば、吾が不見の時、何ぞ吾が不見の處を見ざる。若し不見を見ば、自然に彼の不見の相に非じ。若し吾が不見の地を見ずんば、自然に物に非ず、云何が汝に非ざらんと。辭多くして錄せず。阿難の意に道く、世界の燈籠露柱、皆名有る可し、

とて、乃ち說き給へるが此經なりとか。

亦世尊此の妙精元明を指出して、喚んで什麽物と作して、我れをして佛意を見しめんことを要す。世尊曰く、我れ香臺を見る。阿難曰く、我れも亦香臺を見る、即ち是れ佛見なり。世尊曰く、我れ香臺を見ることは、即ち知るべし、我若し香臺を見ざる時、汝作麽生か見る。阿難曰く、我れ香臺を見ざる時、即ち是れ佛を見たてまつる。佛曰く、我が不見と云ふは、自ら是れ我れ知る、汝が不見と云ふは、自ら是れ汝知る、他人の不見の所、汝如何が知ることを得んと。古人曰く、這裏に到つて、只自知す可し、人の與に說くことを得ずと。只だ世尊の、吾が不見の時、何ぞ吾が不見の處を見ざる、若し不見を見ば、自然に彼の不見の相に非じ。若し吾が不見の地を見ずんば、自然に物に非ず、云何が汝に非ざらんと道ふが如きんば、若し見を認めて物有りと爲すと道はゞ、未だ迹を拂ふこと能はず。吾

が不見の時、羚羊の角を掛くるが如し、聲響蹤跡、氣息都べて絶す、汝什麼の處に向つてか摸索せん。經の意、初めは縱破、後は奪破、雪竇教眼を出でて頌す、亦物をも頌せず、亦見と不見とをも頌せず、直に只だ見佛を頌す。

頌。全象全牛、瞖不レ殊、（半邊瞎漢。半開半合。扶籬摸壁、作二什麼一。一刀兩段。）從來作者、共名摸。（西天四七、唐土二三、天下老和尚、如レ麻似レ粟、猶自少在。）如今要レ見二黃頭老一、（咄。這老胡。瞎漢在二脚跟下一。）刹々塵々、在二半途一。（脚跟下蹉過了也。更教二山僧說二什麼一。驢年還曾夢見麼。）

讀方　全象全牛、瞖殊ならず、（半邊瞎漢。半開半合。扶籬摸壁して、什麼か作さん。一刀兩段。）從來作者、共に名摸す。（西天の四七、東土の二三、天下の老和尚、麻の如く粟に似たり、猶ほ自ら少くこと在り。）如今黃頭老を見んと要すや。（咄。這の老胡。瞎漢脚跟下に在り。）刹々塵々、半途に在り。（脚跟下蹉過し了れり。更に山僧をして、什麼をか說かしめん。驢年にも還た曾て夢にも見んや。）

【評】全象全牛、瞖殊ならず、衆盲象を模して、各々異端を說く、涅槃經に出でたり。僧仰山に問ふ、和尚、人の禪を問ひ道を問ふを見て、便ち一圓相を作して、中に於て牛の字を書す、意何くにか在る。仰山曰く、這箇也た是れ閑事、忽ちに若し會得せば、外より來らず、忽ちに若し會せずんば、決定して識らざらん。我れ且く汝に問はん、諸方の老宿、汝が身上に於て、那箇か是れ汝が佛性と指出する。爲復語底是か、默底是か、是れ不語不默底是なること莫しや。爲復總に是か、爲復總に不是か。汝若し語底是と認めば、盲人の象尾を摸着するが如し、若し默底是と認めば、盲人の象耳を摸着

〔全象、全牛〕全象全牛は涅槃經に出で全牛は莊子に出づ、共に評唱に明かなり。〔瞖〕眼病のこと。〔刹々塵々〕刹は三千大千世界、塵はこの世界の塵の多數の意なり。

〔祖師曰〕六祖慧能禪師なり〔又曰く云々〕種電には圜悟の語となす、即ち仰山の前偈を引き來るに亦揷んで此處に附加し來れるなりと

するが如し、若し不語不默底是と認めば、盲人の象鼻を摸着するが如し、若し物々都べて是と道はば、盲人の象の四足を摸着するが如し、若し總に不是と道はゞ、本象を抛つて、空見に落在す。是の如く衆盲の見る所、只だ象上に於て、名邈差別す、汝好んで要せば、切に象を摸する莫れ。道ふこと莫れ見覺是と。亦道ふこと莫れ不是と。祖師曰く、菩提本樹無く、明鏡亦臺無く、本來無一物、爭でか塵埃に染むることを得ん。又曰く、道本形相無し、智慧即ち是れ道、此の解を作す者、是れを眞の般若と名くと。明眼の人は、象を見て其全體を得、佛の見性の如きも亦然り。全牛とは、莊子に出でたり、庖丁牛を解く未だ嘗て其の全牛を見ず、理に順うて解く、刄を游ばしむること自在なり、更に手を下すことを須ひず、纔かに目を擧する時、頭角蹄肉、一時に自ら解け了る。是の如くすること十九年、

六祖壇經般若部にある語なりと云ふ

〔一塵云々〕梵聚經にある文なり。

其の刄利きこと、新たに硎より發するが如し、之れを全牛と謂ふ。然かも此の如く奇特なりと雖ども、雪竇道はく、縱使ひ此の如きことを得るも、全象全牛、眼中の瞖と、更に殊ならず。作者共に名摸す、直に是れ作家なるも、也た裏頭に去つて、摸索不着、迦葉より乃至西天、此土の祖師、天下の老和尚、皆只だ是れ名摸す。雪竇直截して道ふ、如今黃頭老を見んと要すや、所以に道ふ、見んと要せば即便ち見よ、更に尋覓して方に見んと要せば、則ち千里萬里なり。黃頭老は、乃ち黃面の老子なり、汝如今見んと要すや。刹々塵々、半途に在り、尋常道ふ、一塵一佛刹、一葉一釋迦、盡三千大千世界の、所有の微塵、只だ一塵の中に向つて見るも、恁麼の時に當つて、猶ほ半途に在り、那邊更に半途の在る有り。且らく道へ、什麼の處にか在る、釋迦老子、尙ほ自ら知らず、山僧をして作麼生か說得せ

しめん。

第九十五則　長慶二種語

垂示曰。有佛處不得住、住着頭角生。無佛處急走過、不走過、草深一丈。直饒淨躶々、赤灑々、事外無機、機外無事、未免守株待兎。且道、總不恁麼、作麼生行履。試擧看。

讀方　垂示に曰く、有佛の處、住することを得ざれ、住着すれば頭角生ず。無佛の處、急に走過せよ、走過せずんば、草深きこと一丈。直饒ひ淨躶々、赤灑々として、事外に機無く、機外に事無きも、未だ免かれず株を守つて兎を待つことを。且く道へ、總に不恁麼ならば、作麼生か行履せん。試みに擧す看よ。

〔事外に機云々〕事は客觀の境界、機は主觀即ち心の作用のこと。〔長慶〕慧稜禪師、雪峯の法嗣なり。〔阿羅漢〕

擧。長慶有時曰、寧說阿羅漢有三毒、（焦穀不生芽。）不說如來有二種語。（已是謗釋迦老子了。）不道如來無語、（猶自顢頇。早是七穿八穴。）只是無二種語。（周由者也。說什麼第三第四種。）保福曰、作麼生是如來語。（好一撥。道什麼。）慶曰、聾人爭得聞。（望空啓告。七花八裂。）保福曰、情知、汝向第二頭道、（爭瞞得明眼人。裂轉鼻孔。何止第二頭。）慶曰、作麼生是如來語。（錯却較些子。）保福曰、喫茶去。（領。復曰、還會麼。蹉過了也。）

讀方　擧す。長慶有る時曰く、寧ろ阿羅漢に三毒有りと說くこと、（焦穀芽を生ぜず。）如來に二種の語有りと說かず。（已に是れ釋迦老子を謗し了れり。）如來に語無しとは道はず、（猶ほ自ら顢頇。早く是

小乘敎の修行に依て悟りを開きたるを云ふ、阿羅漢は梵語、漢に譯して無生、殺賊、應供の三義ありと云ふ〔三毒二種〕三毒は貪慾、瞋恚、愚痴、二種は眞實と方便と也〔周由者也〕或は之乎者也と作る、

れ七穿八穴。)只だ是れ二種の語無し。(周由者也。什麼の第三第四種とか說かん。)保福曰く、作麼生か是れ如來の語。(好一拶。什麼と道ふぞ。)慶曰く、聾人爭でか聞くことを得ん。(空に望んで啓告す。七花八裂。)保福曰く、情に知んぬ、汝第二頭に向つて道ふことを。(爭でか明眼の人を瞞し得ん。鼻孔を裂轉す。何ぞ止だ第二頭のみならん。)慶曰く、作麼生か是れ如來の語。(錯。却つて些子に較れり。)保福曰く、喫茶去。(領。復曰く、還つて會すや。蹉過し了れり。)

【評】長慶保福、雪峰の會下に在りて、常に互に相擧覺商量す。一日平常に此の如く說話して曰く、寧ろ阿羅漢に三毒有りと說くも、如來に二種の語有りと說かず。梵語には阿羅漢、此に殺賊と云ふ、功能を以て名を彰はす、能く九九八十一品の煩惱を斷じて、諸漏已に盡き、梵行已に立す、此れは是れ無學、阿羅漢の位なり。三毒は

文章の助字にして無意味の贅語と云ふ意なり〔殺賊〕煩惱の賊を殺すを云ふ、大論に曰く、阿羅を賊と云ひ、漢を破と云ふ、一切の煩惱の賊を破するが故なりと。〔九九八十一品〕三界を九地に分つ即ち欲界

即ち是れ貪瞋痴の根本煩惱なり八十一品すら、尙ほ自ら斷じ盡す、何に況んや三毒をや。長慶道く、寧ろ阿羅漢に三毒有りと說くも、如來に二種の語有りと說かず。大意、如來に不實の語無きことを顯はさんことを要す。法華經に曰く、唯だ此の一事實のみ、餘の二は則ち眞に非ずと。又曰く、唯だ一乘法のみ有りて、二も無く亦三も無しと。世尊三百餘會、機を觀じて敎を逗し、病に應じて藥を與ふ、萬種千般の說法、畢竟して二種の語無し。他の意、這裏に到つて、諸人作麼生か見得せん。佛一音を以て、法を演說することは、則ち無きにあらず、長慶要且つ未だ夢にだも、如來の語を見ざると在り、何故ぞ、大いに人の食を說いて、終に飽くこと能はざるに似たり。保福他の平地上に、敎を說くことを見て、遂に問ふ、作麼生か是れ如來の語、慶曰く、聾人爭でか聞くことを得んと。這の漢知んぬ他

を一地と爲し、他の四禪四無色を八地となし、各々上中下九品の惑あるが故に九九八十一品の煩惱となる。〔佛一音を以て云云〕維摩經の文なり。

幾時か、鬼窟裏に在りて、活計を作し來る。保福曰く、情に知んぬ、汝第二頭に向つて道ふことを。果して其の言に中れり、却つて問ふ、師兄作麼生か是れ如來の語。福曰く、喫茶去。鎗頭倒まに別人に奪却し了らる、大小の長慶、失錢遭罪。且らく諸人に問はん、如來の語、還つて幾箇か有る、須らく知るべし、恁麼に見得して、方に這の兩箇の漢敗缺を見んことを。子細に檢點し將ち來れば、盡く棒を喫すべし、一線道を放つて、他が爲めに理會せしむ。有る底は曰く、保福道ひ得て是なり、長慶道ひ得て不是なりと。只管に語に隨つて、解を生じて便ち道ふ、得有り失有りと。殊に知らず、古人擊石火の如く、閃電光に似ることを。如今の人、他の古人の轉處に去つて看ぜず、只管に句下に去つて、走つて便ち道ふ、長慶當時便ち用ひず、所以に第二頭に落つ。保福曰く、喫茶去、便ち是れ第一頭と。

〔馬前の相撲〕如何と云はぬ間に勝負を決する急切の處擬議計較の及ばざる處を

若し只だ恁麼に看ば、彌勒下生に到るとも、也た古人の意を見ざらん。若し是れ作家ならば、終に這般の見解を作さず、這の窠窟を跳出して、向上自ら一條の路有り、汝若し聾人、爭でか聞くことを得ん、什麼の不是處か有らん。保福曰く、喫茶去、什麼の是處か有らんと道はゞ、轉た沒交涉。是の故に道く、他活句に參じて、死句に參ぜずと、這の因緣、偏身是、通身是の因緣と一般なり、汝が計較是非の處無し、須らく是れ汝が脚跟下、淨裸々地にして、方に古人相見の處を見るべし。五祖老師曰く、馬前の相撲の如くに相似たりと、須らく是れ眼に辨じ、手に親しむべし。這箇の公案、若し正眼を以て之れを觀て、俱に得失無き處に、箇の得失を辨じ、親疎無き處に、箇の親疎を分たば、長慶も也た須らく保福を禮拜して、始めて得べし。何故ぞ這箇の些子の巧處、用ひ得て好し、電轉じ星

云ふ。〔頭兮云云〕詩の作り方の一種、倒字の一格とか云うて、意は第一

飛ぶが如くに相似たり、保福妨げず牙上に牙を生じ、爪上に爪を生ずることを。

頌　頭兮第一第二、我王庫中無如是事。古今臥龍不鑒止水。同道方知。無處有月波澄、四海孤舟獨自行。徒勞卜度。討什麼椀。有處無風浪起。嚇殺人。還覺寒毛卓竪麼。打曰來也。稜禪客、稜禪客、勾賊破家。閙市裏莫出頭。失錢遭罪。三月禹門遭點額。退己讓人。萬中無一。只得飲氣吞聲。

讀方　頭たり第一第二、(我が王庫の中、是の如きの事無し。)古今の臥龍止水を鑒みず。(同道方に知る。)無處には月有つて波澄み。(四海孤舟獨り自ら行く。徒らに卜度するに勞す。什麼の椀をか討ねん。)有處には風無きに浪起

頭第二頭なり。〔王庫〕王は法王なり即ち如來の御手元と云ふこと。〔勾賊破家〕俗に飼ひ猫に手をかまれたと云ふが如き意なり。〔三月禹門〕云々禹門支那の俗說に、毎年三月三日に鯉が禹門三級の瀑布を

る。(人を嚇殺す。還つて寒毛卓竪することを覺ゆるや。打して曰く、來れり。)稜禪客、稜禪客、(勾賊破家。閙市裏に出頭すること莫れ。失錢遭罪。)三月禹門、點額に遭ふ。(己を退いて人に讓る、萬が中一りも無し。只だ氣を飲み聲を呑むことを得たり。)

【評】　頭たり第一第二と、人只管に第一第二を理會せば、正に是れ死水裏に活計を作す、這箇の機巧、汝只だ第一第二の會を作さば、且く摸索不着なること在らん。雪竇曰く、臥龍止水を鑒みずと、死水裏豈に龍有つて藏れんや。若し是れ第一第二ならば、正に是れ止水裏に活計を作す、須らく是れ洪波浩渺、白浪滔天の處に、方に龍有つて藏るべし。正に前頭に、澄潭には許さず、蒼龍の蟠ることをと云ふに似たり。道ふことを見ずや、死水龍を藏さずと、又道ふ、臥龍長く怖る、碧潭の清きことをと。所以に道ふ、龍無き處には、

登り遂げて頭に角を生じ、龍と化す、然れども力足らざるものは途中より押し戻され、そを點額すると云ふなり。

〔前頭〕第十八則無縫塔の話を指す。

〔轉語〕轉

月有つて波澄み、風恬かに浪靜かに、龍有る處には、風無きに浪を起すと、大いに保福喫茶去と道ふに似たり、正に是れ風無きに浪を起す。雪竇這裏に到つて、一時に汝が爲めに、情解を打疊して頌し了れり。他餘韻有つて、文理を成さしむ、依前として裏頭に就て、一隻眼を着く、也た妨げず奇特なることを。却つて道ふ、稜禪客、稜禪客、三月禹門、點額に遭ふと。長慶是れ龍門を透る底の龍なりと雖ども、却つて保福に、驀頭に一點せらる。

第九十六則　趙州三轉語

擧。趙州示レ衆三轉語。道ニ什麼一。三段不レ同。

【讀方】擧す。趙州衆に示す三轉語。（什麼と道ふぞ。三段同じから

とは宛轉投合の義、即ち語句を宛轉し學人の機に投合するの意なり。

〔趙州〕從諗禪師上堂に曰く「金佛爐を渡らず、木佛火を渡らず、泥佛水を渡らず、眞佛內裡に坐す、菩提涅槃眞如佛性盡く是れ貼體

ず。）

【評】趙州此の三轉語を示し了つて、末後に却つて云ふ、眞佛屋裏に坐すと。這の一句忒煞だ郎當なり。他の古人、一隻眼を出して、手を垂れて人を接す、略ぼ此の語を借りて、箇の消息を通じて、人の爲めにせんことを要す。汝若し一向に正令全提せば、法堂前に、草深きこと一丈。雪竇、他の末後の一句、漏逗することを嫌ふ、所以に削り去つて、只だ三句を頌す。泥佛若し水を渡らば、則ち爛却し了らん。金佛若し爐中を渡らば、則ち鎔却し了らん。木佛若し火を渡らば、便ち燒却し了らん。什麼の會し難きことか有らん。雪竇一百則の頌古、計較葛藤す、唯此の三頌、直下に衲僧の氣息有り、只だ是れ這の頌、妨げず會し難きことを。汝若し此の三頌を透得せば、便ち汝に罷參を許さん。

衣服亦煩惱と名く云々と。

〔神光云云〕二祖神光の斷臂の事を引く故事は能く人の知る處なり、又評唱に詳かにす。

〔雕僞〕僞り飾ること。

頌。泥佛不渡水、浸爛鼻孔。神光照天地。干他什麼事。見兎放鷹。立雪如未休、無風起浪。一人傳虚、萬人傳實。將錯就錯。阿誰曾見汝來。何人不雕僞。入寺看額。二六時中、走上走下、是什麼。闍梨便是。

【讀方】泥佛水を渡らず、(鼻孔を浸爛す。)神光天地を照らす。(他の什麼の事にか干からん。兎を見て鷹を放つ。)雪に立ちて如し未だ休せずんば、(一人虚を傳ふれば、萬人實を傳ふ。錯を將つて、錯に就く。阿誰か曾て汝を見來る。)何人か雕僞せざらん。(寺に入らば額を看よ。二六時中、走上走下、是れ什麼ぞ。闍梨便ち是。)

【評】泥佛水を渡らず、神光天地を照らす、這の一句に頌して、分明にし了れり、且く道へ、什麼としてか却つて神光を引く。二祖

〔南に之く〕即ち南に之く、漢文は之なり、南一本に作る。

〔祖述〕一本に體述とあり。

〔骨を敲いて云云〕大般若經三百九十八卷にある故事、即ち常啼菩薩手に利刀を取り、皮を剝ぎ、

初め生るゝ時、神光室を燭して、霄漢に亘る。又一夕神人現じて、二祖に謂うて曰く、何ぞ此に久しき、汝當に道ふを得べし、時至れり、宜しく即ち南に之くべし。二祖神遇を以て、遂に神光と名く、久しく伊洛に居して、博く群書を極む、毎に嘆じて曰く、孔老の教は、風規を祖述す、近ろ聞く、達磨少林に住すと、乃ち彼に往いて、晨夕參扣す。達磨端坐面壁して、誨勵を聞くこと莫し、光自ら忖つて曰く、昔人道を求むるに、骨を敲いて髓を出し、血を刺して饑を濟ひ、髮を布いて泥を掩ひ、崕に投じて虎に飼ふ、古へ尚ほ此の如し、我れ又如何ぞや。其の年十二月九日の夜、大いに雪ふる、二祖砌下に立つ、明くるに遲び積雪膝を過ぐ。達磨之れを憫んで曰く、汝雪に此に立つ、當に何事をか求むべき。二祖悲涙して曰く、惟願くば慈悲、甘露門を開いて、廣く群品を度し玉へ。達磨曰く、

肉を割き髓を出して以て婆羅門の買うて天を祀らんと欲するに應ず云々と。〔血を刺して云云〕賢愚因緣經第二慈力王血施緣品の故事なり、即ち彌佉羅婆羅主自ら脉を施し身の五處を刺す、以て五夜叉

諸佛の妙道、曠劫に精勵して、行じ難きを能く行じ、忍に非らざるを能く忍ぶ、豈に小德小智、輕心慢心を以て、心乘を冀はんと欲せん、是の處わりあること無し。二祖誨勵を聞いて、道に向ふこと益〻切なり、潛かに利刀を取つて、自ら左臂を斷ちて、達磨の前に致く。磨是れ法器なることを知つて、遂に問うて曰く、汝雪に立ちて臂を斷つ、當に何事をか爲すべき。二祖曰く、某甲心未だ安んぜず、乞ふ師安心せしめ玉へ。磨曰く、心を將ち來れ、汝が爲めに安んぜん。祖曰く、心を覓むるに了に不可得なり。達磨曰く、汝が爲めに安心し竟んぬ。後達磨爲めに其の名を易へて、慧可と曰ふ、後に三祖の僧燦大師を接得す。既に法を傳へて、舒州の皖公山に隱る。後周の武帝、佛法を破滅し、僧を沙汰するに屬して、師太湖縣の司空山に往來す、居に常處無く、十餘載を積むまで、人の知る者無し。宣

をして血を承けて飲み且つ飽滿せしむ。〔髮を布いて云云〕瑞應經故事。即ち世尊因地に修行の時、路上に少泥あるを見る、鹿皮衣を脫して泥土に鋪く、猶ほ小泥あり、遂に髮を布いて之れを掩うて

律師の高僧傳に、二祖の事を載すること詳かならず、三祖の傳に曰く、二祖の妙法、世に傳はらず、賴ひに末後依前として、他の當時雪に立つことを悟るに値ふ。所以に雪竇道く、雪に立つて如し未だ休せずんば、何人か雕僞せざらんと。雪に立つて若し休せずんば、足恭諂詐の人、皆之れに倣ふ、一時に只だ雕僞を成さば、則ち是れ諂詐の徒ならん。雪竇、泥佛水を渡らずと云ふことを頌す、什麼としてか、却つて這の因緣を引き來つて用ふる。他參得して、意根下に一星事無く、淨裸々地にして、方に頌し得ること此の如し、五祖尋常人をして此の三頌を看せしむ。豈に見ずや洞山の初和尙、頌有り衆に示して曰く、五臺山上、雲飯を蒸し、古佛堂前、狗天に尿す、刹竿頭上に、鎚子を煎じ、三箇の胡孫、夜錢を簸る。又杜順和尙道く、懷州の牛禾を喫すれば、益州の馬腹脹る、天下に醫人を覓

然燈佛を請して過ぎ去らしむと云々〔崖に投じて云云〕金光明經第四捨身品の故事、即ち過去世の王摩訶羅陀三子あり、園林に遊戯するの時、一虎の七子を産み、飢餓身に逼り、命將さに絶えんとするを見る

めて、豬の左膊上に灸す。又傅大士の頌に曰く、空手にして鋤頭を把り、歩行にして水牛に騎る、人橋上より過れば、橋は流れて水は流れず。又曰く、石人の機汝に似ば、也た巴歌を唱ふることを解せん、汝若し石人に似ば、雪曲も應に須らく和すべし。若し此の語を會得せば、便ち他の雪竇の頌を會せん。

頌。金佛不レ渡レ鑪。（燎二却眉毛一。天上天下唯我獨尊。）人來訪二紫胡一（又恁麼去也。只恐喪身失命。）牌中數箇字、（不レ識レ字底猫兒也。無二話會處一。天下衲僧挿レ觜不レ得。只恐喪身失命。）清風何處無。（又恁麼去也。頭上漫々、脚下漫々。又曰、來也。）

讀方　金佛鑪を渡らず。（眉毛を燎却す。天上天下唯我獨尊。）人來つて紫胡を訪ふ。（又恁麼に去るや。只だ恐らくは喪身失命せんこと

王子皆憂愁して措かず、時に第三子摩訶薩埵虎處に還り身の衣裳を脫し竹枝上に置き、此の誓言を作す、我今衆生を利せんが爲めの故に、最勝無上道を證する故に、大悲動せず、捨て難きを捨つるが故に、

を。）牌中數箇の字、（字を識らざる底は、猫兒も也た話會の處無し。天下の衲僧、觜を挿むことを得ず。只だ恐らくは喪身失命せん。）清風何れの處にか無からん。（又恁麼にし去るや。頭上漫々、脚下漫々。又曰く、來れり。）

【評】　金佛鑪を渡らず、人來つて紫胡を訪ふと、此の一句に亦頌し了れり。什麼としてか却つて人の來つて、紫胡を訪ふことを引く、須らく是れ作家の鑪鞴にして、始めて得べし。紫胡和尙、山門に一牌を立つ、牌中に字有り、曰く紫胡に一狗有り、上人の頭を取り、中人の腰を取り、下人の脚を取る、擬議せば則ち喪身失命すと。凡そ新到を見ては、便ち喝して曰く、狗を看よと、僧纔かに首を回さば、紫胡便ち方丈に皈る。且く道へ、什麼としてか却つて、趙州を咬むことを得ざる。紫胡又一夕、夜深けて後架に於て、叫んで曰く、捉

菩提智の所讃を求むるが故に、三有の衆生を度せんと欲するが故に、生死怖衆の惱熱を滅するが故にと、王子此の誓言をなし巳て、即ち身を放つて餓虎の前に臥す、又乾竹を以て頸を刺し高山上より身を虎

賊捉賊、黑地に一僧に逢着す、欄胸に捉住して曰く、捉へ得たり捉へ得たりと。僧曰く、和尚是れ某甲にあらずや。胡曰く、是は則ち是、只だ是れ肯て承當せず。汝若し這の話を會得せば、便ち汝に許す、一切の人を咬殺して、處々清風凛々たることを。若し也た未だ然らずんば、牌中數箇の字、決定して奈何ともせざらん。若し他を見んと要せば、只だ透得盡して方に見よ。

頌。木佛不渡火、燒却了也。唯我能知。常思破竈墮。東行西行、有何不可。癩兒牽伴。杖子忽擊着、在山僧手裏。山僧不用人。阿誰手裏無。方知辜負我。似爾相似。摸索不着、有什麼用處。蒼天蒼天。三十年後始得。寧可永劫沈淪、不求諸聖解脫。若向箇裏薦得、未免辜負。作麼生得不辜負去。拄杖子未免在別人手裏。

【讀方】 木佛火を渡らず、（燒却し了れり。唯だ我れ能く知る。）常に思ふ破竈墮。（東行西行、何の不可か有らん。癩兒伴を牽く。）杖子忽ち擊着す。（山僧が手裏に在り。山僧人を用ひず。阿誰か手裏に無き。）方さに知る我れに辜負することを。（爾に似て相似たり。摸索不着ならば、什麼の用處か有らん。蒼天蒼天。三十年後始めて得ん。寧ろ永劫に沈淪すとも、諸聖と解脫を求めず。若し箇裏に向つて薦得するも、未だ免れず辜負することを。作麼生か辜負せざることを得去らん。柱杖子未だ免れず、別人の手裏に在ることを。）

前に投ず云々と。〔十二月九日〕後魏の孝明太和十年十二月九日なり。〔宣律師〕南山の道宣律師なり。〔鎚〕蒸餅なり。〔杜順〕華嚴宗の初祖なり。〔又曰く石人云云〕洛浦元安上堂の語。〔鑪〕鑪鞴

【評】 木佛火を渡らず、常に思ふ破竈墮、此の一句に亦頌し了れり。雪竇此の木佛火を渡らざるに因て、常に破竈墮を思ふ。嵩山の破竈墮和尚、姓字を稱せず、言行測り叵し、嵩山に隱居す。一日徒を領して、山塢の間に入るに、廟有り甚だ靈なり、殿中に唯だ一竈を安ず、遠近祭祀して輟まず、物命を烹殺すること甚だ多し。師廟中に

にして金鐵を鎔解する器なり。〔紫胡〕衢州紫胡岩の利蹤禪師なり、南泉の法嗣。〔牌中云云〕紫胡和尚門牌中の數字なり、評唱にあり。〔山僧人を用ひず〕一本には山僧人を用ひざる在りに作る、

入り、拄杖を以て竈を敲くこと三下して曰く、咄汝本と塼土合成す、靈何れより來り、聖何れより起つて、恁麼に物命を烹殺すと云うて、又乃ち撃つこと三下、竈乃ち自ら傾破墮落す。須臾にして一人の青衣裘冠なる有りて、忽然として師の前に立つて、拜を設けて曰く、我は乃ち竈神なり、久しく業報を受く、今日師の無生法を說くことを蒙りて、已に此處を脫して、生じて天中に在り、特に來つて謝を致す。師曰く、汝が本有の性なり、我れ强ひて言ふに非ず。神再拜して沒す。侍者曰く、某甲久しく和尚に參侍す、未だ指示を蒙らず、竈神何の徑旨を得てか便ち天に生ずる。師曰く、我只だ伊れに向つて道ふ、汝本塼土合成す、靈何れより來り、聖何れより起ると。侍僧倶に對無し。師曰く、會すや。僧曰く、不會。師曰く、禮拜せよ着。僧禮拜す。師曰く、破せり破せり、墮せり墮せり。侍者忽然と

種電には福州本に從て用ひざる在りに改む。〔摸索不着云々〕種電には摸索不着を一著語とし、以下什麼の用處か有らんを一著語とせり。〔破竈墮和尚〕崇山慧安國師の弟子なりといへども氏姓詳なら

して大悟す。後に僧有り、安國師に擧似す、師歎じて曰く、此の子物我一如なることを會し盡すと。竈神此れを悟ることは、則ち故らに是、其の僧乃ち五蘊の成身。亦破れり墮せりと云へば、二り倶に開悟す、且く四大五蘊と、塼瓦泥土と、是れ同か是れ別か。既に是れ此の如し、雪竇什麼としてか道ふ、杖子忽ちに擊着す、方さに知んぬ、我れに辜負することをと、甚に因つてか却つて箇の辜負と成り去る。只だ是れ未だ拄杖子を得ざること在り、且く道へ、雪竇木佛火を渡らざるを頌す、什麼としてか却て、箇の破竈墮の公案を引く、老僧直截、汝が與めに說く、他の意只だ是れ得失、情塵意想を絕して、淨躶々地にして、自然に他の親切の處を見ん。

す。

「安國師」慧安國師なり、五祖弘忍禪師傍出の嗣。

「此の子」破竈墮を指すなり

（一）第一義なり。

「陡變」陡は頓、又は突、或は遽の義なり、即ち陡變は遽かに變轉すること

第九十七則 金剛輕賤

垂示曰。拈一放二、未是作家、擧一明三、猶乖宗旨。直得天地陡變、四方絕唱、雷奔電馳、雲行雨驟、傾湫倒嶽、甕瀉盆傾、也未提得一半在。還有解轉天關、能移地軸底麼、試擧看。

【讀方】垂示に曰く。拈一放二、未だ是れ作家ならず、擧一明三、猶ほ宗旨に乖く。直に天地陡變し、四方絕唱し、雷奔り電馳せ、雲行き雨驟かに、湫を傾け嶽を倒し、甕瀉き盆傾くことを得るがごときも、也た未だ一半を提得せざること在り。還つて天關を轉ずることを解し、能く地軸を移す底有りや。試みに擧す看よ。

擧。金剛經曰、若爲人輕賤、放一線道。又且何妨。是人先世罪業、驢駝馬載。應墮惡道。陷墮了也。以今世人輕賤故、酬本及末。只得忍受。先世罪業、向什麼處摸索。種穀不生豆苗。則爲消滅。雪上加霜又一重。如湯消氷。

「金剛經」詳しくは金剛般若波羅密多經と云ひ、新譯の大般若波羅密多經六百卷中第五百七十七卷目能斷金剛分と云ふものこれなり、

【讀方】擧す。金剛經に曰く、若し人の爲めに輕賤せられんに、（一線道を放つ。又且つ何ぞ妨げん。）是の人先世の罪業有つて、（驢駝馬載。）應に惡道に墮すべし。（陷墮し了れり。）今世の人に輕賤せらるゝを以ての故に、（本に酬いて末に及ぼす。只だ忍受を得たり。）先世の罪業、（什麼の處に向つてか摸索せん。穀を種ゑて豆苗を生ぜず。）則ち爲めに消滅す、（雪上に霜を加ふ又一重。湯の氷を消すが如し。）

【評】金剛經に曰く、若し人の爲めに輕賤せられんに、是の人先世の罪業有つて、應に惡道に墮すべし。今世の人に輕賤せらるゝを以

舊譯にては此一卷丈け抄譯して金剛般若波羅密多經とせるなり、今本則の文は昭明太子が全文を三十二段に分ちたる中の第十六能淨業障分にあり。

ての故に、先世の罪業、則ち爲めに消滅すと。只だ平常の講究に據らば、乃ち經中常に論ず。雪竇拈じ來つて、這の意を頌して、敎家鬼窟裏の活計を打破せんと欲す。昭明太子、此の一分を科して、能淨業障と爲す、敎中の大意、此の經の靈驗を說く、此の如きの人、先世に地獄の業を造る、善力强きが爲めに未だ受けず今世の人に輕賤せらるゝを以ての故に、先世の罪業、則ち爲めに消滅す。此の經故らに能く無量劫來の罪業を消して、重を轉じて輕と成し、輕を轉じて受けざらしめ、復佛果菩提を得しむ。敎家に據らば、此の二十餘張の經を轉ずるを、便ち喚んで持經と作す、什麼の交渉か有らん。有る底は道ふ、經に自ら靈驗有り。若し恁麼ならば、汝試みに一卷を將つて、閑處に放在して看よ、他感應有りや、也た無しや。法眼道く、佛地を證する者を、此の經を持すと名く。經中に曰く、一切の諸佛、及び諸佛の阿耨多羅三藐三菩提の法は、皆此の經より出づと。且く道へ、什麼を喚んでか此の經と作すと、是れ黃卷赤軸底是なること莫しや、且く錯つて定盤星を認むること莫れ。金剛は法體に喩ふ、堅固なるが故に、物壞すること能はず、利用あるが故に、能く一切の物を摧く、山に擬すれば則ち山摧け、海に擬すれば則ち海竭く、喩に就いて名を彰す、其の法亦然り。此の般若に三種有り、一には實相般若、二には觀照般若、三には文字般若。實相般若は、則ち是れ眞智なり、乃ち諸人脚跟下、一段の大事、今古に輝騰して、逈に知見を絕す。淨躶々、赤灑々たる者是れなり。觀照般若とは、則ち是れ眞境なり。二六時中、放光動地、聲を聞き色を見る者是れなり。文字般若とは、即ち能詮の文字なり、即ち如今の說者聽者。且く道へ、是れ般若か、是れ般若にあらざるか。古

〔古人〕智者大師なり。

〔龐居士〕馬祖下の居士なり有名なる好雪片々の話は第四十二則にあり。

〔圭峯〕華

人道く、人々一卷の經有り、又道ふ、手に經卷を執らずして、常に如是經を轉ずと。若し此の經の靈驗に據らば、何ぞ止だ重を轉じて輕からしめ、輕を轉じて受けざらしむるのみならん。設令ひ聖に敵する功能も、未だ奇特と爲さず。見ずや龐居士、金剛經を講するを聽いて、座主に問うて曰く、俗人敢て小問有り、知らず如何。主曰く、疑有らば請ふ問へ。士曰く、無我相無人相、既に我人の相無くんば、阿誰をして講ぜしめ、阿誰をして聽かしめん。座主對無し、却つて曰く、某甲文に依つて義を解す、此の意を知らずと。居士乃ち頌有り曰く、我無く亦人無し、作麼ぞ疎親有らん、君に勸む座を歷ることを休めよ、爭でか直に眞を求むるに似て、金剛般若の性、外一纖塵を絕す、我れ聞き幷に信受、總に是れ假りに名を稱すと。此の頌最も好し、分明に一時に說き了れり。圭峰四句の偈を科して

嚴宗の第七祖、宗密禪師なり。

〔晦堂〕黃龍祖心禪師。

〔十二分教〕契經、應頌、授記、諷誦、自說、因緣、本事、本生、方

曰く、凡所有の相は、皆是れ虛妄なり、若し諸相は相に非ずと見ば、即ち如來を見ん、此の四句の偈の義、全く佛地を證する者を、此の經を持すと名くと云ふに同じ。又道く、若し色を以て我を見、音聲を以て我れを求めば、是の人邪道を行ず、如來を見ること能はず、此れ亦是の四句の偈、但だ中間其の義全き者を取る、僧晦堂に問ふ、如何なるか是れ四句の偈、晦堂曰く、話墮するも也た知らず、雪竇此の經上に於て指出す、若し人有りて此の經を持せん者は、即ち是れ諸人、本地の風光、本來の面目なり。若し祖令當行に據らば、本地の風光、本來の面目も、亦斬つて三段と爲さん、三世の諸佛、十二分教、一揑を消せず。這裏に到つて、設使萬種の功能有るも、亦管得すること能はず。如今の人、只管に經を轉じて、都べて是れ箇の什麼の道理と云ふことを知らず、只管に道ふ、我れ一日に多少をか轉

廣、未曾有、譬喩、論議是れなり。

〔大珠和尚〕馬祖の法嗣、慧海禪師なり。

〔古人道〕道生法師なりと云ふ。

得すと、只だ黃卷赤軸、巡行數墨を認む。殊に知らず、全く自己本心の上より起ることを。這箇は唯だ是れ轉處の些子なり。大珠和尚曰く、空屋の裏に向つて、數函の經を堆む、看よ他光を放つや。只だ自家一念發する底の心、是れ功德なるを以てなり。何が故ぞ、萬法は皆自心より出づ、一念是れ靈なり、既に靈なれば、卽ち通ず既に通ずれば則ち變ずと。古人道く、青々たる翠竹、盡く是れ眞如、鬱々たる黃花、般若に非ずと云ふこと無しと。若し見得徹し去らば、卽ち是れ眞如、忽ち未だ見得せずんば、且らく道へ、作麼生か喚んで眞如と作さん。華嚴經に曰く、若し人三世一切の佛を了知せんと欲せば、應に法界の性、一切唯心の造なりと觀ずべし、汝若し識得し去らば、境に逢ひ緣に遇うて、主と爲り宗と爲らん。若し未だ明得すること能はずんば、且らく伏して處分を聽け、雪竇眼を出して、大概を頌して、經の靈驗を明らめんことを要す。

〔明珠云云〕本據は法華經安樂行品にある譬喩なり。卽ち轉輪

頌。明珠在レ掌、上通二霄漢一、下徹二黃泉一。道二什麼一。四邊諸訛、八面玲瓏。有レ功者賞、多少分明。隨レ他去也。忽若無レ功時、作麼生賞。胡漢不レ來、內外絕二消息一。猶較二些子一。全無二伎倆一。展轉沒交涉。向二什麼處一摸索。打二破漆桶一來相見。伎倆既無、休去歇去。阿誰恁麼道。波旬失レ途。勘破了也。這外道魔王、尋二蹤跡一不レ見。瞿曇瞿曇、佛眼覰不レ及。咄。識レ我也無。咄。勘破了也。復曰、勘破了也。一棒一條痕。已在二言前一。

讀方　明珠掌に在り、(上霄漢に通じ、下黃泉に徹す。什麼と道ふぞ。四邊諸訛、八面玲瓏。)功有る者には賞す。(多少か分明なる。他に隨ひ去るや。忽ち若し功無き時は、作麼生か賞せん。)胡漢來らず、(內外消息を絕す。猶ほ些子に較れり。)全く伎倆無し。(展轉して沒交涉。

聖王ありて諸國を降伏するに、王は兵衆の功有る者に賞賜するに、髻中の明珠のみは與へず、最も大功ある者に與ふと。語に曰く、髻珠他より來らず、善惡邪正と歎くべからずと。〔什麽〕と道ふぞ此の著語

什麽の處に向つてか摸索せん、漆桶を打破し來れ相見せん。）伎倆既に無し、（休し去り歇し去る。阿誰か恁麽に道ふ。）波旬途を失す、（勘破し了れり。這の外道魔王、蹤跡を尋ぬるに見ず。）瞿曇瞿曇、（佛眼覰れども及ばす。咄。）我れを識るや也た無しや。（咄。勘破し了れり。）復曰く、勘破し了れり。（一棒一條の痕。已に言前に在り。）

【評】明珠掌に在り、功有る者には賞す、若人有つて、此の經を持し得て、功驗有る者には、則ち珠を以て之れを賞す。他此の珠を得て、自然に用ふることを會す、胡來れば胡現じ、漢來れば漢現ず、萬象森羅、縱橫顯現す、此れは是れ功勳有り。法眼曰く、佛地を證する者を、此の經を持すと名くと、此の兩句に公案を頌し畢れり。胡漢來らず、全く伎倆無し、雪竇鼻孔を裂轉す、也た胡漢有りて來る時は、則ち汝をして現ぜしむ。若し忽ち胡漢倶に來らざる時は、

種電抄には下に續けて一句とせり。〔瞿曇〕梵語なり、正しくは喬答摩〔ゴータマ〕と云ふ、瞿曇は舊譯者の言なり譯して地最勝と云ふ、此地の人類中最勝の義なり、是れ即ち釋尊の姓氏にして後ちに釋迦

又且つ如何。這裏に到つて、佛眼も也た覰不見。且らく道へ、是れ功勳か、是れ罪業か、是れ胡か、是れ漢か。直に羚羊角を掛くるに似たり、道ふこと莫れ聲響蹤跡と、氣息も也た無し、什麽の處に向つてか摸索せん。諸天をして花を捧ぐるに路無く、魔外をして潛かに覰ふに、門無からしむるに至る。此の故に洞山和尚、一生住院土地神他の蹤跡を覓むるに見ず、一日厨前に米麪を抛撒す。洞山心を起して曰く、常住の物色、何ぞ作賤すること、此の如くなることを得たると。土地神遂に一たび見ることを得て、便ち禮拜す。雪竇道く、伎倆既に無しと、若し此の無伎倆の處に到つては、波旬も也た途を失せしむ。世尊一切衆生を以て、赤子と爲す、若し一人有つて、發心修行せば、波旬が宮殿、之れが爲めに振裂す、他便ち來つて修行者を惱亂す。雪竇道く、直饒ひ波旬恁麽にし來るも、也た須

と改むと名義集にあり。〔勘破了也〕此の一著種電抄には福州本に從て削れり。〔羚羊角を掛く〕の没縱跡ことを云ふ。〔此の垂

らく途路を失却して、近傍の處無からしむべし。雪竇更に自ら點胸して曰く、瞿曇瞿曇、我れを識るや也た無しやと。道ふこと莫れ是れ波旬と。任ひ是れ佛來るも、還つて我を識るや也た無しや、釋迦老子尚自ら見ず、諸人什麼の處に向つてか摸索せん。復曰く、勘破し了れり。且く道へ、是れ雪竇瞿曇を勘破するか、瞿曇雪竇を勘破するか、具眼の者、試みに定當して看よ。

第九十八則　西院兩錯

垂示曰。一夏嘮々打二葛藤一、幾乎絆二倒五湖僧一。金剛寶劔、當頭截、始覺從來百不能。且道、作麼生是金剛寶劔。眨二上眉毛一、試請露二鋒鋩一看。

讀方　垂示に曰く。一夏嘮々として葛藤を打す、幾んど五湖の僧を絆倒す、金剛寶劍當頭に截る、始めて覺め從來百不能なることを。且く道へ、作麼生か是れ金剛の寶劍。眉毛を眨上して、試みに請ふ、鋒鋩を露はす看よ。

〔示〕は第一百則の垂示を入れ違へて居るならんと云ふ〔一夏〕四月十五日より七月十五日に至る九十日間の安居を云ふ〔嘮々〕嘮はカマビスシト訓して、茲では饒舌のこと。〔眨〕眼を活動させること。

舉。天平和尚行脚時、參二西院一。常曰、莫レ道レ會二佛法一、覓二箇舉話人一也無。（漏逗不レ少。這漢是則是、爭奈靈龜曳レ尾。）一日西院、遙見召曰、從漪。（鐃鈎搭索了也。）平舉レ頭。（着。兩重公案。）西院曰、錯。（也須二是鑪裏鍛過始得一。劈腹剜心。三要印開、朱點窄、未レ容二擬議一、主賓分。）平行三兩步。（已是半前落後。這漢泥裏洗二土塊一。）西院又曰、錯。（劈腹剜心。人皆喚作二兩重公案一、殊不レ知似二水入レ水如二金博レ金。）平近前。（依前不レ知二落處一。展轉摸索不着。）西院曰、適來這兩錯、是西院錯、是上座錯。（前箭猶輕後箭

> 〔天平和

深。平曰、從漪錯。錯認驢鞍橋、喚作爺下頷。似恁麼衲僧、打殺千箇萬箇、有什麼罪。西院曰、錯。雪上加霜。平休去。西院曰、且在這裏過夏、待共上座商量這兩錯。錯認定盤星。果然不知落處。軒知汝鼻孔在別人手裏。平當時便行。也似衲僧。似則似、是則未是。後住院、謂衆曰、我當初行脚時、被業風吹到思明長老處、連下兩錯。貧兒思舊債。也須是點過。更留我過夏、待共我商量。我不道恁麼時錯、我發足向南方去時、早知道錯了也。爭奈這兩錯何。千錯萬錯爭奈沒交涉。轉見郎當愁殺人。

讀方　擧す。天平和尚行脚の時、西院に參ず。常に曰く、佛法を會

> 尙〕相州天平山の從漪禪師、青原下の法系にして地藏の琛禪師珪曾孫、達磨門下第十六世の人。〔西院〕汝州思西院の思明禪師、南嶽下の法系に屬し、臨濟大師の法嗣、寳壽延沼禪師の弟子なり、達磨門下

すと道ふこと莫れ、箇の擧話の人を覓むるに也た無し。(漏逗少なからず。)這の漢是は則ち是、爭奈せん靈龜尾を曳くことを。)一日西院遙かに見て召して曰く、從漪。(鏡鈎搭索し了れり。)平頭を擧ぐ。(着。兩重の公案。)西院曰く、錯。(也た須らく是れ鑪裏に鍛過して、始めて得べし。劈腹剜心。三要印開して、朱點窄し。未だ擬議を容れず、主賓分る。)平行くこと三兩歩。(已に是れ半前落後。這の漢泥裏に土塊を洗ふ。)西院又曰く、錯。(劈腹剜心。人皆喚んで兩重の公案と作す、殊に知らず、水を水に入るゝに似て、金を金に博るが如きことを。)平近前す。(依前として落處を知らず。展轉して摸索不着。)西院曰く、適來這の兩錯、是れ西院が錯か、是れ上座が錯か。(前箭は猶ほ輕く後箭は深し。)平曰く、從漪が錯。(錯つて驢鞍橋を認め、喚んで爺の下頷と作す。恁麼の衲僧に似ば、千箇萬箇を打殺すとも、

第十三世の法孫。〔劈腹剜心〕親切の情を吐露して提撕すゐこと。〔半前落後〕ドチラにも付かぬこと〔愽〕換なり。〔軒〕明なり。〔後住院〕郎ち天平山に住院せしなり

什麼の罪か有らん。)西院曰く、錯。(雪上に霜を加ふ。)平休し去る。(錯つて定盤星を認む。果然として落處を知らず。軒かに知んぬ、汝が鼻孔、別人の手裏に在ることを。)西院曰く、且く這裏に在つて夏を過して、上座と共に、這の兩錯を商量せんことを待て。(西院尋常の脊梁、硬きこと鐵に似たり。當時何ぞ趕ひ將ち出し去らざる。)平當時便ち行く。(也た衲僧に似たり。似ることは則ち似たり、是なることは則ち未だ是ならず。)後住院し、衆に謂つて曰く、(貧兒舊債を思ふ。也た須らく是れ點過すべし。)我れ當初行脚の時、業風に吹かれて、思明長老の處に到つて、兩錯を連下せらる。更に我れを留めて夏を過して、我れと共に商量せんことを待たしむ。我れ恁麼の時錯とは道はず、我れ發足して南方に向つて去りし時、早く知んぬ錯と道ひ了ることを。(這の兩錯を爭奈何。千錯萬錯も、

〔大覺〕魏府の人、寶壽の延沼禪師と共に臨濟に嗣法す

争奈せん没交渉なることを、轉た郎當として、人を愁殺することを見る。)

【評】思明先づ大覺に參ず、後前寶壽に承嗣す、一日問ふ、化城を踏破し來る時如何。壽曰く、利劍死漢を斬らず。明曰く、斬。壽便ち打つ。思明十回斬と道ふ。壽十回打して曰く、這の漢甚の死急を着けてか、箇の死屍を將ちて、他の痛棒に抵すと云うて、遂に喝出す。其の時一僧有り、寶壽に問うて曰く、適來問話底の僧、甚だ道理有り、和尚方便して他を接せよ。寶壽亦打して、這の僧を趕出す。且く道へ、寶壽亦這の僧を趕ふ、唯だ當に他是と說き非と說くと道ふべきか、且つ別に道理有るか、意作麼生。後來倶に寶壽に承嗣す、思明一日出で、、南院に見ゆ、院問うて曰く、甚れの處より來る。明曰く、許州より來る。院曰く、什麼をか將ち得て來る。

〔掐〕爪で音をさせることなり。
〔阿剌々〕セキ〱の聲に訓ずと。急速に發する聲を云ふか。
〔進山主〕羅漢桂琛禪師の嗣たり。
〔些〕一本此の字に作る。
〔因〕一本に因緣とあり。
〔周慞〕狼狽すること。

明曰く、箇の江西の剃刀を將ち得たり、和尚に獻與せん。院曰く、既に許州より來る、甚に因つてか却つて江西の剃刀有る。明、院の手を把つて、掐一掐す。院曰く、侍者收取せよ。思明衣袖を以て、拂一拂して便ち行く。院曰く、阿剌々阿剌々。天平曾て進山主に參じ來る、他諸方に到つて、些の蘿蔔頭の禪に參得して、肚皮裏に在るが爲めに、到る處に便ち輕しく、大口を開いて道ふ、我れ禪を會し道を會すと。常に曰く、道ふこと莫れ佛法を會すと、箇の擧話の人を覓むるに也た無しと、屎臭氣人を薰ず、只管に輕薄を放つ。且く諸佛未だ出世せず、祖師未だ西來せず、未だ問答有らず、未だ公案有らざる已前の如くんば、還つて禪道有りや。古人事止むことを獲ず、機に對して垂示す、後人喚んで公案と作す。因みに世尊拈花、迦葉微笑、後來阿難迦葉に問ふ、世尊金襴を傳ふる外、別に何の法をか傳ふ。迦葉曰く、阿難。阿難應諾す。迦葉曰く、門前の刹竿を倒却着せよ。只だ未だ拈花せず、阿難未だ問はざる已前の如くんば、甚の處よりか公案を得來らん、只管に諸方冬瓜の印子に、印定し了られて、便ち道ふ、我れ佛法の奇特を會す、人をして知らしむること莫れと。天平正に此の如し、西院に叫び來つて、兩錯を連下せられて、直に得たり周慞惶怖して、分疎不下なることを、前村に搆らず、後店に迭らず、有る者は道ふ、箇の西來意を說くも、早く錯り了れり、殊に西院、這の兩錯の落處を知らず。諸人且く道へ、什麼の處にか落在する。天平頭を擧す、已に是れ二に落ち三に落ち了れり。所以に道ふ、他活句に參じて、死句に參ぜざれと。西院曰く、錯。他却つて當陽の用處を薦得せず、只だ我が肚皮裏に禪有りと道うて、他を管すること莫く、又行くこと三兩步、西院又

〔趕へども上らず〕蜀本には跳れども出ですに作る

曰く、錯。却つて舊に依つて、黑漫々地なり。天平近前す。西院曰く、適來の兩錯、是れ西院が錯か、是れ上座が錯か。天平曰く、從漪が錯と。且喜すらくは沒交涉、已に是れ第七第八頭にし了れり。西院曰く、且らく這裏に在つて夏を度り、上座と共に、這の兩錯を商量せんを待て、天平當時便ち行く、似ることは則ち也た似たり是なることは則ち未だ是ならず、也た他不是とは道はず、只だ是れ趕へども上らず。然も此の如くなりと雖ども、却て些子衲僧の氣息有り。天平後に住院す、衆に謂うて曰く、我れ當初行脚の時、業風に吹かれて、思明和尚の處に到る、連りに兩錯を下さる。更に我れを留めて夏を度つて、我れと共に商量せんことを待たしむ、我れ恁麼の時錯と道はず、我れ發足して南方に向つて去る時、早く知んぬ錯と道ひ了れることを。這の漢也た煞だ道ふ、只だ是れ第七第八

〔料掉〕料は計なり、數なり、掉は顚也、搖なり、天桂師曰く料掉は頭正しからざる貌、思慮卜度するを云ふと、郎ち度々頭を打ち掉て肯はざるを云ふ
〔一片帽〕在俗家の頭巾なり

頭に落つと、料掉として沒交涉。如今の人、他の發足して南方に向つて去りし時、早く知んぬ錯と道ひ了ると道ふことを聞いて、便ち去つて卜度して道ふ、未だ行脚せざる時、自ら許多の佛法禪道無し、行脚するに至るに及んで、諸方に熱瞞せらる、未だ行脚せざる時も、地を喚んで天と作し、山を喚んで水と作すべからず、幸に一星事無しと。若し總に恁麼に、流俗の見解を作さば、何ぞ一片の帽を買うて、戴いて大家に時を過さゞる、什麼の用處か有らん、佛法は是れ這箇の道理にあらず。若し此の事を論ぜば、豈に許多般の葛藤有らんや、汝若し我れ會す他會せずと道うて、一擔の禪を擔うて、天下を遶つて走るとも、明眼の人に勘破せられて、一點も也た使ふことを着けざらん、雪竇正に此の如く頌出す。

頌。禪家流、(漆桶一狀領過。)愛輕薄。(也有些子。呵佛罵祖、如麻似粟。)滿肚參來、用不着、(只宜有用處。方木不逗圓孔。闍梨與他同參。)堪悲堪笑、天平老。(天下衲僧、跳不出。不怕旁人攢眉。也得人鈍悶。)却謂、當初悔行脚。(未行脚已前錯了也。踏破草鞋、堪作何用。一筆勾下。)錯、錯、(是什麼。雪竇已錯下名言了也。)西院淸風、頓銷鑠。(西院在什麼處。何似生。莫道西院、三世諸佛、天下老和尚亦須倒退三千始得。於斯會得、許汝天下横行。)復曰、忽有箇衲僧、出云錯。(一狀領過。猶較些子。)雪竇錯、何似天平錯。(西院又出世。據欵結案。總沒交涉。且道、畢竟如何。打曰錯。)

〔滿肚〕俗に腹一杯と云ふこと。
〔眉を攢むる〕厭ふ貌。
〔鈍悶〕何となく心の悶えること。

讀方　禪家流、(漆桶一狀に領過す。)輕薄を愛す。(也た些子有り。佛を呵し祖を罵る、麻の如く粟に似たり。)滿肚參じ來つて、用不着(只だ用ふる處有るに宜し。方木圓孔に逗せず。闍梨他と同參。)悲しむに堪へたり笑ふに堪へたり、天平老、(天下の衲僧、跳不出。旁人の眉攢まることを怕れず。也た人の鈍悶することを得たり。)却つて謂ふ、當初悔ゆらくは行脚せしことを、(行脚せざる已前、錯り了れり。草鞋を踏破して、何の用を作すにか堪へん。一筆に勾下す。)錯、錯、(是れ什麼ぞ。雪竇已に錯つて名言を下し了れり。)西院の淸風、頓に銷鑠す。(西院什麼の處にか在る。何似生。道ふこと莫れ西院と、三世諸佛、天下の老和尚も、亦須らく倒退三千して、始めて得べし。斯に於て會得せば、汝に許す天下に横行することを。)復曰く、忽ち箇の衲僧有り、出でゝ、錯と云はん、(一狀に領過す。猶ほ些子に較れり。)雪竇が錯は、天平が錯に何似ぞ。(西院又出世。欵に據つて案に結す。總に沒交涉。且く道へ畢竟如何。打して

〔目に雲霄云々〕諸法皆空の一處見空裏を云ふ。〔抖擻〕擧げて振ふことなり〔皮殼漏子〕皮殼は皮袋なり、轉々自在にして破る〻こと無きを云ふと天桂師は云へり。

曰く、錯。）

【評】禪家流、輕薄を愛す、滿肚參じ來りて、用不着、這の漢、會することは則ち會す、只だ是れ用不得。尋常目に雲霄を視て道ふ、他多少の禪を會得すと。烘鑪裏に向つて、纔かに烹るに至るに及んで、元來一點も使ふことを着ず。五祖先師曰く、一般の人有りて參禪す、琉璃瓶裏に、糍糕を搗くが如くに相似たり、更に動轉することを得ず、抖擻し出でず、觸着すれば便ち破る。若し活鱍々地ならんことを要せば、但だ皮殼漏子の禪に參ぜよ、直に高山上に向つて、撲し將ち下り來るも、亦破せず亦壞せず。古人道はく、設使ひ言前に薦得するも、猶ほ是れ殼に滯り封に迷ふ、直饒ひ句下に精通するも、未だ途に觸れて狂見することを免れず。悲しむに堪へたり笑ふに堪へたり、天平老、却つて謂ふ當初、悔ゆらくは行脚せしことを、雪竇道はく、悲しむに堪へたり他人に對して、說き出さゞることを、笑ふに堪へたり、他一肚皮の禪を會す、更に些子を使ひ着ざることを。錯、錯、這の兩錯、有る者は道ふ、天平會せざる、是れ錯と、又有る底は道ふ、無語底是れ錯と、什麼の交涉か有らん。殊に知らず這の兩錯、擊石火の如く、閃電光に似たることを、是れ他向上人の行履の處なり、劍に仗て人を斬るに、直に人の咽喉を取つて、命根方に斷ずる如し、若し此の劍刄上に向つて行き得ば、便ち七縱八橫ならん。若し兩錯を會得せば、便ち以て西院の淸風、頓に銷鑠することを見る可し。雪竇上堂、此の話を擧し了つて、意に道はく、錯と。我れ且つ汝に問ふ、雪竇が這の錯、天平が錯に何似、且く參ぜよ三十年。

〔古人〕風穴の語。

第九十九則　國師十身調御

垂示曰。龍吟霧起、虎嘯風生。出世宗猷、金玉相振。通方作略、箭鋒相拄。編界不藏、遠近齊彰、古今明辨。且道、是什麼人境界。試擧看。

讀方　垂示に曰く、龍吟ずれば霧起り、虎嘯けば風生ず。出世の宗猷、金玉相振ふ。通方の作略、箭鋒相拄ふ。編界藏さず、遠近齊しく彰れ、古今明らかに辨ず。且く道へ、是れ什麼人の境界ぞ。試みに擧す看よ。

擧。肅宗皇帝、問忠國師、如何是十身調御。作家君主、大唐天子。也合知恁麼。頭上捲輪冠、脚下無憂履。國師曰、檀越踏毘盧頂上行。須彌那畔、把手共行。猶有這箇在。帝曰、寡人不會。何不領話。可惜許。好彩不分付。帝當時便喝。更用會作什麼。國師曰、莫認自己清淨法身。雖然葛藤、却有出身處。醉後郎當愁殺人。

讀方　擧す。肅宗皇帝、忠國師に問ふ、如何なるか是れ十身調御。（作家の君主、大唐の天子。也た合に恁麼なることを知るべし。頭上の捲輪冠、脚下の無憂履。）國師曰く、檀越毘盧頂上を踏んで行け。（須彌那畔、手を把つて共に行かん。猶ほ這箇の在る有り。）帝曰く、寡人不會。（何ぞ領話せざる。可惜許。好彩分付せず。帝ならば當時便ち喝せん。更に會することを用ひて、什麼か作さん。）國師曰く、自己の清淨法身を認むること莫れ。（然く葛藤すと雖ども、却つて出身の處有り。醉後郎當として人を愁殺す。）

〔忠國師〕南陽の慧忠國師なり、西京光宅寺に住す。
〔捲輪冠〕舍那の寶冠を引きて云ふなりと、古抄に漢書を引きて曰く漢王韓信と壇

に上る、漢王の穿つ法服を、平天冠、無憂履、藍天帶、袞龍服云々と。〔認〕認視する時はミトムルと訓じ、認知する時はシタタムルと訓ず。〔東宮〕皇太子の居る處なり寫本に天子の居る處とあるあり無論

【評】肅宗皇帝、東宮に在りし時、已に忠國師に參ず、後來即位して之れを敬すること愈々篤し、出入迎送、躬自ら車輦を捧ぐ。一日箇の問端を致し、來つて國師に問うて曰く、如何なるか是れ十身調御。國師曰く、檀越毘盧頂上を踏んで行け。國師平生、一條の脊梁骨、硬きこと生鐵の如し、帝王の面前に至るに及んで、爛泥の如くに相似たり、然かも答へ得て廉纖なりと雖ども、却つて箇の好處有りて、他道ふ、汝會得せんと要せば、檀越須らく是れ毘盧頂顊上に向つて、行いて始めて得べしと。他却つて薦まず、更に道ふ、寡人不會と。國師後面忒煞だ郎當として草に落ち、更に頭上底の一句を註して曰く、錯つて自己淸淨法身と認むること莫れと。所謂人々具足箇々圓成、看よ他の一放一收、八面に敵を受くることを。道ふことを見ずや、善く師と爲る者は、機に應じて敎を設け、風を看て帆を使ふ

誤りなりと知るべし。〔檀越〕又檀那とも云ふ、梵語陀那鉢底、此に施主と譯す、又曰く、檀越とは能く檀施を行じて貧窮の海を越ゆるが故なりと。〔毘盧〕具さには毘盧舍那、漢譯して遍一切處と云ふ。

ことを。若し只だ一隅を僻守せば、豈に能く回互せんや。看よ他の黃蘗老、善能く人を接することを。臨濟に遇着せば、三回便ち痛く六十棒を施す、臨濟當下に便ち會し去る。裴相國の爲めにするに及んで、葛藤忒煞し、此れ豈是れ善く人の師と爲るにあらずや。忠國師善巧方便、肅宗帝を接す、蓋し他八面に敵を受くる底の手段有るが爲めなり。十身調御とは、即ち是れ十種の他受用身なり、法報化の三身とは、即ち法身なり。何が故ぞ、報化は眞佛に非ず、亦說法の者に非ず、法身に據る時は、則ち一片虛凝にして、靈明寂照なり。太原の孚上座、楊州の光孝寺に在りて、涅槃經を講ず、游方の僧有り、即ち夾山の典座なり、寺に在りて雪に阻てらる。因に往いて講を聽く、講、三因佛性、三德法身と云ふに至つて、廣く法身の妙理を談ず、典座忽然として失笑す。孚乃ち目顧す、講し罷ん

で、禪者を請ぜしめて問うて曰く、某素智狹劣、文に依つて義を解す、適來講ずる次で、上人の失笑するを見る、某必らず短乏せる所有らん、請ふ上人說け。典座曰く、座主問はずんば即ち敢て說かず、座主既に問ふ、則ち言はずんばあるべからず、某實に是れ座主の法身を識らざることを笑ふ。孚曰く、此の如く解脫す、何の處か不是なる。典座曰く、請ふ座主、更に說くこと一徧せよ。孚曰く、法身の理は、猶ほ太虛の如し、竪に三際を窮め、横に十方に亘る、八極に彌綸し、二儀を包括す、緣に隨ひ感に赴いて、周徧せずと云ふこと靡し。典座曰く、座主の說、不是とは道はず、只だ法身量邊の事を識得して、實に未だ法身を識らざること在り。孚曰く、既に然も是の如くならば、禪者當に我が爲めに說くべし。典座曰く、若し是の如くならは、座主暫く講を輟むること旬日、靜室の中に於て、

〔報化云云〕金剛般若論の偈に曰く、應化は眞の佛に非ず、說法二取ならず、無說言相を離る。〔三因、三德〕正因は法性法身の德、了因は了悟般若の德、緣因は緣入解脫の德なり。〔三際〕過去、現在、未來、即

端然として靜慮し、心を收め念を攝め、善惡の諸緣、一時に放却して、自ら窮究して看よ。孚一へに言ふ所に依る、初夜より五更に至つて、鼓角の鳴るを聞いて、忽然として契悟す、便ち去つて禪者の門を叩く。典座曰く、阿誰そ。孚曰く、某甲。典座咄して曰く、汝をして大教を傳持して、佛に代つて說法せしむ、夜半什麼としてか、酒に醉うて街に臥すと。孚曰く、自來の講經は、生身父母の鼻孔を將て扭揑す、今日より已後は、更に敢て是の如くならずと。看よ他の奇特の漢、豈只だ去つて箇の昭々靈々を認めて、驢前馬後に落在せんや、須らく是れ業識を打破して、一絲毫頭の得べきこと無かるべく、猶ほ只だ一半を得ること在り、古人曰く、纖毫も修學の心を起さずんば、無相光中常に自在なりと、但だ常寂滅底を識つて、聲色を認むること莫れ、但だ靈知を識つて、妄想を認むること莫れ、

ち時間の無限なり。〔十方〕東西南北四維上下、即ち空間の無限なり。〔八極〕四方と四維。〔二儀〕陰陽兩儀。〔古人道〕誌公和尚が十二時の歌の句なり。

〔所以道〕永嘉大師證道歌の句なり。

所以に道ふ、假使ひ鐵輪頂上に旋るとも、定慧圓明にして、終に失せずと。達磨二祖に問ふ、汝雪に立ち臂を斷つ、當に何の事をか爲すべき。祖曰く、某甲心未だ安からず、乞ふ師心を安ぜしめよ、磨曰く、心を將ち來れ、汝が與めに安ぜん。祖曰く、心を覓むるに了に不可得、磨曰く、汝が與めに安心し竟んぬと。二祖忽然として領悟す。且く道へ、正當恁麼の時、法身什麼の處にか在る。長沙曰く、學道の人、眞を識らざることは、只だ從前識神を認むるが爲めなり、無量劫來、生死の本、痴人喚んで、本來人と作す、如今の人、只だ箇の昭々靈々を認め得て、便ち瞠眼努目して、精魂を弄す、什麼の交渉か有らん。只だ他の自己清淨法身と認むること莫しと道ふが如き、且く自己法身の如くんば、汝も也た未だ夢にも見ざること在らん、更に什麼の認むること莫しとか說かん。教家には、

〔道ふことを見ずや〕亦誌公和尚十二時の歌の句なり

〔洞山大師玄中銘に曰く〕學足下足鳥道殊ならず、坐臥經行玄路に非ざるなしと

〔足下無私〕一に無私たゞ無

清淨法身を以て、極則と爲す、什麼としてか、却つて人をして認めしめざる。道ふことを見ずや、認着すれば、依前として還つて不是と。咄、好し便ち棒を與ふるに、此の意を會得せば、始めて他の、自己清淨法身と認むること莫しと言ふことを會せん。雪竇他の老婆心切なることを嫌ふ、爭奈せん爛泥裏に刺有ることを。豈見ずや、洞山和尚、人を接するに三路有り、所謂玄路鳥道展手なり。初機の學道は、且く此の三路に向つて行履せしむ。僧師に問ふ、尋常學人をして鳥道を行かしむ、未審し如何か是れ鳥道、洞山曰く、一人に逢はず。僧曰く、如何か行かん。山曰く、直に須らく足下無私にして去るべし。僧曰く、只だ鳥道を行くが如くんば、便ち是れ本來の面目なること莫しや否や、山曰く、闍梨什麼に因つてか顚倒する。僧曰く、什麼の處か是れ學人顚倒の處。山曰く、若し顚倒せずんば、

綠に作る

什麽としてか、奴を認めて郎と作す。僧曰く、如何なるか是れ本來の面目、山曰く、鳥道を行かずと。須らく是れ見て這般の田地に到つて、方に少分の相應有るべし。直下に打疊して、迹を削り聲を呑ましむるも、猶ほ是れ衲僧門下は、沙彌童行の見解なること在り、更に須らく首を塵勞に回らして、大用を繁興して、始めて得べし。雪竇の頌に曰く、

頌。一國之師、亦强名。（何必空花水月。風過樹頭搖。）南陽獨許、振嘉聲。（果然坐斷要津。千箇萬箇中、難得一箇半箇。）大唐扶得眞天子。（可憐生。接得堪作何用。接得瞎衲僧、濟什麽事。）曾踏毗盧頂上行。（一切人何不恁麽去。直得天上天下。上座作麽生蹈。）鐵鎚擊碎、黄金骨。（暢快平生。已在言前。）天地之間、更何物。（茫々四海少知音。全身擔荷。撒沙撒土。）三千剎海、夜沈々。（高着眼。把定封疆。汝待入鬼窟裏去那。）不知誰、入蒼龍窟。（三十棒一棒也少不得。拈了也。還會麽。咄。諸人鼻孔、被雪竇穿了也。莫錯認自己清淨法身。）

〔南陽〕忠國師南陽の白崖山の黨子谷に在り、四十餘年山門を下らずと傳に見えたり。

讀方　一國の師、亦强ひて名く。（何ぞ必ずしも空花水月のみならん。風過ぎて樹頭搖く。）南陽獨り許す、嘉聲を振ふことを。（果然として要津を坐斷す。千箇萬箇の中、一箇半箇をも得難し。）大唐眞の天子を扶け得たり。（可憐生。接得して何の用をか作すに堪へん。瞎衲僧を接得して、什麽の事をか濟さん。）曾て毗盧頂上を踏んで行かしむ。（一切の人、何ぞ恁麽にし去らざる。直に得たり天上天下。上座作麽生か蹈まん。）鐵鎚擊碎す、黄金の骨。（平生を暢快す。已に言前に在り。）天地の間。更に何物ぞ。（茫々たる四海、知音少きなり。全身擔荷す。沙を撒し土を撒す。）三千剎海、夜沈々、（高く眼を着けよ

〔嘉聲〕此の上もなき名聲のこと。〔瞎衲僧を接得云々〕種電抄には種福本に隨て此の一着を削る。〔蒼龍窟〕時と場合に依り種々の意味に用ひらる、今は思量分別の深坑なり。〔諸人の鼻孔云々〕種電抄には評中の語とせり。〔道ふことを見ずや云々〕莊子に曰く、至人は己なく、神人は功無く、聖人は名なしと。〔眼腦〕眼睛のこと。〔十號〕如來、應供、正遍知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、

封疆を把定す。汝鬼窟裏に入り去ることを待つや。）知らず誰れか、蒼龍窟に入る。（三十棒一棒も、也た少きを得ず。拈じ了れり。還つて會すや。咄。諸人の鼻孔、雪竇に穿了せらる。錯つて自己清淨法身と認むること莫れ。）

【評】一國の師も、亦強ひて名く、南陽獨り許す、嘉聲を振ふことを、此の頌一へに箇の眞贊に似て相似たり。道ふことを見ずや、至人には名なしと。喚んで國師と作すも、亦是れ強ひて名を安じ了れり、國師の道、比倫すべからず。善能く恁麼に人を接す、獨り許す、南陽是れ箇の作家なることを。大唐眞の天子を扶け得て、曾て毗盧頂上を踏んで行かしむ。若し是れ具眼の衲僧の眼腦ならば、須らく是れ毗盧頂上に向つて、行いて方に此の十身調御を見るべし。佛之れを調御と謂ふは、便ち是れ十號の一數なり、一身十身と化し、十身百身と化す、乃至千百億身も、大綱只だ是れ一身なり。這の一頌、却つて說き易し。後は他の、自己清淨法身を認むること莫れと道ふことを頌す。頌し得て水灑ぐとも着かず、直に是れ口を下して說き難し。鐵鎚擊碎す、黃金の骨、此れは自己清淨法身を認むること莫れと云ふことを頌す。雪竇可煞だ他を讃歎して、黃金の骨、一鎚に擊碎し了れり。天地の間、更に何物ぞ、直に須らく淨裸々、赤灑々として、更に一物の得べき無くんば、乃ち是れ本地の風光なるべし、一へに三千刹海、夜沈々たるに似たり。三千大千世界、香水海の中に、無邊の刹有つて、一刹に一海有り、正當夜靜かに、更深くる時、天地一時に澄々地なり。且く道へ、是れ什麼ぞ、切に忌む目を閉ぢ眼を合する會を作すことを、若し恁麼に會せば、正に毒海に墮在せん、知らず誰れか蒼龍窟に入る。脚を展べ脚を縮む、

且く道へ、是れ誰ぞ。諸人の鼻孔、一時に雲竇に穿却し了らる。

天人師、佛なり、或は曰く無上士調御丈夫を一として之れに世尊を加へて十號の數を滿たすと、されど此の十號卽ち十德を具するを世尊卽ち世間尊と名くるなり。故に前說を可とす。前述の如く、此垂示は九十

第一百則　巴陵吹毛劍

垂示曰。收因結果、盡始盡終、對面無私。元不曾說。忽有箇出來、道一夏請益、爲什麼不曾說。待汝悟來、向汝道。且道、爲復是當面諱却、爲復別有長處。試擧看。

讀方 垂示に曰く。收因結果、始めを盡し終りを盡す。對面私無し、元曾て說かず。忽ち箇の出で來りて、一夏請益す。什麼としてか、曾て說かざると道ふこと有らば、汝が悟り來らんを待て、汝に向つて道はん。且く道へ、爲復是れ當面に諱却するか、爲復別に長處有るか。試みに擧す看よ。

八則のそれに誤入せるなりと、蓋し然らん。〔巴陵〕岳州巴陵の新開院顥鑒禪師なり、雲門大師の法嗣。〔吹毛〕臨濟嘗て語あり、吹毛用ひ了りて急に須らく磨すべしと。蓋し本則の問話は之れより來れるか

擧。僧問巴陵、如何是吹毛劍。斬。嶮。陵曰、珊瑚枝々、撐着月。光呑萬象。四海九州。

讀方 擧す。僧巴陵に問ふ、如何なるか是れ吹毛の劍。(斬。嶮。)陵曰く、珊瑚枝々、月を撐着す。(光萬象を呑む。四海九州。)

【評】 巴陵干戈を動せず、四海五湖、多少の人、舌頭地に落つ、雲門人を接すること、正に此の如し。他は是れ雲門の的子、亦各箇の作略を具す、是の故に道ふ、我れは愛す、韶陽新定の機、一生人の爲めに釘を抽き楔を拔くとを、這箇の話正に恁麼地なり。一句の中に、自然に三句を具す、函蓋乾坤の句、截斷衆流の句、隨波逐浪の句、答へ得て也た妨げず奇特なることを。浮山の遠錄公曰く、未だ透らざる底の人は、句に參ぜんよりは、意に參ぜんには如かず、

透得底の人は、意に參ぜんよりは、句に參ぜんには如かずと。雲門下に三尊宿有り、吹毛劍に答へて、倶に了と云ふ、唯だ是れ巴陵のみ答へ得て、了の字に過ぎたり、此れ乃ち句を得たり。且く道へ、了の字と、珊瑚枝々、月を樘着すと、是れ同か是れ別か。前來道ふ、三句辨ずべし、一鏃空に遼ると。這の話を會せんと要せば、須らく是れ情塵意想を絕し盡して、方に他の珊瑚枝々、月を樘着すと道ふことを見るべし。若し更らに道理を作さば、轉々摸索不着することを見ん。此の語は是れ禪月、友人を懷ふ詩なり、曰く、厚きことは鐵圍山上の鐵に似、薄きことは雙成仙體の纈に似たり、蜀機鳳雛、動もすれば蹩躠、珊瑚枝々、月を樘着す、王凱が家中、藏して掘り難く、顏回が飢漢、天雪に愁ふ、古檜筆の如く、直うして雷にも折けず、雪衣の石女、蟠桃の缺、佩びて龍宮に入つて、歩み遲々たり、

〔樘〕漢音當、吳音長也、捧げ持つこと〔噞〕種電には、噞に作り、他本亦哦に作る、哦は笑ふ貌、哦は魚の大口を開いた貌。〔三尊宿〕洞山の守初、羅漢の匡果及び巴陵なり。〔友人を懷ふ〕一本には友人に答ふ

繡簾銀簟、何ぞ參差たる、即ち知らず、驪龍珠を失す、知るや知らずや。巴陵句中に於て、一句を取つて、吹毛の劍に答ふ、則ち是れ快なり。劍刃上に毛を吹いて之れを試むるに其の毛自ら斷つ、乃ち利劍、之れを吹毛と云ふ。巴陵只だ他の問處に就いて、便ち這の僧の話に答ふ、頭落つるも也た知らず。頌に曰く。

頌。要レ平二不平一、細若二蚍蜉一。大丈夫漢、須二是恁麼一。大巧若レ拙。不レ動二聲色一。藏レ身露レ影。或指或掌、看。果然。這箇不是。倚レ天照レ雪。斬。覰着則瞎。大冶兮磨礱不レ下、更用二鍛煉一作二什麼一。千將莫二能求一。良工兮拂拭未レ歇。人莫二能行一。直饒千將出來、也倒退三千。別、別、咄。有二什麼別處一。讚歎有レ分。珊瑚枝々、樘二着月。三更月落、影照二寒潭一。且道、向二什麼處一去。直得天下太平。醉後郎當愁二殺人一。

讀方

不平を平げんことを要す、（細なること蚍蜉の如し。大丈夫の漢、

とあり、又禪月集には、還擧人歌行卷一に作る。〔双成〕西王母が侍女董双成なり。〔纈〕音結なり、シボリのアヤを云ふ。〔蜀機〕、蜀江の機、鳳雛は錦の文也。〔蹩躠〕衣裳の廣大にして重きが爲め行歩の時

稍もすると蹶き蹩れんとする故の意あるを云ふ躄は倒れる貌、蹩は徐行の貌なり。又曰く行歩徐々の説は未だ切當ならずと。〔王凱〕晉の武帝の叔父、亦能く寶財珍器に富めりと。〔顔回の飢漢〕論語に曰く

須らく是れ恁麼なるべし。）大巧は拙の如し。（聲色を動せず。身を藏し影を露はす。）或は指或は掌、（看よ。果然として這箇不是。）天に倚つて雪を照らす。（斬。覷着すれば則ち瞎す。）大冶も磨礱し下さず、（更に鍛煉を用ひて、什麼か作さん。干將能く求むること莫し。）良工も拂拭して未だ歇まず。（人能く行ずること莫し。直饒ひ干將出で來るとも、也た倒退三千。）別、別。（咄。什麼の別處か有らん。讃歎するに分有り。）珊瑚枝々、月を樘着す。（三更月落ちて、影寒潭を照らす。且く道へ、什麼の處に向つてか去る。直に得たり天下太平なることを。醉後郎當として、人を愁殺す。）

【評】不平を平げんとを要す、大巧は拙の如し。古、俠客有り、路に不平を見て、强、弱を淩ぐを以て、即ち劍を飛ばして、强者の頭を取る。所以に宗師家、眉に寶劍を藏し、袖に金槌を掛けて、以て不

一簞の食一瓢の飲陋巷に在りて人其憂に堪へず。〔雪衣の石女〕潔白無垢の人品に喩へて云ふ〔蟠桃〕東海の仙山に大桃實あり蟠屈三千里なりと、之れを蟠桃と云ふ。〔鉄〕一本には抉に作れり、玉佩なり

平の事を斷ず、大巧は拙の若し、巴陵の答處、不平の事を平げんとを要す、他の語忒煞だ傷巧なるが爲めに、返つて拙と成るに相似たり。何が故ぞ、他の當面に揮ひ來らずして、却つて僻地裏に去つて、一截して暗に人の頭を取るに、而も人覺えざるが爲めなり。或は指、或は掌、天に倚つて雪を照らす。會得せば則ち天に倚る長劍の、凛々たる神威の如し、古人道はく、心月孤圓にして、光萬象を呑む、光境を照らすに非ず、境も亦存するに非ず、光境倶に忘ず、復是れ何物ぞ。此の寶劍、或は現じて指上に在り、忽ち掌中に現ず。昔日慶藏主、說いて這裏に到つて、手を竪て、曰く、還つて見るや。也た必らずしも手指上に在らず、雪竇路を借りて經過して、汝をして古人の意を見しむ。且らく道へ、一切處、是れ吹毛の劍ならざるべからず、所以に道ふ、三級浪高うして、魚龍と化す、痴人猶ほ戽

む、夜塘の水と。祖庭事苑に、孝子傳を載せて曰く、楚王の夫人、嘗て夏涼に乘じて、鐵柱を抱いて、感じて孕む。後一の鐵塊を產す。楚王、干將をして鑄て劍に爲らしむ、三年にして乃ち雙劍と成る、一雌一雄。干將密かに雄を留めて、雌を以て楚王に獻ず、王匣中に祕す、常に悲鳴するを聞く、王群臣に問ふ。臣曰く、劍に雌雄あり、鳴く者は雄を憶ふのみと。王大いに怒つて、卽ち干將を收めて之れを殺さんとす。干將其の應を知つて、卽ち劍を以て屋柱の中に藏す因つて妻の莫耶に囑して曰く、日北戶に出で、南山に其松あり、松、石に生ず、劍其の中に在りと。妻後に男を生む、眉間赤と名く、年十五、母に問うて曰く、父何くにか在る。母乃ち前事を述ぶ。久しく思惟して、柱を剖いて劍を得、日夜父の爲めに讐を報ぜんことを欲す。楚王も亦募つて、其の人を覓めしむ、宣言すらく、眉間赤

と。〔卽ち知らず〕種福は電に從つて本之れを削る。〔失珠〕善友を失ふこと。〔蚍蜉〕蟻の類なりと云ふ。〔大巧〕老子云々に出づ、大智は愚の如し、大辯は訥の如し、大象は形なし、大直は屈の

を得る者有らば、厚く之れを賞せんと。眉間赤遂に逃ぐ。客有りて曰く、子眉間赤に非ざることを得んや。曰く、然り。客曰く、吾れは甑山の人なり、能く子が爲めに父の讐を報ぜしめん。赤曰く、父昔辜無きに、枉げて茶毒せらる、君今惠念す、何の須むる所ぞや。客曰く、當に子の頭並びに劍を得べし。赤乃ち劍並に頭を與ふ。客之れを得て楚王に進む。王大いに喜ぶ。客曰く、願くは油を煎じて之れを烹ん。王遂に鼎中に投ず。客、王を詒いて曰く、其の首爛れず。王の臨視するに方つて、客後に於て劍を以て擬すれば、王の頭べ鼎中に墮つ、是に於て二首相嚙む。客、眉間赤が勝たざらんことを恐れて、乃ち自ら刎ねて、以て之れを助く。三頭相嚙む、尋いで亦倶に爛る。雪竇道く、此の劍能く天に倚つて雪を照らすと。尋常に道ふ、天に倚る長劍、光能く雪を照らすと。這の些子の用處、直に

如し等と並べ擧げたり。〔大冶、良工〕共に刀鍛冶の名人と云ふことなり。〔別々〕一字二句にして、珊瑚枝々の末句を單句と云ふ〔古人道〕盤山の語なり。〔祖庭事苑〕より以下尋で亦倶に爛るまでの

得たり大冶も磨礱し下さざることを。任ひ是れ良工も、拂拭して未だ歇まず、良工は即ち干將是れなり、故事自ら顯らけし。雪竇頌し了つて、末後に顯出して道ふ、別々と、也た妨げず奇特なることを。別に好處有り、尋常の劍と同じからず。且く道へ、如何なるか是れ別處、珊瑚枝々、月を撑着す、謂つべし光前絶後、獨り寰中に據つて、更に等匹無しと、畢竟如何、諸人の頭地に落ちぬ。老僧更に一少偈有り。

萬斛盈レ舟信レ手拏。却因二一粒一甕呑レ蛇。

拈二提百轉舊公案一。撒却時人幾眼沙。

萬斛舟に盈ちて、手に信せて拏ふ、却つて一粒に因つて、甕蛇を呑む、百轉の舊公案を拈提して、撒却す時人の幾眼沙。

數百字、種電抄には蜀本に從て後人の附會なりとして削れり。〔干將莫耶〕干將は劍師、莫耶は其の妻なり、以て二劍の名とせり、祖庭事苑には干將を以て楚人の如く云ひ、漢書には韓王の劍師、蜀志には吳王の劍師なりと云ふ、されど今は史上の事實を問ふにあらずと知るべし、故事自ら顯らかなりと雖も、祖庭事苑の説妄誕極りなし、寧ろ種電の如く削るに如かず。〔萬斛〕許多の公案に譬ふ、實統曰く萬斛の粟米は人の命根を養ひ、萬差の公案は人の慧命を持續すと。〔拏〕取なり、引也。〔甕蛇を呑む〕又曰く蛇、甕裸の一粒を食つて、却つて甕中に墮して出づることを得ずと、即ち人の慧命を相續する公案と雖も、機、位を離れず、徒らに言句に固着せば、却つて葛藤窟裡に死在すべしとの意を云ふなり。

佛果圜悟禪師碧巖錄卷之十　終

附錄 禪語要解

附錄 禪語要解

あ

【下語】古則公案法語垂示等に一轉語を下すこと。

【阿誰】阿の字には別に意味なし、俗にドナタ樣と云ふ如し。

【迹を削り聲を呑む】文字言句に付き廻ること。

【阿那箇】那箇に同じ、阿は助字。

【相饒さず】餘計なものはないと云ふこと。

【蛙歩】歩は助字なり、蛙のこと。

【行脚】身を雲水に託して、東西に參師問法すること。

【暗曉得】知りもせぬに知つた振りをすること。

【行者】出家を欲して、寺院に住するも、尙ほ衣鉢を得ざるもの、又は師に近侍する

小僧を云ふ。

【安排】物を安置排列して、行儀よく並ぶること。

【行履】行狀履歴を云ふ、動作のこと。

【阿爺阿爹】南人は父を阿爺と呼び、北人は阿爹と呼ぶ、異語同意。

【阿羅漢】又は單に羅漢と云ふ、梵語、譯して無生、殺賊、應供の三義あり、小乘の教に依て開悟せしもの。

【阿剌々】オー危ないと云ふ樣の意、不意に發する語なり。

【有般底】般は俗にアチラコチラと云ふことを那般這般と云ふ如く別に意味なし、或る人と云ふこと。

【阿轆々地】轆は井戸車なり圓轉して些の澁滯なきこと、阿と地とは助字。

い（ゐ）

【咦】笑ふ貌で、フフンと云ふ程の意、又尤もの意に用ふ。

【怎生】怎地、爭奈、奈何、共に皆如何に同じ。

【意根】今日の語で腦髓と云ふが如し。

【依草附木】俗に幽靈亡魂と云ふものゝ、人體を離れて宿るに處なきまゝに、草や木に依り附いて、種々の姿を現はすと云ふ、支那古來の言ひ傳へなり。

【一挨一拶】挨拶のこと、一には別に意味なし、輕觸を挨と云ひ强觸を拶と云ふ。

【一狀に領過す】過は助字なり、同罪には各別に令狀を發せず、一紙に之を狀して罪を領せしむること。

【一著】向上第一義のこと。

【一念萬念】長短の二念に渉らざるを云ふ、即ち一念が即萬念、萬念が即一念なりとの意。

【一圓相】一つ圓い輪のこと、手若くは持てる拂子如意等でグルリと圓く畫くこと。

【一摸に脫出す】同じ型を出たこと、別に新機軸のなきなり。

【一火】兵隊の五人を伍とし、五伍を火とす、故に一火は二十五人の一小隊なり。

【一箇半箇】一人半人に同じ。

【一拶】强く觸るゝことを拶と云ふ。

【一隻眼】　左右二つの眼は常人皆あるが更に其外に右とも左とも付かぬ一つの眼と云ふこと、即ち常人に超え妙悟の域に達せるを一隻眼を具すといふ。
【一色邊】　純一無雜のこと。
【一轉語】　一語を撥轉すること、俗に一言と云ふが如し。
【虛】　虛僞、虛無等の意に非ず、虛怯の義にして臆病のこと。
【一筆に勾下す】　一言で取消したと云ふ程の意。
【何似】　イヅレにて、俗にドチラと云ふこと。
【道】　謂ふに同じ。
【不審、未審】　禮話にして珍重と同じと云ひ、休歇の語と云ひ、疑を挾む語即ち詳かならずと云ふ三說あり、用處に依て解すべし。
【狗赦書を銜む】　大舍國より献じたる狗の身の長五尺、心は人にも勝つて、時の天子が赦書を賜はつた時、夫れを銜んで國中を遊んで居たが、立派な諸侯も、其の赦書に觸るゝを恐れて、狗に道を避けたと云ふ後漢書の故事。
【院主】　役僧の役名なり、古は監寺のことを院主と云うたと云ふ。

う

【恁麼】　宋時の俗語にして、此の如しと云ふに同じ。
【井の驢を覰るが如し】　無心無分別にして、擬議に亘らぬこと。
【胡盧】　無生の曲調、何の聲とも辨ぜず、旛蓋等の風に吹かれて觸着する音響の形容、沒蹤跡のこと、又は笑聲のこと。
【雲居の羅漢】　雲居山の羅漢像は高い處にのせてあると云ふ處から、今は高慢な人と云ふ意。
【胡亂】　胡人の亂と云ふことにて、物の亂れて辨じ難きことなり。

え（ゑ）

【影々響々】　影に影が重なり、足音に足音が響くこと、即ち後に隨ふを云ふ。
【鰕跳れども斗を出でず】　何としても、外へは出られぬと云ふ意味である。
【霙緣】　纏綿に同じ、マツハルこと。

【延壽堂】 禪家の病室のこと。

【會】 名詞にては集會の義、動詞にては了解の意味である。

【圓成實性】 本體のこと、圓滿成就實相の三德を備へ、絕對妙極の處なり。

【圓陀々地】 圓轉滑脫のこと陀々は美艷の形。

お（を）

【和尙】 梵語、塢婆遮迦、譯して親敎師又は力生と云ふ、人の師匠たるべき僧を云ふ。

か

【江湖】 江西湖南のこと、古江西に馬祖あり、湖南に石頭あり、各々覇を稱す、天下參禪の士多く玆に集まる、依て衆人集合の處を江湖と云ふ、今禪家にては社會と云ふ意に用ふ。

【向上向下】 進取退步と云ふが如し。

【硬剝々地】 硬くて齒も爪もたゝぬこと。

【頭に迷ひ影を認む】 昔演若多と云ふ人、鏡を裏返しに見て頭がないと騷ぎ出したとの故事。

【頭を刺して膠盆に入る】 何とも動きの取れぬこと。

【聱訛】 義理の見分け難き處のこと、又肝要の意にも用ひらる。

【譊訛】 錯雜紛糾して解し難きこと。

【架下】 相撲の手下と云ふ如き意。

【角駄】 馬に負はせたる荷物のこと。

【影團々】 團々は輝く形容、偏界不曾藏のこと。

【下載】 載は運なり、舟に荷を積むを上載と云ひ、舟より卸すを下載と云ふ、又東南の風を上載、西北の風を下載と云ふ、之れ漢土の河の多く東流なればなり即ち下載は空舟が川下へ下ること。

【可惜許】 許は助字なり、卽ち惜しむ可しで、惜しいことだと云ふ意。

【風に因て火を吹く】 事の容易なること。

【喝】 叱咤の意に用ひ、又言語思慮の及ばぬを顯はすに用ふ。

【葛藤(かつとう)】　文字言句のこと、文字言句の纒綿たることは恰も葛や藤のやうぢやから斯く用ひたのである。

【合子(がふす)】　奩子なり、奩は音籢にして、香を藏むるの器である。

【還て(かへつ)】　寧ろと云ふに同じ。

【蝦蟆(がま)】　價値なきものゝこと。

【勘過(かんくわ)】　人の悟りを試驗すること、勘檢、勘破に同じ。

【含元殿(がんげんでん)】　唐の景宗の建てられたる宮殿のこと。

【乾屎橛(かんしけつ)】　支那人が人糞を日光に晒らして肥料に用ふる、其の時此の人糞をかき廻はす棒を云ふ、即ち糞かき棒で、汚なくて手もつけられぬこと。

【眼睛突出(がんせいとつしゆつ)】　人を愚弄する語。

【鑒多口(かんたこう)】　辨舌の巧妙、俊利なること。

【鉗鎚(かんつゐ)】　鍛冶職や鑄物師が鋼鐵を煆煉するに用ゆる器、師家が學人を陶冶する手段に譬ふ。

【勘破了也(かんぱれうや)】　勘檢して了つたと云ふこと。

【伊(かれ)】　彼に同じ。

【渠濃(かれ)】　彼に同じ、されど處に依り彼の奴と云ふ意味となる。

き

【機(き)】　言葉を離れて獨り至るを云ふ。

【坵圾堆(きうきふたい)】　塵塚のこと。

【九維(きうゐ)】　四方四維及び天のこと。

【鬼眼睛(きがんぜい)】　鬼のやうな顏つきと云ふので、子供威しのこと。

【鬼窟裏(きくつり)】　餓鬼道のこと、餓鬼道とは六道の一にして、飲食を得ることの出來ぬ地獄である、即ち文字言句に拘束せられて、自由ならざること。

【近離(きんり)】　近頃と云ふこと。

【饒鈎搭索(にようこうたつさく)】　饒鈎は日本の熊手の如き器物、搭索とは物を引きかけて、遠くより引き寄せること。

【脚跟下(きやくこんか)】　脚下のこと、跟に意味なし。

【去就】　動作のこと。

く

【空を望んで啓告す】　天上を仰いで月に問ふの形容。
【狗口を合取せよ】　餘計なことを云ふなと云ふこと。
【屈】　寃罪のこと。
【屈棒】　罪なきに打つこと。
【口匾擔に似たり】　無言のこと、匾擔とは支那の勞働者が荷物を背負ふ時に背中へあてる木。其の形が曲つて居る、日本での字口と云ふが如し。
【漚麻池】　水の僅かにピチヤ〳〵溜つて居る處のこと。
【戽む】　水を汲み出すこと。
【裙子】　釋名に裙は群なり群幅を連接す、腰下の衣なりとあり、腰コロモのこと。
【囫】　不意に發する聲を寫したる字なり。
【過】　過ぎたと云ふことで、即ちもう疾く濟んで了うたと云ふ意。

【黃頭碧眼】　黃頭は釋尊のこと、碧眼は達磨のこと。
【果然】　果せる哉と云ふに同じ、テツキリなど云ふ俗語の意なり。
【瞎】　盲目のこと。
【聒々】　水の流れる音なり。
【活計】　生活の計謀なり、白樂天詩に曰く「莫レ厭家貧活計微」と註に活計は猶ほ生々と云ふが如しとあり。
【鶻の鳩を捉ふ】　勢の敏捷なること。
【火裏蓮】　涅槃經にある語、不思議、希有の義。
【欵】　罪人の罪狀を書いた文書。
【棺木裏に瞠眼す】　死中に活あるの消息を云ふ俗語である。
【關棙子】　門の閂の如し、尤も緊要の處を云ふ、或は曰く關捩は機棙なり、故にカラクリのバネのことなりと、何れにしても意味は同じ、子は助字なり。
【雲を挐ひ霧を攫む】　龍の空中をかける狀を形容した語である。

け

【夏】一夏九十日の禁足の期間を云ふ、即ち四月十五日より七月十五日までなり、又之れを安居と云ひ夏坐とも云ふ。

【解】了解と云ふ時には物の解つたこと、見解と熟字すれば意見と云ふこと。

【擊石火】間隙のなきこと。

【黠兒】小利口な人のこと。

【嶮】あゝ危い哉と云ふ意。

【圈繢、惓繢】獸類を捕捉する「ワナ」を云ふ、今は師家が學人に對する術、束縛の意に略同じ。

【眼華】眼病にて空中に華の如き物を見るを云ふ。

【賺殺】殺は助字格別の意味なし、即ち人を馬鹿にすること。

【元字脚】一字のこと、元の字の脚は乙の字で、乙は一と同じと。

【見成公案、又は現成公案】宇宙萬象目前に羅列して有のまゝの姿を云ふ。

【圈攣】圈は禽獸を養うて置く檻、攣は係なりで、絲で物をクヽルこと。

【訝郎當】訝は嗟訝と熟字して、俗にサテモ〳〵と云ふが如し、郎當は遢逗を見よ、狼藉疑怪の義なり。

【繫驢橛、繫驢橛子】驢馬を繫ぐ木橛のことで、甚だツマラヌ賤しきものとの罵ひ言葉なり。

【見聞覺知】眼耳鼻舌身意の六根が、色聲香味觸法の六境に對して分別すること。

こ

【這】此に同じ。

【箇】此に同じ。

【公案】公府の案牘にして法律のこと、而して禪門の問答語話は法律の動かすべからざるが如く確乎不拔、暗まし難く背き難きものぢやとの意より公案と云ふ。

【後語】再拶に同じ、別の手段のこと。

【勾賊破家】賊を養うて破產すること、俗に飼ひ猫に手を嚙まれたと云ふが如し。

【黑漆桶】暗黑なり、無明堅固に喩ふ。
【轂中】弓の箭端の當る處。
【鋸解稱鎚】解くことを得ずと云ふ俗語、鋸解秤錘とも云ふ。
【黑山下】鬼窟裏と大同小異。
【黑漫々】了解せざること。
【擧す、擧似す、擧示す】共に示すと云ふ意。
【據座】一寸坐り直すこと。
【胡孫毛蟲を喫す】猿が毛虫を喰ふと、即ち呑むとも吐くとも出來ずして悶くを云ふ。
【覰著】著は助字、見ること。
【鶻突】濁亂の義なり。
【淈湆】鶻突に同じ。
【牛頭沒し馬頭回る】迅速敏捷のこと。
【這老賊】抑下する語にして、然かも賛嘆の意を含む。
【裩】褌なり、褻衣なり、私衣なり。

【權實】權は方便にして、實は目的。
【渾崙に棗を呑む】渾崙は眞暗のこと、暗闇の中で棗實を圓呑みにする如く味の知れぬを云ふ。
【鋼鏰生鐵を着く】鍋釜の穴を塞ぐに鎔解せぬ生の鐵を着けること、即ち何の役にも立たゝぬとの意。
【五位】正中偏、偏中正、正中來、偏中至、兼中到の五にして、洞山大師の用ひたる語。

さ

【齋】齊なり、和訓に「トキ」と云ふ即ち時なり、又齋は中なり、日午一髮一瞬を過ぎざる時に食するを云ふ。
【再運前來】同じことを繰り返すこと。
【眨】眼を活動させること。
【蔡州を打破】死して弔はずとの俗語。
【草々】匆々と同じく、丁寧の反對なり。

【喪車背後に藥袋を懸く】　死人に藥をのませるに同じく、何の役にも立たぬこと。

【草賊】　俗に云ふコセ〳〵泥棒のこと。

【蒼天々々】　あゝ悲しいと云ふ意。

【贓を抱いて屈と叫ぶ】　贓は贓品即ち盗んだものなり、盗品を持て居ながら盗まぬと云ふこと、即ち自ら辱を暴らすを云ふ。

【草裏の漢】　落草の漢に同じ、即ち慈悲故に醜を忘るゝこと。

【左眼半斤右眼八兩】　四文目を一兩と云ひ、十六兩を一斤と云ふから、八兩が半斤、半斤が八兩、何れにしても同じこと。

【錯】　チガフと云ふこと。

【坐具】　禮拜する時に下に敷くもので、袈裟をかけた時には必らず持つべきもの。

【作家】　詩人から出た語で、唐宋時代に詩文が大流行せし處から、作者とか作家とか云へば人を稱賛する套語になつたのである、即ち怜悧な人と云ふに同じ。

【蹉過】　間違ひのこと。

【些子に較れり】　人を愚弄するの語。

【劄】　竹の針で物を刺すこと、即ちよい挨拶ぢやと云ふ意。

【撮し來る】　指の先きでツマンで見ること。

【拶着】　着に意味なし、挨拶のこと。

【炒閙來也】　油斷ならぬこと。

【茶飯】　作用と云ふが如し、平凡なる日常の受用を禪家にて茶飯と云ふ。

【三界】　欲界、色界、無色界のこと、今日の語で浮世と云ふ如し。

【三玄】　體中玄、句中玄、玄中玄のこと。

【三箇四箇】　誰れも彼れも同じことを云ふなどゝの場合に用ふるなり。

【三條椽】　僧堂に坐するに、一位分は三尺に六尺、即ち疊一疊に坐臥す、屋上に三本の椽あり、故に云ふ。

【山僧】　禪僧の住山せる者が自ら稱して云ふ語、通常私、我など云ふに同じ。

【三昧】　梵語、調直定、王受、正定などゝ譯す、心攝して餘處に向はざるを云ふ。

【三要】　第一要、第二要、第三要。

【詐明頭】　知らぬことを知つた振りすること。

【鎖を打し枷を敲く】鎖は罪人を縛るもの、枷は手足の動かぬやうにはめるカセ、即ち學人が文字言句や、獨斷臆想に束縛さるゝこと。

し

【收】收藏して遺す處なきこと。

【就身打刧】一說には碁の手の打替のことを言ひ、又一說には身に就て刧かすこと故、巾着切の如きものといふ、兎に角寸分の隙のなきこと。

【囚に停つて智に長ず】罪人が監獄の中に囚はれてゐて、罪を脫れんと工夫すること。

【死蝦蟆】見られた狀はないといふこと。

【四句】一、異、有、無の四なり。

【四句百非】前の四句及び此の四句交加して百非となる。

【似過】示し與ふとの意なり。

【四州八縣】四州とは東弗婆提、西瞿陀尼、南閻浮提、北狗盧の四、八縣とは語路のはづみで云うたまでのこと、世界中と言ふが如し。

【四七二三】西天の四七、即ち釋尊より達磨に至る二十八祖、東土の二三即ち達磨より慧能に至る六祖を言ふ。

【示衆】師家が大衆に教誡訓示することを言ふ。

【祇對】答へのこと。

【舌上の齶を拄ふ】閉口して口のきけぬこと。

【七花八裂】七通八達にして、自在なるを言ふ、又事の繁に失して滅茶苦茶なるを言ふことあり。

【七事】弓矢刀劍甲冑戈の七つ道具のこと、又左傳には暴を禁じ、兵を戢め、大を保ち、功を定め、民を安んじ、衆を和し、財を豐かにすとあり。

【七處九會】釋尊說法の場處は七處にして、法座の九會なりしを言ふ、八十九則の冠註を見よ。

【習氣】永く香を容れたる器は、香を去ると雖其の香の存するが如きを言ふ。

【失曉】寢忘れて曉をとりはづしたこと。

【失珠】善友を失ふこと、即ち善友を以て珠に喩ふ。

【漆桶】　無明堅厚な漆桶に喩ふと種電抄にあり、即ち暗黑のこと。

【榔𣗖】　天台山より生ずる木の名、拄杖を造るに適す、今は拄杖の名となる。

【失錢遭罪】　唐の時代の法律で、錢を失うた者は罪科に處すと定められてあつたとのこと、誠に引き合はぬ話しである。

【且　道】　上を抑へて下を起す時に用ふ。

【習學】　有學二乘の位なり。

【請益】　ある上に猶物を增して貰ふことなれど、それが一轉して師友に物事を聞き、其上に更に質問し討議することなり。

【眞過】　無上眞實の道に契合せる大覺信を言ふ。

【櫬、噸】　梵語に達嚫拏と言ひ、財施のこと。

【眞諦】　俗諦に對する語、眞諦は平等一如の法、俗諦は差別萬別の法なり、此のことに依て宇宙萬象を說明す。

【陞座】　普說を云ふ時と、上堂を言ふ時とあり、蓋し高座に陞りて說法すること。

【神通、遊戲】　縱橫無碍にして自由自在の作略を云ふ。

【正當恁麼】　正も當もマサニと讀み、恁麼とは宋國の俗語で、此の如きの意、故に正當恁麼とは、サアー斯うなつた時、と云ふ程の意。

【唱　拍相　隨ふ】　同道唱和と云ふに同じ意なり。

【正偏】　正は正位にして眞實の義、迷悟凡聖超絕の處、即ち平等なり、偏は之れに反す、哲學上の語にて云へば、正は實在にして、偏は現象なり、之れ即ち五位の二本柱とも云ふべく、宇宙萬象の實相眞理を此の二にて說明し、正と偏との二を標的として、平等中に差別の含まれて居る位を正中偏、千別萬差の儘が平等一相を離れぬ位を偏中正、而して此の二位が社會に於て雜多の作用を爲すを正中來偏中至の二位とし、畢竟圓融無礙なるを兼中到とした、之れ洞山大師の五位と稱するもの。

【商量】　問答往來すること。

【淨裸々赤灑々】　少しも飾り氣のなきこと。

【爍迦羅眼】　爍迦羅は梵語、譯して堅固と云ふ。

【且喜】　一應隨順して許す語、最も多く下を抑へる時に用ふ、マアそれでも宜いがと云ふ程の意なり。

【錫】錫杖のこと、印度以來僧徒旅行に使用する道具の一、即ち鐵叉は銅の六環或は十二環を二股叉は四股ある軸にかけ、振れば錫々と鳴るやうに作り、之れを杖の先きに附けて歩行する時に鳴らしつゝ、路頭の蟲などを遁がして踏み殺さぬ爲めに持す。

【斫額】額に手をかざして遠方を望む貌。

【赤肉團】身體のこと。

【杓卜】柄杓を抛ちて吉凶を卜すること。

【錯を將て錯に就く】俗に間違ひダラケと云ふが如し。

【且得沒交涉】俗にヨッテも付けぬと云ふ程の意。

【這裏】這裡、此の處、此の內と云ふに同じ。

【闍黎】詳しくは阿闍梨、人を敬つて稱する語。

【宗師】宗乘を擧提し、學人の師範たるべき人。

【拄杖】禪家に用ひる杖のこと。

【頌古】古則公案の意を偈にて言ひ現はしたもの。

【出身】聲色界に身を出して、悟りに落ちつくこと。

【株を守つて兎を待】農夫が田を耕やして居た時、兎が株に突當つて死んだのを拾ひ之れより兎を拾ふが農業より利益なりとて毎日株の傍へ行つて守つて居たと云ふ韓非子に出でたる故事。

【首座】第一座に同じ、衆中の首位にある者。

【承當】他の言を肯諾するを云ふ。

【死郎當】活氣のないヨボ〳〵したこと。

【自領出去】自分の物を自分で持ち去ると云ふことで、勝手にするサと云ふ程の意、或は自分のことは他に任せず、自ら背負うて出で去れと云ふので、白狀して行けと云ふ意もあり。

す

【師兄】法兄のこと、禪家に於て其の兄弟を呼ぶに皆な師を冠す、即ち兄を師兄と云ひ弟を師弟と云ふ、本師に對して自ら呼ぶにも師と云ふ。

【垂示】示衆、垂語、垂誡、皆な大同小異、師家が學人を導くこと。
【垂手】落草の手段を云ふ、手を垂れて兒を導くが如しと云ふ意。
【隨後婁藪也】自分の考へはなくて、他人の言葉尻を追ひ廻はること。

せ

【是】肯諾の語。
【惺々】シヲ〳〵シイと云ふ程の意、又は慧悟の貌鋭敏利口のこと。
【生鐵鑄就】俗に齒もたゝぬと云ふこと。
【消せん】費さんと云ふに同じ。
【消息】進退の義、信を通ずる義、動靜の義等なり、禪門にて様子有様等の意に用ふ。
【消得恁麼】是の如くに用ひ得たりと云ふこと。
【小賣弄】小商人のこと、大利を得ず。
【照用】機を鑑みるを照と云ひ、其機に應ずるを用と云ふ、即ち照は心に考へ、用は身に行ふこと。

【適來】以前、先刻など云ふに同じ。
【世諦流布】世間にありふれたことゝ云ふこと。
【雪衣の石女】人品の潔白無垢なるに喩ふ。
【刹海】三千大千世界のこと。
【絕學】無學の位なり、即ち等覺に到る、尙ほ佛果位の妙覺に到らず。
【節角誵訛】節角は字の如く齒もたゝぬ堅き處、誵訛は紛雜して手も付けられぬとこ。
【雪上に霜を加ふ】あらずもがなの意、俗に餘計なお世話と云ふが如し。
【刹那】時間の尤も短少なること。
【說話】公案と云ふに同じ。
【洣流轉物】事々物々見聞のまゝに逆はずして、其物を活動させること。
【禪客】陞座說法の時に住持と問答する役僧。
【穿過了也】取り逃がさぬこと。
【遷化】化を他界に遷すこと、死するを云ふ。
【千箇萬箇】幾らもあると云ふこと。

【前三三後三三】　前から數へても後から數へても違はぬこと。

【閃電光】　一寸の隙も無いこと。

【禪和子】　禪僧のこと。

【穿耳】　いくら云うても駄目だと云ふこと。

【千年の桃核】　生機のないこと。

【氈拍版】　拍版は音樂を節奏する器、氈を以て上衣とせば之れを打つも聲なし。故に音響のない器物、即ち無孔笛に同じ。

【氈拍板】　毛氈で張つた太鼓、到底鳴らず、依つて用をなさずと云ふ惡口。

【禪版】　坐禪の時に、手を安じ或は身を靠するの器なり。

【箭鋒相拄ふ】　弓の名人と名人とが双方から射た矢が、中途でカチリと合ふこと。

そ

【即心即佛】　佛は我れより外になきこと。

【祖師西來意】　祖師とは達磨大師のこと、其の大師が、西方の印度から東方の支那へ來た意旨を云ふ。

【啐啄同時】　師家と學人と機々相投ずるを云ふ。

【作麼生】　宋時代の俗語、何を、何故、如何など云ふ意味である。

【足下雲生ず】　自由自在の働きを云ふ。

た

【佗】　他に同じ、他佗共に彼れと云ふに同じ。

【打】　汎くは作すの意に用ひ、稀には單に語勢を強むるに用ふ。

【第一義】　無上根本の道理を云ふ、卽ち聖諦なり、文字言句の閑葛藤は皆是れ第二義なり。

【太高生】　高ぶること、俗に天狗と云ふが如し。

【代語】　二種あり、師家が衆に垂語して下語せしめ、契はざる時、自ら代りて云ふこと、又古人の公案を擧揚して、古人垂語の處に代語すること。

【太孤危生】　孤危とは、猶ほ壁立千仞と云はんが如し。

【太孤岐生】太と生とは助字にして意味なし、孤岐と云ふこと。
【大小、大小大】格別の意味なし、多く人を詈る時の起頭語に用ふ。
【太多事生】太と生は意味なき助字なり、俗に餘計なお世話と云ふ如し。
【大蟲】虎のこと。
【太低生】太高生の反對。
【第二第三】第一義に非ず、卽ち根本義を離れたりと云ふこと。
【提婆宗】提婆は釋尊十五代の祖、初め外道碩學にして、議論が達者で能辯な人。
【太廉纖生】太生は前の如し、廉纖は仔細と云ふに同じ。
【襠】衣の名、又袴の屬なり。
【忉々】憂ふる貌、餘計なことを云ふとの意にも用ふ。
【當頭】末頭、末上と云ふ如しと雖も、多少異れり、最初に非らず、當下と見る方穩當ならん、今は物に着き廻はること。
【當面の話】別に變つたこと無き尋常の挨拶のこと。
【卓朔】卓立と云ふに同じく、敏捷活達のこと。

【鞁𩋡鑽】入頭の處なしと言ふ意の俗語。
【搽胡】糊塗なり、汚染なり、物のメチヤクチヤなること。
【多口の阿師】俗にお饒舌な人と云ふこと。
【拖々地】拖々は行くこと、地は助字なり。
【脫體】全體のこと。
【拖泥帶水】拖泥は泥をヒクこと、帶水は水をカブルこと、老婆親切の意に用ゆ。
【直饒】假令に同じ。
【打疊】一攪みにすること。
【打併了也】作事を了畢すること。
【楊薩阿勞】感謝に輕蔑の意を含む、日本の俗語に御苦勞千萬ナと云ふに同じく、人の仕事を愚弄するの語。
【擔枷過狀】手かせ足かせを擔うて、自ら罪狀を白狀すると云ふこと、卽ち言ふに落ちず語るに落ちると云ふ俗語に同じ。
【探竿影草】古語に探竿手に在り、影草身に隨ふとあり、卽ち俗に足もとを探ぐると

云ふこと。

【斷舌】　雄辯のこと。

【啗啄】　親鳥が卵をつゝき破りて子鳥を出すこと。

【單提獨弄】　多くの手段を要せざること。

【端的】　眞實の義、端倪的然にして其の事の分明なるを云ふ。

【檀越、檀那】　梵語陀那鉢底の訛轉、譯して施主と云ふ。

【擔板漢】　板を擔うた男と云ふことで、一方の向きの融通のきかぬこと。

【斷和】　絕交などして居る人の間を調停して舊の如く親睦にさせること。

ち

【肘臂下に符有り】　支那の道が符卽ち守札を人に與へて、之を肘臂に掛けて居れば、如何に困難なことでも自由に辦ずるとのこと。

【朕迹】　朕は吉凶の兆にして、迹はアトなり。

【張乖】　順逆と云はんが如し。

【定盤星を認む】　秤子の盤に重量を載せないで、稱錘と平均する點を定盤星と云ふ、之れ斤兩の起點なり、今は定格と爲すこと。

【頂門上に眼有り】　着眼點の高いこと。

【頂門上の一著】　見識の高いこと。

【長連牀】　僧堂にて衆僧の坐禪する處のこと。

【遲了八刻】　遲擬して其の期に遲れたること、八刻には別の意味なし。

【塵々三昧】　華嚴經の所說、微塵裏に法界を盡す、卽ち諸法圓融無礙、大小廣狹の別を絕したるを云ふ。

つ

【杜撰】　杜默と云ふ人頗る多く詩を作る、然も韻律に契はずして撰に入らず、時人ツマラヌことを稱して杜撰と云ふ。

【頭上に頭を安ず】　重ね〴〵のこと。

【杜禪和】　杜撰の禪和にて、ツマラヌ禪僧のこと。

【童行】又はドゥアンとも云ふ、佛家に投じて未だ得度せざる年少童子の行者なり。

て

【呈似】擧示と大同小異。

【提唱】拈提を見よ。

【提撕】宗師家が學人を導いて行くこと。

【泥彈子】泥の彈丸なり、何の用をもなさずとの惡口。

【泥團を弄するの漢】泥遊びをする子供の如く、ツマラヌことをすると云ふ意。

【提持】把定と云ふに同じく手を放さぬこと。

【羝羊藩に觸る】進退谷まりて難澁のことを云ふ。

【泥裏に土塊を洗ふ】耻の上塗りと云ふが如し。

【釣魚船上の謝三郎】海邊を愛して、山中の樂しみを知らざること、古人の句に釣魚船上の謝三郎、南山を愛せず鼈鼻を愛すとあり。

【的】和訓にはタシカと云ふ義にて、名詞の上にある時は「人」又は「者」、下にある時は「を」、「の」の意。

【滴水滴凍】間に髮を容るゝ隙もないこと。

【鐵眼銅睛】非凡な眼睛のこと。

【鐵蒺藜】鐵丸に刺針のある物、手の著けやうのなきこと。

【鐵餕餡】鐵の饅頭と云ふことで、滋味のないこと、齒のたゝぬ樣子を顯はした語。

【點】點定、點破、點頭との差別がある、點定とは事物を把り留めて動かさぬこと、點破とは一切諸法を放散して留めること、點頭とは合點のこと、點の一字も場合に依て其の意味を異にす。

【展演】展開演説、卽ち説法のこと。

【點胸】自慢自負すること。

【顚蹶】俗にケツマヅクと云ふことにて、相續せざること。

【田厙奴】田舍者と云ふこと。

【典座】食物調辨のことを司る役僧。

【天馬駒】前漢の武帝の時、大宛國より天馬の種馬を送らる、其の子を駒と云ふ、駒

は元來二歲の馬のことゝか。

【天を撈し地を摸す】　餘計な心配をすること。

【條有れば條を攀づ】　判官が罪人を判決する時、正條あるものはそれに據て決すと云ふこと。

と

【同火】　一つ釜の飯を喫したる者のこと、蓋し江南の軍法に、五人を伍と曰ふ、伍に一鍋を帶ぶと云ふより出づ。

【同參】　同學の友のこと。

【動著】　著は助字なり、動轉の義。

【陡變】　急に變ずること。

【瞌眠】　喫眠のこと。

【咄】　叱と云ふのと大同小異、叱り付ける語。

【㞘沸】　㞘は尻なり、お尻がブツ〳〵云ふこと、(蓋し下痢の時ならん)、卽ち俗にツマラヌ寢言と云ふが如し。

【鈍悶】　何とはなしに心の悶ゆること。

【都盧】　都てに同じ、盧の字には意味なし。

な

【腦後に腮を見る】　人の背後から其人の腮が見える程突き出て居る、人相の惡いこと。

【腦後に箭を拔く】　必死の處を助かつたと云ふこと、支那五代の時に、王殷なるもの杜重威と戰ひ、箭が腦後に中つて、矢鏃が口から突き出したけれども、直きに引き拔いて射返したと云ふ故事。

【那漢】　漢は男子の通稱なり、那は彼に同じ。

【甚、甚麼】　何に同じ。

【什麼】　宋時代の俗語にして何、如何等に同じ。

【什麼の巴鼻か有らん】　ツカマヘ處のなきこと、巴は把にして馬の轡、鼻は牛の鼻繩、共に把捉の緣である。

【那邊】　何處に同じ。
【儞】　汝に同じ。
【那裏】　何處に同じ。

に

【女人拜】　男子の如く五體投地せず、合掌して一寸腰を屈すること、又曰く女人は男子の如く立拜せず座拜するなりと。

ね

【尿床の鬼子】　俗に寢小便小僧と云ふが如し。
【拈】　トルなり、時に「言ふ」の意にも用ふ。
【拈却】　捉つて抛げ捨てること。
【拈提、拈古】　古則公案を拈出して、提唱すること。
【拈得】　捉へ得たこと。

【拈了】　捉り去つたこと、又言ひ了つたこと。
【粘を解き縛を去る】　自由なる境を云ふ。

の

【衲僧、衲子】　衲は衲衣にて袈裟のこと、卽ち袈裟を搭けた僧を云ふ、而して今は多く禪僧を指して云ふなり。

は

【破家散宅】　文字通りの意味に用ふる時と、大悟徹底の意に用ふる時とあり。
【敗闕を納る】　大失策をしたと云ふこと。
【放憨】　放はホシイマヽ、憨はオロカ、俗に遣りつぱなしのこと。
【放行】　自由に任せること。
【放不下】　手を放ち得ぬこと。
【傍瞥】　傍邊の事を以て、本分の事を明すこと、又曰く傍よりチラりと見ること。

【破草鞋】何の役にも立たぬこと。

【馬前の相撲】擬議計較を許さず急切の處を云ふ。

【八棒十三に對す】八棒三十棒等は宗門の常語、十三とは笞杖徒流死五刑中の最輕罪なり、されば語を世間罪罰の上に假りて云うたこと。

【把定】取り留めて收束すること。

【撥草瞻風】修行すること、師を訪ひ道を尋ぬるの形容。

【撥着】開くこと、撥は助字なり。

【法堂】大法を宣揚し、宗旨を演說する堂を云ふ、禪寺で法要を行ふ大堂で、多くは佛殿をも兼ねて居る。

【潑郞潑賴】潑は水をアバクことなるが、亂暴の形容である、賴は、人の金錢を強奪するやうなこと、畢竟破落戶道樂者のことを潑郞潑賴と云ふ。

【可煞、太煞、忒煞】甚だと同じ。

【絕だ】甚だに同じ。

【吧々地】饒舌の貌、地は助字なり。

【巴鼻、把鼻】馬の轡、牛の鼻繩にして、把捉の緣なり、捉へ處の無きを沒巴鼻と云ふ。

【把不住】捕へ處のなきこと。

【半開半合】分つた樣で分らぬこと。

【萬象】萬法に同じく、有ゆる諸法一切の事物を總稱して云ふ。

【版齒を打折す】達磨大師が外道の嫉妬を受けて、前齒を打ち折られたる故事。

【般若】梵語なり、漢譯して智慧と云ふ。智は慧の體、慧は智の用なり。

【盤裏の明珠】圓轉自在のこと。

ひ

【鼻孔】鼻の穴なり、自分の眼にて自分に見易からず、故に禪家にては本分の事に比す。

【鼻孔を穿つ】鼻の穴へ綱を透すこと、他を捕へる意。

【鼻孔を沒却す】面目を損すること。

【皮殼漏子】イクラ轉しても破れることなきを云ふ。

【非心非佛】我は佛に非らずして外にあること。

【匹似閑】等閑の議。

【劈腹剜心】親切をつくし情を吐露して提撕教導すること。

【眉毛を惜まず】慈悲の爲めに眉毛墮落の醉をも忘れて說法すること。

【賓主交參】森羅萬象彼此融通せること

【平出】方語に各出なりと、即ち問答平等のこと、俗に賣り言葉に買ひ言葉と云ふが如し。

【丙丁童子】火の神のこと。

【白槌】白は事を告ぐるなり、即ち大衆に事を告ぐるに際して、槌子を打して衆を靜むるの法なり。

【白拈賊、白拈巧偷】白晝の盜賊なり、或は白は白刄の義、拈は指にて物を執るなり即ち白拈賊は白刄を用ひずして人の知らぬやうに物を取るなりと。

【毘盧印】毘盧は具さに毘盧舍那、譯して遍一切處と云ふ、宇宙に遍滿するの意、之れに人格を附して、大日如來、久遠實成の釋迦牟尼佛等と云ふ、印は確實の義。

ふ

【不恁麽】此の如くならずと云ふこと。

【風措】風雅措置とて風流の義なり。

【複子】複は袱に書くが本意なり、袱は包袱にして裝包の法は、青布袱二條を用ひて行纒に資すと禪學要鑑に見えたり。

【布衫】布の衣のこと。

【不唧𠺕、不唧𠺕】不伶悧、不慧、不洒脫など云ふ程の意で、共に宋時代の俗語。

【普請】禪家で多くの雲兄水弟が、一緒に大掃除をすること。

【布袋裏に錐を盛る】機鋒の鋭利なること。

【蒲團】海邊に生ずる芦の一種なる蒲を以て作りたる敷具なり、形團圓の故にかく云ふ、坐禪の時に用ふ、俗に眠單(夜具)を云ふは誤りなり。

【佛心宗】文字言句に拘はらず、佛心を傳ふる宗旨、即ち教外別傳、不立文字の禪宗

のこと。

【分疎不下】條理を分つことを得ざること。

【扶籬摸壁】牆根に取り付き壁を探ることで、暗夜に物を尋ぬる意。

【不會】合點の行かぬこと。

へ

【平人を帶累す】平人は迷ひ無き人、故に多くの人に迷惑をかけること。

【平地上に骨堆を起す】平坦なる地に凹凸を起すこと、卽ち餘計なことを云ふ。

【平展】兩手を開いて抛つこと、放行に同じ。

【碧眼の胡僧】達磨大師のこと、達磨の眼は紺青色なりしと。

【劈頭】眞最初のこと。

【劈頭劈面】俗にブッカリ次第と云ふ如し。

【壁立萬仭】寄っても付けぬことの形容。

【滅々挈々】滅は鱉、挈は鼈、長短の齊はざるを云ふ、支離滅裂と云ふが如し。

【眨】まじろぐこと眼を動かすを云ふ。

【褊衫】梵語僧祇支、唐に掩腋と云ふ、左の肩にかゝる衣なり。

ほ

【縫罅披離】支離滅裂と云ふが如し。

【鋒を亡じ舌を結ぶ】手向ひも口對へも出來ぬこと、默して退く貌。

【菩薩】梵語、具さに菩提薩埵、譯して覺有情と云ふ、大慈悲を以て體となす、卽ち大乘の行者なり。

【法身】佛身に法報應の三身中の一、三身は萬物の本體現象妙用の如し、法身は本體なり。

【拂子】蚊虻等を拂ふ爲めに、釋尊時代から用ひられたものであるが、後には禪家の一つ道具のやうになり、住持人の持つべきものとせられてある。

【番欵】番は飜の音通にて用ふ、欵とは罪人の白狀した文書のこと、故に前の白狀を繰り返すことを番欵と云ふ。

【煩惱】心を煩はし惱ます所の妄情を云ふ。

ま

【盲枷瞎棒】メクラ打ちのこと。

【網珠】華嚴の入法界品を明かす譬喩、卽ち摩尼珠を繋げる網のこと、玉の光と光と交映重々主伴無盡の理を以て、法界圓融無碍を說く。

【莽鹵】精ならざる貌を云ふ。

【也】マタなり、又に同じ。

【痲の如く粟の如し】多くあること。

【磨盤】石臼の臺のこと。

【前村に搆らず後店に迯らず】進みもせず退きもせずドッチ付かずに煮えきらぬことを云ふ。

【顢頇懞憧】大面をして迂路々々と呻吟ひ歩くこと。

【滿口に霜を含む】口に含んで滿たしむることの出來ぬことで、卽ち言ふに言はれぬを云ふ。

【漫天網地】宇宙に充滿し、天地間到らざる處なきこと。

【孟八郞】道理に依らずして事をなしたと云ふ晋時代の亂暴な人の名、今は狼藉者の異名。

【萬法】萬は大數の稱、萬有と云ふに同じ。

み

【自ら偶諧す】自悟の境界俗に「獨リヨガリ」と云ふが如し。

【水を打して盆に碍らる】限りなきものも限られると云ふこと、打は汲むの意。

【名邈】名を付けたり貌を想像したりすること。

【身を藏し影を露す】藏しても藏し切れぬこと。

む

【無孔の鐵鎚】何とも手を下すべきやうなきこと。

【無裩の長者子】法華經の故事、寒山の詩に本づく、冠註を見よ。

【無縫塔】卵塔なり、石又木にて疊累したるに非ず、卵形一塊の石を以てせしもの、されど今は無形の塔、宇宙に遍滿せる塔のこと。

め

【明暗双々】明にして明に非らず、暗にして暗に非らず、卽ち迷とも悟ともつかぬこと。

【迷黎麻羅】無眼子の漢と云ふに同じ。

【面壁】壁に向つて坐禪すること。

も

【麼】疑問の助字なり。

【懵憧三百擔】懞憧は不慧の形、不分曉の義、三百擔の三百は澤山のこと、今は本分の境界を大智は愚の如しと稱讚したもの。

【摸索不著】痒い處へ手の届かぬこと。

【沒可把】把へ處のなきこと。

【沒交涉、沒較涉】干涉せぬこと、關係のなきことを云ふ。

【模に依て脫出す】俗に紋切り形と云ふに同じ。

【門に接し戸に傍ふ】扶籬模壁の條を見よ。

【懡㦬】恥辱、慚愧等の意なり。

【模を起し樣を畫く】眞實の物で無いこと。

や

【野狐精】野狐の精なり、柳下の意を含み、然も托上するにも用ふ。

【箭新羅を過ぐ】何處へ落ち着くか、目的の分らぬことぢや、箭は矢で、新羅は支那から南の方卽ち朝鮮である、支那で射た矢が朝鮮を過ぎたのであるから、實に行く先が分らない。

【野燵を打す】春さきに野山を燒いた跡の殘り木などのこと、而してそれを薪にせんとて男女が取りに行きワイ〳〵騷いで居ることを野燵を打すと云ふ、それが一轉

欠

して都て譯もなく騷ぐことを云ふことになつた。

ら

【癩兒伴を牽く】　乞食が乞食仲間を引き連れて歩くやうなこと、俗にドン栗の長くらべと云ふが如し、獨立の出來ぬこと。

【禮拜】　梵語の那謨悉羯羅で、譯して禮拜又は和南と云ひ、頭至地、屈膝不至地、口禮の三等あり、口禮は問訊合掌にして下禮、屈膝は右の膝を地に著けるので、互跪と云ふのが卽ちそれ、これ中禮である、頭至地とは、五體を地に投じて佛足を頂禮する、最上禮である。

【老胡】　老漢と同じ、卑下の意にして、又尊稱の意にも用ふ。

【老鼠生薑を咬む】　呑吐不下の形容の俗語、呑むことも吐くことも出來ぬ貌。

【郞當】　老羸零落して力のないこと。

【老婆心切】　老婆は性來子孫に丁寧なるもの故、大慈大悲を垂るゝを云ふ。

【嘮々】　多言の貌。

【驢年】未來永久の義なり。
【驢の井を覷るが如し】井の驢を覷るが如しに同じ。

わ

【話】禪僧の問答したる因緣、卽ち公案のこと。
【王老、王老師】日本にて權兵衛太郎兵衞と云ふ如く、支那普通の呼稱なり。
【椀鳴聲】ツマラヌことをブツ〳〵云ふこと。

欠

附錄 禪語要解 終

大正二年十一月一日印刷
大正二年十一月四日發行

詳註和譯碧巖錄
正價金壹圓八拾錢

著作者 加藤熊一郎
發行者 東京市神田區鍛冶町八番地 伊東芳次郎
印刷者 東京市小石川區久堅町百八番地 高橋貿治
印刷所 東京市小石川區久堅町百八番地 博文館印刷所
發行所 東京市神田區鍛冶町八番地 電話本局八八四番 振替東京一七一番 東亞堂書房

加藤咄堂先生著

人格之養成

大判洋裝百八十頁
正價五拾錢
送費六錢

（中央新聞批評）「人とは何ぞ」に筆を起し古代民俗の人類觀、人性善惡説、人の價値、近世の科學人類觀、人格の意義、人格の根柢等を詳論して最後に養成法に移り修養の時代、常識の涵養、趣味の啓發、意志の鍛錬、處世と人格とを逑べたり。著者獨特の筆法讀者を警醒する所多し附錄なる『讀書と自然』亦是有益の文字。

加藤咄堂先生著

冥想論附坐禪論

大判洋裝二百頁
正價五拾錢
送費八錢

（萬朝報批評）本書內篇十三章、哲學、宗教、倫理、正理、詩美等諸種の方面に亙りて、品性修養の根柢たる冥想の必要を敍し、其理論と方法とを詳説し、和漢古今先覺の思想を提供し來りて引證該博、また餘蘊あるなし、外篇二章禪學小景、冥想雜感外に坐禪論等共に修養を心掛くる者には缺くべからざるの指敎なり（大阪每日新聞批評）冥想論の一篇字々として金ならざるはなく、句々として玉ならざるはなく、眞に近來快心の著なりと云ふべし。

加藤咄堂先生著

增補 雄辯法

大判洋裝二百五十頁
正價七拾錢
送費八錢

（報知新聞批評）著者は居士佛敎家中第一流の雄辯家也。本書は修辭學や因明や西洋論理學や著者の經驗抔を基礎として雄辯法の說明を試みたる者文辭簡明にして中々面白し。（國民新聞批評）著者は雄辯法を實際に行ひつゝある人なれば其說く處も實際に出で經驗より來りしもの極めて多し演說說敎家は一讀すべき書なり。

加藤咄堂先生著

讀書法

大判美本二百九十頁
正價九拾五錢
送費八錢

（やまと新聞批評）讀書に關する一切の要件を詳說し附するに長篇の社會敎育論を以てせり汎く先人の所說を渉獵し加ふるに其得たる經驗を以て此一書を成し、記憶思索自修等一切の要訣を說て親切詳密を極む要するに讀書子の爲に最も忠實なる著述と謂ふべき也。（東京朝日新聞批評）讀者に簡明なる解決を與ふるに妙を得たる咄堂が自家多年の經驗を基礎とし、讀書子に讀書の法を敎ふ、適切ならざらんとするも得ざるべし、一讀果然學ぶべき多く讀むべき多き迷津に彷徨せる今の世の靑年讀書子に、最愉快にして最痛切なる解決を與へたり。

加藤咄堂先生著

冥想雜感 朝思暮想錄

（朝思の一節）憐なる哉、今の青年、生活の爲めに業を求むることを知つて、道の爲めに求むべきを知らず。滔々利に走りて、唯目前の事を企畫して其の根本を逸すること………（暮想の一節）人生に於ける事業もとより少からず。されど唯だ赫々の功を社會に立つるのみを以て大事業と見ること勿れ。沈思冥想、我が本來の心性を徹見し、其品性を培ひ其人格を養ふ亦實に大なる事業たるなり…………

中判美本二百頁
正價七拾錢
送費八錢

加藤咄堂先生著

修養資料 はなし草

「雨窓閑話」の奇警なる「文談武談」の壯烈なる「夜雨蕭々錄」は一讀悚然たる幽靈奇聞を語りて、附するに著者が得意の幽靈論を以てし「茶榻禪話」は浩蕩飄逸なる超俗的逸話を述べて宇宇清風を生ずるの思ひあり。若し其れ「修身教材」に到つては、即ち修養自營の絕好資料！俱に文章演說坐談等の新話材として興趣津々眞に晴行雨居の好伴侶。

中判美裝二百廿頁
正價四拾錢
送費六錢

加藤咄堂先生
大住舜先生著

常識之基礎

（萬朝報批評）現代の人として必ず有するを要する知識を總て供給したる也、全書を宇宙篇、地球篇、生物篇、人類篇、社會篇の五篇に分ち、誰人の讀物としても適し、重寶此上無し。（國民新聞批評）處世上緊要なる常識を養成する上に於て頗る補益あるを疑はず。（東京朝日新聞批評）讀者の心理を巧に應用して倦怠なく讀了せしめんとしたる用意が面白し索引を附して百般の疑問を此書中より繰出すに供したるは殊に便利也。

大判美本六百餘頁
正價貳圓
送費拾貳錢

巖谷小波先生
加藤咄堂先生著

通俗講話 常識大觀

……近刊……
……印刷中……

大判美本一千餘頁
正價參圓八拾錢
送費拾六錢

境野黄洋先生著

法華物語

大判美本二百四十頁
正價八拾五錢
送費八錢

傳來以降二千載、佛教が我が國文化に及ぼしたる影響の甚大なるや論を俟たず。深遠なる哲學と、神祕的なる宗教の寓意とを以て作成せられたる八卷二十八品の法華經は其寶典の主たるものにして、これに通達する者やがて佛教を解し得たりといふも、溢美の言にはあらざるべし。本書はこの難解なる經典を叙述するに、境野先生の雄渾壯麗の筆を以てし『法華』の眞髓を紙表に壓搾せり。卷尾の索引亦優に佛語辭書の用をなし、便益無比。

忽滑谷快天著

養氣錬心の實驗

大判美本二百卅頁
正價八拾錢
送費八錢

（報知新聞批評）現今米國の思想界に三潮流あり一はクリスチヤンサイエンス二は新思想三は瑜珈宗なり、珈瑜宗は千八百九十三年市俄古の世界宗教大會に其端を發し爾來日進月歩コンネクチカツト州に大資産を有し紐育、市俄古に其出版社を設立し著書を公にし其超絶的一元論と神祕的冥想法とに依り米國上下の人心に變動を起しつゝあり、即ち本書は米國に於ける此瑜珈宗の何物たるかを叙述し其大綱を擧げたるものにして著者は其序に於て曰く予は米國學術、宗教を視察して親しく瑜珈思想に接するの好機を得、反覆翫味以て吾禪道に比較するに覺えず妙旨を啓發する所少なからずと蓋し參禪者の爲めには好個の一資料ならん。

文學士　白河鯉洋先生著

孔子

大判美本四百十頁
正價壹圓貳拾錢
送費拾貳錢

世界三聖の中、尤も吾人に深大の感化を及ぼせるものは、夫れ我が孔夫子に非ずや。著者曩に清國に在り許多の前人未觀の新材料を得て、玆に本書を成せるもの、之を仰がば彌よ高き夫子が瓌偉なる大人格は、著者が流麗の史筆に依て、躍如として紙上に生動し、一讀懦夫をして奮起せしむ。眞に是れ孔子研究の一大鐵案にして、又論語、六經、其他あらゆる聖訓の最詳なる解説也。

森大狂居士嚴訂

澤庵禪師 老子講話

大判美本三百二十頁
正價壹圓參拾錢
送費八錢

本書は老子の敎訓を禪門近世の大德澤庵禪師が卓拔の見を以て平易簡明に講解せられたる珍書にして、禪の妙と老子の玄と相迸發して龍の雲を得たるが如く、當に乾坤を呑吐するの感あり、人事紛々俗務蝟集の中に沒頭する士一たび本書を繙かば、神韻縹緲として心胸自ら快濶なるを得む　今附するに禪師が柳生但馬守に與へて禪劒二道の極意を詳示したる祕書『太阿記』を以てす俱に精神鍛錬の絕好鉗鎚。

終